
遊 戯 王Fate

Rago

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊 戯 王Fate

【Nコード】

N03350

【作者名】

R a g o o

【あらすじ】

新たなるデュエルが降臨する。

記憶を失い、家に閉じこもっていた主人公、公栄こうえい 遊画ゆうが。そこに現れる謎の敵。

彼の目的とは、そして・・・新たなる脅威、闇の道とは一体。チューナー同士をシンクロをする冥界の象徴、シンパシーシンクロ。何故そんな物がこの世に現れたのか？

ついに現実世界に戻り、メンバーと戦うことになった遊画達。果たしてその先にある結末とは？

第1章後半「闇の道」編。ダーク・レポート

「例えどんな事が待ち受けようとも、決して諦めはしない!! 守りたい者の為に、俺は戦う! 例えこの身がほろびようとな!」
「……だめえ! 貴方は、滅びるべきじゃない!」

何かPVが十万超えてた。これって良いことなのか何なのか。

第1話「隠された遊、公栄 遊画」(前書き)

どうも初めまして、野生の作者R a g oでございます。

ん、この人・・・どこかで・・・と思われた方、気にしないで下さい。

さて、お気づきの方もいるとは思いますが、この小説はあるサイトから出張した小説です。

そのサイトでも決して閲覧数が多いわけでもありませんが、多くの方に読まれたいので、どうぞ楽しんで読んでいただければ嬉しいです。

さて、消し忘れのダグが残っていましたか。と、言うわけで今後そんな物があれば、報告をよろしく願います。

第1話「隠された遊、公栄 遊画」

プロローグ

この春、俺はネオ童実野シティのアカデミアに落ちてしまった。

……それは俺でも予想はできていた。

何故なら俺は、デュエルで一度も勝った事が無かったからだ。

勉強が出来ても、この世の中デュエルで勝たなければ意味がない。

それが、この世界のルールと言うものだ。

とある昔のお偉いさんが言った言葉にこんな言葉がある。

『カードを信じる。信じてさえいれば、答えてくれる』

……そんな事があるかよ。そんな都合が良い言葉のように、現実には甘くない。

来て欲しくないカードが最初の手札に来たり、どうでもいいタイミングで重要なカードが来たり、これまた最初の手札で来るカードが魔法、罠だけやら、モンスターだけ、それも酷い時には召喚できるモンスターが1体もない状況が時々ある。

勉強はできるのに……どうして、こんな体質に生まれてきたんだろ。何かの呪いか、それとも神に嫌われているのか、そんな事を考えた。

だがそんな俺にも、珍しい事に神の手が差し伸べた。

俺が住んでいる町、アーカイトのデュエルアカデミアに入学できたのであった。

このアカデミアは、最近できた最大級のアカデミアであり、合格率はネオ童実野シティのアカデミアよりも低かったが、到底俺のデュエルの腕では合格できない物だったが、筆記の方で受かったらしく、俺はアーカイトのアカデミアに通う事となった。

しかし、今考えてみれば、それが全ての始まりであり、全ての出発点でもあった。

第1話「隠された遊、公栄 遊画」

ピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピ

目覚ましの音と共に、俺はベッドから手を出し、目覚ましを止めた。
公栄こうえい 遊画ゆうがそれが、俺の名前だ。

見た目は青く長い髪に、途中で金髪になっているのが特徴だ。
汚れない目にスラリと伸びた手足、美風な声と何を取ってもパーフェクトだと昔、母から言われた事がある。

しかし自分ではそうは思わない。そんな都合の良いような見た目だったら、観賞用にでも見るがいい。そう、母に言ったら「アンタね、そんなんだから彼女が出来ないんじゃないのかい」と言われた。

正直どうでもいい。彼女なんて作る気は全くしない。それどころか一生独身でも良いような気がしてきた。

そこまで言くと、流石の母も呆れたご様子だった。しかしそれが、俺の性格であるから仕方なかった。

まるで自分を嫌い、異性に興味がない。それが、俺の性格であった。「っと、もうこんな時間だ。急がないと遅刻してしまう」

そう言つと、鏡を見ながら髪をポニーテールに結び、昨日買っておいたパンを口にくわえ、下に降りて、靴を履き、部屋から出ていった。

ここはアーカイトにそびえ立つマンションの1つ、この部屋の27室が俺の部屋だ。

このマンションは便利で、マンションなのに一部屋が2階あり、地下にD・ホイールの収納駐輪場が存在する。

その為、俺はこのマンションの地下に自分のD・ホイール、ホバー・アクセルMを駐輪している。

D・ホイールとは、デュエルデスクを発展させたバイク状の乗り物であり、バイクに乗りながらデュエルができるという、何とも斬新なバイクである。

まあ、周りさえ気をつけていれば事故などは起こさない。だが俺は油断して事故つたヤツを数々見てきた。絶対にああはなるまいと思つた瞬間だつたな、あの時は……。

そう思いながらD・ホイールを起動させると、目の前のモニターに情報が流れている。それを即座に読み取り、異常が無いかを見ると、無いのを確認し、そのままハンドルを手で握り、アクセルを踏むと、地上へ向かつて走り出した。

それが、今日から毎日の事となるだろう。そう考えると、少しワクワクしてきた。

しばらく大通りを走っていた。

今の時間帯は通行量は少なく、町に静けさが漂っていた。

「少ないな、まあ今の時間帯だからそれは当たり前か」

そう呟きながら、目の前の交差点をカーブした。

すると、目の前から1台のD・ホイールが走ってきた。

そのD・ホイールは赤く、シンプルな設計のD・ホイールだった。

そしてその運転手に、俺は目をひかれた。

顔は分からなかったが、何か懐かしい……誰なんだ。

すると、その人もこちらに気がついてか、ちよつとこちらを見た。

お互いの目線が重なり合う中、その時間はわずか1秒だったが、俺にとっては数十秒と流れたような感触がした。

そしてお互いのD・ホイールはすれ違い、お互いに止まることなく走っていた。

何となく、それが良いと思ひ、そのまま走る事にした。

そして俺は、目的地のアカデミアまで全速前進で走り出した。

アカデミアは以外と巨大で、広さはネオ童実野シティのアカデミアより少し狭いぐらいだったが、これくらいが良いのかなと俺は思う。そう考えていると、目的地の1年D組の教室に到着した。

「ここか・・・ここから、俺の新たな生活が始まる」
そう言いながら、教室に入ってしまった。

「えー、そんな所から来たんだ」

「ウツソー、マジで、ありえないんだけど」

「うわっ、マジで、そんな事があったのか」

「1人ぐらい俺に彼女を分けくれよ」

そんなクラスの騒ぎ声が耳に入ってきた。

俺はそんな事を気にせず、クラスの席順が書かれてある紙を見ると、その席に座った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

クラスの女子生徒が何故か俺を見つめていた。

「何、あのかっこいい人」

「って言うか、かわいいんだけど」

・・・またか、どうしてこの姿だといつもそうやって言われるのであろう。

俺は異性に興味が無い。それなのに・・・

「ねえ、あなたの名前は？」

女子の集団の中から1人の女子がやって来た。

・・・こう言った事にはすぐに答える、それが礼儀だ。

「・・・公栄 遊画と言う。よろしくな」

ここまで言わないと気が済まない。それが俺の困ったクセだ。

「キヤー、よろしくだって。これはもしかして・・・」

そんなモブが聞こえたがあえてスルー！。

「ねえ、彼女とかいるの？」

「いない・・・つか、作る気がない」

そこはあえて聞こえるように答えた。

「・・・作る気がないって、あなた、もしかして女なの？」
どうしてそんな答えに辿り着く。

「俺は男だ。それに作る気がないって言うのは、異性に興味が無い
と言うことだ」

それを聞いて、その女子生徒は少し下がりながらその友達の集団に
行くと「振られてしまいました」とわざわざ報告をした。

何が楽しいんだか、そんな事をして、何が楽しいんだか、その時の
俺には理解できなかった。

『・・・観察目標、公栄 遊画。教室に入って最初の行動で女
子生徒から告白されて、それを振った。・・・私には理解できない。
男なのに、欲望の塊なのに、何故異性に興味が無いかが分からない。
でもそれも今はの話。いずれかはボロが出るに違いない・・・それ
が、男という生物だから・・・』

「!」

俺はいきなり声が聞こえた為、教室の後ろを見た。

何か声が聞こえたような気が・・・。

そう思ったが、普通に生徒が出入りをしている以外に、特に怪しい
物は見当たらなかった。

・・・何だったんださっきのは、俺の事を言われたような・・・。
すると横から「遊画、あなたもここに来たのね」と声がした。

そこには、短髪の青髪で、上品な顔立ちに少し豊かな胸の美少女が
遊画の横に座っていた。

彼女の名は綾中あやなか 沙耶さや小学校、中学校と同じ学校だった唯一の友達

であった。

その見た目が故に、学年の男子生徒（俺を除く）全員から告白された事もあるかなりの美人である。

しかし全員振っており、その理由としては「好きな人がいるの。その人は異性に興味がないらしいけど、それでも私は気づいてもらえるようにその人にアタックし続けたいの」と言ったらしく、その後男子生徒は俺に向かって「お前はズルイ」と全員に言われた。何故だ？

そんなこんなで、今は友達としては良い友達である。唯一異性に興味がない俺でも気軽に話せるぐらいだからな。

「と、それじゃお前だったのか。さっきの気は・・・」

「？何の話」

「いや、何でもない。それよりもフルはどうした、アイツの事だから絶対にこのアカデミアに来ていると思うのだが」

「ああ、フルなら1年B組よ」

フル、本名フル アルカデスと言う名前で、中学校の頃から仲良くなった友である。

彼はどちらかと言うと、おふざけキャラであり、見た目のかつこよさを性格でぶち壊している可哀想な人である。

ああ、もつたいない。

だが親友には変わりなく、俺が負け続けて凹んでいた所を慰めてもらったりと、結構優しい性格でもある。

そんな彼は運悪く別クラスになった訳だが、別にどうでもいい。

「そうか、まあアイツの事だ。どうせクラスでナンパでもやって失敗しているんだろうな。ハア」

「お前にとって俺はそんな認識なのか？ああ」

後ろから明らかに機嫌が悪そうな声が聞こえた。

振り向くと、そこにはその張本人であるフルが、機嫌悪そうにそこにいた。

「ああフル、どうだった、ナンパ成功したのか」

「するか、何で知らねえヤツにナンパする必要があるんだ。そして何で失敗した事前提なんだよ。俺自分でも言うのも何だけど結構モテるよ、だがお前ほどではないがな」

「俺は元々からモテない。ってか異性に興味がない」

「お前のその勝ち組な性格をどうにかして治せないのか」

「勝ち組って、じゃあお前は負け組か？」

「そんな意味じゃねーよ。ってか、俺をからかうのもいい加減に……」

キーン、コーン、カーン、コーン。

何かを見越してかのように、タイミング良く鐘が鳴った。

「ほら、最初のホームルームが始まるぞ。さっさと自分のクラスへ戻れ」

「っ、最悪だな、このシチュエーション」

そう言いながらフルは教室を出ていった。

今の所、ああやって楽しくボケられる相手はフルのみである。

何故なら……俺は普段からツッコミ役としてクラスを支えてきた。まあ、高学年でそんな事があるわけが……

「ハイハイ、みんな席に着け。3秒以内に着かないと一学期の成績をオール1にするぞ」

「アンタおかしいよね。教師の立場を無駄に使ってんじゃねーよ」

何故だ、何故こんな早くにツッコまなければいけないんだ。

「何だ、その青髪金髪君。もはや後ろ髪の状態が馬の尻尾じゃないか」

「誰が馬の尻尾だ!!」

「生徒として、教師にその口の聞き方は無いんじゃないのか」

「その前に、お前は教師としての立場をもう一度考えてみる」

はあ、疲れる。この先生、やるな。

「っと言つ訳で、今日からこのクラスの担任になった……」

そう言うと先生は、ホワイトボードに名前を書き始めた。

……新和 千字、それが、この先生の名前らしい。

「新和 千字と言う。これからPTAでお世話になる名前だが、宜しく頼むよ」

「問題行動でも起こすつもりか。何でPTAにお世話になるんだ。そしてアンタの過去に何があった。何がどうなってそんな性格になったんだ。そしてよくぞ教師になれたな」

「まあ、そんな事はどうでもいいとして、これから朝のホームルームを始めるぞ。一同起立」

軽く受け流されたが、まあ仕方ない。朝の挨拶をするぐらいであるから、まともな人である事には変わりが……

「きをつけー。れい」

前言撤回、何で見事なまでに棒読みなんだ。

「さつき何で棒読みなんだと思つた奴、負け組だ」

「知るか。何でアンタから負け組宣告されなきゃいけねーんだ!!」

「公栄 遊画、あんたは負け組だ」

どうしてアンタに……と言いかけたが、俺はさつきの言葉におかしな点があるのに気がついた。

「な……どうして俺の名を」

先生は生徒の名前を出会うまでは覚えないうるのが普通だが、もしかしてこの先生、クラスのみんなの名前を覚えているんじゃないか……

「お前の母、英子にはいろいろと世話になってな、お前の幼稚園時代に会つた事があるが、流石に覚えてねーだろうな」

幼稚園時代に!!……でも

「幼稚園の時に……スミマセン、幼稚園の時の記憶が全く無いんです」

そう、俺は幼稚園の時の記憶が全くなかった。思い出そうとすると原因不明の頭痛などで思い出せなくなる。

それは何故か、理由は分からない。でもこれだけは言える。何か、悲惨な事があったと……

「そうか……そうだろうな。なにせ、あんな事があったからな」

・・・」
新和はボソリと何かを呟いたが、何と言ったのかは聞き取れなかった。

「まあ、それはほつとくとして、これから仲良くなるクラスのメンバーだ。自己紹介でも行おうじゃねーか」

クラスからは「えー」と声が上がったが、それでも渋々自己紹介を行っていた。

「えーっと、ネオ童実野シティの方から来ました、フラン・フランと言います。どうかよろしくお願いします」

パチパチパチと、みんなが拍手をしている中、次に沙耶の自己紹介が行われた。

「アーカイトのB地区から参りました、綾中 沙耶と申し上げます。このアカデミアでは勉強も頑張り、デュエルも頑張り、恋愛も頑張りしたいと思いますので、どうかよろしくお願いします（ウインク）」
最後の行動の意味が分からなかったが、とりあえず言える事は・・・

「なあ、恋愛もって言ったよな」

「ああ、レベルも高そうだし、俺、絶対にゲットしてやるぜ」

そんな男子共の声が聞こえてきた。どうやら無駄に男子のハートを掴んだようだ。

そう思っていた時、ついに俺の番がやって来た。

「ほら遊画、お前の自己アピール場だ。しっかりアピールしろよ」
自己アピールね。そんな事は考えた事は無かったが・・・しょうがない。

「アーカイトF地区から参りました、公栄 遊画と申します。俺は異性に興味が無く、愛と言う意味を全く理解できません。しかもデュエルでは一回も勝った事がない、負け組だ。だがそんな俺でも、居場所と言うものを作りたいので、よろしくお願いします」

自分を雑魚だとアピールするバカが何処にいる。それは・・・ここにいる。

「……かつこいい」

「え？」

「見た目もかつこいいし、しかも恋愛に興味が無いなんて、それじゃあお姉さんがそれを教えてあげようかな。と言う気持ちになっただりするから」

何処のポジティブ女子だ、お前は。

「しかもデュエルも負けてばかりなんて、タッグデュエルで何故か守りたくなるような性格もど真ん中だよ」

どうしてだ。どうして俺はこんなに……こんなに……

「う……うう……俺は別にモテなくていいのに……」

「あ、照れてんだ。かつわいい」

どうしてこのクラスにはお姉さま系の女子が多いんだ。

「!!あ……うううう、か、かわいいだと……これの……何処が……」

マズイ、心から否定している。そのせいで緊張していると思われるている。

「動揺しちゃって、大丈夫よ、お姉さん達が守ってみせるから」

「う……、次だ次、次のヤツ、早く」

はあ、疲れた。さっきの俺の行動に、かわいいと言われる要素があったのか。

『ジ

』ツ

それと、さっきから男子共の視線が痛い。お前ら、俺達を差し置いてモテようとするな……的な視線を飛ばすな。微妙にイラ立つじやないか。

「……と言うことで、よろしくお願いします」

それと、これで全員自己紹介が終わった訳だ。あとは腕試し試験を受けるだけで……。

「ハイハイ、遊画以外全員いい自己紹介だったな。あとは腕試しデュエルを受けるだけで……」

「……待て、さっきデュエルと言ったな」

「ああ、試験は何も筆記試験だけじゃない。今回はデュエルでの試験となる。ちなみにこの試験では、一学期の重要な点数となるから、真面目にやるように」

マジかよ。デュエルは自信がないのに、しかも点数になるって、それって重要なデュエルじゃないのか。

・・・勝てるのかよ、俺は・・・。

そして数時間後、体育館で行われた入学式後、俺達はデュエルルームへと集まっていた。

筆記試験はすでに終了し、全て合っている自信もあったが、どうもこのデュエルはやる気が出ない。

まあ、当たり前と言えば当たり前だが、俺は一度もデュエルで勝つた事がない・・・正式に言うと、中学2年生の頃まで、魔法使い族デッキで戦ってきたわけだが、それでは普通に勝っていた。だが問題はそこからだ。デッキを変えた瞬間に、勝てなくなったのである。原因は分からない。だからといって今さら魔法使い族デッキに変更するものなんだし・・・と思い、そのままである。別にデッキバランスが悪い訳ではない。むしろデッキバランスは整っている。しかし主な原因は引きの悪さだ。どうなっているんだ、俺のデッキよ。

信じていないからか・・・それとも、何かの呪いなのか・・・。

「それでは、公栄 遊画VS 革堂 志士のデュエルを開始する。準備はいいか」

「まあな。俺は準備などしても、どうせ意味がない」

「来い。お前の泣き顔をさらしてやる」

「それでは、スタンディングデュエル、開始」

「デュエル」
「LP4000」

「まずは俺のターン、ドロー」

手札を見た。やはりいつもの事なので、マシなカードが無かったが、珍しく次のターンはしのげるモンスターが手札に存在していた。

「俺はシールド・ガードナーを守備表示で召喚へシールド・ガードナー・戦士族・DEF1800・地・4・効果」カードを2枚伏せて、ターンエンド」

さあ、どう来る。

「俺のターン。俺は手札のモンスターカード2枚を墓地に送り、不死鳥のカラスを特殊召喚へ不死鳥のカラス・鳥獣族・ATK0・闇・

1・効果」このモンスターは自分の手札に存在するレベル4以下のモンスター2枚を墓地へ送り特殊召喚するモンスターだ。そしてこの効果で墓地へ送ったモンスターは次のターン、特殊召喚される。カードを1枚セットして、エンドだ」

???どういふつもりだ。攻撃力0のモンスターを攻撃表示でなんて、何か裏がある。

「それでも、俺のターン。俺は戦士ラーズを攻撃表示で召喚へ戦士ラーズ・戦士族・ATK1600・地・4・効果」このモンスターは召喚に成功した時、デッキから同名モンスター以外のレベル4以下の戦士族モンスターをデッキの一番上に置く効果がある。その効果により俺はデッキに存在する切り込み隊長をデッキの一番上に置く。そしてバトル、ラーズで、不死鳥のカラスを攻撃。ブレイク・アタック」

ラーズが剣を構え、走り出し、宙に浮いていたカラスを一刀両断で切り裂いた。

「ぐっ・・・だがこのモンスターでの戦闘ダメージは0となり、そのバトルの終了後にこのモンスターを破壊したモンスターと同じレベルのトークン1体を特殊召喚するへ不死鳥トークン・鳥獣族・D

E F O ・ 闇 ・ 4 ・ トークン」

ラーズの周りに出来た黒い煙の中から、再び不気味なカラスが復活した。

「・・・ターンエンド」

まあいいさ。次のターンで切り込み隊長を召喚して、効果で手札に存在するレベル2のストーム・シンクロンを召喚して、ストーム・ウォーリアをシンクロ召喚してやれば・・・だがここまではまだいい。問題がその効果を次のターンで使用できるかだ。今までだって次のターンで・・・って時に相手が手札抹殺やメタモルポッドを使用したケースが存在する。もしかしたら・・・。

「俺のターン。スタンバイフェイズで、効果により墓地へ送られた2体のモンスターが特殊召喚される。現れよ、不死のミイラ、そしてゾンビキャリアへ不死のミイラ・アンデッド族・ATK1600・闇・3・効果」
「ゾンビキャリア・アンデッド族・ATK400・闇・2・チューナー」
そして罨発動、モンスター・ダイナマイト。このカードの効果は、自分フィールド上に存在するモンスター1体を破壊し、相手フィールド上に存在するモンスター2体を破壊する。効果だ。モンスター・ダイナマイト・罨・効果、自分フィールド上に存在するモンスター1体を選択して発動する。選択した破壊し、相手フィールド上に存在するモンスター2体を破壊する。それにより、俺はゾンビキャリアを破壊し、お前のフィールド上のモンスター2体。ラーズとシールド・ガードナーを破壊」

ゾンビキャリアに火がついて、そのまま2体のモンスターに特攻した。

「っ、だが、シールド・ガードナーの効果により、1ターンに1度このモンスターは戦闘、またはカード効果では破壊されない」

シールド・ガードナーのシールドに爆風が跳ね返り、シールド・ガードナーだけが破壊を免れた。

「そんな事で・・・俺はデッキにカードを1枚乗せる事により、墓地からゾンビキャリアを特殊召喚。ゾンビキャリア・アンデッ

ド族・ATK400・闇・ 2・チューナー」そして手札より、アンデッド・マスターを召喚「アンデッド・マスター・アンデッド族・ATK200・闇・ 3・チューナー」さらにこのモンスターはゾンビキヤリアとして扱う事ができる。レベル4の不死鳥トークンにレベル2のゾンビキヤリアをチューニング 4 + 2 = 6 アンデッドより現れしモンスターよ、今ここに竜となりて、怒濤の叫びで姿を見せよ。シンクロ召喚、現れよ、デスカイザー・ドラゴン「デスカイザー・ドラゴン・アンデッド族・ATK2400・炎・ 6・シンクロ、効果」

デスカイザー・ドラゴン、過去にも別のプレイヤーが使用していたカードであったが、どうやらコイツのデッキはアンデッドデッキのようだ。

「つて、確実にこのターンでシールド・ガードナーが破壊される」
「そしてまだだ。レベル3の不死のミイラにレベル3のアンデッド・マスターをチューニング 3 + 3 = 6 アンデッドより現れしモンスターよ、復讐の業火と共に敵を尻ぎ払い、ハデスの名の元で抹殺せよ。シンクロ召喚、蘇れ、蘇りし魔王 ハ・デス「蘇りし魔王 ハ・デス・アンデッド族・ATK2450・闇・ 6・シンクロ、効果」

そして再び、アンデッド族の厄介なモンスターをシンクロ召喚してきた。意外とマズイかな、だがしかし、いつもならこのターンで決着が決まっているハズだが、今回は珍しい。

「そしてバトル、デスカイザー・ドラゴンで、シールド・ガードナーを攻撃、デス・バースト」
デスカイザー・ドラゴンの口から、容赦ない熱線が吐かれ、シールド・ガンナーを糸も簡単に破壊してしまった。

「っ」
「そしてハ・デスで、プレイヤーへダイレクトアタック。地獄の業火」

ハ・デスの腕が燃え始め、そのまま俺へ殴りかかってきた。

「グボア」LP4000 1550」

「そしてアンデッド・マスターをシンクロ素材としたモンスターが戦闘により相手ライフに戦闘ダメージを与えた場合、相手のデッキから3枚墓地へ送られる」

「！しまった。これじゃシンクロ召喚ができない。ストーム・シンクロンのレベルは2、シンクロ素材にする為に必要なレベルは3、これではシンクロ召喚できない。クソッ、このまま負けるのか・・・だがこの感触、相手がアンデッド族のデュエルの時のこの感触、何かに似ている。何かに・・・」

すると俺は、数年前のデュエルを思い出した。これを思い出せば、何かが分かるはずだ。何かが・・・」

数年前

そこは、廃虚と化した洋館。そこに5人の人間が集まっていた・・・あれが、今回のターゲットであり、俺の初めての仕事か。

「いいか、アイツ等は完全に油断している。今がチャンスだ、これより、チーム デスソウルへの襲撃を開始する。いいか、最初は俺の切り込みから始まる。そして遊星、ジャック、クロウ、そして遊画、お前があんたのチームへのデュエルを行う、そして勝つんだ。このデュエルは遊びじゃねーんだ、今までのようなお遊戯とは違うんだ。このデュエルで負けた者はデュエルディスクを爆破させられ、デュエルが出来なくなる。それでもやるんだな、遊画」

ああ、やるに決まっている、俺はやるんだ。そして自分の限界を知りたいんだ。だから、俺はやる。

そう思い、俺はコクンとうなずいた。

「・・・結構な返事だ。それじゃあ行くぞ、お前ら」

そう言うと、1人の男の人は手に手錠を持って、チームの中の1人のデュエルデスクに向かって投げた。

そして相手のデュエルディスクに手錠が掛かり、そして相手は動揺

した。

「な……何者だ」

すると、真つ暗闇の中から、少し薄い水色の髪色をした男が不気味に現れた。

「チーム サティスフアクションリーダー、鬼柳 京介。お前らが最近調子に乗って暴れ回っているチーム デスソウルだな」

「そ……それがどうした」

「今から俺達とデュエルしてもらおう。おっと、拒否権はねえぜ。何故ならその手錠にはちよいと細工がしてあってね、デュエルをしなければ外れない仕組みとなっていてな、しかも負けた方のプレイヤーにはその手錠が爆発してデュエルデスクが粉々になるんでね、どうあがいたって、このデュエルからは逃げられねーんだ」

「……………!!!」

「さあ、満足させてもらおうか」

そして後ろに隠れていた俺達も、姿を現した。

「チーム サティスフアクション、鉄砲玉のクロウ様だ」

「チーム サティスフアクションメンバー、ジャック アトラスだ」

「チーム サティスフアクション……不動 遊星だ」

「そしてチーム サティスフアクションサブメンバー、公栄……いや、ヴァルハラだ」

「……っ、やるしかねー。それにこのデュエルに勝てば、周りの連中からも恐れられる事になるからな」

「ほお、ならば来い。俺達が相手になつてやる」

「デュエル」HP4000

そしてどうなつたかと言うと、普通に勝った。それも圧倒的な戦いで。

「どうだ、こつちのフィールド上にはデスカイザー・ドラゴンが2体、そしてお前のフィールド上にはモンスターが0体。これじゃ俺の勝ちが決まったも同然だな。雑魚のクセに俺に戦いを挑んだのが間違いだっただよ」

雑魚………、ツフフフ。

「………っ、っふふ、フハハハハハハハ」

ああ、おかしいね。アンタの方が雑魚に決まっている。そんな死亡フラグな事を言っつて、笑いが止まらねえよ。

「な………何がおかしい」

「まんまとはまったな。お前が上級モンスターを召喚してくる事ぐらいはお見通しだったんだよ。俺のターン、俺はチューナーモンスター、ロード・スター・マジシャンを特殊召喚。このモンスターは自分フィールド上にモンスターが存在しない場合にのみ特殊召喚できるモンスターだ。ロード・スター・マジシャン・魔法使い族・A TK100・光・3・チューナー。そしてフォー・スター・マジシヤンを通常召喚。フォー・スター・マジシヤン・魔法使い族・A TK1700・光・4・効果。そしてレベル4のフォー・スター・マジシヤンにレベル3のロード・スター・マジシヤンをチューニング 4 + 3 = 7 戦火の轟音が響く時、黄金の竜は舞い降りる、光り輝く星にひれ伏せよ。シンクロ召喚、現れよ、ゴールド・スター・ドラゴン」

………と、ここで俺の回想はブツリと切れた。

「どうした遊画。ボーっとして」

「………ふ、フフフ」

「………遊画？」

「俺は思いだした。数年前のデュエルを。行くぜ、俺の本気を見せてやるぜ」

そう言った瞬間であった。突如左右の手の甲に、謎の紋章みたいな物が浮かび上がり、光り出した。

それはまるで、十字架みたいな物であり、そして見ると魔法使いが使用するような帽子がその十字架の頭に被せられていた。

「何だ………これは」

そう思ったのも束の間、その紋章は消え始めた。一体何だったんだ、さっきの紋章は……。

「だが、今なら勝てる。見せてやる、俺の本気をな、俺のターン」
「……来た。」

「俺はチューナーモンスター、ツイン・シンクロンを召喚へツイン・シンクロン・戦士族・ATK1600・地・4・チューナー」
希望だった。そのモンスターは、俺がこれまでに感じた事のなかった希望を感じさせた。

「そしてこのモンスターの召喚に成功した事により、墓地に存在するレベル3モンスター1体を特殊召喚する事ができる。現れる、切り込み隊長へ切り込み隊長・戦士族・ATK1200・地・3・効果レベル3の切り込み隊長にレベル4のツイン・シンクロンをチューニング 3 + 4 = 7 新たな可能性よ、この戦いに終止符を打つべく降臨せよ。シンクロ召喚、切り刻め、ツイン・ウオーリアへツイン・ウオーリア・戦士族・ATK2300・地・7・シンクロ、効果」

片手に両刃の剣を持ち、大きめの盾を持った戦士が、ここに舞い降りた。

「な……だが、攻撃力はこっちの方が上だ。それでどうやって勝つと言うんだ」

「ツイン・ウオーリアで、デスカイザー・ドラゴンを攻撃。ツイン・ソード」

「な……自爆だと」

「違うな、ツイン・ウオーリアの効果発動。このモンスターが相手モンスターを攻撃した時、このモンスターの攻撃力を600ポイントアップさせる。よって、攻撃力は2900となるへツイン・ウオーリア・ATK2300 2900」

ツイン・ウオーリアの剣がオーラを纏い、そのままデスカイザー・ドラゴンを一刀両断に切り裂いた。

「うおっ、生意気な」へLP4000 3500」

「ただだ、俺は罠カード、魂の代価を発動。このターン、モンスターを破壊されたプレイヤーに、そのモンスターの攻撃力の半分のダメージを与える。魂の代価・罠・効果、手札を1枚墓地へ送る。このターン、モンスターを破壊されたプレイヤーは、そのモンスターの攻撃力の半分のダメージを与える。この効果はモンスター1体が破壊された時にのみ効果が発動し、複数破壊された場合は発動する事ができない。手札を1枚、ストーム・シンクロンを墓地へ、そしてその効果により、お前はデスカイザー・ドラゴンの半分の攻撃力、1200のダメージを喰らう」

「な・・・グアアア」LP3500 2300

「そしてツイン・ウォーリアのもう1つの効果を発動。このモンスターは戦闘により相手モンスターを破壊した場合、相手フィールド上のモンスター1体を破壊する事ができる。ツイン・シールドソード」

ツイン・ウォーリアの盾の中から刃物が出て、ハ・デスを切り裂いた。

「そして、魂の代価の効果が発動し、相手に1225のダメージを与える」

「！！こ、コイツ、本当にデータ通りなのか。コイツのデータでは確か、中学校の3年生では一度も勝った事がなかったと・・・」

LP2300 1075

「ただだ。さらに罠発動。セメタリー・チューニング。手札を1枚ゲームから除外し、500ポイントを払う事により、自分の墓地に存在するチューナーと、チューナー以外のモンスター1体をゲームから除外し、その条件に合ったシンクロモンスター1体を、自分のエクストラデッキから特殊召喚する。セメタリー・チューニング・罠・効果、手札1枚を除外して、500ライフポイントを払い発動する。自分の墓地に存在するチューナーと、チューナー以外のモンスター1体をゲームから除外し、そのレベル、シンクロ素材に合った条件のシンクロモンスター1体をエクストラデッキより特殊召喚

する。この効果により召喚されたシンクロモンスターはこのターンのエンド時にゲームから除外される。ㄥLP1550 1050ㄥ
俺は墓地の切り込み隊長と、ストーム・シンクロンをゲームから除外して、チューニング 3 + 2 ㄥ 5 新たなる輝きが、風世界への扉を開く、鍵となる、シンクロ召喚。吹き荒れる、ストーム・ウォーリア・ストーム・ウォーリア・戦士族・ATK2100・風・

5・シンクロ、効果ㄥそしてストーム・ウォーリアでダイレクトアタック、このモンスターの攻撃時、相手は手札、または墓地の効果モンスターの効果を発動できない。ストーム・ハリケーン」

「お・・・思い出した。確かコイツ、公栄 遊画は、ライセンス取得の時にあり得ない勝ち方をしたとした、あのデュエリストなのか」そんな相手の言った事をスルー。そのままストーム・ウォーリアの肩から、大型のキャノン砲が現れ、轟音と共に相手に向かって発射された。

「な・・・なぜだあ

」LP107

50}

・・・勝ったのか。この俺が、初めて勝ったのか。

「・・・初めてだ、このデッキで勝てたのは・・・。こんなに嬉しい事だったなんてな・・・」

俺はブルリと震えた。だがそれはそれで問題がある。何故今まで勝てなかったのか・・・そしてさっきの紋章は一体何だったのか、謎は深まるばかりである。

だが・・・。

「良かったじゃない遊画、初めてこのデッキで勝てたのだから」

「・・・沙耶・・・まあな。俺でもビックリしているよ。俺もやっぱり捨てたもんじゃないな」

まあ、昔の事を思い出して考えると、あの歴史は捨てたいのだが・・・。

「・・・これからのアカデミアでの生活、そしてデュエル、待ってるよ、アカデミア生活」

そんな事をデュエルリングの中心で叫んでいたのであった。

ちなみにその数日後のデュエルでは、手札事故によりモンスターの召喚ができない状態で負けた。

・・・世の中、そううまくいかない物だなーと、改めて実感した。

「で、どうだった・・・」

ここはとある会社の会議室、私は今まで観察していた事を、思っている事を報告した。

「・・・あれが、あの遊画ですか・・・何故かわいそうすぎます。男性嫌いの私でも、あの性格はとても残念に見えてきます」

あんな男性がいるなんて、男性なんて欲求の塊だとばかり思っていたのに・・・。

「でも男ですからねえ、いつボロが出てもおかしくありませんわよ？」

「アンタね、一応アレでも私の息子よ。血は繋がってはいないけど・・・」

そんなやりとりをしていた。私はそのやりとりをスルーした。

「・・・観察結果は以上です。遊画の異性への接し方の無さ、そしてこの1週間でボロを見せないとなると・・・、今度はどう言った事を」

「んー、今度はねー・・・そうだ雅ちゃん、私が実体化させてやるから、遊画に接しなさい」

「!!わ、私がですか」

実体化させて・・・って、確かに不可能じゃないけど・・・相手は男性、こんな姿の女性を見たら・・・

「ちなみに、接し方次第では殴ったり蹴ったりしてもよし」
「……分かった。それじゃ行ってきます」
「……殴ったり殴ったりするのが目的だと見え見えですわね」
葵あおいの言葉に少し反応しながらも、彼女は笑顔で答えた。
「行ってらっしゃい、ちなみに名前を聞かれたら……そうだね」
「れいのつ 霊能 みやび 雅とでも名乗ってらっしゃい」
「……分かりました。こうえい 公栄 えいこ 英子」
「別にフルネームで言わなくても」
「……じゃあお母様で」
「……そう言う意味じゃ無いですわよ……」
「……?」

続く

次回予告

突然現れた少女。名を霊能 雅と言う名前らしいけど、この少女、何をしたいんだ。いきなり殴られるわ、蹴られるわで、俺はお前に何か悪い事でもしたのか。

次回、遊戯 Fate (フェイトインフィニティ) 第2話「
謎の少女、霊能 雅」

お前……どこかで見た事があるような……。

第1話「隠された遊、公栄 遊画」（後書き）

あとがき

みなさんこんにちは、この作品の作者のRagoと申します。

趣味は見ての通り遊戯王です（他にもラノベや漫画、さらにはプラモなどの趣味もあります、ここではあえてスルー）

追加として、タイトルを変更しました。

この作品を見て、満足できましたか？

満足できれば嬉しいのですが・・・実はこの作品、昔に自分で考えた小説がパソコンの中にあっただので、それを読み直し、それを元にして書いた小説です。（ちなみにその小説は見ていて恥ずかしくなかったので、消しました）

ちなみに、この小説は自分のブログにもありますので・・・いろいろと誤字があったりしますが。

まあ、それでも頑張っていきたいと思えますので、応援よろしくお願いします。

第2話につきましては、すでに第10話まで出来ているので、やろうと思えばすぐにも投稿できますが、俺の性格が気まぐれなので、もう少し待っていただけかもしれませんでしょうか。

それでは、この次もご会いしましょう。

栄光のターンエンド

9月28日 自宅にて

第2話「謎の少女 豊能 雅」(前書き)

こんにちは、第2話を投稿します。
以上

第2話「謎の少女 霊能 雅」

体が痛い、どうしてこんなに体が痛いのか。

そんな事は考えたくない、そしてどうしてこうなったのか。

そして……。

「……公栄 遊画、あなたは欲求不満と言う言葉を知らないの？」

どうして、緑髪の少女にこんなにも罵倒されているんだ。

……アレが原因か。

第2話「謎の少女、霊能 雅」

アレは、つい1日前の事だった。

入学式から10日は経過している、ある日の事だった。

「はぁ、最初のデュエルを抜かせば全敗か……」

あの日のデュエル以来、全て全敗である。

アレは夢だったんだな、あんな奇跡が起きたのは、恐らく俺の妄想の中だったんだな。

そんな事を考えていると、いつものごとく沙耶が隣に座ってきた。

「遊画、何をそんなにブツブツ呟いているの？」

「お前みたいな最強には分からない事さ」

あれから沙耶はアカデミア2位の实力と言われているし、フルはアカデミア1位の实力とまで言われている。

確かにこの2人は強い。

並大抵のデュエリストならば2ターンもあれば終わらせる事もできる程の腕だし、それに比べ、俺なんか……

「2ターンで負けているからな、どうしてこうなったんだ。俺は神に喧嘩を売った覚えは無いぜ」

「あはははは……それはご愁傷様で」

「ご愁傷様で済む問題ではない。そもそも、あの時に浮かんだ紋章も気になっていた所だし」

紋章、あの十字架に魔法使いの帽子を乗せたような形をしたあの紋章。

「……一体何だったんだ、あの紋章は。」

「つと、そんな事を考えている場合では無かったな。次のデュエルに備えてデッキを見直さなければな、連続で負けていてはきりがない」

そう言っていると、俺はデッキを取り出し、見直していた。

えーつと、このカードはあのコンボのために抜かせないから……つと、それにこれはいつ手札に来てもいいようなカードだしな、で、これはこれで……つと。

「これで良いかな、よしこれで行ってみるか」

これで、大分マシになっただろうな……。そんな事を考えていた時だった。

キーン、コーン、カーン、コーン

朝のホームルームの始まりのチャイムが鳴り始めた。

「お、そろそろ時間だな」

そう思うと、後ろのドアから1人の教師が姿を現した。

新和先生だ。

「はい、みんな席に着け。さもなくば2学期の成績をオール5にするぞ」

「地味にイヤだな、親に説明がしにくいじゃねーか。どうしてこうなったの？と聞かれた時のリアクションにも困るわ」

どんな地味な嫌がらせをするつもりなんだ、この教師は。

「ハイハイ、そこ黙っとけ、元サテイスファクションのサブメンバ―さん」

「……ハイ？」

「……待て、どうしてそれをお前が知ってたんだ」

「えーつと、英子の情報によると、当時の彼のセリフに「アッハハ

ハハハ、俺を倒す？バカな事を言ってんじゃねーよ、お前が倒されるに決まってるんだろ、サテライトの中の負け組さんよ」と、相手に向かつて言ったそうです

「！！！！は、恥ずかしい黒歴史を言ってんじゃねー」

あの頃の事を何故母は知ってたんだ、アレは心の奥底に閉まっておいた心の闇なのに・・・。

「遊画、アンター一体何をやらかしたの」

隣の沙耶の表情を気にせずに・・・気にしたら負けだ。

「さてと、これから朝のホームルームを始める。きりーつ、きをつけー、れい」

「……………お願いしまーす……………」

相つ変わらざるの棒読みであった。

「ムカツクほどにいい返事だ、それでは着席」

サイテーでもお前にムカツクと言われたくない。

「あ、そう言えば、これからこのアカデミアに転入する事となった人がいるからそれを紹介する」

新和の転校を軽く流した事よりも、その転校の言葉自体に俺は興味を示した。

珍しいな。こんなすでにアカデミアが始まった時に転校なんて・・・何かしらの大金持ちのお嬢様とか、そりゃないだろうがな……………。

「それでは入ってこい」

新和のかけ声と共に、その人は後ろから入ってきた。

横を通過する時にチラリと見たが、伸びた緑色の髪、帽子を被り、制服はアカデミア指定の制服を着ており、しかしそれよりもその見た目だった。

お嬢様と言うよりは和風のお嬢様と言った方が正しいような見た目に大きく開いた緑色の瞳、そして男性なら即座に見るであろう、その豊かな胸。何を取ってもパーフェクトであった。

まあ、俺は興味が無いがな。

「それでは転校生、名前を言え」

早速命令形かよ。

「……………雅、れいのう霊能 みやび雅と言います。どうかよろしくお願いします」

この喋り具合からすると、無口な美少女と呼ばれる分類だろうな。そう考えていると、クラスの男子共が「うああ、かわいい」と呟いていたがスルー。

俺に到っては「チツ、女か」と舌打ちした程であった。

「……………好きな物は読書です。嫌いな物は……………男性です」それを聞いた瞬間、クラスの空気が冷めた。

男性嫌い、それは好都合だ。

何故なら俺は、女性をあまり好きではないために、こんな感じの美少女は苦手であった。

しかし男性嫌いなら別だ。関わる機会が全く無くなる。

あつはは、俺の青春真つ盛り……………ハア、実際には別の意味で落ちているがな。

そんな訳も分かんない妄想ボケをかました矢先だった。

急に雅は俺の方を見ると、そのままこつちへ近づいてきて、そのまま回し蹴り……………え？

「グボア」

そのまま床に倒れる俺。

頭が物理的に痛い。

そして床に倒れた俺を見る雅……………上等だゴルア

「何の恨みがあるのか知らねーけど、売られたケンカは買って返すのが常識だと鬼柳に言われてな。女だろうが容赦は……………」立ち上がった瞬間、今度は溝を殴られた。

「ガハッ」

な……………何の恨みがあつて……………。

「……………さつき舌打ちをやった。それで何故かむかついた……………それだけ」

それ・・・だけで、この・・・有り様・・・かよ。
ここで、俺の意識はブツリと切れた。

俺の意識が戻ったのは、それから数時間後だった。

場所は保健室、俺はさっき起こった事を整理していた・・・。
まずは転校生が来て、それで舌打ちをやって、それが原因で蹴られ
殴られ・・・何だかむかついてきた。

舌打ちごときであの有り様である。

「このままジツとする俺では・・・あるか」

よくよく考えてみたら、仕返しをして余計に関わるより、そのまま
無かった事にすれば良い事だ・・・と俺は思った。

しかしどうも腹の根が収まらない。

何かストレス発散するいい方法は・・・

「・・・こうなったら、アレをやるか」

アレ、それはサティスファクション時代に使っていたデツキを使い、
この町に群がる不良の集まる場所があるとある裏道に存在する。

そして、そこを襲撃する。

つまり八つ当たりである。

何故かサティスファクション時代に使っていたデツキで戦うと、普
通に勝てたりする。

しかしアカデミアでのデュエルは、この戦士族デツキで戦いたい。
そう思い、俺は放課後を待っていた。

・・・ちなみに、このデツキを使えば負けれないと言う保障はな
い。

このデツキを最後に使ったのは、やはりサティスファクション時代
の時だったのだから。

放課後

俺は、わざと不良の群に迷い込んだ。

ジロジロと見られ、俺はゾツとした。

その中の一人が、俺に向かって歩いてきた。

「ああ、ここが何処だか知ってるのかよ」

よし、食らいついてきた。

「あ・・・え・・・し、知りません」

「だよなあーオイ、ここはな、俺達アーカイトのゴミ共が集まる集会所なんだよ。テメエみたいな女が来るような所じゃねーんだ。まあ、迷い込んでしまったからには、逃がしはしねえけど・・・」

俺の困ったクセにこんなクセがある。

俺、公栄 遊画は、女と見られるのが大っ嫌いだ。

そのため、迂闊に言ったヤツを無意識にぶん殴ってしまうクセがある。

それが、今の状況だ。

「ブゴアツ」

俺は力一杯拳を振り上げた。

「俺は・・・男だ」

ぶん殴られた男は、そのまま浮いた後、地面に叩き付けられ、意識を失っていた。

「！！テ、テメー、よくもヘンウを・・・野郎共、コイツを生き返すな」

「・・・オウ」「」

男共は、俺の周りに囲むように集まってきた。
仕方ない、殺るか。

「かかれー」

「……オー……」

そう言つて、不良達は俺に殴りかかった……が

10分後

俺はかすり傷を舐めた。

そして俺の周りの光景には、ボツコボコにされ、倒れ込む不良共の姿があつた。

「チ……チクシヨ」

「どうだ、これが俺とお前らの強さの格の違いだ」

俺は不良共を見下した。良いね、この強者を名乗る弱者を見下ろすこの快感。

俺の無駄な性格、それは間違つたヤツにはとことん酷い事をする。

そしてそれが男だろうが、女だろうが……。

「お……お前の名は、一体何だ」

フツと笑い、俺は一言、言つてやった。

「元チームサテイスフアクションサブメンバー、ヴァルハナだ」

ヴァルハナ、その名は俺が活動する時の偽名であつた。

サテイスフアクションとは言つても、俺がいたのは途中すぎる時だったが、その頃には結構知れ渡つていた頃でもあり、そして俺がいた時期は、わずか1週間である。

それでもサテライト統一に貢献し、鬼柳にも気に入られていた。

その時、俺は嬉しかった。こんな俺でも居場所があるのだと思ひ。

クラスでは除け者扱いされ、沙耶に関われば男子共からランチにされ、散々な小学校時代を過ごしていた俺に、初めて居場所が出来た場所でもあるのだから。

そんな事を考えていると、その不良共は「に……逃げるぞ。聞いたことがある、確か昔、荒れ果てていたサテライトを統一した伝説のチームがあるんだと……その中のメンバーに、確かヴァルハナと名乗っていたヤツがいたとか」と1人が呟き、そのまま蜘蛛の子を散らすようにして逃げていった。

「……弱いな、アイツら」

そう勝ち誇っていた。

その時だった。

「……サイテー」

後ろから不意に声が聞こえた、俺は慌てて後ろを振り向いた。

「!!お……お前は」

そこには、今回この騒動を起こすきっかけとなった少女、雅がその場に立っていた。

「……暴力で事を済ました」

「っ……」

確かに考えてみれば、デュエルで事を済まそうとしていたが、俺が迂闊にも切れたために喧嘩で事を済ましてしまった。

それは反省しよう。だが

「だが、お前にそんな事を言われる筋合いは無いと思うが、雅」

「……男は嫌い」

「俺は女が嫌いだ。もっとも、最初に出会って蹴りと拳で俺を気絶させるようなヤツはもっと嫌いだ」

「……その目には、汚れが無いように見えるけど、それはそう言う体格なのね」

俺の目は、汚れの無いような目をしていると昔母から言われた事があるが、それは偽りの目だ。

実際には喧嘩をよくやる、サイテーな男だ。

ちなみに、俺は喧嘩以外に悪い手を染めた事はない。

それは確かだ。まあ悪いヤツを見下す態度は悪いに入るが……だがタバコや酒に手を出したり、麻薬に手を付けたりした事は一度もない。

それどころか、不良のメンバーに誘われた時もあったが、俺は断つたりした。

その後、喧嘩になったとは言うまでもないが……。

それでもサイテーな男には変わりない。こんな汚れの無いような目

をどうにかしたい物だ。

夕焼けの空が辺りをオレンジの光景に変えていく。

目の前にいる雅も…………。

「…………それだけか」

「……………」

答えがない、それじゃここまでだな。

「俺はもう帰る。こんな所でいつまでたってもいたって、時間の無駄だ」

そう言いながら俺は裏路地を出ようとした……………ガシッ
え、ガシッ？

「…………ちょっとそこまで付き合ってもらおう
見ると、思いつ切り雅に腕を握られていた。

「な…………何故だ。お前は男が嫌いなんじゃ…………」

「…………実はというと、とある人からの頼みで、遊画、あなたの
性格を治して欲しいと頼まれた。その暴力を普通に振るう性格と、
女性を拒む性格を」

「誰だ、まさか新和じゃねーだろうな」

「……………違う、でも少なくともあなたの知り合い」

？誰だ、俺の知り合いでそこまでして俺の性格を気にするヤツがい
たっけ。俺の性格を治さなければ不利になるような…………ダメ
だ、思いつかない。

「って、そんな事を考えても無駄か。お前に付き合えと言われても、
俺は付き合う気は…………」

その時、雅はその自慢の胸に、俺の手を押しつけやがった。
ムニヨンと言った感じの感触が、手を通じて伝わってきた。

「な…………何をする、雅」

「…………これで付き合う気になった？」

何のこれしき、こんな事で…………手を動かすな俺、動かしたら…………
動かしたら…………。

「っ、強制的に振りほどく」

雅の手を振りほどこうとした……が、雅の方が力が強かった。

なんて力だ。振りほどけない。それどころか……弾力が……。

「ん……んあ」

「な……なんて声を出してんだ」

「だって、遊画が力を入れると……胸に余計な力が……」

な……お・俺が……押されている……のか。

「つ……付き合ってもらえる？」

……

「分かったよ、少し付き合えばいいんだろ。分かったよ、もう好きにしる」

ああ、何か面倒くさい事になってきた。

しかし後になって思ったが、この事が原因で、雅との仲が良くなっただのかもしれない。

「……アレは何」

「アレは、アーカイトの名所でもある時計塔。裏では闇の時計塔と呼ばれているがな」

「……じゃあアレは」

「アレは、アーカイト名物のレッドアイズカレーの店だ。普段から満員だからな、入る機会が全くない」

「……じゃあアレは」

「アレはあそこで告白したら一生仲良く暮らせると言い伝えがある橋、ブルーアイズブリッジだ。アレはアーカイト10周年記念で作られた橋で、建設にはあの海馬コーポレーションの提供で作られたとも言われているが、ブルーアイズの名前が付いているからな、絶対に海馬コーポレーションが建設に協力したに違いない」

「……そう」

「……何故だ、何故俺は、コイツと一緒に観光スポットを回っているんだ。これって、デートと呼ばれるんじゃない……」

「……なあ、そろそろ帰っても……」

「……さつき胸触っていた事、クラスにバラしてもいいの？」

「！さ、最悪だ、そんな事をされると……想像もしたくない。」

「ハア、どうしてこんな……」

すると雅が俺の足を思いつ切り踏んだ……。

「イテテテテテテ、何をする」

「……本人にバレるような深いため息をしない、ムカツクからそう言つと、雅はツーンとそっぽを向いた。

「たたく、どうも無口だが、キレやすい。そう言えば、何でコイツは無駄に強いんだ。」

「つと、着いたぞ。ここがアーカイトの夜景が見られるスポット、みやき公園だ」

時刻は8時、普通は帰っている時間帯だが、今日は雅の強制的なデートであったために、今のような時間帯になってしまったが、今となってはどうでもいい話だ。

「……きれい」

その光景は、俺も見とれるような光景だった。

町全体が光に纏われ、見る者の心を洗い流すような感情になる光景だった。

「確かに、俺もここに、それもこの時間帯に来たのは初めてだからな。これがアーカイトシティ。これが、俺の住む町……」

綺麗な夜景か……綺麗な所だな、そう言えば前にも綺麗な所に行った事があるような……。

その時、とある記憶が脳裏に映し出された。

ここがどこかは分からない、とても綺麗な場所だ。

すると、そこに1人の少女が俺らしき物を抱いていた。

「……公栄 遊画、英子の息子……かわいいけど、男の子だから、大きくなったら……でも、今を楽しみたい。いずれ、あの時みたいになる前に」

あの時？一体何の話だ、そしてここは……どこだ。アイツが抱いているのは……まさか、赤ちゃんの時の俺……。

「……遊画？」

俺はハツと記憶から意識を取り戻した。

何だ、あの記憶は、そして……さっきの少女、似ている。

「……遊画、どうしたの、そんなに私の顔ばかり見て」

「……お前」

「……え？」

さっきの記憶、もしかしたら……

「お前、どこかで出会った気がする」

さっきの記憶の少女、緑色の髪にポニーテールだったが……それがコイツなら、全く歳が変わらない事になる。どう言う事だ……俺はその真相を知りたい。

「……あなたとはさっき知り合っただけ、だからあなたは知らないハズ」

……そうだよな、初めて合っただけのヤツにそんな事を聞いても全く意味がないし、それどころか何のナンパ台詞だよ、さっきのは。

「……思い出したのか」

ボソリと雅が何かを呟いたが、よくは聞き取れなかった。

「……何でもない、それよりも、どうしてこんなきれいな所に……」

……俺だつて分かんない、俺はどうしてこんな場所に来たのか……と思っただが、俺は雅を見て何かを感じ取った。

それは、何かの共通点……男嫌いと女嫌い、何かがあつて男嫌い

になった雅、そして俺は・・・思い出せない、記憶の中で確実に何があつたはずなのに・・・だが、もしかするとコイツの過去を聞き出せば何か分かるかもしれない。どんな過去だつていい、俺の身に何があつたのか知りたいんだ。

「・・・それは、お前の心の闇を聞き出しやすくするためだ」

「・・・え」

「話してみるよ、お前の過去に何があつたかを」

それを聞いた瞬間、雅は黙り込んだ。

当たり前といえば当たり前だが、直感的に感じ取れるのは、信じて良いのか信じてはいけないのか・・・多分、それを考えているのだと思う。

考えてみればおかしな話だった。出会つてすぐに殴られ蹴られとした相手に、何故俺はここまでしたのだと。

「・・・数年前」

雅は俺を見ると、そう言ってきた。

「・・・話してくれるんだな」

俺は、雅の話を見真面目に聞く事にした。

「・・・数年前、それは起きた。私に家族は父親ただ1人だった。母親は私を生んですぐに亡くなつて、父親はそれを私のせいだと思つていた。毎日のように暴力を振るい、私はそれでも耐えてきた。どんなに辛くても、私は耐えてきた。でも、それにも限界があつたいや、あの父親が限界を超えたの。私は成長が早かつた。だから胸の発達も早かつた。そんな私を見た父親は、私を襲つてきた」

・・・そのように自分で欲求不満を抑えきれない男は、俺は嫌いだ。

そんな表情をしていたのに気づいてか、雅はフツと笑い、再び話を続けた。

「でも今でも私の貞操は守られている。その原因は・・・私の生まれた国ではまだ、魔女狩りが行われていた」

！！いつの時代だ、そんな大昔にあつたあの惨劇を、まだやってい

る国があるのかよ。

「それで、私は発達が早かったから・・・乳が出るようになったの」

は・・・早すぎるだろ。その年齢で乳つて、どんだけ発達が早いんだ。本当に15歳かよ、コイツは。

「それで私から乳が出るのを見た父親は、すぐさま「魔女だ」と叫び、表に出た。そしてすぐに、男達は集まった。手には武器を持って、私は恐ろしかった。そうやって自分の欲求を満たそうとした拳げ句、私が魔女と決めつけ、殺そうとした父親を・・・そしてそれで集まった男達が・・・でもその後、とある人に助けられたけど、そのとある人も男だった。すぐに私を見捨てて、どこかに行ってしまった。そして私は信じられなくなった。男を、異性を」

・・・俺は、無意識に怒りの感情に包まれていた。

・・・ふざけんな、自分の娘を襲った拳げ句、自分の娘を殺そうとした・・・そんなバカげた行為を、俺は許す訳にはいかない。

「そいつは今どこにいる、今すぐにでも殴ってやるよ。そんなクス野郎に、お前の痛みを味合わせてやる」

そんな事を言ってしまった。すると雅は、以外にも驚いた顔をした。・・・どうして、あなたには関係ない話のハズなのに」

「関係ない、そんな娘を思いやる気持ちもない父親の話聞いて、そしてそれが原因で傷ついてしまったお前をそのまま見過ごす事なんて、俺にはできない。お前は・・・すでに俺のクラスのメンバ―であり、俺の仲間だ」

俺が、こんな事を言う日が来るとは・・・。

そう言えば昔に、こんな事を聞いた事がある。

『遊園、仲間を大切にするんだ。例えそれがどんなヤツでも、出会えば仲間なんだ。そして絆を作れ。絆があれば、どんな事にも立ち向かる事だつてできる。それが、お前に足りない事だ』

これは遊園から聞いた言葉であった。

それを聞いた時、俺は足がすくんでしまった。俺にそんな優しさや

思いやりが無かったと言えた時に、俺はその時になってやっと気づいた。俺自身、敵ばかりを作っていたんだと、そして仲間を作る事をしていなかったと。

その時になって、初めて気づかされた事であった。

そんな事を考えていた時、雅は下を向いたまま泣きそうな声を上げていた。

「・・・あなた、私を仲間だと思っていたの？あんなに酷いことをしたり言ったりしたのに、それでも、私の過去を真面目に聞いて、尚かつそれを・・・でも、過去にもそんな事が」

俺は半分以上聞き流していた。

それだけではコイツの心の闇は無くならないと見た、どうすればコイツの心の闇を・・・ってアレ、俺は確か俺の過去を思い出すためにコイツの過去を聞いていたんじゃ・・・まあいいか。コイツの心の闇が思った以上に深かったから、今はコイツの心の闇を・・・

「だから、あなたも同じ男性。信じられない事が多すぎる」

「・・・もう一度聞くが、お前の父親はどこにいる」

「・・・もういない、ある事件に巻き込まれて死んだ」

「マジかよ。そもその原因のヤツが死んでしまっていたら・・・」

待てよ、そう言えばコイツは男達で恐怖を抱いてしまったんだよな。

男達・・・男・・・痛そうだな。

「・・・聞いている？」

「ああ、聞いているさ」

半分以上聞き流していたけど。

「・・・だから、あなたは信じられない」

完全に泣きそうな声から元の声に戻っていた。

「別に信じなくていい、それがお前の思いなら、俺は別に信じられなくてもいいんだ。俺も、数年前まで仲間と言っ言葉を知らなかった。

そう、俺はチームサティスアクションと出会うまでは……。そもそも、俺は旅行でネオ童実野シティに行っていた。

その時に、誤って川へ転落、そのままサテライトに流れ着いた。その時に偶然、鬼柳と遊星が通りかかった時に、俺を保護してくれた。そして俺の事を聞いてくれた、そしてその時に聞いた言葉がさっきの仲間の話だった。そのまま俺もサテライト統一の手助けをする事になった。

これから先の事は、またいずれ話す事があるだろう。何故なら今は……重要な話をしているからだ。

「だが今なら分かる、仲間と言うものが、そして仲間が傷つく所なんて、俺は見たくない。お前の父親への恨みを晴らせないのなら、俺がお前が受けた痛み、いや、それ以上の痛みを受けてやる」

「……！」
雅は再び下を向いた。

「……痛いじゃ済まされないかもしれない」

「それならそれでいい、俺は死んでもいいからな、だからその受けた痛みを、俺にぶつける。男である、お前の嫌いな、男に向かって」

「っ、バカにしないで」

その瞬間、雅は俺に向かって思いつ切り殴りかかった。

「……っ」

その殴られた衝撃で、俺は地面に叩きつけられた。

その痛さ、そして殴られた所が顔だったために、口の中から生暖かい物を感じられた。

これが、その時に感じていた痛み……のほんの一部、コイツの痛みはこんな生ぬるい物じゃ無いハズだ。

「……まだ来いよ、お前の負った痛み、そして憎しみが無くなる事が無くても、その心の傷を補えるまでな、俺はその覚悟はできている」

俺はまた立ち上がった。

すると、雅が「こんなハズじゃ……」と震えていた。

「こんなハズ？そう思うなら、何故この事を今まで心に閉まっていた。お前だって、殴られる痛みに耐えるのが辛かった。だが今は、お前が痛みを相手に伝えるターンだ。だから、お前が受けた痛み、この俺が受けてやるよ。この、小さい事で殴り、蹴った、暴力野郎」

「……つ、うあああああああ」

雅が完全に吹っ切れた。

俺を押し倒すと、俺の顔面を殴り、殴り、殴り、殴り、殴った。

俺はその痛みを耐えながら、後悔した。

どうして女性相手に、初めて会った時に殴り蹴りしてきたヤツに、ここまでやってしまったのかを、痛さの中で、そう思った。

「男なんて、男なんて、男なんて、お……とこ……なんて……」

力が弱まり始めた、疲れてきたのだろうか。

「お……と……こ……なんて、大っ嫌い……だ。し……しかも、人の痛みを……自分の痛み……するヤツが……もつと……嫌い……だ」

そう言つて、俺を殴るのをやめると、そのまま俺の胸の部分に顔を当てて、泣き始めた。

「うっ、うっ、うっ……うわああああああん」

俺は、その泣いている雅を、優しく包み込んだ。

安心しろ、お前の痛みはしっかり感じ取った。だから今は泣くと良い、自分の心の中に閉まっていた闇を少しでも無くすために……。

その上空で、謎の少女が、その姿を見ていた。

「……公栄 遊画、ただ者ではないですわね。あの雅をあも簡単に男性に対する心を開かせるなんて……でも、私はそうはいかないのですわ。私の心の闇は、決してあんなヤツには開かない、頑

丈な扉なのだから・・・」
そう言うと、その少女は青い髪を揺らしながら、どこかへ消えてしまった。

そして次の日

俺は普通にアカデミアに登校した。

いつものように授業を受け、そしていつものように過ごしていた。ただ1つ、違っていたのは・・・。

「遊画、エロ本あるが、一緒に見ねーか」

「遠慮する。俺はそんな物には興味がない」

「チエツ、真面目すぎても体に毒だぞ」

「どういう意味だ、それは」

ああ、やけに体が痛い。あれだけ攻撃を喰らえばここまで痛くなる物か・・・。

まあ、ここまででは普通の日常的風景だったが・・・。

「・・・公栄 遊画」

突如、俺の後ろに雅が現れた。

「な・・・何だ、雅？」

「・・・あなたは、欲求不満という言葉を知らないの？」

その言葉を聞いた瞬間、周りはザワツとなった。

こんな美少女からそんな事を言われる俺、そしてそれを平然と言いのける雅、周りの男子は「羨ましい」のオーラを放っていた。

「って雅、平然とそんな言葉を使うな。俺が恥ずかしい」

「・・・どうして、あなたは女性が嫌いじゃないの。だったらこんな言葉はスルーできるハズじゃ・・・」

「俺は、女性は苦手だが、エロは大っ嫌いだ。だから下ネタやそれに該当する事に関しては、激しくツツコミをしなければ気が済まな

い

「……そう、ならば行為なら」

「そう言う問題じゃない……ってか、俺に何をするつもりだったんだ」

「……良いこと」

「……もういいです、これ以上お前にかまっていたら疲れが溜まる」

これ以上、泥沼にはまっていたら、更に疲れるだけだ。ここはもう、スルーの選択肢で……。

「……でも、それが本気だとしたら？」

出来ない、スルーが出来ない。

「抵抗するに決まっている。そんなふだらな……グボア」

何故か雅から思いつ切り殴られた。

「……バカ」

？何か俺、アイツを起こらせる事でもしたのか。

「遊画、あなたはどれだけ鈍いのよ。さっき雅ちゃんから昨日の事を聞いたけど、尊敬するわ」

沙耶がいつものごとく隣に座っていたが、いつの間に昨日の事を……。

「でも、負けたくない」

「……それはお互い様」

何故だろう、あの2人から火花らしき物が……気のせいかな。

まあどうであれ、今日もまた、平和に暮らせるのなら問題ないかと、俺は思い苦笑した。

それから2時間後の教室

今日のデュエルの対戦表が前方の画面に提示された。

えーっと、俺の対戦相手は……。

第2話「謎の少女 霊能 雅」(後書き)

どうも、作者のRagooです。

今回の話は、気持ちが暗い時に書いた話です。

ですので、心理フェイズが多い・・・と言うよりはデュエルをしていません。

ただそれだけです。

それと、面倒くさいので今日中にpixivから全ての話を持ってきます。

それでは、次回、一々あとがきは書きますので、お付き合いをお願いします。

第3話「風を操る守護者 ダイガスタ・イグルス」(前書き)

と、言うことで始まりました第3話・・・
今日中にコピ―を終わらせたいと思います。

第3話「風を操る守護者 ダイガスタ・イゲルス」

遊画、彼は私の心を動かした。

それは複雑な気持ちだった、今まで男性を恨んでいた私にとって、それは信じて良いのか信じていけないのか・・・それはまだ知らなくともいい。

問題が、遊画の事を考えると、胸が苦しくなる。

ねえどうして、どうしてこんなに胸が苦しく、熱くなるの。

・・・分からない、分からないから怖い。それよりも、この心の苦しみの原因が分からないから・・・怖い。

「・・・と言う訳だけど、私には分からない。この感情が・・・ここはとある建物の中の相談室、そこには私とお母様、そして葵あおいがそこに集合していた。

「そう、多分それは好意だと思う」

以外にもお母様はその事に対してすんなりと言い放った・・・けど「・・・好意？そんな、私が」

そんな事は考えなかった。何故なら私自身、父親に犯されそうになり、拳げ句の果てには男共に殺されそうになった。そんな私に、好意なんて・・・

「そうですね、雅が好意なんて・・・」

「確かに、あなた達は過去に深い傷を負っている。でもね葵、雅、人は単純な事で人を好きになったりする事もあるのよ。それがどんな事であろうとも・・・」

「・・・お母様？」

お母様は急に黙り込んだ。あの真剣な眼差しは・・・

「・・・何でもないわ、あの人の事だから、どこかで生きていると思うけど・・・」

「……真の事ね」

真、名を公栄こうえい 真しんと言う、お母様の旦那である。私の父親とは全く違い優しく、下心が全く無く、そしてかっこいいの分類に入る、でもちよつと抜けた所のある人である。

「ええ、彼はどこかで生きている。どこかは知らないけど」

お母様は無理して作り笑いをしていた。

それは、見ているだけでも分かってしまった。

「大丈夫ですわ、真さんはどこかで生きているのですの。だから心配しなくても良いのですわ」

「葵……でもね、あの人の事も大事だけど、さらに言えば、問題は遊画なのよ」

遊画が、その言葉を聞いて、私は少し動揺した。

「……どういう意味」

「何故なら遊画は、好意だけではなく、女性に対して否定的になるクセがあるの。あんな事があつたから」

あんな事、その時お母様からは、これ以上聞かないで……と言わんばかりの雰囲気を作り出していたため、これ以上聞く事ができなかった。

でも後からになって、それでも聞くべきだった……と、後悔した。

第3話「風を操る守護者、ダイガスタ・イグルス」

俺は昨日、女性を泣かせてしまった。

別に悪い意味ではない。

ただ、それが過去に対する悲劇を言わせてしまった事に対しては若干反省している。

誰にでも、思い出したくない思い出、そして話したくない思い出があるはずだ。

俺は、自分の過去を知りたくて、もしかしたら聞いたら思い出すか

も知れない・・・などと思い、聞いてしまった。
だが結果は思い出せていない。無駄に殴られ、無駄に泣かしてしま
った。

そして、無駄な感情を雅に抱かせてしまった。
無駄な感情とは言っても、好意などではない。
信賴関係を築き上げてしまったのだ。

男性嫌いである、アイツに・・・男性である俺に対して。
もつとも、俺自身もあの時にはアイツの心の闇を無くす事だけを考
えていたものだから、あとになってそんな事を考えてしまう。

・・・無いと思うが、俺に好意を抱くのだけは合って欲しくな
い。

何故なら・・・俺は女性が嫌いな上に、何かの恐怖を抱いてい
るのだから。

過去に何があつたのか、恐らくこの女性に対するこの拒絶感と、何
か関係があるのだろうか。

あるのなら、俺はどうすればいい。過去にあつた記憶が思い出せな
い今、どうする事もできない。

・・・今は放っておけと言つのか、神様よ。

「公栄 遊画、準備はできているかと聞いている」

その言葉を聞いて、俺は我に返った。

今まで考え事をしていたために、周りの状況が全く把握しきれてい
なかつた。

見ると、雅はすでに準備を整え、腕にはデュエルディスクが装着さ
れていた。

俺も慌ててデュエルディスクを展開させると、心の準備に取りかか
った。

「・・・大丈夫だ、いずれは思い出すだろうから。だから今はデュエルに集中しろ」

そう、自分に言い聞かせた。

扇子型のデュエルディスクである俺のデュエルディスクは、扇子のように展開した。

すると、何故かデッキのカードが抜けなかった。

「？故障か・・・」

デュエルディスクの表示板を見た。

すると、そこにはこう書かれてあった。

『カードが1枚足りません』

「・・・どう言う事だ、カードが1枚足りないって。

俺は不信に思い、もしかして・・・と思いつつも、自分の懐を探っていた。

すると、そこからデッキが・・・

「あれ、このデッキって・・・まさか」

その中を見てビックリ、戦士族デッキであった。

すると・・・これは、まさか

慌ててそのデッキを取り外し、カードを見た。

そこに書かれてあったのは・・・スター・マジシャン

そう、昔俺が使っていたデッキのテーマであった。

「やってしまったー」

迂闊にも、そう叫んでしまった。

周りの反応が「え、何事」とザワツとなった。

クツ、やってしまった。通りで懐に何かしらの違和感があった訳だ。

昨日はそのまま帰ってから眠りについてしまったからな、迂闊にも

・・・しょうがない、無駄だとは思うが、ちょっと試してみるか。

「・・・先生、このデッキ違うデッキだったので、取り替えてもいいですか」

俺は、新和に向かってそう叫んだ・・・が

『無理だ、一度デュエルに使用すると決めたデッキを変える事は反

則に値する』

でっすよねー、だが

「カードが1枚足りないから、それを補うカードをこのデッキから抜き出すのはいいだろ」

『……仕方ない、それは認めてやる』

それを聞いて安心した。

俺はすぐにデッキの中から1枚のカード、ツイン・シンクロンを抜き出すと、スター・マジシャンデッキに導入した。ついでにツイン・ウォーリアもエクストラデッキに導入した。

「よし、これでいいだろ」

だがうつかりにも程があつたのは反省する。

『それでは公栄 遊画VS霊能 雅のスタンディングデュエルを開始する』

「手加減はしないぞ、全力で来い」

「……手加減をする気は無い、でも楽しく戦いたい」

雅は柔らかく微笑んだ。その笑顔は、見る者全てに幸福を与えるような笑顔だった。

『それでは、始めっ』

「デュエル」LP4000」

「まずは俺のターン、俺はリミット・スター・マジシャンを攻撃表示で召喚ハリミット・スター・マジシャン・魔法使い族・ATK1200・光・3・効果カードを2枚伏せて、ターンエンド」

この流れは順調であった。だが問題が、雅がどんな戦術を使ってくるかであった。

スター・マジシャンは、フィールド上に存在する時に効果を発動するモンスターと、墓地での効果発動の効果を持つモンスターが存在するトリッキーなモンスターである。

それが故に、墓地を封じられると、全く身動きがとれなくなるのが弱点であった。

それは、どこかのプロのデュエリストが使っているSJシリーズも

サイバー・シエネレーター

同じだが。

そんな事を考えていると、雅が動き出した。

「・・・私のターン、私はガスタの巫女 ウィンダを守備表示で召喚☆ガスタの巫女 ウィンダ・サイキック族・DEF400・風・
2・効果♡カードを3枚伏せて、ターンエンド」

守備を固めるつもりか、それにしても・・・あのウィンダと言うモンスターと雅、何か似ている。

「・・・どうしたの、あなたのターン」

「っと、俺のターン、俺はチューナーモンスター、イービス・スター・マジシャンを召喚☆イービス・スター・マジシャン・魔法使い族・ATK1400・光・4・チューナー♡」

「・・・チューナー、このターンでシンクロ召喚をするつもりね」
「・・・また、この竜を出す日が来るとはな。

「だが、それでもやってやるさ。レベル4のリミット・スター・マジシャンにレベル3のイービス・スター・マジシャンをチューニング 3 + 4 = 7」

イービス・スター・マジシャンの体が透明となり、その体から4つの星が浮き上がり、そのまま円を作り上げ、その円の中にミリット・スター・マジシャンが入り込んだ。

「戦火の轟音が響く時、黄金の竜は舞い降りる、光り輝く星にひれ伏せよ」

ミリット・スター・マジシャンもまた、半透明となり、その中の星が並列に並び、その中から黄金の竜が舞い降りた。

「シンクロ召喚、現れよ、ゴールド・スター・ドラゴン」

その竜は、全身が金で輝いており、背中には鳥のような羽、さらにはトゲトゲな指が特徴の、美しい竜だった。

「・・・ゴールド・スター・ドラゴン」

「これが、俺の剣、ゴールド・スター・ドラゴンだ☆ゴールド・スター・ドラゴン・ドラゴン族・ATK2000・光・7・シンクロ、効果♡バトル、ゴールド・スター・ドラゴンで、ガスタの巫女

ウインダを攻撃、このモンスターは攻撃力1900以下のモンスターと戦闘を行う時、攻撃力が半分となり1000となる、ダウン・ダウンへゴールド・スター・ドラゴン・ATK2000 1000

ゴールド・スター・ドラゴンの爪がバキバキと音を鳴らし、ウインダに向かって振り下ろした。

そのままウインダは破壊された。

「・・・っ、でも、ガスタの巫女 ウインダの効果発動、このモンスターが相手モンスターの攻撃によって破壊された場合、デッキからガスタと名の付くチューナー1体を特殊召喚できる、現れて、ガスタ・ガルドへガスタ・ガルド・鳥獣族・ATK500・風・3・チューナー」
チューナー！！シンクロ狙いか。

「そして畏発動、ガスタの道連れ連鎖、ガスタと名の付いたモンスターが戦闘により破壊され、墓地に送られた場合、デッキからガスタと名の付くモンスターを2体まで選択し、墓地に送るへガスタの道連れ連鎖・畏・効果、自分フィールド上に存在する「ガスタ」と名の付いたモンスターが相手モンスターの攻撃により破壊され、墓地に送られた時に発動する事ができる。デッキから「ガスタ」と名の付くモンスターを2体選択し、墓地に送る」その効果で、私はデッキのガスタ・イグルとガスタ・サンボルトを墓地へ送る」

「・・・どうやら次のターンでシンクロをするらしい。」

「俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド」
さあ、来るなら来い。

「・・・私のターン、私はガスタの静寂 カームを攻撃表示で召喚へガスタの静寂 カーム・サイキック族・ATK1700・風・

4・効果」

「・・・やはり何か違和感がある。カームも、何か雅と関係があるような感じがしてきた。」

「・・・どうしたの？」

「い．．いや、何でもない」

そうさ、今はデュエルだ。気を引き締めていかないと．．．
『多分、雅ちゃんの顔に見とれていたんだと思うよあ〜』

．．．．はい？

何か声が聞こえたような．．．気のせいか。

『あらあ〜どうしたの雅ちゃん。そんなに顔を赤くしてえ〜』

ま．．．まさか！！

見ると、カームが後ろを向いていた。

普通のデュエルではあり得ない話なのに．．．まさか

「精霊なのか」

精霊、それはごくわずかな、一握りのカードの中に宿っているカードの魂のようなものである。

精霊の宿ったカードを持つ者は、何かしらの災いが起きるとまで言われているが．．．まさかコイツも、そのカードを持っているとは

「お．．．お姉ちゃん、茶化さないで」

雅の顔がさらに赤くなっていた、見ているこっちまで赤くなりそう
だ。

．．．．ところで、さっきお姉ちゃんと言わなかったか。

『もう、茶化してなんかはいないよあ〜、ただ自分の妹をいじるのが楽しくてやっているだけだから』

「．．．自分の妹をそこまでいじって、何が楽しいの？」

『別にい〜ただかわいいから』

「！！お．．．お姉ちゃん、かわいいとか．．．言わない．．．の」
観客席から「何、あのかわいいの」の目線がビシビシ飛んできた。

うちのクラスは何故かお姉さま的な女子が多いからな、その人たちの同情の気迫が伝わってくる。

それにしても．．．妹？

「あの一、姉妹の会話中失礼ですが、あなた．．．精霊ですよね？」

『うん、精霊だよあ〜。そして雅ちゃんの姉でもあるけど、どうか

したのかなあ〜」

「……えーっと、悲しい過去を聞きますが、確か雅は……」
「あ、ああ、その事ね。私は生まれてすぐに亡くなった雅の姉でえ〜す。そして彼女の守護霊となっていましたら、いつの間にかカードの精霊となっていましたあ〜」

「軽っ、以外とシリアスなのに軽っ。何そのテンション、自分死んでいるのに何でそんな軽いテンションなんだよ」

「雅の少し暗い性格とは全く逆だ。もしかしたら父親の暴力がなかったら雅もこんなテンションに……」

「自分の過去を話す時には、少し明るい方が良いんだよあ〜。それならもつと暗い話をしてやろうかあ〜？ 雅ちゃんが受けた酷い仕打ちとか〜」

「重い、ノリが軽いのに何故か重い。何だこの妙なコラボレーションは、頭が混乱してきたわ」

「俺のツッコミが炸裂する、そしてカームの天然ボケが炸裂する。そんなどうでもいいような風景に、観客席からは爆笑の渦が……」

「って、今はデュエルの最中だった。さっさと始めるぞ、雅、カーム」

「やだあ、もう呼び捨て？ 馴れ馴れしいじゃない。いろいろな意味で〜」

「っ、ツッコんだら負けだ。」

「……お姉ちゃん、行くよ」

「もう、強引ね雅ちゃんは……でもそこが、また良いけど〜」
さてと、デュエル再会だ。

「……まず、ガスタの静寂 カームの効果発動。自分の墓地に存在するガスタと名の付くモンスター2体を選択してデッキに戻して、カードを1枚ドロウする事ができる。私はガスタの巫女 ウィンダとガスタ・イグルスをデッキへ、そのままデッキからカードを1枚ドロウする。そしてレベル4のガスタの静寂 カームにレベル

3のガスタ・ガルドをチューニング 4 + 3 = 7
シンクロ召喚の輪の中でカームは俺に向かって何故か微笑んでいた。まるで「妹を頼みます」と言いたそうな目で。

「・・・閃光の風が空間を裂く、ガスタの守護者よ、サイコ・パワーで全てを裂け。シンクロ召喚」

どでかい羽が姿を現した、そして本体が見える頃には、その見た目で圧倒されていた。

「風の羽、風の超能力者。ダイガスタ・イグルス、ダイガスタ・イグルス・サイキック族・ATK2600・風・7・シンクロ、効果」

巨大な胴体、巨大な鳥、そして背中には謎の人が乗っている。

これが・・・雅のエースモンスターなのか。

だが、ゴールド・スター・ドラゴンは、攻撃力2000以上のモンスターとの戦闘を行う場合、攻撃力が倍となる。

ただし、その効果による戦闘ダメージは0になるが・・・

「・・・そのまま戦闘をすることも思っただの？」

「・・・え？」

「・・・ゴールド・スター・ドラゴンのモンスター効果、このモンスターが攻撃力2000以上のモンスターと戦闘を行う時、ダメージステップ時に攻撃力は倍となり、2回攻撃が可能となる。ただし、それにより発生する戦闘ダメージは0、そして攻撃力1900以下と戦闘を行う場合、攻撃力は半分となる。つまり、破壊するにはカード効果が攻撃力1900以下のモンスターを使わなければならない。私がむやみやたらとシンクロモンスターをシンクロ召喚することも思っただの？」

「！！バれている、どうなっているんだ、このモンスターは会長からもらった、世界で数枚しか存在しないカードのハズ、それなのにどうして。」

「・・・行くよ、畏発動。レベルゲッターN04、このターンシンクロ素材として使用したレベル4のモンスターを墓地から特殊召喚

する。レベルゲッターNo.4・畏・効果、シンクロ召喚をしたターンにのみ発動する事ができる。このターン、シンクロ素材にしたレベル4のモンスター1体を選択して、墓地から特殊召喚する。その後、デッキからカードを3枚を墓地に送る。その効果により、私はレベル4のモンスター、ガスタの静寂 カームを墓地から特殊召喚。そしてデッキから3枚を墓地へ」

再びカームがフィールドに舞い戻りやがった。

マズいな、このまま攻撃されたら……

「バトル、カームで、ゴールド・スター・ドラゴンに攻撃、エアーフューン」

カームの周りに風が集まり、その風を操り、ゴールド・スター・ドラゴンへと方向を向かせ、そのままそれに巻き込まれたゴールド・スター・ドラゴンは、徐々に破壊させていた。

「……ゴールド・スター・ドラゴンの効果により、半分になる」

「クツ。ゴールド・スター・ドラゴン・ATK2000 1000」

そのまま、普通に破壊された。

「……っ」HP4000 3300」

「……そしてバトル、ダイガスタ・イグルスで、遊画にダイレクタアタック。エアーストーム」

ダイガスタ・イグルスの羽がはばいたと思った瞬間、それがカマイタチの風となり、遊画を襲った。

「っ、やられるか。畏発動、デイメンション・ウォール。この戦闘により受けるダメージを相手に跳ね返す。デイメンション・ウォール・畏・効果、相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。この戦闘によって自分が受ける戦闘ダメージは、かわりに相手を受ける。これにより雅、お前に2600ポイントのダメージを受けてもらう」

これで少しは差が開くな……などと油断していた。

「……っ、やっぱり、そのまま勝たせる気は無さそうね。カウンタ

「罨発動、ブローニング・パワー。自分フィールド上に存在するサイキック族モンスター1体をリリースする事により、相手が発動した魔法、罨カードの発動、モンスターの召喚、特殊召喚を無効にし、破壊する。罨ブローニング・パワー・カウンター罨・効果、自分フィールド上に存在するサイキック族モンスター1体をリリースして発動する。魔法、罨カードの発動、モンスターの召喚、特殊召喚のどれか1つを無効にし、破壊する。それにより、あなたのディメンション・ウォールの効果を、カームをリリースして無効にし、破壊する。」

カームが再び消え、そのまま周りに残った風が、発動させたディメンション・ウォールを破壊させた。

「んな、バカな・・・」

無論、そのままイグルスの発生させた風は、そのまま俺に突き当たった。

「うあああああつ、こんな事で」LP3300 700」

「・・・ターンエンド」

やるな、だが次のターンで。

「・・・でもその前に、ダイガスタ・イグルスの効果により、エンドフェイズに相手がセットしているカード1枚を破壊する」

セットしているカードを・・・カードは2枚、その中でのカードが破壊されたら・・・。

「・・・右のカードを破壊する」

！！

右のカード、それはリビングデットの呼び声だった。

「・・・俺のターン」

そう、このまま終わるのか、そう考えてしまった。

そうだよな、俺を誰だと思っている。あの負けっぱなしの遊画だぞ、そんな俺が希望なんて持っていないハズが。

「・・・諦めるの？」

「・・・」

諦めるしか無いだろ、俺は元々負け組だ。奇跡が起きても、所詮は・
・
・

「・・・バカ、だからあなたは」

「・・・え？」

そう思った瞬間、雅はデュエルの最中にも関わらず、俺の方に走ってきた。

そして思いつ切り、ビンタをした。

バチン・・・そんな音が、デュエルリングに響いた。

俺はその衝撃で床に倒れた。

「・・・つ、何をする、雅」

起きあがるうとした瞬間、雅が上に乗ってきた。

「諦める・・・それだから負け犬と思ってしまうのよ。何故諦めるの、何故自分を信じないの、何故、デッキを・・・カードを信じないの。だからあなたは弱いだよ。もっとカードを信じて、もっと仲間を信じて、もっと・・・対戦相手の心を感じて、そしてもっと強くなって、あなたはもっと強くなれるハズよ、だから・・・諦めないで、戦って・・・強くなりなさい」

その言葉に、俺は心を揺さぶられた。

いつも諦めていた、いつも負けていたから、負けて当然だと最近思い始めたから・・・俺は、デッキを信じ切れていなかった。それが、俺に足りない事だった。

信じる気持ち、それを忘れていて何がデュエリストだ、何がヴァルハナだ、何が俺は勝つだ、信じているからこそ、デュエルは勝つ物だと何故今まで気づかなかった。

それは、自分の気持ちに負けていたからだ。

「・・・そう、自分の気持ちに負けていたから・・・俺は、何も信じ切れなかった。チーム・サテイスフアクションでもそうだ、あの時は信じる気持ちよりも、勝つ事に執念を燃やしていたからな・・・だが」

俺は、雅の頭を優しく抱いて上げた。

「すまなかった、雅。お前が対戦相手なのに、不快な気持ちにさせてしまった、思い出せば俺は何も信じていなかった。仲間も、カードも、そして、自分自身も・・・それが、俺にとつてどれだけきつい目に合わせているかなんて、考えた事が無かった。だが今なら分かる、信じる気持ち、あの時遊星が言った言葉、今なら本当の意味で分かってきた。だから安心しろ、俺はお前を裏切らないデュエルをやる、だから・・・」

「・・・遊画」

雅の目から少し涙が溢れていた。

「・・・そんな中で言うのも何だけど。

「・・・降りてくれ、重いから」

全てをぶち壊した気がした。

観客席からは冷ややかな視線が飛んできた。

見ていた新和は「・・・遊画、もう少し空気読め」と言っていた。

沙耶は「・・・デリカシーと言う言葉が無いのね、遊画には」と、呟いていた。

そして雅はと言うと・・・

「・・・」
「・・・」
「・・・」
「・・・」

完全に天敵を見るような目つきとなっていた。

「・・・私は・・・53キロだ」

思いつ切り弱点を肘打ちされた。

「・・・!!!」

あまりの痛さに、俺は絶句した。

しかも観客席からは「53キロ!!軽っ、羨ましい」と聞こえてきた。

しかしどうでもいいが、やけにリアルダイレクトアタックを喰らわせられた気がするの、何でかな。

「・・・あなたは絶対倒す。そのふざけた頭をぶちどめすために」

ヤバイ、これはピンチだ、絶体絶命のピンチだ。

「……あなたのターン、早くして」

雅は怒りのオーラをまといながら戻っていった。

「って、俺のターンだった、俺のターン」

デッキを信じる、痛みに耐えながらそう考えた。

答えてくれ、俺のデッキ、信じる心は……

俺は、カードを引いた。

「いつも一つ」

来てくれ、このピンチに……俺はお前に謝らなければならない。

このスター・マジシャンデッキにお前を封印していた。

俺は自分の黒歴史を封印するためにこのデッキごとお前を封印して
いたんだ。

だから、俺はお前を信じきれていなかったんだ。

だから俺は、これからお前を封印する事はしない。

……いや、封じ込めてたまるか……こんな言い訳ばかりして
悪いと思っている。

どんなに酷い仕打ちをしたっていい、だから

「来てくれ、クリボー」

引いたカードを見た。

「……ごめんな、俺はお前を」

その瞬間、俺の目の前に1匹の精霊が姿を現した。

見た目は毛むくじやらな、真ん丸い姿で、剣と盾を装備して、小さな鎧に身を包んだ、その精霊の名は。

「……クリボーナイト、お前」

どうして俺の目の前に姿を現したのか、そんな事はどうでもいい。

『クリクリクリ』

クリボーは、何か懐かしい目をしていた。

気持ちを共用しているかのように……

「……フツ、また一緒に戦ってくれるか」

その答えは、もちろんオツケーだった。

急に笑顔になり『クリクリクリ』とはしゃぎだしたのだから、オツケーなのであるう。

「……その精霊は」

雅もその姿に気づいたのか、クリボーの存在を確かめていた。

「これが、俺の最後の切り札だ。俺はそのままターンを終了する」
観客席からザワツとした。

そりゃそうであろう、あれだけ言われたのに、何もしいままにターンを終了したのであるのだから。

「……バカにしているの、それならこれで終わらせる。私のターン、バトル、ダイガスタ・イグルスでプレイヤーにダイレクトアタック。エアーストーム」

再びイグルスの羽がはばたき、それがカマイタチとなり遊画を襲った、瞬間だった。

「俺は信じていた。都合の良いように来ると信じていた。お前が信じると言ったから信じた。だから、そう簡単にくたばってたまるか。手札に存在するクリボーナイトの効果発動、自分フィールド上にもンスターが存在しない時、ダイレクトアタックを宣言された時に手札に存在するこのカードをゲームから除外する事により、バトルフェイズを終了させる」

クリボーナイトが、そのカマイタチの風に向かって盾をかざし、遊画を守って見せた。

「……!!」

「そして畏発動、異次元からの墓場、このターン手札、またはフィールドからゲームから除外されたモンスター1体を選択して、そのモンスターを墓地に送る事により、デッキからカードを1枚ドロースする。異次元からの墓場・畏・効果、このターン、自分の手札、またはフィールド上からゲームから除外されたモンスター1体を選択して発動する。そのモンスターを墓地に送り、デッキからカードを1枚ドロースする。それにより、クリボーナイトを墓地へ送り、デッキからカードを1枚ドロース」

「……よし、来たか。」

「……フツ、やればできるじゃない」

雅は、俺に向かってフツと微笑んでいた。

「……まあな、ってかお前、さっきまで」

「ただし重いと云った事は後で後悔させるけど、カードを1枚伏せて、ターンエンド」

ああ、今日も痛い目に合うのか。

「……俺の、ターン」

結果として、あとで殴られるハメになるけど。

「痛そうだなー……雅、許してもらえないか」

「……無理、あなたにもっとデレカシーを知ってもらっために」

デレカシー？

何だそれ、食えるのか？

「……絶対に意味を分かっていないでしょう」

威張って言えるほどに分かっていません。

「デレカシー、何それ、お菓子の一種なのか？」

「……あなたのターン」

ああ、余計に怒らせてしまった。

「……俺は手札から吸血な壺を発動。自分のライフポイントが1500以下の時、ライフを半分払う事によりデッキからカードを2枚ドローする。吸血な壺・魔法・効果、自分のライフポイントが1500以下の時にのみ発動する事ができる。ライフポイントを半分払い、デッキからカードを2枚ドローしてLP700-350」

手札は5枚、そしてその中の一枚は……

「俺はチューナーモンスター、ツイン・シンクロンを召喚してツイン・シンクロン・戦士族・ATK1600・地・4・チューナーとしてこのモンスターの召喚に成功した事により、墓地に眠る、リミット・スター・マジシャンを特殊召喚」

墓地より、リミット・スター・マジシャンが復活した。これで準備は整った。

「レベル3のリミット・スター・マジシャンにレベル4のツイン・シンクロンをチューニング 3 + 4 = 7 新たな可能性よ、この戦いに終止符を打つべく降臨せよ。シンクロ召喚、切り刻め、ツイン・ウォーリア・ハッイン・ウォーリア・戦士族・ATK2300・地・7・シンクロ、効果」

剣と盾を持った戦士が再び、この場に降臨した。

「・・・でも、ツイン・ウォーリアの方が攻撃力は低い・・・でも、効果で600ポイントアップする」

「そうだ、ツイン・ウォーリアの効果発動、このモンスターが攻撃する時、攻撃力が600ポイントアップする。そのままダイガスタ・イグルスを攻撃、ツイン・ソード・ハッイン・ウォーリア・ATK2300 2900」

ツイン・ウォーリアが走り出し、そして高く飛び上がり、ダイガスタ・イグルスを一刀両断で切った。

「・・・っ」HP4000 3700

「バトルが終了したと同時に、ツイン・ウォーリアの攻撃力は2300に戻る。ハッイン・ウォーリア・ATK2900 2300。カードを1枚伏せて、ターンエンド」

いいぞ、この調子で。

「・・・私のターン、私は畏れカード、風の満ちる夜を発動、自分の墓地に存在するレベル4以下の風属性モンスターを2体まで選択して、特殊召喚する。風の満ちる夜・永続畏れ・効果、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合にのみ発動する事ができる。自分の墓地に存在するレベル4以下の風属性モンスターを2体選択して表側守備表示で特殊召喚する。このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。そのモンスターが破壊された時、このカードを破壊する。また、この効果により特殊召喚したモンスターは発動ターン、シンクロ素材にする事ができない」

の効果により、墓地に存在するレベル4以下のモンスター、ガスタ・サンボルトと、ガスタ・イグルを特殊召喚。ガスタ・サンボルト・雷族・DEF1200・風・星4・効果。ガスタ・イグル・鳥獣族・DEF400・風・星1・チューナー。ガスタ・イグル！さつきカームの効果でデッキに戻ったハズなのに……

「……レベルゲッターNo4の効果により、デッキから墓地に送られた」

さっきのアレか……。

「……ターンエンド」

壁を作ったか。それならば……

「俺のターン、魔法カード、禁じられた強薬を発動。このターンのエンドフェイズまで、自分フィールド上に存在するモンスター1体の攻撃力を400ポイント下げ、効果を無効にする。ただし、選択したモンスターは2回攻撃ができ、守備力が攻撃力を超えていれば貫通ダメージを与える。禁じられた強薬・速攻魔法・効果、自分フィールド上に存在するモンスター1体を選択して発動する。このターンのエンドフェイズまで、そのモンスターの攻撃力は400歩ポイント下がり、効果は無効化される。また、そのモンスターはこのターン2回の攻撃が可能となり、守備力が攻撃力を超えていれば、その数値分だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。それにより、ツイン・ウォーリアの攻撃力は1900となり、効果は無効となる。ツイン・ウォーリア・ATK2300 1900。バトル、ツイン・ウォーリアで、2体のモンスターに攻撃、ツイン・ソード・ダブル」

ツイン・ウォーリアの剣の一振りで、2体のモンスターがあつと言う間に切り裂かれた。

「……っ」HP3700 1500

もう少しだ、もう少しで……

「……うっかりさん」

「・・・ウソだろ、雅のヤツ、まだ笑っていやがる。」

「・・・私にダメージを与えるのに頭がいつぱいになっていたようね。でもそれが悲劇に繋がるのよ。まずは破壊されたガスタ・サンボルトの効果発動、このモンスターが戦闘により破壊された時、自分の墓地に存在するガスタと名の付くモンスター1体をゲームから除外する事により、デッキから守備力1500以下のサイキック族モンスター1体を特殊召喚する」

「それがどうした・・・またシンクロか」

「・・・私はダイガスタ・イグルスを墓地より除外、そしてデッキより現れて、ガスタの賢者 ウィンダール」

その時、再び雅のフィールドにモンスターが現れた。

見た目は文句がないほどの青年で、やはり何かしら雅に類似点がある・・・人だった。

「・・・それは、お前の兄か」

「・・・お見事」

当たった、けど何故か嬉しくない。

『・・・流石に』

「・・・ん、何か言ったか。」

『流石にダイガスタ・イグルスを倒された時にはヒヤリとしたが、公栄 遊画、お前はよく頑張った。だが、このターンで、お前はデュエルに敗北する』

敗北・・・上等だ。

「面白い、だったら見せてもらおうじゃないか。雅、お前の戦術を」

「・・・お兄ちゃんってば、余計な事を言わないで」

『・・・ツフフ、相変わらず表情を隠そうとするな、我が妹よ』

「・・・隠してなんか、いないもん」

『・・・遊画に対して、何かの感情を抱いているのだろう。だからお前の戦術を見て欲しかった・・・違うのか』

「・・・お、お兄ちゃん。お姉ちゃんと同じように茶化さないで」

ああ、ほのぼの風景だ。まさかこんなところで兄妹漫才を見れると

は……。

「……ところで、兄といい、姉といい、コイツって……ブラコン、それともシスコン？」

「……遊画、さっき何か変な事を考えなかった」

「い、いや、別に」

『さあ、お兄ちゃん大好きと言ってみなさい』

「……お兄ちゃんなんて、大っ嫌い」

あ、その言葉は辛い。

『……さてと、本気を出すぞウイ……雅』

「何だ、何か苦しかったのか、ウツつと声を出すほどに」

「……危ない」

雅が何かを呟いたが、それはほつとく事にした。

「さて、続き。ガスタ・イグルが戦闘によって破壊された場合、デツキからチユナー以外のレベル4以下のガスタと名の付くモンスター1体を特殊召喚できる。現れて、ガスタの巫女 ウィンダ」

ウィンダが再び召喚されたか……以外とマズイな。
このターンで効果は切れて、攻撃力は2300に戻る、だが雅の事だ、何か仕掛けて来るハズだ……楽しみだ、お前が俺にデュエルの何かを教えてもらった。だから今度は俺が、お前に逆転の凄さを見せてやるぜ。

「俺はターンエンド、そしてツイン・ウォーリアの攻撃力は元に戻る
ハツイン・ウォーリア・ATK1900 230さあ見せてもら
うぜ、お前の実力を」

「……ええ、覚悟しなさい、遊画」

続く

次回予告

ついに雅は、切り札である風属性高レベルシンクロモンスター、ウインド・サイキックドラゴンを召喚した。

俺に残された希望は、一枚のドローカード。デッキを信じて・・・仲間を信じて、俺は負けられない。

次回、遊戯 *W Fate* 第4話「シンクロ召喚、運命をはばたけ、エンドレス・ドラゴン」

これが、俺の絆だ。

次回のキーカード

ウインド・サイキックドラゴン・サイキック族・ATK3000・
風・9・シンクロ、効果

第3話「風を操る守護者 ダイガスタ・イグルス」(後書き)

さて、次に行くか。

第4話「シンクロナ召喚、運命をはばたけ、エンドレス・ドラゴン」(前書き)

続き

第4話「シンクロ召喚、運命をはばたけ、エンドレス・ドラゴン」

デュエルアカデミア、アーカイト校 地下6階

コツ、コツ、コツ、コツ、足音が周りに響いていた。

「・・・これが、死神の石版」

「ああ、奴らが狙っている3枚の石版、Death・Grim Reaper Freshkigal、Death・Grim Reaper Nergal、Death・Grim Reaper Namtal」

そこには3つの小さな石版が、まるで何かに封印されているかのような感じで壁に埋め込まれていた。

「・・・かつて、デュエルアカデミアに存在していた死神のカードと呼ばれたカードが存在していたが、それとの関係は」

「分からない、だがこれだけは言える事だ、この石版は強力すぎる。近くにいっても禍々しい雰囲気を感じ取れる。そして憎悪を超えた何か・・・」

「・・・伝説によれば約五千年前、かつて自縛神と呼ばれたモンスターが現れ、赤き竜がそれを地上絵に封印した瞬間、この3体の死神が現れ、世界を破滅に追いやった。するとその時、とある竜が姿を現し、その3体の死神を石版に封じ込めたと言われている」

「その竜の名前は」

「・・・不明だ、だが・・・その見た目の美しさから、その竜はこう言われている」

「・・・」

「・・・ゴッド・ザ・ワールド・ドラゴン、またの名を神世界の竜と。そして、彼もまた、神世界の竜に選ばれた人間の一人」

「俺の息子に何をやらせる気だ、アーカイト校 校長、等双じふた 二郎じろう」

「・・・何も、ただ世界を救って欲しいのだよ。公栄こうえい 真しん」

第4話「シンクロ召喚、運命をはばたけ、エンドレスドラゴン」

デュエルは最終局面を迎えようとしていた。
恐らくこのターン、俺が生き残れるかで勝負は付く。

「……私のターン、バトル、ガスタの賢者 ウィンダールで、ツイン・ウォーリアを攻撃、フォース・ウィンド!!!」

「!!!な……ツイン・ウォーリアの方が攻撃力が上だぞ! ツイン・ウォーリア・ATK2300」
「ガスタの賢者 ウィンダール・ATK2000」

そのまま、ウィンダールはツイン・ウォーリアに攻撃を仕掛けた。
杖から風の魔術を解き放ち、無論、ツイン・ウォーリアがそれをはじき返した……かと思えた。

「……その瞬間、手札に存在する風の守り神・トルバードの効果発動、自分フィールド上に存在する風属性モンスターがそのモンスターよりも攻撃力が高いモンスターと戦闘を行う時、このカードを手札から墓地に送る事により、戦闘を行う風属性モンスターの攻撃力は、戦闘を行う相手モンスターの攻撃力+100となる」

「んなに」

「よって、ウィンダールの攻撃力は、ツイン・ウォーリアの攻撃力のプラス100の数値となり、2400となる! ガスタの賢者 ウィンダール・ATK2000 2400」

はじき返した瞬間、トルバードの幻影により、さらに強さを増した風の魔術によつて発生した竜巻に巻き込まれた。

「……」
「LP350 250」

「……そして、ガスタの賢者 ウィンダールの効果により、墓地に存在するガスタ・イグルを特殊召喚! ガスタ・イグル・鳥獣族・DEF400・風・星1・チューナー」
「レベル6のガスタの賢者 ウィンダールにレベル2のガスタの巫女 ウィンダ、そしてレベル1のガスタ・イグルをチューニング 6+ 2+ 1= 9 世

界に悲しみの風が吹き荒れる、憎しみと悲しみをその胸に刻み、その竜は姿を現す。シンクロ召喚、裁きを下せ、ウィンド・サイキックドラゴン」

フィールドに嵐が吹いた。

今まで感じたことのない風量、これがソリットビジョンかと思えるぐらいの風の中、その竜は姿を現した。

頭から足まで風に包まれ、本体はその風に包まれているため見えず、さらに背中にはその本体の体の一部と思える触角がある、とても生き物とは思えないドラゴンであった。

「こ……これは」

「……これが私のエース、ウィンド・サイキックドラゴン、ウィンド・サイキックドラゴン・サイキック族・ATK3000・風・

9・シンクロ、効果「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

どうやらこのターンは動かないようだ。

「ならば、俺のターン、俺は魔法カード、入れ墨の刻印を発動。相手フィールド上にレベル7以上のモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、自分は相手フィールドの全てのモンスターのレベルにつき300ポイント回復する、入れ墨の刻印・魔法・効果、相手フィールド上にレベル7以上のモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合にのみ発動する事ができる。自分は相手フィールド上に存在する全てのモンスターのレベル1につき300ライフポイント回復する」よって、俺はお前のフィールド上に存在するモンスターは1体、そしてそのレベルは9。よって2700ポイント回復する」HP250

2950」

「……あの状態から回復するとは、やる」

さてと、残る手札はあと2枚、これでどう出るか。

「俺はガード・スター・マジシャンを守備表示で召喚、ガード・スター・マジシャン・魔法使い族・DEF2000・光・4・効果「このモンスターは1度だけ戦闘では破壊されない。ターンエンド」

さて、これではらくは……。

「……私のターン、バトル、ウィンド・サイキックドラゴンでガード・スター・マジシャンを攻撃」

んな……。

「サイコ トルネード」

ウィンド・サイキックドラゴンの体にまわりついていた風が1つに集中し始め、その風が、まるで嵐のように吹き荒れてきた。

「だがこのモンスターの効果により、1ターンに1度だけ戦闘では破壊されない」

だが、それを知って攻撃してきやがった。何かやな予感がするぜ。
「……知ってる、知っているのに攻撃するだけのバカだと思ったの？」

だよな、コイツはそんなバカではない。

「……ウィンド・サイキックドラゴンのモンスター効果発動。サイコ・ガードチェンジ。このモンスターが守備表示モンスターを攻撃する時、墓地に存在するガスタと名の付くモンスター2体をデッキに戻す事により、そのモンスターの守備表示を攻撃表示に変更する。私は墓地に存在するカームとウィンダールをデッキへ」

つまり、コイツの守備表示を強制的に変化させるのか!!それはマズイ。

「攻撃表示へ(ガード・スター・マジシャン・DEF2000 A TK100)」

っ、このままでは。

「そして、攻撃。攻撃力2800のダメージを喰らいなさい」
吹き荒れた嵐が竜巻を発生させ、その竜巻にガード・スター・マジシャンは巻き込まれ、いなくなった。

「このまま終わる俺ではない。畏発動、ガード・ブロック。このターン自分が受ける戦闘ダメージは0になり、デッキからカードを1枚ドローする(ガード・ブロック・畏・効果、相手ターンの戦闘ダメージ計算時に発動する事ができる。その戦闘によって発生する自

分への戦闘ダメージは0になり、自分のデッキからカードを1枚ドロローする。そしてデッキからカードを1枚ドロロー」

・・・何とか助かった。これで何とか・・・。

「ウインド・サイキックドラゴンのモンスター効果により、この効果により攻撃表示にしたモンスターを破壊し、相手にそのモンスターの攻撃力の半分のダメージを与える」

ガード・スター・マジシャンの攻撃力は100、つまり50の効果ダメージ、これが攻撃力2000などのモンスターだったら危ないところだった。

「・・・っ」LP 2950 2900

「私はターンエンド」

「俺の・・・ターン、ってこれは」

・・・俺のカードは、捨て身でも勝てと言っているようだ。

「カードを2枚伏せて、アップ・スター・マジシャンを召喚。アップ・スター・マジシャン・魔法使い族・ATK1000・光・3・効果。ターンエンド」

「・・・打つ手無し。私のターン、悪いけど、行かせてもらう。」

魔法発動、破壊の守り神」

・・・それは。なるほど、どうやら雅は破壊系の罫カードを警戒しているようだ。

「このカードの効果により、自分フィールド上に存在するモンスターは、次の自分のスタンバイフェイズまで、カード効果によって破壊されず、除外する事もできない。破壊の守り神・魔法・効果、メインフェイズ1の開始時に発動する事ができる。次の自分のターンのスタンバイフェイズ時まで、自分フィールド上に存在するモンスターはカード効果では破壊されず、相手効果によって除外されない。」

「・・・ここで終わりにするつもりだろう。」

「・・・バトル、ウインド・サイキックドラゴンでアップ・スター・マジシャンを攻撃、サイコトルネード」

再び風が嵐になり、そこから竜巻が発生し、その竜巻がアップ・スター・マジシャンを襲ってきた。

「・・・だが、ここで終わらせる俺ではない、罠発動、ミラージユ・ミラージユ。自分フィールド上にモンスターが存在する時に発動できる罠カード、この効果により、このターンの攻撃を全てプレイヤーへのダイレクトアタックとなる」

「・・・なにつ!!」
竜巻は急に方向を変え、俺の方にまっしぐらに突撃してきた。

「ぐあああああああ」
「LP2900 0」

「・・・待つて、これじゃあなたは自滅になる」

『バカか霊能、コイツがそんなへマをするようなヤツだと思っつか』

「・・・え」

そうだ、一見普通に見るとただの自滅だが、この罠カードにはもう1つ効果がある。

「そしてミラージユ・ミラージユの効果により、このカードの効果によりダイレクトアタックに成功してライフが0になる場合、デッキからカードを2枚ドローして、ライフを1にする。そしてバトルフェイズを終了させる」
「ミラージユ・ミラージユ・罠・効果、このカードを発動したターン、相手モンスターからの攻撃は、全てプレイヤーへのダイレクトアタックとなる。この効果によりダイレクトアタックが成功した時、そのバトルフェイズを終了させる。この効果により自分のライフポイントが0になる場合、デッキからカードを2枚ドローし、ライフポイントを1にする」
「それにより、デッキからカードを2枚ドローし、ライフを1に」
「LP0 1」
「・・・しぶとい。私はターンエンド」
「これほどのしぶとさが無ければ、生きていけないんでね。」

「俺の・・・ターン」

このターン、良いカードが来なければ実質負けとなる。

だが、俺のカードはそんな事は無い。

答える、俺の・・・運命を。

「ドロー」

運命を信じて、最後のターンだ。

「……来た。このモンスターは自分の手札を2枚墓地に送る事により、特殊召喚できる。俺は手札の転生の予言と時の魔術師を墓地へ。そして現れよ、セブン・スター・マジシャンへセブン・スター・マジシャン・魔法使い族・ATK2200・光・7・効果」

輪が現れ、その中から1人の魔術師が姿を現した。

「……これが、最後のあがき」

「そうとも言えるな、だが本番はここからだ。墓地に存在するクリボーナイトの墓地での効果を発動。このモンスターは墓地に存在する場合、自分フィールド上にチューナーモンスターが存在しない場合に、墓地から特殊召喚する事ができる。現れよ、クリボーナイトへクリボーナイト・悪魔族・ATK200・闇・1・チューナー」

勢いよく、クリボーナイトは出てきた。

『クリクリー』

まるで、これで勝利すると言わんばかりに。

「……でも、ウインド・サイキックドラゴンの方が攻撃力は上、それをどうやって」

「……確かにこのままでは俺の負けで終わる。だが、仲間との絆がある限り、奇跡を起こす事ができるんだ。それをお前に見せてやるぜ、レベル7のセブン・スター・マジシャンにレベル1のクリボーナイトをチューニング 7 + 1 = 8」

「……!! ね、レベル8のシンクロモンスター、そんな物を持っていなかったハズ」

クリボーナイトが透明になり、そのまま中の星が輪を作り、セブン・スター・マジシャンを覆い尽くした。

「迷えし星の運命が、無限の道を作り出す歯車となる、終わり無き運命を作り出せ」

その光が輝き出してきた。

「シンクロ召喚、運命をはばたけ、エンドレス・ドラゴン」
その時、会場がざわめいた。

その見た目は、まるで舞い降りた天使のような美しさである。背中の翼はインフィニット状の翼となっており、頭の部分は、後頭部に何かのアンテナがあり、そして腕には長い爪が剣状に整えてある、さらに体の色は黄緑であり、それが更なる美を作り出していた。

「うっ…美しい」

誰もがそう思った。

「……な、何なの、そのモンスターは」

「これが、俺の切り札、エンドレス・ドラゴンだ」
「エンドレス・ドラゴン族・ATK2500・地・8・シンクロ、効果」

「……でも、ウィンド・サイキックドラゴンの方が攻撃力は上、それをどうやって」

「どうやってかって？それは、こうやってだ。まずはアップ・スター・マジシャンの効果発動。このモンスターがフィールド上に存在する時に、自分が魔法使い族、またはドラゴン族のシンクロ召喚に成功した時、そのモンスターのレベル×の100ポイント回復する。エンドレスドラゴンのレベルは8、よって800ポイント回復する」

「LP1 801」

「……それがどうしたの？それでも……」

「さらにアップ・スター・マジシャンの効果がもう1つ残っている。このモンスターをリリースする事により、自分フィールド上に存在する魔法使い族、またはドラゴン族モンスター1体の攻撃力は、エンドフェイズまで900ポイントアップする、よって、エンドレス・ドラゴンの攻撃力は900ポイントアップして、3400となる」
「エンドレス・ドラゴン・ATK2500 3400」

「……」

「……伏せカードが1枚、ちよつと気になる所だが、行くか。」

「バトル、エンドレス・ドラゴンで、ウィンド・サイキックドラゴンを攻撃、パラディン・クロー」

エンドレス・ドラゴンの爪が剣状になり、ウィンド・サイキックドラゴンへと飛来していった。

「……っ、その瞬間、畏発動、万能地雷グレイモヤ、相手フィールド上に存在する攻撃力の一番高いモンスター1体を破壊する。万能地雷グレイモヤ・畏・効果、相手が攻撃を宣言した時に発動する事ができる。相手攻撃表示モンスターの中から一番攻撃力が高いモンスター1体を破壊する。それにより、エンドレス・ドラゴンは破壊される」

突然現れた爆風が、エンドレス・ドラゴンを覆い尽くした。

「……これで、勝った」

そう、勝ち誇っている雅を見て、俺は笑いが止まらなかった。

「な……何がうれしい」

「何って、アレを見るよ」

そう、エンドレス・ドラゴンには、魔法、畏、効果モンスターの効果は一度だけ効かない効果を持っていた。

「……！！い、生きている」

爆風の中、エンドレス・ドラゴンはその爆風の中を何もなかったかのように飛んでいた。

「エンドレス・ドラゴンのモンスター効果、それは相手が魔法、畏、効果モンスターの効果を発動した時、手札を1枚墓地に送るか300ライフを払う事により、このモンスターはその効果を受けない」

「……そ、そんな」

「俺はライフを300払い、エンドレス・ドラゴン、お前を守ってみせるぜ。インフィニット・マスターガード」HP801 501

そのままエンドレス・ドラゴンは、ウィンド・サイキックドラゴンに向かって急降下していった。

「そしてさらに畏発動、インフェルニティ・デスソウル、手札が0

枚の時に発動できる永続罫だ。この効果により、戦闘により破壊した相手モンスターの攻撃力の半分のダメージを雅、お前に与える。インフェルニティ・デスソウル・永続罫・効果、手札が0枚の場合、自分フィールド上に存在するモンスターが戦闘により相手モンスターを破壊した時、その破壊したモンスターの攻撃力の半分のダメージを相手プレイヤーに与える。」

「こ……これって」

そう、勝負は決まったのだ。

エンドレス・ドラゴンの指がウィンド・サイキックドラゴンを突き刺し、その貫通した指先、いや刃先が、雅の胸に直撃した。

「……っ」LP1500 1100」

「そして、インフェニティ・デスソウルの効果により、1500ポイントのダメージを与える。雅、これが俺の戦い方だ」

カードから強力な電磁波が発生し、それもまた雅に直撃した。

「……負けた、でも何なの、この快感は……そっか、これが遊画の……」LP1100 0」

……あの時以来に勝った。

「……そっか、俺の負けっぱなしの原因は、お前らが俺を使ってくれと言っていたからか。気づいてなくてすまなかったな」

『……勝ったな遊画。っと、勝者は公栄 遊画だ。なかなか熱いデュエルだったぞ』

勝った、自分でもそう感じられない事だってある。今回だって、雅の説得によって勝ったような物なのだから……。

「……遊画」

「……何だ、雅」

「……その、楽しかった。こんなデュエルは初めてだった、だから」

「だから？」

「ちよっと校舎の裏まで来て」

「……」

「・・・返事は」

「イエッサー」

今日もまた、生傷が絶えなさそうだ。

俺は、雅の言う通りにアカデミアの校舎の裏に来た。

そこには、何か不思議な雰囲気を出している少女、雅が少し不機嫌そうに俺を見下していた。

「・・・あの時、重いと言った」

「・・・言っただな、俺が」

「・・・あなたは力が強いハズだよね、なのに私を重いと言った。それは女性に対して失礼だと思う」

「そうか、それはすまなかった」

「・・・やっぱりあなたは男としての何かを目覚めさせる必要があるみたいね。あの人と言っただけに」

「・・・あの人？」

「あの人と言っと、お前に俺の性格の改ざんを要求した人の事か？」

「・・・そう、元々はあなたのその性格を治してと言われたけど、私はその気じゃ無かった。でも昨日、私の過去をあなたにも真面目に接してくれて、尚かつ私の痛みをあなたの体で和らげてくれた。

でも、女性に対しての態度がまだ不十分、これじゃいけないと私は思った。だから・・・」

そう言っと、雅は自分の制服の胸元を思いっ切り開け・・・って

「な・・・何をやっている雅、そんな事をして、一体何になるんだ」

「・・・わ・・・私の体で、男を見せなさい」

思いっ切り赤顔している。本人も相当恥ずかしいんだろうな。

「・・・それはしない」

「・・・え？」

そんな事出来る訳ないだろ。だって……

「だってお前、男嫌いなんだろ。そんな無理をして俺に恩返しをしようとするな。それに、お前の心の傷はまだ収まっていないだろ。」

お前が無理をして再び心の傷が悪化したら、それこそ俺は余計に女性への感情が無くなってしまふ。だから、そんな無理して恩を返そうとするな」

「……………」

雅は制服の胸元を閉めると、ボソリと何かを言った。

「無理していいのに、遊画のバカ」

何と言ったかは聞こえていないが、何か批判されたような気がした。

「……………」

雅は俺に向かって歩いてくると、俺の顔の目の前まで顔を寄せた。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

俺は奈落の底へと落ちていった。

「うああああああああああああああああ」

「・・・遊画、ゆうが」

そんな雅の声が聞こえ、そのまま意識を失った。

「もうすぐだ、もうすぐナスカ様の言っていた力が・・・手に入る」

気がついたのは、それから5分後の事だった。

「・・・ってー、どうやら軽く打ったぐらいで体にこれとした痛みはなさそうだ」

それにしても、ここは一体どこだ。こんな所、アカデミアには無かったハズなのに・・・。

「・・・迷っていても仕方ないか。歩いて出口を探すか」
そう言うと俺は、出口を見つげるために辺りを歩き出した。

しばらくして、俺は大広間らしき場所に到着した。

そこは、何か不自然な場所だった。何故ならそこだけ明るく、まるで何かの粒子が宙を舞っているように輝いている丸く、小さな物体が辺りを漂っていた。

「ここは・・・」

すると、その奥に壁があった。しかもよく見ると、何かが書かれてあった。

「……何だ、一体何が書かれてあるんだ」

そう思い、俺はその壁に書かれてある物を見つめた。

そこには、何か得体の知れない生き物と、竜のような生き物が戦っている絵と、何かの文字が書かれてあった。

「……この絵、ここは何かの遺跡なのか」

そう思い、俺は自然にその絵に触れてしまった。

その時、俺の体に痛みが走った。

いや、正式に言うくと、何故か右目が痛くなった。

「……！！グアッ」

右目に何か変な激痛が走り、俺は右目を押さえた。

何だ、一体何が起きているんだ。

おまけに手の平には例の変な紋章が浮かんでいた。

「……っ、何が起きているんだ、一体何が」

その時、俺の右目に謎の景色が映し出された。

そこは、焼け野原と化していた。

理由は分からない、だがその原因は分かるかもしれない。

何故なら、目の前には謎の3体の巨人と、6体の竜が睨み合っていたのだから。

しかもその中の1体は……。

「え、エンドレスドラゴン？」

そう、俺のエースモンスター、エンドレス・ドラゴンがその6体の竜の中に混じっていたのであった。

他にも、沙耶が持っている沙耶のエースモンスター、ブリザード・クイーン・ドラゴン、そして見たこともない、全身から粒子を出し

ている竜、まるで溶岩のような体をしている竜、そして体から電磁波を発生させている竜と、これまで見たことのあるモンスターから見たことのないモンスターまで集結していた。

しかし問題はそこではなかった、これらの竜を束ねている竜らしき生き物、その見た目に俺は啞然としていた。

まるで木のように緑色であり、体の至る所に葉っぱらしき物が生えており、その言葉では表す事の出来ない美しさを秘めた全体像では誰も「美しい」と呟いてしまいそうな見た目であった。

すると、目の前の巨人達に向かって、その竜は特效を仕掛けていた。その時、巨大な爆発が起こった。

そこにいた竜達、そして巨人達を巻き込み、さらに爆風を増していた。

俺はその爆発に巻き込まれ、あるはずもない苦痛に苦しんでいた。体が痛い、何だこの痛さは、まるで・・・現実のような痛さだ。

そう思うと、その映像はそこで終了した。

気がつく俺はまだその壁の前にいた。

今までの映像・・・いや、アレは記憶と言った方が正しいのか。

アレは一体、何だったんだ。

そう思い、俺は壁に書かれてある文字を見た。

すると、不思議な事にその文字が読めるようになった。

「・・・時は不明、邪神と神が戦い、神が勝ったあの日、別の邪神が姿を現した。その3体の邪神は死神の恐ろしい力を秘めており、操ろうとした愚かな人間の体に乗っ取り、世界を破滅に導いた。そんな中、次元の壁が破れ、新たな竜が姿を現した。その竜は見た目の美しさから、我々はこう読んだ。ゴッド・ザ・ワールド・ドラゴン、またの名を、神世界の竜と・・・」

神世界の竜、あの時俺の右目に映っていたあの全身が美しかったあの竜か。それに邪神って一体……。

そんな考え事をしていた。

その時だった。

「オイお前、そこで一体何をしている」

そんな声が聞こえた。

「……す、すみません。急に地面に穴が空いてそこから落下したもので、それで、一体ここはどこなのでしょう」

まずは猫かぶりだ。相手の様子を見よう。

「んあ、お前さん、あの時にゴザツキーが作り上げた爆弾の真上にいたのか。マズイな、ここを知られたら……」

そんな事を呟いていた。

「……よし決めた、ここを見られたんじゃしょうがない、お前には消えてもらおう」

そう言うと、その人は服の中から拳銃を……つて拳銃！！

俺はすぐさま近くの物陰に隠れた。すると、今まで俺がいた空間に2発の銃弾が撃ち込まれた。

……上等だコラ。

俺は相手の様子を見ると、近くにあつた石を拾い上げ、その石を俺がいる反対の方向に投げた。

「バーカ、そんな事で俺を騙せるかよ」

そう言うと、その人は石が投げられた反対の方に向かって、そこに1発銃弾を撃った。

しかし当の俺は、すでに行動を読み、投げた石の方から回り道をしており、その人の背中に向かって思いつ切りかかと落としを喰らわせた。

「グハッ」

その人は予定外の攻撃にうろたえながらも、すぐに後ろを向いた。

そして俺は、相手が持っている拳銃を蹴りで宙に飛ばすと、その相手の顔めがけてアップパーをしようとした。

「バカはお前だ」

勝った気になつていたが、俺はその時にはすでに油断していた。相手の腕の動きに気がつき、すぐさま攻撃を止め、回避行動に出た。すると、回避した空間に3発の銃弾が撃たれた。

「・・・予備か」

「やっぱりバカはバカだな。だが俺の拳銃を蹴り飛ばしたのは誉めてやろう。それでもな、俺がガキをなめているとでも思ったか」

・・・ちいつ、油断していると思つたんだがな。

「これで終わりだ、消えろ」

目の前に銃を持った人が・・・終わりなのか。

そう思つた時だった。

どこからか投げられたある物により、その人が持っていた銃は宙に舞つた。

「んな・・・」

「こ・・・これは」

見ると、地面にカードが突き刺さっていた。

「このカード、一体どこから」

そう思つたのも束の間、俺が入ってきた入り口から声がした。

「大丈夫か、遊画」

その声の主は、新和であつた。

「ちい、仲間か」

そう、その人・・・男が言うと、その男は慌てて逃げ出した。

地上に行くつもりか、それにあのデュエルデスク・・・。

「逃がすか、先生、俺はちよつとアカデミアを離れる」

「待て遊画、アイツは・・・」

そんな新和の話を見無視し、俺は地上に向けて走り出した。恐らく逆の道が地上に繋がる道だったのか。

それなら、先回りさせてもらう。

「ちい、まさか失敗に終わるとは、ナス力様に会わせる顔がねえぜ」
まさかあんな所にガキがいるとは思わなかったからな、あの時に使った爆弾の影響で地面が崩れたとは、ちよいと威力をしくじったか。
「だが、ここまで来ればもう問題ない、何故ならこのD・ホイール、グレイトアームのスピードに付いてこれるD・ホイールなんてどこにも……」

その時、後ろから1台のD・ホイールが近づいてきた。

「何だアレは、こちらを追っているみたいだ」

そう思った瞬間、前方の画面が通信モードとなった。

そこに映された顔、それは……。

『よう、随分と急いでいるようだな。そんなにセキユリテイが怖いのかよ』

「……で、テメーはさっきの」

予想通りだ。あのデュエルディスクは取り外し型のデュエルディスク、言わばハイブリッド型だ、それで考えられるのは、コイツがD・ホイールである。ここまで来ていた事だ。

それなら話は早い、速攻で追いついて、捕まえるまで。

「俺にあんな屈辱を味合わせたんだ。ただで済むと思うなよ」

『小賢しい、それなら追いついてみる』

相手のD・ホイールが加速した。

……結構早いな、だが、このホバー・アクセルMの敵ではない。

俺も自分のD・ホイールを加速させた、そのスピードは以外にも早く、強力なGが加わった……慣れてるから別にいいけどね。

そう思いながら、あっけなく相手のD・ホイールの近くまで追いつ

いた。

『グッ……早い』

「どうするオッサン、このまま振り切れると思うなよ。何故ならこのD・ホイールは特別でね、限界までスピードが出るように設計されているんだよ」

『……ならば、これしか方法はない、フィールド魔法、スピード・ワールド2、セットオン』

！スピード・ワールド2……なるほど、スピードで振り切れないのなら、デュエルで振り切ろうと言う魂胆か。

「それなら、受けて立つ、こちらもスピード・ワールド2、セットオン」

目の前のモニターにスピード・ワールド2のカードが現れ、フィールドが映し出された。

『デュエルモードオン、オートパイロットスタンバイ、レーンセレクション、使用可能な最適レーンをサーチ、デュエルレーン、セントラルに進呈、オートリペーション』

そのまま一部の道が塞がれ、レーンまで一直線まで行けるようになった。

そして、レーンの中に到達すると、先行カーブが表示された。

よし、あそこか……。

「ライディング」

「デュエル」

「アクセラレーション」 Y u g a VS R i d o u LP 4
000」

先行カーブまで、2台は全速力だった。

すると急に男のD・ホイールは減速した。これは先行は譲ってやるよと言っているのか。

「それならば、行くぜ」

俺は先行カーブを全速力で曲がった。

そして、先行俺、後攻相手となった。

「俺のターン、俺はパワー・スター・マジシャンを攻撃表示で召喚。このモンスターは自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、手札から通常召喚できる。パワー・スター・マジシャン・魔法使い族・ATK2100・光・5・効果。そしてカードを2枚伏せて、ターンエンド」

さあ、来い。

「俺のターン」

Yuga・Spcl・LP4000

Ridou・Spcl・LP4000

「ドロー、俺はコザツキーを守備表示で召喚。コザツキー・悪魔族・

DEF400・闇・1・通常」

「なにつ、コザツキーだと」

何故、そんなモンスターを……。

「まだまだ、自分フィールド上にコザツキーと名の付くモンスターがフィールド上に存在する時、手札から悪魔の助手　ヘイトを特殊召喚できる。現れよ、悪魔の助手　ヘイト。悪魔の助手　ヘイト・悪魔族・ATK1900・闇・4・効果」

「レベル4のモンスターのクセに、攻撃力1900だと!!」

だが、こつちのモンスターの方が攻撃力は上だ。それを相手は知っている、ならば、どんな戦術を仕掛けてくるのか。

「ヘイトの効果発動、このモンスターは自分フィールド上に存在するコザツキーと名の付くモンスター1体につき、攻撃力を300ポイントアップさせる」

「なにつ、攻撃力2200だと」

「悪魔の助手　ヘイト・ATK1900　2200。バトル、悪魔の助手　ヘイトで、パワー・スター・マジシャンを攻撃、ヘイト・キャノン」

ヘイトの担いでいたキャノン砲から火が吹いた。

そして発射された弾がパワー・スター・マジシャンへと当たる、直前だった。

俺は1枚の罨カードを開いていた。

「罨発動、くず鉄のゴーレム、戦闘を行うお互いのモンスターはその戦闘では破壊されないくず鉄のゴーレム・罨・効果、自分、または相手ターンのバトルフェイズ中に、モンスターが戦闘を行う時に発動する事ができる。お互いのモンスターはその戦闘では破壊されない。発動後、このカードは墓地へは送らず、そのままセットする。それにより、俺は貫通ダメージ100を喰らう事により、パワー・スター・マジシャンは戦闘では破壊されない」

弾が当たる直前、謎のゴーレムがパワー・スター・マジシャンの前に現れ、そのモンスターを守り抜いた。

だが、その破片が遊画に直撃した。

「クツ」
「LP4000 3900」

「フン、いい気になるなよ。俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド」

この戦い、負けられないぜ。

あんな屈辱的な不格好を見られた上、そのままトズラされたら腹立たしい。

それに、あの時に見えたあの映像、その事も聞き出さなければならぬ。その為にも、俺はこのデュエルを制する、どんなに相手が凄いモンスターを出そうとも、俺は、負けられない。

続く

次回予告

相手を追い詰めるも、すぐに追い詰められたこの状況、このままでは……だが俺は諦めない、雅から学んだ仲間との絆の力で、お前を倒してみせるぜ。

次回、遊戯王Fate 第5話「始まりの戦い」
ライディングデュエル、アクセラレーション。

次回のキーカード

エンドレス・ドラゴン・ドラゴン族・ATK2500・地・
シンクロ、効果 8・

第4話「シンクロ召喚、運命をはばたけ、エンドレス・ドラゴン」(後書き)

これで、やっと第4話です。
それでは次回。

第5話「始まりの戦い」(前書き)

続き・・・やつと第5話

第5話「始まりの戦い」

アーカイト校、地下3階

「遊画め、ここまで来たか」

俺はさつき投げたカードを回収すると、その場を立ち去ろうとしていた。

「・・・ここにお前の息子が落ちたのか」

「・・・ちつ、五月蠅いジジイが来やがった。」

「何故分かった、お前は今まで封印の間にいたハズだ」

「・・・壁を見てな」

「壁？」

俺は疑問に思い、壁を見た。

しかし、何も変哲もなく、最初に見たのと同じ形であった。

「・・・よく見る、そこに最初に書いていなかった物が書かれてあるだろ」

俺は再びそれを見た、確かに女性らしき物が書かれてあった。

「・・・って、これは。」

「何だコイツは、まるで・・・」

「・・・そう、まるで、この竜を操っているように思える・・・だろ」

どういう事だ、まさか噂に聞く、シグナーと呼ばれる人じゃねーだろうな。

「・・・アレは、運命をつかさどる神、ノニエル」

神様・・・そう言いたいのか。

「だがあいにく、俺は神様を信じていないんでね」

「・・・しかし彼女は間違いなく神だ。お前の息子のあの目のルーンの元となつたな」

ルーン、何の話だ？

「・・・知りたいのなら、もう少し時を待て。恐らくは近々、あの石版の死神の封印が解け、アーカイトに災いが降り注ぐであろうから」

！！それは一体、どういう意味だ。

第5話「始まりの戦い」

デュエルサーキットに2台のD・ホイールが走っていた。

こちらのD・ホイールにはモンスターが1体と伏せカードが1枚の状態、相手はモンスターが2体と伏せカードが1枚であった。

「・・・俺の、ターン」

Yuga・Spcc2・LP3900

Ridou・Spcc2・LP4000

「ドロー、俺はチューナーモンスター、ワン・スター・マジシャンを召喚、ワン・スター・マジシャン・魔法使い族・ATK100・光・1・チューナーレベル5のパワー・スター・マジシャンにレベル1のワン・スター・マジシャンをチューニング 5 + 1
" 6 守りを固めし厚き魂よ、仲間を守りて絆を見せつけよ、シンクロ召喚、超えられない壁、ビッグガード・マドル」
ネオアクア・マドルと言うモンスターをご存じだろうか。

攻撃力1200のクセに守備力が3000の魔法使い通常モンスターの事である。

しかし俺が召喚したモンスターは、その更に上に行く、守備型モンスターなのである。

「ビッグガード・マドル・・・チツ、守備を固めたか」

「違うな、攻撃表示での召喚だ、ビッグガード・マドル・魔法使い族・ATK1800・水・6・シンクロ、効果でビッグガード・マドルの効果発動、1ターンに1度、相手フィールド上に存在するモンスター1体の表示形式を変更する事ができる」

「なにつ、まさか」

「そのまさかだ。コザツキーの形式を変更」

「チツ」
「コザツキー・DEF400 ATK400」

そのまま行けるか。

「バトル、ビッグガード・マドールで、コザツキーを攻撃、ガードアタック」

巨大な盾で、コザツキーに殴りかかった。

「・・・フン、だからお前はバカなんだよ。畏発動、コザツキーの底力、相手が攻撃表示のコザツキーを攻撃した時、それ戦闘でコザツキーは破壊されず、戦闘ダメージを半分にする。その後、デツキからジャイアント・コザツキーを2体まで特殊召喚できる」
「コザツキーの底力・畏・効果、自分フィールド上に表側攻撃表示で存在する「コザツキー」が攻撃を受けた場合に発動する事ができる。その戦闘で「コザツキー」は破壊されず、自分が受ける戦闘ダメージは0になる。ダメージステップ終了時に自分のデツキから「G・コザツキー」を2体まで選択し、特殊召喚する事ができる。この効果により特殊召喚された「G・コザツキー」は破壊された時、ダメージを発生する効果は発動できない」
「クツ・・・」
「LP4000 3300」

「ジャイアント・コザツキーを2体だと、鬼畜過ぎる」

「そしてデツキより、ジャイアント・コザツキーを2体、特殊召喚

「G・コザツキー・悪魔族・ATK2500・闇・4・効果」

「攻撃力2500のモンスターが2体・・・俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド。そしてビッグガード・マドールの効果により、

このモンスターはエンドフェイズ時に守備表示になる」
「ビッグガ―

ド・マドール・ATK1800 DEF2800」

「ネタ切れか、俺のターン」

Yuga・Spcc3・LP3900

Ridou・Spcc3・LP3300

「俺はスピードスペル、大砲門を発動、自分のスピードカウンターが2つ以上ある時に発動可能な魔法カードだ。その効果により、自

分フィールド上に存在するレベル4以下のモンスター1体を選択して墓地に送り、そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手プレイヤーに与える。Sp・大砲門・Sp魔法・効果、自分のスピードカウンターが2つ以上存在する場合、自分フィールド上に存在するモンスターを選択して発動する。そのモンスターを墓地に送り、そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手プレイヤーに与える。この効果を使用したターン、自分は攻撃する事ができない。その効果により、俺はジャイアント・コザツキーをリリースし、お前に2500のダメージを与える、食らえ、捨て駒の屈辱だ」

ジャイアント・コザツキーが爆発を起こし、その爆風に俺は巻き込まれた。

「クツ」

「あつははははは、くたばれ、クソガキ」

しかし、その爆風からは、平然と走り続ける俺の姿が……。

「んな、どう言う事だ」

「残念でした、ビッグガード・マドールの効果の中には、効果ダメージを無効化する効果も取りそろえてあるのさ、そしてコイツは守備表示の時、戦闘では破壊されない」

「クツ、ふざけやがって……ガキ相手にこれは使いたく無かったが、仕方ない。俺はチューナーモンスター、実験台のモルモットを召喚。実験台のモルモット・獣族・ATK1200・地・3・チューナー。そしてこのモンスターをリリースする事により、自分フィールド上に存在するコザツキーと名の付くモンスターの数だけ、チューナーのトークンを生み出せる事ができる」

「つて事は、コザツキーと名の付くモンスターはヤツの場に2体、これはマズイ。」

「俺は2体のモルモット・トークンを生み出す。モルモット・トークン・獣族・DEF0・地・3・トークン、チューナー。そしてレベル4のジャイアント・コザツキーにレベル3のモルモット・トークンをチューニング 4 + 3 = 7 研究没頭の悪魔が、新

たな力を手に入れる、自らを生け贄に捧げてでも。シンクロ召喚、お前に良い物を見せてやる、これが全てを捧げた結果だ。合成悪魔 コザツキー」

光の中から、もはや人間とも悪魔とも言えないような物体が現れた。手には釘や何かのコードが埋め込まれ、頭はコードや謎のコンピュータが埋め込まれ、もはや人間離れた悪魔となっていた。

「キモッ、何だアレは」

「キモイとは何だ、これがコザツキーの真の姿、合成悪魔 コザツキーだ。合成悪魔 コザツキー・悪魔族・ATK1800・闇・7・シンクロ、効果合成悪魔 コザツキーの効果発動、1ターンに1度、相手フィールド上に存在するモンスターをこのモンスターの装備カードとして装備する事ができる」

「っ、見た目がアレなのになんて効果だ」

合成悪魔 コザツキーの巨大な腕にビッグガード・マドルが捕まれ、そのままその体の中に吸収されていった。

「ビッグガード・マドル!!!」

「そしてこのモンスターは、装備したモンスターの攻撃力分アップする」

「んな」

「それにより、このモンスターの攻撃力は1800ポイントアップして、3600となる。合成悪魔 コザツキー・ATK1800
3600」

ウソだろ・・・こんなインチキモンスターが存在するとは・・・。

「バトル、合成悪魔 コザツキーで、公栄 遊画にダイレクトアタックだ、食らえ、コザツキー・ビッグレーザー」

合成悪魔 コザツキーの口から、巨大なレーザーが放たれ、それが遊画に直撃した。

「ぐああああ、だ、だが・・・畏カード、 HALF アンド・ HALF を発動、自分が受ける戦闘ダメージを半分にして、コインストを行う、そしてそれにより効果が決定する。 HALF アンド・ HALF ・畏・

効果、相手が直接攻撃を宣言した時に発動する事ができる。その戦闘により発生する戦闘ダメージを半分にして、コインストを1回行う。その結果により、以下の効果を得る。・表 このターンの戦闘ダメージを0にする。・裏 その戦闘によって発生したダメージ以下のモンスター1体を自分の手札から特殊召喚する。また、この効果をを使用した場合、そのバトルフェイズを終了させる事ができる。巨大なコインが宙を舞った。そしてそのコインが地面に落ちて、得られた結果は……。

「裏、戦闘ダメージを受けるが、その数値以下のモンスター1体を手札から特殊召喚する」
LP3900 2100
結構ダメージを喰らったが、ここでへばる場合では無かった。

「現れよ、バルド・スター・マジシャン
「バルド・スター・マジシヤン・魔法使い族・DEF800・光・2・チューナー」

「死にぞこないが、俺はターンエンドだ」
チツ、どっちが死にぞこないだ。

「俺のターン」

Yuga・Sp4・LP2100

Ridou・Sp4・LP3300

「……ダメか」

俺は半分諦めていた……。

すると、頭の中から声が聞こえた。

諦めちゃダメ、きつと方法はあるハズ……。

この声は……雅の声か。

「……そうだな、どんな事があっても、決して諦めてはダメだとお前から教わったばかりなのにな、何を考えたんだ、俺は」

そうだ、この手札でどうにかなるハズだ……考える、考えるんだ、俺。

手札は2枚、緊急同調とスピードスペル、エンジェル・バトン……
・待てよ、エンジェル・バトン、試してみるか。

「俺はスピードスペル、エンジェル・バトンを発動、自分のスピー

ドカウンターが2つ以上の時に発動する事ができる。デッキからカードを2枚ドロし、1枚を墓地に送る。Sp・エンジェル・バトン・Sp魔法・効果、自分のスピードカウンターが2つ以上存在する場合に発動する事ができる。デッキからカードを2枚ドロする。その後、自分の手札からカードを1枚選択して、墓地に送る。俺はデッキからカードを2枚ドロ」

「そして手札に存在するミリット・スター・マジシャンを墓地に送る、カードを2枚伏せて、ターンエンド」
さて、思い通りになるか・・・。

「あつはははははは、もはや悪あがきか？俺のターン」

Yuga・Sp4・LP2100

Ridou・Sp4・LP3300

「・・・フツ、バトル、合成悪魔 コザツキーで、バルド・スター・マジシャンを攻撃、コザツキー・ビクレーザ」

「・・・今だ。」

「畏発動、所有者の手形」

「なにつ」

「このカードの効果により、フィールド上に存在するモンスターのコントロールは全て元に戻る。所有者の手形・畏・効果、フィールド上に存在するモンスターのコントロールは全て元に戻る。それにより、合成悪魔 コザツキーに吸収されたビッグガード・マドールは、俺の元へと舞い戻る」

「っ、せつかく吸収したモンスターが」

「来い、ビッグガード・マドール」

コザツキーの中から、再びビッグガード・マドールが姿を現した。

「っ、合成悪魔 コザツキー・ATK3600 1800」・・・
だ、だがこのターン、再び吸収する能力が発動する」

「残念だが、バルド・スター・マジシャンの効果により、このモンスターがフィールド上に存在する限り、モンスターを装備する事が

できない」

「っ、チビマジシヤンのクセに・・・それを殺せ、合成悪魔 コザツキー」

再びその口が開き、レーザーが放たれた。

「だがそうはいかなくてね、畏発動、緊急同調。バトルフェイズにシンクロ召喚するハ緊急同調・畏・効果、このカードはバトルフェイズ中のみ発動する事ができる。シンクロモンスター1体をシンクロ召喚する」それにより、俺は自分フィールド上に存在する、レベル6のビッグガード・マドールに、レベル2のバルド・スター・マジシヤンをチューニング 6 + 2 = 8
「相手ターンにシンクロ召喚するだ」と

バルド・スター・マジシヤンの体が透明になり、そのまま体から2つの星が生まれ、それが輪を描き、その輪の中にビッグガード・マドールが入り込んだ。

「迷えし星の運命が、無限の道を作り出す歯車となる、終わり無き運命を作り出せ」

そのままビッグガード・マドールの体が光り、中の星が直列に並んだ。

「シンクロ召喚、無限の可能性、エンドレス・ドラゴンハエンドレス・ドラゴン・ドラゴン族・ATK2500・地・8・シンクロ、効果」

その光の中から、俺の最強の竜が姿を現した。

「っ、出やがったな、ナスカ様が言っていた竜が」

ナスカ、誰だそれは。

「まさかテメエが持っていたとはな、驚いたぜ」

「何をゴチャゴチャと」

「死神のカードの封印を解くためのカード、そう言えば分かるか
死神のカード、何だそれは？」

「死神のカード、それは大昔に現れた邪神と言えば、分かるか」

「大昔に現れた邪神？そんなお伽話みたいな事、信じられるかよ」

『ですが、実際にはあつたんですよ』

んなー！こ、コザッキーが。

「精霊なのか、アレも」

『おおつと、あなたにも精霊が見えるのですね、いいでしょう、それなら教えてあげましょう。あーっははは、ありがたく思え』

何をだ？

「とりあえず、デュエル再会だ」

『無視するのですか、数年前といい、私を無視するとはいい度胸です。貴方など蹴散らしてください』

「フン、聞かなくてもいいのか公栄 遊画、キサマにとって死神のカードはあとになって肝心になりますからね」

「……つまり、聞けつて事か。」

「……いいだろう、そこまで言うのなら、死神のカードとは一体何だ」

『聞く気になりましたか。それではお教えしましょう。死神のカードとは、大昔に起きた赤き竜と邪神の戦い、その後起きた死神の契約と呼ばれる事件の事ですよ』

赤き竜、邪神、何の話だ？

『死神と契約した者は、驚異的な強さと驚異的な強運をもらう事ができます』

「ほう、それはある意味いいカードじゃねーのか」

『ただし、それには条件があります』

条件、何だかイヤな予感がする。

『それは、魂を渡さなければなりません、ですが当時の人々はその運と強さを欲しさにそのカード……正確には石版を奪い合うために殺し合ったりしていました』

……やっぱりそんな人間は嫌いだ、自分の欲しか目のない人間は……。

『そしてその3枚を手に入れた人々は、いろいろな都市を攻めました。当時の人々には対抗する手段がありませんので、1つ1つ、町

が消えては新たに町が出来たりしていました。しかし」

「・・・」

「自分さえ良ければそれでよし・・・の心があつたのか、その3人のカードの所持者は自分の都市を巡って争い事を行いました。まるで死神に魂を差し出すかのように・・・」

最悪の奴らだ、そんな事までやっていったのか。

「そんな中、その争いがあっている最中に、とある5人の集団が戦場に現れました。その集団に気づいてか、その3人は様子を見に参りました、すると死神のカードが激しい拒絶反応を起こし、その3人はその集団に向かって死神のカードを使い、殺そうと考えました。しかしその5人の人々は体からそれぞれ竜を出し、その3体の死神を苦戦しながらも打ち勝つ事に成功しました」

「それで、その後は」

「その後は、その3人は死刑になり、死神のカードもどこかへ封印されました。ですが、その死神の怨念が今もどこかで動いているはずですよ、例えばカードに宿ったり、人の心に乗り移り、その人をコントロールしたりと、考えただけでもゾクゾクしますね」

「・・・何を考えたらそんなにゾクゾクするんだ」

「何って、人の不幸をあざ笑っているのですよ、あんな不幸な人間は見たことありませんからね」

実に気味の悪いヤツだぜ。それに、不幸な人間って事は、コイツはコントロールされた人間でも見たのか。

「おおっと、話を戻します。5人の人々はそれぞれの竜を体に宿していました。1人目は普通の人間だったが、とある事件でその身に雷の竜を体に宿す事となった、その竜の名前は、フラッシュ・ボルテッカー・ドラゴン、そして2人目は生まれつき美人であり、ある日村の生け贄になった時、突然変異で体に炎の竜が宿ってしまった、その竜の名は、マグマバニング・ドラゴン、そして3人目は力に頼り、全てをなぎ倒してきた美しき姫、そして自らその身に粒子の竜を宿した、その竜の名は、クオインタム・ドラゴン、そして4人目は

氷結界の一族の生き残りであり、美しき竜を生まれつき宿し、そして心優しい心の持ち主。その宿した竜の名は、ブリザード・クイーン・ドラゴン、そして最後は・・・その中でも最も美少女で、どこから来たかは不明、そしてどの経緯でその竜を体に宿したかは分かっていない、そしてその竜こそが遊画、あたなの竜、エンドレス・ドラゴンなんです』

「・・・つまり、何が言いたい」

『なに、簡単な事です』

「その竜をよこせて事だ。そんな簡単な・・・」

「俺がこの竜を渡すと思っっているのか、断る」

「・・・っ、俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ、まあ、この状況でこのターンは持てますがね」

ふん、調子に乗りやがって、だが次のターンで勝負は見えていますけどね。

何故なら、俺が伏せているカードは罠カード、魂の復讐、戦闘によりモンスターが破壊された場合、自分フィールド上に存在するモンスターを全て破壊し、相手に800ポイントのダメージを与えるカードだ。俺の場にモンスターは4体、あの時ヘイトと共に相打ちさせても良かったんだが、そっちの方が効率がいいからな。

「俺のターン」

Y u g a ・ S p c 5 ・ L P 2 1 0 0

R i d o u ・ S p c 5 ・ L P 3 3 0 0

・・・あの伏せカード、何かイヤな予感がするな。

さつき引いたカードは・・・ん、待てよ、向こうは罠カードに賭けているんだと思う。

何故ならさつきエンドレスドラゴンと相打ちしなかったのも、恐らく、あの罠カード、聖なるバリア・ミラーフォースか、魔法の筒、いや、魂の復讐って事も・・・それなら、これしかない。

「俺は手札からチューナーモンスター、ツイン・シンクロンを召喚
ハツイン・シンクロン・戦士族・ATK1600・地・4・チュ

「ナー」そしてこのモンスターの召喚時、墓地のレベル3以下のモンスターを特殊召喚する、現れよ、ミリット・スター・マジシャン
ハミリット・スター・マジシャン・魔法使い族・ATK1200・
光・3・効果「レベル3のミリット・スター・マジシャンにレベル4のツイン・シンクロンをチューニング 3 + 4 = 7 新たな可能性よ、この戦いに終止符を打つべく降臨せよ。シンクロ召喚、切り刻め、ツイン・ウォーリアハツイン・ウォーリア・戦士族・ATK2300・地・7・シンクロ、効果」
光の中から、戦士が到来した。

「フン、そんな上級モンスターが召喚されたところで、何も変わりはしない」

「それはどうかな、さっきから変だと思ってんだよ、何故お前はコザッキーの表示形式を変えていないか。それは、変える必要が無いからだ。どうせ伏せカードで効果により破壊かダメージを喰らわせるつもりだろうな」

「だったらどうする、そんな状況でお前は勝てるとも言いたいか？」

「・・・完全に勝った気でいやがるな。」

だが、俺は最後の手段を伏せている、もうこのデュエルは屈辱を晴らす事が目的だったが、コイツの話を聞いている限りでは・・・迷いは無い。

それが、俺の運命であるのなら、その敷かれたレールを進むしかないのだから。

そして俺は、覚悟を決めた。

何やら面倒事に巻き込まれそうだが、それでもいい。

俺は、全てを知りたい。

「罨カード、オープン、パワー・ポンプ。自分フィールド上に存在するモンスター1体をゲームから除外し、そのモンスターの攻撃力分、自分フィールド上のモンスター1体の攻撃力を、エンドフェイズまでアップさせる、さらにこのターン自分が受ける効果ダメージ

は全て0になる。パワー・ポンプ・罨・効果、自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体をゲームから除外して、自分フィールド上に存在するモンスター1体を選択して発動する。そのモンスターはこの効果によりゲームから除外したモンスターの元々の攻撃力分エンドフェイズまでアップする。この効果を使用したターン、相手が発動したダメージを与える効果はすべて0になる。俺はツイン・ウォーリアをゲームから除外、そしてエンドレスドラゴンにその攻撃力を与える。エンドレス・ドラゴン・ATK2500
4800。コザツキーを攻撃表示のままにしたのが運の尽きだったな」

『わ・・・わたくしを攻撃するのですか、このわたくしを』

「俺は、全てを知りたい、だから今は、お前らを倒す。バトル、エンドレス・ドラゴンで、コザツキーを攻撃、パラディン・クロー」
エンドレス・ドラゴンの爪が剣状となり、コザツキーを糸も簡単に切り裂いた。

『ギヤアアアアアアア』

「んな、こんなガキにいいいいいいいい」HP3300 0

画面にWinの文字が浮かび上がっていた。

相手のD・ホイールに強制ブレーキが掛かったが、相手はそんな事にも構いなしに、自らコースを外れ、ガラスを突き破った。

「んな・・・・・・」

流石の俺でも絶句した。

すると、相手の声が微かに聞こえた。

「今回は負けたが、次に会う時はどうなるか、覚悟している。我が名はリドウ、また会うときまで、せいぜい悪あがきのために生きな、公栄 遊画」

そう聞こえたと思えば、ザッパーンと轟音が聞こえ、そのまま相手はレーン下の川に流されていった。

・・・いや違う、アレは・・・D・ホイール捨ててどこかへ逃げたんだ。

・恐らくアイツも執念深いヤツだ、いずれかまた、対決する日がくるだろう。

だが……。

「その日が来ても、俺は勝つてやる、だから今はせいぜい……」
せいぜい、逃げて対策を練るといい、今度会う時まで、俺も強くなつてみせる。

「……アカデミアに戻ろう……たっぷりの説教が待っているだろうが、あと、雅からの……」

……このまま帰っていいかな、と俺は思ったが、後ろから新和が来たため、そうはいかなくなった。

「んで、そいつは本当にリドウと言ったのか」

ここは誰もいなくなった教室、そして今は放課後。
さっきの状況を先生に説明している所だった。

「……知っているのか、リドウってヤツを」

すると、先生はしんみりとした顔で、外を見た。

「……約4年前、とある事件が起きた」

とある……事件？

「そう、その事件は奇妙な事件だった。何故なら、子どもが連れ去られ、その後無事に保護されたのはよかったが、その子どもは、親を怖がっていた」

……どういう意味だ。

「その子どもからは特に変な反応は無かったが、その事件をきっかけに、その手の事件が次々に発生した、それもその被害者は小学生から高校生まで、しかも必ず保護されて、何かに怯えている様子だったらしい」

「……どういう意味ですか、怯えているって何かの恐怖症じゃない

のですか」

「それだよ、何かの恐怖症、しかもそれは人工的に埋め込まれたのがな」

埋め込まれた？

それって……。

「実際にどういう風にされたのかは知らないが、どうもその事件は、リドウってヤツが関わっていたらしい」

……俺は、そんな恐ろしい相手とデュエルをやっていたのか。

「……だがそれは4年も前の話だ、3ヶ月でその事件は収まったが、何故今になってそんなヤツが……」

「……そう言えばリドウが言っていました、神世界の竜とか、5体の竜とか、死神のカードとか……」

「……ユグドラシルの竜の事を言っているのか、神世界の竜とはユグドラシルの竜？

「それに、5体の竜に死神のカードねえ、一度校長に聞いた方がよさそうだな」

「あの、そのユグドラシルの竜とは一体……」

「……今は知らないでいい、だが時が来たら話そう、同じ神を使える者同士として」

神を使える者同士！！

それってどういう事だ。

「今日はもう帰るといい、帰る時間がオーバーすると、教師としての立場が危うくなる」

……ああ、いつもの先生だな。

「それでは俺は失礼します」

そう言っつて、俺は帰ろうとした……。

ふと先生の指に何かの指輪がされているのを目にした。

「……あれ、先生、結婚していましたっけ？」

先生は自分の指を見て、フツと笑った。

「ああこれか、これはオシヤレでやっている物だ、それに俺は独身

だ」

「……俺が言うのも何だが、先生は性格がアレだが、結構かっこいいの分類に入る顔つきをしている。

それなのに独身って、あまり納得が出来ない。

「……つと、もうこんな時間か、それじゃあまた明日」

「おうよ、ちなみに明日は休みだぞ、曜日感覚が麻痺しているんじゃないのか」

・・無駄に恥を掻いた。

恥ずかしかつたので、俺は速急で走った。

「オシャレのための指輪ねえ、こんな見た目で納得できるヤツがいるとは……」

俺はその指輪を眺めていた。

いつもなら外しているこの指輪だが、今回は付けていた。

その理由は……いづれ分かる事だ。

「俺は……自分の運命を呪った、最強と言われる運命を行かず、教師になる運命を行った。俺はそれで良かった、千年指輪の呪いにも負けずに俺は生きている」

そして俺の懐から、とある3枚のカードを取り出した。

それは、1枚は効果モンスター特有の色をしたカード、そして1枚は融合モンスター特有の色をしたカード、そしてもう1枚は、シンクロモンスター特有の色をしたカード。

それも全て、属性が神のカードなのであった。

「俺の家に代々伝わる伝説の戦士の神カード、ギリシャの神……か」

雑誌でこんなカードを見たことがある。

伝説の星界の三極神、極神皇トール、極神皇ロキ、極神聖帝オーディン、彼らのカードもまた、北欧神話のカード、そして遊画が持つ事になるカードもまた、北欧神話のカードとなる。

「って、何をほざいているのだろうな、俺は」
それに死神のカードねえ、これは何か裏がある。

「……全てを知るには、自分で確かめろって話しか」

「……だが、それはいずれでいい。」

何故なら、今はまだ、俺の出番ではないのだから……。

俺は地下の駐車スペースに自分のD・ホイールを駐輪した。

「今日もいろいろな事があつたな、疲れる事ばかりだったが」

リドウの事とか、雅とのデュエルとか、もう散々な一日だったぜ。

「だが、いずれまた会うリドウとのデュエルに備えて、デッキの強化にあたらなきゃな」

そう思い、俺は自分の部屋に向かって歩き出した。

すると、後ろから足音が聞こえた……かと思つた瞬間、背中に何か当たる感触がした。

「……動かないで」

「……その声、まさか」

「雅、何のマネだ!!」

俺は後ろを向いた……が、そこにいたのは俺の想像を絶する人物だった。

髪は俺と同じポニーテールで、少し破れたマントらしき物を着ており、片手には俺に向かって付いている杖を持っており、その姿はまるで……。

「風霊使い……ウイン」

そう、どこから見てもそれは、風霊使いウインの見た目でもあつた。

……体つきは憑依装着の方だが……。

って、そんな事を気にしている場合ではない。

「一体何のマネだ、雅」

コイツが雅なのは間違いない、声からして、そして体つきからして・
・。

「・・・何のマネ？今日私を置いて逃げたからに決まっている」
俺は命の危険を察知した。

・・・お、怒っていますね、これは確実に。

マズイ、この状況の選択肢は・・・。

1 諦める

2 戦いを挑む（肉弾戦で）

3 しらを切る

4 抱きつく（性的な意味で）

「マシなのねえ」

何だこの選択肢は、イジメか、ってか明らかに4番は死ぬだろ。

「って、何でそんなボードを出しているんだ、雅」

見ると、そんな選択肢が書かれたボードを、雅は持っていた。

「・・・どうせなら4番で」

「お前は恥という言葉を知らないのか！！」

「・・・んじゃあ2番で」

「俺が負けるのが目に見えている、ってかお前は俺以上に強いだろ
うが・・・」

すると雅は体をフルフルと震えたかと思った瞬間、ボソリと何かの
呪文を唱えた・・・え。

「風霊術 - 雅」

俺の意識は、いきなり目の前に壁が見えたのと同時に、失われた。

・・・アレ、ここは一体。

俺は何故か自分の部屋で寝ていた。

体がズキズキする、そして体から変な感触がする。
まるで、空気砲を真つ正面から喰らったみたいに。

「・・・気がついた？」

俺の横には雅が……っつて

「思い出した、俺は雅に飛ばされて……」

しんみりとなつて考える、何故あそこまで飛ばされたのか、あの杖にそこまでの殺傷能力があったのか……謎は謎を深めるばかりだ。
「……でもさ、何で雅が俺の部屋にいるんだ？この部屋には確か俺しか……」

「……お母様が」

「……へ？」

「お母様がここに連れてきた、ほっとけば大丈夫だつて」

……は、はははははは。

これで全ての謎が解けた。

何故、雅がこれほどまでに過激な行動をしているのか、アイツならそうやれとやりかねない。

そしてどうして、俺に女性に対しての何かを教えるのを頼んだのか、簡単だ、自分の息子がこんなんじゃ親としてもイヤだろうな。

そしてどうして、雅が風霊使いウインの格好をしていたのか、それは多分、俺と同じ、サイコデュエリストだからだ、恐らくウインのカードを召喚したのであろう。

そしてそれら全てに当てはまる人物と言えば……。

「あら、もう起きたのね。もう少し伸びていたら良かったのに」

そんな無責任な言葉を言う人物、それは。

「母、お前か」

何かイヤな予感がしていた。

これから、とんでもない戦いに巻き込まれるような予感が……。
続く

次回予告

「母よ、何でここにいるんだ」

「いいじゃない、息子に会いに来て何か変なの」

「・・・何か言いたい事があるんだと俺は予想できる」

「あら、急に態度を変えたけど、正解よ」

次回、遊戯王Fate 第6話「霊使いの過去」

雅みたいに心を開かせろって、無理に決まっているだろ!!

次回のキーカード

イビリチュア・グランドオーガ・水族・ATK2900・水・9・

儀式、効果

第5話「始まりの戦い」(後書き)

さて、次に行きますか。

遊 戯 王Fate ラジオ小説その1 (前書き)

pixivでの恒例、ラジオ小説も投稿します。

遊 戯 王Fate ラジオ小説その1

モブ「はい、セッティング終えました」

遊画「誰がセッティングを頼んだんだ、そもそも聞いてないぞ、こんな企画」

モブ「それでは、我々はどこで引かせてもらいます」

遊画「あ、テメーら、オイ」

周りのモブ退場

遊画「・・・たく、どうして俺がラジオ小説の司会をしなきゃいけないんだ」

雅「・・・仕方ない、お母様からの命令だから」

遊画「仕方ない・・・じゃねーよ、お前はいいかもしれねーがな、俺は納得いかねーんだよ。分かるか、いきなり自分の家に帰った瞬間、後ろからスタンガン当てられ、気づいたらここにいたと言う状況の気持ち」

流れ・・・遊画「ただいまー」 遊画「！！後ろから殺気が」 英

子「えい」（スタンガンを首に当てた） 遊画「ぎゃああああああ

あ」 英子「運ぶわよ」 モブ「はっ」 で、今の状況。

雅「・・・大丈夫、遊画だから」

遊画「理由が悲しいいいいい、何でだよ、何で俺だから大丈夫な訳なんだ。スタンガン当てられた時には一瞬だけ天国の美少女が恨めしそうに「おいで、おいで」としていたぞ。アレはリアルに怖かった」

葵「でも、それだけの元気があれば大丈夫だと思えるのは私だけだよるか？」

遊画「元気じゃない、これは無駄なエネルギーだ。そもそも葵、何でお前がここにいるんだ。本編でもまだ俺と接触してねーのによ」

葵「仕方ないですわ、私も英子様からお願いされてここにいますから。って言うよりも、男がいるのにと考えたら鳥肌が来ました

のですわ」

遊画「・・・だったら来なきゃいいじゃん」

葵「う・・・五月蠅いすわね、ウィンが来ているのに・・・しかもあなたみたいにウインを襲いそうな男がいるのにジツとしてられなかったですわ」

遊画「どうしてこの作品の美女共は、ほとんどが男性嫌いなんだろうな？」

雅「それは・・・過去にいろいろあったから」

遊画「確かに、確かにいろいろあったな、悲しい事もあったな。

父親に犯されそうになったり」

雅「・・・さて、始めるよ」

遊画「逃げやがった、さりげなく逃げたようだが・・・思いつ切り無理矢理逃げた」

(BGM)

遊画「つたく、誰がこんな物を聞くかは分からないが、とりあえず始めました、遊戯王Fate ラジオ小説」

雅「司会は・・・特になし」

遊画「俺の立場は！！」

葵「そんなどうでもいい事はほつといて、まずはFateのシンクロセリフコーナー。本当はコメント覧に質問とかがあったらそれに答えようと言うコーナーを考えていましたが・・・」

遊画「・・・そんな事はまず無いので、今回はシンクロ召喚のセリフを言うコーナーだけで終わるつと言う、もはややる気が無いように見えてしまうラジオ小説です」

雅「・・・手抜き？」

遊画「悲しい事言うな」

葵「・・・お二人さん、さつさと終わらせるですわ」

遊画「あー、俺がいるのがそんなにイヤなんですね、分かりますよ・・・それじゃ、俺はそろそろ」

雅&葵「逃がさない(ですわ)」「ガシッ」

遊画「・・・チツ、しょうがない、だったらまずはどんなコーナ
ーかを言ってから始めようか」

(BGM変更)

雅「・・・えーっと、お母様の資料では・・・まず遊画を殴って、
蹴って、ラジオ越しに土下座させるコーナーから・・・」

遊画「俺可哀想だ、つてかもはやシンクロ召喚関係ねー!!」

雅&葵「・・・(チラリ)」

遊画「・・・そうだ、今日はフルとの約束があつたんだつた。イヤ
でもここを突破」

雅&葵「「させると思つているの？視聴者のために遊画、あなたは
ここで犠牲になって(なのですわ)」」

遊画「俺の命よりもウケが大切なのか！えーい、ここは普段から不
良相手に鍛えてきた喧嘩で・・・つてちよつと待て雅、何だその斧
は、しかも何か不気味な顔まで付いているぞ・・・これつて・・・記
憶が正しければ」

雅「・・・デーモンの斧」

遊画「やっぱりな、その前にもう一度読み直せ。誰も切れなんて事
は書かれてないハズだぞ」

葵「あ・・・でもその資料によると、場合によっては腕の2つや3
つは持つていつていいと書かれてあるのですわ」

遊画「母ああああああああ、俺は死ぬのか。ここまで来て、無駄
な人生だったで終わってしまうのか、俺はまだまだ生きたい」

???「それなら、戦え少年」

遊画「そ、その声は」

???「ワシはお前の天使じゃ。今の状況で不利なお前でも、信じ
る心があれば必ず勝てるハズじゃ。だから、悔いの無いように行く
のじゃ、若き少年よ」

遊画「・・・ならば俺は行く、それが俺の・・・運命だからだああ
あああ」

しばらくお待ちください。

葵「……と言う訳で、遊画氏は言葉に出来ない程に酷い事をしましたので、ウザイテンションはしばらく無いと思ってくださいのですわ」

遊画「……ふ、腐腐腐腐腐腐腐腐腐腐腐腐腐腐腐腐」

雅「……腐ってる」

葵「雅、アレは見てはいけないのですわ。何故ならアレは人間として何かを失った人なのですから」

遊画「……俺って、何のために生まれたんだろうな……生きててスイマセン」

葵「だったらラジオ越しに土下座しなさいのですわ。私は生きてて恥な人間だと!!」

遊画「……視聴者の皆さん、俺はまことにダメで、鈍感で、クズで、生きる価値のないゴミのような人間でした。そして思えばあの時から俺は墮落していたのかもしれませんが。俺は……俺は……生きているゴキブリを殺虫剤と言う殺戮兵器で生き物を殺してきました。ならば俺はそのゴキブリ以下です。何故なら……何故なら……俺は……ゴミ以下の生物のクセにゴキブリと言う名の先輩を殺してしまっただから、これはどうやっても償えない重い罪、そして……そしてええええええええええええええええ」

葵「うつとうしいですわああああああ」(蹴りを1発)

遊画「グボア……ハツ、俺は一体」

雅「……あ、戻った」

遊画「え、俺に一体何があったの。ねえ、俺は今まで何を話してたの、なあ雅、何で目をそらすの。そして葵、お前は何故可哀想な人を見る目で俺を見つめているんだ。なあ、誰でもいい、俺に何があつたんだ!!」

雅「……この催眠術の本、本物」

葵「デーモンの斧を使った催眠術……こんな本が存在していたら

たちまち世界は危機に陥れられるのですわ。英子様にとって作者自体を消滅させるのですわ」

遊画「・・・なあ、お前らは一体何の話をしているんだ」

葵「・・・そ、それでは時間も押しているようだし、そろそろ始めようなのですわ」

遊画「・・・確か俺を殴って、蹴っての説明の途中だったな」

雅「・・・土下座させる・・・と言うのは冗談として」

遊画「母め、俺をとんだ茶番に使いやだったな」

雅「・・・あなた達が使ったシンクロ召喚のセリフ、そしてオリジナルのシンクロ召喚台詞を考えて、それを言えばいい・・・と書かれている」

遊画「最後の説明が大ざっぱなのはいつもの事だから置いといて、セリフねえ・・・まずは俺達が言ったセリフから言ってみますか」

葵&雅「「さんせい」」

遊画「んじゃ、先に俺から行かせてもらうぜ」

「レベル3の切り込み隊長にレベル4のツイン・シンクロンをチュ

ーニング 3 + 4 〃 7 新たなる可能

性よ、この戦いに終止符を打つべく降臨せよ。シンクロ召喚、切り刻め、ツイン・ウォーリア」

雅「・・・なんかつまんない」

遊画「ハッキリ言いやがった!」

葵「何ですの、この・・・もっと良いセリフが無かったからこうなりました・・・的なこのセリフは」

遊画「俺のセンスにイチャモン付けるとは・・・だったらこのセリフならどうだ」

「俺は墓地の切り込み隊長と、ストーム・シンクロンをゲームから除外して、チューニング 3 + 2 〃 5 新たなる輝きが、風

世界への扉を開く、鍵となる、シンクロ召喚。吹き荒れる、スター・ウオーリア

葵&雅「……………」

遊画「ノーコメントかよ、一番悲しいぞ」

雅「……でも、一番らしいのは、エンドレス・ドラゴン」

遊画「そ、そうなのか」

「……確かにこのままでは俺の負けで終わる。だが、仲間との絆がある限り、奇跡を起こす事ができるんだ。それをお前に見せてやるぜ、レベル7のセブン・スター・マジシャンにレベル1のクリボーンナイトをチューニング 7 + 1 = 8」

「……！れ、レベル8のシンクロモンスター、そんな物を持っていなかったハズ」

クリボーンナイトが透明になり、そのまま中の星が輪を作り、セブン・スター・マジシャンを覆い尽くした。

「迷えし星の運命が、無限の道を作り出す歯車となる、終わり無き運命を作り出せ」

その光が輝き出してきた。

「シンクロ召喚、無限の可能性、エンドレス・ドラゴン」

雅「……これが一番マトモ」

葵「そうですね、他のはちょっと……」

「だが、それでもやってやるさ。レベル4のリミット・スター・マジシャンにレベル3のイージス・スター・マジシャンをチューニング 3 + 4 = 7」

イージス・スター・マジシャンの体が透明となり、その体から4つの星が浮き上がり、そのまま円を作り上げ、その円の中にリリット・スター・マジシャンが入り込んだ。

「戦火の轟音が響く時、黄金の竜は舞い降りる、光り輝く星にひれ伏せよ」

ミリット・スター・マジシャンもまた、半透明となり、その中の星が並列に並び、その中から黄金の竜が舞い降りた。

「シンクロ召喚、現れよ、ゴールド・スター・ドラゴン」

葵「……何様のつもりなのですわ」

雅「……偉そう、ちよつとムカツク」

遊画「言うと思ったよ、大体シンクロ召喚のセリフなんてそんな物だろ。ジャック・アトラスを考えてみる」

「レベル5、バイス・ドラゴンにレベル3のダーク・リゾネーターをチューニング 5 + 3 〃 8 王者の鼓動、今ここに列を成す、天地鳴動の力を見るがいい、シンクロ召喚。我が魂、レッド・デーモンズ・ドラゴン」

雅&葵「「アレは元キングだから仕方ない（ですわ）」」

遊画「ジャック

すまなかった、お前

を例に出した俺がバカでした!!」

葵「他にも、遊画のセリフって……」

雅「……あつた」

「レベル5のパワー・スター・マジシャンにレベル1のワン・スター・マジシャンをチューニング 5 + 1 〃 6 守りを固めし厚き魂よ、仲間を守りて絆を見せつけよ、シンクロ召喚、超えられない壁、ビッグガード・マドール」

雅&葵「乙」

遊画「……もういいです。俺をいじめたければ勝手にしてください」

葵「・・・さてと、遊画のセリフも言いきり、遊画自体もテンションだだ下がりになったので、次は雅の方に行きたいと思うのですわ」
(BGM変更)

雅「・・・さつき、ウインって言ってなかったっけ、エリア」

葵「ウイン、本名を言わない」

遊画「・・・そうだぞ、ウイン・ダ・アーケンライラ」

雅「・・・はい」

葵「それでは、行きますのですわ」

「レベル4のガスタの静寂 カームにレベル3のガスタ・ガルドを
チューニング 4 + 3 = 7」

シンクロ召喚の輪の中でカームは俺に向かって何故か微笑んでいた。
まるで「妹を頼みます」と言いたそうな目で。

「・・・閃光の風が空間を裂く、ガスタの守護者よ、サイコ・パウ
ーで全てを裂け。シンクロ召喚」

どでかい羽が姿を現した、そして本体が見える頃には、その見た目で
圧倒されていた。

「風の羽、風の超能力者。ダイガスタ・イグルス」

遊画「・・・うん、いつもの雅だな」

雅「・・・(イラリ)」「バキッ」

遊画「グハッ」

葵「それでは邪魔者もいなくなったので、次に行くのですわ」

「レベル6のガスタの賢者 ウィンダールにレベル2のガスタの巫
女 ウィンダ、そしてレベル1のガスタ・イグルをチューニング

6 + 2 + 1 = 9 世界に悲しみの風が吹き荒れる、憎しみ
と悲しみをその胸に刻み、その竜は姿を現す。シンクロ召喚、裁き
を下せ、ウインド・サイキックドラゴン」

葵「これは、デュエルターミナルの世界をモチーフにしたセリフですわね」

雅「……ちなみに、ガルドスバージョンもある」

「レベル2のガスタの巫女 ウィンダにレベル3のガスタ・ガルドをチユーニング 2 + 3 〓 5 響け、邪心に捕らわれし友を救うため、舞い降りろ。シンクロ召喚、羽ばたけ、ダイガスタ・ガルドス」

葵「ちなみに私は好きであんな姿になっているだけで、けーっして邪心に取り込まれていないのですわ」

雅「……何かかつこいいから」

葵「……そうですね、それなら仕方ないのですわ」

遊画「……お前ら、仲がいいな」

葵「あら、もう起きたのですの?」

雅「……早い」

遊画「お前ら……とことん俺には酷い事をするんだな」

雅「……遊画、言葉がワンパターン」

遊画「誰のせいだと思っている。少なくともお前らのせいではあるぞ」

葵「と言うよりは、あなたが言葉をワンパターンにしなけばいいと思うんですけど」

遊画「……そうだ、他の奴らのセリフを振り返ってみよう」

雅「……逃げた」

葵「逃げたですわね」

「レベル4の不死鳥トークンにレベル2のゾンビキャリアをチユーニング 4 + 2 〓 6 アンデッドより現れしモンスターよ、今ここに竜となりて、怒濤の叫びで姿を見せよ。シンクロ召喚、現れよ、デスカイザー・ドラゴン」

「レベル3の不死のミイラにレベル3のアンデッド・マスターをチ
ューニング 3 + 3」 6 アンデッドより現れしモンスター
よ、復讐の業火と共に敵を吹き払い、ハデスの名の元で抹殺せよ。
シンク口召喚、蘇れ、蘇りし魔王 ハ・デス」

葵「これは……モブの言葉ですわね」

遊画「モブ言うな!!」

雅「……次は、これ」

「そしてレベル4のジャイアント・コザッキーにレベル3のモルモ
ット・トークンをチューニング 4 + 3」 7 研究没頭の悪
魔が、新たな力を手に入れる、自らを生け贄に捧げてでも。シンク
口召喚、お前に良い物を見せてやる、これが全てを捧げた結果だ。
合成悪魔 コザッキー」

遊画「これは流石に気持ち悪いモンスターだった」

雅「……夢に出そう」

葵「流石にこれは引くのですわ」

遊画「……つと、これで全て片づいたな」

雅「……今回は主に遊画と私のセリフ」

葵「次回はもつと良いシンク口召喚台詞を聞けたら良いですわね」

遊画「次回はフルも沙耶もデッキを見せている頃だろうな。それで
は次回、また会おう」

雅&葵「「それでは、また次で、それでは」」

遊画「それでは2回言うな」

雅&葵「「……」」

遊画「……ごめんなさい」

(ED曲)

その後

遊画「やっと終わったー、これで帰れる」

雅「・・・お腹減った、何かおごって」

葵「そうですね、ここは普通「これから焼き肉行こうぜー、俺がおごってやるから」と、男らしさを見せなさいですわ」

遊画「アホか、男嫌いが何を言ってるんだ。俺にそんな金があるとでも」

雅「・・・ここに、遊画のシャワーシーンの写真が」

遊画「いつ撮った、そんな写真よく撮れたな。ってか、それを俺によこせ雅」

雅「・・・お腹減った」

遊画「・・・分かったよ、おごれば良いんだろ。今回はパーツとこのうじゃねーか。だから・・・」

雅&葵「「だから？」」

遊画「それをよこせ。そんな写真を持っていたら、俺が精神不安に陥る。そもそも、俺は俺で女性が苦手だ」

雅「・・・(ムツ)遊画」

遊画「な・・・何だよ」

雅「・・・バカ」

遊画「な・・・いきなりバカって何だ。お前は焼き肉をおごってもらいたくは無いのか」

雅「・・・それはそれ、これはこれ」

遊画「な・・・言っている意味が分かんないぞ」

葵「そんな事はいいから、さっさと行きましようですわ」

遊画「・・・ハイハイ、ほら行くぞ、雅」

雅「・・・うん」

・・・やつと心の声でしゃべれるようになった。

そんな訳で、俺は焼き肉をおごらすハメになった。

運良く、金は母が出してくれる事になったので、俺は楽しく、ご飯を食べる事にした・・・。

「……………」

「……遊画？」

正直、俺はいろいろと不安だ。

何故なら、俺は思ったもいなかった運命を背負わされたのだから……。

これから先、俺以上の強敵が現れるかもしれない、それならまだ良い。

問題は、世界を賭けて戦わなければいけないデュエルも、あるかもしれないと言うことだ。

……俺は不安だ。そんな自分一人で出来る程、俺の精神状態は軽くない。

そして過去に起きた事件、俺は自分に封じ込められた記憶を思い出せば、恐らくショックを受けるだろう。

しばらく立ち上がれない程の……。

その2つの事があるから、俺はあまり笑う事が出来ない。
……だが

「遊画、そこのお肉が焼けているですわ」

「……遊画、あーんして」

「それくらい、自分で食べれる」

今の俺には、コイツらがいる。

せめて、この時間だけは笑いたい。

心が落ち着いているこの時に、俺は……。

遊 戯 王 F a t e ラジオ小説その1 (後書き)

本編に戻ります。

この頃に人気投票ランキングを企画したり・・・って、もう少し後か。

第6話「霊使いの過去」(前書き)

今回はタイトル全然関係無いです。

第6話「霊使いの過去」

「クツ、まさかあんなガキにやられるとは思っていませんでした」
俺の前に、上司の男がイスに座っていた。

あんなに偉そうに・・・何だか腹が立つ。

「お前ほどの人間が、ああもあつさりやられるとは・・・その、
公栄 遊画と言う男は強いのかね」

強い？そんなレベルじゃない。

「ヤツは、モンスターと何らかの絆があります」

「ほう、それは一体どういう意味だ？」

「ヤツからは、仲間を大切にすると感じるオーラを放っていた
のです」

「・・・くだらん、仲間を大切にしろ？バカな事で言い訳
を作るな！！いいか、お前の失態はもはや失態どころのレベルでは
無いんだぞ。そんなガキ1人に手こずりやがって、今度そんな失態
をすれば、どうなるか分かっているだろうな」
クツ、分かっている。

「・・・もう良い、今回の処罰は無い事にしてやる」

「はっ、ありがたき幸せを」

「・・・今は耐えるんだ、いずれやってくる、あの日まで。

「それはそうと、これからお前に頼みたい事がある、キミは優秀な
んだ、期待してるぞ、リドウ・シャウデイ」

「・・・分かりました、ナスカ・アルヘルト様」

そう言うと、俺はその部屋を出ていった。

最後まで猫被るように・・・。

「・・・あの方は、俺の命の恩人。決してあの方の前ではボロ
を出さない。それが、俺の生き方だ」

そう、あの方、ナスカは・・・。

第6話「霊使いの過去」

「何でここに母が……」
まずこの状況を整理しよう。

確か雅に飛ばされ、気絶して、ベッドに寝せられ、そして何故雅がここにと聞いて、お母様が連れてきたと言われ、そこでようやく、母が関連している事に気づいた……と言う事が。
どっちみち、何かイヤな予感しかしない。

「あら、いいじゃない。自分の息子の様子を見に来て、何が悪いの？」

相つ変わらずマイペースな母親だ。

「母よ、息子と言っているが、俺はお前の実の子どもでは無いんだぞ。それなのに何故……」

俺でも、母の血を受け継いでいない事ぐらいはお見通しだ。
父親にしても、何1つ似ている所がないから。

「何故って、大事な息子だもの。元誘拐犯とデュエルしたんじゃ、心配になるわよ」

！！

「何で知ってんだ。俺がリドウとデュエルをやった事を」

「何故って、そりゃ私を誰だと思っているの？デュエルステーションの臨時社長よ。それくらいの情報はいやでも耳に届くわ」

……つまり、何でもお見通しって事か。

「それで、俺に何を伝えたいんだ。何か、イヤな予感しかしない、この状況で」

「あら、話を強引にすり替えたわね、でも正解よ」

……ハッキリ言いやがったな、正解と。

「んで、俺は一体どんな事をやればいいんだ、モニター越しにデュエルでもやるのか？それとも、異世界に行つて、何やら怪しいデュエルでもやるのか？どっちみち、俺に拒否権は無さそう……」

「単刀直入に言うわ、遊画、死神のカードの復活を阻止してきなさ

い」

「・・・本当にこの母親は。」

「単刀直入すぎるわ！！いきなり俺の会話中に「世界を救ってきなさい」と言う事と同じような事を言うな。そして会話しろ、全く意味が分からん」

昔からそうだ。

母はいつも人の話を聞きはしない。ある時は俺がイヤだと言っていたのにお化け屋敷に無理矢理入るわ、またある時は俺が言っていた物とは違う物を買ってくるわ、それまたある時は仕送りでエロゲー送ってくるわで、本当に何をしたいのかが分からない母親である。

「・・・面倒くさい男は女に嫌われるわよ。それに、そのままの意味で受け取れば問題なし」

「問題ありまくりだわ！！どんだけ面倒くさがりなんだアンタは、まず人に言う前にお前がどうにかしろ！」

「・・・ったく、これだから遊画は。分かったわ、あなたの言う通り・・・」

ああ何だろう、すっごくイヤな予感しかしない。

するとその予想通り、俺にとってはイヤな予感が命中した。

「説明はするのが面倒だし、まずはメインの方を言うね。霊使いを譲って上げる。それも全部のカードに精霊が入っているお宝を！」

「・・・若々しく言っただつもりかもしれないが、それでも若々しく聞こえるのがこの母親だ。」

そんな事と、霊使いのカードの事と同時に考えたため、頭がパンツクになった。

「・・・多分、俺の顔は今、凄い事になっているだろう。」

「・・・遊画？」

隣で静かに座っていた雅が俺の肩をトントンと叩いた。

「・・・それでも、俺は何も反応を示さなかった。」

それでも、俺は何も反応を示さなかった。

えーっと、霊使い、それに母は若々しく言っただつてもりが……だがそんな事よりも霊使いって……だがかわいく言っただつてもりが……ってアレ。

「……若々しい事どうでもいいー……」

俺はうつかり叫んでしまった。

「遊画、近所が迷惑するわよ」

「そんな事どうでもいいわ！それより、霊使いとはどういう意味だ」
霊使い、そのカードはこの世界で最も人気のあるカードの1枚である。

イラストの関係もあるが、それ以前に人気のある理由、それは昔、とあるデュエル大会である女性デュエリストが出場した。

その時、そのデュエリストが使ったデッキ、それは霊使いデッキだった。

当然、周りからは「そんな雑魚デッキで大会に出てくんない」とか「ファンデッキ、そんな物で勝てる訳がねーだろ、バーカ」とか、ヤジが飛びまくったらしい。

しかしその女性は、そんな物にひるまず、デュエルを行った。

すると、観客は想像も出来ない結果となった。

何と霊使いデッキが勝ったのだ。

しかも、その女性は霊使いを新たなる霊使いに生まれ変わらせていたのであった。

それは、シンクロである。

彼女は霊使いにその霊使いの名前が含まれる「翼」と呼ばれるチューナーモンスターを使い、「霊神」のシンクロを行っていたのであった。

霊神の強さは恐ろしい物だった。

その霊神のモンスターと同じ属性のモンスターなら手も足も出さず、おまけに違う属性であっても「D・N・A移植手術」などで同じ属性にしたりして相手を封じ込め、相手は何も出来ないまま負けてしまうと言ったモンスターであった。

もちろんその女性は優勝し、プロへの仲間入りを果たした。

その後、そのカードの事で調べた研究者がいたが、彼が調べた結果、何も情報は無かったと言う。

しばらくして、インダストリアルイリユージョン社の会長が公式発表で「アレはある女性のために作られたカードなのデース。それにあの女性が持っている霊使いはオリジナルの霊使いなのデース。いずれあのカードとその女性は大物になるのデース」と発表した。それからと言うもの、あのカードは大量の業者が狙うカードとなった。

それがきっかけでその女性はプロを引退したが、勝ったデュエルは390回、負けたデュエルは何と3回なのである。

たった3回しか負けた事のないデッキ、そりゃ人気が出るのも仕方なかった。

そんなこんなで、今でもそのオリジナルのカードは売値が付けられない程に高いカードとしてネットなどで伝説となっている。

ちなみに余談だが、たまーに恐ろしい値段でオークションに出されているらしいが、それらは偽物のカードらしく、それでボロ儲けしようとする人が後を絶たないらしい。

そんなこんなで、霊使いのカードは今でも大変人気のあるカードなのである。

しかし俺は興味が無く、量産の霊使いを1枚持っていたが、無くしてしまった。

しかし今回は聞き逃せなかった。

何故なら、その女性デュエリストと言うのは、ここにいる母なのだから。

「どついう意味って、そのままの意味よ。昔私が使っていた霊使いの全てをあなたに譲ってあげるって言っているのよ」

・・・俺は少し興味があつた。何故ならあのデッキは宝玉獣と呼ばれるデッキと同じで本物なら値段など付けられない程のデッキなのだ、だから易々と譲れる品物ではない。

「……だが、俺はそんな物はいらぬ。俺は異性には……」
「あら、でも私が送ったエロゲーは全てのルートでハッピーエンドを迎えていたじゃない」

「……あのゲームはイジメか、俺がバカ正直に進んでいったおかげで、全てのルートをバットエンド無しで終えたのである。それはある意味、奇跡なのであるが。」

「……遊画、ここから先は真面目に聞いてちょうだい」
「な……何だ」

見ると、母の顔が普段では考えられない程に、真面目な顔になっていた。

「雅の話は聞いたね」

「……ああ」

「雅は心の闇を持っていた。でもそれは、雅だけに限られた問題では無いの」

「……それって。」

「この子達も、大きな心の闇を持っているのよ」

そう言うと、母は霊使いのカードを俺に見せてやった。

「彼女ら、彼も、大きな心の闇を持った精霊。何故ならみんな、元々は人間だったのだから」

んな……それじゃ、雅……いや、ウインも、元々は人間……！！

「……始まりは数千年前、当時魔女狩りがあったのは知っているよね」

「……なるほど、通りで雅の口から魔女狩りが。」

「その時、大量の女性が虐殺されたのは聞いての通りよ。そして彼女らもその被害者、一応生き残ってはいるけど、その時に受けた傷は、決して癒される事もなく、数千年の時を過ごしていた」

そんな長い時期を、コイツは過ごしていたのか。
さぞや辛かっただろうな。

「……いや、数千年間封じ込められていたと言った方が正しいのかもしれないわね」

「ふ……封じ込められていた？」

「そう、とある遺跡にね。私はその遺跡に昔、一度だけ行った事があるの。すると遺跡の最深部にとある石版があったの。その石版に手を触れた瞬間、彼女たちの精霊が出てきた。そしてペガサス会長がそこにやって来て、事情を話すと、次の日にカードを渡してくれた。それが、このカード」

「……それが、母とコイツ等の過去、だがしかし母は一体、何をやらせたいんだ。」

「でもね遊画、私でもこの子らの心の闇は聞けなかったわ。それなのにあなたはそれを聞けさせた。それは、もしかしたらこの子らがあなたを選んでいるのかも知れない。その論理が正しければ、あの時ペガサス会長の言っていた霊使いの本当の力を……」

霊使いの本当の力、何だそれは。

「……だとしても、俺は無力の塊だ。雅にしても、俺にその恨みをぶつける事ぐらいしか出来なかったから」

すると、母は俺のほっぺを優しく触った。

「ひやいつ、な、何をする」

「それでもあなたは、雅……いや、ウインの心を開かせた。この子は昔から男性に対して敵意を見せていた。でも、遊画に会わせてそれが大きく変わった。あの人に会わせた時でも少しは変わったけど、大きく変わったのは遊画に会ってから、だからあなたには、心を分かり合える心を持っているのよ」

心を分かり合える心？そんなの俺が持っている訳がないだろ。だって俺は……。

「俺は、今まで喧嘩で物事を済ませてきた事もあった。そんな俺が心を分かり合う事なんて出来る訳が」

「……でも、自分の体で恨みを放たせるなんて事は、誰も考えない。それどころか自分が痛い目しか見ないのに、それでもあなたはそれをやった。それで私は感じたの、遊画は、自分の心が閉じているのにも関わらず、他人に優しいと」

閉じている、それは女性に対しての事を言っているのか。

「・・・だから、他の奴らにもそれをやれって言うのか。だがな、雅みたいに心を開かせろって、無理に決まっているだろ。俺は・・・俺は」

っ！言葉が出ない。まるで過去に何かの失態を犯したのに、それを思い出せないみたいな感触だ。

「遊画、あなたの言いたい事は分かる。でもね、これは世界の命運を握っているのよ。もはや私ではどうする事も出来ない、ユグドラシルに選ばれているあなたこそがどうにか出来る事なのよ」

「まただ、ユグドラシル・・・一体何の事だ。」

「母よ、ユグドラシルとは一体何なんだ」

「・・・ユグドラシル、それはまだ解き明かされていない謎の竜、又の名を神世界の竜、そして、この世界に存在するハズの世界樹の中に存在する、赤き竜と同じ強力な精霊、それがユグドラシル」

赤き竜？何だそれは。

「赤き竜、それは5000年前に現れた邪神を封じ込めた竜の事で、その竜は人間界に5つのパーツとして封印された竜の事。それは3ヶ月前に起きたネオ童実野シティでの不可解な事件と関連しているけど、それは別の話よ」

「別の話って、それじゃ母が伝えたい、本当の話って」

「・・・死神のカードの事よ」

「母よ、死神のカードとは一体、どんなカードなんだ」

「コザッキーが言っていた事と、母の言っている事、どうやら母の方が信用できそうだ。」

「死神のカードとは、その中に存在する精霊と契約を交わす事により、絶大的な力を手に入れるとされている伝説のカード、その契約により自分の魂を差し出さなければならぬけど、その強さは絶大的で、使えば世界をも自分の思うようになる事が出来る、危険なカード。死神のカードにもそれぞれ特有の効果を持っていて、戦闘の強さと相手を徐々に弱らせる事で知られている、ネルガル。そして

相手を帰る所を無くす、エレシユキガル。そして、恐ろしい力を秘めており、相手を一瞬で没落させる事の出来る、ナムタル」

「ネルガル、エレシユキガル、そしてナムタル」

俺はそのカードの名を、口に出してしまった。

「そう、それらのカード、それらをどうにかしないと、いずれこの世界に危機が訪れる事になる」

世界の危機、つまりは母でもどうにも出来ないって事が。

「……俺には、その道しか無いのか。」

「今回は……逃げる事は出来ないようだな」

「ええ、これで分かったでしょう。あなたはあなたしか出来ない事をやらなければいけないと言う事を」

「……諦めるしか無い、って事が。」

「これだけ頼まれれば、断るのも断れねえ。全く、イヤな性格だよ、俺は」

そう言っていると、母がホツと胸をなで下ろしていた。

「ふう、話が息子ながら、どうも強情なところがあるね。ここまで言っつてやっと納得してもらえらるとは」

「残念ながらもまだ完全に納得した訳ではない。俺は頼まれたからやるうと言っているだけだ」

そう言っていると、雅が突然俺に向かって「……それじゃ、宜しくお願いします」と、普通の男性ならば一発でノックアウトしそうな笑顔で言ってきた。

「あらあら、ウィンは嬉しそうな顔をしているわね。昔遊画にお乳を上げていただけの事はあるわね」

「ふーん、そうなんだ……」

「……俺はさつき、聞き逃してはいけないような事を聞いた気がした。」

「母よ、さつき言った事をもう一度言ってもらおうか?」

「だから、アンタはウィンの母乳で育った過去があるのよ」

ははは、何だ。雅の母乳で……って

へー、エリア以外ねえ。

「それで、エリアの危険度はどのくらいなんだ？」

「うーんとねえ、一言で言えば……ウイン以上に男性が嫌い」

うっわー、またまた厄介なヤツがいたもんだな。

「はあああああ」

俺はうっかりため息をついた。

「……遊画、幸せが逃げる」

「幸せ？母がここに来た時からすでに逃げている、つーの」

「それはある意味失礼なんじゃないの」

「……はあ、何だろうな、この状況。」

急展開すぎても訳を理解している俺がもはやすげーよ。

「……そうだ、ここにエリアがあるデュエル大会に出た時のDVDがあるから、特別に見せて上げる」

そう言うと、母は自分のバックから1枚のDVDを取り出した。

そして勝手に俺の部屋のDVDレコーダーにセットして、その時の映像を再生した。

「何か、イヤな予感しかしない」

そう思い、俺はその映像を見る事にした。

『それでは第3回戦、悪魔の儀式を操る魔女、干霊かんれい 葵VSあおい儀式で彼に勝てるヤツなどいらないとも言われている儀式使い、ロフ・イートルのデュエルです』

「ははっ、こんなかわいいお嬢ちゃんが対戦相手かあ、ま、せいぜい俺を満足させるように頑張りな」

「……ウザイのですわ、そんな無駄すぎる喋りをする余裕があるのですしたら、さっさと準備をするのですわ」

「良いね、こうツンってしているヤツ、ベッドの上になるとさぞや
凄いだろうな」

「さっさと始める」

「っ、言葉が汚すぎるのも問題だが、まあ良いだろう。お前なんか
に負ける俺ではないんでね」

『それでは葵VSロフのデュエル、スタート』

「デュエル」
「LP4000」

「まずは俺のターン、俺はセンジュ・ゴットを守備表示で召喚（セ
ンジュ・ゴット・天使族・DEF1000・光・4・効果）して
モンスター効果により、デッキからロード・オブ・マジジャンを
手札に、そして手札から二重召喚を発動。このターン2回の通常召
喚を行える（デュアルサモン
二重召喚）魔法・効果、このターン、自分は2回の通
常召喚を行える。その効果により、俺はソニックバードを召喚、守
備表示だ（ソニックバード・鳥獣族・DEF1000・風・4・
効果）そして効果により、高等儀式術を手札へ。そして発動、高等
儀式術。デッキから通常モンスターを墓地へ送る事により、そのレ
ベルと同じ儀式モンスター1枚を特殊召喚できる（高等儀式術・儀
式魔法・効果、手札の儀式モンスター1体を選択し、そのカードと
レベルの合計が同じになるように自分のデッキから通常モンスター
を選択して墓地に送る。選択した儀式モンスター1体を特殊召喚す
る）俺はデッキからスパイラルドラゴンを墓地へ、そして現れよ、
ロード・オブ・マジジャン」

その瞬間、2本の杖を持った、明らかに悪そうな笑みをした魔術師
が現れた。

その魔術師は「イヒヒヒ」と、笑い声も漏らしていた。

「……魔術師」

「そうだ、これが俺のエース、ロード・オブ・マジジャンだ（ロ
ード・オブ・マジジャン・魔法使い族・ATK2900・闇・8・
儀式・効果）このモンスターの召喚時、魔力カウンターが1つ乗る。
カードを3枚伏せて、ターンエンド」

いきなり攻撃力2900のモンスターを出されたが、エリアはそれでも表情を変えなかった。

「私のターン、手札からリチュア・チェインを召喚へリチュア・チェイン・海竜族・ATK1800・水・4・効果」このモンスターの召喚時、デッキから3枚をめくる」

エリアはデッキからカードを3枚引くと、その中の1枚を相手に見せた。

「その中に存在する儀式モンスター、または儀式魔法を手札に加える事ができる。私はイビリチュア・グラント オーガを手札に加える。そして他のカードは好きな順番でデッキへ戻す。そしてチェインでセンジュ・ゴットを攻撃、チェイン・マテリアル」

「罨カードを無視して攻撃するとは」

リチュア・チェインの鎖が放たれ、センジュ・ゴットを貫いた。

「そしてカードを1枚伏せて、ターンエンド」

「あつはつは、上級モンスターを破壊出来ないと見る、安心しろ、このターンで終わる、俺のターン」

相手はカードを見ると、ニヤリと笑った。

「俺は3枚の罨カード、漆黒のパワーストーンを発動、魔力カウンターが3つ、その罨カードに置かれるへ漆黒のパワーストーン・永続罨・効果、発動後、このカードに魔力カウンターを3つ置く。自分のターンに1度、このカードに乗っている魔力カウンターを1つ取り除き、フィールド上に表側表示で存在するこのカード以外の魔力カウンターを置く事ができるカード1枚に魔力カウンターを1つ置く事ができる。このカードに乗っている魔力カウンターが全て無くなった時、このカードを破壊する」そしてロード・オブ・マジシヤンのモンスター効果により、手札を1枚墓地に送る事により、自分フィールド上に存在する全ての魔力カウンターを取り除き、相手に取り除いた魔力カウンター1つにつき、600ポイントのダメージを与える」

つまり、合計7つの魔力カウンター・・・4200のダメージ！

「さあ、これで終わりだよ、魔力吸収、解き放て、波動弾」

ロード・オブ・マジシャンの回りに謎の魔術陣が出来上がり、その中から波動弾が葵に向かって、放たれた。

そしてその弾は、狂う事無く命中した。

「……つふつふ、またまた1ターンキルを……んな」

ロフは絶句した。何故ならそこには、仕留めたハズの相手が、平然と立っていたのだから。

「……んく、なかなかやるようですね」LP4000

1900}

「な……何故だ、さっきのダメージは」

「残念ですが、そう簡単にやられないのが女の底力なのですわ。手札に存在するダメージフェーダーの効果により、相手がダメージを与える効果が発生した時、このカードを特殊召喚する事により、そのダメージを半分にする事ができる、さらに自分が受けた効果ダメージ分の攻撃力を持つモンスター1体を、デッキから手札に加える事ができる。その効果により、私はデッキのシャドウ・リチュアを手札へ」

見ると、そこにはさっきまでいなかったモンスターがゴーン、ゴーンと鐘を鳴らしながらそこにいた。

「ダメージフェーダー・悪魔族・ATK0・闇・1・効果〆ちい、小賢しい。このモンスター効果を使用したターン、このターンは攻撃が出来ない、そして漆黒のパワーストーンの魔力が無くなった事により、この3枚のカードは破壊される。ターンエンド」

「私のターン、私は手札のリチュア・シャドウの効果により、このモンスターを墓地へ送り、デッキからリチュアの儀式水鏡を手札に加えるのですわ」

シャドウ・リチュアの残像が、葵に向かって「あとは頼んだぞ」と言うようにして消えていった。

「そしてリチュアの儀式水鏡を発動、フィールド、または手札から儀式に必要なレベル分のモンスターを墓地へ送り、リチュアと名の付

く儀式モンスター1体を特殊召喚するのですわ。リチュアの儀水鏡・儀式魔法・効果、「リチュア」と名のついた儀式モンスターの降臨に必要。手札、自分のフィールド上から、儀式召喚するモンスターと同じレベルになるようにモンスターをリリースしなければならぬ。また、墓地に存在するこのカードをデッキへ戻す事で、自分の墓地に存在する「リチュア」と名のついた儀式モンスター1体を選択して手札に戻す。場に存在するリチュア・チェインにダメージフェイダー、そして手札のリアルをリリースして、降臨せよ、リチュアの怒りを思い知りなさい。イビリチュア・グランドオーガ」フィールド上に謎の紋章が浮かび上がった。

そしてその中から、1体の大型モンスターが姿を現した。

そのモンスターは、一言で言うならワニみたいな見た目で、肩などに棘が付いており、どこからともなくあるモンスターに似ているモンスターであった。

「な・・・こんなモンスター、見た事がありません」

「これが私の魂、イビリチュア・グランドオーガ。イビリチュア・グランドオーガ。爬虫類族・ATK2900・水・9・儀式、効果。イビリチュア・グランドオーガのモンスター効果発動、このモンスターが儀式召喚に成功した時、相手の手札のカードをデッキへ戻す・・・けど、手札は0、ならば2つめの効果を使用させてもらう。このモンスターの効果は3つある。1つは儀式召喚時、相手の手札が3枚以上の時、相手は手札のカード3枚をデッキへ戻さなければならぬ。そして相手はデッキからカードを1枚ドローする。そして2つめは、相手の手札が2枚以下の時、相手フィールド上に存在するモンスター1体の攻撃力を半分にして、相手はデッキからカードを1枚ドローする」

「んな、それじゃ攻撃力は・・・半分の1450になる！「ロード・オブ・マジシャン」ATK2900 1450」

「そして手札に存在するリチュアの儀水鏡を相手に見せる事により畏発動、儀水鏡の瞑想術。墓地に存在するリチュアと名の付くモン

スター2体を選択し、手札に加える。儀水鏡の瞑想術・罨・効果、手札の儀式魔法カードを相手に見せ、自分の墓地に存在する「リチュア」と名のついたモンスター2体を選択して発動する。選択した墓地のモンスターを手札に戻す。その効果により、墓地に存在するエリアルとシャドウを手札へ。そして2枚目のリチュアの儀水鏡を発動」

「！ま、まだあったのか」

「そしてシャドウ・リチュアの効果により、このカード1枚で儀式モンスター1体のリリース要員にする事ができる。シャドウ・リチュアを墓地へ、そして現れなさい、イビリチュア・ソウルオーガ」再び謎の紋章が浮かび上がり、その中から今度もまた、ワニ型のモンスターが姿を現した。

「ソウルオーガ・・・クツハイビリチュア・ソウルオーガ・水族・ATK2800・水・8・儀式、効果」

「ソウルオーガの効果により、相手のフィールド上に存在するモンスター1体を、手札のリチュア・エリアルをコストにロード・オブ・マジシャンをデッキへ戻す」

ソウルオーガがロード・オブ・マジシャンを持ち上げ、思いつ切り相手に向かって投げ飛ばすと、そのモンスターはデッキに強制転換された。

「クツ、これでは俺を守る盾が・・・だが、まだソニックバードが」

「まだなのですわ、私は手札からリチュアの波動を発動、自分フィールド上にリチュアモンスターが存在する時、相手フィールドのモンスター1体を破壊する。リチュアの波動・魔法・効果、自分フィールド上に「リチュア」と名の付くモンスターが2体以上存在する時に発動する事ができる。相手フィールド上に存在するモンスター1体を選択して破壊する。また、このカードが相手カードの効果により墓地に送られた場合、デッキから「リチュア」と名の付く儀式モンスター、または儀式カードをデッキから手札へ加える事ができる。それにより、ソニック・バードを破壊」

ソニック・バードが雷により破壊され、ロフは焦っていた。

「ま……マズイ」

「バトル、イビリチュア・ソウルオーガでダイレクトアタック、ア
クア・キャノン」

ソウルオーガの水の波動が、相手に命中した。

「クツ」 ㄥLP4000 1200ㄝ

「そしてイビリチュア・グランドオーガでダイレクトアタック。思
い知りなさい、私の怒りを……グランド・オーバーソウル」

グランドオーガの拳から謎のオーラが放たれ、そして相手に向かっ
て、思いつ切り殴り飛ばした。

「うあああああああああああ」 ㄥLP1200 0ㄝ

『おおっと、今回の優勝候補であったロフ選手が倒された。これで
次の対戦に進められたのは、葵選手です』

『フン、ざまあないですわね』

俺はその映像を見て、言葉を失っていた。

……何、この問題児。

これって……ただの八つ当たりじゃね。

……いや、これは完全に八つ当たりだ。何故なら、彼女から伝
わってくるこの感覚、何か昔……男性と何かがあったような怒り
を感じられる。

それがどんな怒りなのかは分からないが、少なくとも雅以上の怒り
だ。

「だが、何だあの男性に対する恐ろしい態度は、あんなヤツの心を
開かせるなんて、ほぼ無理に決まっているだろ！」

「無理ってあんたねえ、アレをどうにかしないと先に進めないのよ」

「……遊画、ファイト」

恐ろしい、ただでさえ雅から暴力を振るわれているのに、あんなヤツと鉢合わせになった瞬間、俺の命が危うくなる。いや、良い方で骨の1本や3本持つて行かれて、悪ければ体が恐ろしい事になる。

「つてやだ、死にたくない」

「・・・遊画、安心して」

「な・・・なににだ」

「・・・私が側にいる。だから、決して殺されるような事は、多分無いから」

「・・・あ、あはははは」

多分ねえ、コイツの言う多分は・・・信用してはいけない。

「・・・母よ」

「何？」

「俺の生きた証って、あるのかな？」

「無いわね」

ハッキリ言いやがったな、オイ！

「俺は・・・死ぬのか。短い人生だったな、俺の本当の父さん、母さん、もしも死んでいるのなら、今行きます」

「・・・アレ？」

「そう言えば、エリアは今どこにいるんだ？」

さっきフツと思ったんだが、その張本人は今ここにいないとなるとどこにいるんだ。

「ああ、それならさっきまでここにいたわよ。アンタが気絶している間にどこかへ行ってしまったけどね」

「・・・そのまま帰ってくるなよ。帰ってきた瞬間、俺の命の灯火が無くなる。」

「それにしても、のどが渴いてきたな。下の冷蔵庫の中からジューズでも持つてくるか」

そう言つと、俺はベッドから起き出した。

その時、不意にフラツと来た。

立ちくらみである。

「っ、頭が」

そして俺は、雅に向かって倒れ込んだ。

「……大丈夫、遊画？」

俺は雅に支えられた、少し体調が整ったのを確認し、再び立ち上がるうとした。

「よいしょ……」

フニヨン

何だか右手に変な感触がした。

この感触、前にもどこかで……ははは、まさかな。

俺はおそろおそろ自分の右手の位置を確認した。

その位置で俺の右手は……雅の胸を握りしめていた。

「……んあ」

ちよ……

「ごめん雅、俺は決してわざとでは無いからな」

そう言つて、すぐに右手を放した。

……柔らかかった、アレが女性と言う者なのか。

「……遊画」

「な……何だよ」

「……エツチ」

「じ、事故だ、アレはまさしく事故だ」

「……どうだった、私の胸は」

「こ、答えられる訳が無い……」

「へー、胸がどうしたのですの？」

「どうも……え？」

俺は一瞬で、生命の危機が訪れたのを実感した。

何故なら……。

「女性は苦手とか言いながら、胸は平然と触れるのですねえ。それつて、矛盾していませんか？」

そんな高級感漂う喋り方とは裏腹に、明らかに言葉に殺気が漂っているこの感触。

コイツが……コイツが……。

「……エリア、エリア・ルイマリン」

エリア・ルイマイン、それがコイツの本名らしい。

「ここはあえてフルネームで呼ばせてもらうけど、どう言う事、ウイン・ダ・アーケインライラ」

雅も、本当の名前はあるのか。

「……イヤなタイミングで帰ってきた物ねえ、まさか遊画が雅とのトラブルシーンの時に帰ってくるとは」

俺はこの時実感していた。

これからの生活は、波瀾万丈と化す事を。

そしてこれから先、コイツらの心の闇を開かせる時、悲しい現実に直面させなければいけない事を、その時の俺は、その覚悟を決めた。少なくともエリアに限った問題ではない、他の霊使いの心の闇もまた、深すぎる事も、その時にはすでに感じていた。

だが俺は逃げ出さない。

一度決めた事と言う訳ではなく、昔ある人から言われたように「遊画、お前は全ての人を包み込める人になれ。そうすれば、お前の存在意義を知れるハズだ」と言う事だ。

俺はその意味を知りたい。俺の存在意義などと言う物では無く、全てを包み込んだ先にある物、俺はそれを知りたいんだ。

そう、昔から消極的に生きてきた俺を見た、遊星が言った言葉だ。

何か、深い意味があるハズだ。

あの時、子ども達と一緒にいた時に数分で分かり合えたあの時に……

・遊星は何を感じたんだ。

俺はその時にはまだ、その言葉の意味すら分かっていなかった。

だが今回、母はそれを見込んでコイツらの心の闇を開けて欲しいと頼んだんだと思う。

母は情報網が恐ろしいからな、そんな情報はすぐにでも入ってくる。世界を救う、そして他人の心を受け入れる。

そんな凄い事を、本当にやってしまうとはその時の俺は、思ってい

なかつた。
続く

次回

心の闇、それは絶対に入る事の出来ない領域、雅もまた、そんな領域をまだ残している。

そしてエリアの心の闇とは一体、次回、遊戯 王Fate 第7話「心の闇」

エリア、お前まさか……。

次回のキーカード

クリボーナイト・戦士族・ATK200・闇・1・チューナー

第6話「靈使いの過去」(後書き)

次に行きます。

第7話「心の闇」（前書き）

いい加減に自分のパソコンに切れ始めました。

何、このワンクリックがダブルクリックになる現状。

しかもこのパソコンはワンクリックですぐに進むので、大変迷惑に感じています。

って、愚痴っても無駄か。

「……どういつつもり」

「キサマは知りすぎた人間だ、本当なら消し去りたいのだが……でも、それが出来ないのよね。」

「私を消せば、いずれ来る脅威に立ち向かえなくなるわよ」

「……フン、俺は別に構いはしないが、上の奴らがそうはいかなくてな……我々でも回避できない脅威、それに立ち向かえるのは……」

「公栄 遊画、彼にしか出来ない事。私も最初は信じられなかったけど、パンドラの箱の呪いで私も確信したわ。でもね、未来が見えると言う事は、過去も見えると云う事よ。彼の過去に、貴方達イリアステルが絡んでいながら、どうしてアレを止められなかったの！」

「……俺には関係ない。そもそもあの計画を実行したのは我々イリアステルではなく、我々が利用していた宗教団体だ。あの宗教団体は単独行動を起こしたからな、すぐに消してやったが、生き残りがいたようだ」

「……それが結果として、遊画にあんな悲劇が生まれたのに。」

「だったらあの悲劇は歴史から消去しなくて良いの？あの悲劇があったから、イリアステルの名前が表に出たと言うのに」

「……残念ながら、あの悲劇は我々にとって有利な事になったからな、わざわざ消去しなくても済んでいる」

「……!!」

「……自分たちの利益の事しか考えないなんて。」

「それでも貴方達は歴史の管理者なの？」

「それが我々イリアステルだ。間違った歴史を改ざんするのが我々の役目、そんなガキ1人の為に動く訳がない」

「でも……」

「うつとらしい、これ以上言ったらお前の存在自体を消すぞ!!」

「……やってみなさいよ、私はパンドラの呪いのおかげで歴史の改ざんの影響を受けてないし、そもそもそんな事をやれば、遊画が黙っていないわよ。彼は……」

「……つ、これだから気が強い女は嫌いなんだ。もういい、俺はまだ別の用事があるからな、これで失礼させてもらう」
そう言うと、目の前の空間に向けて剣を一振りして、空間を切り裂き、その中に逃げるような形で入り、そのままどこかへ消えていった。

「つ、ついムキになりすぎたわね。私とした事が……」
でも、これからの事は大体目に見えている。

それがどんな事であっても、だがそれは不完全な形でだ。

未来が見えるのは途切れ途切れにしか見えない、それがパンドラの呪いだ。

未来が見えると言うのは、一部の人たちにとっては幸運なのかもしれない、でも私にとっては不幸な事だ。

その呪いを受けた時、私は自分を心から呪った。

だが、そんな事を背負いながらも私は生きている。

「例えその先にある物が絶望であっても希望であっても、一部の希望を元に私は生きている」

そう、それが例え、遊画の過去が見れて、未来が見えないのもであっても。

第7話「心の闇」

次の日

目を覚ました時に俺は、何故かベッドの隣で寝ていた。

体中が痛い、ベッドから落ちたのかな。

あはははは全く、ドジだな俺は。

そう思いながらも、俺は不意に隣を見た。

そこには、カードの束が置いてあった。

「これは……昨日の……」

俺は認めたくない現実で一気に絶望が体から湧き出た。

「そうか……昨日のアレは、夢じゃ無かったのか」

「！！う、うるさい」

バシン、再びハリセンで頭を叩かれた。

「いって、寝起きで頭が回らない時に頭を叩くとはいい度胸だ。俺を怒らせるとどうなるか体で教えてやるるか」

女性とは言え、少しぐらい痛い目を合わせないと今後同じような事が起こるだろう。

「……別にええけど、言葉は考えた方がええで」

「?どういう意味だ」

「だって……さっきの意味を別の意味で捉えたら、何かいやらしい言葉に聞こえるがな」

「……考えてみれば、体で教えてやると言うのは、どうも死亡フラグのような気がした。

「自分、さっき死亡フラグのような気がした思ったよな?」

カンが良いのは霊使いの能力なのか!

「ちなみにこの部屋には、ウチとアンタと、ワインがいはあるけど、まあそれは見れば………ハイ?」

ヒータと俺は見れば分かる、だがワインの姿は……。

「……ここ」

後ろから声が聞こえたため俺は慌てて後ろを振り向くと、俺が寝ていたベッド……の、俺の目線の届かない真後ろにその張本人、ウインこと雅が寝転がっていた。

「……遊画」

地響きが起きそうな低い声で、俺の名前を呼ぶ雅、怖い……何かのホラーゲームに出そうな勢いだ。

「な……何だ」

「……ヒータに何するつもりだった?」

マズイ、この状態で痛い目を合わせるつもりだった……と答えれば「……痛い目……奪うつもりだったの?」と言われ、そのま

ま俺は半殺しにされ、だからと言ってそのまま黙っていれば「……答ええないのなら、実施で」と言われ、そのまま半殺しへ……って、

俺には半殺し以外の選択肢は無いのか！！

クツ・・・こうなったら

「ヒータを殴る・・・」

殴ると言う前に殴るとは、流石は母の側にいただけの事はあるな・・・

「グボア」

「・・・女性に暴力を振るうとどうなるか、身にしてみても味わいなさい」

ゼロ距離からの溝打ちとは・・・効くどころの問題ではない。

「あ・・・味わう前に・・・お前は・・・暴力を・・・自重・・・しろ」

再び目の前が真っ黒になった。

再び目が覚めた。

時刻は午前9時50分、あれだけ痛い目に合ったのにわずか40分の気絶で完治するとは・・・人間の進化は恐ろしい。

そう思っていると、グウウウウとお腹が鳴った。

「そう言えばまだ朝ご飯食べてなかったな」

くだらないやりとりをやっていたおかげで、朝飯を食べる時間帯が大幅にズレた。

「考え事は朝を食べながらも考えよう」

そう思い、俺は下に降りていった。

昨日買っておいたパンを食べると、デッキ調整のため、カードを床に置いた。

「スター・マジシャンなんて2年ぶりに使うからな、どんなデッキだったかを見るのと同じで、少し霊使い導入のために改良しようかな」

霊使いを導入しないと、あとで母からどんな仕打ちを受けるかが分かったもんじゃない。

よし、これがこうなり……これも……っと。

「うまく霊使い導入しているが、何でこんなにコンボが恐ろしい程に出来るんだ！」

スター・マジシャンのモンスターは魔法使い族をサポートするためのモンスターであるため、他の魔法使いデッキに導入しても何の問題もないモンスターである事は知っていた。

だがしかし、そうであってもここまで良いコンボが作れるとなると話は別だ。

「まさかな……このデッキ、確か母がくれたデッキ……」

最初からこの事を見越して母はこのデッキを渡したのか。行動力だけは素早い母な事だ。

そう思いながらも、俺は何とか霊使いを、全てでは無いがデッキへ納める事に成功した。

「はあー、ため息だけしかついていない気がする、最近」

「それは大変ですね、ため息ばかりついていると幸せが逃げますよ？」

「確かにそうだが……誰」

気配が全く感じられなかった、コイツ……何者！

「ああ、私ですか。私はダルクと申します。貴方が遊画さんですか」

「そ……そうだが」

「今後ともよろしく願います」

そう言うと、ダルクは再びどこかへ消えていた。

何だったんだ、さっきのは……。

まあ、気にする事は無いさ、さてと

「これで何とか完成したな。問題が……」

これでどこまで行けるかだ。

実践段階まで行けるかが問題なので、誰かとデュエルしたいのだが……。

「今日は休日だからな、沙耶やフルはどこかへ出かけているだろうし、どうするか・・・」
雅とやるのも1つの手だが、さっきやらかされた後だしな、顔を合わせたくない。
となると・・・。
「エリアに・・・って、呼んだ瞬間殺されるな」
しょうがないので、俺はシャワーを浴びる事にした。
まあ、明後日誰かとデュエルすれば良いだけの話だ、今すぐにしなくても問題ないだろ。

「」
汗でベトベトになった体が洗い流されて気持ちいい。

見た目が女性っぽいと言われたりして腹が立ったりするが、今自分を見ると・・・。

「・・・はあ」

本当に女性っぽくてため息が出る。

だったら長い髪を切れば良いだけの話じゃん・・・と思えるが、何故か俺はこの髪型が一番落ち着く。

何故かは分からない、だが何か・・・心に引つかかるような気が・・・。

そう思っていた時、突然風呂場のドアが開いた。

「・・・え」

「・・・」

俺の目線の先には、昨日俺を雅と一緒にランチした1人、エリア・ルイマリンが真っ裸の状態で立っていた。

「・・・は、はははは」

浴びたばかりなのに汗が尋常じゃないほど出てきた。

「私の裸を見るなんて、覚悟は出来ているのですの？」
怖ええ、目が完全に黒い。

「ま・・・待て、その着替え見れば分かるだろ。先に入ってくる事ぐらい・・・」

「知らないのですわ、って言うか、そこに着替え無かったのですのけど」

見ると、確かにそこに置いていたハズの着替えが無かった。

「・・・アレ、おかしいな。確かそこに・・・」

不意にエリアの足元を見た、何故かそこに落ちていた。

「・・・」

しばらくの沈黙と共に、俺は本気で人生最後の瞬間を恨んだ。

何故・・・着替えが落ちていたんだ。でも普通気づくよな、落ちていたにしても・・・あっはは、そう言えば灯台下暗しと言うことわざがあったな。

足元に落ちていても関わらず・・・。

「あの・・・スマン」

「スマン・・・で、許せるかあああああああ

あ

エリアの殺気を感じ、そして俺はそのまま人間技とは思えない程に殴り飛ばされた。

言葉を発生させるヒマもなく、そのまま気絶した。

それから30分後、気絶から復活した。

流石に今回は体が痛い・・・が、どう考えても俺は悪くない。

だが今となってはどうでもいい。

しかし・・・

「女性に一日で2回殴られるって、どんな神経しているんだよ、俺は」

「・・・悲しくなったので、再びシャワーを浴びる事にした。

今度は誰も邪魔が入らなかったおかげで、スッキリした。

リビングに戻ると、エリアがふてくされていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「な、なあ、怒っているのか、さっきの事」

「別に、全然怒ってないですわよ」

しかしその目は完全に怒っている・・・・と言っよりは親の敵を見るような目になっていた。

『全くエリの裸を見るとは、お前は許せない』

そんな声が聞こえた。

エリアの横に誰かいるのを発見した。

「・・・・・・・・えーつと、ヴァニティか？」

ヴァニティ、リチュアデッキのサポートカードであり、イケメン男子のカードでもあった。

『呼び捨てとはキサマ、いい度胸しているじゃねーか。俺を怒らせるとどうなるか・・・・・・・・』

・・・・・・・・アレ？

「そう言えばエリア、何故コイツは男なのに普通にされてるんだ」

『人の話を聞けー』

「え、だってヴァニは、男として見ていない以前に、人間としても見ていないから大丈夫なのですわ」

その言葉を聞いて、ヴァニティは酷く落ち込んだ。

『そんな・・・・・・・・この俺を・・・・エリ一番の相棒と呼んでいるこの俺を・・・・男としてだけではなく、人間として』

「エリア、とりあえず謝れ。アンタ最悪だな、ってか男心をもてあそぶな」

「男心、何それ」

クツ、男心すら知らないとは・・・・

「・・・・・・・・遊画」

途中で雅が出てきたが関係ない。

「純粋な男心を傷つけるな!!!」

「『・・・・・・・・いや、乙女心を知らないお前にだけは言われたくない

な『』」

何故か雅と一緒に出てきたカームとウィンドールからもツッコまれた。

『そもそも遊画くん、雅ちゃんに向かって重いつて言った時点であなたにそれを言う権利は無いと思うんだけどなあ』

「・・・お姉ちゃんの言う通り、貴方にそれを言う資格がない」
女性軍団に俺の味方はいないのか。

「それやったら平然とウチを殴ろうとした行動自体、女性を何とも思っていない証拠やな」

・・・う

「うわあああああああああああああ」

何だか泣きたくなつたので、俺は外へ逃げていった。

女性なんて、女性なんて・・・・・・バカ野郎おおおおお

おおおおお

アーカイトシティ、時計台前

何となく時計台にやって来てしまったのであるが、何もする事が無い。

「・・・ふ、ふふふふふふふふふふ」

そんな言葉をこぼしながら、時計台内部に入ってしまった。

そこには・・・

「おや、いらつしやい遊画。どうした、女性に振られたのか？」

そんな冗談を咬ます男性、名をバーム・バエルと言う。

「こんにちは・・・バームさん」

「元気が無いようだ、ホントにどうしたんだ？」

「・・・俺には、味方がいない事が良く分かりました」

「何か恐ろしい目に合ったような目をしているが、本当に大丈夫か

？」

「ああ、大丈夫です。ちょっと屋上に行かせてもらいます」

「別に良いが、飛び降り自殺だけは勘弁してくれよ。ここの評判が更に悪くなる。ただでさえ闇の時計台と言われているのによ、さらに飛び降り自殺者が出たとなるとはやシャレにもなりはしねえ」

「大丈夫です・・・多分」

そう言いながら、俺はエレベーターを使い、屋上まで上がっていった。

そして屋上

「・・・・・・ふう」

風が気持ちいい、何となく最近疲れている事が取れるような感触がした。

「いろいろありすぎたもんな。特にこの3日間」

雅がアカデミアに転校してきて、雅の心の闇を晴らして、そしてリドウ・・・。

「本当に、疲れた」

『だが、これぐらいでへたばつてはこれから先、体が持たんぞ』

俺の隣には、ウインのお兄さんこと、ウインダールが浮かんでいた。

「よう、ウインダール。これから先と言うのは」

『ウインの心の闇は、まだ晴れていない』

「・・・だろうな、アイツの心の闇なぞ、1つ2つじゃ無いハズだと考えていた。だが正直、俺は不安だ」

『不安・・・と言うと？』

「俺は・・・どうすればいい。雅やエリアのように心の闇を持って
いるヤツの心の闇を、一体どうやって聞き出せば良いんだ、そして
俺は・・・どうやって接すれば良いんだ」

そう、問題はそこなんだ。

もし聞き出せたとしても、それに対してどう接すれば良いんだ。

無論、言葉を間違えれば余計に相手を傷つけてしまう、それ程心の
闇は重いのだ。

『……普通に接すれば良いだけの話だ』
ふ……つづに？

『お前は自分を追い詰めすぎている。そんな事を考えずに、普通に接してやれ。アイツもそれを望んでいる』

「アイツと言うと……雅がか」

『そうだ、それにアイツは俺にとってはかけがえの無いむす……つとした妹だからな』

「ウインダール、確かにムスツとした顔だと思うが、それをわざわざ言葉に出さなくても良いと思うが」

『……取り乱してすまなかった。話を戻そう、ウィンもまた、遊画を完全に信じ切った訳ではない。それは長年見てきた俺だから分かる事だ』

そりゃそうだろうな、そもそも信じている相手にあれだけの暴行をするハズが無い。

『だが、俺よりも遊画、お前の方が信頼度はある』

「……どういう意味だ」

『アイツは……お前に一部の心の闇を話し、そして自分が望んだ以上の結果を目の当たりにした。それだけでも信頼度は上がる物だ。特にアイツの場合は……』

ウインダールが急に俯いた。

「ウインダール、もしかしてお前も……」

『……俺の事はいい、エリアやウィン、そしてヒータ、アウス、ライナ、ダルクの事を優先させるべきだ』

つまり、そっちの方を優先させると言う意味か。

「……分かった、だがウインダール」

『なんだ』

「お前の心の闇も、いずれ俺が聞いてやる。お前も貯めつぱなしじやきついだろ？だから、な」

『……いや、俺の心の闇は深すぎる。特に遊画、お前には決して聞かれたくない心の闇だ……』

俺に聞かれたくない心の闇……。

「そうか、すまなかつたな」

『良いんだ、アイツが幸せならば、ちち……兄である俺はそれでいい』

「……お前自身は、雅の幸せが第一なのか？」

『ああ、アイツの為なら、命だつて落としてもかまわない』

そうか、コイツは長年、雅の事を見守ってきたもんな。

「守りたい物……か」

俺にはそんな物は無い。

……いや、無いと言うのは正しくない。

正確には……守りたい物が多すぎて、どれが一番大切かが分からなくなっている……と言った方が正しい。

だからこそ、俺は弱い。

恐らく何も守れずに、一人自滅するのがオチだとも思える……

守れずに……ま……も……

突然、恐ろしい痛みが頭を過ぎった。

何だ、この痛みは……今までの痛みよりも遥かに酷いぞ！

「く……く……くああ」

『どうした遊画！！』

その時、俺の脳裏に一瞬だけ、何かの映像が映し出された。

目の前にはポニーテールの少女の死体……死んで間もない死体だ。

胸には銃弾に撃たれた跡がある、誰かに撃たれたのか？

そして目の前には……

『0001、お前のせいで……イリアステルに……家族を……う……う……うあああああ』

狂乱に満ちた表情の女性が、ナタを持って俺に襲いかかっていた。い……いや……死ぬのか、俺は。

か・・・海佐、ねえ動いて、かい・・・さ、う・・・
『うああああああああ』

「・・・・・・・・はっ」

すぐに意識を戻した。

何だったんだアレは・・・・・・・・。

それに、海佐・・・思い出せない、アレが誰だったか、そして、過去に何があったか・・・思い出せない。

『大丈夫か遊画』

見ると、ウィンドールが心配そうにこちらを見ていた。

「・・・大丈夫だ、それよりもお昼を食べに行こう、そろそろお昼なんだし・・・」

『俺は精霊だ、お前らの飯を食べはしない』

俺は墓穴を掘り、顔を赤くした。

それから数時間後

マンションに帰ると、ムスツとした顔で雅が出迎えた。

「・・・・・・・・おかえり」

「ただいま・・・って何だ雅、そんなにムスツとして」

「・・・別に、ただ遊画の帰りが遅いと感じただけ」

現在の時刻は16時06分、確かに午後とは言え、コイツ等を放置したのは間違いだったのかも知れない。

「・・・・・・・・ん？」

そう言えば今までスルーしていたが、何でコイツ等は実体化しているんだ。

俺は召喚した覚えも無いのに・・・何故。

「なあ雅、どうしてお前らは実体化しているんだ？」

「……呪い」

「呪い？」

「……そう、お母様から聞いた。詳しい事は分からない」

あの母の事だ、何かあるとは思っていたが……だが呪いとは一体何なんだ。

「……話を逸らした」

チツ、気づいていたか。

「あらあら、お早いお帰りですこと」

さらにその後ろから、エリアが姿を見せた。

「何だエリア、確かに早いが……」

「貴方は自分の置かれている立場が分かれているのです。この言葉の意味は、普通に嫌みに近い言葉なのに、どうして何もどうじないのですの？」

エリアはその後ボソリと「このまま帰ってこなければ良かったのに」と呟いたが気にしない。

「それよりも、エリア……ちょっと聞きたい事がある」

俺の推測が正しければきつとコイツは……。

「……何ですか？」

エリアの顔が少し固まった。

何をやるかを知っているからだろう。

「お前……男性が嫌い……いや、憎いだろ」

「……!!」

少し動揺している、どうやら当たりのようだ。

「で、でも何があったか……までは思いつかないでしょう、そんなやぶから棒みたい言葉で私の心を開こうなんて大間違いよ」

口調が変わった……アレが普段のエリアらしい。

だが言われている事もその通りだ、そんな何があったかは、本人しか分からないのだから、それは仕方がない。

「……だが」

それが分からなければ……しかし、人の心の闇を聞き出す

事自体がそもそも無理な話だ。

何故なら、人は話したくない事ぐらいいっぱいある、その中の一つが心の闇だ。

それが……………

『クリクリー』

考え事をしている俺の横に、俺の相棒であるクリボーナイトが姿を現した。

「……………ん、どうしたクリボー？」

『クリクリー、クリクリー』

そんな声を上げている……………と思ったその時

『クリ……………クリ……………』

そんな声と同時に、クリボーは俺の体の中に入り込んだ。

「んあ……………何が……………一体何が起きている!!」

体から変な感触がする、閉ざされた何か解放される気分だ……………

そして

『クリクリー』

クリボーがようやく、外に出てきた。

「……………クリボー、お前一体何をしたんだ」

すると、クリボーはこちらに向かって『クリー』と笑うと、そのままどこかへ消えていった。

……………かわいいなコンチクショー。

そんな事を思いながらも、エリアの方に視線を戻した。

「な……………何よ」

さつきから動揺しまくりである。

コイツの闇……………何か良い方法は。

俺は少し考えた……………ん、何か右目の調子がおかしい……………!!

「右目に……………何だ、この風景は!」

俺は現実を見ている左目と、謎の風景を見ている右目に困惑しながらも、右目の風景を落ち着きながら見た。

ん、この目線……少なくとも子ども目線か。
そしてこの人は……。

『お母さん、これどうぞ』

『あらあら、いつもすまないねー、エリア』

エリア……と言う事は、まさか見ているコレは……。
ゴンゴンゴン

『？お母さん』

エリアの……記憶！

『魔女がいると話があった。今すぐここを開ける』

魔女……エリアの事が、それとも母親か。

『お母さん？』

『エリア、ちょっとそこに隠れていなさい。すぐに済むから』

そう言うと、エリアのお母さんらしき人は、エリアをタンスの中に
隠れさせた。

『いいかい、絶対に大声を出さないように』

そう言い、エリア母は、玄関を開けた。

『ここにエリアと言う魔女がいると言う噂を聞いたが、知らないか
？』

『知らない』

『ウソをつくな、お前が魔女を隠している事自分分かっているんだ』

よ……！』

『……だったら？』

『！……！』

『だったらどうするの、私はあの子の母親、子どもを守るのが、親
の勤めよ……！』

『……だったら、お前は魔女を生んだ魔女だ、今ここで殺してや
る』

……。

俺は母親と言う強さを目の当たりにしていた。

当時の人々は、一度強く信じ込んでしまつたら、例え自分の子どもであろうが殺せと言われれば殺してしまうのが当たり前・・・と授業で言われた時があつた。

だがこの人は違う、この人は自分の子どもを守っている。

普通に考えて自分が母親だとバラしてしまえば自分にも魔女の容疑が掛かるハズなのに、それでもこの人は自分の子どもを守るためにそれをわざとバラした。

それは・・・一種の強さなのかもしれない。

『殺してみなさい、私は・・・私の子どもを守るためなら、死ぬ覚悟も出来ている』

『じゃあ望み通り、殺してやるああああ』

男が手にしていた剣で、その人を一刀両断しようとしていた・・・。

そして俺は不意にタンスの方を見ると、タンスに少しの覗き穴があつた。

この状況・・・エリアはこの風景を見ていたとでも言うのか・・・。

だったら、悲しかっただろうな、エリアは・・・。

そう考えると、俺は悲しくなってきた。

そしてその目からは・・・気づかないうちに涙が出てきていた。

「・・・・・・・・遊画、遊画!!」

雅の言葉で、俺は我に返つた。

さっきの一体・・・何がどうなっているんだ。

だが、これでエリアの心の闇は分かつた。

「エリア・・・・・・・・」

「な・・・・・・・・何ですの」

「お前・・・・・・・・まさか」

少しそれを言うのをためらつた。

・・・・・・・・ここまで来たんだ、今更引き返す事は無いだろ。

「まさか……自分の母親を男に殺されて、それでずっと恨んできたのか？」

その瞬間、エリアの表情が一転して、絶望的な顔となった。

「……っ……っ……っ……っ」

エリア……お前の心は……ずっと、淋しかったんだな。

母親を奪われ、父親は分からないが、それでも大切な家族を失い、孤独になるような気持ち……。

続く

次回予告

「何で……何で……何で男なんかはこの気持ちを分かったのよ!!」

「分かったんじゃない、同情したんだ。元々本当の父親と母親がない俺にとって、目の前で大切な人を失う悲しみなんて……」

「っ」

「同情……変だな、元々本当の母親と父親がいないハズなのに、何故同情できるんだ……」

次回、遊戯 王Fate 第8話「悲しみの悲劇」

俺は……一体何者なんだ!

次回のキーカード

イビリチュア・マインドオーガス・水族・ATK2500・水・

6・儀式、効果

第7話「心の闇」(後書き)

・・・ハイ、次に行きます。

遊 戯 王 F a t e ラジオ小説その2 (前書き)

そう言えば、ここから人気投票ランキングを開始したな・・・懐かしいな、あっはは

遊 戯 王Fate ラジオ小説その2

遊画「……んで、再びここに来させられたのか」

ウイン「……またまたここに」

エリア「そうですわね」

遊画「あつはははは、相変わらず母はここまで連れて来るのが早
いぜ。そもそも今回は酷かった」

流れ「……遊画「ただいまー」 遊画「……」 目の前に

ダイ・グレファアー似のマツチヨな男が…… 男「ウホツ、いい男」

遊画「いーやああああああああ」 気づいたら何故かここ
へ。

遊画「それにしても、あの時あそこにいたヤツは……誰だったん
だ」

ウイン「……さあ」

エリア「そのまま良い夜を過ごせば良かったのに」

遊画「流石に切れるぞ、エリア」

ウイン「……本番5秒前」

遊画「……え、ちよつと待て」

エリア「4,3,2,1,0」

(BGM)

ウイン「……始まりました、今回も微妙なテンションでお送り
する、Fate ラジオ小説」

遊画「妙なテンション言うな!!!」

エリア「司会は私エリアとウイン、そして……バカ1名となっ
ております」

遊画「俺はバカじゃない、そもそも俺は筆記試験ではいつも1位だ
!!!」

エリア&ウイン「……!!!」

遊画「何だ、その……え、そうなのか……的な目線は。微妙に

痛すぎるぞ!!」

ウィン「……さて、そんな事はほつといて、今回はゲストをお呼びしています」

遊画「大体シンクロナイズド台詞も無いのに何故これをやっているかが不思議でたまらんだが……」

ウィン「……本日のゲストは、作者であるRagoさんです」

遊画「作者本人出すなああああああー、作者いじりでもやるつもりかお前らは!」

エリア「さて、どうぞ」

Rago「こんにちは。俺がRagoだ!!」(都合により声は変えさせてもらっております)

遊画「テンション高つ、つてか何で音声変換やってんだ」

Rago「フン、それはだな……声がもはや墮落しているからだ!」

遊画「ハッキリ言ったああああ、どんだけ自分の声が嫌いなんだよ」

Rago「黒光りするGぐらい」

遊画「……そうですか」

ウィン「さて、時間もアレですし、質問をしてもよろしいでしょうか?」

Rago「ん、そうだな……別に良いが、そんな質問と言う質問は無いだろ。だって……コメント覧にそれらしき物も無かつたし、そもそも俺に質問なんて無いだろ」

一同「……」

ウィン「……だ、だったら……彼女とかはいるんですか?」

Rago「……(遠い目をしている)」

遊画「雅、墓穴を掘るな」

Rago「俺に彼女など必要ない!!」

遊画「開き直った、恐ろしい程単純に開き直った!」

エリア「じ……じゃあ、趣味は」

うがないので終了します」

ウィン「・・・少し残念」

遊画「残念なのか、俺は恐怖に支配された気分だったぞ！」

ウィン「・・・（イラリ）」バキッ

遊画「グブア・・・な・・・何故俺は・・・いつもこんな・・・扱い」

エリア「もはや耐久性が付いてきたですわね」

Rago「だったら、面白い小説を書いて上げようか」

遊画「・・・マシなのを頼む」

最近、女子からの扱いが酷すぎる。

と言うのも、俺が単純に嫌われているだけだからだ。

そんな事を考えていた。

すると・・・

「どうした、遊画」

目の前には、裏のダルクが突っ立っていた。

「ダルク・・・いや、何でもない」

「そうか・・・何だか悩んでいる雰囲気があったから」

・・・全てはお見通しと言う事か。

「別に・・・最近、女子からの扱いが酷すぎるから、俺は嫌われているんだな」と、そう思ったただけだ」

そう、俺は心の闇を聞くと言いながらも、それを全部が全部どうする事も出来ない・・・それが結果として、女性らのストレスになっているのであろう。

だから・・・嫌われて当たり前なのである。

「・・・女性が嫌いなのか？」

「別に嫌いって訳じゃ・・・」

見ると、ダルクの目に、力が入っていた。

「だ・・・るく？」

「・・・俺は、ずっと孤独だった。だが遊画、お前は孤独だった俺

の心を晴らしてくれた、だから・・・今なら言える。俺は、同姓であるお前が・・・好きだ」

それは突然の告白だった。

「す・・・好きって・・・」

だが、今の俺なら受け入れられる、俺は・・・こっちの方を望んでいたのかもしれない。

そしてダルクの顔が近づいてきて・・・そして

ウィン「・・・これ以上書いたら・・・どうなるか分かる？」

Rago「うん、途中書いていて分かったが、これは完全に」

エリア「BL小説ですわねえ」

遊画「・・・同性愛か、案外そっちでも良いような」

一同「！！！！」

ウィン「・・・それは、私が許さない。風霊術-雅」

遊画「ぎゃあああああああああああ」

エリア「ハイ、これで2回目ですので、しばらくは起きあがれないですの」

Rago「・・・では、俺はここで失礼させてもらう。これから第8話を書かなければいけないし」

エリア「第8話・・・完成の見込みは」

Rago「うん、何とか2週間以内に完成させます・・・けど、全く内容を考えていない」

ウィン「・・・でも、第6、7話は何も考えずに書いたんじゃ」

Rago「それでは、また会おう、美少女共」

遊画「最後に調子に乗った！」

ウィン「・・・行ってしまった」

エリア「あら、意外と復活が早いのね、遊画」

遊画「誰かさんのせいだな！」

(BGM変更)

ウィン「・・・さて、ここで最後となりました」

遊画「今回は早いな」

エリア「特別に書く事が無かったからですものね、当たり前ですわ」
ウイン「最後に・・・ヒータが撮った寝顔コーナー」

遊画「ヒータ、お前は何やってるんだ」

エリア「このコーナーは、Fateのキャラの寝顔を撮ったコーナーですの」

遊画「絵で再現出来ないのが残念だな」

ウイン「・・・それは仕方ない、作者は絵が苦手だから」

遊画「だろっつな」

エリア「それでは、まずは遊画の写真から・・・」

上半身裸でクリボーナイトを抱きながら寝ている遊画の写真

遊画「あの時の姿かよ!!! ってかいつの間撮った」

ウイン「・・・何だか愛くるしい」

エリア「わ・・・私でも、これはちよつと反則と言いたいですわ」

遊画「あーも、悪かったよ。あの時寝付けなかったから、クリボー
召喚して剣や盾をどかしてモフツと寝ていたんだよ。以外と気持ち
よかったからそのまま抱き枕変わりにしていたんだよ、悪かったな
!!!」

エリア「・・・はっつ、この姿の遊画なら・・・」

遊画「エリア、お前は何を想像した」

エリア「う・・・五月蠅いですわね、それじゃ次に行こう、次」

ウイン「次は・・・!!!」

エリア「キャッチ」

ウイン「・・・!!! (アタフタ、アタフタ)」

遊画「何だ、どんな写真なん・・・だ」

スカートがスレスレで無防備な姿で寝ているウインの写真

ウイン「・・・み、見ないで」ゴスツ

遊画「ズゴツ」

エリア「・・・う、ウイン、これ・・・見ている人が遊画で無
かったら、恐ろしいテンションになっていたですよ」

ウィン「……………（赤面）」

遊画「……………もう少し、自分が女の子だと言つ意識を……………アレ、確か雅の生まれた時は……………」

ウィン&エリア「言うな」「バキバキ、バキバキ

遊画「リンチするな、あ、痛い、やめ……………おま……………」

エリア「女性の年齢はシークレットなのですのよ、迂闊に口走らないように」

ウィン「……………死にたい？」

遊画「スミマセン」

ウィン「……………さて、次はエリアの……………」

エリア「……………!!」

ウィン「遊画、キャッチ」

遊画「あ……………おう、んで、どんな寝顔……………（急に顔をそらす）」

布団をしているが、見て分かるほどエリアは何も着ていない姿の写真
エリア「見るなあああああああああ、水霊術-葵」

遊画「いちいち霊術使うな……………ぐああああああ」

ウィン「これは……………エリア、貴方は一体」

エリア「あ……………あーもう、悪かったわね。私は寝る時には何も着ないで寝ていたから、今でもクセで何も着ないで寝てしまうのよ。もう、恥ずかしいっいたらありゃしない」

遊画「エリア……………言葉が戻ってるぞ」

エリア「……………ハッ!!」

ウィン「……………さて、これ以上墓穴を掘らないうちに、エンディングに入ります」

（BGM変更）

ウィン「……………今回は一体何だったの？」

遊画「知るか、それは俺が聞きたい」

エリア「それでは、エンディングトークをしながら終わりにしましょうですの」

遊画「……………そう言えば、まだまだ出てきていない霊使いもいるよな」

ウィン「……………アウス、ライナ、ダルク……の裏、そしてエレナ」

遊画「待て、ダルクの裏つて、そしてエレナつて誰！」

エリア「それでは最後に聞いていただきましょう、Fate のオプニングテーマ、明日を夢見て」

遊画「非公式なのに、アニメ風にするなああああああああ
一応、何も流れずに終了」

遊画「ああ、疲れた」

ウィン「……………」

遊画「どうした、雅」

ウィン「……………いや、ただこれがアニメになったらと考えて」

遊画「安心しろ、これは誰もが見ても絶対にアニメにはならないし、第一非公式だろ。それに、ノベリスト用に作つてあるから、地球の歴史がどうにかならん限り、絶対にならない」

エリア「夢が無い男ね」

遊画「それはどういう意味だ」

エリア「そもそも、小説を書く人にとっての目標は、まずは漫画化、そしてアニメ化だと言つのを知らないの？」

遊画「それはプロの小説家だ。こんな見ず知らずの人の考えた小説など、例え何かの作品応募に提出しても、駄目出しを喰らうのが現実さ」

ウィン「……………」

遊画「ほら、元気だせよ。そんなどうでも良いことは良いから、今回は俺が何か奢つてやるから」

ウィン「……………いいの？」

遊画「ああ、ただし、うどんだけだな」

エリア「さあ行くこうなのですわ、うどん4杯は行くのですわ」

遊画「お前な、まあ、良いか」

第2回ラジオ小説、終わり

遊 戯 王 F a t e ラジオ小説その2 (後書き)

まだまだ次い

第8話「悲しみの悲劇」(前書き)

第8話です。

そろそろ・・・この地味な作業も・・・終える！

第8話「悲しみの悲劇」

『ねえお母さん』

『何、エリア』

『どうして、男の人はあんなに怖い顔になるの？』

『エリアは男の子が嫌いなのかい？』

『いや・・・ただ苦手なだけ』

『そうかい、それなら良かったよ』

・・・お母さんとの思い出、それはかけがえのない物だった。

でも、あの時・・・私は決めたんだ。男の人は・・・信用しない。

でも・・・

「エリア、お前は孤独だっただろ、家族を失い・・・大切な物を失う、そんな孤独が・・・」

「・・・んで」

「・・・」

「何で、何で分かってしまったのよ。何で、お母さんが・・・お母さんが殺されたと、どうして・・・」

気づくと私は涙をこぼしていた。

それを見た遊画は、何か悲しそうな目をしていた。

これ以上見ないで、貴方に、何が分かると言うの！貴方に・・・大切な人を奪われた時の気持ち、分かるだけでも言うの！？

「・・・記憶を見る、そんな事が出来ると言うのは、不幸としか言えない・・・だが見てしまった物は仕方がない。エリア・・・」

「これ以上言わないで！！」

そう、これは遊画が関わって良い問題では無いのよ！それなのに、この人は・・・この人は・・・。

「・・・いつまで現実逃避をやるつもりだ」

「!?!?」

いきなりの、遊画のセリフだった。

第8話「悲しみの悲劇」

「……お前は

「お前はいつまで現実逃避をやるつもりだ」

エリア……悪いがお前の言っている事は現実逃避以外の何者でもない。

未だにその現実を悲しい過去として受け取っている、だがそんなじゃ駄目なんだ。

「過去に起きた事件、確かにその過去は悲しかった。お前だって怖かっただろ、タンスの中から母親が殺される姿を目撃して」

「……どうして、その事まで」

「それは俺が聞きたい、何故お前の記憶が、俺に伝わったのかを」
それにしても何だったんだ、あの時のアレは。

「……っと、話を戻すぞ。俺はお前の記憶を見てしまった、その時の悲しい記憶を……俺は自分の無力を知った、目の前でお前の大切な人が奪われる時であっても、何もできない無力を知った。だが、人はそれでも立ち直らなければならぬ、母親を忘れるとは言わない……だが、いつまでもその事を引きずっていたら悲しいだろう、お前の母親も、そんな事は望んでいないはずだ」

「……でも、それじゃ私は、どうすれば良いの。確かに私は数千年の間母親の事を引きずっていた、でも私にとってお母さんは、かけがえのない存在だった……それなのに……貴方は……」
「……確かに、エリアの話ではエリアにとって母親はともかけがえのない存在……引きずる気持ちも分かる」

「……だつたら、今の自分をお前の母親に見せてみる」

「……」

「今のお前を見た瞬間、お前の母は、一体何というのか考えてみる

！」

「う……うあああああーあ」

そんな声と共に、エリアは俺を押し分け、玄関から出ていった。

「……お前は、そこまで心が弱くないハズだ」

「……遊画、これはどういうつもり？」

雅の表情がいつになく険しい表情だった。

だが、俺はエリアに伝えたかったのだ。人を失う苦しさはみんな同じ、お前自身それは分かっているハズだ。

お前はそれを背いて生きてきた、それがお前の心の闇、母親を失う事もそうだが、異性に母親を殺されたのが相当ショックだったのである。

俺自身、一度あそこまで気持ちを脱落させなければ、今回の事を考えないであろう。

「……いや、あそこまですなければいけなかったんだ。

そう考えた、その時

いきなり携帯が鳴り始めた。

俺は慌てて画面を確認した。

すると、その画面を見るなり、ニヤリと笑みをこぼした。

「懲りねー奴らだ、どうせ増援とか呼んでいるんだろ」

「……まだ話が済んでいない」

だがそんな雅の言葉を無視して、俺は家を出た。

「……逃げるの、ゆうー」

逃げる？そんな負け犬みたいな行為はしないさ。

帰ってから説教は喰らってやる、だが今は……売られたケンカを買いに行くだけだ。

「まあ、今回の事は俺に原因があるからな、そのケリをつけに行くだけだ」

私は気づけば、アーカイトの時計台の頂上にいた。

今回の事・・・遊画は私に恨みでもあるの？

それとも・・・私を追い詰めたかったの。

「私は・・・逃げてきたのかな」

今考えてみれば、私は自分の母親が異性によって殺されたあの日から、一度も男性を信じなくなった。

・・・違う、信じたくなくなったんだ。

それでも一度、男性を信じてもいいかな・・・と思える時があった。あの時の男に出会ってから、でも結局その男は、私たちを裏切り私たちの前から姿を消した。

・・・そして、幼なじみであるヴァニティは、人間としても見なくなり・・・って、考えてみれば私って自分勝手じゃない。

全ての男性を恨み、憎しみ、そして見下した。でも、それって変じゃない？

だって、殺したのはあの時の男、そんな全ての男性に恨まなくてもいいじゃない、それでも私は・・・。

「これって、ヘン・・・なのかな？」

・・・いや、私はヘンじゃない。

「つい遊画の言葉を真剣に考える所だった。私はヘンじゃない、でも」

問題がいくつあった、1つは遊画の事だ。

どうして、私のお母さんの事が分かったのか、記憶をどうとかと言っていたが・・・まさか私の記憶を見たんじゃないのでしょうか・・・

・と思ったが、流石にそれは無いと思った。

だって、人間でそんな記憶を見る事ができる人なんている訳ないし、そもそも遊画なら・・・。

って、何を考えているの私は!!!

・・・コホン、話を戻すのですわ。

「もう1つは・・・遊画が恐らくあえて触れなかった、私のお父さんの事」

私は、自分のお父さんがどんな人だったのかを全く覚えていない・・・何故かは分からない、でもマシな事が起こったとも限らない・・・確か人間は、最も忘れたくない事を忘れやすいと聞いた事がある。

そう考えると、忘れたくない事・・・私は考え出した。でも・・・何も答えは出なかった。

「答えが出ない、それは・・・悲しい事なのですわね」

はあ・・・ため息が出た、もう考えるのは止そう。

そう思い、私はマンションに戻る事にした。

どうせ何か言われても、殴り倒せば良いだけの話なのですの、心の闇の何とやらは、一旦考えるのをやめるのですわ・・・そう思った。

急に私の携帯が鳴り始めた。

私は携帯を取り出すと、画面を見てその電話主が「ウィン」と表示されているのを見ると、電話に出た。

「もしもし、ウィン？」

「・・・どうしよう」

何か、悲しそうな声だった。

「どうしたのですの？何かあったみたい」

「・・・遊画が」

「遊画がどうしたのですの？」

何か、イヤな予感がしていた。

「前回倒した不良達を相手に、1人で行ってしまった」

ふ・・・りよう？

「・・・簡単に説明すると、この前遊画が1人で倒した不良達が、5時20分までにアーカイトの裏路地に来い・・・と遊画のメールに書いてあった」

『そこは俺が確認した』

この声は、ウインダールなのです。

「裏路地、ここからすぐの場所……」

『お願い、遊画を止めて。絶対に遊画は勝つ』

勝つのに何故止める必要が……。

『それでも遊画は……遊画は……誰1人残さず倒すつもりなのだから……喧嘩となれば誰も巻き込まず、自分が傷ついても助けを呼ばない……遊画は優しい、でも喧嘩となればそんな優しさは無くなる。相手の事を考えずに相手を殴り倒す。そんな姿を想像しただけで私は……』

……泣いている、ウインが……男性を考えて。

それ程、遊画の存在は……。

「……仕方ないのですわ、止めればいいのですのね」

『……お願い』

ブツン、ツー、ツー、ツー、ツー。

相変わらず要件だけ言って切るのはウインらしい、けど

「あれだけ言うておいて、自分は喧嘩とは……ちょっと腹が立つのですわ」

そんな独り言を呟くと、私は急いで裏路地へと向かった。

「一人なのか、仲間はどうした」

周りには、群がる不良の集団……ざっと50人ぐらいか。

「お前らごときで、仲間を呼ぶ俺ではない……もつとも、俺は関係ない奴らを巻き込むような卑怯者ではない」

「調子に乗りやがって、覚悟はできているんだろうな！」

覚悟……

「それは俺のセリフだ。お前らみたいなヤツ、俺一人でも十分だ」

「んのヤロー、バカにしているのか！かかれえ」

『ウォーリーリーリー』

そんなこんなで、不良共は俺に襲いかかってきた。

……ぬるい

そう思うと、俺はまず一人、殴り倒した。

そして四方向からのパンチをしゃがんでかわすと、その4人をサマ―ソルトで蹴り倒した。

あと45人

そして啞然としている3人に向かって蹴りを一発、かましてやった。

あと42人

楽勝だな、そう思った……

その時、頭に痛みが走った。

見ると、仲間の1人が俺の頭を鉄パイプで叩いていたのであった。

吹き飛ばされ、地面に叩きつけられる……衝撃を利用して、すぐに体制を立て直すと叩いてきたヤツに向かって本気の一撃をかましてやった。

「喧嘩に……そんな道具を使うな!!」

頭から生暖かい何かが感じられた。

だが、そんな事を気にするヒマはない。

そうして俺は、残りの41人を相手に、殴られては殴り返すの途方もない事を繰り返した。

そして10分が経過した。

不良共は全員倒され、俺だけがその場に立っていた。

「ひ……引き上げるぞ、こんな化け物勝てっこねえ」

そうリーダーらしき人が叫ぶと、残りのメンバーはまるで蜘蛛の子をまき散らすかのように逃げていった。

「……俺は、何をやっていたんだろう。あのメールを見るなりあんな事を言い出し、不良共を殴り、殴り、殴りまくった。俺は全然優しくない、相手の事も考えずに人を殴った。それは……生き残る為に仕方ない事だと考えた。だが実際にもう一度考え直してどうだ、その考え自体が甘くない。いや、正しいんだ、その正しさが、何か俺の言っている事と矛盾しているような気がする。何故だろう……」

何か、心に引つかかる。
そう考えて、俺は今日言った言葉を1から思い出した。
……だったら、今の自分をお前の母親に見せてみる、今のお前を見た瞬間、お前の母は、一体何というのか考えてみる！

「……今の俺の姿か」
今の俺の姿は、痛々しく、そしてサイテーな男その物じゃないか。
人に言っておきながら、自分はこのザマとは、全く情けないにも程がある。

「でもコレが……闘争本能」
……何か違うような気がした。

あの時自分でもコントロール出来ていなかった感情、これが闘争本能であるのなら、何かおかしい。

まるで、何かの性格が入れ替わったような感触が……。

????視界が、回っている……
そして俺は、何がどうなっているのかも知らずに、そのまま意識を失った。

目が覚めたのは、それから大分経ってからだった。
気づけば家に帰っており、ベッドに寝かされ、そしてその隣には雅が横になった状態で寝ていた。

「……雅？」

俺は雅を揺さぶると、雅はそれに反応するかのようになり、目をゆつくりと開けた。

「……ゆう……が？」

若干眠いようで、目を擦っている。この仕草、コイツが人間だったんだろうなと感じられるような仕草だった。

「雅、俺に一体何が起きたんだ」

すると、雅は俺の頭に手を置き、そのまま自分の胸に俺の頭を優しく押しつけた。

「……貴方は疲労で倒れた。不良50人を相手にすれば誰だって倒れるに決まっているでしょう、でも貴方はそれでも相手になった。何故かは知らないでも良い、ただ……」

急に力が強くなった、い……息が！

「……雅……い……息が……息が」

「……エリアをほっといて、自分は喧嘩に行ったのが私は許せない。そもそもエリアの心の闇を晴らすのが目的だったのなら、それをまずやってから喧嘩をしなさ……いや、それでも喧嘩はしないで」

息が苦しいながらも、俺は雅の言葉に耳を傾けていた。

「な……何故だ？」

「……何故って、これ以上貴方が傷つく姿を見たく無いからよ！」
普段無口な喋り方しかない雅だったが、今は明らかに感情がこもっていた。

「み……雅？」

「貴方の傷つく姿は……もう見たくない。私が裏路地に行った時も、何か寂しそうな感情になっていた。貴方は気づいていないのかも知れないけど、心のどこかで、人を傷つける事に何かの罪悪感を持っているのよ。それは、貴方の心の闇じゃないの」

俺の心の闇……考えた事も無かった。

俺の心の闇なんぞに興味を持っていなかった……いや、心の闇自

体に興味を持っていなかった俺に、そんな事を考えるすべなど無かった。

「私の心の闇は貴方によって救われたわ。でもまだまだ私にも気づいていない心の闇がある、それでも貴方にまだ恩返しをしていないだから・・・少しの間、こうやって心を落ち着かせてやるから、今は・・・」

雅の力が抜けた、そして俺は何か懐かしい感触を感じていた。

俺は雅によって育てられていた、ならばこの感触は・・・。。
そんな事を考えながらも、俺はその感触を心ゆくまで感じた。
今は・・・それが一番いいと、感じながら。

さて、今日は月曜日、俺は普通にアカデミアに登校していた。

「今日のデュエル、一体どんなヤツが相手になんだろうな？」

そんな事を考えていた。

今回のデュエルは確か、タッグデュエル式のライディングデュエルだったような・・・ただしライセンス持ちの奴らだけの。

そんなマイナー過ぎる授業で、一体何の役に立つかが分からなかった。

俺はライセンスを持っていたので、このデュエルに参加する事となった。

さて、相手は・・・。

対戦相手が映し出された。

そこには・・・

公栄 遊画、フル・アルカデスVS綾中 沙耶、干霊 葵

・・・は？

待て待て、葵って・・・そんなヤツアカデミアにはいないハズだよね・・・そうか、今まで気づかなかっただけか、あはははは。

「遊画、何をそんなに笑っているのですの？」

引きずった笑顔が一瞬にして引きずった顔となった。

アレ、誰も見えないな。誰も、青い髪の少女なんて見えないな……。

「私を見らずにどこに逃げるつもりかしらねえ、遊画」

襟を捕まれた。これでは逃げる事も出来ない。

「……は、ははははは」

「待つのですわ」

この笑顔、まさかまだ怒ってらっしゃるのか。

「遊画……まず貴方に聞きたい事があるの」

エリアは急に表情と言葉を変えた。

聞きたい事……？

「私は、確かにお母さんの事からずっと逃げてきた。それって、ヘンなのかを聞きたいの」

「……その事が。」

「別に变ではない」

「……え？」

「俺も少し考えたが、それは別に变ではない。ただ、その事をずっと引きずっていたら、そりやおかしいさ。誰でも、自分の娘が自分のせいで落ち込んでいるとなれば、それこそそれが相当な悔いとなるだろうな。だってさ、お前だってそうだろう、自分の友達が自分のせいで落ち込んでしまった時、それを引きずっていたら、お前だって「あの時、あんな事をしなければよかった」と後悔するだろう。それと同じだ、前にも言ったと思うが、誰も忘れるとは言っていない、むしろ忘れてはいけない。思い出は、楽しい事だけでは無い、悲しい事だってある。それをどう乗り越えるかがお前の課題だ」

そんな長話をすると、エリアは

「……遊画、貴方は分からない。でもこれだけは言える。貴方は、全ての心を分かり合える心を持っている。だから、これを見せ上げて上げる」

と言ひ、俺に向かつてとびつきりの笑顔を見せてくれた。

「誰にも見せたことの無かった私の笑顔、見れた事を尊敬に思いなさい……なのですわ」

いつもの口調に戻った。

俺はその笑顔を見て微笑みながらも、ある事に気がついた。

「……ちよつと話を逸らすが、良いか」

「何ですか?」

「エリア……いや、葵、お前ライセンスはすでに取得しているのか?」

「当たり前ですの、そもそもここでの戸籍上、一応今日2年生に転入してきた転校生として来たばかりなのですからねえ。そしてライセンスは1年前に所得済みなのです」

ついでにエリアの今のアカデミアでの状況を説明されながらも、エリアの凄さを実感した。

コイツ、俺がライセンスを取る前にすでにライセンスを取得していたのか!

エリア、お前は何者なんだ。

そう思いながらも、後ろから「遊画」と聞こえたので、すぐに後ろを向いた。

そこには俺のクラスメイトの綾中 沙耶と俺の友、フル・アルカデスがこちらに向かつて走ってきていた。

「フル、沙耶!」

「遊画、その人は?」

沙耶が聞いてきたので、俺はとりあえず答えた。

「この人は…… 今日転校してきた俺達よりも先輩の葵だ。2年生だからな、こう見えて……モウブ」

何故か腹を殴られた。

「こう見えてとは一体どういう意味ですか。若く見えるのならまだしも、老けて見えるのなら、殺しますわよ?」

怖い、笑顔が怖い。

「遊画・・・もう少し乙女心を考えてから言おうね」
沙耶から何故か哀れな目線が突きつけられていた。

さて、痛みも取れ、D・ホイールのセッティングも完了したところで、デュエルレーンへと足を運んだ。

他の3人はすでに準備完了していたらしく、スタート地点に構えていた。

「遅いぞ、遊画」

「遅いわよ遊画」

「そのまま永眠すれば良かったのに、遊画」

「エリア、どさくさに紛れて恐ろしい事言っな」

・・・だが、ここからはライディングデュエル。

どんな戦略で来るかが分からない、特にエリアがだ。エリアはリチュアデッキ、儀式のモンスターなんて、どうやってライディングデュエルに・・・そんな事を考えていた時だった。

『それでは、デュエルスタート』

新和の合図で、俺達はボタンをポチッと押した。

「・・・・フィールド魔法、スピード・ワールド2、セット、オン」

「」

目の前にレース用の信号が浮かび上がった。

10 / 9 / 8 / 7 / 6 / 5 / 4 / 3 / 2 / 1

「ライディング」

「デュエル」

0

「・・・・アクセラレーション」 「・・・・LP4000」

そして俺達は一斉にスタートした。

最初のコーナーに差し掛かった。

そして俺は、フルスピードでそのコーナーを先頭で走りきった。

順番は俺、その次に沙耶、そしてフル、エリアの順となった。

「俺のターン、俺はハイライト・スター・マジシャンを召喚、このモンスターは自分の場にカードが存在しない場合、通常召喚できる。ハイライト・スター・マジシャン・魔法使い族・ATK2400・光・6・効果」カードを2枚伏せて、ターンエンド」
さて、どう来るか。

「私のターン」

Yuga・Full・SPC1・LP4000

Saya・Aoi・SPC1・LP4000

「ドロー、私は氷結界の足軽を攻撃表示で召喚。氷結界の足軽・水族・ATK1000・水・2・効果」そして手札から氷結界の水影を特殊召喚、氷結界の足軽の効果により、このモンスターが召喚に成功した時、手札の氷結界を特殊召喚できる。氷結界の水影・水族・ATK1200・水・2・チューナー」そしてこのモンスターは自分フィールド上のモンスターが全てレベル2以下のモンスターである場合、相手にダイレクトアタックが可能になる」
まずいな、最初に1200のダメージはきついぞ。

「バトル、氷結界の水影で相手にダイレクトアタック、忍びのクナイ」

水影が手に持っていたクナイを俺達に向かって投げてきた。

だが……

「畏カード、ガード・ブロックを発動、それにより戦闘ダメージを0にして、デッキからカードを1枚ドローする。ガード・ブロック・畏・効果、相手ターンの戦闘ダメージ時に発動する事ができる。その戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0となり、自分のデッキからカードを1枚ドローする」

クナイは俺達を逸れるようにして外れた。

「そしてデッキからカードを1枚ドロー」

「流石ね、直接攻撃をかわし、次でフルの攻撃を成功させようと言う魂胆ね。でもそうは行かない。氷結界の足軽のモンスター効果は

特殊召喚だけでは無いのよ」

「なに!!!」

「氷結界の足軽は、1ターンに1度、自分フィールドの氷結界と名の付くモンスターの数だけ、レベルを上げる事ができる。私の場には氷結界は2体、でも足軽は数には入れられないから・・・足軽のレベルは3となる。氷結界の足軽・ 2 3。レベル3の氷結界の足軽と、レベル2の氷結界の水影をチューニング 3 + 2 〃

5 氷結界の吹き荒む嵐が吹雪と化す時、その戦士たる姿を目撃せよ。シンクロ召喚、氷結界の戦士アシケロン」

輪の中から1人の重装甲をした戦士が舞い降りた。

見た目は鎧を着た、忍者のような姿であった。

「氷結界の戦士アシケロン・戦士族・ATK2100・水・

5・シンクロ、効果。アシケロンの効果により、シンクロ召喚に成功した時に、デッキからカードを1枚ドローする事ができる。そしてカードを1枚伏せて、ターンエンド」

この流れ、イヤな予感がする

次は・・・フルのターンか。

「俺のターン」

Y u g a ・ F u l l ・ S P C 2 ・ L P 4 0 0 0

S a y a ・ A o i ・ S P C 2 ・ L P 4 0 0 0

「ドロー、まずはチューナーモンスター、アーマード・ザウルスを攻撃表示で召喚。アーマード・ザウルス・機械族・ATK1700・地・ 4・チューナー。そして手札から機械族モンスター1体を墓地に送り、チェスト・アタッカーを攻撃表示で特殊召喚。チェスト・アタッカー・機械族・ATK1500・闇・ 3・効果。レベル3のチェスト・アタッカーにレベル4のアーマード・ザウルスをチューニング 3 + 4 〃 7 稲妻に紛れし竜よ、混沌の空と混沌の海にて全てに光りを照らし出せ。シンクロ召喚」

その時、フルの手元にはとあるモンスターカードが持たれていた。

「光り輝け、フラッシュ・ボルテッカー・ドラゴン」

フィールドに雷が落ちてきた。そしてその中から、黄色いトゲトゲとした竜が現れた。

この竜、どこかで……。

「これが、俺のエースだ。フラッシュ・ボルテッカー・ドラゴン・ドラゴン族・ATK2700・光・7・シンクロ、効果マフラッシュ・ボルテッカー・ドラゴンのモンスター効果発動。1ターンに一度、手札を1枚墓地に送る事により、相手フィールドの表側表示モンスター1体を破壊する」

「!!!な……」

「ボルテッカー・ショット」

フラッシュ・ボルテッカー・ドラゴンの口から、電気の弾が発射され、アシュケロンを軽々と貫いた。

「アシュケロン!!!」

「そしてフラッシュ・ボルテッカー・ドラゴンで、沙耶にダイレクトアタック。サンダー・ショット」

再びボルテッカー・ドラゴンの口が開き、その中から電気の弾が発射された。

「「きやああああああああ」LP4000 1300」

いきなりのピンチであった。

このまま俺達の勝利かな……と思ったがどうもそうは行かないらしい。

「畏カード、氷結界の封じを発動。相手が自分フィールドの氷結界を破壊したターンのバトルフェイズに直接攻撃を行った場合、その攻撃の半分の攻撃力分回復し、バトルフェイズを終了させる。そしてその後、デッキから受けたダメージ分の攻撃力を持った氷結界を手札に加える。氷結界の封じ・畏・効果、相手が「氷結界」と名の付くモンスターを破壊したターンのバトルフェイズに直接攻撃を成功した時に発動する事ができる。その戦闘により受けた戦闘ダメージの半分のライフを回復し、バトルフェイズを終了させる。その後、受けたダメージ以下の攻撃力を持った「氷結界」と名の付くモンス

ター1体をデッキから手札に加える事ができる」
LP1300
2650」そして私は、デッキから氷結界の分身忍者を手札へ」

「・・・ターンエンドだ」

「アシケロンが破壊されたエンドフェイズ時、デッキからカードを2枚ドローできる」

沙耶のドロー加速が始まったようだ。

さて、次はエリアのターン。

『遊画』

「何だ？」

フルからの通信であった。

『俺の墓地にはチェスト・アツカー、そしてチェスト・ディフェンダーが存在する。次のお前のスタンバイフェイズでどうにかしてチェスト・スピダーを墓地へ送れば、俺のターンでその3体をゲームから除外し、チェスト・パーフェクターを特殊召喚できる状態だ。何とか頼む』

「出来たらの話だな」

「何をブチブチ言っているのですの。私のターンですわ、ドロー」

Yuga・Full・SPC3・LP4000

Saya・Aoi・SPC3・LP2650

「・・・残念でしたね」

「・・・？」

「貴方達の思惑通りには行かなくなりそうですわよ。私はスピードスペル、スピード・フェステイバルを発動、自分のスピードカウンターが3つ以上の時、手札、またはフィールドからモンスターをリリースする事により、手札の儀式モンスター1体を特殊召喚できる」
「Sp・スピード・フェステイバル・Sp魔法・効果、自分のスピードカウンターが3つ以上の時に発動する事ができる。手札の儀式モンスター1体を選択し、手札、自分フィールド上から儀式モンスターと同じレベルになるようにモンスターをリリースしなければならぬ。その後、選択したモンスターを儀式召喚扱いで特殊召喚す

る。そしてリリースするモンスターは、手札のリチュア・シャドウ
1体でまかなえる。リチュア・シャドウを墓地へ、そして降臨せよ、
イビリチュア・マインドオーガス」

魚が降臨した。いや、その魚の頭の上には、邪心と化したエリアが
合体した形で、もはや何とも言えない状態であった。

「え．．．りあ？何だこの格好悪い格好は？」

「格好悪い．．．．イビリチュア・マインドオーガ・水族・AT
K2500・水・6・儀式、効果」遊画、そんなヒマが貴方にあ
るのですか？」

「どういう意味だ」

「イビリチュア・マインドオーガスの効果発動、このモンスターの
儀式召喚時、相手、または自分の墓地に存在するカードを5枚まで
選択して、そのカードをデッキへ戻す」

んな．．．．それじゃあチェストシリーズは．．．．。

「遊画達の墓地から、チェスト・アツカーとチェスト・ディフェ
ンダー、そして私たちの墓地からは氷結界の足軽に氷結界の戦士ア
シケロン、そして畏カード、氷結界の封じをデッキへ戻す」

マズイ、相手が有利になるカードばかりをデッキに戻しやがった。

『マズイぞ遊画』

「落ち着け、まだ俺達のフィールドには、お前のモンスターが」

「これで終わりと思われたら困ります」

終わりじゃなかったのかよ！

「手札からリチュア・ガガギゴを守備表示で召喚。リチュア・ガガ
ギゴ・爬虫類族・DEF2100・水・4・効果」ガガギゴの効
果により、自分フィールドのリチュアモンスターの攻撃力は800
ポイントアップする」

と、言うことは．．．．。

「マインドオーガスの攻撃力は、800ポイントアップして330
0となる。イビリチュア・マインドオーガス・ATK2500 3
300」バトル、マインドオーガスで、フラッシュ・ボルテッカー・

ドラゴンを攻撃、リチュア・ミラーマジック」

イビリチュア・マインドオーガスの儀水鏡から魔術が唱えられ、そこから巨大な水の柱が発生し、その柱を振り下ろし、巻き込まれたフラッシュ・ボルテッカー・ドラゴンは真つ二つに切られ、爆発した。

「ぐああああああ」LP4000 3600」

「カードを2枚伏せてターンエンドですの」

・・・強い、何だかんだ言っって・・・コイツは強い。

いや、沙耶との相性も抜群だ。

どうすれば良い、このデュエル・・・道を見つけなければ・・・負けてしまう。

今は勝っているが、これからが、沙耶の見せ所のターンだ！！
続く

次回予告

残されたターンは次の俺のターン、その状況で・・・どうすれば良いんだ。相手フィールドには、クイーンが・・・

絶体絶命と言うのはこう言う事か。

次回、遊戯 王 Fate 第9話「奇跡のモンスター、水霊神」
この可能性に、俺は賭ける。

次回のキーカード

水霊神エリア・魔法使い族・ATK2300・水・7・シンクロ、
効果

第8話「悲しみの悲劇」(後書き)

もうすぐだ・・・もうすぐ・・・
つとつとわけて、一気に10話までの「ピー」が完了します。

第9話「奇跡のモンスター、水霊神」(前書き)

よし、これであと1話だ!!

第9話「奇跡のモンスター、水霊神」

これはマズイ状況だ。

俺達の場合にはモンスターが1体、だがこのターンで相手の場に存在するリチュア・ガガギゴを破壊しないと次のターン、沙耶のコンボとエリアのリチュアで俺達のライフに大ダメージを与えられる。

こんな状況で……

「遊画、まだ勝負は決まっていけないぜ」

「フル！」

「俺達の戦いを、見せてやろうぜ」

「……そうだったな、デュエルは楽しまなければ。

「そうだな、見せてやろう、俺達のデュエルを」

『でもどうするの？貴方達の場合にはモンスターはいないのに』
エリアからの通信だ。

さて、どうしようかな……と思った時、フルが動いた。

「自分の場のモンスターが戦闘により破壊されたターンのエンドフェイズ時、手札のバトルレスキューを墓地へ送り、戦闘破壊された自分のモンスター1体を特殊召喚できる」

その手があったか。バトルレスキューは手札から発動できるモンスター、相手は裏を搔かれて戸惑っているだろうな。

「現れよ、フラッシュ・ボルテッカー・ドラゴン^ハフラッシュ・ボルテッカー・ドラゴン・ドラゴン族・ATK2700・光・7・シンクロ、効果^ヾ」

「フル、お前のモンスターを借りるぜ。俺のターン」

Y y g a ・ F u l l ・ S P C 4 ・ L P 3 6 0 0

S a y a ・ A o i ・ S P C 4 ・ L P 2 6 5 0

「俺はチューナーモンスター、エターナル・スター・マジシャンを召喚^ハエターナル・スター・マジシャン・魔法使い族・ATK600・光・3・チューナー^ヾレベル6のハイライト・スター・マジ

シャンにレベル3のエターナル・スター・マジシャンをチューニング
グ 6 + 3 = 9 星々にて宿りし魔法使いの宿命よ、今ここにその声を聞きて到来し、敵をなぎ倒せ。シンクロ召喚、女神の前にひれ伏せ、ダヌ・スター・マジシャン」
光から現れたのは、女神だった。

その見た目は長髪で何も武器を持たず、それでも周りに魔法陣をつねに展開している。このモンスターの見た目はあからさまに魔術師と言っても良いほどの見た目だった。

「ダヌ・スター・マジシャン・・・厄介なモンスターを召喚した物ですわね」

「厄介？このモンスターの効果を知っているのか、ダヌ・スター・マジシャン・魔法使い族・ATK3000・光・9・シンクロ、効果」

「ここからが勝負ですわ」
この口の聞き方、何か裏があるな・・・。

第9話「奇跡のモンスター、水霊神」

何か裏がありそうだが、

「このままそつとする俺ではない。バトル、フラッシュ・ボルテッカー・ドラゴンで、リチュア・ガガゴを攻撃、サンダー・シヨット」

その攻撃が通り、リチュア・ガガゴは電撃に巻き込まれ爆発した。「っ、ここでフラッシュ・ボルテッカー・ドラゴンの効果を使用しなかったと言う事は、バトルレスキューの効果があると言う事ですね」

そう、バトルレスキューのモンスター効果により、特殊召喚されたモンスターは特殊召喚されたターンから数えて2ターンの間、効果を発動できない。

フルのターンまで持ちこたえられれば・・・。

「だがその前に、ガガギゴが存在しなくなった事により、マインドオーガスの攻撃力は元に戻る。ハイビリチュア・マインドオーガス・ATK3300 2500」そして続けてバトル、ダヌ・スター・マジシャンで、イビリチュア・マインドオーガスを攻撃、このモンスターが攻撃を行う場合、攻撃される相手モンスターの攻撃力は、レベル×の100ポイントダウンする。ミラクル・スターハイビリチュア・マインドオーガス・ATK2500 1900」
そのままダヌ・スター・マジシャンの周りの魔法陣から、白い球が発生し、それがマインドオーガスに向けられ発射された。

「クツ……」LP2650 1550」

「カードを1枚伏せてターンエンド」

「やる……とは言っても、このまま終わるとお思いですか？」

「………思わない」

「正解、罠カード、異種連結を発動。このターン自分の場の別の種族のモンスターが2体以上の時に、その全てのモンスターが破壊されたターンのエンドフェイズに発動できる。自分はその破壊されたモンスターの元々の攻撃力分の半分のライフを回復する。異種連結・罠・効果、自分フィールド上に存在する別の種族同士のモンスターが2体以上破壊されたターンのエンドフェイズ時に発動する事ができる。破壊されたモンスターの元々の攻撃力分の合計分の半分のライフポイントを回復する。よって、イビリチュア・マインドオーガスの攻撃力は2500、そしてリチュア・ガガギゴの攻撃力は1200、よってその合計の半分となる1850ポイントのライフを回復する」LP1550 3400」
せつかく減らしたと思ってもすぐに回復しやがるとは……本当にマズイ。

「さて、私のターン」

Yyga・Full・SPC5・LP3600

Saya・Aoi・SPC5・LP3400

「私は、氷結界の分身忍者を攻撃表示で召喚。氷結界の分身忍者・

水族・ATK100・水・3・効果 γ このモンスターをリリースして、デッキから氷結界の分身忍者を2体、守備表示で特殊召喚 \wedge 氷結界の分身忍者・DEF0 γ そしてこの効果を使用した時、墓地に存在するこのモンスターをゲームから除外して、墓地に存在するレベル3以下の氷結界を、特殊召喚する。現れよ、チューナーモンスター、氷結界の水影 \wedge 氷結界の水影・ATK1200 γ 」
一気にレベル8のシンクロ素材を揃えただと、流石は学年1位の腕だけはあるな。

『遊画、感心している場合か。来るぞ、クイーンが』

「レベル3の氷結界の分身忍者2体とレベル2の氷結界の水影をチューニング 3+ 3+ 3 \parallel 8 氷結界の吹き荒む嵐に、吹雪の女王は姿を現し、出現する。目の前の現実を胸に、動き出せ。シンクロ召喚、氷より現出せよ、ブリザード・クイーン・ドラゴン」
急に吹雪が発生した。

ソリットビジョンなので寒さは感じられないが、それでも何かの威圧感を感じ、その吹雪の中で動く物体を確認した。

そこには、細長い体に、頭から伸びた髪みたいな毛、そして氷状の羽や氷状の爪を装備したその姿は、氷結界を連想させる、綺麗な竜だった。

だが、そんな事はどうでもいい。沙耶がコイツを出して負けた事は少なく、フルであってもこのモンスターの存在により負けそうになつたまでだ。

「クイーン、私に力を \wedge ブリザード・クイーン・ドラゴン・ドラゴン族・DEF1800・水・8・シンクロ、効果 γ 」

ん、何故守備表示なんだ？

『沙耶さん、打ち合わせ通りにやりますわよ？』

打ち合わせ・・・何だか引つかかる言い方だ。それに守備表示・・・まさか！！

「畏カード、重力解除を発動するのですわ。これにより、フィールド上のモンスターの表示形式は変更される \wedge 重力解除・畏・効果、

自分と相手フィールド上に表側表示で存在する全てのモンスターの表示形式を変更する。ブリザード・クイーン・ドラゴンを攻撃表示へブリザード・クイーン・ドラゴン DEF1800 ATK2800 }

こちらの場のモンスターを全て守備表示にするとは！！ハダヌ・スター・マジシャン・ATK3000 DEF2300 フラッシュ・ボルテッカー・ドラゴン・ATK2700 DEF2100 確かブリザード・クイーン・ドラゴンの効果は……

「バトル、ブリザード・クイーン・ドラゴンで、フラッシュ・ボルテッカー・ドラゴンを攻撃。ブリザード・エナジー」

ブリザード・クイーン・ドラゴンの口から吹雪の光線が発生され、その光線がフラッシュ・ボルテッカー・ドラゴンに直撃し、当たった部分から徐々に凍り始め……そして最後には完全に凍ったボルテッカー・ドラゴンは砕け散った。

「クッ」

「そして、ブリザード・クイーン・ドラゴンは守備表示モンスターを攻撃した場合、守備力が上回っていれば相手に戦闘ダメージを与え、さらに守備力の半分のダメージをも相手に与える。ダブル・ダメージを食らいなさい」

残った氷の破片が、俺達に直撃した。

「ぐあああああああ」 LP3600 1850 }

「カードを2枚伏せてターンエンド」

息がピツタリだ。何だコイツ等は……

「俺のターン」

Y y g a ・ F u l l ・ S P C 6 ・ L P 1 8 5 0

S a y a ・ A o i ・ S P C 6 ・ L P 3 4 0 0

「俺はダヌ・スター・マジシャンを攻撃表示へハダヌ・スター・マジシャン・DEF2300 ATK3000 さらに手札からスピードスペル、エンジェル・バトンを発動。自分のスピードカウンタ―が2つ以上の時、デッキからカードを2枚ドロ―。そして手札の

カード1枚を墓地へ送る「Sp・エンジェル・バトン・SP魔法・効果、自分のスピードカウンターが2つ以上の時に発動する事ができる。デッキからカードを2枚ドロウする。その後、手札からカードを1枚墓地に捨てる」俺は手札のチェスト・パーフェクターを墓地へ送る。バトル、ダヌ・スター・マジシャンでブリザード・クイン・ドラゴンを攻撃。ミラクル・スター」

そのまま通ればよかった・・・のだが

「永続罫発動、儀水ガード。自分の場の水属性モンスターが攻撃される場合、墓地の水属性をゲームから除外し、その攻撃を無効にする」儀水ガード・永続罫・効果、自分フィールド上に存在する水属性モンスターが攻撃を受ける場合、墓地に存在する水属性モンスター1体をゲームから除外し発動する。その攻撃を無効にする。この効果は1ターンに2度まで発動できる」

鏡の盾により、攻撃はその鏡によって防がれた。

「・・・カードを2枚伏せて、手札からロケット・チェストを準備表示で召喚」ロケット・チェスト・機械族・DEF1500・闇・

4・効果「ターンエンド」

「わざわざ守備表示モンスターを出すなんて、後がないのですわね。私のターン」

Y y g a ・ F u l l ・ S P C 7 ・ L P 1 8 5 0

S a y a ・ A o i ・ S P C 7 ・ L P 3 4 0 0

「私はリチュア・チェインを攻撃表示で召喚」リチュア・チェイン・海竜族・ATK1800・水・4・効果「そして効果を発動。デッキからカードを3枚めくる」

エリアはデッキを3枚確認すると、少し歪んだ顔となった。

「私はこの順番でデッキへ戻す」

私は、デッキにリチュア・ヴァニティ、水霊術・葵、そしてデッキの一番上には聖なるバリア・ミラーフォースを戻した。

この順番なら、例えばこの攻撃が通らなくてもどうにかなるのですの。それにしても・・・あの伏せカード2枚と遊画の場の2枚は・・・

・遊画の場の1枚は見なくても良いとして、問題はフルの場の2枚と遊画の場のもう1枚ですわね。あの2枚のカード、恐らくはカード効果により破壊する罫、でもまやかしと言う可能性も……でもここまで来たのですの。今更引き返す理由なんて無いのですわ！

「バトル、ブリザード・クイーン・ドラゴンで、チエスト・ロケットを攻撃。ブリザード・エナジー」

そして、勝負が付いた……かに見えたが、俺達はしつこいのだ。そう簡単にくたばるほど、弱くはない。

クイーンの攻撃により吹雪が俺達に当たる前に、フルは罫を発動していた。

「罫カード、カウンター罫、攻撃の無力化。その攻撃を無効にする。攻撃の無力化・カウンター罫・効果、相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。相手モンスターの攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了させる」

その吹雪は別の空間へと飛ばされていった。

「……ターンエンド」

やったな、フル。

あとは、俺に任せろ。

ゆ……遊画が笑っている。

この状況を逆転できるとでも言うような、笑みを……見せているのですわ。

「俺の……ターン」

Y y g a ・ F u l l ・ S P C 8 ・ L P 1 8 5 0

S a y a ・ A o i ・ S P C 8 ・ L P 3 4 0 0

「俺はカードを1枚、場に伏せる」

「場に伏せる……まさかー！」

「ああ、そのまさかだエリア、そして罫カード、くず鉄のシャベルカードを発動。自分フィールド上の裏側守備表示のモンスター1体を

表側守備表示へと変更させるべく、鉄のシャベルカー・罨・効果、このカードは自分のターンのみ発動する事ができる。自分フィールド上に存在する裏側守備表示モンスター1体を選択して発動する。そのモンスターを表側守備表示にする。発動後、このカードは墓地へは送らず、そのままセツトする。それにより、リバーすするモンスターは……お前自身だ、エリア」

そして、裏側だったカードが表側へと変更され、その中からエリアが現れた……瞬間だった。

「させない、罨カード、因果切断。エリアを手札を1枚をコストにモンスターをゲームから除外する。因果切断・罨・効果、手札を1枚捨てて発動する。相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択してゲームから除外する。その後、相手の墓地に存在する除外したモンスターと同名モンスターのカードを全てゲームから除外する。私はエリアを選択して、除外する」

現れたエリアは、すぐに謎の渦に吸い込まれていった。

「私自身が除外されるのは異様な光景ですが、これで勝機は無くなつたのですわ」

勝機が無くなつた……

「エリア、面白い事を言つたな」

「!!!」

「無論エリア除外は予定外だったが、これでお前らの伏せカードは無くなつた。ここからが本領発揮だ!!!」

「な……まだ勝機があると言つたのですか?」

「最後の望み、これが俺の全てだ。罨カード、霊使いの変わり身を発動。このカードは相手カードの効果により自分の場に存在する霊使いと名の付くモンスターがフィールドから離れた場合、手札、またはデッキからそのモンスターの名前を含む憑依装着モンスターを特殊召喚する。霊使いの変わり身・罨・効果、自分フィールド上に存在する「霊使い」と名の付くモンスターが相手カードの効果によりフィールドから離れた場合に発動する事ができる。フィールドか

ら離れたモンスターの名前を含む「憑依装着」と名の付くモンスターを手札、またはデッキから選択して特殊召喚する」それにより、除外された霊使いはエリア、よって、デッキから憑依装着エリアを攻撃表示で特殊召喚する「憑依装着エリア・魔法使い族・ATK1850・水・4・効果」

「遊画、一応言うておくけど、このままダマでクイーンを攻撃したつて、儀水ガードの効果により攻撃は無と化するよ。それをどうやって」

確かにそれはそうだ。

問題は、どうやってあのカードを防ぐかが問題になる……

「だがな、それを知つててコイツを召喚したんだよ。言うておくが憑依装着が霊使いの最終形態じゃ無いのでな」

「最終形態じゃ無い……」

「エリア、俺が何をしようとしているか想像は付くよな」

見ると、エリアは考え事をしているように見えた。

「霊使い……憑依装着……それに特殊召喚……それに繋がるモンスター……!!」

どうやら気づいたようだ。

「さて、ここからが見物だ。自分の場に憑依装着エリアが特殊召喚に成功した時、デッキに存在する水の翼エリアは特殊召喚する事ができる。来い、水の翼エリアへ水の翼エリア・魔法使い族・ATK100・水・3・チューナー」

輪の中から羽の生えたエリアが姿を現した。

これで準備万端だ。

「レベル4の憑依装着エリアとレベル3の水の翼エリアをチューニング 4 + 3 = 7 新たな波の波動が、さらなる力を呼び覚ます、降臨せよ、水の神よ。シンク口召喚、輝く水の象徴、水霊神エリア」

光の中から美少女が現れた。

エリアの姿をし、さらに左右の手にはリチュアの儀水鏡の杖と、元

々から持っていた杖を持ち、体つきは変わらないが、どこか進化したような見た目と、その美しき姿を魅了するモンスターが、舞い降りた。

「エリア・・・お前の力を使ってやるぜ！水霊神エリア・魔法使い族・ATK2300・水・7・シンクロ、効果！」

『何で・・・遊画、何で貴方があの伝説の霊神を・・・』

沙耶から通信が入ったが、そこは後で説明するとして、俺はこの勝負を終わらせる事に専念した。

「霊神の前に同じ属性のモンスターは無と化す。水霊神エリアの効果により、このモンスターがフィールド上に存在する限り、相手フィールド上の水属性モンスターの効果は全て無効化される」

「何ですって！」
無論、エリアを破壊しない限りはクイーンの効果も無効化されたままとなる。

「バトル、ダヌ・スター・マジシャンで、ブリザード・クイーン・ドラゴンを攻撃。攻撃時にレベル×100ポイント、攻撃力がダウ
ン！ブリザード・クイーン・ドラゴン・ATK2800 2000！
ミラクル・スター！」

「何度言えば分かるの。儀水ガードの効果により・・・」

「水霊神のもう1つの効果発動、相手は魔法、畏、効果モンスターの効果により手札から水属性モンスターを墓地に送る事ができず、墓地に存在する水属性モンスターをゲームから除外する事もできない」

「んな・・・これじゃ効果が発動できない！！」

周りの魔術陣が光り出し、その周りに球が発生し、その球がクイーンに向かって発射され、そのままクイーンを貫いた。

「っ・・・」HP3400 2400！

「そしてロケット・チェストの効果により、このカードをリリースする事により、このターンのエンドフェイズまで、戦闘で破壊したモンスターの攻撃力の半分のダメージを与える」

ロケット・チェストが点火し、そのまま発射され、沙耶のところに直撃した。

「きゃああああああ」{LP2400 1000}

「そしてトドメだ。水霊神エリアでリチュア・チェインを攻撃、ア
クア・マジック！」

エリアが持っている2つの杖が同調し合い、その中から水柱が発生し、その水柱がリチュア・チェイン目掛けて振り下ろされた。

「っ……」{LP1000 500}

「これで最後だ。ロケット・チェストの効果により、1800の半分、900のダメージを食らえ！」

そして、最後のロケットが点火され、そのロケットは、狂う事無くエリアに直撃した。

「………負けましたですの」{LP500 0}

プシュー、エリア達のD・ホイールに強制ブレーキが掛かった。

そして俺達は、そこに近づいた。

「どうだエリア……じゃ無くて葵、これが俺の実力だ！」

エリアはどこか物静かな表情で、俺を見つめた。

「これが……貴方の強さ……フツ、今回は負けを認めるですの。でも」

いきなり顔がキリツとなった。

「次デュエルする時には、ぜーったいに勝ってみせるのですの。覚悟しておきなさい」

その答えに、俺は笑みを浮かべた。

「お前……いつもの怒りよりも、こっちの方がかわいいぞ」

すると、急に顔が赤くなり「う……五月蠅い」と、俺を蹴飛ばした。

「グハッ」

俺はそのまま倒れ込むと、エリアは「フン」と、そっぽを向いた。何だ、俺が一体何をやったと言っただ。

「貴方はやっぱり、言葉使いを気にした方が良くいかもね」

これは沙耶からの冷たい目線からのメッセージ。

「今日ほどお前を尊敬した日はねーぜ」

と、フルからの呟き。

何だ、お前らは一体何を言いたいんだ？

そう思ったが、痛みがシヤレにならなかったので、考えるのをやめた。

それから数時間後、授業が終わり、帰る時間帯となった。

「ふう、今日も疲れた」

即決に言おう、毎日が疲れているぐらいだ。今更こんな呟きをしたところで、何の解決にもならない。

そんな事を考えながら、D・ホイールに自分のデュエルデスクを装着し、エンジンをかけると、俺はすぐに走り出し、アカデミアを後にした。

そしてしばらく走っていると、精霊状態の雅が姿を現した。

『・・・今日は疲れた？』

「いや、毎日が疲れたよ。どっかの誰かさんのせいだな」

『・・・エリアのせい？』

「少なくともお前もその中に入るのだが・・・と言ったら？」

『・・・落ち込む』

まあ、疲れはお前らのせいと言った方が正しいが、あえて口には出さなかった。

また痛い目に合うのがゴメンだし。

そう考えていた、すると目の前に巨大な建物が目に見えた。

アレは確か、エクスと言う何かの会社のビルだと聞いたような気がするが・・・

それにしてもエクスって、どんな仕事の会社なんだろうか。

建設？薬品？それとも株？いずれにせよ謎に包まれた会社であった。
そんな怪しい会社を通り過ぎると、再びマンション目指して走り出したのであった。

そして数分後

「ただいまー」

そう言つて、自室に入った。

「おかえりなさい。今日も授業お疲れさまでした」

そんな声が、耳に届いた。

見ると、目の前には柔らかい笑みをしたおおらかな女性。

メガネをかけたショートヘアの少女、名は確か……………。

「アウスです。今後もよろしくお願いします」

そう言つて、俺に握手を求めてきた。

「あ……ああ、よろしく」

その女神のような微笑みと、明らかに他の2人よりはマシな性格に、少し照れながら握手をした。

「……………」

横でウインが、不機嫌そうな顔をしていた。

「どうしたんだ雅？」

「……別に、何でも……無い」

そう言つた瞬間、思いつ切り足を踏みつけた。

「いぎやあ、何をするんだ雅！」

雅は「フン」と、そっぽを向いた。

あれ、この光景……どこかで。

「これが鈍感少年つて物なのか」

そんな声が聞こえた……何だよ、次から次へと。

そして俺はその声の主を見た……するとそこには、見たことのない

い人物がそこにいた。

髪の色は紫で、長髪で、ボンキユ、ボンなスタイルで、その姿からしてパーフェクトな人物だと言うのがよく分かった。

「ん、私がどうかしたのか？」

そう言うのと、謎の美少女は俺に顔を近づけた。

やめる、女性が苦手な上にその強気なしゃべり方・・・俺が最も苦手とする性格では無いか。

「あ・・・う・・・その、どなた様ですか？」

「そうだった、まだ自己紹介がまだだったな。私の名はエレナ、初めましてだな遊画」

エレナ・・・聞いたことのない名前だ。

「って待て、どうして俺の名を！」

「どうしてって決まっている、英子を知っているんだからお前を知ってて同然だろ」

と言う事は母の差し金か。

「だがこれで、全ての霊使いが揃ったと言う訳か」

その言葉を聞いて、エレナは否定した。

「いや、まだ光霊使いが残っている」

「光霊使い、じゃあお前は一体何使いだ？」

すると、エレナは自信げに胸を張ってこう言った。

「私は全霊使いだ。なに、強いて言えば融合モンスターだな」

・・・確かそんなモンスター、このデッキにいたっけな。

そう思い、俺はエクストラデッキを確認した。

すると、その中に一際目立つ紫色のカードが出てきた。そこに描かれてあったのは、間違いなくコイツだった。

「見過ごしていた。恐らく母が勝手に導入したんだろうな」

そう考えると、ため息が出た。

「ほう、この私がいるのが不満なのか」

「ああ、不満だ」

この際なので、ハッキリ言っておく事にした。

「そうか、それだけハツキリ言われるとイラツと来るな。お前は乙女心を知っているのか？」

「男心以外は知らないね！」

「……全く、コイツには、ちよつとお仕置きが必要かもしれないな。このままでは本当に独身で一生を過ごす事になるだろうしな」
何を言つて……。

「っ」

それは一瞬の事だった。

まずは玄関で突っ立っている俺の足を素早く蹴り、体制を崩した俺は真つ先にエレナの方に倒れ込み、そして気づけば俺がエレナを押し倒していた。

「……遊画？」

急に寒気が……

「どうだ、このまま私に謝るか、それとももつと地獄を見るか……」

「そんなの、ここをどければ……」

次は腕を捕まれ、エレナの上に倒れ込んだ。

「や……やめ……」

「恥ずかしいの、かつわいい」

胸に柔らかい感触が……。

「さあ、誤る気になった？」

「誰が……」

「ちよつと動かないで、何か変な気持ちに……んあ」

わざと雅に聞こえるような声でそんな事をいいやがった。

「……覚悟は出来ている？」

これはもう、俺はふうとまたため息をつくつと、無駄だとは思つたが
こつ言つた

「……やさしくしろよ」

結果としてエリアも参戦して優しくしてもらえませんでした。

「あつはははははは、楽しいなお前らは」

その後、ボロボロになった俺は自分の部屋に非難したが、エレナは先回りして部屋に入っており、俺をからかっていた。

「面白い訳があるか！あれだけのリンチ、俺じゃ無かったら死んでいるところだぞ」

毎度毎度、雅とエリアからリンチを喰らっているが、奴らは一体どんな事を教えてもらったんだ。

「あつははははは、だ、だが、それ程お前にやきもちを焼いていると思えば、余計に笑えてきた」

「……その言葉はよしてもらいたい。」

「あつははは……どうした遊画、そんなに落ち込んで」

「いや、アイツ等はやきもちなんか焼いていないハズだ。何故なら俺は、アイツ等の心の闇を聞いてしまった。それは弱みを握った事にもなる」

「……それで」

「その結果、アイツ等は俺に恨みでも持っていてもおかしくないと俺は思う。だってホラ、他の連中に喋られたくない気持ちは誰にでも持っているからな、その口封じだろうよ」

そう、俺は好意を持たれる事なんて1つも……

「……それは違うな」

「……?」

「元々、人に話したくない事なんて誰にも言わない。少なくともウインは、自らの意思で自分の辛い過去を話してくれた。それにエリアは、話してはいなくても、お前自身がその事をバラすとは少しも思っていないだろう。何故なら、ウインとエリアは、お前を信じているからだ」

「信じて……いるから」

「そつだ、信じていなければお前とデュエルなんてしなかつただろ
うな」

「それは、今日の授業が・・・」

「少なくとも、エリアがここまで男性と接したのは遊画、お前が始
めてかもしれない。お前が側にいてくれれば、エリアは過去の出来
事に対する異性への憎悪を断ち切る事が出来るかもしれない。そ
れ程の心を遊画、お前は持っているんだ」

「・・・だとしても、

「だとしても、俺は暴力的で、喧嘩になれば我を忘れて相手を殴
事だけに専念するような性格だ。そんな俺のどこに心なんか・・・」

「・・・弱気にならないで」

扉が開き、廊下から雅が姿を現した。

「・・・貴方は心が広い、それは確実な事。それでもそれを否定す
るのは、心のどこかに不安がある証拠。私は貴方を支えたい。あの
時私の心を解かしたお礼を、私はしたいの」

「・・・」

「それが、お前の心か」

「・・・そう」

心を支え合う心は、必要な事なのか。

「そうか、人は支え合って生きているのか」

「・・・？」

「人はくじけそうになった時に、誰かの支えが必要になってくる。

それが、俗に言う愛と言う物だ。だが、それを失った時、人は哀の
感情となる。それは変えられない現実」

「・・・どうして」

「・・・」

「どうして、貴方はそうマイナスな表情をするの？それじゃ、貴方
が・・・可哀想すぎる」

「・・・悲しみ、その感情が無くならない限り、人は愛し、哀
す。」

それが定めなら、俺は一体、何を愛すればいいのだろうか。
それとも、俺には愛する資格なんて無いのであるうか。
そう、夕方の赤い景色の中で、俺は考えた。
続く

次回予告

愛があるから哀がある。

守りたい物があるから守らなくちゃいけない物がある。

それを知ってくれ、雅。

次回、遊戯王Fate 第10話「悪魔の研究者、恐怖を与える研究者」

リドウ、お前はまた……

次回のキーカード

ネオ・コザツキー・悪魔族・ATK2800・闇・6・シンクロ、
効果

第9話「奇跡のモンスター、水霊神」（後書き）

確かこの時は・・・掲示板で調子に乗って注意を受けて、落ち込んだ精神で書いた話だったなあ。

だから精神的には好都合だった、暗い意味では。ちなみに注意を受けた事は深く反省しております。

第10話「悪魔の研究者、恐怖を与える研究者」(前書き)

これで・・・やっと・・・。

当に楽しくなってきた。まさかまた人が苦しむ姿を見られるとはな
！！」

第10話「悪魔の研究者、恐怖を与える研究者」

次の日のアカデミア

昨日、俺は鬱になっていた。

愛があるから哀がある、そんな事を俺は言ってしまった。

そのせいで雅は朝から不機嫌だった、だが彼女には俺の気持ちを知
つて欲しかった。

俺は、愛と言う物には、興味が無いと……。

「……………」

「何だ、雅？」

帰りのホームルーム終了後、雅が真っ先に俺の所にやって来た。

「……………貴方は、本当に愛に興味が無いと」

「……………ああ」

「……………どうして」

「……………？」

「どうして、そんなに女性を嫌うの。貴方には異性に対する心の闇
が無いのに」

嫌う……………確かにそうかもな

「俺は女性を嫌っていたのかもしれないな。女性に全く興味を示さ
ず、更にはどこか避けていた。沙耶であつても少し怯えながら接し
ているとすると、俺は異性を嫌っていたのかも知れないな」

雅のように、そしてエリアのように……………

「……………貴方は優しい……………けど、どこか冷たい」

「そうかい」

「……………愛を知らないなんて、それでも男性なの？」

「一応男性だ」

「……私の事、どう思っている？」

「……暴力女」

「……何様なの？」

「……俺はただ、思っている事を言っただけだ。そんなくだらない話に付き合うヒマは……」

それを言った瞬間、雅はついに、キレた。

まず、顔を殴りつけ、倒れ込んだ俺の襟元を掴んだ。

「……」

口の中を切ったようだ。口の中からイヤに生ぬるい血の味がする。

「……ばか、貴方はそんなにバカだったの!? 何で、何で私をバカにしているの。エリアに言う前に、何で貴方自身が逃げているの。それに……私の気持ちを知らないの？」

私の……気持ち?

「……知らない」

「!!!……貴方って人は……もう知らない」

俺を思いつ切り地面に叩きつけると、雅は教室を出ていった。

「遊画、今のはアンタが悪いのよ。雅ちゃんを追いかけなさい!」

沙耶が俺の方を睨み付けていた。

「……ほつといてくれ」

そう言っつて、俺も教室を出ていった。

「……何か様子がヘンだ」

何故かその場にいたフルがボソツと呟いたが、俺には聞こえなかった。

俺は、廊下を歩いていった。

徐々に視界が霞んでいっているのに気がついた。

これは……意識が……それに、頭が……痛い。

『……計画通り、お前は仲間の絆を見事に破壊した。これも俺の能力ってヤツか』

脳内にそんな声が響き渡った。

「・・・・・・・・計画？」

『邪念の力はまだ消えてはいなかったか、これは好都合だ。キサマの体に取り憑いたあの時から、ずっとトト・モーランによって俺は封印されてきた。だがその封印が弱まっている今、俺は再び蘇る・・・』
・と言いたい所だが、まだ時じゃ無いと言えている、もう少し後にキサマの体を奪いに再び意識の奥から現れる』

「お・・・お前は何者だ」

『邪心、神を作る実験で生まれたお前に取り憑いた、悲劇を招く原因になった悪魔だ』

「ひ・・・悲劇だと!!」

『さて、この記憶を覚えていたら少々厄介な事になるだろうから今までの記憶は消させてもらう。あばよ、公栄遊画、いや、元六神官、及び運命の神の二重の生まれ変わりさんよ』

六神官、そして運命の神だと・・・・・・・・。

「ま・・・て・・・・・・・・っ」

・・・・・・・・何を話していたんだ、俺は。

「・・・・・・・・どうして、俺は雅にあんな事を言ってしまったんだろうか。確かに俺は異性が好きではない。だがあそこまで言う必要は無かったハズだ。それでも俺は言ってしまった、心のどこかで否定が出来なかったからだろうか。それとも・・・・・・・・」

そう考えたが、何も答えが出なかったので、考えるのをやめた。

「・・・雅、アイツは俺の元には帰ってこないだろうな。あんな事を言ってしまったのだから」

俺は、精神状態が不安定となった。

雅がもし、変なヤツに絡まれたら・・・・・・・・そう考えただけでも不安になる。

だからあんな事を言ってしまったのを酷く後悔していた。

「・・・お腹が空いて帰ってくるかもしれないからな。今日は早く帰ろっ」

そう思い、俺はトボトボとD・ホイールの駐輪場まで歩いていった。

D・ホイールに乗って走っていると、何だか走りが心地よくなってきた。

風と一体化するのがこんなに気持ちいいなんて、心境がアレなだけにそう感じるのか。
などと思っていた。

しばらく走っていると、事故現場を目撃した。
セキュリティの方々がD・ホイールの車体を調査したり、写真を撮ったりしていた。

「……ん、何だこれは。」

俺は気がかりな事に気がついた。

途中でD・ホイールを止め、近くのセキュリティの人に声をかけた。
「すみませーん、ここで何が起こったんですか？」

すると、そのセキュリティの方は丁寧に答えてくれた。

「見ての通り、ここで事故が起こったんだよ。最近よくよく不注意で事故るヤツが増えてさ、全く迷惑したらありゃしない」

「……不注意の事故……違う。」

「不注意で普通、あそこまでD・ホイールはボロボロにはなりませんよ」

そう言った発端は、事故った場合、前だけがとか、横だけがとか、そういうった感じに偏った傷や破損がある。

しかし目の前のD・ホイールはどうだ。

全体的に傷や破損が目立っており、明らかに集団でクラッシュさせられたに違いない……と断言できるような破損の仕方しかない。

「……坊主、お前は何者だ」

セキュリティの態度が変わった。

「ただの学生だ。ただし少々お節介な」

「・・・お前にだけ教えてやる。ここ最近、奇妙な事故が多発している」

奇妙な事故？

「その事故は、実際にデュエルをやっている時に起きている。それもデュエル後には必ず、何かの恐怖症となって」

「それってまさか」

あの時の・・・

「ああ、数年前に姿を消したハズのリドウが、再び現れやがったんだ。何故今また、ヤツが姿を現したのかは我々にも知らない。用心しろ、どうやら狙いは特定の誰かのようだ。実際に被害に合ったヤツの中に「公栄遊画、お前にやるデュエルはこんな生ぬるい物じゃねーぜ」と、言っていたのを聞いたようだが、一体誰の事だ？」

俺を捜している・・・俺以外のヤツに手を出しておびき寄せるとは・・・

「分かりました、邪魔してスイマセンでした」

「帰りには気をつけるよな坊主、学生に何かあつたら我々セキュリティの名を汚す事になる」

「分かりました、それでは」

俺は再びD・ホイールに乗り、走り出そうとした。

「その前に、お前の名を聞かせてもらおうか。あの事故現場を見ただけで何かあつたと思えた奴はお前が初めてだ」

・・・。

「公栄遊画、それが俺の名前だ」

そう叫ぶと、俺は急いで走り出した。

「遊画だと！！オイま・・・」

セキュリティの人は俺を止めようとしたが、距離が距離だったのでそれは無理だった。

リドウ・・・キサマは俺が倒す。

巻き込まれたヤツの仇を・・・俺は打つ。

遊画が走っているレーンの上のレーンに、俺はいた。

ククク、ついに現れたか。

この時をどれほど待ってたか、この時をどれだけ望んだか。
俺をコケにしたヤツはアイツが初めてだ。

それも絆の力つてヤツか、面白い。

だったら、その絆をぶち壊してやる。その生ぬるい物をな。

D・ホイールのアクセルを踏み、下のレーンまで落下していった。
そして着地と同時にうまくバランスを取り、あのガキの所まで走っていった。

「やっぱりお前だったか、リドウ」

この口の聞き方、ガキはガキってモンか。

「大人に対する口の聞き方じゃねーな、こりゃ」

「黙れ、テメーこそ1度負けたからと言って、他の連中に八つ当たりするとは・・・大人げないな！」

「・・・んのクソガキ、オメーには地獄を味わってもらおうとするか」

「面白い、お前のせいでクラッシュした奴らの恨み、晴らさせてやる」

ようやく現れたか。

これで心おきなくデュエルが出来る。

「スピード・ワールド2、セット、オン」

前方にカードが現れ、そしてお互いにデュエルレーンに突入したところで、デュエルの開始だ。

「デュエル」ハLP4000」

先行レーンに突入した、俺はうまくバランスを取り、うまくカーブをしていた・・・時だった。

リドゥは曲がっている俺の横に入り、そのまま俺に体当たりを仕掛けてきた。

バランスを崩し、クラッシュしそうになったが、ギリギリでバランスを保ちながら先行レーンを曲がりきった。

「んの、きたねーぞ!!」

「勝つためなら何でもやるのが俺だ。俺のターン」

Ridou・SPCO・LP4000

Yuga・SPCO・LP4000

「俺はコザツキーを守備表示で召喚するハコザツキー・悪魔族・DEF400・闇・1・通常」そしてさらにコザツキーをリリースする事により、手札からパーフェクト・コザツキーを特殊召喚するハパーフェクト・コザツキー・悪魔族・ATK2500・闇・7・効果」

コザツキーが光に包まれ、中から武装をしたコザツキーが現れた。

「まだだ、さらにコザツキーが場に存在する時、手札の偵察メカダジーと監視メカダジーは特殊召喚できるハ偵察メカダジー・機械族・ATK1900・闇・5・効果」ハ監視メカダジー・機械族・ATK1800・闇・4・効果」さらに偵察メカダジーの効果により、自分の場にコザツキーが存在する時、相手に50ポイントのダメージを与える。コザツキー・マシンガン」

ダジーのサブマシンガンポットから弾が撃たれた。

「グハツ・・・」ハLP4000 3500」

「何だ・・・ダメージが実体化している」

「当たり前だ、俺はサイデュエリストだ。お前には存分に苦しんでもらう」

ヤロー、そんな汚いマネを。

「さらに監視メカダジーの効果により、お前の手札を1枚確認で

きる。一番右のカードを確認」

その指定したカードがリドウの目の前にソリッドビジョンとして現れた。

「ほうほう、クリボーナイトか。そんなクズカードをよくぞまあデツキに入れている物だな」

「！！テメー、俺の相棒をクズ呼ばわりするとは・・・絶対に許さねえ」

「だったらそのクズカードを本当のクズにしてやる。偵察メカギージーのもう1つの効果発動。1ターンに1度、コザツキーが場に存在する時にカード名を1つ宣言する。そのカードが相手の手札に存在する時、相手はそのカードを墓地へ送らなければならない。そして相手に500ポイントのダメージを与える。スキャントリガー・ミサイル」

次はギージーのミサイルポットからミサイルが放たれ、手札のクリボーナイトと俺に直撃した。

「ぐああああああ」
「LP3500 3000」

「カードを1枚伏せてターンエンド」

「俺の・・・ターン」

Ridou・SPC1・LP4000

Yuga・SPC1・LP3000

手札は1枚少なめの不利なスタート、そしてライフは1000も削られた。

この状況で、勝てるのか・・・いや、勝ってみせる。

何がどうあると、俺は勝つ。

「手札を2枚墓地に送る事により、手札のセブン・スター・マジシヤンは特殊召喚する事ができる。手札のスキル・サックとクロックの副写像を墓地へ。そして現れよ、セブン・スター・マジシヤン」
セブン・スター・マジシヤン・魔法使い族・ATK2200・光・

7・効果^ㄨそして墓地へ送られたクロックの副写像の効果により、このカードが墓地へ送られた場合、このカードをゲームから除外す

る事により、デッキからカードを2枚ドローするハクロツクの副写像・畏・効果、このカードが墓地へ送られた場合、墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事により、デッキからカードを2枚ドローするハデッキからカードを2枚ドロー」

「そして墓地のクリボーナイトは、自分の場にチューナーが存在しない時、墓地から特殊召喚できる。チューナーモンスター、クリボーナイトを特殊召喚ハクリボーナイト・戦士族・ATK200・闇・1・チューナーハそしてレベル7のセブン・スター・マジシャンにレベル1のクリボーナイトをチューニング 7+ 1= 8 迷えし星の運命が、無限の道を作り出す歯車となる、終わり無き運命を作り出せ」

クリボーナイトが透明となり、そこから輪が作られ、その中にセブン・スター・マジシャンが入り込み、その中からエンドレス・ドラゴンが姿を現した。

「シンクロ召喚。無限の可能性、エンドレス・ドラゴンハエンドレス・ドラゴン・ドラゴン族・ATK2500・地・8・シンクロ、効果ハバトル、エンドレス・ドラゴンで、パーフェクト・コザツキ」を攻撃!!!」

「同士討ち狙いか」

「違うな、墓地のスキル・サツクの効果発動。墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事により、エンドフェイズまで、エンドレス・ドラゴンの攻撃力を700ポイントアップさせるハスキル・サツク・畏・効果、このカードは手札から発動する事ができる。自分フィールド上に存在するモンスター1体を選択して発動する。選択したモンスターの攻撃力をこのターンのエンドフェイズ時まで400ポイントアップさせる。また、墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事により、自分フィールド上に存在する表側表示モンスターの攻撃力をバトルフェイズ終了時まで700ポイントアップさせる。この効果は発動されたターンには発動する事ができず、

自分のターンのみ発動する事ができる。よって、エンドレス・ドラゴンの攻撃力は、3200となる。ハエンドレス・ドラゴン・ATK 2500 3200。パラディン・クロー」

鋭くなった爪を思いつ切り相手に目掛けて振り下ろし、真つ二つに切断された。

「クツ……小癩なマネを」ハLP4000 3300

「確かダージーとギージーの効果は、自分の場にコザツキーが存在しなくなった場合、破壊されるんだったよな」

「……フン、誰がそんな事をやらせるか！ 永続罫、疑似型コザツキーを発動。場にコザツキートークン1体を特殊召喚する。疑似型コザツキー・永続罫・効果、1ターンに1度、自分フィールド上に存在する「コザツキー」と名の付いたモンスターが破壊され墓地に送られる度に、自分フィールド上に「コザツキートークン」(悪魔族・闇・星1・攻/守100)1体を特殊召喚する。このトークンは「コザツキー」としても扱う。また、エンドフェイズ時に自分フィールドに「コザツキートークン」が存在しない場合、このカードを破壊する。それにより、俺のフィールド上にコザツキーが蘇る。コザツキートークンを特殊召喚。コザツキートークン・悪魔族・DEF100・闇・1・トークン」

「バトルフェイズを終了させ、攻撃力は元に戻る。ハエンドレス・ドラゴン・ATK3200 2500。ならば、そのコザツキートークンをコストにトークン・イーターを特殊召喚。トークン・イーター・魔法使い族・ATK1900・闇・4・チューナー」

場にいたコザツキーが、黒く染められた謎の物体によりその謎の物体に吸収された。

「ぐぬっ……」

「これで完全にコザツキーはいなくなった。2体は自滅する」

コザツキーという支えを失った2体は、自動的に破壊された。

「カードを2枚伏せてターンエンド」

「……だが、パーフェクト・コザツキーが破壊され墓地へ送ら

れた場合、墓地に存在するコザツキーを特殊召喚する」

「なに！！」

「地の底から現れよ、コザツキー。コザツキー・DEF400」
輪が現れ、中からコザツキーが姿を現した。

『そう簡単には死にませんよ。貴方様を地獄に葬るまでは』

「ちい……」

「俺のターン」

Ridou・SPC2・LP3200

Yuga・SPC2・LP3000

「これは良いカードを引いた。俺はスピードスペル、ワン・ドローを発動。自分のスピードカウンターが2つ存在し、場にレベル1の通常モンスターが存在する場合、デッキからカードを3枚ドローする。そしてドローしたカードの1枚をゲームから除外する。Sp・ワン・ドロー・Sp魔法・効果、自分のスピードカウンターが2つ以上ある時、自分フィールド上に存在するモンスターがレベル1、通常モンスター1体のみの場合にのみ発動する事ができる。デッキからカードを3枚ドローする。その後、ドローしたカードの中の1枚を選択してゲームから除外する。この効果を使用したターン、自分はバトルフェイズを行う事ができない。それにより、デッキからカードを3枚ドロー。1枚をゲームから除外する。俺はファントム・レインをゲームから除外。さらに手札に存在するファントム・レインがゲームから除外された場合、このモンスターは特殊召喚できる。現れよ、ファントム・レイン。ファントム・レイン・雷族・ATK1200・水・3・効果。さらにコザツキーが場に存在する時、手札のダーク・バスターは特殊召喚できる。現れよ、ダーク・バスター。ダーク・バスター・機械族・ATK2100・闇・5・効果。この状態でターンを終了する」

モンスターが一気に3体！！

「っ、俺のターン」

Ridou・SPC3・LP3200

Y u g g a ・ S P C 3 ・ L P 3 0 0 0

「バトル、エンドレス・ドラゴンでダーク・バスターを攻撃、パラ
 Dein・クロー」

エンドレス・ドラゴンが動き出し、相手目掛けて爪を振り下ろした。
・・・。

「ダーク・バスターのモンスター効果発動。このモンスターは1タ
ーンに1度、戦闘では破壊されず、場に存在するコザッキーを相手
は攻撃する事もできない」

「・・・だが、戦闘ダメージは受けてもらおう!!」

「フン、こんな弱いダメージ、ダメージの内にも入らんわ!」ハッ

P 3 2 0 0 2 8 0 0

「ターンエンド」

クツ、こんなハズじゃ・・・。

「・・・」

私は、アカデミアをさまよっていた。

どうして・・・遊画が男性だからなのか、それとも・・・それが
男だからか。

「・・・あんなに怒ったのは・・・トトが私たちを見捨てたあ
の時以来だろうね」

そう、トト・モーランが私たちを見捨てて、再び異性を信じられな
くなった。

だから、今回遊画には助けられた気分でした。

でも・・・

「・・・あの態度、そしてあの言い方、何もかもトトにソックリ」

「・・・何も変わってはいない、あの時からずっと・・・」

「・・・遊画の、バカ」

そんな事を呟いた、直後であった。

慌ただしい表情で、先生が走っていた。

「……新和……先生？」

私の問いかけに気づいてか、先生は私の前で足を止めた。

「雅か、お前は無事らしいな」

「……?」

言っている意味が分からなかった。

「ったく、アイツはバカか。見事に俺の予想をぶち壊しやがって。

1回勝っている相手にまた勝てると思っているのか」

「……何の話？」

「遊画の事だ。あのヤロー、セキュリティの忠告を無視して自ら自殺行為をしやがったんだ」

「……遊画の身に、何かあったのですか？」

「まだ合っていないが、このまま放っておくと厄介な目に合う」

その答えは遊画が絶対に無事では済まされない答えだった。

「合つて……決定事項みたいに」

「決定事項だからこそ慌てんだ。犯罪者相手に勝てる訳が無いだろ」

「犯罪者……相手に……」

その時、すぐに行かなきゃと言う思考が……働いた。

「っ、すぐに行かなきゃ」

「待て、お前まで巻き込まれるぞ。いくら何でもそれはアイツだって望んではいない」

先生は、私の腕を捕まえた。

「止めないで、私は……」

「あれだけ酷い事を言われても、行くと言うのか!」

「……!!」

私は……何をやっていたんだろう。

あれだけ酷い事を言われて、それでも助けようとするなんて……
いや、違う。

「私は遊画にお仕置きをするために行く。私にボコボコにされる前

にやられてしまったら、気が済まない」

そう言つて、私は遊画の元へと行くために、体を精霊状態に戻した。
「ってオイ……つたく、英子は何を教えたんだ」

チラリと後ろを向いたら、先生が頭を抱えていた。

「俺のターン」

Ridou・SPC4・LP2800

Yuga・SPC4・LP3000

「ドロ。つぶ、バトル、ダーク・バスターでトークン・イーターを攻撃、バスター・ランチャー」

ダーク・バスターの砲門が開き、巨大なビームが放たれた。そして俺の場のトークン・イーターを木っ端微塵に破壊した。

「っ………」
「LP3000 2800」

「これでライフは並んだ、ここから見物だ。手札からチューナーモンスター、メガ・ロボを召喚へメガ・ロボ・機械族・ATK100・闇・1・チューナーレベル5のダーク・バスターにレベル1のメガ・ロボをチューニング 5+ 1」
6 現れよ、恐怖を与える狂乱者へと姿を変えろ。シンク口召喚、来い、ネオ・コザツキー」

その時、俺は何かしらの恐怖を感じていた。

そこに現れたモンスターが、やけに恐怖だったから。

「……イヤな気配だ」

「これが、俺の象徴モンスター、ネオ・コザツキーだ！
「ネオ・コザツキー・悪魔族・ATK2800・闇・6・シンク口、効果ターンエンド」

何がやりたい。

そんなメインフェイズ2で召喚するとは……。

「俺のターン」

Ridou・SPC5・LP2800

Yuga・SPC5・LP2800

「俺はスピードスペル、エンジェル・バトンを発動。自分のスピードカウンターが2つ以上ある時、デッキからカードを2枚ドロー。その後手札を1枚墓地へ送る。Sp・エンジェル・バトン・Sp魔法・効果、自分のスピードカウンターが2つ以上存在する場合に発動する事ができる。デッキからカードを2枚ドローする。その後、自分の手札からカードを1枚選択して、墓地に送る」

デッキからカードを2枚ドローした。そして手札からネクロ・ガードナーを墓地へ送った。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「何も出来はしないか。俺のターン」

Ridou・SPC6・LP2800

Yuga・SPC6・LP2800

「思い知れ、恐怖を与えられる苦痛を。バトル、ネオ・コザツキーでエンドレス・ドラゴンを攻撃、ホラー・パニック!!」

ネオ・コザツキーがエンドレス・ドラゴンに向けて何かを投げた。

だが、エンドレス・ドラゴンはやらせはしない!!

「畏カード、千年の解放を発動。自分の場のシンクロモンスターをゲームから除外し、発動後2ターン後のスタンバイフェイズでそのモンスターを特殊召喚する。千年の解放・畏・効果、自分フィールド上に存在するシンクロモンスター1体を選択して発動する。選択したモンスターを発動後、2ターン目のスタンバイフェイズでそのモンスターを自分フィールド上に戻す。この効果により戻されたモンスターの攻撃力は1000ポイントアップする」

エンドレス・ドラゴンは光に包まれ、消えた。

「バカめ、ならば直接攻撃だ!!」

「そう来ると思ってね、墓地のネクロ・ガードナーの効果を発動する。このカードをゲームから除外する事により、戦闘を無効にする」

投げた物が俺をすり抜けていった。

そして丁度後ろを飛んでいた鳥に当たった。

「グエ、グエ」

その鳥は体制を立て直したが、何故か俺達を見るなり急いで飛んで逃げていった。

その姿を、俺は見てしまった。

「あの鳥・・・俺達を見るなり逃げていった・・・まさか、これが恐怖の原因!？」

「そうだ、ネオ・コザッキーはコザッキーの精霊が宿る事ができる。だからそれを利用して、恐怖薬を作り、相手を恐怖のどん底に落としていたのさ。どうだ、これが恐怖事件の真相だ」

っ、そう言う事だったのか。

だが、知ったからにはあの攻撃を受ける訳にはいかない。

「まだバトルは続行されている。ファントム・レインの攻撃、レイン・ニードル」

ファントム・レインの雲から、針状の雨が発生され、それが俺を貫いた。

「!!ぐあっ」
{LP2800 1600}

「俺はカードを1枚伏せてターンエンド」

俺のターンか。

「俺のターン」

Ridou・SPC7・LP2800

Yuga・SPC7・LP1600

・・・雅？

俺が引いたカードは、憑依装着ウインであった。

「何故、このカードが」

すると、俺の真横に雅が姿を現した。

「雅!!何故ここに」

「・・・何故って、貴方が心配で来たに決まっている。貴方は私を侮辱した。だからこのデュエルに勝ってもらえなければ私は気が

済まない』

「だが雅・・・このデュエルは」

『・・・その手札、私しかモンスターがない。私を召喚して、じや無いと次のターン貴方は・・・』

「俺の事は良いんだ。だから今すぐ戻れ！」

『・・・そんな自分の都合で、イヤでも守らせてもらっ』

雅は手の部分だけ実体化して、カードを取ると、それを場に召喚した。

「やめる、雅へ憑依装着ウイン・魔法使い族・DEF1500・風・

4・効果」

雅は少しすねた表情で現れた。

「っ、カードを1枚伏せてターンエンド！」

こんなハズじゃ・・・こんなハズじゃ・・・。

「人間の精霊とは、それじゃ、コイツに恐怖を植え付けてやるぜ。

俺のターン」

Ridou・SPC8・LP2800

Yuga・SPC8・LP1600

「コザッキー、お前の力を見せてやれ」

・・・やめる

『ハイハイ、この、異性恐怖薬でも使いますか』

・・・やめる

『・・・異性恐怖薬？』

『この薬を喰らった者は、異性を拒絶してしまいます。ケラケラケラ、それを食らえる事を光栄に思いなさい』

その時、雅の顔が恐怖に支配されたのが分かった。

『そ・・・そんな・・・せっかく遊画と・・・分かり合えたのに・・・』

「あーっははははは、分かり合える？それを壊すのが俺達の生き甲斐だ。バトル、ネオ・コザッキーで憑依装着ウインを攻撃。ホラー・パニック」

ネオ・コザツキーが再び薬を投げつけた。

『……………もう……………イヤだ!!』

そして雅に当たる……………その前に俺は罨カードを発動した。

「……………うああああああ。雅が苦しむ姿を見るのはもうイヤだ。

雅、お前は俺が守ってやる。どんな事があっても、お前を見捨てたりはしない。罨カード、ミラージユ・ミラージユを発動!」

「……………そのカードは!!」

『……………え?』

「その攻撃を、俺へのダイレクトアタックにする。ただし、この効果でライフが0になる場合、デッキからカードを2枚ドロウする。ミラージユ・ミラージユ・罨・効果、このカードを発動したターン、相手モンスターからの攻撃は、全てプレイヤーへのダイレクトアタックとなる。この効果によりダイレクトアタックが成功した時、そのバトルフェイズを終了させる。この効果により自分のライフポイントが0になる場合、デッキからカードを2枚ドロウし、ライフポイントを1にする」

雅に当たるはずだった薬が、雅をかすれ……………俺に直撃した。

「うああああああああ」LP16000

その時、俺は心の中で何かが弾け飛ぶ感触がした。

それは、俺という存在があったから起きた事件。大切な友達を目の前で殺された、それが原因で異性を怖がるようになった事件を……………俺は気づかない内にその記憶を封印されていた。

しかし今、その封印が解かれ、次々にその時の記憶が蘇ってきた。

その記憶は悲しく、俺にとっての恐怖を現した、記憶だった。

続く

次回予告

「来るな……………来るな……………来るなあ」

「遊画……………それでも私は、諦めない。その事が遊画にとって心の

闇であるのなら、私はそれを・・・優しく包み込む」

次回、遊戯王Fate 第11話「異性への恐怖、過去のトラウマ」

「それが・・・記憶の闇」

次回のキーカード

バトル・スター・ブレイダー・戦士族・ATK1900・光・4・

効果

第10話「悪魔の研究者、恐怖を与える研究者」（後書き）

これでやっと、完全に完了しました。

これからが勝負です。

ここから先はまだ書いていません。

ですが、つまらない小説は書きません。

俺が書きたいのは、面白い小説です。

できるだけ多くの人にこの作品を読まれたいのために、ここにも連載を開始しました。

さて、次回は心理フェイズです。

そして感想などのコメントもお待ちしております。

そして、まだ自分は未熟なので、誤字などを発見した場合は、コメントにお知らせくださるよう、お願い申し上げます。

それでは次回、ターンエンド

遊 戯 王 F a t e ラジオ小説その3 (前書き)

さてと、始めるか。

遊 戯 王Fate ラジオ小説その3

エリア「ハイ、今回も始まりました、ラジオ小説。第3回目なのですわ」

ウイン「・・・始まったのに、遊画がまだ来ていない」

エリア「遊画なら、ついさっき脱走しましたので、そろそろ捕獲されると思うのですわ」

遊画「放せ・・・テメー等・・・放せ・・・」(ドン)

遊画「クツ・・・完全に油断していた。まさか今回は・・・」

流れ・・・遊画「ただいまー」 遊画「ん、これは・・・人気プリン、トリシューラじゃねーか。何でこんな所に・・・まあいいか、いただきまーす」 遊画「・・・眠くなってきたな・・・まさか、母が・・・」(バタリ)

遊画「プリンに睡眠薬を入れられていたとは。何で毎度毎度俺だけがこんな目に合わなければならなんだ」

エリア「いや・・・食べる前に気付けよ・・・ですわ」

ウイン「・・・もう本番始まっている」

遊画「そうか・・・それじゃあ最初のコーナーから・・・何だか馴染んでね、俺」

ウイン「・・・人気投票ランキングのコーナー」

遊画「とは言っても、お前と母にしか投票されていないがな・・・」

エリア「流石に納得がいかないのですの」

ウイン「・・・先延ばし？」

遊画「当たり前だ。つたく、誰だよこんな10話で投票だけでも入るだろうと思っただ奴は・・・作者か」

モブ(Ragoさんから、お届け物があります)

エリア「何ですの・・・ってこれは、PSPじゃありませんの。

中身は・・・タッグフォース5」

遊画「しかも名前に俺の名前使われているし・・・」

ウィン「……遊画、やってみて」

遊画「あ……ああ、分かった」

遊画、プレイ中

エリア「えーっと、一緒に手紙まで同根されているのですわ。なに、恐らく人気投票ランキングの事で俺をバカにしたと思うから送ります。いろいろと酷い今回のタッグフォース5、多分遊画の事なので、お前らがリンチにするようなセリフも言おうと思うから、遠慮なくボコボコにしてあげてください。そして、できるだけ藤原雪乃ルートで進んでくれるように言って下さい……だって」

ウィン「……何がやりたいの？」

遊画「……ウィンフィギュア……おっとりした感じの女性モンスターフィギュアだってよ、あはははははは、コイツは笑える……」

ウィン「（プチン）遊画、覚悟は出来ている？」

遊画「は……ははは、ハイ」

ウィン「……じゃ、こっち」

遊画&ウィン、一時期退場

エリア「ではでは、ウィンがお仕置きしている間に、ちょっとしたコーナーでも行くのですわ。お便りコーナー、このコーナーは読者の中にこの作品に疑問を持った事を答えるコーナーなのです。でも無いのでパスします。そう言った疑問がある方は、コメントの方に書いてくださるようお願い申し上げます。その質問は次のラジオ小説でお答えするのです。どしどしご応募、お待ちして押しまーす」

ウィンスタジオに帰還

ウィン「……疲れた」

エリア「はいウィン、返り血がかかっていますのです。タオルで拭きなさい」

遊画、帰還

遊画「誰が死ぬもんか。それにそれは血じゃ無い。押し倒した時に

付いたペンキだ！」

エリア「押し倒した・・・何をやるうとしたの？」

遊画「自己防衛だ、何を考えた」

エリア「さて、次参りましようなのですの」

遊画「さりげなく逃げたつもりだろうだがな、バレバレだぞ」

エリア「遊画は続けてゲームの方をプレイしろですわ」

遊画「命令形かよー!!」

渋々、再びプレイ

ウィン「・・・さて、コーナー」

エリア「シンクロ召喚セリフコーナー」

ウィン「・・・このコーナーは、作品の中で言ったシンクロ召喚のセリフを言うというコーナー」

エリア「斬新ではあるけど、結構面白いですよ・・・遊画以外」

遊画「待て、しばくぞテーマ等」

エリア「少女暴行未遂の現行犯で逮捕するのですわ！」

遊画「まだプレイ中だ・・・って待て、何で俺の手が氷に・・・」

エリア、何をそんなに恐ろしい目つきでこっちに近づいている」

エリア「ふふふ・・・抵抗出来ない人をいじめるのって、楽しいですの」

遊画「何だコイツは、実はSなのか、今まで隠していたのか・・・」

あ、やめて、そこに乗らない・・・」

ウィン「・・・エリアがドSモードに突入しましたので、ここからは私1人でお送りします。まずはこのセリフ」

「レベル3の氷結界の足軽と、レベル2の氷結界の水影をチューニング 3 + 2 = 5 氷結界の吹き荒む嵐が吹雪と化す時、その戦士たる姿を目撃せよ。シンクロ召喚、氷結界の戦士アシケロン」

ウィン「・・・流石は沙耶、氷結界のモンスターを使いこなす腕だ

けはある。次も、沙耶のセリフ」

「レベル3の氷結界の分身忍者2体とレベル2の氷結界の水影をチューニング 3 + 3 + 3^{II} 8 氷結界の吹き荒む嵐に、吹雪の女王は姿を現し、出現する。目の前の現実を胸に、動き出せ。シンクロ召喚、氷より現出せよ、ブリザード・クイーン・ドラゴン」

エリア「沙耶のプレイングは主に特殊召喚と通常召喚を使い分けて、更に一気にドロウする。正にデュエリストなら理想にするスタイルでプレイをするのが沙耶なのですわ」

ウィン「・・・楽しそうな顔で戻ってきた」

エリア「だって、アレだけいじったら時の反応を見るたび、もうゾクゾクするのですの」

ウィン「・・・次は、フルのセリフ。ちなみにエリア、機会があったらいじり方を教えて」

遊画「や・・・め・・・る」

「レベル3のチェスト・アタッカーにレベル4のアーマード・ザウルスをチューニング 3 + 4^{II} 7 稲妻に紛れし竜よ、混沌の空と混沌の海にて全てに光りを照らし出せ。シンクロ召喚」

その時、フルの手元にはとあるモンスターカードが持たれていた。

「光り輝け、フラッシュ・ボルテッカー・ドラゴン」

遊画「はあ・・・はあ・・・よし、感覚が元に戻った。フルのプレイングは特殊召喚の嵐、そして一定のモンスターを墓地へ貯めて強力なモンスターを特殊召喚する、カオス系のデッキに似たプレイが特徴だ。あの時は手札があまり良くなかったらしいからな」

エリア&ウィン「「そーなんだ」」

遊画「お前ら、俺を追い詰める事を楽しんでいないか」

エリア「え、今更ですか?」

遊画「……本当のお母さん、この世界は歪んでいます」
ウイン「……さて、今度は遊画のセリフ」

レベル6のハイライト・スター・マジシャンにレベル3のエターナル・スター・マジシャンをチューニング 6 + 3 = 9 星々にて宿りし魔法使いの宿命よ、今ここにその声を聞きて到来し、敵をなぎ倒せ。シンクロ召喚、女神の前にひれ伏せ、ダヌ・スター・マジシャン」

ウイン「……スター・マジシャンの最強モンスター」

エリア「強者の苦痛の効果を宿したモンスターですわね。攻撃力も悪くないし」

遊画「あの一、お二人さん……セリフに対してのコメントは」

ウイン&エリア「ノーコメント」

遊画「だろうね、大体俺に対しての態度がいつもそれだから聞かなくちゃ良かったよ」

エリア「……さて、ついに私のモンスターが登場ですわね」

「レベル4の憑依装着エリアとレベル3の水の翼エリアをチューニング 4 + 3 = 7 新たな波の波動が、さらなる力を呼び覚ます、降臨せよ、水の神よ。シンクロ召喚、輝く水の象徴、水霊神エリア」

遊画「一応言っておくが、水の翼エリアの効果は、エリアと名の付くモンスターが特殊召喚された時、手札、墓地、デッキから特殊召喚する。この効果は1度しか発動できない……と言う効果だ」

エリア「そうだったですわね、特殊召喚だから召喚条件は楽だし、それに通常召喚も出来るのを考えれば、結構強力モンスターですわね」

ウイン「……ただし、魔法使いかドラゴン族のシンクロモンスター

「にしか使用できない。それでも、霊神シリーズは強力」

遊画「エリアなんてコストを払わせないと言う、効果を発動させない効果だもんな」

ウィン「・・・じゃあ、私のは」

遊画「いずれか出るだろうな」

エリア「・・・そう言えば遊画、今ゲームはどこまで進んだ？」

遊画「ん、今は・・・」

ゲーム画面「ああ、禁断の味、肉まん・・・気がつくとも手が伸びてしまうのをどうにかしなきゃ・・・」

遊画「げっ、召喚に合わせる計算か。ダーク・リゾネーターに占い魔女のレベル2と3で、よし、スターダストの召喚で、っとこれでOKだ」

ゲーム画面「じゃあ食べてあげよう」

ゲーム画面「あっ・・・もう、それは私の、ひどいわ、わしづかみにするなんて・・・」

名前覧、公栄 遊画、そしてその場には肉まんなど存在しない。

それでは一体何を驚掴みにした・・・。

遊画「・・・あのー、お二人さん？」

ウィン「・・・私の中では、不満？」

エリア「私なんて見たクセに、そうやって他の女の人の胸を・・・」

「遊画「・・・ゲームだから・・・と言うか、これは俺ではない」

ウィン「・・・名前が、遊画」

遊画「まさか、作者はこれを狙って」

エリア「さて、こちらへいらっしやい」

遊画「いやあー、助けてー」

しばらくお待ち下さい・・・

ウィン「・・・もうすぐ時間」

エリア「今回も楽しかったですね」

遊画「……もうイヤだ、このラジオ」

エリア「まあ、そう弱音を吐かずに、それではまた次回、お会いしましょう」

遊画「……マシな予感が全くしない」

ウイン「……それでは」

収録後

遊画「危うく地獄を見るところだった……」

ウイン「……遊画」

遊画「何だ、雅」

ウイン「……今からどこか行く？」

遊画「別に、どこにも……」

ウイン「……じゃあ、ホテルにでも」

遊画「そうだ、近くにラーメン屋がオープンしたらしいから、そこに行こう」

エリア「さんせーい、ウインも良いよね」

ウイン「……うん」

……私は内心ホツとしている。

遊画には下心が無い、だからこうやって男性が喜びそうな事を言っても絶対に喜ばない。

そう、昔親に襲われかけた私にとって、それは感心している。

だからこそ、異性の中でも遊画は信じている類に入っている。

……でも

ウイン「……遊画、好き……」

遊画「何だ、すき焼きが良いのか？」

ウイン「……いや、何でもない」

遊画「そうか、それじゃ、行きますか」

もう少し、積極性を持って、良いかなと思ってしまったりする。

だって、そうじゃ無いと、私の気持ちが伝わらない。

私の気持ち・・・いつになったら伝わるのか。
一生伝わらなかつたら、いや、伝えてみせる。
始めて好きになった異性だから・・・それにしても
ウィン「あれから、凄く成長した・・・」
赤ちゃんの時の遊画は、あまり笑わなかつた。
でも今は、笑っている。
その笑顔を見て私は・・・幸せだと思った。

遊 戯 王Fate ラジオ小説その3（後書き）

疲れた・・・と、弱音を吐いているヒマはありませんね。

この話でお気づきの方もいらっしゃるかもしれませんが、結局人気投票ランキングはウインと英子にしか集まりませんでした。

ですので、ここでも募集したいと思っています。

コメント覧に好きなキャラクターの名前とその理由を書くだけでOKです。

・・・まだ初心者なので、このような時の機能があるかはよく分かりませんが、ご協力、宜しくお願い申し上げます。

さて、これでやっと第1話を書けます。

次回をお楽しみに・・・それでは、また。

第11話「異性への恐怖、過去のトラウマ」(前書き)

今回も始めましたFate、この小説で、満足してください。

第11話「異性への恐怖、過去のトラウマ」

「か……い……さ」

目の前の人が動かない。

そんな恐怖に、俺は直面していた。

大切だった、アイツが……友達として大事な……海佐が……

その時の俺には、まだ理解出来なかったのかもしれないが、少なくとも……目の前の現実は俺にとって恐怖その物であった。

狂乱者の顔つきとなった目の前の女性……その手には鉈が持たれ、もう片方の手には昔のタイプの拳銃が持たれてあった。

何も出来なかった……一瞬にして生命が消え去る瞬間をこの目で焼き付けられた時、異性を恐怖に感じた。

「0001、お前のせい……家族を……イリアステルに……」

イリアステル、何の話だ？

「う……うあああああああ」

片手に持たれた鉈が、俺に目掛けて振り下ろされた。

もはや助かる余地は無い、このまま恐怖に怯えながら死ぬのを待つだけだ。

その時、俺の年齢6歳、まだ全てを知っていない時に起きた、悲しい殺人事件だった。

第11話「異性への恐怖、過去のトラウマ」

俺は全てを思い出した。

あの時、ある男が助けに入らなければ、俺は死んでいた。

そしてその事を思い出し、その上に異性を恐怖に感じる薬を喰らったのだ。

ドスペルの魔法カードだ！！本当にこれで終わるとはな。食らえ、公栄遊画！！」

「だがその前に、千年の解放の効果発動！！この・・・ターンのスタンバイフェイズに・・・エンドレス・ドラゴンを復活させる。異次元より現れよ、エンドレス・ドラゴン。エンドレス・ドラゴン。ATK2500」

そして、異次元の隙間より、エンドレス・ドラゴンは飛翔した。

「バカめ、それが一体どうしたと言っんだ」

「さらに・・・この効果により特殊召喚されたシンクロモンスターは、1000ポイントアップする。よって、攻撃力は・・・3500となる。エンドレス・ドラゴン。ATK2500 3500」

「フン、そんなどうでも良いことは、ごた事にしか聞こえん。俺はスピード・ワールド2の効果発動。スピードカウンターを4つ取り除く事により、手札のスピードスペル1枚につき、相手に800ポイントのダメージを与える。これで終わりだ！！」SPC106

リドウのD・ホイールから電磁波が発生した。

そしてその電磁波が俺の前まで迫ってきた。

『遊画、負けないで！』

・・・だ、誰が・・・負けるかよ！

「畏カード、心理の追求を発動」

「なにつ」

「相手がダメージを発生させる効果を発動した時、発生する自分へのダメージを0にする。その後、発生したダメージ800ポイントにつき、デッキからカードを2枚墓地に送る。心理の追求・畏・効果、相手がダメージを与える効果を発動させた時に発動する事ができる。このターンのエンドフェイズまで自分が受ける効果ダメージは0になる。また、相手が発生させた800ポイントダメージごとに、デッキからカードを2枚墓地に送る。これにより・・・俺はデ

ツキから・・・カードを2枚・・・墓地に送る」

光に包まれ、その光にさえぎられ、俺へのダメージを回避した。

「っ、小癩な」

「・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

リドウは俺の顔を見て、目を細めていた。

「・・・ふ、ふはははははは、思い出したぞ!!」

「!!」

「お前、どこかで見た事があると思ったが、どうやらあの時のガキらしいな」

んな・・・あの時のガキだと!

「どういう・・・っ、事だ」

「っふふふふ、通りで腹が立つ訳だ。教えてやろう、お前を殺しそうになったアイツ、ミルラ・ソルバンドは、元々俺の仲間だったんだよ」

ミルラ・・・ソルバンド・・・。

「それが・・・あの時のヤツの名前か」

「そうだ、アイツはお前の姿を見た瞬間、目が血走ってお前らを誘拐したらしいが、俺はお前らが殺されている横で、ずっとその光景を見ていた」

「・・・!!」

俺は言葉を失った、コイツ・・・あの時にずっと側で笑っていたアイツか。

「まあ、お前らの助けが入ったからその時はミルラを置いて逃げたが、まさかその時の生き残りがお前だったとはな」

っ、このヤロー

「っふ、お前があの時のガキで、あの時のガキが、研究所の連中が生み出した神のなり損ないとはな、笑えるぜ」

「なり損ないの・・・神」

「おおっと、少々喋りすぎたか。だがお前は今でも生きている。それは誰のおかげだと思っているんだ」

誰のおかげ……っ

「あの時、お前の横にいた海佐ってガキがお前を庇ったから、お前は生きている！」

っ……っ……っ……っ……っ……。

「うあああああああああああああああ」

「あーっはははははは、あっはははははは、叫べ、苦しめ、そして絶望を見せろ。俺はその瞬間を見るのが大好きなんだ。人の顔が歪むその姿、いつ見ても楽しい」

「海佐……俺は……俺は……俺は」

『……それが、貴方の心の闇』

「そうだよ、俺は……一人守れなかった、そして……殺そうとした異性に恐怖を抱いた。これをどうやって晴らせば良いんだ。誰か教えてくれ、教えてくれ……教えて……くれ」
気づけば、俺の目から涙がこぼれていた。

目の前が霞んで見える、涙のせいでもあるが、異性に恐怖を抱いているせいでもある。

そんな心が荒れている今、一体どうすればいいんだよ。

「あーっはははははははは、絶望、恐怖、怯え、この3拍子揃った今、俺の心は最っ高に跳ね上がっている」

『……リドウ、貴方は……』

「おおっと怖いね、その恨むような目……ますます嬉しいね」

『……これ以上言つと、本当に殺すわ』

雅の表情は、まるで親の敵を見るような目になっていた。

「あははははははは、はははははははは、やれるモンならやってみる。

そもそも、このデュエルにも決着がつく頃だしな。なあ、コザッキ

ー

『ええ、そろそろコイツ等にトドメを刺してもいいんじゃないかなんか』

「そうだな、それじゃトドメでも刺すか。だがその前に、ネオ・コザッキーの攻撃でウインの精神を崩壊させてからでも良いかもな」

『!!』

「バトル、ネオ・コザツキーで憑依装着ウインを攻撃。ホラー・パニツク」

再びネオ・コザツキーが薬を持ち、それを雅に向けて投げた。

「お互い拒絶し合っんだな、食らえ」

「……だが、その時を待っていた」

「んな……」

「エンドレス・ドラゴンの効果発動。自分フィールド上に存在するモンスターが攻撃対象に選択された時、このモンスターの攻撃力を半分にする事により、攻撃対象を、エンドレス・ドラゴンに変更させる。そして、これにより発生する自分への戦闘ダメージは0になる。パートナー・フォローガードナーへエンドレス・ドラゴン・ATK3500 1750」

雅に攻撃が通る……その直前、エンドレス・ドラゴンがその攻撃の盾となり、雅を守り抜いた。

「そしてこの効果を使用した場合、1度だけ戦闘では破壊されない」
「んのヤローが、良いだろ、そこまで死にたいのなら、今すぐ殺してやる。ネオ・コザツキーの効果発動、このモンスターが戦闘を行い、モンスターを破壊できなかつた場合、このモンスターの攻撃力を半分にする事により、もう1度戦闘を行え、さらには相手プレイヤーに直接攻撃できる。行け、サウザント・エナジーへネオ・コザツキー・ATK2800 1400」

ネオ・コザツキーの目が光り、俺に向かって走り出した。

「死ね、公栄遊画!!」

「……誰が……誰が……誰が……誰が!!」

「誰が……死んでたまるかぁー!」

俺は、何かに目覚めたかのような声を上げた。

「ば……バカな、あれだけの精神ダメージで、もう正気に戻ったとでも言うのか」

「俺は……もうあんな事は……あんな気持ちは……あ

んな思いはしたくない。手札からバトル・スター・ブレイダーを特殊召喚。このモンスターは自分の場にモンスターが存在し、相手が直接攻撃を宣言した時、手札から特殊召喚できる。バトル・スター・ブレイダー・戦士族・ATK1900・闇・4・効果」

「無駄だ、直接攻撃にそんな壁は無意味な存在だ！」

「俺のモンスターに……無意味なモンスターは存在しない。バトル・スター・ブレイダーのもう1つの効果発動、この効果で特殊召喚に成功した時、直接攻撃を宣言した相手モンスターと戦闘を行う事ができる！」

「何だと!？」

「ネオ・コザツキーの攻撃力は1400、対してバトル・スター・ブレイダーの攻撃力は1900、帰り打て、ソニック・ブレード」
ネオ・コザツキーの投げた薬を、巨大な剣で真つ二つに切り裂き、そしてバトル・スター・ブレイダーはネオ・コザツキーに向かって、再び剣を振り下ろし、ネオ・コザツキーを破壊した。

「っ………キサマ」HP2800 2300」

「まだまだ、墓地のパワー・スター・マジシャンと、ミリット・スター・マジシャンの効果発動。ミリット・スター・マジシャンをゲームから除外する事により、自分フィールド上の魔法使い族モンスターの表示形式を変更できる。憑依装着ウインの表示形式を攻撃表示へ。憑依装着ウイン・DEF1500 ATK1850。そして、パワー・スター・マジシャンをゲームから除外する事により、自分フィールド上の魔法使い族モンスター、またはドラゴン族モンスターの攻撃力をこのターンのエンドフェイズまで500ポイントアップさせる。憑依装着ウインの攻撃力は、500ポイント上がり、2350となる。憑依装着ウイン・ATK1850 2350」

「まだ俺のターンだ、そんな事をやって何になる」

「そして更に罠発動、導かれの定め。相手のバトルフェイズ中に自分フィールド上のモンスターが、相手フィールド上のモンスターを戦闘で破壊した場合、相手フィールド上のモンスター1体と、自分

「お．．．れ．．．は．．．な．．．に．．．を」
そこで、俺の意識は失われた。

「これはマズイ事になったわね」

遊画が運ばれている横で、私は予定外の事に頭を悩ませていた。

「まさかこんな事になるなんて．．．ナスカも時間がないと言いたいようね」

死神のカードを欲するあまり、邪魔者を先に始末しようと言う魂胆だったらしいけど、それは失敗に終わった今、何かしらの動きは見せてもおかしくない。

「．．．遊画」

母親として、この事を未然に防ぎきれなかったのは悔いに思う。
でも、パンドラには何も出てこなかった。

．．．何かイヤな予感がするわ。

「邪心を持つ者が関係しているのか．．．それとも」

私や遊画のように何か特殊な能力を持つ者が裏で糸を引いている．．．かのどちらかだと思っただけど、もしもその予想が当たったとしたら、関係するのは．．．イリアステルの連中しか思い浮かばない。

「でも、彼らは自分の利益、または未来に害がある事以外には動かない」

そう、だからこそ不安に思った。

もし、邪心が関係しているとしたら、それは．．．これからの事で、不利になるからである。

一時期病院に連れてこられたが、無駄だと母が言ったらしく、救急車で家に運ばれた。

だが、俺の心は更に悪化する一方であった。

「か・・・い・・・さ・・・俺は・・・俺は」

こんな気持ち・・・もうイヤだ。

これが・・・恐怖に支配される気持ちなのか・・・。

そんな事を考えていた時、部屋に何か声がした。

「・・・ゆう・・・が？」

「来るな!!」

速急に叫んだ。

「これ以上来るな、お前を見たら・・・お前自身を傷つける事になる」

今の俺は、異性を恐怖に感じる体質になっている。そんな中で雅を見る行為は、自殺行為に値する。

「・・・でも、私は諦めない」

雅がそう言うと、雅は俺に向かって歩き出した。

「やめる・・・やめる・・・やめるおおおおおお」

俺は無意識に、雅を殴った。

雅はその場に倒れ込むと、殴られた右頬に手を当てた。

「遊画・・・っ、それでも、私は諦めない。私を庇ってこんな状態になったのなら、私は何回殴られようが・・・貴方の心を開いてみせる」

そう言うと、雅は再び立ち上がり、俺の方に歩き出した。

「や・・・やめるおおおおおお」

再び俺は無意識に雅を殴ろうとした・・・その時であった。

雅は俺のパンチをスレスレで交わし、俺の胸元に抱きついた。

「これで・・・思うようには」

「う・・・うあああああああ」

俺は暴れた、恐怖に感じる物を取り払うため。

途中何度も雅を殴ったり噛みついたりした。

それでもコイツは・・・離れなかった。

俺の苦痛を感じているのか、コイツは。

そう心の中で囁いたが無意識の俺は、そんな事もお構いなしに暴れ続けた。

「やめろ・・・やめろ・・・もうやめてくれえー」

「いい加減にしろさい！」

俺の右頬に痛みを感じた。

気づかない内に、エリアが隣に近づいていたのであったからだ、そしてエリアは俺に向かって懇親の一撃を、俺に喰らわせた。

俺は床に倒れ込んだ。そしてその床に倒れ込んだ俺の胸ぐらを掴み、見るとその表情は、いつものエリアとは違い、険しい表情になっていた。

「貴方・・・恐怖を感じているらしいけど、それがどうしたの。

たかが薬の作用ぐらいでここまで落ちてしまったの？女性に恐怖？

そんなの、私だって男性に恐怖を感じていたけど、貴方のおかげで

少しはマシになったのに、今度は貴方が異性に恐怖を感じた？ふざ

けないでよ、こんな男に私は・・・私は・・・」

そう考えると何だか嫌気がさしてきた。

こんな男に私は口どかれたかと思ったら、殺意も沸いてきた。

「.....」

無回答、私はもう1発左頬を殴った。

「.....あり得ない。貴方のその性格、その無様な姿、そして.....

.....雅を守ったのにその表情、何がしたいのよ。貴方は.....

一体何がやりたかったの」

「.....う」

何か呟いた。

「……うるせえよ……お前には……分からないだろうな……」

再びもう1発右頬を殴った。

「そりゃあ分らないわよ。そんなウインを殴ったりする行動、もはや分かりたくも無いわよ！」

「……そつちじゃねえ」

「……つ、お前には分からないだろうな……守りたい……」

守りたい？

「守りたい者を守りたかった。それでどうなるうとも俺はどうでも良かった。今までは無意識で雅を殴ったりしたが、もう俺は気づいたんだ。あんな思いはしたくない。大切な人を失う悲しみはもう……だから俺は体を張って雅を守り抜いた。俺は死んでも良かった、無意識に発動した時、俺は久しぶりに守りたい……と思った。雅が無事なら……俺は、お前らに嫌われても……」

それ以上は聞きたくなかった。

「……死んでも良かった？お前らに嫌われても？そんな事をやって、ウインが喜ぶと思つたの！！」

遊画の表情が微かに動いた。

「自分のせいで遊画、貴方が死んでしまったら……私だって悲しむわよ。それは誰だってそう、それなのにそんな事を考えないで……バツカじゃないの。誰も失わずに、誰1人失わずに笑顔でいる、それが私たちが望む守られ方に決まっているじゃないの。それなのに……それなのに遊画……」

私は、自分でも何を言っているのかが分からなかった。

無意識に、遊画に何かを伝えている。それが一体何なのか……その答えを、自分自身で言つた。

「昔、私を崖から救って死んでしまったお父さんのような事をしないで!!」

「……無意識とは、自分でも何を言っているかが分からない事がある。」

でも今回は、記憶のどこかで忘れた記憶の中にあつた、私の気持ちだったのかもしれない。

そして、私はその全てを思い出した。

ちよつとした不慮の事故で、私は崖から落ちかけた。

『助けて……助けて』

側にいるのは、見に来た人と、私のお母さんと、お父さんだつた。

周りはざわつき、誰1人として私を助けようとしなかつた。

いや、それが当たり前なのかもしれない。

この状況で助ければ良くて私だけ、悪くて私と一緒に崖から落ちるという状況だつたのだ。

こんな状況で誰も助けにこないだろ……そんな事までも呟かれていたのであつた。

捕まっている木の枝に亀裂が入つた。

もうダメだ……そう思つた時だつた。

いきなり、上の方でざわつきがあつた。

見ると、お父さんが崖から飛び降り、私の捕まっている木に捕まったのだ。

「エリア、行くぞ!!」

そう言うと、私の腕を掴み、そして思いつ切り上に向かつて投げた。それと同時に、捕まっていた木の棒が折れた。

「お……とうさん?」

「エリア、生きろ。そして強くなれ。それが……俺の最後の願

いだ」

そしてお父さんは、崖に落ち、暗闇の中に消えていった。

「……思い出した」

私はお父さんによって助けられたのだ、でもその事でお父さんは死んでしまった。

自分のせいで死んでしまった。

そんな事があつたのだと、自分でも実感した。

……私はあんな思いはもうしたくない。

誰かのために死ぬ、そんな事をさせてたまるものですか。

「誰だつて笑いたい、そして誰1人として失いたくない。それが……」

……私の願い」

「エ……リ……ア？」

「だから、貴方はもう2度と自分の命を粗末に扱わないで。今度そんな事をやれば、貴方に責任を負わせる。そこまでしなければ、貴方は分らないからね」

すると、遊画は少し目を逸らした。

「……願いなど、はなっから叶わないためにある物だ」

またそうやって……

「マイナスな事を言うな！！」

「マイナスな事じゃない、これは現実だ。あの時だつて……俺は海佐を守れなかった。それどころか、その記憶をトト・モーランが勝手に封じ込めた。だがな、俺は思いだして後悔したんだよ、何で俺が生まれたのか、そして何故、神のなり損ないとか言われているのか……そんな俺の苦しみ、お前に分かるか」

「……苦しみは、誰にでもある物」

隣にいたウインが、口を開いた。

「……苦しみは、私にもある。でもその苦しみを自分一人で背負い込もうとするのは間違い。貴方の隣には私たちがいる。だから安心して、貴方が私たちを守るのなら、私たちは貴方を守る。それが、私たちにできる唯一の恩返し。でも」

ウインは、急に目を黒くした。

「……トト・モーラン、ヤツが関係しているとは、一体どういうこと？」

その目は、冷静すぎて何か恐怖を感じる目となっていた。

「……ヤツは、俺の中にいる亡霊だ」

そう、遊画が答えた。

「……今すぐ会わせてと言ったら？」

「……無駄だ、ヤツもまた、何かを封印している。俺でも分からない何かを……うぐっ」

遊画は急に何かを吐いた。

血だった、恐怖に感じる物と怯えながら接していたのだ。ストレスを感じて吐いたのも仕方がなかった。

「遊画！！」

遊画を抱きしめた。もう私には、こうする事しかできなかった。

そしてよく耳を澄ませると、遊画は何かを呟いていた。

「怖くない……怖くない……そうだ、何を俺は怯えている。

アレだけコイツ等の暴力に耐えてきただろうが、これぐらいの事、何にも無いだろ……」

自分で自分に言い聞かせている。

これが……彼の強さなのかも知れない。

他人を傷つけない、それが彼の本当の気持ちなのかもしれない。でも、時に暴力を奮うってしまう、それは彼の心のどこかに闇があるからである。

そう感じた私は、より一層遊画を抱きしめた。

もう、彼にこんな気持ちを持たせたくない。

遊画の苦しむ姿なんてもう、見たくない。

そう思い、私は遊画の顔を見た。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

遊画は涙を流しながら、私の胸に顔を寄せていた。

「・・・・・・・・不思議な事に、今は恥ずかしくない。

男性が私の胸に顔を寄せているのに、殺意など沸きはしないし、何よりも安心感がある。

「・・・・・・・・そして、何か胸が熱い。

何なの、この気持ちは・・・・・・・・彼を見ると、頭がボーっとなる。

「・・・・・・・・エリア？」

私はハッと我に返った。

何を考えていたのかしら、私ったら。

「ベ・・・・・・・・別に何も考えてなかったですよ」

いつもの口調に戻した。

「・・・・・・・・貴方も、遊画の事を」

んな・・・・・・・・!!

「何言っているのよ、私がこんな男に・・・・・・・・男に・・・・・・・・」

遊画の顔を見ると、何か心が熱い。

これは一体、何なのよ。この正体は・・・・・・・・一体なんなのよ。

「・・・・・・・・自分では認めたくない、そんな気持ちがあるのね。でも・

・・・・・・・・」

ウインは私の前に来て、遊画の背中を抱きしめた。

「・・・・・・・・自分では気づかないだけであって、それに気づいた瞬間、

それを全力で否定する。それが・・・・・・・・恋心って言う物。エリアはま

だ体験した事が無いから分からないだけ・・・・・・・・私も最初は分から

なかった。でも」

ウインは、さらに遊画を強く抱きしめた。

「・・・・・・・・私は分かったの。遊画は・・・・・・・・決して他人の心を踏み

じったりはしない。あの時だって、何か不自然な物を感じていた。

それが何かは分からない。でも今思えば、あの時の遊画は、遊画じ

や無かったのかもしれない」

「……でもそれが一体何の関係が」

「……そして、遊画は更に相手の気持ちをはかかってしまうと
言う事。その上で、心が邪悪な人はそれを弱みにつけ込む事し
かない……。でも遊画は違う。その邪悪な気持ちを少しでも減ら
そうと影で努力した。エリアの時だってそう、あの時遊画は……。
一度全てを言い切った方がエリアが考え直すと思っていたの。それ
は私でも分かった、遊画が立ち去った後、ウィンダールに話を聞
いた」

つねに遊画の監視をウィンダールはやっていると言う事なのね。

「……それでも、私には分からない。何で自分が……」

「……さつきお父さんがどうかと言ったよね？」

お父さんと一体何の関係が……。

「……それじゃあ、大好きだったお父さんと同じような性格をし
ているからじゃないの？」

……！！

「……凶星らしいね」

「……ウイン、何で貴方は……自分を不利になるような事ば
かり……。貴方だって遊画を本気で好きなんじゃないの？」

「……好きだよ。でも遊画の性格じゃ、また彼は死にかける。
だから少しでもストッパーを増やさなきゃ、また私は悲しむ。そし
て遊画も悲しむ。だからこそ、少しでもみんなが幸せになりたいか
ら、こうしている」

……どうやら私も認めざるおえなくなっただらしい。

「ウイン……。私も強力する。みんなを守るため……。そして、

遊画を守るために……。私は」

「……お互い、頑張りましょう」

ウインはフツと笑顔を見せた。

彼女はこれが嬉しかったのである。敵を増やしても、遊画の事を
優先させて考える。彼女らしい考え方だ。

「……ところで、遊画は」

「……………!!」

今までの話、聞かれたの？

そう思い、遊画の方を見た。

「……………スー、スー、スー、スー」

普通に寝ていた。

「……………つたく、気持ちよさそうに寝ているですわね」

呆れて、また普通のしゃべり方に戻った。

「……………でも、それが遊画らしい」

それでも遊画の顔は、何か苦しそうな顔だった。

「……………」

私たちは、より一層遊画を抱きしめた。

貴方は私が守ってみせる。

だから安心して……………ね。

そう思った時だった。

「薬が完成しました」

アウスが部屋に飛び込んできた。

「アウス!!」

「……………何でここに」

「英子さんに頼まれて、今まで薬を作っていたんですよ。んで、当

の遊画さんは……………」

「爆睡ですわね」

「……………その薬は？」

「中和の薬です。ほら、トリカブトの毒は、フグの毒で中和できる

と言うでしょう。それと似た原理です。これを遊画さんに飲ませれ

ば……………」

アウスの説明する間に、私たちはその薬を奪い取り、すぐに遊画の

口の中に放り込んだ。

「……………つてちよつと、説明している間に何やっているんですか

!」

遊画の表情が歪んだけれど、その薬を飲み込み、再び眠りについた。

「……つたく、運良く飲み込んだけれど、これで喉に詰まったら大事でしたからね」

そう言うと、アウスは部屋を出ていった。

何やら「仕事が残っているから」だと言うことらしい。

一応あの中では最長年なので、職には就いているらしい。

「……何か眠気が……」

「偶然ですわね、私もさつきから眠気が……」

何故かは分からない、でもイヤに眠い。

そう思うと、2人同時に眠りについた。

遊画はその2人に挟まれる形で眠っている。

そんな中、遊画の夢では……ちよつとした出来事が起きていた。

遊画はある意味うなされていた。

「……んううううう」

遊画の身に一体何があったのか……そんな事は、本人にしか分からない事。

でもウインやエリアはそれを分かるために必死になる。

そんな光景を……私は思い浮かべた。

「英子の言う通り遊画はうなされているが、一体何が起きているんだ？」

そんな夢の中の話などは……私はまっぴらゴメンだ。

「だが分かり合う心で遊画、私を使わせてやるかが決まる」

全霊使いエレナ……そのカードが私だが、私は仲間との絆を信じていた。

だからこそ、このカードを使うに当たつての条件は……霊使い全員と心を分かち合えると言う条件を付けた。

「仲間を信じる時、更なる力を発揮する」
私の手に持たれたカードは、それを意味するカードであった。
続く

次回予告

「か・・・海佐、何でここに」

「何故じゃないだろ。キサマ、私を理由に弱音を吐いていたらしいな。その腐った根性、私が叩き止めしてやる」

「・・・相変わらずだな・・・海佐」

次回、遊戯 王 Fate 第11話「最強ドラゴン使いの女、炎^え宇津 海佐^{かいさ}」

「・・・ところで海佐、お前は女だったのか」

次回のキーカード

クオインタム・ドラゴン・ドラゴン族・ATK3000・風・8・
シンクロ、効果

第11話「異性への恐怖、過去のトラウマ」(後書き)

あとがき

どうも、毎度お馴染みのRagoでございます。

疲れた・・・どうも心理フェイズを長くするのは難しいですね。

・・・さて、今回は愛について語りましたが・・・作者は愛の体験なんてありません。

ああ・・・悲しき青春真っ盛り。

・・・悲しくなっていました。

そして好きな動画が消され、好きな動画が復活しました。

心境がすごくビミョーです。

さて次回、海馬のようにぶち壊れているライバル登場です。

これは面白くなってきました。

次回もよろしく願います。

それでは、さらばです。

10月2日 自宅にて

第12話「最強ドラゴン使いの女、炎宇津 海佐」(前書き)

・・・来週からテストか・・・。
前回までのあらずじ、異性を恐怖に感じる薬を喰らった主人公、そ
して・・・

第12話「最強ドラゴン使いの女、炎宇津 海佐」

「おい、起きろ」

何か声が聞こえた。

気の強い女性っぽい声だった、だが俺はまだ眠いので、寝ることにした。

「……あと1分」

「今すぐ起きろ、さもなくばキサマをたたき起こすぞ
たたき起こす？」

そんなの、雅やエリアのおかげで慣れたので、気にしない事にした。
「……あと5分」

「誰が時間を繰り上げると言った。さつさと起きれ、このバカが」
……無理。

「あと5分3300秒……」

「いい加減にしろ、それは1時間って意味じゃねーか!」

「……だつたらあと7200秒」

「更に時間を増やすなあああああああ」

腹に激痛が走った。

「ぐがっ……何をしゃがる!」

俺は痛みが収まるのを待って、痛みが収まると、すぐに肘打ちをやった犯人を見た。

そこには髪が白く、俺と同じで後ろでポニーテールを作っている髪型に、スレンダーな体質……そして何よりも美しい……そんな少女が俺の前で機嫌が悪そうに立っていた。

「ようやく起きたか遊画。昔のままだな、その不拔けた性格と言いつつ、その貧弱さと言いつつ、お前は私が認めた生涯のライバルなんだぞ、もつと堂々としろ!」

……俺は話について来なかった。

この人、何言っているの?そして何で俺の事知っているの?

そんな疑問を抱いているのを感じてか、その少女は「ハア……」と、ため息をはいた。

「この私を忘れるとは……いい度胸しているじゃないの。その腐った脳味噌の中を見てみたいモンだわ」

私、そしてこの女性とは思えない言葉使い……そして、この何も無い空間……。

その時俺は、頭の中でピーンと来た……が、何か嫌気がさしてきた。

は……ははは……まさかな……この状況……夢……だよな。

うん、夢だ……完全に夢だね。

だって……。

「どうした、私の事を思いだしたのか？」

だって……こんな所に。

「天使がいる訳ないもんな」

「炎宇津 海佐だポケエエエエエエエエエエエエエエエエエ」

その言葉を聞いて、俺はビックリした。

何で海佐が……と思う前に海佐がキャメルクラッチを喰らわせたので、痛さでそんな驚きは消え去った。

第12話「最強ドラゴン使いの女、炎宇津 海佐」

「ゲホ……ゲホ……」

痛い……特に喉が……。

「ったく、何でキサマはまずその答えを思いつかないんだ」

海佐が呆れてこちらを見ている。

「普通に考えられるか、そんな死んだ人がここにいるって。そもそも、あの時の海佐のイメージしか無かったから、ってか変わりすぎだろ。見違えたぞ」

あの時の海佐は、幼く、偉そうで、強いと言うイメージしか無かつ

た。

「だが……変わらない所と言えば……」
海佐の体をジーツと見つめた。

「目つきがいやらしくなってるぞ」

「……顔つき、変わっている。体つき……あ。

「胸が唯一変わっていないなああああああああ」

「マウントを取られ、身動きがとれなくなった。」

「悪かったな、胸が成長しないで……」

「いであであであであ、ごめんなさい。何かごめんなさい」

しばらくして、海佐は「フン」と鼻息を鳴らし、俺を自由の身にさせてくれた。

「はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……」

「息が怪しい、お前は不審者か」

「何だ、俺は息をするなどでも言いたいのかお前は!？」

「……何故だろう、俺の周りの女性陣は沙耶以外まともな人がいねえ。」

「……まあ、前置きはここまでにしとこう」

「今まで前置きだったの。長すぎるような気が淒くするんだが」

「……はあ」

おいコラ、何だその「小さい男だな、お前は」的なため息は。

「小さすぎるゲスだな、キサマは」

「悪化した!?! 小さい男では無く、小さすぎるゲスと来た!?!」

これだから海佐は……

昔から自分よりも弱者の者を見下すその性格、相変わらず変わりはしねえ。

「だが遊画、キサマは私を唯一負かした男だ」

そう言えば、そんな事もあったな。

デュエルモンスターズを始めて3ヶ月、海佐とのデュエルで俺は勝ってしまった。

それからと言う物、海佐は俺にデュエルを挑み続けた。

だが結果は完敗。だが徐々にデュエルをしていく内に海佐とは仲良くなれた。

「……だが海佐、俺はそれ程強くはない。俺は中学校の頃、ライセンス取得デュエル以外では負けっぱなしだった。だから、もう俺は」

「ほう……面白い事を言うじゃないか。だったら、この場でデュエルを行おうじゃないか」

「……海佐とのデュエル、つまり因縁を付けようと言う事か。良いだろ、だが俺のデッキはここには……」

「……そう言えばキサマ、私を理由に弱音を吐いていたらしいな」

そう言えば、俺は何故こんな所に……。

『ここは特別な空間です』

何か声が聞こえた。

「だ……誰だ!」

俺は声を上げた。

「話を逸らそうとするとは……面白い、その腐った根性、この私が自ら叩き止めしてやる!」

何だか海佐が騒いでいるが俺は気にしない事にした。

『この声は、貴方にしか聞こえない声、だから一緒にいる海佐さんには聞こえません』

誰なんだ、この声は。

『この空間は、死者と生者が唯一交流できる空間、通称「ユグドラシル」と言われる場所です』

ユグドラシル……?」

『そう、世界樹が存在する空間……ユグドラシルの木は現実世界には今や存在せず、このような生と死の狭間の空間にしか存在出来なくなっていました』

何も無い景色が晴れてきた。

すると、そこには巨大な木が生えていた。

「……いや、もはや巨大すぎて全てを見渡す事が出来ない程の大きさだった。」

「な……何だ、この巨大な木は」

海佐も、その姿を確認するや否や、驚きを隠せずにした。

「これが……ユグドラシル」

生と死の狭間に存在する世界に生えている……木。

「この上には、たくさん生き物が暮らしています。この木があるから人間界と精霊界は分かれています。そして、この木があるから冥府の扉は守られています。しかし、最近奇妙な出来事が起こっています」

「奇妙な出来事？」

「冥府の王が人間界へ現れました。それはあり得ない事なのです。何故ならユグドラシルがあるから、冥府の扉は強力な盾で守られています。ですがここ最近、その封印が弱まっています。そしてこの世界にも危機が訪れようとしています。そして発動させてはならないモーメントが発動しようとしています」

危機が訪れるって、まさか……!!

「死神のカードと関係している事なんじゃ……」

「死神のカードもまた、使わせてはなりません。あのカードは魂を契約に絶大な力を発揮する危険なカード、あんな物が使われれば、たちまち世界は手に入れた人の思惑通りに動いてしまいます」

そんな危険なカードなのかよ、そのカードは。

「でも遊画、貴方にはその危機を乗り越える力があります。だからお願いです、この世界を……そしてユグドラシルを守って下さい。ユグドラシルの竜もそれを望んでいます」

「……無理だ」

俺は、率直な意見を言った。

「……無理して守って下さいとは言いません。ですが、このまま放っておいたら貴方の大事な仲間は一切どうなりますか？」

「……仲間……」。

『手に入れた人の思惑通りになるカード、それを使用した人が強欲な人だったら・・・あの子達をどう使うでしょうね』

・・・今よりも悪化して、人間不信に陥る可能性だってある。

そう思い、俺はふと顔を上げた。

「そんな事、俺がやらせてたまるか。アイツ等は俺が守る。どんな事があっても、俺はアイツ等を見捨てるような事はしない。俺は弱い、だが弱いなりの強さだってある。だから・・・俺は世界を守るとかと言う事じゃ無く、仲間を守りたいんだ！」

そう叫んだ瞬間、目の前に存在していたユグドラシルの木が消え始めた。

何が起きたかが分からなかった。

分かるのは、これまでいた空間と、今の空間が違う事だけだ。

見た感じ、周りには何も無く、宙にインフィニット型の何かがあるだけの場所だった。

「これは・・・」

『・・・分かりました。貴方が望むその願い、しっかりと受け止めました。その思いが続く限り、貴方の強さが発揮されます。とは言っても、元々から貴方は強いですけどね』

何か微笑されたが、その声はなおも続けられた。

『また、この場所に来る日が来ると思えます。全ての運命の理想郷、フェイト・シャングリラ・・・』

そう聞こえた時、目の前に何かが降臨した。

髪はロングで、不思議な感じの目、そして神様のな神秘を感じ取る姿・・・それが、俺が女性だったらこんな感じになっていただろうと言う感じであった。

「俺だと!?!」

「貴方は私、私は貴方・・・そして、運命は私・・・私は運命を操る神・・・貴方に力を与えます」

そう言うと、目の前の女性は手に何かのカードを持った。

「発動、融合解除」

そう言った瞬間、その女性は光に包まれ、3枚のカードとなった。

「これは・・・」

そのカードに触れた瞬間、そのカードは消えてしまった。

『この3枚のカードは、いずれ貴方の力になります。そして貴方を助ける事でしょう』

「誰なんだ・・・お前は何者だ！」

『私は運命、運命を導く神・・・それが私』

すると、周りの景色が再びかすれ始めた。

気がつく俺は、元いた空間、ユグドラシルの前に戻った。

「今のは・・・」

そう思った時、手に何かのカードが持たれていた。

そのカードは、イラストが無く、だがカードの色は白で、さらにその属性を見て、目を開いた。

属性・・・神

「神属性モンスター・・・確か神は三幻神、三極神と呼ばれるモンスター以外にはいないハズだが・・・」

そう考えている時、後ろから呪いのような声がした。

「公々栄々遊々画々、いつまで私を待たせる気だ」

背筋に寒気が来た。恐る恐る振り返ると、海佐の額に怒りマークが発生しており、さらに目つきが怖くなっていた。

「す・・・スマン」

そう一言言うと、持っていたカードをカードケースに収納した。

「……因縁を付ける時が来たようだな」

「ああ、俺は弱いなりの力を見せてやる……と、言いたい所だが」

そう、今の俺はデュエルディスクが無かった。

スタンディングデュエルであるので、デュエルディスクは必要なのである。

「……遊画」

うーん、一体どうすればいいんだ。

「……ここにある」

今から取ってくるのはちよつとアレだし……ってか、帰れるのか、ここから……

「……無視するな」

バキツ……そんな鈍い音が響いた。

「ぎゃああああああああああ」

気がつくくと、後ろに雅が俺のデュエルディスクを持って待機していた。

「み……雅！」

「私もいるですよ」

エリアまで……。

「お前ら、どうしてここに」

「最初からいたですよ？ってか、貴方が気がつかなかっただけです。何か文句でも？」

エリアの顔は、少しムスツとしていた。

「……お前ら」

「……遊画、私は貴方を信じている。さっきまで貴方は異性を恐怖に感じる薬で私たちに怯えていた。けど今はそんな拒否反応も出ていない。だから……」

雅は、俺の背中に抱きついてきた。

「お……オイ、雅」

困った顔をした。だがそれでもお構いなしにギュツと抱きついた。

「……なるほど、鈍感少年な程、バカだと言つのがよく感じ取れた」

何故か海佐はフルフルと震えていた。

「キサマは何も感じないのか。その状況で！」

感じる……何を？

「その……胸が……気持ちいい……とか……っつて、私に何を言わせている……！」

え、俺のせいなの？

「こんな屈辱は初めてだ……胸の感触を感じたことが無い私にとって、どんな感触かが気になっているのに……」

……今聞くのも何だが、一応言ってみよう。

「海佐……ここに来て気づいたが、お前女だったんだな」

プチン、海佐の中で何か切れた音がした。

「……面白い事を言うなキサマ……あの頃の私を男だと勘違いしていると言つことで受け取ってもいいんだな」

はい、その通りです。

「もうあつたま来たわ。今からやるデュエルは、因縁と言つよりは生命を賭けたデュエルにしてやるうかしら」

海佐は、何か恐ろしいオーラを発生させていた。

「か……海佐？」

「遊画、キサマが負けた場合……その身を生け贄に捧げてやる」

「何の、何の生け贄に捧げるつもり……！」

「さあ、始めよう」

「っ、やるしか無いのか。雅、デュエルディスクを」

そう言つて雅からデュエルディスクを受け取ると、腕に装着した。

「……なるほど、こうやって遊画は墓穴を掘っていくのか」

「納得ですわね」

呆れた表情のお2人さん。

何を言いたい？

「こっちは準備OKだ、そっちは」
「当の昔にしている」

「・・・今始めたばかりのクセに。」

「思ったが、恐ろしいので口には出さなかった。」

「行くぜ海佐」

「来い、遊画」

「『デュエル』」
「LP4000」

「先行は海佐からだった。」

「私のターン、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、アルカナ・ファイアードレイクは通常召喚する事ができる。現れよ、アルカナ・ファイアードレイク」
「アルカナ・ファイアードレイク」
「ドラゴン族・ATK2500・炎・6・効果」
「早速上級モンスターを召喚したか。」

「カードを2枚伏せてターンエンド」
「俺が後攻で良かった。海佐の得意戦術、それは速攻パワーである。一時的にパワーで押し切り、そしてパワーで守りを固める、それが海佐のパワーデッキである。」

「ジャック・アトラスのようなパワーデッキと違うのは、海佐はドラゴンでデッキのほとんどを占めている。」

「しかも、召喚したターンは攻撃できないモンスターや、エンド時に破壊されるモンスターもいくつか存在する。」

「なので、よくよくフィールドが空きやすい。」

「それが弱点なのである。」

「俺のターン」

「よし、いい感じの手札だ。」

「手札を2枚墓地へ送り、セブン・スター・スター・マジシャンを特殊召喚」
「セブン・スター・マジシャン・魔法使い族・ATK2200・光・」

「7・効果」
「そして墓地のクリボーナイトの効果により、自分の場にチューナーが存在しない場合、墓地から特殊召喚できる。来い、クリボーナイト」
「クリボーナイト・悪魔族・ATK200・闇・」

「ますます面白い。自分の場にモンスターが存在せず、キサマの場にモンスターが存在する時、バイス・ドラゴンは特殊召喚できる。行け、バイス・ドラゴンへバイス・ドラゴン・ドラゴン族・ATK 2000・闇・5・効果ㄱただし、この効果で特殊召喚されたこのモンスターの攻撃力は半分となるへバイス・ドラゴン・ATK 2000 1000ㄱそしてさらに、チューナーモンスタードラゴンカタパルトを攻撃表示で召喚へドラゴンカタパルト・ドラゴン族・ATK 1000・炎・2・チューナーㄱレベル5のバイス・ドラゴンにレベル2のドラゴンカタパルトをチューニング 5 + 2

ㄱ 7 下級が集えし時、王者の鼓動が鳴り響く、私が力を見せてやる。シンクロ召喚、玉砕せよ、パワー・ストライク・ドラゴンへパワー・ストライク・ドラゴン・ドラゴン族・ATK 2800・闇・7・効果ㄱ

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

その竜が鳴いた。

見た目が太く、腕がムキムキで爪が伸びており、力だけで全てを掴んできたと言われたら納得しそうなドラゴンであった。

「パワー・ストライク・ドラゴンで、エンドレス・ドラゴンを攻撃、ストライク・フォース」

手を思いっ切りエンドレス・ドラゴンに振りかざした。

「パワー・ストライクの効果により、攻撃力を強制的に半分にする。パワー・ドレイン」

エンドレス・ドラゴンが苦しんでいるのが分かった。

拳でエンドレス・ドラゴンの攻撃力を吸収していた。

「っ………へエンドレス・ドラゴン・ATK 2800 1550」

そして、エンドレス・ドラゴンを殴り倒した。

「うっ………だ………だが、ファイティング・スピリッツを破壊して、戦闘から身を守る」

「……だが、戦闘ダメージは受けるよな？」

「っ……」HP4000 2750」

「だが、バトルが終了した事により、エンドレス・ドラゴンの攻撃力は元に戻る」HPエンドレス・ドラゴン・ATK1550 2500」

「私はターンエンドだ」

一気にライフを削られた。

だが……

「ここからだ、俺のターン。俺はエンドレス・マジシャンを守備表示で召喚」HPエンドレス・マジシャン・魔法使い族・DEF1000・光・1・効果」そしてこのモンスターが存在する限り、エンドレス・ドラゴンは戦闘では破壊されず、攻撃力は400ポイントアップする」HPエンドレス・ドラゴン・ATK2500 2900」

このまま行けば……

「バトル、エンドレス・ドラゴンでパワー・ストライク・ドラゴンを攻撃、パラディン・クロー」

エンドレス・ドラゴンの爪が剣状となり、パワー・ストライク・ドラゴンを貫いた。

「っ……だが、それでいい」HP3700 3600」

わずか100ポイントしか削れなかったとは……だが

「海佐のフィールドにはモンスターがない。これで……」

「甘いな！」

んな……この状況で甘いだと？

「パワー・ストライク・ドラゴンは、破壊され墓地に送られた時に自分の墓地に存在する攻撃力2000以下のドラゴン族モンスター1体を手札に加える効果が備わっている。私はバイス・ドラゴンを手札に加える」

まさか……一切フィールドを空かさずに相手をパワーで押し切る戦術を考えたとも言うのか！！

「カードを1枚伏せてターンエンド」

っ……今までの海佐とはレベルが違う。何があったんだ、コイツ

に。

「私のターン、手札からバイス・ドラゴンを特殊召喚へバイス・ドラゴン・ATK2000 1000」さらにチューナーモンスター、フォース・ドラグーンを攻撃表示で召喚へフォース・ドラグーン・ドラゴン族・ATK1300・闇・3・チューナー」
チューナーだと、シンクロ召喚か！

「レベル5のバイス・ドラゴンに、レベル3のフォース・ドラグーンをチューニング 5 + 3 = 8 無限の粒子が現れる時、更なる力が叫びを上げる。王者を超える、大王者となれ」

バイス・ドラゴンの中の星が、輪となったフォース・ドラグーンの輪の中に入り込み、直列の状態で光り出した。

「シンクロ召喚！！我が象徴、クオントム・ドラゴンへクオントム・ドラゴン・ドラゴン族・ATK3000・風・8・シンクロ、効果」

現れた竜は、全身を粒子で覆い尽くされた竜であった。あらゆる角度から見てもその本体を確認できず、体全体が粒子で包まれているため、輝かしく、そして綺麗な竜なのである。

「クオントム・ドラゴンで、エンドレス・マジシャンを攻撃、ステライルニユートリノ・スパイラル！！」

口と思える部分から衝撃波が発生した。

それと同時に、俺は畏カードを発動させた。

「畏カード、聖なるバリア・ミラーフォースを発動。クオントム・ドラゴンを破壊するへ聖なるバリア・ミラーフォース・畏・効果、相手モンスターの攻撃宣言時に発動することができる。相手フィールド上に存在する攻撃表示モンスターをすべて破壊する」

目の前に巨大な鏡が現れたのと同時に、海佐も動いた。

「甘甘すぎる。キサマのそのぬるい考え、私が壊してやる。伏せて

いた速攻魔法発動、エネミーコントロール2」

「エネミーコントロール2だと！！」

フィールドに、巨大なコントロール2が現れた。

「コマンド入力により、効果を発揮する魔法カードだ。エネミーコントロール・2・速攻魔法・効果、コマンド入力により、以下の効果を発動する。・500ライフ+ A A R Z X Y 相手モンスターへの攻撃力を半分にする。・500ライフ+ A X B Y R R X Y 手札を1枚墓地へ送り、相手フィールド上のモンスター1体を裏側守備表示にする。・500ライフ+ A B X 罠カードの効果を無効にし、再びセットさせる。・それ以外のコマンド このカードを再びセットさせる。よって、私のコマンドは、
下下 A 左右上 B X 上下!」
LP 3600 3100」
海佐は、そのコマンドを浮いているコントロールに音声で入力した。

「このコマンドにより、キサマが発動させたミラーフォースの効果を無効にし、再びセットさせる。ただ、このまま放っておくようなマネはしない。その前にその雑魚を片づける、クオインタム!!!」
見事にそのコマンドを言い当てた為、発動させたミラーフォースは不発に終わり、そのままセットされた。

「……だがエンドレス・マジシャンは、自分の場にエンドレス・ドラゴンが存在する時、1度だけ戦闘では破壊されない」
そして、エンドレス・マジシャンはその衝撃波をモロに喰らい砕け散った。

「何故だ!!!」

「クオインタム・ドラゴンの効果により、守備表示モンスターを攻撃した時、戦闘では破壊せず効果で破壊する。そして破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを遊戯、キサマに与える。ペンタクォーク・シャフト!」

集まった粒子が巨大な球を作り上げ、その球が俺を押しつぶした。

「……LP 2750 1750」

「フン、エンドレス・マジシャンの攻撃力が同じだった事を後悔するんだな。カードを1枚セットしてターンエンド」

「……だが。」

「俺のターン、俺はターンエンド」

「フン、何も出来はしないか。私のターン」

さて、伏せカードがミラーフォースだと分かっているだろうから攻撃はしてこないだろうと思うが……。

「ここは力で押し切るのみ。バトル、クオインタム・ドラゴンでエンドレス・ドラゴンを攻撃、ステライルニユートリノ・スパイラル！」

バカな、伏せカードを警戒もせず！

「ならば再び罠カード、聖なるバリア・ミラーフォース……」

「やらせるとでも思ったか愚か者めが、カウンター罠発動、神竜の叫び。自分フィールド上にドラゴン族モンスターが存在する時、手札を1枚墓地へ送る事により、その効果を無効にし破壊する。神竜の叫び・カウンター罠・効果、自分フィールド上にドラゴン族モンスターが表側表示で存在する場合にのみ発動する事ができる。手札を1枚墓地に送り、相手が発動した魔法、罠カードの効果を無効にし破壊する。ミラーフォースの効果を無効にする……」

雷撃が発生し、ミラーフォースのカードを粉碎した。

「っ……このままじゃ」

「それにより、攻撃は通るよな。これで終わりだ……」

だが……やらせるか……！

「ダメージステップ時、手札のスタート・ランナーを墓地へ送りその効果を発動する。攻撃を受けるモンスターの攻撃力を500ポイントアップさせ、その戦闘では破壊されない……」

クオインタム・ドラゴンとエンドレス・ドラゴンの間にスタート・ランナーが現れ、エンドレス・ドラゴンの目の前で相手モンスターの攻撃を受け止めた……かと思うと、すぐに破壊されたが威力は弱まっており、エンドレス・ドラゴンはその衝撃波を爪で裂いた。

「うまく受け流したな。私はターンエンド……それと同時に、クオインタム・ドラゴンのもう一つの効果を発動。自分のターンのエンドフェイズ時、このモンスターを墓地へ送る事ができる」

自らのモンスターを墓地に……。

「それにより、お前のターンではクオインタム・ドラゴンの戦闘破壊は出来なくなる」

そ……それが目的か!!

つまり、クオインタム・ドラゴンは自分の都合で自分のターンにだけ現れる臆病な強者、そして相手ターンでは破壊できない効果を持っているのか。

「だが……海佐のフィールドにはモンスターがない。今のうちに」

「ちなみにこの効果で墓地に送られているクオインタム・ドラゴンは相手ターンに除外された時に特殊召喚され、相手は攻撃できない」
インチキ効果も対外にしろ!!

「そんなモンスター効果は備わっていない……だが、そんな効果の罫カードなら存在する。永續罫、粒子の合成を発動。効果はさっき言った通りの効果だ!!」
「粒子の合成・永續罫・効果、自分の墓地に「クオインタム・ドラゴン」が存在する時、相手は攻撃を行う事ができない。また、自分の墓地に存在する「クオインタム・ドラゴン」が相手効果によりゲームから除外された場合、墓地のドラゴン族モンスター2体とこのカードをゲームから除外する事により、表側攻撃表示で特殊召喚する」
これが……力の全て。相手を封印し、自分の力を出し切る。それが……私の新たな戦術だ!!」
つ……どうにかして、次のターンだけでも凌ぎきるしか無い。

「俺のターン……」

これは……

「俺はエンドレス・ドラゴンを守備表示に変更へエンドレス・ドラゴン・ATK2500 DEF2100」
そして手札から憑依装着ウインを守備表示で召喚へ憑依装着ウイン・魔法使い族・DEF1500・風・4・効果」
ターンエンド」

「何も出来なくなつての守りか。無駄だ、私のターン、このスタンバイフェイズ時、墓地のクオインタム・ドラゴンは復活する」
クオン

タム・ドラゴン・ATK3000」

今だ!!

「永続罨発動、同族性封じの魔術。自分の場に霊使い、または憑依装着が存在する時、相手フィールドの同じ属性のモンスターは攻撃できない。同族性封じの魔術・永続罨・効果、自分フィールド上に「霊使い」または「憑依装着」または「霊神」と名の付くモンスターが表側表示で存在する時、相手フィールド上に存在する、そのモンスターと同じ属性のモンスターは攻撃宣言をする事ができない。俺の場のモンスターはウイン、そして風属性。これにより、クオントム・ドラゴンは攻撃宣言を行えない!!」

・・・だが、これは一時的な壁だ。

何ターンか経過した時、恐らく何かしらの魔法カードを使用し、このカードを破壊しに来るだろう。

だからこそ、俺はギリギリの綱渡り状態なのである。

そしてもう一つの問題が・・・あの永続罨だ。

粒子の合成、アレをどうにかしなければ、俺は自分のターンに攻撃を行えない。

クオントム・ドラゴンを先に破壊するか、それともあの永続罨をどうにかするか・・・これが今からの問題だ。

あのカードが無くなれば、クオントム・ドラゴンはフィールドに居続けなければならなくなる。

その時が勝負を仕掛ける瞬間だ。

何かしらの手はあるはずだ・・・何か・・・良い戦術が。

「どうした遊画、これからが楽しみ時だろ。私を・・・楽しませてくれ!」

「っ・・・」

・・・何があっても俺は勝つ。

良い戦術? そんな物は・・・その時次第でどうにかしてやる!!
続く

次回予告

「っ……これが……海佐の力」

「そうだ、これが冥府で手に入れた力、クオインタムが全てを導く」

「だが、俺は負けない!!」

「面白い、だったら見せて見る。私に勝つための、弱者のあがきと
言う物を！」

次回、遊戯 王Fate 第13話「風の想い、風霊使いの奇跡」

「……遊画、勝って」

次回のキーカード

風霊神ウイン・魔法使い族・ATK2500・風・8・シンクロ、
効果

第12話「最強ドラゴン使いの女、炎宇津 海佐」(後書き)

あとがき

こんにちは、作者のRagoです。

やる気が出ない・・・恐らく来週中間試験だからだと思つが・・・
つと、愚痴つてすみません。

ついに第12話です。

ライバルが死んだ人でどうすると言つツツコミはスルーです。

痛くありませんよ、なーんにも痛くは・・・。

疲れた、完膚無きまで疲れた。

と言つことで、今回はおさらばです。

それじゃあ、エンドフェイズで!!

さらばだ。

・・・最後に、恐ろしくあとがきが手抜きで、スイマセン。

10月9日 自宅にて

第13話「風の想い、風霊使いの奇跡」(前書き)

これが・・・新生代ジャンル、カードバトルラブコメディだ!!
とは言っても、主人公殴られてばかりだけどね。

第13話「風の想い、風霊使いの奇跡」

状況は不利と言った方がいい。

何故なら、相手の場には攻撃を封じる永続罫、粒子の合成が存在し、更に強者の証、クオインタム・ドラゴンまでもが存在する。

この状況を・・・まずは脱出したい物だが、どうもそうはいかない。しかし、俺の場にも一応手は打っておいた。

こちら永続罫、同属性封じの魔法を発動し、クオインタム・ドラゴンはフィールドにウインが存在する限り、攻撃できなくなった。

しかし、それは危うい橋を渡るような物だった。

確かにクオインタム・ドラゴンの攻撃を封じた、だがそれは粒子の合成よりも不安な攻撃封じなのである。

こちらのライフは1750、対する海佐のライフはあと3500・・・この差をどうやって縮めるかが、勝利の鍵だ。

そして粒子の合成、またはクオインタム・ドラゴンが消えた時が、勝負だ！！

「何をそんなにジツと見ている。私はカードを1枚伏せてターンを終了する。そしてクオインタム・ドラゴンを墓地へ送る」

再びクオインタム・ドラゴンが渦の中に消えた。

「・・・俺のターン・・・」

これは・・・。

「手札から魔法カード、ライト・ホール・グリッドを発動。デッキからカードを2枚ドロし、デッキからカードを4枚墓地へ送る。ライト・ホール・グリッド・魔法・効果、自分のデッキからカードを2枚ドロする。その後、自分のデッキの上からカードを4枚墓地に送る。カードを2枚ドロ！！」

これでやっと手札が2枚になった。

「そして、デッキからカードを墓地へ送る」

デッキからカードを1枚、2枚、3枚、4枚と墓地へ送ると、その

中にちよつとした良いカードが混じっていた。

「そして墓地へ送られたクロックの副写像の効果により、このカードが墓地へ送られた場合、このカードをゲームから除外する事により、デッキからカードを2枚ドローするハクロックの副写像・罫・効果、このカードが墓地へ送られた場合、墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事により、デッキからカードを2枚ドローする」さらにカードを2枚ドロー」

海佐の手札は1枚、そして伏せカードは1枚、そして永續罫が1枚と来たら・・・文句無しの状況だ。

「・・・・・・・・つふ」

何か海佐の表情が気になった。

第13話「風の想い、風霊使いの奇跡」

「・・・・・・・・遊画、そう言えばお前は何をやっていた」
急に海佐が問いただしてきた。

「・・・・・・・・急に何を言っているんだ？」

「私が死んだあの日、キサマは一体何をやっていただけと聞いている」

何故急にそんな事を聞いてきたのかは分からない。だが、答える価値はあった。

「・・・・・・・・あの日、俺はお前が死んだのを自分のせいだと自分に問いつめていた」

海佐の葬式の最中、俺は耐えきれなくなり外へ走り出した。

「僕のせいだ・・・僕のせいだ・・・」と言いながら、俺は走っていた。

海佐……海佐……ごめん、僕が弱かったから……
僕が強かったら、こんな事にはならなかったハズなのに……
。そう思いながら、どこにも行く宛ても無く走っていた。
しばらくすると、公園に差し掛かった。

前を見ずに、俺はその公園へと足を踏み入れた。
すると、偶然前から人が来ていた。

当然気づくわけも無く、小さい体は、前から来ていた大きな体にぶ
つかり倒れようとした。

すると、その体の大きな人は、倒れかかった僕の体から伸びた手を
握り、自分の方へと引き寄せた。

「大丈夫かキミ」

そして僕は、その流れに沿って頭がその人のお腹に当たった。
すると、急に涙が出てきた。

さっきまで我慢していたのに……どうして。
それに気づいたのか、その人は僕を優しく抱いた。

「……何かあったのか？無理して押さえる必要は無い、泣きた
い時には泣けば良いさ」

その言葉で、僕がこらえていた暖かい物が、一斉に目からこぼれ落
ちた。

「う……う……う……う……う……う……う……う……う……
ああああああああああああああああああああああああああああ

僕は泣き出した。これでもかと言つほどに……。

しばらくして、その人に今までの状況を全て話した。

「……そうか、まだ小さいお前にとっては辛かっただろう」

まだ僕は「ひぐっ……ひぐっ……ひぐっ……」と少し涙をこぼし
ていた。

「それで、その犯人は捕まったのか？」

「……………(コクン)」
小さくうなずいた。

「そうか……………」

「……………そしてね、この記憶で邪心とか何とかが活性化したとかと言う理由でね、この記憶を消してしまおうとトトが言っているんだ」
僕は、僕の中でも一番イヤなことを話した。

「邪心……………それにトト？」

その人は首を傾げた。

「僕の中にもう1人の僕がいるんだ。お願い、それを止めて。僕は海佐の事を忘れたくない……………だから……………」

「もう1人の僕……………」

「信じてくれる？その事を友達に言ったら、びよーきだコイツとか言つて、僕をバカにしたんだ」

「……………コイツも……………俺と同じような……………」

何かを呟き、そして

「分かった、信じるよ。それじゃあ、その人に合わせな」

「……………うん」

するとその人は、急に別方向を向くと「どうした……………ああ、コイツに何かを示しているのか。なるほど、コイツも似ているからな、遊城（遊城 十代くん）と呟いていた。

「……………どうしたの？」

「……………いや、何でもない。それよりもちよつと良いか？」

そう言つて、その人は自分のカードケースから1枚のカードを取り出した。

「コイツがお前に付いていきたい……………だとさ」

そう言つて、そのカード……………クリボーナイトと書かれたカードを俺に手渡した。

「あ……………ありがとう」

何故その時こんなカードをくれたのかは分からない、でも少なくともその人には……………これから先どうなるのかが見えていたのかも知

れない。

それは限りなく、経験上の思考なのかもしれないが。

「……それじゃ、合わせてくれ」

「……うん、分かった」

そう言つて、その後の記憶は無くなつた。

気づけば俺は、今回の事件に関する記憶が消されていた。

ただ……

『……フアラオ?』

そんなトトの声だけは覚えている。

まるで、懐かしい物を見るような声が……。

「なるほどな、キサマでもそんな思いをしていたのか」

何かバカにされているようだが、まあ気にしない事にした。

「そう言う海佐は一体どんな思いをしていたんだ」

逆に問いただした。

「私は……いや、私だつて辛かつた」

気づいたらそこは、何もない空間だつた。

体の感触さえもない場所……私は分かつた。

自分は死んだのだと。

何が原因でこうなつたのかは……正直分からなかつた。

だが、言える事はあつた。

「怖い……」

そう、何か怖かつたのだ。

自分じゃ無くなる・・・そんな感触が私を過ぎった。

私はうずくまった、何もない空間で・・・ただ1人。
すると、突然横から声が聞こえた。

「・・・オイ、大丈夫か？」

すぐに横を振り向いた、するとそこには少年がいた。

見た目の年齢は16か17歳程度の・・・髪型が少し異様な・・・
だが私は、この人を知っていた。

「・・・デュエルキング・・・武藤 遊戯」

まさかこんな所でデュエルキングに出会えるとは思ってもいなかった。

「・・・フツ、それは昔の話だ。今はただの冥界に住む死人さ」

冥界、その言葉を聞いて・・・私はある種の絶望を抱いた。

やはり私は死んだのだ・・・もうアイツと・・・遊画とデュエル
が出来なくなつたのだ。

「・・・私は、もう・・・」

落ち込んでいるのを見ると、遊戯は私の肩をポンと叩いた。

「いずれか別れはやってくる、それはいつかは分からない。お前の
場合は早すぎただけだ」

そんな事を言われても、落ち込む物は落ち込むに決まっている。

「・・・お前、デュエルはやるのか？」

そんな事を聞いてきた。

「・・・ああ、私はデュエリストだ！！力が全てのな」

そう、胸を張って言ってみた。

「・・・そうか、ならば俺とデュエルをやらないか。お前はもしか
したら・・・大物になる気がするからな」

「フン、望む所だ」

そして私たちは、しばらくデュエルを楽しんだ。

現実から逃げるようにして・・・。

「結局私は、死を遠ざけていた。私は死んでしまった事を忘れるためにデュエルを続けてきた。その苦しみが遊画、キサマに分かるか！！」

コイツ……そんな気持ちで……でも、それは違う。

「……寂しかったんだな」

「んな……!?」

コイツは……辛いと言う感情ではない。

「自分に辛いと言いつ聞かせておいて、本当は寂しかったんだな。だ
がな海佐」

俺は顔をキリツとすると、海佐に一言、こう言った。

「少なくともお前の隣に遊戯さんがいた。だから今お前はこうやって元気でいられる。辛かったら今、感情の無い言葉を発しながら答えているだろうと思う。何故なら……」

俺は、雅の方を見た。

「コイツは……雅、いや、ウィン・ダ・アーケインライラは本当に辛い思いをしてきた。だから今も言葉に感情がこもっていない時だつてある。それでもコイツは一生懸命生きてきた。それはエリアも同じ……だから海佐、お前は辛かったんじゃない、寂しかったんだ。少なくとも、その時の感情は！！」

海佐は、俺の言葉に息を詰まらせていた。

「だ……黙れ。この私が寂しかっただと、笑わせるな！！私はいつでも最強を目指していたデュエリストだ、だから寂しいと思った事は1度も」

「ならば聞くが、遊戯さんにこう言われなかったか……海佐、お前は王者を目指すな。お前の周りには仲間がいる。仲間を頼りに、道を進め！！」

海佐はその言葉を聞いて、さらに後ろに下がった。

「何故だ……何故その言葉を」

「俺だって同じような事を言う事もある。海佐、お前には俺がいる。だから、自分しか信じない王者では無く、絆を頼りに王者になれ！」

「……っ、誰のせいで……」

「誰のせいでこうなったと思っっている。あの時、私がいなければお前は死んでいた。それでも言いたい放題いいやがって」

「……俺は……死んでいた。」

「生きとし生ける屍……俺は……俺は……」

「そう言った瞬間弱気になるとは、随分と都合の良い頭をしているな。ああ」

「だが、俺は負ける訳にはいかなかった。」

「……っ、誰が……負けるか」

俺は自分をなだめた。

「そっだ、俺は生きている。生きとし生ける屍では無い。だから聞け海佐、人は……信じてこそ真の王者を超える事ができる生き物だ。自分の力を捨てず、だが自分の力だけで全てを解決せず、仲間を信じてこそ、真の王者と呼ぶんじゃないのかよ」

「……キサマ……」

「王者とは一体何なのか、その答えを見せてやるぜ。デュエル再会だ！！俺は手札から大脈動崩壊を発動。自分の場のモンスター1体を破壊し、相手フィールドに存在する魔法、または罫カードを2枚まで破壊する。大脈動崩壊・速攻魔法・効果、自分フィールド上に存在するモンスター1体を選択して破壊する。破壊したモンスターのレベルが3以下の場合、相手フィールド上に存在する魔法、または罫1枚を破壊する。破壊したモンスターのレベルが6以下の場合、相手フィールド上に存在する魔法、または罫カードを2枚まで破壊する。破壊したモンスターのレベルが7以上の場合、フィールド上に存在するカードを2枚まで破壊する。それにより、俺は憑依装着ウインを破壊！」

ウィンが渦に吸収されるのを見ると、再び海佐の方を見た。

「そして粒子の合成と、その伏せカードを1枚破壊する！！」
風が発生し、海佐のカード2枚が破壊された。

「これでお前の場はがら空きだ！！バトル、エンドレス・ドラゴンで海佐にダイレクトアタック、パラディン・クロー！」

エンドレス・ドラゴンの爪が剣状となり、そのまま海佐に突っ込んだ。

そして………通った。

「っ………」
LP3500 1000

「カードを1枚伏せてターンエンド」

よし、このまま行けば……。

「だが忘れてないか、王者は再び私の場に舞い戻る。私のターン、復活せよ、クオインタム・ドラゴンへクオインタム・ドラゴン・ATK3000」さらに前のターン破壊され墓地へ送られた罨カード、ドラゴン・アイの効果を発動」

「墓地から罨発動だと！！」

迂闊だった、あの伏せカードははったりと言うことか。

「このカードの効果により、相手の場の伏せカード1枚を確認できる。そしてそのカードが通常罨カードだった場合、そのカードを破壊し相手に500ポイントのダメージを与える」ドラゴン・アイ・罨・効果、相手が攻撃を宣言した時に発動する事ができる。そのモンスターを表側守備表示に変更する。また、墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事により、相手の魔法、罨ゾーンにセットされたカード1枚を確認する。確認したカードが通常罨だった場合、そのカードを破壊し、相手に500ポイントのダメージを与える」私は、右側の伏せカードを確認」

右側のカードが開かれた。

そのカードは………。

「……ほう、永続罨、遅すぎたDNA移植手術か。一体何のためこんなちっぽけなカードを伏せているかと思えば……見て損

した」

「・・・ダメージが与えられるのは、通常罠だけだったよな？」

「そうだ、だが遊画、私はすでに攻撃が出来るようになってる。忘れたとは言わせんぞ、あの永続罠、同族性封じの魔術の効果は、自分の場に霊使いモンスターが存在しなければ発動しない。だから攻撃するなら今がチャンスだ。私は手札からトリツキー・ドラゴンを攻撃表示で召喚へトリツキー・ドラゴン・ドラゴン族・ATK1200・風・3・効果^ヱ行くぞ、クオンタム・ドラゴンでエンドレス・ドラゴンを攻撃だ。ステライルニュートリノ・スパイラル！

再び、エンドレス・ドラゴンに向かって粒子の衝撃波が発生した。

そして俺は、何も出来ることが無かったので、そのままエンドレス・ドラゴンの破壊を許してしまった。

「ぐっ・・・」[△]LP1750 1250[△]

「そして更に、トリツキー・ドラゴンでダイレクトアタック！」
そして、トリツキー・ドラゴンの口から火を噴いた。

「っ・・・」[△]LP1250 50[△]

残りは・・・わずかに50。

「こ・・・これが、海佐の力」

「そうだ、これが冥府で手に入れた絶対的な力、クオンタムが私を強者へと導く。私はこれでターンエンド。どうだ、我が力が全て、この思考は間違いでは無いだろ」

「・・・それは・・・違う」

「この後に及んでまだ言うつもりか。全く、強情なヤツだな」

「それでも・・・俺は諦めない。例えライフが1になっても、その残ったライフ1に全てを賭ける、それが、俺のデュエル・・・そしてそれを可能にするのは、俺のデッキの仲間たちだ」

「フン、その残念な頭をどうにかしろ。だがその甘い考えを捨てないでいるとは、余程に自信があると言う事だな。だったら見せて見る、キサマの力を！」

だつたら……見せてやるぜ。仲間を思うと言うのが……
甘い考えでは無いと言うことを。

「俺の……タアーン」

引いたカードは……来た。

「俺は憑依装着エリアを攻撃表示で召喚へ憑依装着エリア・魔法使い族・ATK1850・水・4・効果」
すると、目の前にエリアが現れた。

『遊画、勝つ自信はあるのでしょうか？』

「任せておけ、俺は……お前らを信じる」

『そうですか？ だつたらあの時にウインと口論していたのは一体何故ですか？』

酷く背中に冷や汗をかいた。

あ……あの時は……その、記憶にないと言うか……

「ぐっ……それは」

『……ふうん、全く……都合の良い頭ですこと』

何故かエリアは『やれやれ』としていた。

「どつという意味だ、それは！？」

そう俺が反発した時、エリアは更に顔を近づけた。

『良い事、貴方の悪い所は都合の良い所を忘れてしまう事……と言う前に、まずその性格をどうにかするのです。自分の欠陥を棚に上げて、物事を言うのはやめなさい。何でも自分のせいにするのはやめなさい。自分だけの責任だと思ひ込むのは疲れるだけでしょ。あの時だつて、不良に囲まれた時、誰かを読んでもくれたら……あんな怪我をする事も無かつたでしょうに』
その言葉を聞いて、俺は目を逸らした。

『そうやってまた目を逸らす。あの時道に倒れている遊画を家まで運んだのは私なのよ』

！！お……お前が。

『家に運んでいる時、貴方はこう呟いていた。人を殴った……』

他人の感情を考えないで……最悪の人間だ……俺は……と、少し泣いていた。だからこそ分かるのよ、貴方は何もかも自分1人で背負い込んでいる。多分海佐の事件の事だって……今でも自分のせいだと思っっているでしょう」

「……つ、ああ思っているよ。あの時俺に何か力があれば良かったと俺は思った。その時俺は思ったんだ。誰かを守る力が欲しいと……誰かのために守る力だけあればいい。自分の命を犠牲にしてまでも……」

その言葉を聞いた瞬間、エリアは体を振るわせた。

そして、俺を睨んだ。その目つきはまるで、鬼のような目つきだった。

『悲しい事……言わないで!!』

その瞬間、エリアが数秒実体化して、俺の頬にビンタした。

「エ……リア？」

ビンタされた頬に手を当てると、俺はただ呆然と立っている事しか出来なかった。

『自分の命を犠牲にしてまでも？ふざけた事を言わないで!!貴方は何も分かっていない。貴方がいなくなれば……ウインはどうなるの？私はどうなるの？結局はあの時裏切ったトト・モーランのような事をするハメになるじゃない！自分を犠牲に私たちを遺跡に封印したあの行為……私たちに言わせれば、ただ裏切ったと思えないあの時の行為……貴方は本当にトトソックリね。自分は何かを守りたい、過去の過ちは犯したくない。そんな事はかり言っていたら……他人が悲しむに決まっているじゃ無いの!!』

「……つ、言わせておけば……俺の命など安い物だ。そんな命で他人を救えるなら……」

今度は完全に実体化し、思いつ切り俺を殴り飛ばした。

「グハツ……」

そしてそのまま、馬乗りで俺に乗ってきた。

「安い命なんて無い。貴方の命は・・・貴方だけの物。誰の物でも無い。でもだからと言ってその命を粗末に扱わないで、自分は良いかもしれないけど・・・私が困るのよ。もう・・・貴方を・・・失いたくない！」

その言葉で、俺は何かを感じ取った。

エリア・・・彼女が何をそんなに悲しんでいるのか・・・俺には分からない。でも分かることが1つだけある。俺に対して・・・何か感情を持っている。

何の感情かは分からない、でもこれは雅からも感じられる感情だ。

「貴方自身、何かを失いたくないと思っっているでしょうが・・・それは私たちも同じ。だから・・・もう・・・」

その言葉でエリアは脱力したらしく、俺の胸に倒れ込んだ。

「エリア・・・ごめんな、何故お前がここまでして俺を責めるのが分からないが、お前は人を失いたくないんだな。お前の父親のように・・・もう、誰も」

するとその様子を見ていた海佐は、何故か頭に手を当てていた。

「・・・ハア」

何故かため息を付いた。

「キサマ・・・エリアがお前に言いたい事を全く理解出来ていないらしいな」

理解・・・出来ていないだと!?

「海佐、それは一体どういう意味だ？」

「・・・まあ良いだろう。それよりも、いつまで遊画の上に乗っているんだ・・・その・・・エリアちゃん」

エリアちゃんって・・・少し笑えるな。

「遊画、さつき失礼な事を考えなかつたのですの？」

そう言っつて、思いつ切り腹を殴った。

「グハッ・・・い・・・イイエ、ナンニモ」

そう言っつたが、何かご機嫌が斜めであった。

「・・・何かお仕置きがしたいですね。と言っつことだ」

何を始める気だ。

「こちょこちょで我慢してあげるですわ」

ま……待て……それだけは……。

「うりうりうりうりうりうりうりうり」

エリアが俺の脇をくすぐり始めた。

「ふはっ……や……め……くああん、っ……

っ……お願い……だから」

「……あ……アダルトになったのですわ」

エリアは顔を赤くして、俺から離れた。

でも何故か満足した顔だった。

「お前は感じやすい体質だろうな。あの調子で行けば……」

海佐も、少し顔を赤くしていた。

「……さて、キサマのターンだ」

つと、忘れてた。

「……エリア、お前には悪いが……ここでカードコストになつてもらおう」

『……まあ、戦略の為なら仕方ないですの。でもこれだけは約束して』

いつの間にか精霊状態に戻ったエリアは、俺に向かって微笑んだ。

『勝って……』

そう言つて、再び前を向いた。

「エリア……安心しろ、必ず勝つてみせる。行くぜ海佐、これが俺の……力だ!!」

「面白い、だったら見せてもらおうか。力を超えた先にある、仲間との絆を……そして見せて見る、私に勝つための、弱者の足掻きを。全力で来い、遊画!!」

「ああ、これが……俺の力だ!! 畏発動、魔術の誘い。自分フィールド上に存在する魔法使い族モンスター1体を墓地へ送り、墓地に存在する魔法使い族モンスター1体を特殊召喚する。魔術の誘い・畏・効果、自分フィールド上に存在する魔法使い族モンスター-

1体を墓地へ送り発動する。自分の墓地に存在する魔法使い族モンスター1体を選択し、自分フィールド上に表側表示で特殊召喚する。それにより、俺はエリアをリリース、そして現れよ、憑依装着ウインへ憑依装着ウイン・ATK1850」

目の前に雅が現れた。

「……エリアとのやりとりを聞いていたけど遊画、貴方はやっぱりバカ」

いきなりバカと言われた。

「んな……バカって」

「……だってそう、貴方は他人の不幸をどうにかするあまり、自分の不幸を軽く見過ぎている。でも、それがどれだけ他人を不幸にするか……」

雅もまた、俺を何か特別な目で見ていた。

「雅……?」

「……ウインって呼んで」

「何を今更」

「……良いから、私は認めた人からはそう呼ばれないと気が済まない」

「……分かったぜ、ウイン。お前が俺を認めたのなら、俺はそれに答えるまでだ。墓地に眠る風の翼ウインの効果発動。憑依装着ウインが特殊召喚に成功した時、デッキ、手札、または墓地から1度だけ、このモンスターを特殊召喚できる。チューナーモンスター、風の翼ウインを特殊召喚へ風の翼ウイン・魔法使い族・ATK100・風・4・チューナー」

「レベル4のチューナーだど!!」

「これが……俺達の絆だ。レベル4の憑依装着ウインとレベル4の風の翼ウインをチューニング 4 + 4 = 8」

羽の生えたウインが透明となり、その中から輪が発生し、憑依装着ウインを囲んだ。

「吹き荒れる、風と風が連鎖するその時に、風霊神の名の元にその

姿を幻想せよ」

そして、直列となった星が一気に光りだした。

「シンクロ召喚、風の想いを告げる。風霊神ウインへ風霊神ウイン・魔法使い族・ATK2500・風・8・シンクロ・効果」
現れたモンスターは、モンスターの領域を超えた。

普段のポニーテールでは無く、髪を下ろし、杖は自分の杖とカームの杖を両手に持ち、更にはより美しくなったウインの姿が、そこにあった。

「……フツ、だが攻撃力はこっちが上だ。それにトリッキー・ドラゴンが存在する限り、戦闘ダメージは0になる。これをどうやって乗り切る気だ」

「風霊神は風の上を行く神、風を従えし魔法少女だ！！ウインの効果により、相手の場に存在する風属性モンスターの効果は全て無効化される」

「なん……だと」

見ると、トリッキー・ドラゴンが完全に倒れていた。

「バトル、風霊神ウインでクオントム・ドラゴンを攻撃。貫け、ウインド・ストーム」

「愚か者が、クオントムの方が攻撃力は上だ！！」

「風霊神ウインの効果、このモンスターが攻撃を行う時、相手の場と墓地に存在する風属性モンスター1体につき、攻撃力が200ポイントアップする」

「んな……だ、だがそれでも攻撃力は400ポイントアップする。残り100足りなかったようだ。このターンで決着を付けるのは無理のようだ」

「いや、このターンで決着を付ける」

「なに……」

最後の希望、それはお前も見ただ！！

「永続罨発動、遅すぎたDNA移植手術」

「そ……そのカードは」

「この効果により、俺は風属性を宣言。それにより、お互いの墓地のカードは、宣言した属性となる。遅すぎたDNA移植手術・永続罨・効果、発動時に1種類の属性を宣言する。このカードがフィールド上に存在する限り、お互いの墓地に存在するモンスターは自分が宣言した属性となる」海佐、お前の墓地には確かドラゴン族が5体いたよな？」

「っ……」

「よって、ウインの攻撃力は……3900だ。風霊神ウイン・ATK2500 3900」そしてまだだ、手札から速攻魔法、マジシャンズ・フォースを発動。魔法使い族モンスターが戦闘を行う時、自分の墓地に存在するレベル4以下の魔法使い族モンスター1体をゲームから除外し、その攻撃力分アップする。マジシャンズ・フォース・速攻魔法・効果、自分フィールド上に表側表示で存在する魔法使い族モンスター1体と、自分の墓地に存在する魔法使い族モンスター1体を選択して発動する。選択した自分の墓地に存在する魔法使い族モンスター1体をゲームから除外する事により、選択した自分フィールド上に存在する魔法使い族モンスターの攻撃力、守備力を除外したモンスターの元々の攻撃力、守備力分アップする。それにより、除外するモンスターは憑依装着エリア、その攻撃力をウインに加える。風霊神ウイン・ATK3900 5750」

幻影としてエリアが現れ、そしてウインと一緒にニヤリと笑った。

「っ……これが、仲間との絆だ!!」

「クオインタム・ドラゴンは竜巻に巻き込まれ、そして……」

「グオオオオオオオオオオオ」

木っ端微塵に粉碎した。

「バカな……この私が……負けただと」HP10000

「っ……」

「周りに存在していたモンスターが姿を消し始めた。」

海佐はその場で膝待ついた。

「大丈夫か、海佐!？」

俺が近づこうとした時……

「来るな、こんな事で……私がへたばるとでも思ったか」

そう言つて、自力で立ち上がった。

「……まあ、力が全てではないと言つのは分かった気がしないでもない。だがしかし、次に会う時までには、私はもっと力をつける。その時までにはキサマよりも強くなってやる」

……だが、次に会うのが一体いつになるのかが分からない。海佐はすでに死んでいるし、それに……

「……だが、その時はまた俺が勝つてやる」

……まあいいや。俺も全力を出しきつた、これがライバルとの対決と言ふことか。

「フン、次はその鼻先からへし折つてやる。そしてキサマが膝待ついた時、その時は……その、私が手を差し伸べてやるからな。覚悟しろ」

その時、俺は急に視界が回ってきた。

「うつ……視界が……」

そしてそのまま倒れ込んだ。

「遊画、一体どうしたんだ……遊画」

そして俺は……意識を無くした。

気づいた時には、俺はベッドの上にいた。

「今までの……夢？」

そりゃそうだろうな、死んだハズの海佐があんな所にいる訳が無いもんな。

そんな事を呟いていたが、俺はある事に気がついた。

試しにエクストラデッキを開き、確認した。

すると、そこには謎の少女からもらった1枚のカードがあった。

「これは……つまりお前の仕業だったのか」

あの時の少女、一体彼女が何者なのかは分からない。

だが1つだけ言える事があった。

それは……。

「異性を恐怖に感じるのを和らげた、そんな所だろうか」

そう言つて、隣で寝ている雅とエリアを揺さぶつた。

「ほら起きろ、朝だぞ」

そうして、今日という日が始まった。

続く

次回予告

次はヒータの心を開かせる時か。

とは言つても、ヒータの心の闇なんて……考えたことも無いし。

……アイツに何があつたか、何故かアイツは時々、悲しい目をする時がある。

次回、遊戯王Fate 第14話「心の支え」

『お兄ちゃん、お兄ちゃん』

「……お前、妹いたのかよ」

次回のキーカード

火霊使いヒータ・魔法使い族・ATK500・炎・3・効果

第13話「風の想い、風霊使いの奇跡」(後書き)

あとがき

はぁ・・・・・・・・・・死にかけた。

この2週間、テストはあるわ、ウィルスに感染して熱が39.4出るわで、もう散々でした。

ですので、この話は大急ぎで書きました。

ネタが切れそうだ。

そう言えば最近、友達と喋っていた時に、こんな事を言っていました。

「そう言えばさ、電撃とかあつとけ、ジャンプ文庫って無なよね？」

「まあ、そいは仕方なかつちやなか(それは仕方ないんじゃない)。

一応あそこは漫画中心だし」

・・・・・・・・と言つような方言全開の会話でした。

考えてみれば、あつても面白そうだとは思いますが・・・・・・・・・・なあ、無いか。

それでは次回、今度は2週間以内には出しますので、応援宜しくお願いします。

では。

10月24日 自宅にて

第13話「退屈な1日」(前書き)

番外編です、パロディネタ満載ですので、完全にギャグ回です。

第13 / 5話「退屈な1日」

体が重い。

何でこんなに重いんだろ……………。

原因は、俺が風邪引いているからだ。

……………アレが原因としか言いようがない……………まさか、あんな事があるとは。

第13 / 5話「退屈な1日」

話は昨日に戻る。

海佐とのデュエルから1日、俺は楽しいデュエルを心に刻み、いつものようにアカデミアに登校していた。

俺は片手で携帯をいじりながら、休み時間を満喫していた。

「えーっと、『今日は何時に帰るんだ？もしもアレなら、私が晩ご飯を用意してやろう』と言うエレナからのメールか。まあ、『別にいい。今日も俺が作ってやる』と……………流石に2日連続でエレナに作らせる訳にはいかないからな。今日は俺が腕を振るう番だ」
そんな事を呟いていた。

「……………ん、何だこのメール？」

見ると、そこには1つのメールがあった。

「なにになに……………『今日と明日の運勢は大凶中の大凶、特に水と女性と薬には十分注意しましょう。ただし、女運に関しては、何か良いことが1回だけありそうだ』か……………。何だこのメール、っと思えば、そう言えば最近『占いはミスティにお任せ』と言う物があるって聞いたな。何でもミスティと言う有名人が占ってくれると言っ、ありがた迷惑な無料メールが……………。バカバカしい、俺は占いなど信じはしない。だから、これは放っておこう」

そう言っていると、俺は携帯をポケットに入れ、次の授業、体育の準備に

入った。

その時授業は100m走である。

俺はいつものように、走り、トップでゴールしようとしていた。

「へへへっ、軽い軽い」

そんな軽いノリで走っていた。

ああ、ここまでは日常的な風景だったが……。

「危ない、そのキミ」

そんな声が聞こえたかと思えば、俺の目の前に大量の水が噴き出した。

「うおっぷー！」

見事に全身ビショビショになった。

「スマン、スプリンクラーが故障して、150m先まで水が飛ぶようになってしまったんだ」

「ただけ威力を強めた!?そして更に無駄に水を飛ばすような技術をスプリンクラーに搭載するな。誰だこんな物を作ったヤツ、自重しろ!!!」

「いやー、まさか俺が作ったこのスプリンクラーにここまで威力があるとは……作った本人も驚きだよ」

そんな声が聞こえた。

「この声は……まさか」

颯爽と振り向いた。

そこには俺達の担任、新和がそこにいた。

「テメエか!何だよこのスプリンクラー、無駄に飛ばすような技術を取り入れるな……ファクチュー!!!」

「うう……体が寒い、さっさと着替えなければな。」

「まあアレだ、スプリンクラーにそんな技術を取り入れれば、もし

も不審者が現れた時にこれを投げつければ不審者が飛ぶかなーなんて思ってたさ・・・友人に作らせたのさ」

「なるほど、どうやって貴方が教師になれたのかが不思議でたまらんが、とりあえず保健室に行つて来ます」

とりあえず俺はびしょ濡れとなつた体で、保健室へと向かつた。

保健室

「こんにちは・・・先生」

そう言いながら、俺は保健室に入った。

「何の用でしょうか？」

そんな声が聞こえた。

彼女の名はフレン・アークエイラ、アーカイト校アカデミアの保健の先生でもある。

「いや、全身にスプリングラーの水が掛かってしまい、どうも肌寒いと言つか何と言つか・・・」

「困つたわね。着替えも無いし、空いているベッドも無いし」

空いているベッドが無い？

「ちなみに・・・今誰が寝ているんですか？」

確かベッドは3つあつたはずだが・・・。

「右が1年Bクラスの子、そして真ん中が3年Cクラスの子、そして左がちよつと体調を崩した三沢先生よ」

「みさ・・・誰だっけ、そんな教師、ウチの学校にいたっけな？」

『公栄、お前は俺の存在を全面的に否定する気か！！』

アレ・・・何もいない八ズのベッドから声が・・・。

「まあ、そんな事は放つておいて・・・フィクチュ・・・更に悪化しているような・・・」

寒気が明らかに悪化している。

「何でまた、スプリングラーに？」

「原因はウチの教師ですよ。あの野郎、スプリングラーを改造して水を150m先まで飛ばせるようにしたんです」

『なるほどな、ヤツならやりかねないからな』

そんなやりとりをしている時、フレン先生は「それじゃあ、お茶を持ってきます」とポットからお湯を注ぎ始めた。

そして、熱いお茶を俺に差し出した。

「はい、ゆつくり飲んでね」

先生の笑顔が天使に見えた。

最近と言えば……別の作り笑顔しか見てないからな……確かあの時は……。

ダメだ、思い出したくもない。

「まあ、ありがたく……」

飲もうとした時、まさか目の前の蛇口がぶち壊れるとは……誰も想像しないよな。

「ブアッブ」

そして再び俺に直撃するとは……神は俺を嫌っているらしい。そしてその後も昼休みに俺がちよつと出かける用事の時に雨が降るわ、何故か水たまりがあり、そこを運悪くトラックが通り、水を跳ねて行くわで、帰る頃には、熱が40度近くまで上がっていた。

「……エレナ……スマンが晩ご飯を用意してくれ」と……もうイヤだ」

そんな事を呟きながら、1人で病院へと向かった。

結果、普通に風邪だったが「3日間は安定にしていなさい」と言われた。

流石にアレだけ水を被り、さらには着替えが全滅すれば……
ビチヨビチヨの体で授業を受けるしか無かった。
それが一番の原因だろ。

そして俺は……帰って早々、寝た。

もはやコイツ、生きているのか……と疑いたくなるような感じで。

そして次の日、いわば今にあたる。

「そう言えば……まだ『薬と女性』が残っていたな。薬は何が
どうなるかは分からんが、女は……」

思い当たる伏しか無くて困る。

そんな事を呟いていた。

「……水を持ってきた」

見ると、雅がタライに水を入れた状態で持ってきた。

「あ……ありがとう、雅」

すると、急に顔を近づけた。

「……ウインって呼んでって言ったでしょう」

ムスツとした顔でそう言った。

「わ……悪かった」

「……そう、分かればよし」

「……そう言えばウイン、お前アカデミアは？」

今日もアカデミアは普通に授業のハズだが……。

「……今日は休みと言った。そしたら「オーケー」と先生が」

野郎、何か恐ろしい予感がすると思いいウインを休みにしたな。

「……そんな事で、今は私と遊画しか家にはいない」

「そうか、それじゃ俺は寝る」

「……つまない男」

そう言うと雅……いや、ウインは部屋を出ていった。

「……っと、忘れてた」

再び部屋に戻ると、俺の頭の上のタオルを取り、それを水に浸し、

固く絞り、その後俺の頭の上に置いた。

「……早く元気になつてね」

そう言つてウインは、俺の頭をなでた。

そんな仕草が、まるで女の子のような仕草だった。

「あ……ああ」

何故だろう、急にそんな事をされると恥ずかしい。

「……そうだ、絵本を読んで上げる」

「絵本ねえ……ヒマだし、頼むよ」

ウインは部屋の本棚から1冊の本を取り出した。

「……じゃあ読むよ、ハリー　ッターと」

「ハイ待て、それは絵本と言われる分類じゃ無いのはお前でも分かっているよな？」

「……じゃあ、別の本にする」

渋々ウインは、部屋の本棚から1冊の本を取り出した。

「……読むよ、とある魔術の……」

「絵本にしるおおおおお、何でだ、何で禁書　録呼んでんだ！これは小説だ、ライトノベルの分類だ！」

「……かわいいのに、イン　ックス」

「流石にその系の作品は出すのが凄くマズイから。っ……再び頭痛が……」

ツッコミ過ぎて、頭痛が頭を走った。

「ウイン、真面目に絵本を探そうな」

「……うん」

ウインは本棚をあさり、1冊の本をまた取り出した。

「……読むよ、正しい『ピー』の方法」

「読むなあああああああああああ、何でそんな本が俺の部屋にあるんだ！誰だ置いていったヤツ、通りで沙耶とフルがこの間俺の部屋に来た時、沙耶は顔を赤くして、フルは「ムツツリ」と言うハズだ。多分だが、いや、絶対に犯人母だろうがな」

息子の部屋に何て物を置いていったんだあの母は……恐ろし

い、ある意味恐ろしい。

「っ……………そろそろ本当に絵本を読んでもくれウイン」

「……………それなら、ここに真面目そうな絵本があるから」
片手に絵本を持っていた。

持っていたんなら読め！

「……………読むよ」

「頼んだぞ、今度は真面目な……………」

「リア充物語」

真面目じゃない、誰だ作者！！

「……………昔、ある所に自分は世界で一番充実していると思っ
ている若者がいたそうだ」

「初っぱなからアホな若者登場！？」

「とある時、その若者はこう言った。「この僕は世の中で一番裕福
だ。女にもモテるわ、全て僕の思い通りになるわで、僕は最強だ」

「うっわー、自己中だコイツ」

「これを見た村長は」

「村長いるんだ！？ここは村か」

「リア充よ、お前は世間を知らなさすぎる」

「リア充って名前！？世界探してもそんなふざけた名前はいないと
思うんだが！！」

「都へ行って来い、さすればお前の道が開かれる」

「村長何者！？何の道を開かせるつもりだ」

「そう言われ、リア充は都へと旅立ちました。するとリア充はとん
でもない光景を目にしました。それは村よりも明らかに裕福に生活
している若者、そして更に巨大な建物」

「巨大な建物からして、これ書かれたの最近だと分かるぞ」

「そしてリア充は膝待ついた、これが……………上の生活なんだと」

「路上で膝待つ行為すると、周りから冷ややかな目でしか見られな
いから。と言うかお前何様だ？」

「そしてリア充は、こう考えました。「こがんことじゃいかん、も

つと自分は鍛えんぎんた」

「急に九州弁！？何だコイツ」

「すると目の前で、ホップダンスを踊っている……」

「もう良いウイン」

「……何で、これからダンス大会に出て優勝して、更に自分には守りたい者があると思ひ込み、ヤキン ウー工攻防戦にガ ダムで武力介入するシーンなのに……」

「いろいろと混ざってる！！何故だ、何故そこでSE Dとダブオーが出てくんだ。せめてア・バ ア・クーだろ、そこは！？」

マイナー過ぎてネタが分かるかどうか分かんが、とりあえずこれは絵本じゃない、完全にギャグ小説だ！！

「……って、いい加減普通の絵本を読んでくれ。ほら、桃太郎とかさ」

「……最初からそう言っ」

ウインは持っていた本を本棚に直し、そして別の本を持ってきた。

「……桃 + 戦記」

よし、予想通りだ。

「誰があ かで連載している本を読めと言った。戻せ」

「……面白いのに、特におばあさんとおじいさんが」

「確かに性別入れ替わり、拳げ句の果てには美少年と美女になっているのは俺でも面白いとは思うが……とりあえず絵本を持ってこい」

完全に命令形になった。

「……分かった」

そうして今度という今度は、普通に絵本を読んできた。

その時の俺の感情は、疲れたの一直線だった。

そろそろお昼の時間だ。

時間帯的には12時50分、しばらくウインに絵本を読ませていた

が、流石に疲れたのか「……一旦部屋に戻る」と言って下に降りた。

「……ところで、このマンション、個室は2つしか無いんだが……隣の部屋を勝手に使っているんじゃないだろうな。」

「……それはない、私の部屋は精霊界にある。」

「そうなのか？精霊界はそこまで便利なんだな。」

「……やろうと思えば、アカデミアまで3秒で往復できる」だからコイツはギリギリまで家にいる訳だ。

「……ところでだウイン」

「……なに？」

「お前……おかゆを作ったんだよな？」

「……（コクン）」

普通にうなずきやがった。

「だったら……何でおかゆから異様な異臭がするんだ。何を間違えてこうなった!？」

何かおかゆから巨大な蟹の手が浮いているんだが……そして何だこの緑色の野菜。

「……お米を蜂蜜で洗い、そして水を多目に入れて、隠し味に精霊界では有名なロブスターを切って導入、更にはセリを導入した」

「まずお米は蜂蜜で洗う物では無い。そして何だロブスターって、そんな怪しい食材入れんな!!もう少し言うが、これはセリじゃない、お茶葉だ!！」

何でセリとお茶葉を間違えた。どっからどう見ても違っただろ、これは。

「……いいから、食べて」

そう言っつて、ウインは自分で作ったおかゆを俺に向けて食べさせようとした。

「……はい、あーん」

クツ……冗談じゃない、こんな食べたら具合が悪化するような食べ物食べてられるか。

「…………強情、ならば無理矢理でも」

ウインがそう言うと、ウインは自分の胸を俺の胸に押し寄せた。

「う…………ウイン、何をやるつもり…………!!」

ウインは、自分の胸を俺に押し寄せて、そのツツコミを待っていた。当然、おかゆ(?)は俺の口の中に流された。

「ウツ…………マズッ」

俺の素直な感想だった。

何だこの味、マズイを通り越した味だ。

「…………ごめん」

ウインが急にシユンとなった。

「…………私が不甲斐ないばかりに、こんなマズイ料理を食べさせるなんて」

「半分強制的だったがな…………ウップ、まだ口の中に蜂蜜の風味が異様な感触で、更に気持ち悪い…………」

「…………これからはちゃんと努力するから」

「…………ウイン？」

急に何を…………?

「…………だから、私の愛を…………受け取って」

愛…………哀の間違いじゃないのか？

「…………悲しむの哀と思った瞬間、貴方を殴る」

バキッ

「思ったの前提で殴った!?確かに思ったけど」

バキッ

「2回目!?しかも…………溝打ち来た…………」

以外と深く殴られたので、しばらくは動けなかった。

「…………遊画」

見下しながら俺に問いかけた。

「な…………んだ？」

「…………何でもない。ホラ、さっさと持ってきた薬を飲む」

ウインの手には、俺の風邪薬が握られていた。

「あ……ああ、すまない」

そう言つて、ウインから風邪薬……をもらったハズだった。

……そう言えば、まだ薬と女がまだ残っていたんだ……

そんな事を忘れ、俺は何も疑わずにその薬を飲んだ。

「……それじゃあ、私はこれで」

そう言つて、ウインは部屋を出ていった。

「全く、ウインは一体何をやりたかった……ん……だ？」

体の芯から快感という名の感情が込み上げてきた。

何だ、急に体が……っ！！

「かはっ……な……何だ」

何だこの気持ち、高ぶっている……俺の気持ちが……ん

「っ……き、気持ちいい、何故だ……こ

れは一体何が起きているんだ」

そう思い、俺は原因を思い出していた。

「……あのおかゆが原因か、だがそこまで変な物は入って

いなかったハズ……だとは思うが」

そんな事を思っていた時であった。

『

携帯が鳴り始めた。

「誰だ、今」

そう思いながらも携帯を開き、内容を確認した。

すると、1つのメールがあった。

送り主は……アウスからであった。

アウスは今、薬品会社に勤めている時だが、一体何の用だ？

「『えーつと、言いにくい事ですが……家に失敗して興奮剤となつた薬が1粒だけ置いてきてしまいました。風邪薬と間違えて飲まないようにして下さい。アウスより』……」

俺はその返事を速急に打った。

「『おせーよ、そんな恐ろしい薬置いて行くな！！ウインが間違えて俺に飲ませてしまったぞ（怒）帰ってから覚えとけ』・・・つと、送信」

原因が解明したので、俺は薬の効果が切れるまでふて寝する事にした。

「・・・・・・・・ん、ん・・・・・・・・落ち着け俺、何を快感にしている・・・・・・・・。早く切れる・・・・・・・・薬の・・・・・・・・。効果」

しばらく地獄を見るようだ・・・・・・・・今のタイミングでウインが来たら・・・・・・・・考えるのはやめよ・・・・・・・・

「・・・・・・・・ただいま」

何でだよ、何でただいまなんだよ、つてか今は来るな！！あとで相手になるからさ。

「・・・・・・・・ウイン、今はちょっと放って置いてくれ。恐ろしく激痛が」

普通、ここまで言えば大抵の人は引き下がる物である。

「・・・・・・・・だったら、私が一緒に寝てあげる」

だが相手がコイツだと言う事を忘れていた。

「・・・・・・・・普通、ここは引き下がる所では？」

「・・・・・・・・多分、私が原因だから。私があんなおかゆを作ったから・・・・・・・・だから、寝込みで襲われても文句を言えない」

「俺のキャラ認識そこまで落ちているのか！？何で襲う前提で話を進めているんだ・・・・・・・・」

「マズイ、普段認識していないせいで・・・・・・・・いや、興奮剤のせい・・・・・・・・ウインがかわいく見える。」

「・・・・・・・・お前つてさ」

「・・・・・・・・？」

「・・・・・・・・普段は意識していなかったが、かわいいんだなつて、何を言っているんだ俺は！！」

「・・・・・・・・！！か・・・・・・・・かわいいって」

ホラ見る、何かイヤな空気になっちゃったじゃねーか。

「・・・・・・・・スマン、忘れてくれ」

「・・・・・・・・嬉しい、かも。普段私からは暴力しか与えていないのに、それでもかわいって」

意識しているんなら殴るのやめろ。

「・・・・・・・・っ・・・・・・・・押さえる・・・・・・・・理性を・・・・・・・・」

「・・・・・・・・理性？」

マズイ、聞こえた。

しかもその時丁度。

『・・・・・・・・』

俺の携帯が鳴り始めた。

「・・・・・・・・アウスから・・・・・・・・『飲んじゃったんですか！？アレっ
て2時間程度は薬の効果が続きますよ。間違っつて飲んでしまったに
しても、今日は女性と一緒に空間にいるのは凄く危険です。我なが
ら、失敗して興奮剤を作ってしまったのを反省していますので、ど
うか許して下さい（汗）アウスより』・・・・・・・・遊画？」
いつもの鋭い声に戻ったな、ウイン。

「な・・・・・・・・んだ」

「・・・・・・・・貴方つて人は・・・・・・・・間違いで興奮剤を」

「記憶が正しければ貴方のせいですけどね」

と言っか、お前のせいだ。

「・・・・・・・・ちよつと、エリアのようにいじってみようかな」

・・・・・・・・は？

「・・・・・・・・えい」

ウインは俺の胸を指で突いた。

「・・・・・・・・っ・・・・・・・・なにを・・・・・・・・」

そして次は、俺の足をなで回した。

「っ・・・・・・・・っ・・・・・・・・っ・・・・・・・・」

そして次に、俺の耳を甘噛みした。

「・・・・・・・・っ・・・・・・・・っ・・・・・・・・っ・・・・・・・・ふあん」

何を・・・・・・・・やっている・・・・・・・・コイツは。

「…………面白、遊画をいじる事って、楽しい」
「たの…………しむな」

完全に弱体化した俺を見つめるウイン…………。
「…………遊画って、一部の人に対してはDSで、女性に対してはDMになるよね」

何気ないウインの一言は、俺の心に刺さった。

「確かに…………言われてみれば…………そうじゃ無い事を…………祈る」

否定したハズが、半分自分でも認めてしまった。

「…………だから、熱が下がるように…………しばらくいじってあげる」

「断る…………」

いじる？そんな事させてたまるか、俺は逃げてでも…………。

「…………(スツ)」

ウインは何かを取り出した。

それは、ウインがいつも持っている杖であった。

「待てウイン、それで一体何をやるつもりだ？」

何かイヤな予感しかしない…………それなら

「逃げるまでだ」

そう言つて、俺は布団から出ようとした。

しかし流石は興奮剤、俺の行動で体に快感が走った。

「…………」

つい倒れる俺、う…………動けない、しかもさっきよりも悪化してやがる。

もはや熱がどうとかと言う問題では無くなった。

「…………っふ」

怪しい目つきで笑うウイン…………あ、悪夢だ。

「…………逃げられないよ、風霊術 縛」

そんな声が聞こえたかと思うと、体が動けなくなった。

「んな…………!？」

「これで……遊画は……一生……私と」

コイツ、何か取り憑かれているのか？明らかに言葉が病んでるぞ。

「ふふふふ……逃げられない、これで」

ああ……更に体に快感が……もう、限界だ……。

「俺……は……ダメだ」

人を襲うようなバカなマネは出来ない、俺は……。

「俺は、一度人を死なせてしまった。だから……」

そう言った瞬間、ウインは手に持っていた杖を俺に向かって振り下ろしていた。

「痛っ……何をする」

「……殴るよ」

「ちなみにこの場合は叩くが正解だ。殴るは人を素手で叩く場合に言われる言葉だ。つてか、本当に何をする！！」

すると、ウインは俺の顔の近くまで顔を寄せた。

「……遊画、決して我慢はよくない。ここまでして襲わない方が逆に不健康、貴方は何でも相手の事を思いすぎている」

「だったらさっきまでの行動は一体何だ！？お前が我慢していないんじゃない……」

「……さっきのは、お母様が「遊画はヤンデレが好き」と言ったから」

結果として、俺は母にもてあそばれたのか、何をやっているんだ母は！

「……でも、さっきの行動を見て、遊画はヤンデレは好きじゃない」

「と言うよりは、死ぬ程までに愛されなくてもいいから。恐ろしいからな、ヤンデレ」

一度ゲームで恐ろしいハッピーエンドと言う名のバッドエンドを迎えた事がある。

あのエンドは恐ろしかった……まさか妹キャラがあそこまで落ちたとは……実際に義理の妹がいるが、俺も気をつけよう……

・・・と思つた瞬間であつた。

「ウインよ、お前は別に何もしなくてもいい」

「・・・何でそう言つたの」

何でつて、そりゃまあ

「お前は無理してまでも、異性である俺に構わなくても良いと言つ事だ。俺はお前の苦しみを分かっている、だから・・・」

「違う」

急に何を・・・？

「私は別に、無理はしていない。ただ単に、貴方に構つて欲しいから、貴方と一緒にいたいから、私は貴方の側に、少しでもずつといたいから。貴方は私の苦しみを全く分かっている！！」

分かっているんだと、一体コイツにとつて何が苦しいと言つんだ！？

「私は、ただ怖い。いつまで貴方と一緒にいられるかが・・・今回の事件で貴方と離れる可能性だつてある。だから、私は・・・」

「ウイン・・・」

俺の腕が自然にウインを抱きしめた。

魔法は自然に解けたのであろう、ウインがこの状態であるのなら納得である。

それに若干刺激が走つたが、それを辛抱してまで、俺はウインに伝えなかった。

「俺はもう、お前からは離れない」

「・・・遊画」

そうさ、俺は・・・コイツ等の心の闇を取り除かなければならぬ。そんなヤツの心配になる対象になつてどうする。ならば俺は、それを出来るだけ取り除かせるまでだ。

「・・・それじゃ、俺は再び寝るから・・・ウイン、お前は精霊界に帰つてもいい」

ウインから体を離れた、するとウインは若干顔を赤くして、俺にこう言つた。

「……………いや、本当に一緒に寝てもいい？」
……………え？

「……………ベッドの隣に寝てもいいかと聞いている。何もしない、ただ、貴方の温もりを感じただけ、だから」

うーん、そう言えば昔、義妹と一緒に寝た記憶があるから……………まあ良いか。

「分かった、それじゃあウイン、俺の横で寝な」

そう言っつて、俺の横を少し空かした。

「……………それじゃあ、おやすみ」

ウインは横の布団に潜り込み、目をつぶった。

「それじゃあ、おやすみな」

俺も、目をつぶった。

これから先、コイツ等と共にピンチを乗り切る時が来るかもしれない。

そんな時、俺は一体何をすればいいのか……………答えは決まっている。

「それを一緒に乗り切る、例えばどんな時が来ようとも、今の俺なら……………乗り切られる」

「……………え？」

「いや、何でもない」

そうさ、俺は……………。

そんな事を考え、2人とも同時に眠りについた。

余談だが、それから約2時間後に俺達が心配で帰ってきたエリアに見つかり「何をしているのですの!？」と言う事で怒られた。

そしてアウスの薬のせいで更にエリアからも5分ぐらいいいじられた。占いて、当たる物だな・・・改めてそう思った。

そして次の日には、何故か治っていた。

アウスがお詫びとして、病気を魔法で治したんだとか・・・すげーな、魔法少女。

そんな奴らが隣にいる俺の方が凄いのか・・・そう俺は苦笑した。
番外編その1、終わり

第13 / 5話「退屈な1日」(後書き)

あとがき

やってみたかった番外編、どうも、作者のR a g g oです。

最近恐ろしい程ミスが見つかり、恐ろしくシヨックです。

やっぱりミスがあるのは良くないな・・・改めてそう思った時でもありました。

さて次回、ヒータの心の闇が明かされます。

これからが勝負だ、まだ空白の話しに書き込むこの作業・・・・・・・・・・がんばります。

それではこの辺で、さよなら。

10月26日 自宅にて

第14話「心の支え」(前書き)

何か最近、閲覧数が下がっている。これはマズイ・・・そう思う
心です。

第14話「心の支え」

「クウツ、あのガキ相手に勝てもしなかったとは……自分が情けない」

エクスの中で俺は嘆いていた。

「まあ、テメーみたいな雑魚相手じゃ、英子の息子は勝てなかったと言う事じゃねーのか？」

隣で「クツ、クツ、クツ」とイヤな笑い声が聞こえた。

「うるさいぞコラ、俺はな……あの時セキュリティが来なかったら今頃勝てたハズだ!!あの時は」

「もついい、お前は結局は雑魚だったと言う事だ」

「んだと、もう1ぺん言ってみろ！」

俺とコラは口論になった……。

するとそこに、1人の人物が現れた。

「何をそんなに騒いでいる」

そこには我らがボス、ナスカ様が上機嫌な顔でそこにいた。

「何って、コイツが失態を犯したから責めているだけです」

「んの……ふざけた事を……」

「やめとけ、何を言おうとキミは失態を犯したんだ。公衆遊園を逃がした罪は大きい、だからこそ、我はとある賭で勝負に出る」

とある賭け……何だ一体？

「ちよいとな、迷い込んだ魂だけの邪心を拾ったのでな。そいつを利用するだけだ」

その時、ナスカ様は不自然な笑いをした。

「コイツだ」

そう言うと、そこに1人の男が現れた。

年齢は29歳前後な見た目であり、フードを被っているのが特徴的な人であった。

「……言われた通りにやれば……ヤツに会わせてくれる

見ると、そこには相変わらずの無表情少女、霊能 雅こと、ウイン・ダ・アーケインライラが俺の隣に座っていた。

「気配を感じられないとは・・・お前は一体何を学んだ。まあ、質問には答えるが、ヒマだ」

そう言つと、ウインは立ち上った。

「・・・そう、ならば予定は」

「特になし」

別に今日はどこかへ出かけようと言う気にはならない、そう思えば最近アカデミア以外に出てなかつたな。

「あの時ウインと一緒に観光案内をした時以来、どこにも行つてないな」

そう呟いた。実際には、悲しくて時計台まで非難した時があったが、あえて忘れた。

「・・・だつたら、どこかに行かない？どうせヒマでしょう」

そう言われたつて・・・そうだ

「時計台に行かないか？あそこは景色が綺麗だし」

その時、ウインの表情がこわばった。

「・・・あそこは行きたくない・・・何か、イヤな雰囲気がする」

イヤな雰囲気・・・確かにあそこは元自殺スポットでもあるからな、ウインは靈感でもあるのか？

「・・・いや、実際に若干幽霊だしな、コイツは」

「・・・？」

何かを呟いた？的な視線はやめる、妙に痛々しい。

「幽霊とは失礼ちゃうか？ウチらは確かに精霊やけど、自爆霊とかその辺の分類とは全く違うんやで」

この声は・・・ヒータか。

「何だヒータ、だつたら何の幽霊類に入るんだお前らは」

「幽霊とは失礼な、ウチらは精霊や、精霊」

「どつちみち、霊だがな」

そう言えば幽霊と精霊の共通点つて何だろうな、面白そうだから後

で調べておくか。

「……………」

話しに付いて来れない人が若干1名いた。

「なあウイン、幽霊と精霊の違いって何だろうか？」

「……………それは、私にも分かんない」

そうか、コイツにも分かんない事が…………

『ゆーれーは、しんだひとがじょーぶつできないときにあらわれるたましいで、いわばしんだひとのたましいがゆーれーで、せーれーはひとが作りだした、ものにやどるたましいのこと。でもひとが作りだしたとはいってもじっさいにこーやってしぜんにでているけどね』

へー、そんな違いがあるんだな…………

「……………」

さっきの、誰の声だ？

「こらヒーナ、勝手に出てくるな」

そんなヒーナの困った声が聞こえた。

『いいじゃんおねーちゃん、だってヒーナつまんなかったし』

「お姉ちゃんはな、お前が心配で出てくるなって…………」

『おねーちゃんしんぱいしょーだよ、ヒーナはそうかんたんにしんぱいしないから』

何だ、ヒーナと…………コイツは、ラヴァル炎樹海の妖女じゃねーか。

「それにお姉ちゃんって…………お前妹いたんだな」

すると、それに気づいてか、ラヴァル炎樹海の妖女は俺を見るなり

『じー』と見つめていた。

『おにーちゃん、おにーちゃん』

「何だ、お兄ちゃんに何か用か？」

『あそぼつ、どーせきょうはヒマなんでしょうっ？』

そうは言ったってな、相手は精霊だし…………どうやって遊べと。

「遊画、ウチの妹に何かちよっかい出したらタダじゃあきまへんで」

後ろでヒータが睨み付けているがあえてスルー。

「そうだな・・・それじゃしりとりでもやるつか」

『うん、そーしよー』

子どもは良いな、無邪気だし、可愛いし、何より悪気が全くしないし・・・。

「・・・遊画、ロリコンに目覚めた？」

ウインは何故か俺の頭の上に顔を乗せた。

「何をやっているんだウイン・・・？」

「・・・別に」

そう言つて、そっぽを向いたのが感じられた。

何だコイツ・・・？

『おにーちゃん、おなまえは？』

そう言えばコイツにまだ自己紹介をしてなかったな。

「遊画だ、お前は何て名前だ？」

『ヒーナ、ゆうがおにーちゃん、いつもおねーちゃんがいつてもえりあおねーちゃんやういんおねーちゃんからぎゃくたいをうけているって』

ヒータ、子どもに教える言葉を考えような。

『でもそれは、ゆうがおにーちゃんのが好き・・・』

『ヒーナちゃん、それ以上は恥ずかしいから言わないのですのー！』
エリアが精霊状態で出てきた。

何か恥ずかしい事を言われそうになったのか？コイツは・・・。

「・・・ヒーナちゃん、それは本人の前では言わないって約束だったよね」

ウインがヒーナに向かって「めっ」と言っていた。

平和だな・・・この日常的な風景は、もはや写真にでも撮したいくらい平和だ。

そう思っていると、ヒーナは俺の方を見てニッコリと笑った。

『それじゃー、しりとのり、りんご』

おお、いきなりか！？

「だったらゴング」

プロレスなどのアレである。

『ぐ……ぐ……ぐらたん!』

あっはははは、流石に子どもか。

「ヒーナ、すでに、んを言ったぞ」

『……ふうみのぱすた!』

はい、ちよつと待て。

「ヒーナ、誤魔化してもダメだぞ、さっき、んを言ってしまった時点でお前の負けだ」

『だって、おねーちゃんとするときはいつもこーゆーふうなてをつかってくるよ?』

俺はヒータの方を見た。

「ヒータ、お前は何を教えている」

当の本人はそつぽを向いて口笛を鳴らしていた。

「せ……せやけどな、やっぱ妹相手でも負けたくはあらへんからな」

はあ………どんだけ負けず嫌いなんだよお前は……。

そんな事を思うと、自然にため息が出してしまった。

……ん、だが待てよ。

「そう言えば、何でコイツの妹が精霊になっているんだ?確かウィンのウィンダールとカームは……」

そう考えた時、急にヒータがどこから取り出したハリセンで俺の頭を思いつ切り叩いた。

「余計なこと考えんな」

「テメツ、急にハリセンで叩く事無いだろ!？」

「やったら杖で殴ってやろうか?とにかく、妹の事についてこれ以上考えはんな。ええか?」

ヒータの眼差しが鬼のように怖かった。

これは………何かある。

「………分かった」

だが今はまだ動けない。コイツの眼差しは本物だ、ヘタには動けない。動けばその瞬間、俺はアイツを傷つける事になる。だからこそ、こう言った時は動かない方がいい。

「ホンマに分かったんかいな？ちよつと怪しい気もするんやが、まあ信じといてやろう」

今はまだ動けない……。

だがコイツが油断したその時が……。

『……おねーちゃん』

その隣でヒーナが何か悲しい表情をしていたが……俺はその理由をその時は聞く事が出来なかった。

俺は外に出て、時計台に来ていた。

ウインは「来ない」と言ったので付いてきてはいないが、変わりにウインダールが付いてきていた。

「……なあウインダール、お前はどう思う？」

『どうと……言つと？』

「ヒータの事だ」

ヒータは何かを隠している、それは妹に関係する事としか言いようが無い。

アイツは一体何を隠しているのか……思い当たる伏は

「エリアの時は、母親が殺され父親はエリアを助けようとしてそのまま落下して、ウインは……以下略だな」

流星にウインダールの前では言えない。

「とすると、ヒーナに何かがあつたと言いようがない。それに度が過ぎる程にヒーナを心配していた。これは……」

心配性なだけか……それとも……。

「……そう言えば昔父が言ってたな」

相手を知るには、デュエルが一番だと。

そう言えばヒータの近くにああやって精霊が現れたとすると、ヒータもデュエリストだ。そうなれば、方法は簡単だ。

「デュエルで言わせるのみ。だがしかし、どうやったら応じてくれるかな？」

アイツの事だ、どうせ何か疑いぶって「何か企んでへんか？その表情みれば分かるっちゅーねん」と言いそうだ。

「デュエル・・・ええで、ほんならウチが相手してはるで!!」
以外とアツサリ行ってしまう物だ。

しかも今の表情のヒータは、もの凄く活き活きしていた。

「ヒータ、だったら表に出な。そこでデュエルをするぞ」

そう言うと、ヒータは「ウチも手加減せえへんで、全力でぶつかつたる」と胸を張っていた。

・・・何だろうな、デュエリストは皆、決闘になると性格が変わるのか？

改めてそう思った瞬間であった。

マンション表

マンションの表は公園になっており、デュエルする分にも申し分ない場所になっていた。

「準備は良いか、俺は十分だ」

「別にええで、始めるで!!」

俺の扇子型デュエルディスクとヒータの紅色のデュエルデスクが展開した。

「デュエル」
Yuga VS Hiita
LP4000

「まずは俺のターンだ、俺は手札を2枚墓地へ送り、セブン・スター・マジシャンを攻撃表示で召喚へセブン・スター・マジシャン・魔法使い族・ATK2200・光・7・効果」そして更に墓地に存在するレベル・スター・ビーの効果を発動、自分フィールドのスター・マジシャンと名の付くモンスターレベルを1つ下げることにより、墓地に存在するこのモンスターを特殊召喚できる。チューナー・モンスター、レベル・スター・ビーを特殊召喚へレベル・スター・ビー・昆虫族・ATK500・光・1・チューナーへセブン・スター・マジシャン・7・6レベル6となったセブン・スター・マジシャンとレベル1のレベル・スター・ビーをチューニング6+1=7 戦火の轟音が響く時、黄金の竜は舞い降りる、光り輝く星にひれ伏せよ」

セブン・スター・マジシャンとレベル・スター・ビーが透明となり、その中から黄金の竜が舞い降りた。

「シンクロ召喚、現れよ、ゴールド・スター・ドラゴンへゴールド・スター・ドラゴン・ドラゴン族・ATK2000・光・7・シンクロ、効果」

「初っぱなから強力なモンスターを出すとは、流石は遊画っちゅう訳やな」

「まあな、俺はカードを2枚伏せてターンエンドだ」
ヒータのターンか、まあ大体の予測はつく。

「ウチのターンや、ドロー。ウチは炎熱刀プロミネンスを攻撃表示で召喚やへ炎熱刀プロミネンス・戦士族・ATK1800・炎・4・効果」

このままバトルとやられても俺が困るだけだ、ここは1つ。

「罨カード、スター・ロックを発動。自分の場にスター・マジシャンと名の付くモンスターをシンクロ素材としたモンスターが存在する時、お互いに3ターンの間攻撃できないへスター・ロック・罨・効果、自分フィールド上に「スター・マジシャン」と名の付くモンスターをシンクロ素材とする魔法使い族シンクロモンスター、また

はドラゴン族シンクロモンスターが表側表示で存在する時に発動する事ができる。お互いに発動ターンから数えて3ターンの間攻撃する事ができない」これにより、お互いに3ターンの間は攻撃できない！」

空から星が降ってきた。そして俺達のモンスターは目の前が壁となり、動けなくなった。

「っ……ウチはカードを2枚伏せてターンエンドや」

これではらくはゴールド・スターは破壊されない。

「俺のターン、俺はターンエンド」

「ウチのターン……」

これはホンママズイで、永続罫ならどうにか出来るっちゅうのに、普通の罫カードじゃ何も太刀打ちできへんで。

「ターンエンド」

残り2ターン……。

これは何も出来なかったと言うパターンか。

「俺のターン、俺はターンエンド」

何も出来ない……次のターンで残り1ターン。

「ウチのターン……これは」

ウチが引いたカードは、妹がモンスターのカード、ラヴァル炎樹海の妖女。ウチの手札の罫カード、ラヴァル回収部隊の効果を言えば、あの罫カードの効果を消す事ができる。やが、その為には自分の場にラヴァルのチューナーが存在しなければならへん。おまけにこのターンは特殊召喚もできへん。しかもそんな事をやれば次のターン、ヒーナは戦闘破壊されるに違いあらへんで。そんな事、やって……

「どうした、お前のターンだ」

イヤに遊画の声が卑しく聞こえた。

「……」

「ウ……ウチは……ターン……エンドや」

「……そうやって諦めて良いのか？」

!!な・・・何を言うトンねん。

「お前は可能性を捨てているんだと言っている。何かあるんだろ、さっきの戸惑いの間、恐らくお前の手札にはヒーナが存在するハズだ」

な・・・ん・・・で・・・。

「何でバレとんねん」

「顔を見れば分かる。お前は全力で来るんだろ、だったら・・・俺に全てをぶつけて見る!!」

う・・・ウチは・・・。

「手札から、ラヴアル炎樹海の妖女を準備表示で召喚やハラヴアル炎樹海の妖女・炎族・DEF200・炎・2・チューナー」さら
に手札から畏発動や、ラヴアル回収部隊。自分の場にラヴアルと名の付くチューナーモンスターが存在する場合、相手効果の畏カードの効果全て無効にするで!!ハラヴアル回収部隊・畏・効果、自分フィールド上に「ラヴアル」と名の付くチューナーモンスターが存在する場合にのみ手札から発動する事ができる。相手が発動した、または発動している魔法、畏カードの効果はこのターンのエンドフェイズまで全て無効にする。この効果を使用した場合、無効化されたカードはエンドフェイズに破壊され、自分はこのターンのエンドフェイズまでモンスターを特殊召喚できない」これにより、スター・ロツクの効果を無効化するで!!」

スター・ロツクにより出来た星の壁が破壊された。

「バトル、炎熱刀プロミネンスで・・・ゴールド・スター・ドラゴンを攻撃、爆熱剣!!」

そして炎熱刀プロミネンスの刀がゴールド・スター・ドラゴンに刺さった。

「ゴールド・スターは効果により攻撃力が半分となるハゴールド・スター・ドラゴン・ATK2000 1000」

それにより、ゴールド・スターの攻撃力が下がり、プロミネンスの方が上になったため、攻撃に耐えきれず、碎け散った。

「つ……………」LP4000 3200」

「……………ターンエンドや」

やはり、ヒーナを想っている。

「俺のターン、俺はミリット・スター・マジシャンを攻撃表示で召喚☆ミリット・スター・マジシャン・魔法使い族・ATK1200・光・3・効果☆さらに手札に存在するバルド・スター・マジシャンは自分フィールドにスター・マジシャンと名の付くモンスターが存在する時、手札から特殊召喚できる☆バルド・スター・マジシャン・魔法使い族・ATK900・光・2・チューナー☆レベル3のミリット・スター・マジシャンにレベル2のバルド・スター・マジシャンをチューニング 3+ 2= 5 光り輝け、真空の空に駆け上がりし天使よ、希望を抱きその姿を見せつける!!シンク口召喚、降り注げ光よ、エンジェル・スター・マジシャン☆エンジェル・スター・マジシャン・魔法使い族・ATK2300・光・5・シンク口、効果☆」

俺の場に羽の生えた魔術師が現れた。

このモンスターは、俺が過去にエースカードとして使っていたカードだ!!

「エンジェル・スター・マジシャンで、ラヴアルの炎樹海の妖女を攻撃、スター・ショット」

エンジェル・スター・マジシャンが背中から矢を取り出し、それをヒーナに向けて放った。

「や……………やめんかポケエエエエエエエエエエ!! 畏発動、絶体絶命。その攻撃をウチへの直接攻撃に変更や☆絶体絶命・畏・効果、相手ターンにのみ発動する事ができる。このターン相手モンスターによる攻撃は、全てプレイヤーへの直接攻撃になる☆」

「んな……………」

放たれた矢は、斜線を大きくずらし、ヒーナに刺さった。

「うつ……………」LP4000 1700」

「ヒーナ……………一体何を隠している?お前がヒーナとの間に何か

あつたのは見れば分かる」

「うるさいボケ、ウチにそんな事聞くな!!」

するとその様子を見たヒーナは、ヒータの方を見て、呟いた。

『おねーちゃん、なんでいわないの？ひーなもいったほうがいいとおもうよ？だつて……ゆうがおにーちゃんは……』

するとヒータは笑顔で、こう答えた。

「知っているで。でもなヒーナ、ウチはこの事を思い出したくないだけで。大丈夫やて、ウチが……ヒーナを守ってみせるから」

その言葉を聞いた瞬間であつた。

俺の瞳に何か違和感が発生した、そしてその目には、以前エリアの時に体験した現象が再び起きた。

そう、ヒータの過去映像が右目に映し出された。

見えた映像は、隣にヒーナがいる映像だつた。

場所は山道、急ではあるがいろいろな人がその道を歩いていた。

『おねーちゃん、いまからどこいくの？』

『うーん、どこ行こうか？』

その時のヒータは、まだ関西弁では無かつたらしい、何か無駄に違和感がするが。

俺はそう思っていた。するとその時、周りが急に騒がしくなった。

『何が起きた……んなー!!』

すると、ヒータとヒーナのいる場所目掛けて岩が落ちてきた。

『あ……あ……あ……』

その時ヒータは啞然としていたに違いない。

急に自分の場所目掛けて岩が落ちてくる、そんな事誰も予想はしていなかったハズだ。

『危ない、お嬢ちゃん!!』

男の人が叫んだが、もはや手遅れだ。

このまま2人まとめて岩に押しつぶされるしか無かった……そう思った時だった。

『おねーちゃん!!』

ヒーナは小さい体をヒータにぶつけ、ヒータはよろけて尻餅を打った。

そして、悲劇は起きた。

ヒータは何が起こったかも理解できなかっただろう。

ただ……目の前の光景は、小さい手、そして赤く染まった地面……この光景を見た本人は、絶望を覚えただろうな……。

これが……コイツの心の闇……ヒーナを守れなかった悔い……それが……

ヒータは目の前の光景を目の当たりにすると、体が震えだした。

『ヒーナ……わ……私を庇って……う……う……
うああああああああああああああ』

そんな悲鳴が俺の中で響いた。

気づいた瞬間、俺の右目は今までの風景を映し出した。

ヒータは俺に何か起きたと気づいたのか「どうしたんや？」と聞いた。

「ヒータ……そうか、それが……お前が苦しんでいた事なんだな」

ヒータは何を言われているのかが分からなかったような顔をした。

そりゃそうだろ、俺はその言葉の続きをハッキリと……告げた。

「ヒーナを守れなかった……落石で自分が守られた……そして……妹を……守れなかった」

瞬間、ヒータの顔が崩れた。

瞳孔は開き、目周りはしわができ、口は開きっぱなしの状態となっていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・!!」

恐らくは口に出せないのである、それは見ていて分かる事だ。

「ヒータ、辛かっただろう。自分の前で大切な人が死ぬ光景を見た時には、お前は生きる希望を失っただろうな」

人の死はそれだけ重いのだ、例えどんなヤツの死であっても……
・命は重い。

それが身内の人の死なら、なおさら重い。

「・・・・・・・・つ、これ以上言うな!!」
突然ヒータが叫んだ。

「お前に何が分かる。あの時ウチが妹を押ししていたら、ウチが動ける状況であつたら……もしかしたらヒーナだけでも守れたかも知れないあの時、ウチは後悔したで。もう、生きる希望は無くなつた……そんな時の苦しみが公栄遊画、お前に分かるか!!」
ヒータの目は、親の敵を見るような目で俺を見つめていた。

「…………正直言つて、俺は今コイツが怖い。

その目は、言われてはいけない事を言ってしまったが為に、殺意が混じっている目でもあつた。

だが…………ここで引き返す訳にはいかない。

そうさ、俺は…………少しでもコイツの心を軽くさえてやる。

「分かるさ、俺には…………大切な人を失う気持ちか!!」

「!?!」

ヒータは少し動揺している、言うチャンスは今しか無い。

「俺だつて、海佐が目の前で殺された時、ある種の恐怖を感じた。

だが今思えばその恐怖は大切な人を守れなかったと言う絶望だったのかもしれない。だからこそ俺は自分を呪つた、もう2度と、海佐には会えないだろうな。だがヒータ、お前の隣には、つねにヒーナがいるじゃねーか!」

ヒータは、目の前のヒーナをハッと見た。

「…………ウチは…………」

「お前だつて再会した時は嬉しかっただろう。死んだ妹がすぐ側に

いると言う安心感……だが肉体は無く魂だけの存在と言う悲しみ……お前は一体どっちが大きかった」

「……ウチは」

ヒーナがヒータに歩み寄ってきた。

『おねーちゃん、おねーちゃんはなににもかんがえなくていいんだよ。わたしはしあわせだった。おねーちゃんをまもれたから……そしてまたさいかいしたから。わたしは、じぶんがおねーちゃんをまもったことにはくいをのこしてない。だから……あんしんして、おねーちゃん』

「ヒーナ、ゴメンな。ウチは自分ばかりを責めていた。あの時ウチがああしていれば、こうしてればと思うあまり、アンタを過度に想っていた。そしてあの時の自分から逃避していたんや。でもウチはもう逃げない、あの時の事を心に刻み、今度はヒーナを守りながらウチも守られる。それが……」

「『姉妹の絆パワーや』」

「行くで遊画、これが……ウチの全力や」

「来いヒータ、俺はお前の全力を全力で受け止めてやる。俺はターンエンドだ！」

「ウチの……ターン!!」

ヒータは手元のカードを見ると、ニイと笑った。

「ウチは魔法カード、ラヴアルの仮面封じを発動や。自分フィールド上に炎族モンスターが2体以上存在する時、相手はこのターンのエンドフェイズまで魔法、罠、効果モンスターを発動する事ができない。ラヴアルの仮面封じ・速攻魔法・効果、自分フィールド上に炎族モンスターが2体以上存在し、その中に「ラヴアル」と名の付くモンスターが存在する場合にのみ発動する事ができる。相手はこのターンのエンドフェイズまで魔法、罠、効果モンスターの効果を発動する事ができない。それにより、アンタはこのターンは封じられたも同然や」

やってくれるな……このままイヤな方向にしか向かない

ような気がする。

「更によ、レベル4の加熱刀プロミネンスにレベル2のラヴァル炎樹海の妖女をチューニング 4 + 2 = 6」

「戦士の叫びが木霊する、大いなる魂よ、可能性を秘めたれ！！シンクロ召喚、燃やし尽くせや、ラヴァル・グレイター！！」
「ラヴァル・グレイター・戦士族・ATK2400・炎・6・シンクロ、効果」

ヒータの場に、体が半分岩で出来たようなモンスターが現れた。

「ウチはシンクロ召喚時に手札のラヴァル・ブレードを墓地に送るで。バトルや、ラヴァル・グレイターでエンジェル・スター・マジシャンを攻撃や！！ファイアー・ブレイカー」

グレイターの手から炎が吹き出し、そのままの状態でエンジェル・スター・マジシャンを殴り、焼き尽くした。

「っ……」
「LP3200 3100」
「ターンエンドや」

エンジェル・スター・マジシャンが破壊された。

だが、これでいいんだ。

「俺のターン……悪いがヒータ、俺もデュエリストだ、お前を倒さなければならぬ。だから……勝たせてもらう！」
するとヒータは、思いもよらない笑顔で、こう答えた。

「おもしろいな、やったらその自信を……ウチにぶつけてみ！」
「上等だ、俺は場にカードを1枚伏せ、さらに罠カードオープン。」

「くず鉄のシヨベルカー、自分フィールド上の裏側守備表示のモンスター1体を表側守備表示へと変更させる」
「くず鉄のシヤベルカー・罠・効果、このカードは自分のターンのみ発動する事ができる。自分フィールド上に存在する裏側守備表示モンスター1体を選択して発動する。そのモンスターを表側守備表示にする。発動後、このカードは墓地へは送らず、そのままセットする」
「それにより、俺はセットしたモンスター、火霊使いヒータをリバース」
「火霊使いヒータ」

魔法使い族・ATK500・炎・3・効果〽それにより、お前の場のラヴアル・グレイターのコントロールを奪う!!エレメンタル・チェンジ」

それにより、ヒータの場のグレイターは俺の場に移された。

「んなアホな……」

「行くぜ、この2体を墓地へ送り、デツキに存在する憑依装着ヒータを特殊召喚する。来い、お前のもう1つの姿!!」
「憑依装着ヒータ・魔法使い族・ATK1850・炎・4・効果〽」

「しまったで、これじゃあ伏せていた紅蓮の炎壁が使えない!？」

そうか、どうせ攻撃してもコイツの効果で守備表示モンスター攻撃しても貫通ダメージを与えるもんな。

「ヒータ、これが俺の全力だ!!バトル、憑依装着ヒータで、ヒータを攻撃!!ファイアー・マジック」

そして、ヒータにその攻撃が通った。

「……アンタの全力、見させてもらったで」
HP1700

デュエル後、ヒータは何か寂しげな表情を見せた。

「……ウチはもう迷わない、何があっても遊画、今度はアンタを守ってみせる。マスターであるアンタを、ウチは守る」

困ったな、俺は守られる側には立ちたく無いのだが……。

「……いや、お前はお前を守ればいい」

「どういう事やねん」

どこからか取り出したハリセンで思いつ切り叩かれた。

「って……何しやがる!」

「それはこっちのセリフや、自分を守れって、ただのナルシストや無いか」

「それはだな、お前は自分を大事にしると言う意味でな」

「何をどう言われたってな、ウチはアンタを守ってやるからな、覚悟しときいや」

「何で守られる側なのに覚悟する必要があるんだあああああああ

あ！！」
そんな口論が、30分程度続いた。
続く

おまけ

「……トリックオアトリート」

「……は？」

「……お菓子くれなきゃいたずらするぞ」

「そう言えば今日はハロウィンだったな。そうだ、ここに丁度お菓子がああるから、ほら持って行けよ」

「……トリックオアトリック」

「……は？」

「……いたずらするぞ」

「待て、何で一択しか無いんだ。それもよりによってイタズラなんだ！？」

「……いたずらするぞ、別の意味で」

「どんな意味！？どんな意味でイタズラするんだ。ってオイウィン、何だその目は……何をやる気だ、オイ待て……」

「……ふふふ、いたずら……するぞ」

「いーやああああああああああああああああああああ」

おわり

次回予告

「死神のカード、それは魂を引き替えに莫大な力と願いを叶える禁

断のカード。そんな恐ろしい物、お前らには渡さない。」

「フン、だったら我を倒してから道を進むんだな」

『お……お前は……』

「ウイन्दール……だと」

次回、遊戯 王Fate 第15話「封印とかれし時」

「キサマが……ウインを」

次回のキーカード

ダークガスタ・ベルゼブブ・昆虫族・ATK2600・風・

- 4 -

ダークシンクロ、効果

第14話「心の支え」(後書き)

あとがき

こんにちは、いや、こんばんは。

最近 pixiv の評価が 0 になっていて悲しい気持ちになっております。

何がダメなんだ・・・話しに何が足りないんだ。

おまけに知りたいと思ってやったアンケートも誰もやってくれない
と言っね、お父さん悲しいよ(誰がお父さんや)

さて、冗談はここまでとして、次回は死神の封印が解かれる回です。
前回とは打って変わって、ちょっとペースを上げていきたいと思
います。

と言っよりは、この話を2話続けてやるうと思ったら思っただよりも
早く出来てしまったので早めに封印の回をやっしまおうかなと言
う作者の都合です。

アウスとダルクとライナの心の闇をやるのはその後と言っ事で、エ
レナは・・・いずれかやります。

それでは次回、またお会いしましょう。

・・・眠い。

11月1日 自宅にて

第15話「封印とかれし時」(前書き)

正式には「封印とかれし時」(前編)です。

最近、妙に疲れた・・・。

何でだろうな。

第15話「封印とかれし時」

アーカイト校地下4階

俺達は準備に取りかかっていた。

死神のカードを奪うための下準備、そしてヤツの復讐の為に。ヤツの復讐はどうせ足止めにしかならない、だがそれでいい。

全てはカードを手に入れる為、ヤツは犠牲になるのだ……。

これで、俺は力を手に入れられる。全てを動かす力を……。

「オイリドウ、何をボーっとなっている。さっさとお前も動け」

……チツ、テメーにだけは言われたく無いがな。

「さて、お前でも倒せなかった公栄遊画。それをコイツは倒せるのか、楽しみだ」

そう、俺の隣でニコラは聞こえるように呟いた。

「……全ては今日決まる。殺つてやる、俺は公栄遊画などはどうでもいい。俺が戦いたい相手はウィン・ダ・アーケンライラ。そいつさえ倒せば俺は……っふ」

パーカー野郎は急に「あーっはははははははははははははははははははははは」と笑い出した。

この状況で笑えるとは、相当嬉しいんだろうな。と、心の中でそう思った。

「さて、パーティーの幕開けだ!!」

ニコラもつられてテンションが高くなった。

その時俺達は、封印の間まで向かっていた。

全ての罫を、何も無かったかのようにぐり抜けて。

第15話「封印とかれし時」

「えーっと、紀元前15年、エジプト文明はナイル川を中心に農業を行ってきた。それに伴い文明も進化をしてきて……」

先生の話聞いてるが、俺はこの部分を暗記してるので別に聞く必要が無かった。

正直ヒマだ、普通の授業はどうもつまらない。俺が勉強をすっかり出来てるせいでもあるが、どうも気力が無い。

それにより、俺はいつも半分寝ており、先生から「お前な、一応話は聞け」と怒られたりする時もある。

だが成績はトップなので、本気で怒られたりはしない。

それが原因で、クラスからは（特に女子から）勉強を教えてくださいとお願いされたりしているのが日常的な光景だ。

だがこのクラスは特別で、頭が良い人だけがこのクラスにいる。なのにどうしてか、勉強を教えてくださいと言われてたりする。

おまけにほぼ全員が精霊が見えると言う奇妙なクラスでもある。

噂では、校長が何か企みを持ってると聞かぬが・・・何をすりゃもりなんだ？

そう考えていた時、急に放送が入った。

『えーっと、公栄遊画、霊能雅、大至急職員室まで来い』

この言葉のテキストさ、さては新和だな。

「・・・何をやらかしたかは知らんが、言ってこい」

先生は何かけいべつした目で俺達を見つめた。

「先生、何を考えたのかは知りませんが、サイテーでも俺達は何もやっていませんが・・・」

すると先生は「フウ」とため息を付いた。

「公栄よ、若い内はいろいろとやらかすモンだぞ。そんな若いねーちゃんと呼び出し喰らうぐらいの事じゃまだまだ話しにならない。

もつと出す物出して・・・」

ここの教師は本当に教師か！？

「先生、それはセクハラです」

沙耶が顔を赤くして訴えた。

「いいじゃないか、俺だつて昔はな・・・」

すると、先生の武勇伝が始まったので俺とウインは急いで教室を後

にした。

教室では男子が「やるじゃねーか」とか、女子が「キヤー」と黄色い悲鳴を上げてたが、無視した。

そして職員室

「新和……テメエは一体どんな神経してるんだ。授業中に俺達を呼ぶとは……」

俺の言葉はもはや教師と生徒と言うよりは、教師と不良の会話になりそうだった。

「スマンスマン、ちょっと緊急の用事があったな」

相変わらずヘラヘラと……ちょっと1発ぶん殴ってもいいか？

「先生、スプリングラーの一軒もあるので、殴っていいですか？」

「そう熱くなるなよ、先生殴ると即退学か長期停学だぞ」

「その覚悟はできているので……殴ります」

「落ち着け、それに俺はお前と喧嘩するためにここに呼んだ訳ではない」

……考えてみればそうだ。

授業中にそんな呼び出しはする物では無いとは新和も知っているハズだ。

それじゃ一体何の用なのか……。

「ちよつとな、封印の間に侵入者だ」

封印の間、どこだそこは。

俺が頭を悩ませているのを見て、新和はハアとため息を付いた。

「この前お前が落下した所だ。その時に落ちた先に、封印の間と言う場所があるんだよ。死神の石版が封印されている場所が」

死神のカード、その言葉は何度も耳にした言葉だ。

「それは一体……」

すると隣にいたウィンもやっと口を開いた。

「……あの、禁断のカードが……どうしてここに？」

すると新和は頭を抱えた。

「俺だつて分かんねーよ、そもそもおかしいとは思ってたが、まさかアカデミアの地下に隠されているとはな、あの狸親爺め、何を企んでいる」

新和が何かを呟いているので、俺はちよつと声をかけた。

「新和、お前は知っているのか。死神のカードの事を」

すると新和はちよつと顔が拒んだ。

「……ちよつとな、こちらは訳ありだ。これ以上は聞かない方がいい」

人それぞれ何かはあるハズなので、俺はこれ以上聞くのをやめた。

「……それで、侵入者と言うのは？」

「エクス野郎共だ」

エクス、その団体を聞き、俺は速急にヤツの顔を思い浮かべた。

「リドウ……ヤツもここに」

「だろうな、今はちよつとした足止めをしているが……奴らがあの罫をくぐり抜けるのも時間の問題だ。急いで封印の間に向かうぞ、俺は残念ながら行けないが」

「どうしてだ、お前は来なければ」

「校長命令でここを動けねーんだよ。どうせ生徒の身を優先させると言う意味だろうがな」

「……それじゃ仕方がない。」

「行くぞウイン、奴らの動きが封じられている間に……」

「……了解」

そう言つて俺達は封印の間へと向かった。

ルートは新和が教えてくれたルートがあるので、そこを通過していった。

「遊画は単純な所でバカで良かった」

考えてみる、お前も生徒の1人だ、それに生徒の身を優先させるの

ならお前も含まれる。それを疑いもせずによくぞまあ行ったモンだ。
「狸親爺が・・・本当に何を企んでいる」

公栄を行かせたとなると・・・何か目的があると思うが、一体どんな目的が。

「・・・まさかな、公栄となると、やっぱりアイツを思い浮かべるが・・・だが否定は出来ない」

アイツも狸親爺に踊らされているだろうが、それはそれでいいザマだ。

「・・・自分の息子を、主に英子が何かを考えているだろうが、それと同時にコイツも裏で行動していると言う事が」

俺が認めたライバル、そして英子の旦那・・・公栄 真が・・・

「行かせて良かったのか？アイツはまだ・・・隣で誰かが喋ったような気がするが、無視した。」

「おいコラ、聞こえているのか新和」
「・・・流石にうるさいので、少し打て合う事にした。」

「何ださんさわ、俺が何も考えていないとでも」

「誰がさんさわだ！俺は三沢 大地だ、お前は昔から変わってないな。デュエルアカデミア教師の試験の時だって、お前は十代並の引きの良さで試験官に勝ったんだろ、どうしてそんなヤツがこんな性格なのかを知りたい！」

「お前な、異次元から救い出したのは誰だと思っているんだ。精霊界とこの世界を唯一行き来できる英子のおかげだろうが」

「それは感謝している。おかげでターニヤとは良い結婚生活をしているのは事実だからな・・・って、話を戻すぞ」

チツ、空気のクセに空気を代えやがって。

「今さつき失礼な事考えなかつたか？」

「別に・・・かもな」

「っ・・・お前と話していると頭が痛くなる。もういい、話を戻す。公栄はまだ1年だぞ、そんなヤツに・・・」

「お前も体験したんだろ、そんな歳で危険なデュエルをするバカを」
「だが……」

「安心しろ、遊画は十代と同じようなヤツだ。ついでに恐らく、不
動^{どう}遊星^{ゆうせい}も同じようなヤツだ。アイツは……これから成長し
なければならぬ。アイツはこれから先、大量の壁にぶち当たり、
砕け散るだろ。だからこそ俺は、見守る事しかできない。だが見守
るのも、先生の役目だ」

遊画……ここからはお前の戦いだ。

死神のカードの封印は恐らくお前が着く前に解ける可能性が高い。
だからこそ、お前は仲間を信じる気持ちを持たなければならぬ。
これから3年間、お前がどれだけのデュエリストに成長するかが……
楽しみだ。

そう思い、俺はニイッと笑った。

アーカイト地下3階

走っていた、イヤに走っていた。

「はあ……はあ……、一体どれだけ広んだよここは……」

結構走っているのにも関わらず、未だに地下3階である。

「……はあ……はあ……遊画、疲れた」

つ……ウインも限界か。

「お前はここで間ってる、俺1人だけでも……」

「……いや、私も行きたい！」

ウインの眼差しは、覚悟を決めている眼差しでもあった。

クソ……この目は苦手なんだがな……

「しっかり俺に捕まっている、ウイン」

そう言うと、ウインをお姫様抱っこで持ち上げた。

「……………!!何を大胆に……………」

何故かウインは「でも……………嬉しい」と呟いた。
体重が増えた、ますます俺がしんどい。

「だが……………諦めるか!」

そう叫び、俺は更に地下へと進んでいった。

アーカイト校、地下4階

目的地まであと2階……………。

そんな時、俺達は広い部屋に出た。

「ここは……………」

その部屋は、無駄に広々としており、それと同時に何かの通路が確認できた。

「これは……………2つに分かれている」

どちらかが目的地に進む道か……………。

「……………私は、こっちに行くから……………遊画は、そっちに行くって」

そう、ウインは言った。だが、そんなに疲れているのにお前だけ置いていけるか。

「ウイン、お前は疲れているだろ。だからこのままおぶって行くぞ」
そう言つて、俺は片方の道を進もうとした。

「……………チツ、もう少しの所だったんだがな」

そんな声が聞こえ、そして気づいた時には片方の道が無くなっていた。

「これは!?!」

道が無くなった……………幻影でも見させられていたとも言つのか……………。

すると、突如もう片方の道から黒い何かが出てきた。

そしてその黒い何かは集結し、パーカーで顔が見えない謎の男性になった。

「誰だ!！」

すると、その男はウインを見るなりフツと笑った。

「久しぶりだなウイン・ダ・アーケインライラ。どうした、そんなに睨んで」

見ると、ウインはその男をジッと睨んでいた。

「お前は……」

ウインをおぶったままだったので、ウインを降ろした。

すると、ウインの隣にコイツの兄、ウインダールが半透明で現れた。

『ウイン……アイツから迫り来るこの圧迫感、気をつける』

その瞬間、パーカー男はウインダールの姿を確認したのか、急に「つふふふふ」と不気味に笑い出した。

「久しぶりだな、ウインダール・ダ・アーケインライラ。お前を苦しめる時をどれだけ待っていた事か」

ウインダールは『な……俺を知っているだと!』と驚きを隠せなかったようだ。

「我を忘れるとはな……キサマがどれ程憎いかを見せてやる」

そう言つて、男はパーカーを脱ぎ捨てた……。

「んな……」

『バカな……お前は』

ウインダールが……そこに……。

「ウインダールだと……」

「我の名はウインダール。ウインの父親でもある……」

『違う!』

ウインダールは頭を抱えながらウインダールを見つめた。

『キサマは俺ではない、キサマは俺の体に乗っ取った邪心だ!』
邪心……これが……ウインを傷つけた父親の正体。

「だが、キサマは妻を失ったショックで心に透き間が空いていた。ウインがいなければ……妻は死なずに済んだ……そんなお前の心に乗っ取る事など容易すぎた事だ。しかし、あっけなく乗っ

取っただけではつまらなかつたからな、そのままお前の願いでもあつたウインを地獄のどん底まで突き落とすと言つ事までやってやつた。しかも、成長するに連れ美人になりやがってよ、ついつい襲つてしまつたがな」

ゲスな．．．．．コイツは．．．．．。

「だがな、出ていったウインを探している途中でコイツが意識を取り戻しやがってな．．．．．」

「んの．．．．．よくも俺の娘を．．．魔女と言いやがつたな．．．．．」

『我は本当の事を言つたまでだ。キサマも娘がいなくなるのが望みじゃ無かつたのか』

「違う！俺は．．．．．そんな事を思つた覚えはない」

『だが我には伝わつた。コイツがいなければ．．．．．妻は死なずに』
「黙れ．．．．．俺はウインに出す顔がない。もう、父親として失格だ。．．．．．カーム、俺もそつちに行くぞ」

『き．．．．．キサマ、何をするつもりだ！？』

「決まつているだろ．．．．．俺はここで自殺する。自分の魔力を全てつぎ込み、俺自身を消滅させる」

『や．．．．．やめろおおおおおおおおおお』

「つ．．．．．俺の意識を再び乗っ取るつもりか」

『やらせんぞ、我は死にたく．．．．．』

「想いをその手に．．．．．自身の体を分解し、邪心を消滅させよ。デス・バースト！」

『ぎやああああああああああ』

「おかげで俺は700年という時を闇で過ごした。この妬み、キサマに分かるか」

「……………」

「自業自得だ、本人が望んでいない事をやるから……………ウインは苦しんだぞ。昔から父親に暴行を加えられ、襲われかけ、それでもコイツは生きてきた」

「知れた事、邪心とならば人が傷つけられるザマを見るのが楽しくてな。あの時の声、あの時の怯え……………良い叫びだった」

「……………!!!」

ウインは更に邪心ウインダールを見る目が深くなった。

「おうおう、良いねその目」

「それ以上ほごくな。キサマが……………通りでウインダールはウインの話をすると……………」

悲しい顔になる訳だ、コイツも苦しんできたんだな。

「コイツの体ももう飽きてきた事だ。今度はウイン・ダ・アーケインライラの体でも頂くとするか」

そう言うと、ウインダールの体から異様な黒い影が現れた。

そしてその影が、ウインと俺に覆い被さった。

「……………!!!」

「……………!!!」

「さあ、パーティの幕開けだ。本当はウイン1人と相手するつもりだったが、あの罠に引つかからなかったと言う強運で1人にならなかった。だったらお前ら2人相手になってやろう」

これは……………2対1の変則デュエルか……………。

「ここから先、アイツ等が死神の封印を解いているからな、急がないと手遅れになるぞ」

コイツは足止めと言う事か。

「死神のカード、魂を引き替えに莫大な力と願いを叶える禁断のカード。そんな恐ろしい物、お前らには渡さない」

「フン、だったら我を倒してから道を進むんだな」

言われなくとも……………。

「キサマがウインを汚した罪、俺が裁きを下す！」

「『デュエル』」 Yuga & Wynn VS Wind
r1 LP4000、4000 VS 8000」

「まずは私のターンからだ、ドロ！。私はガスタ・イグルを守備表示で召喚へガスタ・イグル・鳥獣族・DEF500・風・1・チューナー」カードを3枚伏せてターンエンドだ」

先行はコイツなのは仕方がないが・・・。

「負ける訳にはいかない！俺のターン」

引いたカードはツイン・シンクロンだった。

「俺は手札から魔法カード、魔法使いの呪縛を発動。手札を1枚墓地へ送り、デッキからレベル6以下の魔法使い族モンスターを手札に加える。魔法使いの呪縛・魔法・効果、手札を1枚墓地へ送り発動する。デッキからレベル6以下の魔法使い族モンスター1体を選択して手札に加える。その後デッキをシャッフルする。俺は手札のリミット・スター・マジシャンを墓地へ送り、デッキからスナイプ・スター・マジシャンを手札に加える」

デュエルデスクの墓地ゾーンにカードを1枚入れ、デッキからカードが1枚選り出され、その後デッキが自動的にシャッフルされた。

「俺はツイン・シンクロンを攻撃表示で召喚へツイン・シンクロン・戦士族・ATK1600・地・4・チューナー。そしてツイン・シンクロンの効果により、墓地に眠るミリット・スター・マジシャンを特殊召喚する！」
ミリット・スター・マジシャン・魔法使い族・ATK1200・光・3・効果。レベル3のミリット・スター・マジシャンとレベル4のツイン・シンクロンをチューニング 3

+ 4 7
ミリット・スター・マジシャンが半透明になり、そして中から星が出てきて、その星が輪を作り、ミリット・スター・マジシャンを覆い尽くした。

「新たな可能性よ、この戦いに終止符を打つべく降臨せよ。シンクロ召喚、切り刻め、ツイン・ウォーリア。ツイン・ウォーリア・戦士族・ATK2300・地・7・シンクロ、効果」

光から、2本の刀を持った戦士が降りてきた。

「だが、お互いに1ターン目は攻撃できない」

「カードを2枚伏せてターンエンド」

フィールドに2枚のカードが伏せられ、そしてその姿が消えた。

「・・・私のターン。私は魔法カード、ガスタの笛を発動。デッキからガスタを1枚墓地へ送り、デッキに存在するガスタ1体を手札に加える。ガスタの笛・魔法・効果、自分のデッキからレベル4以下の「ガスタ」と名の付くモンスター1体を墓地へ送り、デッキから「ガスタ」と名の付くモンスター1体を選択して手札に加える。私はデッキに存在するガスタの巫女ウインダを墓地へ送り、デッキからガスタ・イグルを手札に加える。そしてチューナーモンスター、ガスタ・フェザを攻撃表示で召喚。ガスタ・フェザ・鳥獣族・ATK400・風・3・チューナー」

ウインのフィールドに、小型の鳥が舞い降りた。

「そしてこのモンスターが召喚に成功した時、墓地に眠る守備力1500以下のガスタを特殊召喚する事ができる。復活して、ガスタの巫女ウインダ。ガスタの巫女ウインダ・サイキック族・ATK1000・風・2・効果。レベル2のガスタの巫女ウインダにレベル3のガスタ・フェザをチューニング 2+ 3= 5 響け、邪心に捕らわれし友を救うため、舞い降りる。シンクロ召喚、羽ばたけ、ダイガスタ・ガルドス。ダイガスタ・ガルドス・サイキック族・ATK2200・風・5・シンクロ、効果」

光が消え、現れたのは、成長したガルドにウインが乗っていると云うシユールなモンスターであった。

アレか、成り行きで乗ったらシンクロしましたと言う事か。

「さらにガルドスの効果発動。墓地のガスタを2枚デッキへ戻す事により、相手フィールドのモンスター1体を破壊する。サイコ・ソニック！」

上に乗っているウインが立ち上がり、そして杖から光の衝撃波が放たれた。

「っ……戦闘で効果を発動するのを逆手にとりやがったな……」

「……っ、カードを1枚伏せてターンエンド」

そして、ここからが本番だ。

「私のターン、私は畏カード、森破壊の刑罰を発動。私の墓地にガスタモンスターが存在する場合、そのモンスターを特殊召喚し、相手フィールドのモンスター1体を破壊する。環境破壊の刑罰・畏・効果、自分の墓地にレベル3以下の「ガスタ」と名の付くモンスターが1体のみ存在する場合にのみ発動する事ができる。そのモンスターを選択して特殊召喚する。その後、相手フィールド上に存在するモンスター1体を破壊する。それにより、現れよ、ガスタ・イグル。ガスタ・イグル。鳥獣族・ATK200・風・1・チューナー。そして、ダイガスタ・ガルドスを破壊する！」

光の矢がウインの場のガルドスを貫いた。

「……！！！」

「そして、私のフィールド上にチューナーモンスターが存在する場合、そのモンスターをリリースし、手札からダークチューナー、ダークバイス・バードを特殊召喚する。D Tダークバイス・バード・鳥獣族・ATK0・闇・6・ダークチューナー」

「ダークチューナーだと!!!」

チューナーなら聞いた事があるが、ダークチューナーとは一体何だ？

「キサマらには私の与える絶望に怯えてもらおう。ダークバイス・バードのモンスター効果発動。このモンスターが特殊召喚された時、自分のデッキからレベル2以下のモンスター1体を特殊召喚できる。現れよ、ガスタの巫女ウインダ。ガスタの巫女ウインダ・ATK1000」

ウインを出した………の野郎。

「何をするつもりだ、ウインを出すなどして………」

「闇を見せる、ただそれだけだ！」

闇を………見せる？

「我はレベル2のガスタの巫女ウインダにレベル6のダークチューナー、ダークバイス・バードをダークチューニング 2 - 6」

- 4 -

「ダークチューニング!?」

俺とウインの声が重なった。

すると、ダークバイス・バードが上に舞い上がると、そのまま透明となり、中から星が現れた。

そして、その星がウインダの体の中にのめり込んだ。

『はあ……はあ……はあ……はあ……』

苦しそうにするウインダ、そしてそれを見たウインは……。

「……苦しい、感じる。あの私が、苦しんでいるのが……」
自分も苦しそうにしていた。

「ダークチューナー、ダークバイス・バードのレベルは6、そしてガスタの巫女ウインダのレベルは2、その差を引いた数のモンスターが、闇のシンクロモンスター、ダークシンクロモンスターだ!」
ダーク……シンクロ。

「そんなデタラメなモンスターがいるのかよ。ヤツのレベルは6、

そしてウインダのレベルは2、と言う事は……レベル-4」

「闇の鍵が冥府を開ける、漆黒より現れし蠅よ、悪魔の王を見せつけてやれ!」

ウインダの中の星が全て砕かれ、その体が砕け、中から黒い星が現れた。

そしてその星が集まり、黒い電磁波が発生し、黒い穴を作り出した。

「ダークシンクロ、悪魔の王者、ダークガスタ・ベルゼブブ!」

その黒い穴から、巨大な蠅が現れた。

その大きさは半端なく、そして胸元にはガスタのマークが半分壊れた状態の円盤があった。

「これが……ダークシンクロ」

「そうだ、我は邪心、そしてこれが冥府を操る者の印、ダークシンクロモンスターだ。そしてコイツが我の僕、ダークガスタ・ベルゼ

ブブ・ダークガスタ・ベルゼブブ・昆虫族・ATK2600・風・

・4・ダークシンクロ、効果でダークガスタ・ベルゼブブで、ウイン・ダ・アーケンライラを攻撃。ダーク・ブラスト」

ダークガスタ・ベルゼブブの目からレーザーが放たれ、それがウインに直撃した。

「っ………」HP4000 1400

クツ、相手の攻撃を許してしまったか。

「何なの………体が痛い」

体が痛いだと!?

「そつだ、これは闇のデュエル。敗北者には死の苦痛が待ち受けている」

死の………苦痛。

「まあ、ウインが倒されたその瞬間、その体は我の物となる」

んな………んの野郎!

「どうした公栄遊画、お前もそんな目をして。見ていてゾクゾクするじゃないか」

コイツ………コイツ………。

「我はターンエンドだ」

「俺のターン、バトルだ。ツイン・ウォーリアで、ダークガスタ・ベルゼブブを攻撃。ツイン・ソード!!」

ツイン・ウォーリアが2本の剣を構え、相手を斬りかかった。

「そしてこのモンスターが相手を攻撃する時、攻撃力は600ポイントアップする。攻撃力は2900となる」ツイン・ウォーリア・

ATK2300 2900

「させるか、畏発動。魔球の爆発、相手が攻撃した時、そのモンスターの攻撃力を半分にする」魔球の爆発・畏・効果、相手が攻撃を行った時に発動する事ができる。そのモンスターの攻撃力を半分にする」攻撃力は半分の1450となる」

「んな………」ツイン・ウォーリア・ATK2900 14

50

そして、ツイン・ウォーリアは攻撃を行ったが、あえなくはじき飛ばされた。

「返り打て、ダーク・ブラスト！」

そして、ツイン・ウォーリアにレーザーが放たれた。

「だが……手札から速攻魔法発動、ハーフ・シャフト。攻撃力を半分にする代わりに戦闘では破壊されないハーフ・シャフト。速攻魔法・効果、フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。選択したモンスターは戦闘では破壊されず、攻撃力はこのターンのエンドフェイズまで半分になる」ハツイン・ウォーリア・ATK1450 725」

そして俺は、もう1つ罠カードを発動した。

「そして罠カード、ダメージ・インプットを発動。このターン自分が受ける戦闘ダメージは0となり、デッキから受けるダメージ以下のモンスター1体を手札に加える」ダメージ・インプット・罠・効果、自分が戦闘ダメージを受ける時、手札を1枚墓地へ送り発動する。このターン自分が受ける戦闘ダメージは0となり、デッキからダメージ以下の攻撃力を持つモンスター1体を手札に加える」それにより、俺はこのダメージは喰らわず、デッキから1875以下のモンスター1体を手札に加える。俺はクリボーナイトを手札へ」

「チツ、小癩なマネを」

「キサマだけは絶対に許さねえ、ウインを男嫌いにして、ウインダールを傷つけた。そんなお前を、俺は許さねえ」

「フン、女の為に戦うつてか。くだらん、だったらキサマから先に殺ってやるよ」

「そう簡単にはくたばらねえよ、俺は！俺は手札からチューナーモンスター、クリボーナイトを守備表示で召喚」クリボーナイト・悪魔族・DEF200・闇・1・チューナーレベル7のツイン・ウォーリアにレベル1のクリボーナイトをチューニング 7+

クリボーナイトが半透明となり、輪が作り出され、ツイン・ウォーリアを囲んだ。

「迷えし星の運命が、無限の道を作り出す歯車となる、終わり無き運命を作り出せ！シンクロ召喚、無限の可能性、エンドレス・ドラゴンへエンドレス・ドラゴン・ドラゴン族・ATK2500・地・

8・シンクロ、効果ㇿ」

そして、エンドレス・ドラゴンが飛来した。

「ターンエンドだ」

次はウインのターンだ。

「……私のターン、私は手札からガスタ・ナチュラルを墓地へ送り、チューナーモンスター、ガスタ・バードを通常召喚、このモンスターは自分の手札からガスタと名の付くモンスター1体を墓地へ送る事により、通常召喚できるㇿガスタ・バード・鳥獣族・ATK800・風・5・チューナーㇿそしてこの効果で通常召喚に成功した時、手札のレベル4以下のガスタ1体を特殊召喚できる。ガスタの静寂カームを特殊召喚ㇿガスタの静寂カーム・サイキック族・ATK1700・風・4・効果ㇿ」

『ごめんねウイン、私は知っていたんだけど……』

「……知っている、私を傷つけれなかった……そんな理由でしょう」

『……』

「でもお姉ちゃん、私はお兄ちゃん……いや、お父さんやお姉ちゃんを恨んでいない」

『ウイン!!』

急にウインダールが精霊状態で出てきた。

「……私は目の前の真実を見た、そしてお父さんは苦しんでいたと知った。それで恨む理由なんて無いでしょう?」

ウイン……お前。

「だから、アイツを私は倒したい。私を汚したとかそんな事じゃ無くて、お父さんを傷つけたアイツを……私は!」

そしてウインは、真剣な眼差しになった。

「だからお姉ちゃん、力を貸して。そしてお父さん、私はお父さんを信じている。お父さんが・・・来てくれる事を！」

『！！・・・ウイン』

これが、家族の絆なんだろうな。俺が知らない絆・・・家族の絆。

「フン、戯れ言はもう済んだか。我は家族愛なんて嫌いなんだよ、さつきからイライラしかしねーんだよ」

すると、ウインはキツと邪心を見ると、その口が開いた。

「私は貴方を許さない。お父さんを苦しめた裁き、この私が下してやる！」

その言葉は最初に俺が言った言葉だと思うが・・・と思ったが、ウインはそれ程真面目だったと言うのが分かった。

俺はそれを今は見守るしか無いのか。

だが、お前の横には俺がいる。

俺は・・・お前が負けそうになれば、俺が身代わりになるぐらいの覚悟はできている。

だから・・・アイツに全力をぶつけてやれ！

続く

次回予告

「我を倒すだと、小娘の分際で生意気なんだよ」

「黙れ、私は自分を信じてくれる人のために戦う。そして・・・」

「もうほざくな、これでトドメだ」

「・・・誰が」

「……………ん？」

「誰がこのターンを終了と言った！！」

次回、遊戯 王 Fate 第16話「狂乱する魂」

「っふ……………そうか、キサマもその中には！！」

次回のキーカード

ガスタの賢者ウィンドール・サイキック族・ATK2000・風・

6・効果

第15話「封印とかれし時」(後書き)

あとがき

さて、この先どうしようかな……。

目指すは100話越え何ですが、話を進める事にネタが尽きてきそうです。

さてと、ネタ帳でも作るか。

そう言えばこの前、友達から……。

「これ、もう5D、sの後番組になれよ」と言われました。

面白そうですね、おもしろ半分に企画書を持っていくか……。

冗談ですが……。

さて次回、遊画が暴走します。エ ア並に暴走します。

ほとんどの人にネタが伝わったと言う事で、これで失礼させてもらいます。

次回も、デュエツ!

11月6日 自宅にて

遊 戯 王 F a t e ラジオ小説その4 (前書き)

さてと、今回も始まったラジオ風小説。
いつものように、主人公が可哀想です。

遊 戯 王 F a t e ラジオ小説その4

遊画「今回も始まった、ラジオ小説」

ウィン「・・・もう慣れた？」

遊画「アホか！ここまで連れてこられる経緯があまりにも酷いぞ。今回も、警戒はしていた・・・だがな」

エリア「だがな？」

流れ・・・遊画「ただいまー」 遊画「・・・（啞然）」 再び

ダイ・グレファー似のマッチョな男登場（今度はバスタブ姿で）

グレファー似の男（バスタブを脱ぎながら）「やらないか？」 遊画「なんでだああああああああ」 で、気づいたらここに・・・。

遊画「もう、家に帰るのがイヤになってきた」

ウィン「・・・大丈夫、いざとなれば私が側にいるから」

エリア「ウィン・・・それはどう言う意味ですか？」

ウィン「・・・もしも遊画がそっちに走った場合、遊画の手足を拘束して、口には・・・」

遊画「それはもうSMプレイだ！何をしようとしている、ウィン！？」

ウィン「・・・ダメ？」

遊画「ダメだ。そもそも俺にそんな趣味は無い」

ウィン「・・・残念」

遊画「お前本気でしようとしたな。って待て、その後ろに隠している物は何だ」

ウィン「・・・鞭」

遊画「何でそんな物を・・・とりあえずそれをよこせ」

ウィン「・・・いや、渡したら遊画が叩くから」

エリア「遊画、そんなに人を叩きたいのですの？」

遊画「何でそんな解釈しか出来ねえんだ。あ、待てエリア、何をそ

んなに黒い顔に……ウイン、頼むからエリアに鞭を渡すのはやめる。コイツ実際にはDSだぞ」
ウイン「……遊画がいたぶられるのを見ると、何だか胸がキュンとなりそう」

遊画「コイツもDSか、何でお前も何だ!」

エリア「さあ、覚悟は出来ているのです?」

バチン

遊画「痛い」

エリア「おりゃ」

バチン、バチン

遊画「ぎゃああああああー」

しばらくお待ち下さい……。

エリア「ふう、スッキリしたのです」

ウイン「はい、タオル」

エリア「サンキュウ」

遊画「お……ま……え……ら……、いつか覚えてる」

ウイン「……そう言えばもうすでに本番始まっている」

遊画「とんだ放送事故だな、最初からSMプレイの音声なんて、誰も聞か!」

ウイン「あ、視聴率が上がっている」

エリア「まあ、男性陣はDSな声を聞いて、女性陣はDMな声を聞いて盛り上がったのです」

遊画「最悪だ、コイツら次回も何かしらやらかす気だ」

ウイン「さて、本日も始まりました、遊戯王M&Dラジオ小説」

エリア「今回も3人でお送りします」

遊画「急に始めた!」

(BGM開始)

ウイン「さて、最初は恒例のシンクロ召喚セリフのコーナーから」
遊画「今回は結構あつたからな、俺のセリフもあるぜ」
ウイン「それじゃ、行きます」

「……分かつたぜ、ウイン。お前が俺を認めたのなら、俺はそれに答えるまでだ。墓地に眠る風の翼ウインの効果発動。憑依装着ウインが特殊召喚に成功した時、デッキ、手札、または墓地から1度だけ、このモンスターを特殊召喚できる。チューナーモンスター、風の翼ウインを特殊召喚へ風の翼ウイン・魔法使い族・ATK100・風・4・チューナー」

「レベル4のチューナーだと!!」

「これが……俺達の絆だ。レベル4の憑依装着ウインとレベル4の風の翼ウインをチューニング 4 + 4 = 8」

羽の生えたウインが透明となり、その中から輪が発生し、憑依装着ウインを囲んだ。

「吹き荒れる、風と風が連鎖するその時に、風霊神の名の元にその姿を幻想せよ」

そして、直列となった星が一気に光りだした。

「シンクロ召喚、風の想いを告げる。風霊神ウインへ風霊神ウイン・魔法使い族・ATK2500・風・8・シンクロ・効果」

ウイン「やっと出てきた、私のシンクロ」

遊画「風霊神ウイン、攻撃力アップの能力と風属性の効果全て無効にする脅威の効果を持つシンクロモンスター、以外と使えそうだが……。スターダスト相手ではどうも分が悪そうだ」

エリア「一応効果は発動できるのですからね、墓地へ送られた瞬間、効果の対象外になるのですから」

ウイン「……でも、戦闘は強い」

遊画「確かに、相手のフィールドと墓地に存在する風属性モンスターの数×200ポイントアップだからな、普通にスターダストは戦

闘破壊できる」

エリア「でもですね、相手が風主体ではなく、効果破壊が主体だった場合は苦しい事になるでしょうね」

遊画「風だからな・・・スターダスト・ドラゴンにデブリ・ドラゴン、ターボ・ウオーリアにフルール・ド・シュヴァリエ、それに・・・風帝ライザーぐらいかな。コイツ等なら何とか戦闘で破壊できる分類だ」

ウィン「・・・他にも、ガスタ」

遊画「ガスタはまだガチじゃねーだろ。ガチになれば話は別だが」

ウィン「・・・それじゃあ、コナミに行ってくる」

遊画「やめろ、それに今度のDTでガスタも強化されるじゃねーか、それまで我慢しろ」

ウィン「・・・分かった」

エリア「それじゃあ、次行くのですの」

「俺のターン、俺はミリット・スター・マジシャンを攻撃表示で召喚ハミリット・スター・マジシャン・魔法使い族・ATK1200・光・3・効果ヾさらに手札に存在するバルド・スター・マジシャンは自分フィールドにスター・マジシャンと名の付くモンスターが存在する時、手札から特殊召喚できるハバルド・スター・マジシャン・魔法使い族・ATK900・光・2・チューナーヾレベル3のミリット・スター・マジシャンにレベル2のバルド・スター・マジシャンをチューニング 3 + 2 = 5 光り輝け、真空の空に駆け上がりし天使よ、希望を抱きその姿を見せつける!!シンク口召喚、降り注げ光よ、エンジェル・スター・マジシャンハエンジェル・スター・マジシャン・魔法使い族・ATK2300・光・5・シンク口、効果ヾ」

ウィン「エンジェル・スター・マジシャン・・・」

エリア「何だかどこかの作品を思い浮かべるですね」

遊画「言っておくがな、別にAngel eats狙って使った訳じゃねーぞ。ってか、このネタもどれだけのヤツに伝わっていると思っただら！」

ウィン「……そのふざけた幻想をぶち殺す」

遊画「そつち来た！？お前実は禁書 録好きだろっ」

エリア「とある魔術は別に天使は出てこないと思うのですわ……」

「

ウィン「……イン ツクスが天使」

遊画「……ハア、次行こ、次」

エリア「ツツコミ放棄ですわね。では次に行くですわ」

「これでこそ我がライバルだ遊画、燃えてきた、吹き荒れてきた、私の闘士が！！私のターン！」

海佐は引いたカードを見ると、ニヤリと笑った。

「ますます面白い。自分の場にモンスターが存在せず、キサマの場にモンスターが存在する時、バイス・ドラゴンは特殊召喚できる。

行け、バイス・ドラゴンへバイス・ドラゴン・ドラゴン族・ATK 2000・闇・5・効果 \searrow ただし、この効果で特殊召喚されたこのモンスターの攻撃力は半分となる \searrow バイス・ドラゴン・ATK 2000 1000 \searrow そしてさらに、チューナーモンスタードラゴンカタパルトを攻撃表示で召喚 \searrow ドラゴンカタパルト・ドラゴン族・ATK 1000・炎・2・チューナー \searrow レベル5のバイス・ドラゴンにレベル2のドラゴンカタパルトをチューニング 5+ 2

II 7 下級が集えし時、王者の鼓動が鳴り響く、私が力を見せてやる。シンクロ召喚、玉砕せよ、パワー・ストライク・ドラゴン \searrow パワー・ストライク・ドラゴン・ドラゴン族・ATK 2800・闇・

7・効果 \searrow 」

遊画「来たよ、海佐のモンスター」

エリア「レベル7にしては攻撃力が高いですね」

遊画「一応コイツの召喚条件はドラゴン族チューナー+チューナー以外のドラゴン族モンスター1体以上と、ドラゴン族限定のモンスターだ」

ウィン「……闇だからA・O・Jカタストルでも破壊できない」
遊画「結局死ね死ね団……いや、ゴーストが使わなかったシンクロを言うな」

エリア「死ね死ね団って……間違っではないんですけど」
ウィン「……次」

「レベル5のバイス・ドラゴンに、レベル3のフォース・ドラゲーンをチューニング 5 + 3 = 8 無限の粒子が現れる時、更なる力が叫びを上げる。王者を超える、大王者となれ」

バイス・ドラゴンの中の星が、輪となったフォース・ドラゲーンの輪の中に入り込み、直列の状態で光り出した。

「シンクロ召喚！！我が象徴、クオンタム・ドラゴン^{ハクオンタム}・ドラゴン・ドラゴン族・ATK3000・風・ 8・シンクロ、効果」

遊画「クオンタム・ドラゴン、臆病な王者と言われる王者か」

ウィン「……某元キングは何と言うかな？」

遊画「どうせヤツの事だ。「王者たる者、つねにフィールドにいないければ、弱者に過ぎん」と言いそうだな」

エリア「まあ、そうなるですわね」

遊画「お、次はヒータか」

「戦士の叫びが木霊する、大いなる魂よ、可能性を秘めたれ！！シンクロ召喚、燃やし尽くせや、ラヴァル・グレイター！！^{ハラヴァ}ル・グレイター・戦士族・ATK2400・炎・ 6・シンクロ、効果」

遊画「アイツはキングか」

ウイン「……かっこいい」

遊画「え？」

エリア「見直しましたですよ、ヒータ」

遊画「……何だろうな、このはぶられた感じ。絶対にお前らわざとやっているだろ」

エリア&ウイン「うん」

遊画「ちくしょおおおおおおおおおおおお」

ウイン「……行ってくる」

遊画&ウイン退場&BGM変更

エリア「さて、遊画が泣きながら逃亡したのですので、ウインが追いかけている間、ここからは私1人でお送りします。ではお便りコーナー。ですが、残念ながらお便りは無いので、とある経由で得た疑問をお送りします。では最初に、Kさんからの疑問から「この話ってさ、遊星やクロウは出てくるのか？」と言う質問からです。作者曰く「出てくるよ、ただし今後の5D、s次第で、更なるモンスターを連れてきて」だそうです。その1部をお見せする事にしました。では、どうぞ」

「トリックスターで鉄砲玉のクロウ様を舐めるなよ。俺のターン」

???・SPC1・LP4000

Crow・SPC1・LP4000

「俺はブラックフェザー・東雲のコチを召喚しめへBF・東雲のしめコチ・鳥獣族・ATK700・闇・4・チューナーをそして、手札からブラックフェザー・舞姫のエレサを守備表示で特殊召喚。このモンスターは自分フィールドにブラックフェザーが存在する場合、手札から特殊召喚できるへBF・舞姫まいひめのエレサ・鳥獣族・DEF1900・闇・2・効果をさらに、手札からブラックフェザー・天界のゼロを特殊召喚。自分フィールドにブラックフェザーが2体存在する場合、このモンスターは特殊召喚できるへBF・天界てんかいのゼロ・鳥

獣族・ATK0・闇・ 1・効果 γ さらに天界のゼロは、特殊召喚時にデッキからレベル3以下のブラックフェザー1体を手札に加える。俺はデッキからブラックフェザー・月影のカルトを手札に加える。そしてレベル1のブラックフェザー・天界のゼロとレベル4のブラックフェザー・東雲のコチをチューニング 1+ 4 \parallel

5 黒き疾風よ、想いをその翼に乗せ、天空へ舞い上がれ！シンク口召喚、ブラックフェザー・黒島のシレン \cup B F・黒島のシレン \cup 黒島のシレン \cup 鳥獣族・ATK2500・闇・ 5・シンク口、効果 γ 」

エリア「相変わらずのチートですわね。このまま行けば、アーマード・ウイングをシンク口召喚できるのに、どうして黒島のシレンを出したのか。それは、話が進んでのお楽しみですよ。さて、次の質問。Mさんからの質問、「エリアやウインは実際には何歳？」だそうです。乙女の年齢は聞くモンじゃ無いので、パスするのです。では、次の質問。Hさんから「何でゴザッキー？」だそうです。作者曰く「精神崩壊が何となく悪役っぽいし、何よりGXで見事にやられたから」だそうです。もはやゴザッキーは、ただのやられ役になっていくそうです。さて、3つの質問の無事に終了したのですの。皆さんも疑問に思った事やこれってどういう意味・・・と思っただ方はコメントの方がメッセージの方にどしどしコメントしてくださいですの。次回のラジオ小説で疑問にお答えします」

ウイン「・・・ただいま」

エリア「おかえりウイン、遊画は？」

ウイン「・・・ゴッ」

ズルズルズルズル

遊画「俺は・・・俺は・・・」

エリア「お疲れさまですの」

遊画「・・・」

エリア「起きろですよ、もう終盤ですよ」
「ペシペシ」

遊画「ハツ……もう少し放心状態が良かったが……」
ウイン「……ダメ、そろそろ終わり」

遊画「……何で俺が主人公なのに、こんな目に合わなければ」
ウイン&エリア「主人公だからこそ、こんな目にしか合わない（ですのよ）」

遊画「もう俺が主人公じゃ無くても良いから、こんな扱いもうやだ」
エリア「だったら誰が主人公になると言うのですの？」

遊画「そ……それは」

エリア「貴方だからこそこの作品は主人公として成り立っているですのよ。だからホラ、自信を持って」

遊画「実際にはお前らが原因だがな」

ウイン「……小さい男は嫌われる」

遊画「すでに嫌われているがな!!」

ウイン「……私は」

遊画「？」

ウイン「……私は、遊画の事嫌いじゃ無い」

遊画「ウイン？」

エリア「それなら、私も遊画の事は嫌いじゃ無いですわよ」

遊画「エリア？」

ウイン「……何だか話が逸れている」

遊画「そろそろページもページだから、終わらなきゃいけないような雰囲気だ」

エリア「それでは次回も宜しくお願いするのですの」

遊画「急に終わらせるな!どこの急展開作品だ!」

(BGMエンディング)

遊画「今日はいつもよりはまだマシだった」

ウイン「……だったら、次回はもっと酷くする」

遊画「酷くするな!」

エリア「さてと、遊画、ウイン、何か忘れてない？」

遊画&ウイン「？」

エリア「次回まで人気投票ランキングをどうにかしないとイケないのですの」

遊画「あー、そんな物があつたな。そう言えば」

ウィン「・・・どうにかしないと」

エリア「と、言う事で・・・好きなキャラクターをコメントに書いていただければ幸いですの」

遊画「そのセリフ、何回目だ」

エリア「それでは次回のラジオ小説でお会いしましょうですの」

ウィン「・・・それでは」

遊画「またあるのか、これ！」

終了

収録後

遊画「疲れた・・・頭が回らない」

エリア「確かに、どんよりとした感じが伝わるのですの」

ウィン「・・・大丈夫？」

遊画「半分以上はお前らのせいだが・・・」

ウィン「・・・だったら、帰ってマッサージをしてあげる」

遊画「それはありがたい事だ。どれ、お願いするよ、ウィン」

エリア「それだったら私もお手伝いするのですわ」

遊画「お前ら・・・本当に、俺の相棒だ」

ウィン&エリア「どうせなら・・・相棒以上になりたい」

遊画「何か言ったか？」

ウィン「・・・いや、別に」

エリア「何でも無いですの」

第4回ラジオ小説終わり

遊 戯 王 F a t e ラジオ小説その4 (後書き)

あとがき

疲れた・・・流石に1話書いた後のこれはキツイ。

さてと、手短かに言います。この流れ・・・完全にランキングは早すぎました。

もう少し話を進めてからの方が良かったと後悔しております。

そして質問コーナーは実際に言われた事を(主に友達から)書きました。

もう脳が限界なので、ここで終了します。

それでは、本編で合いませう、それでは。

11月7日 自宅にて

第16話「狂乱する魂」(前書き)

12月にテストがありますので、11月下旬から12月最初の週は小説が書けませんので、御了承下さい。

第16話「狂乱する魂」

俺達は、封印の間で小型の液晶テレビを使いパーカー野郎のデュエルを見ていた。

「フツ、まさか自分が利用されているとは知らないだろうな」

この時、封印の間に存在する3つの石版が光っていた。

「デュエルエナジーを使い、この3つの石版に力を送り込む……全く、一々面倒くせえ仕事だぜ」

それが仕事だから仕方ない。

「だったら、テメエの生命力削ってまで早く終わらせたいか？」

命にもそれだけのパワーはある。ましてはコイツが1人2人死のうと問題ない。

「は？だったらお前が生け贄に捧げられるよ。お前みたいな人間がいなくなったって、計画は進む」

「んだと、もう一遍言ってみろ！！」

俺とニコラの口論が始まった。

「やめる、この場で喧嘩をするな。奴らに感づかれる」
ツチ、ナスカ様の命令だ。

「ニコラ、このデュエル……どう思う？」

ナスカ様がニコラに問いかけた。

「このままパーカーが勝っても良いような気はするがな。何にせ遊画は我々の作戦を邪魔をしていた、しかもアイツ、ダークシンク口までしやがって……これが邪心の力と言うのか？」

「……いや、コイツには勝ってもらわなければな」

自然に、俺の口が開いた。

「ああ、どう言う意味だよ、それ？」

そうさ、このままコイツには負けてもらわれては困る。何故なら俺は……俺は……。

「俺はヤツに、勝たなければならぬからだ。あの時の悔やみ、そ

してあの時の復讐を。公栄遊画、キサマは俺が直々に地獄へ葬つてやる。キサマにもう1度、恐怖を与える為になー!!」

第16話「狂乱する魂」

ここからが、ウインの本領発揮だ。

「ここからが、私の勝負」

「我を倒すだと、小娘の分際で生意気なんだよ。だったら見せてもらおうじゃねーか。どれ程家族の絆が甘ったれているかと言つのを教えてやる」

「黙れ、私は信じてくれる人のために戦う。そして……」

ウインは俺を見た。

「私の体を渡さない、ここに……渡したい人がいるから!だから私は、貴方を倒す!レベル4のガスタの静寂カームと、レベル5のガスタ・バードをチューニング 4 + 5" 9 世界に悲しみの風が吹き荒れる、憎しみと悲しみをその胸に刻み、その竜は姿を現す。シンクロ召喚、裁きを下せ!ウインド・サイキック・ドラゴンへウインド・サイキック・ドラゴン・サイキック族・ATK3000・風・9・シンクロ、効果」

ウインのフィールドに、巨大な風を纏った竜が現れた。

「来たか、ウインのエースモンスター、ウインド・サイキック・ドラゴン」

「バトル、ウインド・サイキック・ドラゴンでダークガスタ・ベルゼブブを攻撃。サイコ・トルネード!!」

ウインド・サイキック・ドラゴンにまとわりついていた風が1つに集中し、それをベルゼブブに向かって放った。

「だがこのモンスターは1ターンに1度だけ戦闘では破壊されん」

「でも、ウインド・サイキック・ドラゴンは攻撃したモンスターが戦闘で破壊されなかった場合、そのモンスターを破壊し、攻撃力の半分のダメージを与える!!」

「んな……」

ベルゼブブが風に押し出され、そして粉々となり、また別の風が邪心ウインダールに襲いかかった。

「……ツチ」HP8000 6700」

「私はカードを1枚伏せてターンエンド」

そして、邪心ウインダールのターンになる。

「私のターン！このスタンバイフェイズ時、墓地に存在するダークガスタ・ベルゼブブの効果を発動する。墓地のガスタ2体をデッキへ戻し、このモンスターを特殊召喚する」

「「なに！！」」

「蘇れ、ダークガスタ・ベルゼブブ」ダークガスタ・ベルゼブブ・ATK2600」

つ、だがこれでコイツの墓地にはもうガスタはいない。だから今がチャンスだ！

「そしてこの効果で特殊召喚された時、相手フィールド上に存在するモンスター1体の攻撃力はエンドフェイズまで半分となる」
んな……。

「ウインド・サイキック・ドラゴンの攻撃力を半分にする」

「……」HPウインド・サイキック・ドラゴン・ATK3000 1500」

マズイ、このままウインに攻撃が通れば……。

「バトル、ダークガスタ・ベルゼブブでウインド・サイキック・ドラゴンを攻撃！ダーク・ブラスト！！」

そして、ベルゼブブの目から再びビームが放たれた。

「……」
この攻撃が通れば……一気にウインのライフは減る！！HP1400」

「させるか、そんな事！！エンドレス・ドラゴンの効果発動。自分フィールド上に存在するモンスターが攻撃を受ける場合、エンドレス・ドラゴンの攻撃力を半分にする事により、攻撃対象をこのモン

スターに移し替える事ができる。パートナー・フォーローガード！
「ハエンドレス・ドラゴン・ATK2500 1250」
そして、そのビームは軌道がずれ、エンドレス・ドラゴンへと攻撃が行われた。

「この効果によりこのモンスターが攻撃される場合、発生するダメージは0となり、1度だけ戦闘では破壊されない！」

エンドレス・ドラゴンに直撃したが、その攻撃を耐えた。

「っ……愚かなマネを……。カードを1枚伏せてターンエンドだ！」

「そしてこのターンエンド時、エンドレス・ドラゴンの攻撃力は元に戻るハエンドレス・ドラゴン・ATK1250 2500」おまけに、ウィンド・サイキック・ドラゴンの攻撃力も元に戻るハウィンド・サイキック・ドラゴン・ATK1500 3000」

次は俺のターンだ！

「俺のターン、自分フィールド上にシンクロモンスターが存在する場合、墓地のチューナーモンスターとチューナー以外のモンスターをそれぞれ1体ずつゲームから除外し、手札からハーブの演奏者を攻撃表示で特殊召喚できるハハーブの演奏者・魔法使い族・ATK1000・光・6・効果」

ツイン・シンクロンとリミット・スター・マジシャンが渦に吸い込まれた。

「そして、墓地のクリボーナイトは自分のフィールドにチューナーが存在しない場合に1度だけ、特殊召喚できる。墓地より現れよ、クリボーナイトハクリボーナイト・悪魔族・ATK300・闇・1・チューナーレベル6のハーブの演奏者にレベル1のクリボーナイトをチューニング 6+1=7 戦火の轟音が響く時、黄金の竜は舞い降りる、光り輝く星にひれ伏せよ！！シンクロ召喚、光り輝け、ゴールド・スター・ドラゴンハゴールド・スター・ドラゴン・ドラゴン族・ATK2000・光・7・シンクロ、効果」
場に黄金に輝く竜が舞い降りた。

今の俺は手札が2枚、モンスターは2体、そして伏せカードは1枚か。。。

これなら行けるかも知れない。

「バトル、ゴールド・スター・ドラゴンでダークガスタ・ベルゼブを攻撃！！スター・バルカン」

ゴールド・スター・ドラゴンの目の前で何かのエネルギーが球状に膨れ上がり、それを拡散させて相手に放った。

「ゴールド・スター・ドラゴンの効果により、攻撃力をエンドフェイズまで倍にする！！」
「ゴールド・スター・ドラゴン・ATK2000 4000」

しかし、それを耐えた。

「忘れたか、このモンスターは1ターンに1度だけ戦闘では破壊されない。そしてゴールド・スター・ドラゴンの効果により、プレイヤーが喰らう戦闘ダメージは全て0」

それぐらい知っている！

「俺は罨カード、パワー・ポンプを発動。自分フィールド上に存在するモンスター1体をゲームから除外し、そのモンスターの攻撃力分、自分フィールド上のモンスター1体の攻撃力を、エンドフェイズまでアップさせる、さらにこのターン自分が受ける効果ダメージは全て0になる」
「パワー・ポンプ・罨・効果、自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体をゲームから除外して、自分フィールド上に存在するモンスター1体を選択して発動する。そのモンスターはこの効果によりゲームから除外したモンスターの元々の攻撃力分エンドフェイズまでアップする。この効果を使用したターン、相手が発動したダメージを与える効果はすべて0になる」
「ゴールド・スター・マジシャンを除外！」

ゴールド・スター・ドラゴンが渦へと吸い込まれた。

「これにより、エンドレス・ドラゴンの攻撃力は現在のゴールド・スター・ドラゴンの攻撃力、4000ポイントアップする」
「エンドレス・ドラゴン・ATK2500 6500」

「攻撃力・・・6500!!」

「続いてエンドレス・ドラゴンの攻撃、パラディン・クロー」
「エンドレス・ドラゴンの爪が剣状となり」

「ぐおおおおおおおお」
「LP6700 2800」

よし、後はウインのターンで!

「我は手札に存在するガスタ・リカバルを墓地へ送り効果を発動する。自分が2000以上のダメージを受けた場合、手札からこのモンスターを墓地へ送り、ライフを2000回復する!」

邪心ウインダールの前にハート型の鳥が現れ、邪心に粉を降りかけていった。

「っ・・・」
「LP2800 4800」

急にライフを回復するとは・・・やる。

「俺はターンエンドだ。そしてその瞬間、エンドレス・ドラゴンの攻撃力は元に戻る」
「エンドレス・ドラゴン・ATK6500 2500」

さて、決めてくれウイン。

「・・・私のターン、私は罠カード、ガスタの風連を発動。墓地のガスタ2体をデッキへ戻し、カードを2枚ドロウする」
「ガスタの風連・罠・効果、墓地の「ガスタ」と名の付くモンスター2体をデッキへ戻し発動する。デッキからカードを2枚ドロウする」
「墓地のガスタ・ナチュラルとガスタの静寂カードをデッキへ戻し、デッキからカードを2枚ドロウ」

ウインはカードを見ると、少し悲しい目になった。

「私はガスタ・ザンボルトをゲームから除外し、魔法カード、緊急レベルダウンを発動。手札のモンスター1体をゲームから除外し、そのモンスターのレベル分、手札のモンスターのレベルを下げる」
「緊急レベルダウン・魔法・効果、手札のレベル4以下のモンスター1体を墓地へ送り、手札のモンスター1体を選択して発動する。そのモンスターを相手に見せる事により、このターンのエンドフェイズまで、選択したモンスターのレベルは墓地へ送ったモンスターの

レベル分だけダウンする。その効果により、手札のガスタの賢者ウインダールのレベルを4つ下げる。ガスタの賢者ウインダール・

6/2」

ウインの後ろにガスタ・ザンボルトのカードが渦に飲まれ、そしてウインの目の前にザンボルトが現れた。

「そして、ガスタの賢者ウインダールを攻撃表示で召喚！！ガスタの賢者ウインダール・サイキック族・ATK2000・風・2・効果」

ザンボルトが消え、その場にウインダールが現れた。

『ウイン……まさかお前』

「お父さん、貴方がトドメを刺して。私は何も出来ない、お父さんは、アイツのせいで苦しんだ。だから、トドメを」

ウインダールは下を向くと、何かがこぼれていた。

そう、それは涙である。

『ウイン……いや、我が娘よ。俺は……』

「気にしないでお父さん」

これが……家族愛なんだな……。

やっぱり、コイツ等は……絆で結ばれている。

「や……やめ……」

ウインは邪心の方を見た。

「……これが、貴方に対する裁きよ。バトル、ウインド・サイキック・ドラゴンでダイレクトアタック。サイコ・トルネード！！」

その攻撃は、邪心ウインダールへと見事に当たった。

「ぐあああああああ」HP4800 1800」

「そして、これがトドメ。バトル、ガスタの賢者ウインダールで……邪心ウインダールをダイレクトアタック！！サイコ・バスターソード」

ウインダールの杖が光り出し、ウインダールは邪心に向かって跳んだ。

「ま……待て、我が貴様自身の邪心だと忘れてないか」

『ゴダ事は聞きたくない』

「だったら言うが、キサマがウインを呪ったから、我が生まれた！」

『！！』

邪心に届く1m手前で、ウインダールの攻撃はストップした。

「我がキサマの一部だ。キサマの妻は、ウインを生んでからすぐに死んだ。だから伝わってきたんだよ、あの時妻が、自分を犠牲にしてまで子どもを産まなかったら・・・生きていただろうにと」

『や・・・め・・・る』

「そして、キサマは勘違いをしていた。我はキサマの一部だ、その意味を教えてやるう。我がキサマをコントロールした瞬間、すでにコントロール権は我に値する事を」

『！！』

「だからこそ、主人たる我を攻撃する事はできない」

ウインダールの攻撃が続けられない。

これは一体どう言う事だ？

「つまりだ、分身の身となったコイツは、どう足掻いても我に攻撃する事はできない。何故なら、体が拒絶を起こしてしまうからだ」
き・・・きたねえマネを・・・。

「きたねえぞ！キサマは・・・それでもデュエリストか！？」

「言つてやるう、邪心だ。キサマらのような人間とは全く違う」
ツチ・・・。。。。。

「ウインダール・・・私はカードを1枚伏せてターンエンド」

「さて、俺のターンだ！！だがその前に、永続罠カード、蜂の侵食を発動。自分のドローフェイズ時にデッキからカードをドローした後、デッキからカードを3枚墓地へ送る。蜂の侵食・永続罠・自分のドローフェイズ時にデッキからカードをドローした後、デッキからカードを3枚墓地へ送る。このカードは発動後、3ターン目のスタンバイフェイズに破壊される。これにより、俺はデッキからカードを3枚墓地へ送る」

ウィンドールはデッキからカードをドロ―した後、デッキの上からカードを3枚墓地へ送り、ニヤリと笑みを見せた。

墓地へ送られたモンスターは・・・ガスタ・ザンボルトとガスタ・イグルにガスタの静寂カームだと!!

「そして、墓地のガスタ・リカバルとガスタ・イグルをデッキへ戻し、墓地よりダークガスタ・ベルゼブブを特殊召喚へダークガスタ・ベルゼブブ・ATK2600」

フィールドに黒い穴が出現し、その中から黒い蠅が姿を現した。

「そしてこの効果により特殊召喚された場合、相手の場のモンスター1体の攻撃力を半分にする。ウィンド・サイキック・ドラゴンの攻撃力を大幅にダウン」

「・・・んなへウィンド・サイキック・ドラゴン・ATK3000 1500」

「さらに、手札から魔法カード、ガスタの交信を発動。墓地のガスタ・ザンボルトとガスタの巫女ウィンダをデッキへ戻し、相手フィールドのカードを破壊するへガスタの交信・魔法・効果、自分の墓地に存在する「ガスタ」と名の付くモンスター2体を選択し、デッキに加えてシャッフルする。その後、相手フィールド上に存在するカード1枚を選択して破壊するへそれにより、ウィンドール、テムエには退場を願うぜ。喰らいな!」

その場に雷撃が発生し、ウィンドールを粉々に砕いた。

『ぐあああああああ』

「お父さん!」

野郎・・・わざと・・・ウインの前で・・・。

「楽しいよな、人を傷つける行為ってさ」

「・・・んのヤロー。」

「さて、パーティーも終盤だ。バトル、ダークガスタ・ベルゼブブでウィンド・サイキック・ドラゴンを攻撃!ダーク・バースト!!」
「レーザーが発生し、ウィンド・サイキック・ドラゴンを貫いた。」

「・・・っ」LP1400 300

あの伏せカードは……まさか

そう、私の伏せカードはただのまやかしのカード。このまま遊画のターンでアレを倒さなければ、私は死ぬ。

まやかしのカード……っ、畜生が。

「我はターンエンドだ。どうした公栄遊画、我を倒すと言ってなかつたか？」

「黙れ、俺のターン。俺はアドバンス・ドローを発動。フィールドのレベル8以上のモンスター1体をリリースし、デッキからカードを2枚ドローする。アドバンス・ドロー・魔法・効果、自分フィールド上に表側表示で存在するレベル8以上のモンスター1体をリリースして発動する。デッキからカードを2枚ドローする。俺はエンドレス・ドラゴンをリリースし、デッキから……」

俺はアイツを許せない、デュエリストとして……悲しみを植え付けた張本人として。

「俺は……キサマを倒す！ドロー！！」

手札に来たカードを見ると、俺はフツと笑った。

「キサマを倒す。その答えに答えたようだ」

「ほざけ、罠カード発動、救援のジレンマ。このターン自分フィールド上のダークシンクロモンスターはカード効果では破壊されず、ゲームからも除外されない。救援のジレンマ・罠・効果、自分フィールド上にダークシンクロモンスターが表側表示で存在する時にのみ発動する事ができる。次の自分のスタンバイフェイズまでダークシンクロモンスターはカード効果では破壊されず、相手が発動した魔法、罠、効果モンスターの効果ではゲームから除外されない。これでお前らは封じられたも同然だ！さあ、エンドを宣言しな！」

俺が……エンドを……っふ

「っふっふっふ、面白い事を言うなキサマ」

「なに！？」

「この俺が……そう簡単に……負けを認めるとでも思うな！！キサマは大きな誤差をした、俺は誰もモンスターを破壊

するとは一言も言っていない」

「どう言う意味だ!？」

「教えてやるよ、その身に味わいな!!手札からスナイプ・スター・マジシャンを攻撃表示で召喚へスナイプ・スター・マジシャン・魔法使い族・ATK800・光・2・チューナー」さらにこのモンスターはダイレクトアタックができる」

「それがどうした。それでも私のライフはまだ残る」

「さらに俺は伏せていた魔法カード、欲望の代価を発動。デッキから魔法、罠カードを全てゲームから除外し、除外したカードの中に存在する罠カード1枚をデッキの一番下に戻すへ欲望の代価・魔法・効果、自分のデッキに存在する魔法、罠カードを全てゲームから除外し発動する。ゲームから除外されている自分の罠カード1枚をデッキの一番下に戻す」俺はデッキに存在する全ての魔法、罠カードを除外する」

デュエルデスクのカードをこっさり抜いた、そしてその中の1枚をデッキの一番下に戻した。

「バトル、スナイプ・スター・マジシャンでダイレクトアタック!スター・スナイプ!」

スナイプ・スター・マジシャンのスナイパーライフルから火が吹き、邪心の胸を貫通した。

「……っ」{LP1800 1000}

「だ……だが、私のライフを削れなかったようだな。さあ、エンドを……」

「……誰が」

「……ん?」

「誰がバトルを終了すると言った!ああ」

「何だ、この脅迫は」

俺自身気づいていなかったが、この時俺の目は……赤く染まっていた。

「……遊画?」

ウインは絶望していたが、俺の様子に気づいたようだ。

「キサマは何も分かっていない。この攻撃が通った瞬間、キサマは死への階段を進んでしまったんだよ。手札から……」

手札に存在する、サテライトで拾った最悪のカードを使用した。

「速攻魔法発動！バーサーカーソウル！！」

「バーサーカーソウルだと！」

邪心も驚きを隠せなかった。

そしてウインも……。

「そ……そんな危険なカードを……」

俺をけいべつした目で見ていた。

「自分フィールド上のモンスターが直接攻撃を行った時、手札を全て墓地へ送り発動する。俺はデッキからカードを1枚ドロウする。

それがモンスターカードであった場合、続けて攻撃が行える。だがモンスターカード以外だった場合、効果は中止される。狂乱する魂^{バーサーカーソウル}・

速攻魔法・効果、自分のバトルフェイズ中に自分フィールド上に存在するこのターン直接攻撃を行った攻撃力1500以下のモンスター1体を選択し、手札を全て捨てて発動する。自分のデッキからカードを1枚ドロウして、お互いに確認しモンスターカードだった場合、そのカードを墓地へ送り、もう1度攻撃する。モンスター以外のカードをドロウするまでこの効果を繰り返す……だが、考えてみる。俺のデッキはすでにモンスターカードばかりのデッキとなっている。まあ、苦しむのもせいぜい……16回の攻撃だがな」

「……」

邪心の表情が固まった。

「さて、1枚目、ドロウ！」

当たり前であるが、モンスターカードだった。

「セブン・スター・マジシャン！スナイプ・スター・マジシャンの攻撃、スター・スナイプ！！」

再び同じ所に当たった。

「グハツ」LP1000 200」

「そして次だ、ドロー。バトル・スター・ブレイダー。スター・スナイプ!!!」

今度は右足を撃ち抜かれた。

「っ……っ……」LP2000」

「ちなみにまだだ、この効果はモンスターカード以外のカードを引くまで続く」

「あ……悪魔が」

「フツ、人を傷つける行為って、楽しいんだよな？」

「!!!」

「……い……いや、こんなの」

「俺のターンはまだ続いている。ドロー、モンスターカード!!!」
今度は右足を撃ち抜かれた。

「っ……」

「やめて欲しいか？」

「や……やめろ」

「おおっと、手が滑った」

また、カードをドローした。

スナイプ・スター・マジシャンが銃口を構え、今度は邪心の左肩を撃ち抜いた。

「グハツ……」

「楽しいな、楽しいな、お前がやっていた事は、本当に楽しいよ。
憎い相手を痛ぶるって行動はよ」

俺の精神は、すでに何かに支配されていた。

その時、邪心の意識が飛んだのを感じた。

我は……こんなガキ相手に……っ

『言ったハズじゃ無かったっけ、キサマでは俺の相手にもなりはしない』

そんな声が聞こえた。

「て……テメエは！」

目の前にとある女が現れた。

「キサマは……ヘル!?」

『つふふふ、まさかキサマがこんな所で油を売っているとは、正直驚いたが……だがこの主従様がお怒りになっっているんでね、悪いが消えてもらうよ。そっちの方が俺にとっても都合の良い事この上ないがな』

その顔は、悪いと思っっているよりも……楽しんでいる顔と解釈した方がいいような顔でもあった。

「ヘル……この冥界の邪神がああああああああああ
そうして、俺の意識は元に戻った。」

「ただ、まだ俺の怒りは収まっていないんでね。まだキサマには痛みや苦しみを味わってもらおうぞ！」

その時、ウインは震えていた。

「……こんなの、望んでいない。確かに私はアイツが嫌いだ、でも今の遊画は……遊画は」

そんなウインの声など、届く訳がなかった。

「まだ俺のターンは続行だ」

「……つふ、ふふふふ。まさかキサマにも……邪悪な神が……キサマもか!!キサマもその中には……」

邪心の声など、俺は聞いていなかった。

「ドロー、モンスターカード!!」

スナイプ・スター・マジシャンは銃口を構え、邪心の頭を撃ち抜いた。

「つ……頭が」

「つふふふ、まだこれで終わりはいねえよ。再び……」

俺がデュエルデスクのカードに手を置いた瞬間、ウインは……

ついにキレた。

「……このまま……遊画の思い通りにはさせない。畏カード、因縁より戻る者を発動。お互いにゲームから除外されているカード全てをデッキへ戻す。因縁より戻る者・畏・効果、お互いにゲームから除外されているカードを全てデッキへ戻しシャッフルする。」

「んな……。」

遊画のデッキに大量のカードが戻ってきた。

「ツチ……何をやるウイン、クツ……ドロー」

引いたカードは、聖なるバリア・ミラーフォースだった。

「……これ以上……自分を狂乱させるな!!」

何故か殴られた。俺にはその理由すら分からなかった。

すると、ウインは俺の襟元を掴んだ。

「……確かに私はアイツが憎い。殺してやりたい。でも。それで貴方が狂乱して、見境を付かなくなるのなら、私はその方がイヤだ!!」

何を言っているんだ……？

「貴方は人を痛めつけて楽しんでいた、私はそんな貴方の姿を見たくない。正気を取り戻して遊画、貴方は……そんな人間じゃ無かったでしょ、そんな……人を傷つけるのが嫌いな遊画が……。本当の貴方じゃ無かったの!？」

!!……俺は……何を。

「私はもう……何を信じれば……いいの」

その時のウインの瞳から、涙が出ているのが分かった。

……ごめんな、ウイン。

そう思い、俺はウインを強く抱きしめた。

「ごめん……俺は怒りと共に我を忘れ、相手に同じ思いをさせるので頭がいっぱいになっていた。それでお前が傷つく事になるとは……。」

失態だ、これはもう……ウインの側にいる資格なんて無い。

「……………」

急に地下からおぞましい量の何かを感じ取った。

「なんだ…………憎悪が」

「これが…………負のエネルギー」

地響きが止み、その後は何も起こらなくなった。

「何が起きたんだ」

「…………行ってみよう」

そう言つて、俺とウインは地下6階を目指した。

地下6階

そこには、3枚の石版が宙に浮いていた。

「…………これは」

すると、その石版が砕け、中から3枚のカードが現れた。

「ようこそ、これが死神のカードだ」

どこからか声が聞こえた。

「!!この声は…………」

俺は辺りを見渡した。

すると、死神のカードの真下に、3人の人影があつた。

その中の1人は…………。

「リドウ、お前か！」

そして、その3枚のカードはそれぞれ3人の手に渡つた。

「これから1週間後にとある出来事が起こる」

あの中の1人が、そう言つた。

「とある…………出来事？」

「それは起きてのお楽しみだ。なんにせお前らはもう逃げられはしねーんだよ。これから起こる事に恐怖を抱くがいいさ」

「待っている公栄遊画、キサマは俺が直々に倒す。そしてあの時の借りを返してやるっ」

「それでは1週間後を楽しみにな、せいぜいそれまでに死ぬなよな」
そう聞こえると、スーツとその3人は消えていった。

「待て！」

俺もその場に向かったが、すでに3人はその場にはいなかった。

「……とある事？」

そう、ウインは呟いた。

「……どうやら、逃げ道はなさそうだ」

どうあるうとも、これから先は死を覚悟してデュエルをしなければ
いけなくなっただらう。

「……待つていろ、そんなふざけたカード、この俺が」

「……この私たちが」

「「再び封印してやる!!!」」

続く

次回予告

とある出来事まであと6日、その間に俺は……残る3人の心の
闇を聞かなければならない。

だが、どうすれば良いんだ。時は待つてくれない、それに……
エレナの事も気になるし。

次回、遊戯王Fate 第17話「闇の笑み、闇の悲しみ」

「俺は……」

「僕は……」

「ダルク、お前は何を悩んでいる」

第16話「狂乱する魂」（後書き）

あとがき

これが・・・疲れか。

ハイ、と言うことであとがきになりました。

どうも最近、疲れが取れない時があるんですね。

ハア・・・何でだろうな。

それと、遊戯王5D、sのアレ・・・一体どういう事だ!?

未来が崩壊・・・そして視聴者の腹筋崩壊・・・どうして、3

人合体で爺さん+残念なイケメン+キチアーノ!!で、巨大なイケメ

ン 8 + 8 + 8 !! になるんだ!?

まあ、今のところ小説に支障が無いから良いけどね。

最終回で世界崩壊やシンクロが無くなったや途中で霊使いの精霊や

ノルンが出てきた・・・とならない限りはまだ大丈夫です。

それでは次回も、宜しくお願いします。

11月13日 自宅にて

第17話「闇の笑み、闇の悲しみ」（前書き）

ここからが見せ場だ、しばらくは心理フェイズです。

第17話「闇の笑み、闇の悲しみ」

相手は言っていた。

1週間後にとある出来事が起こると。

その出来事はどんな出来事かは分からない、だが……。

『遊画、お前は一体どう思う?』

俺の中から誰かが問いただした。

「知るか、だが俺は負けられねえ、俺はアイツ等を守る為に……絶対に」

『……フツ、昔の俺を思い出すな』

俺の中から半透明の赤毛の人が姿を現した。

男のクセに俺と同じように髪が長く、肩で2つに束ねているこの男……。

名をトト・モーランと言う。

又の名を「相棒」や「もう1人の僕」とは呼ばずに「自爆霊」とでも呼んでいる。

「……なあ自爆霊」

『そのあだ名はやめろと言ったハズだ。そもそも俺は自爆霊じゃねえし』

「じゃあ紳士」

『と言う名の変態とでも言いたそうな雰囲気だな！お前は何をやりたい!?!』

と言うよりは……。

「何故また出てきた、トト・モーラン」

彼は元々、俺の意識の中に沈んでいる存在だ。

それなのにまた現れた、これは何かありそうだ。

『別にな、ただアイツ等が元気にしているかどうかを見たかっただけだ』

そう言っているが、本当は会いたいのであろう。

「じゃあ会えばいいじゃないか？」

『バカを言うな、俺はアイツ等を騙して精霊にしたんだぞ。俺は……』
過去の事を気にしているのかコイツは。

「それは仕方ない事だ。俺だってお前の話を聞けばそうするしか無かったとも言えるし、何よりもそんな真実はアイツ等に話せるモンじゃない」

現に和らげた心の闇に、これ以上心の闇を増やしたくはない。

「……そうだとト、ちょっと聞きたい事がある」

『……何だ？』

この際だ、ヒントぐらいは貰っておこう。

「残りのメンバー、アウス、ダルク、エレナ……そして……えーっと」

『ライナの事か？』

ライナ……？

『光の霊使いの事だ。アイツはまだお前の前に来ていないらしいなライナか……、名前だけでも覚えてし、これで今度会っても大丈夫だ。』

「それは良いとして、アイツ等の心の闇に関する手がかりは無いかな？」

『心の闇に関する手がかりか……、俺が思いつく範囲で行けば……まずダルクだな』

「ダルク？」

『アイツはいつも独り言が多い。前も……』

「……何で貴方はいつもそんな解答しかしらないんですか？」

「何を言っているんだ、ダルク？」

「あ……えっと、何でも無いです」

「そうか……」

『つて事があつたぐらいだからな』

ダルクの独り言か……。

「確かに、何かはありそうだ」

これで目的は決まった。

ダルクの……心の闇を和らげてやる。

第17話「闇の笑み、闇の悲しみ」

朝、昨日の戦いから1日が過ぎた。

俺はいつものように下に降り、朝食を取っていた。

「ああ、眠い」

校長に事情を説明し、1週間は休学させてもらっている。

「これからの戦いに……備えないとな」

だがしかし、肝心の心の闇を聞くのはあと4人も聞かなければならない。

そして、信頼を上げなければアイツ等には勝てないとまで母に言われた。

「信じ合つ心が……奇跡を生み出すとも言つのか」

そう思っていた時だった。

丁度ドアが開き、見るとダルクが何処からかから帰ってきていた。

「ただいま」

「お帰りダルク。何処まで行っていたんだ」

すると、ダルクはある物を見せた。

「これですよ、テレビであった今人気のレッド・デーモンズ・ヌードル」

ダルクの片手には、カップラーメンが持たれていた。

「欲しかったんですが、なかなか手に入られなくて……本当に嬉しいです」

ダルクが満足な笑顔を見せていた。

しかし、笑顔のコイツは……案外可愛いかもな。

「どうかされましたか？」

俺の視線に気づいてか、ダルクは俺の方を見た。

「何でもない・・・それよりもダルク」

俺はさっさと本題に入ろうとした。

「お前の心に闇を・・・教えてくれないか？」

ダルクはその言葉を聞いて、少し黙り込んだ。

やはり・・・急に言っただ話すのは無理か。

「・・・良いですよ」

・・・え。

「僕は隠し事なんかしませんし、自分の心が和らぐなら、話した方がいじやありませんか」

これは以外だ、ダルクが話してくれるとはな。

「じゃあ、話してくれダルク」

「分かりました、アレは・・・僕が12歳の頃の話です」

僕はその時、友達から虐められていた。

「やーいダルク、返して欲しかったらここまでおいで」

「返して下さい、それは僕の大切な・・・おばあちゃんの形見なんです」

大切な・・・おばあちゃんのバッグを捕られ、それを悪ガキ達が投げて遊んでいた。

「バーカ、こんなボロボロバッグなんて誰も形見とは思わねーよ」

「酷い・・・」

僕はその時、本当に涙が出そうになった。

何故・・・僕がこんな目に合わなければならぬのか・・・。

そしてこんな日々が毎回毎回繰り返していた・・・。

「これが・・・僕の心の闇です」
イジメか。

確かにイジメられている本人は辛いだろうな。

ダルク自身もこれは辛い体験だったであろう。

「どうですか？僕はこれで、何年も悩みました。何故僕は……僕……」

『妙だな』

俺の中にあるトトが声を上げた。

「妙……と言つと？」

ダルクに聞こえないぐらいの声で聞いた。

『確かにダルクにも悲しい過去がある。だが、ここまで聞いて独り言の事を全く言っていない』

俺はその答えに、やはり疑問を持った。

ダルクの答えに隠し事は感じられなかった。

だがしかし、この胸のモヤモヤは一体なんだ。

そう考えた時、ダルクが俺の肩をつついた。

「あの……遊画さん？」

俺は我に返った。

「あ……何だダルク？」

「何か深く考えていたようでしたので……何か？」

「いや、別に何でもない……そう言えばダルク、さっきの話だが……お前も辛かつたんだな」

まず、言われた物を深く考える事にした。

「……はい、結局そのバッグは返してもらえず、川に捨てられました」

酷い物だ。

人の気持ちを分らない者は、マシな人間じゃない。

ましてや、人の物を捕ってそれを川に捨てるなど……外道な事だ。

「おばあちゃんは、優しくったのかい？」

「ええ、それはもう、僕に優しく、時には厳しく接してくれました。僕はそんなおばあちゃんが好きでした。でも……」

その時、ダルクの目に涙が浮かんでいた。

「魔女と判断されたおばあちゃんは……処刑台に立たされ……」

「・・・そして」

「これ以上言うな、お前の気持ちは良く分かった。お前も、そんな光景を見て黙ってはいられなかっただろう？」

魔女狩り・・・そんな下らない行いのせいで、コイツ等の親や自分自身が傷ついた。

そんな歴史があつたから・・・だが

「ダルク、ちよつとこつちに」

ダルクを俺の方に寄せた。

「・・・何でしょうか？」

そして、ダルクの頭を優しく、抱いた。

「・・・え？」

「こんな事しか出来ないが、少しでも温もりを感じてくれ。お前が感じたおばあちゃんの・・・温もりを」

ウインが俺にやった事を、俺はダルクにやった。

今はこんな事しか出来ない。

だが、これでコイツの心が和らぐのであれば、どんな事だってする。

それが・・・今出来る事なのだから・・・。

「遊画・・・さん」

ダルクも温もりを感じてか、俺の腕に暖かい何かを感じた。

これは・・・コイツの涙か。

「泣くなら泣け、今まで溜まった不安や不満を泣いて流せ。涙と言

うのは、その為にあるような物だからな」

「・・・っ・・・っ・・・」

ダルクは静かに泣いていた。

やっぱり、心が弱い人は打たれ弱いのか・・・。

だったら、俺が守らなきゃな。

俺は強い。だからこそ、弱い人間を守らなければならない。

そう俺は感じた。

その顔が上がるまで、感じ続けた。

それから数時間後

時は夕方近くになった。

ダルクは元のように、にこやかな顔に戻り、俺は部屋でのんびりと寝ていた。

「心の闇か・・・」

考えてみれば、俺は何をやっているんだろつな。

よくよく最近そう思う。

アレ・・・何かデジャヴを感じたような・・・。

『最近そう思っているからじゃ無いのか？』

とは言ってもな、そう思うしか無いじゃないか。

「トト、戦いは1週間後だ。それまでに母が言っていた、心の闇を聞くと言うのが一体どんな意味を持つのかを知りたい」

それにより、与えられる物は一体何だ？

『・・・絆じゃ無いのか？』

絆・・・。

「絆で・・・信じ合う心が生まれるとでも言うのか？」

『そうだ、お前は真面目な性格でもある。だからこそ、人の心を分かり合い、そして絆が生まれる。秘密を持ち合うと言う意味でもそうだ』

・・・。

「それが・・・母がやらせたかった事なのか」

『お前は昔から孤独に生きてきたからな。少なくとも意識の中に俺がいた頃のお前は・・・海佐と会うまではずっと1人ぼっちだった』

そして、海佐が死んでからの間は・・・。

「周りの人たちが急にうるさく感じた。俺は何故、生きているのかと小学校時代に感じた。結局、俺は何をやっても無駄だと言う事を知った・・・あのチームに会うまでは」

同じ時刻、デュエルアカデミア、アーカイト校2年C組教室
私は早く帰る事にした。

遊画はしばらく休学すると言っていたので、私も用事を済ませて帰ろうとした。

「あの……ここに葵先輩いらっしやいますか？」

そんな声が聞こえた。

「何ですか？」

そこにいたのは、以前タッグライディングデュエルでパートナーを勤めた遊画の幼なじみ、綾中沙耶であった。

「沙耶さん、一体どうしたのですの？」

「……ちよつと、お時間はありますか？」

別に用事は無かったので、何か言いたいような雰囲気も感じた為、私は「いいえ」と答えた。

「そうですか、それじゃちよつと食堂の方にお越し下さい」

そう言つて、沙耶さんは走つてどこかへ行つてしまった。

「……何でしょうね、とりあえず行つてみる価値はありそうですね」
わ

そう思い、私はカバンを持ち、食堂の方へと足を運んだ。

デュエルアカデミア、購買部近くの食堂

「……来ましたか」

そこには、すでにイスに座っている沙耶と、ワインがそこにいた。

「ワイン……では無くて……」

「いいえ、もう知っています。貴方が、いえ、貴方方が精霊だと言
う事を」

「「!!」「」

2人して驚いた。

「私も精霊が見えます。そして、私には氷結界の呪いが込められています」

氷結界の呪い？

「氷結界の呪いとは、私の種族、約1000年前に滅ぼされた氷結界の一族の呪いです」

何を話して……。

「私は、遊画と同じく苛酷な運命を背負う人間です」

「……それって、どんな意味なの？」

「いずれ分かる事ですが、私は氷結界の一族の生き残り。そして、とある古文書をつい最近見つけました」

「何を話しているのです？まるで意味が分からないのですわ」

「……その古文書によれば、約1000年後、世界は闇に捕らわれ、我らが氷結界の生き残りが魔女の呪いを持った決闘者と戦い、死ぬ運命にあり……と」

魔女の呪いを持つ決闘者？

「多分この氷結界の生き残りと言うのは私です。そして魔女の呪いを持つ者と言うのは……」

この時、1人の顔が頭の中に浮かんだ。

「ゆう……が……ですか？」

「恐らくはそうでしょうね。私はその続きを読もうとしましたが、そこから先、本が破れ、更には最後の最後に、その魔女の呪いを持つ者は、自らの邪神により心を奪われ、本心が消滅すると……」

……古文書の預言。

「私は信じないですよ。そんなデタラメな事、ある訳がないでしょう」

「……私も、そんな友達同士が殺し合うなんて……信じられない」

「そう言うと思いました。でも……」

沙耶は目を瞑った。

「ん．．．んん．．．んんあ」

すると、デコと左右の手の甲に、何か変な紋章が現れた。

「これは．．．氷結界の紋章！！」

氷結界の紋章は、魔法カードにも存在する。

これは一体．．．！！

「氷結界のモンスターは昔、遺跡に描かれていた謎のモンスターを元に作られたモンスターです。凶悪な氷結界の龍は全てを裁き、そして私たちの種族により、遺跡に封印された。ですが、強力だった最強の氷結界の龍の1体は、あまりにも凶悪なパワーを持っていたため、女性の体を使い封印された。そして今、その女性の体から放たれた最強の氷結界の龍は、まだ幼かった私の中に封印された。これが、私たち氷結界の一族の掟。100年に1度、その龍を体に封印しなければならぬ。それが今の私なのです」

そんな．．．沙耶さんは、自分の運命を背負って．．．生きてきたなんて。

「ですのでお願いです。遊画を．．．守って下さい」
遊画を守る？

「遊画は唯一私に優しく接してくれた存在。母親を亡くした私と一緒に泣いてくれた、唯一の友達なんです」

遊画．．．貴方って人は。

「遊画は思い込みが激しく、周りには友達がいるのにも関わらず、自分は孤独だと思っている人ですから」

「それって、周りは信頼しているのにも関わらず、自分は信頼されていないと思っていたのですの？」

「ええ、なににせクラスの中には遊画を気に入らず、喧嘩をよくする男子もいたし．．．」

「．．．それで、何が言いたいの？」

そうだった、そう言えば何故遊画を守れと言っているのかはまだ聞いていなかった。

「私と遊画はいずれ戦う運命にあります。それに古文書によれば．．．

・それで私が死にます。それにより遊画はどう思うでしょうね。自分のせいだと思ひ込み・・・」

「！！！」

私たちは、同時に同じ事を言った。

「「また、再び固い殻に隠る可能性がある」「」

あの性格だからこそその答えだ。

人の痛みを知る者は、自分が傷つけた時には倍の痛みを知ると。

そんな法則が成り立つのが遊画なのである。

「私は・・・自分のせいで誰かを傷つけたくは無い。でも、これが運命ならば・・・」

「・・・運命は変えられる！」

ウインが叫んだ。

「・・・運命は変えられる。今の状況を聞いて、まず遊画はそう言う」

「・・・え？」

「・・・多分この後、あのバカはこうも言うと思う。お前はまた合ってもいない事を口にするな。俺とお前が戦うだと、ふざけるな！そんな意味もない戦いは、俺はしない。それに、お前が傷つこうならば、俺はそれを全力で阻止する。どんな事があっても、俺は・・・お前を守り抜く。それが、俺のあるべき姿だ！！」

「！！！」

沙耶は啞然とした。

「・・・そう、遊画は鈍い。だからこそそんな恥ずかしいセリフもこうも簡単に言える。だから諦めないで、私たちも何かあるか見つけ出すから」

その言葉を聞いて、私も立ち上がった。

「そうですね、沙耶は私の可愛い後輩ですもの。だから元気を出して、沙耶さん」

「みんな・・・ありがとう」

沙耶さんはホロリと涙を出していた。

だから私たちは・・・そんな沙耶を抱きしめた。

これから先、どんな事があるかは分からない。

だからこそ、絆は大事である。

それがどんな絆であろうとも・・・私は・・・。

アーカイトマンション、遊画部屋

俺はやはり気になった。

ダルクの事は知った。

だがこのモヤモヤは一体なんだ。

まだ何かあるとでも言うのか。

そんな事を考えていた時、ダルクが買い物から帰ってきた。

「ただいま」

俺はダルクが運んできた荷物を持つのを手伝うために、下に降りた。

「重いだろダルク、俺が少し持ってやるよ」

俺はダルクから少し荷物を持った。

「・・・いや、別に良い」

「・・・？どうしたダルク、いつもとちょっと違うぞ」

いつものにこやかな顔とは違い、険しい顔つきで、目には力が無い状態だった。

「・・・これは一体、お前、本当にダルクだよな？」

「・・・ああ、いつものダルクだ」

やはりおかしい、普通のダルクならもっところ、異様に元気が良く、喋り方もそんな無口な喋り方じゃ無くてテキパキと喋っていたような気がするが・・・」

『これは・・・まさか』

トトは目を大きく開いた。

『別人格・・・邪心か！』

「何だつて!!」

邪心、昨日戦ったアイツと同じヤツか。

「オイキサマ、何者だ!？」

俺はダルクを睨み付けた。

「……ダルクだ、ただしあのダルクとは違う」

「それは見ても分かる。お前はダルクの何なんだ!？」

「……アイツは今、元気にしているか？」

突然の問いだった。

「……え？」

「俺はアイツのもう1人の人格だ。アイツは俺を表に出さなかった。俺は邪心だからだ」

そのダルクは顔を俯かせた。

「……公栄遊画、俺はお前と戦う運命にある。だから……」

「……違う」

何だ、このダルクは。

俺はコイツが邪心じゃ無いと分かった。何故なら……。

「お前はダルクの心配をした。普通に心配をした。お前は……心が分かる人間だ!!」

「!!」

ダルクは驚いた顔をした。

その上、俺はまだ言っただけだった。

「もう1人の人格、お前が何者かは知らないがな、俺には分かる。

お前が……お前が一番、心の闇を持っているとな!!」

その瞬間、再び目が痛み出した。

そして、また俺はそいつの過去を見る事になった。

「……またか」

右にダルク、左に……何も無い、真っ白な空間が映し出されていた。

「この映像・・・ダルクの記憶か」

冷静に判断し、その様子を見た。

すると、眩い光を持った2つの魂が現れた。

「何だ・・・この2つは」

すると、何か声が聞こえた。

『ダメです、生んでしまえばどちらか片方が死んでしまいます』

『しつかりしろ、何か手は無いのか。片方は・・・生まれて来れずに死んでしまっただぞ。そんな悲しい事が起こってたまるか!』

『貴方・・・』

『心配するな、必ず奇跡は起こる』

この声・・・。

すると、2つの魂も同時に喋り始めた。

『にい・・・さん』

この声・・・まさか

「ダルクの声か!？」

間違いない、この声はダルクだ。

まさかここは・・・コイツが生まれる前の記憶だと言うのか!?

『・・・行け』

『・・・え?』

『・・・俺はお前が生まれればそれで良い。お前は俺の弟だ、そんな空をも見ずに死ぬなんて事はさせねえよ』

この2つの魂、これは・・・ダルクの兄と弟の魂なのか。

『イヤだよ、僕だけ生きるなんて・・・兄さんも一緒に』

『・・・バカ言え、俺はもうじき死ぬ運命にあるんだ。お前だけでも生きる』

『・・・でも』

『・・・安心しろ、俺は・・・つねにお前の側にいるから』

!!ここ・・・これは。

『だからさ・・・な』

みるみるうちに消えていく片方の魂。

そしてそれを吸収している魂。

完全に消えた片方の魂。

そして眩い輝きを取り戻した片方の魂。

これが・・・この兄ダルクの・・・心の闇か。

そう思うと、俺の視界は再び元に戻った。

「・・・どうした、そんな悲しい顔をして？」

ダルクがそう問いかけてきた。

「・・・ダルク・・・いや、兄の方のダルク」

「な・・・何故それを！！」

間違いない、コイツの心の闇は・・・。

「お前は・・・ずっと勘違いされていたんだな。生まれてすぐに記憶はリセットされると聞くが、まさか本当の話だとはな」

ダルクの独り言の原因、それは絶対にコイツが意識にいる事が原因だ。

コイツはずっと、弟を影から見守ってきた。

だからこそ言える、コイツはそれで苦しんだ。

「お前は怯えていたんだな、弟がいずれ真実に気づく事を、そして弟が自分を嫌う事を。そうなんだな」

「・・・っ、公栄遊画、何故知った。俺は・・・ずっとこの事を誰にも言わなかった」

「それも違う！！」

俺は、コイツの真意は分かっていた。

「この事を言わなかった訳ではない、誰にも言えなかったんだ。弟が更に虐めに合うのを恐れていたんだ。自分を犠牲にしてまでこの世に生まれさせた弟が虐めに合うのが許せなかったんだ、そうだろう、ダルク」

ダルクはまるで全てを見透かされたかのように、跪いた。

「俺は・・・俺は・・・怖かったのか、恐れていたのか。自分

の身を犠牲にしてまで生まれさせた弟が虐められていた事を知ったあの時から・・・俺は」

「お前らの過去に虐めがあっていたのはコイツから聞いた」

「・・・弟が？」

「だったら、俺がその辛かった気持ちを忘れさせてやる。もう俺とお前らは友達だ！」

「友達・・・」

ダルクはゆっくりと、俺に近づいた。

「俺達は・・・友達」

「そうだ、だからもう、あんな思いをしなくても良いんだ。お前はいつまでもコイツの側にいるだけで良いんだ。コイツが、少しでも安心できるようにな」

ダルクの顔が俺の顔に近づいた。

「・・・やっぱお前は・・・バカだな」

「んなつ、バカとは何だ、バカとは」

「・・・俺はお前に心を奪われた、もう友達では済ませられないレベルに・・・だから」

「ダルク・・・」

ダルクはゆっくりとではあるが、俺を押し倒していた。

「・・・もはや後悔は無い、この押さえられない気持ちを・・・お前に」

俺に抵抗は無かった。

元々から女性は苦手だった為、同性愛も悪くないな・・・そう、感じていた。

ダルクとの顔の距離が1m・・・そして・・・。

「・・・遊画、ダルクも何やってるの？」

ウィンによって引き離された。

「全く、心配して帰ってきたら・・・まさか同性愛に2人とも目覚めてしまったのですのね。女性が苦手だからですか？それとも、危ない恋をやりたかったからですか？」

「……まあ、それは前者に近い方かな……って待てお前ら、何をそんな目つきで睨んでいる!？」

鬼のような顔で俺を睨む2人……怖い。

「……つふふ、ふははは」

急にダルクが笑い出した。

「……楽しいんだな、お前らは」

だがしかし、俺は全然楽しく無いのだが……。

「……変な」

「気は……」

「「出すな!！」」

「ぎゃああああああああああああああああああ」

……なあ、弟よ。

『何ですか、兄さん?』

もう兄さんか、やめてくれ。

『そう言われましても、僕は兄さんと知ったからには兄さんと呼びますよ』

……。

『どうしましたか、兄さん』

……すまなかった、俺が本当の事を言えば……。

『何をそんな弱気な事を言っているんですか?』

……!!

『僕は別に問いただす気はありませんし、真実を知って少しホッとしましたから』

弟よ……。

『だから、これからも側にいてくれますか?』

……ああ、これからもずっと、お前の側にいる。

「俺は……」

『僕は……』

「『2人で1つの、兄弟だから』」
公栄遊画、お前は不思議なヤツだ。

お前に会えて良かったと、俺は思っている。
続く

次回予告

残り4日、その間にアウス、ライナ、エレナと心の闇を聞かなければならない。

だがしかし、ゆっくりとしている余裕など無い。

その日に・・・間に合うように！！

次回、遊 戯 W F a t e 第18話「アウスの事情」

「懐かしい・・・お母さんの温もり」

「辛いよな、そんな過去は」

第17話「闇の笑み、闇の悲しみ」（後書き）

あとがき

やっと書き終えた。

どうも、毎度お馴染みのR a g oです。

最近心理フェイズばかりで、結構大変です。

しかも妙に評価も無くなってきているし……これは本当にマズイ。

本気と書いてマジと呼ぶ並にマズイです。

さてと……次回はどうしようかな、今度の土曜日までに出来なければ、今度アップされるのは約3週間後です。

その間テスト勉強やらに追われる毎日だと思います。

さてさて次回もまた、心理フェイズです。

それと、前回の話は失敗作だと心から反省しております。

次回もまた、満足しようぜ

11月20日 自宅にて

最後に、ゴールドシリーズの予約が全くできねえZ E

第18話「アウスの事情」(前書き)

テスト期間

勉強間違え

大暴落

悲しい、切ねえ。

まさか今日のテストが被服だったとは・・・。
被服と調理を間違えて勉強したから、全然分かんなかった。
悲しき運命なり。

第18話「アウスの事情」

「お母さん、今日の晩ご飯は何？」

これは・・・子どもの頃の私？

「あらあらアウスちゃん、今日はお母さん特性のシチューよ」

「やったあ、お母さん、大好き」

「うふふ、元気なのね、アウスちゃんは」

そんな活発な子供時代の私。

この頃の私はまだ、あんな事になるなんて・・・予想もしなかつただろうね。

私は・・・・・・・・。。。

「・・・ウス、オイ、アウス」

体を揺らされ、目を覚ました。

ここは・・・遊画さんの部屋？

「そろそろ晩ご飯だぞ。仕事がつきつくて寝ていたのは分かるが、晩

ご飯の時はみんなと一緒に食べようと自分で言っていたじゃねーか」

その声は・・・・・・・・。

「お母さん？」

ウトウトした目で、遊画さんを見た。

「何を寝ぼけている？俺以外の誰だと言うんだ」

「・・・いけない、つい仕事が疲れてソファアの上で寝ていたんだ
った。

「全く、お前が一番年上らしいが、一番反応が子どもじゃねーか」

「・・・ほっといて下さい」

私はツーンとそっぽを向いた。

「す……スマン、悪気は無かったんだが……」

遊画さんは慌てて私に謝った。

その姿を見ると、まるで照れ隠しをする若い女性のようにも見える。可愛いな……遊画さんは。

「……つと、そろそろ晩ご飯だから、一緒に準備でもしようじやないか言おうと思っていたんだ。と言う事で、準備を手伝え、アウス」

遊画さんはそう言うと、颯爽と台所にある料理を机に並べていた。アレだけの量を……1人で。

「流石は遊画だな、私が見込んだ料理の腕だけはある」

「そう誉めるなよエレナ、お前だってお前の料理は美味いぞ。俺の方がまだ未熟だ」

そんなエレナさんと遊画さんの声が聞こえた。

「エレナさんと遊画さんが主に料理を作っていたんですね」

私は驚きを隠せなかった。

今日は仕事が早く終わったのでここにいるが、いつもなら夜の7時まで仕事があり帰ってくるのが10時になったりする。

仕事は疲れるけども楽しい。

私の日課はそんな感じだった。

「アウス、そこに皿を並べてくれ。そろそろエリアとワインが帰ってくる頃だと思うから」

そんな声と同時に「ただいまー(ですの)」「と聞こえた。

「お前ら、タイミングを見計らって入ってきたんじゃないだろうな」遊画さんが何故か呆れていた。

明日は仕事が休みだし、家でゆっくりと過ごす事にでもしましょうかね。

そう、私は思った。

デュエルとは何か、それは己自身の限界を相手とぶつけ合う決闘。

デュエルとは何か、それは相手との絆を深め、共に信じ合う心を生む為の決闘。

そして、デュエルとは何か、それは、偶然と信じる心が奇跡を生む決闘。

この物語は、そんな純粹で鈍感な心を持つ少年、公栄遊画とその仲間たちによる、熱く、激しい戦いによる絆で世界を救う、カードゲームラブコメディである！

第18話「アウスの事情」

次の日

あの日から3日が経過した。

残り4日か……。

その間に、ダルクの間を聞いた。

そして今日は……丁度アウスが休みであるためにアウスの間を聞く事にした。

「チャンスは今日1日だけか」

本当の年齢はすでに百を超えているが、母が付けた偽名、こんれい近霊 くろがね鉄
としての年齢は21歳である。

つまりは社会人であるため、いつもは仕事に出ていたりする。

なので、易々と会える奴では無い。

「今日を逃せば、しばらくはまた仕事か……」

今日が勝負だ、待っているアウス。

「とは言った物だが……」

当のアウスは現在買い物に出かけているらしい。

「女性の買い物は時間が掛かると聞いているからな……いつ帰ってくるやら」

今日という日に限って、たまの休みには自分の好きにやりたいと言

う事か。

まあ、それは仕方のない事だとは思ってはいる。

『はっはっは、随分と不機嫌そうだな』

「黙れトト、お前は一向俺が呆れる事に出てくるな」

全く、コイツは自由と言うのか何と言うのか、再び出てきてからマシな事は言わねえし、ってかそもそも。

「俺の中で鍵になっているんじゃないか？アレか、リドウとのデュエルでその鍵が破壊されたとしても言いたいのか？」
すると、トトは深いため息をついた。

『・・・いや、ちよいと厄介な事があつてな、今はまだ知る時じゃない』

何だ、何か隠しているようだが・・・。

『・・・遊画、お前は今は楽しいか？』

急に何を？

「・・・楽しくはないさ。俺はアイツ等を傷つけ、そして分かち合っている。だから俺は1度傷つけてからしか分かち合えない。そんな事で楽しいとは言えない」

『だがしかし、俺が見る範囲ではアイツ等は楽しんでる』

「・・・!？」

『お前は思い込みが激しいのかもな、周りには仲間がいるのにも関わらず、自分は孤独だと思っ思い込みが』

・・・! けど!

「何をどう受け取ってアイツ等が楽しいと感じている、俺は1度アイツ等の涙を見たりした。だから俺は・・・実際には嫌われている!!!」

『・・・だつたら聞くがどうして断言できる?』

そりゃ、決まっている。

「アイツ等は俺に話す時、必ず目を合わせない。それは信頼されていない印だ」

『・・・哀れだな、ウィン、エリア』

何故かトトは呆れていた。

『もしだ、それが恋心だったらお前はどつする？』

恋心……？

「まず無いが、もしもそうだったら……恐らく俺は、何も出来ないだろうな」

『と、言つと？』

「俺は恋と言う物が全然分からない、守りたいと思つた事は何度もあるが、人を好きになると言う感情が……全くないんだ」

『……あの実験による後遺症か』

トトは何かを呟いたが、よく聞き取れなかった。

『……ん、と言つ事は、ダルクが好意を持っていたら、お前はどつするつもりだ？』

ダルクが好意を持っていたら……。

「ダルクが好意を持ったとしたらねえ……」

俺は一瞬、ダルクの顔が頭に浮かんだ。

「そりゃあ……その場で戸惑うだろうな」

『断りはしないのか？』

「断りね……だつてだ」

「……だつて？」

「何ですか？」

「アイツは男だ、俺は女性が苦手だが、男ならば何となく……アレ、何だろ、視線が逆になつた上に体が急に宙に浮かんで……。

「げらぶー!!」

背負い投げとは……流石はウインだ。

などと言っているが、体が軋むように痛い。

「……床で……背負い投げをする……バカが……どこにいる」

「……ここにいる」

速急に答えた!?!もはやバカと自覚した!

「……でも、独り言でダルクの事を呟く方が最も危険だと思う」
「そうですね。2日前にアレだけ同性愛には目覚めるなと忠告したですのに、それを無視してそんな事を言っているなんて、覚悟は出来ているですね？」

マズイ、ウインとエリアの目が完全に黒い。

この黒さは普通の黒じゃない！恨みや憎たらしさを備えた、どす黒い黒だ！！

「そ……そうだ、俺は今からちよいと外に……」

「外は自分で危険と言っていないませんでしたっけ？」

「……この前、先生に外には出るなと言われているんじゃないか？」

2人して俺の腕を掴む。

あははは、イヤに力が入っていて腕が軋んでいる。

「すぐに終わるから、我慢しててね」

「……あつはははは、絶対に我慢できるかあああああああああああああ」

今日もまた、星を見るハメになりそうだ。

別にシンクロ召喚をする訳でもないのにな……。

そして1時間後

そこには、屍と化した俺の姿があった。

時刻は午前10時、そう言えば今日はデュエルモンスターの誕生日記念日と言う祝日だった事を忘れていた。

わざわざそんな祝日を設けるなんて、日本人は自由だな。

そんな事をかんがえながらも、俺はボロボロの体を起き上がらせた。

「いってって……アイツ等、絶対に手加減の手の字も知らないだろうな」

普段はモンスターだからか？

それでも酷い仕打ちだ。

「これじゃアイツ等にはしばらく彼氏とかは出来そうにないな」
有能すぎる妹を持つ兄の気持ちって、こんな感じだろうな。
実際に有能な義妹がいるが。

いや、有能すぎてもはや羨ましい義妹、公栄こうえい 加奈かながいるが……。
加奈のヤツ、今何をしているだろうな。

俺は兄として心配だ。

その時、急に携帯が鳴り始めた。

「何だ!？」

見ると、表示画面に『公栄加奈』と表示されていた。
噂を見ると、何とやらと言う事が。

俺は携帯のボタンを押し、着信モードにした。

「もしもし」

『もしもし、バカ兄』

初っぱなからバカ兄とは……。

「お前は年上を何だと思っている」

『知らないよバカ兄、それともお兄ちゃん とでも呼ばれたいの?』

「お前がそんな事を言うとは似合わない。もっとも、呼ばれたくもない」

『……ハア』

「何だその、やれやれ、これだから彼女も出来ないハズだよ……
"言いそうなため息は"

『これだからバカ兄は、いつまで経っても同姓にまで好かれないん
だよ』

「異性じゃ無くて、何で同姓なんだ!?そこはおかしいと俺でも思
うぞ!」

『ツツコミにしか頭が無いの、大バカ兄』

「更にランクアップ!?バカから大バカになった!」

『それで、馬の尻尾』

「もはや人じゃねえ!?確かに俺はポニーテールだが、何でそれが
呼び名になつてんだ!」

『知らないのバカ兄』

「何がだ？」

『世の中には、凡骨と呼ばれているデュエリストも存在すると言っていた』

「誰がだ！誰がそんな事を言った!？」

『えーつと、母さんが』

「母・・・お前は・・・義理の息子には冷たく、そして実の娘には優しいんだな。ってか、どれだけ俺を追い詰めれば気が済む！いい加減に俺は疲れた」

『・・・つぶ』

何だ、加奈のヤツ？

『あつははははははははははは・・・ゴメンゴメン。最近、兄さんと何にも話していなかったから、少し寂しかっただけだよ』

「・・・ははは、それでさっきまでの会話になったのか。相変わらず、思考能力が読めない義妹だぜ」

『だからゴメンと言っているでしょう。あー、可笑しかった』

母と言い加奈と言い、血が繋がっているのがよく分かるぜ。

「んで、お前は元気なのか？」

『うん、仕事の同僚からも「加奈ちゃん、今日も絶好調だね」って言われたばかり』

「天真爛漫な所は変わってもいないし、これからも変わる気は無いだろうな」

俺が呆れていた時、加奈はフツと少し笑った。

『切羽詰まっているとは思うけど、私は私で頑張るから、兄さんもアカデミアを頑張っつね』

加奈・・・お前。

「・・・分かったよ、俺は俺で頑張るから、加奈もアカデミアとモデルの仕事を頑張れよ」

『うん、それじゃあそろそろ仕事だから、私はそろそろ切るよ。じやあね兄さん』

「ああ、またな」

そしてスピーカーから『ツー、ツー、ツー、ツー』と聞こえたので、電話を切ると、俺は自分のデッキを取り出した。

『お、やる気になったな』

中からトトが茶化してきた。

「俺は俺の可能性を信じる。それが例えあと4日であろうとも、俺は諦めない」

『ヤレヤレ、妹パワーは凄いな』

何かトトが感心しているが、俺はあえて無視した。

「アウス、俺は全てを知っている訳じゃない。だからお前の過去を知りたい。仲間として、そして悲しみを分かり合う事が出来るヤツとして……だから……待っている、アウス」

夕方

「ただいまー」

買い物から帰ってきたアウスが買い物袋を持って、部屋に帰ってきた。

「おかえり、アウス」

俺はその重そうな荷物を持ってやった。

「あ……そこまで気を使わなくてもいいのに」

アウスは戸惑っていたが、女性にそんな大きな荷物を持たせたままにする俺では無い。

「大丈夫だ、これぐらいの荷物、普通に持てるからな」

そう言っつて、俺は荷物をリビングに持って行ってやった。

「あ……ありがとう」

アウスがボソリと呟いたが、聞こえなかった。

「やっぱり遊画さんって、性格は良いのに鈍感なのが傷だよな」

「それは一体どう言う意味かを教えてもらおうか？」

そこはハッキリと聞こえた。

「い……いいえ、何でもありません」

アウスは慌てて否定しているが、俺はハアとため息を付いた。

「……今、こんな事を聞きたくは無いが、アウス……お前は過去に一体何があった」

アウスはキョトンとした。

「え……えつと、それはどんな意味で……？」

「俺はお前を知りたい、ウインも知った、そしてエリアも知った、そしてヒータやダルクも。アウス、俺はお前の闇を知りたいんだ。お前が抱えている、心の闇を」

アウスはそれを聞いて、暗い顔になった。

「……そうですか、こんな日が来るんじゃないかな……と感じていましたが、それが今日なんですね」

「ああ、だから教えてくれ。お前の身に、何があったかを」

「それは出来ません」

「だろつな、だったら。」

「俺は何かきっかけを作る。また、あのビジョンを見る為に」

「ビジョン……話した覚えもないのに、何故か過去を知られたと言う……」

あのビジョンが一体何なのかは分からない。

だが、もうこれしか無い。

「何故そんな事が起きているのかは分かりませんが、私の闇は本当に深いですよ？それでも見るつもりですか？」

アウスは意地悪っぽい笑みを浮かべた。

「ああ、俺は見る義務があるんだ、俺がアイツ等によって自由を奪われているように……もはやこれはお前らの自由は効かないんだ」

「それはただの八つ当たりにしかな聞こえませんが……」
「やばっ、アウスが深いため息をしている。」

「……まあ、見れるかどうかはまだ分からないから、見れたら話しますよ」

フツとちよつとした笑みを浮かべ、アウスはリビングに行っは、

そこで何か魔術を唱え、穴が開き、その中に消えていった。
「……つたく、以外と頑固なんだな……アイツは」
そう思い、俺は台所に足を運んだ。

普通に料理をしている時だった。

『なあ、お前はこの行いに意味はあるのかと聞いていたな？』
包丁を入れている時に何を話すんだコイツは。

「言ったな、俺は別に関係ないとは思っているが」
トトは何かを思い返していた。

『……闇か』

そして再び意識に消えていった。

「何を言いたかったんだ、アイツは」

えーっと、ここで火を止めて、鍋のジャガイモを流しにお湯を捨てながら、流し台に置いてあるザルの中に流し込む。

「あっちうち、沸騰したお湯は熱いからな。気をつけなきゃ火傷するな」

そう言いながら、蛇口から水を流しながら熱いホカホカのジャガイモの皮を剥いていた。

「この作業は手を冷やしなげないと、火傷するから面倒くさいんだよな。それに、熱い内にやらないと、冷めて皮が剥けないからな」

あちい、あちい、つてつてー……。

「大きいな、これは……っち……ふう、やっと全ての皮を剥けた」

これではジャガイモを潰して……つて

「ウイン、何をやっている」

録音機を片手に、台所の隅に隠れていた。

「……いや、何となく面白そうな音声が録れているな思って」
何の声を録っている？

「……熱いと言っている遊画の声」

そんな声で本当に一体何をやるつもりだコイツは!?

「とにかくだウイン、何をしていないのなら少しは料理を見て習え・
……って、もういないし」

逃げ足は早いヤツだ。

「ったく、あとはこれを挽き肉と混ぜて……んん、なかなか固
くて混ぜらんぞ……」

手で混ぜながら、ようやく全てが混ぜった。

「あとは用意した卵黄と小麦を付けて、パン粉を満遍なくまぶして
つと。あとの工程は……」

目の前に油の入った鍋が用意してある。

ここはイヤなんだよな、油跳ねてたまに熱いし。

「ほお、今日の晩ご飯はコロッケか」

隣からエレナが顔を覗かせた。

「つてうおっ！急に顔を覗かせるなエレナ」

「いやー、スマンな、なにせコロッケは作った事がないから」

そうなのか？

「だったら、今度教えてやるよ。得意な料理は多い方が良いだろ」

エレナは意外そうな顔をした。

「良いのか？」

「安心しろ、別に俺が楽になると言う下心は全くない」

「そうか、だったら今度お願いするぞ」

エレナは上機嫌でこの場を去った。

「……アイツ等は本当に、良い笑顔をするな」

それに比べ俺なんて……。

「どうかしましたか、遊画さん？」

その声は……。

「アウスか」

「……むっ、何ですか、その少し残念そうな声は」

「つと、スマン。少し考え事をしていたから」

「考え事って、一体何を考えていたのですか？」

「・・・お前らが、ちよつと羨ましいなと言つ事だ」

俺はこれまでの笑顔を見て、そう思った。

「お前らは1人1人が闇を持っている。それでも笑っている、だが俺はどうだ。1つの事をいつまでも引きずって、さらに人をあまり信じられない体質になっている。だからあまり笑わないんだ、俺は・・・だから」

「いいえ、それは違うのです」

アウスの後ろから、誰かがそう言った。

「この声は・・・エリアか」

その声の主は、エリアであった。

「誰にでも心の闇があります。けれど私たちは貴方のおかげで笑えているのです」

それは一体・・・？

「貴方は鈍感で、鈍くて、けれど、人には好かれやすい人だと気づかないのですか」

それとこれと何の関係が・・・？

「貴方が側にいるから、私たちは笑えるのであって・・・貴方はいわば、太陽のような存在なのよ。貴方がいなければ私は笑えない・・・貴方がいたから、私は今笑える。人は、信じられる人がいるから・・・笑えるのです」

「・・・」

アウスはその言葉を聞いて、急に俯いた。

「だけどねエリアちゃん・・・例えどんなに信じていても・・・裏切られる時だってあるのよ」

「・・・アウス？」

「あの時だつてそう、私は・・・もう」

その時、右目にいつものように謎の瞳が現れた。

そしてその右目に、恐らくアウスの過去だと思えるような映像が・・・映った。

「ここは……」

大量の十字架が立ち並ぶ場所……まさか

「墓場か!!」

見ると、目の前で埋められていく1つの棺桶。

そして目線は、徐々に水が溢れ歪んで見えていた。

「水……これはアウスの涙」

彼女は何かを亡くして悲しんでいるのであろう。

『お母さん……お母さん……』

そんな声が聞こえる……。

埋められているこの棺桶の中には……コイツの母親なのか。

すると、周りから声が聞こえていた。

『事故ですって』

『あややだ、醜い死に方よね』

『何でも男に騙されて、借金を抱えてしまって……そのまま崖から転落してしまったらしいわよ』

『可哀想に……娘のアウスちゃん、何でも近所の方が引き取ってくれるらしいけど……その近所の人、何でも人身売買していると
言う噂があるわよ』

……!!

コイツはそんなヤツに引き取られたのか!

母親を失い、人身販売を行う輩に引き取られ……。

そしてビジョンは、また別の風景を映し出した。

『いやだ……いやだ……』

見ると、成長したであろうアウスの目線で、強引に引っ張られている状態であった。

『良いから来い、お前は今日から俺の奴隷となるんだ!!』

まさか……やらかしたのか……その人は。

『信じていたのに……私は自由にしてあげるって約束だったの

に……どうして』

奥に男らしき影があった。

その男は、ニヤリと笑い……ゲスな答えをかました。

『ん？そんな約束したかな。俺はただ、金が欲しいだけなんだよ。

世の中は金、それを手に入れる為には……例え約束だって破棄するぐらいの感情を持っているのが俺なんだよ』

……んのヤロー！！

金の欲しさに……人から引き取った女の子を……。

アウス……お前は俺を……いや、俺達を信用はしていなかったんだな。

無理もない、こんな過去があるのなら……酷く、最悪の男が関わっている過去を持つのなら……！！

アウスの手は放されず、だがアウスはその男の手を思いつ切り噛みついた。

『いてっ……んの小娘が』

アウスは急いで逃げていった。

相手が大人であろうとも、アウスは逃げていった。

『待て！！お前は売られたんだぞ。大人しくコイツに売られる！！』
聞けば聞く程ゲスな言葉に俺は吐き気を覚えた。

「売られたんだぞ？……違う！コイツは売られるようなヤツじや無い、コイツは……ただの女の子だ。」

うっかり言葉に出してしまった。

左目で見えているアウスの表情が固まったが、そんな事は気にしない。

いや、気にする必要は無い！

「健気で、時には可愛いところを見せてくれる……ただの女の子だ！！」

最後まで言ってしまった。

そしてそんな映像が、ここで途切れた。

「ゆう……が……さん？」

アウスはギクシャクした言葉を放っていた。

「遊画……アウスの過去を見てしまったのね」

エリアもまた、俺を見つめていた。

「アウス、お前は信じていなかったんだな……俺達を……売られそうになった過去を持っていたから……お前は、人を信じられなかった」

「……はい、私は12歳になった頃、引き取ってくれていたおじさんに売られようと思いました。「お前は売らない」とか言っていたにも関わらず……私は……」

「もう良いアウス！お前はそれが怖くて逃げたんだな」

「……はい、あの時、無理矢理連れていこうとした男は、自分の奴隷が逃げ出したと言う理由で私を買い取り、そしてあの時……おじさんはその男に殺されました」

「だろうな、大金を渡して逃げられたとなると……男も黙ってはもらえない。」

「アウス……だったらこれまで見せた笑顔は……全て作り笑顔だったと言う事か」

無意識にそんな事を言ってしまった。

「ち……違います！私は……作り笑顔はやっていません！！」

「……そんな過去があつて、誰が笑えると言うんだ？人から裏切られ、危うくウインと同じ目に合いそうになり、そんな過去があつて……誰が笑えるか！」

「……」

アウスとエリアは硬直した。

「だがそれでも笑えるとなると、それは多分、ウインやエリア、ダルクにヒータ達のおかげだろうな」

ずっと隣にいるエレナは、それを聞いて口を開いた。

「それは違う」

硬直していたアウスとエリアも、我に返った。

「・・・そうですね、これは私たちのおかげとはちょっと違うですわ。アウスが・・・強かったのですの」

「人は・・・悲しみを超えた者は強くなると言う事が・・・お前は確かに強い。こんな俺に比べたら・・・」

「遊画さん、自分を否定するのはやめなさい!!」
アウスが・・・叫んだ。

「自分を否定するのはやめなさい！貴方は私なんかよりもよっぽど強い人間です！その証拠に、今までダルクさんでさえも無視していたあの2人が、今では普通に会話している。真さんと同じで、いや、真さんよりもよっぽど人の心を理解している!!」
俺は気迫に押されていた。

「だから・・・もう、これ以上自分を追い詰めるのは・・・やめなさい!!」
大人しく、優しいアウスがここまで叫ぶとは・・・俺は何をしていたんだろうな。

「・・・遊画、そんな時は抱きしめるのですわ」
エリア、お前は一体何を言い出すんだ？

「こんな時は抱きしめるのが一番ですわ。貴方はそれでワインを落ち着かせた。だから・・・」

それを聞いて、とりあえずアウスに近づき・・・抱きしめた。
「え・・・？え・・・？」

アウスは戸惑っていたが、そんな事もお構いなしに力一杯、抱きしめた。

「この感触・・・似ている」
アウスが何かを語りだした。

「・・・お母さんと・・・同じ。懐かしい・・・お母さんの温もり」

優しく、そして暖かい・・・そんな感じだったんだろうか。

アウスの母親の温もりは。

「辛かったよな・・・そんな過去は。俺は騙しなんかはしない、絶対に・・・お前を苦しめるような騙しはしない。だから・・・俺を信じてくれるか？」

アウスの答えは思った以上に早かった。

「・・・はい、貴方の全てを信じる気はありませんが・・・それでも私は、私を苦しめない存在だと信じます」

「・・・俺が求めた答えだった。完全に信じなくて良い。」

ただ、ある程度信じられていればいいんだ。

コイツにだって怖い事だってある。

完全に信じた人がある日突然裏切るという事があったのだから。だから今は

「コイツの気が収まるまで、しばらく動けないな」
そんな事を、呟いた。

続く

次回予告

「ライナ・・・お前ってヤツは!!」

「ん？何か言った、童貞鈍感デユエリスト」

「毒舌妙に痛いからやめろおおおおおおおお」

次回、遊戯 王 Fate 第19話「光の代価」

「優秀すぎる人間は・・・その能力の高さがイヤになる・・・か」

第18話「アウスの事情」(後書き)

あとがき

テストです。

今現在テスト期間です。

ちよつとこれをアップしていなかったのでアップしました……。

あと1話……あと1話でやつとデュエルパートが書ける。

ああ、被服がまさか調理と勘違いして勉強していたとはな……満
足できねえZE。

と言う事で、次回は1週間後に書き始めます。

これでやつと、ストレスから解放される。

そんな訳で次回、みんな大好きライナちゃんの登場です。

え？何でみんな大好きかつて？

そりゃ……アニメでみんな大好き、トリシューラ号が海に沈ん
だからだ。

それでは次回も、また見て下さい。

……手が凍えるように冷たい。

12月2日 自宅にて

第19話「光の代価」(前書き)

以外と暗くなってしまった。

うん、一応題材はカードゲームです。

訂正、間違えて2話先のキーカードになっていましたので、訂正しました。

第19話「光の代価」

「公栄 遊画・・・お前は一体何者だ」

深夜に遊画の部屋に訪れた私の最初の言葉だった。

「何だエレナ・・・俺は恐ろしく眠いんだ。そんな夜中に訪れてくる意味が・・・」

エレナは顔を近づけた。

「え・・・エレナさん？」

数センチ手前にはエレナの唇が・・・。

一歩間違えれば・・・恐ろしい事に！

「お前は本当に知らないんだな、その瞳の事を」

瞳・・・？

「過去が見える・・・この瞳の事か？」

右目にちよつとした違和感が伝わったが、もうこれは慣れた。

「・・・ルーンの瞳、聖界の三極神が持つ者のみにしか現れないこの瞳を・・・遊画、何故お前が」

「原因は知らないが、恐らく俺がカードを所持しているからだとは思っ」

そう、あの日・・・謎の少女から渡された、『神』のカードを・・・。

「カード・・・極神皇トール、極神皇ロキ、極神聖帝オーディン・・・その他に考えられる・・・ルーンの瞳の可能性がある・・・神のカード」

エレナは考え出した。

その間俺は、このカードについて考え出した。

このカードは一体誰が作ったのか。

そして・・・あの少女が言った、フォーチュン・シャングリラと一体・・・何なんだ。

その時「あった」と叫び声が聞こえた。

「あつたぞ、伝説にしかない……第4の極神が……」
第4の……極神？

「もしそれが本当なら、お前は恐ろしいヤツだ」

エレナは何を言っている！？

「北欧の三極神を持つ者の上に行く……運命の三姉妹を持つデユエルストであるのなら……人の過去をも読み取れるのもおかしくない話だ」

デュエルとは何か、それは己自身の限界を相手とぶつけ合う決闘。
デュエルとは何か、それは相手との絆を深め、共に信じ合う心を生む為の決闘。

そして、デュエルとは何か、それは、偶然と信じる心が奇跡を生む決闘。

この物語は、そんな純粹で鈍感な心を持つ少年、公栄遊画とその仲間たちによる、熱く、激しい戦いによる絆で世界を救う、カードゲームラブコメディである！

第19話「光の代償」

朝

「ふぁー……夜中に起こされたからやっぱり眠い」

結局1時間ちよつとエレナの質問に答え続けていた。

今日までアカデミアは有休を取っているが、明日からは行かなければならない。

「あとはエレナとライナか……頑張るしかないな」

そう思い、とりあえず先にシャワーを浴びる事にした。

「~~~~~」
鼻歌で歌を歌いながら、暖かいお湯を浴びていた。

「目は覚めないが、今日もやる気が出てきた」

「気しかないんだな、この変髪」

「そうか、俺はこの髪型を気に入っている……ん!?」

誰!!そして何処から!!

そんな疑問と共に、背中からムニツと言う感触がした。

「あ……あはははははははは」

まさかこの感触は……。

「どうしたの、このヘタレ」

抱きつかれている!?

しかも……何でスク水何だ!!

しかもこの感触……間に絶対ビーチボールを挟んでいる。

何だこの異様な光景、もはや鏡に映っている光景が、裸で後ろに抱きつくような状態で小さめのビーチボールを俺の背中に引っ付けている状態だぞ!

「それと誰だお前、この光景をウインやエリアに見られたら、俺の命が風前の灯火となる!」

この歳でまだ死にたくない。

まだ俺はやる事が……。

『速報でござやる。すぐにウイン殿に知らせなければごじやる』

何か恐ろしい言葉が聞こえたような……。

「これで共犯者だね、キモ顔になってるそのバカ」

「あ……あははははは、諦めよう。どうせなら……で……遺書を書きたかった」

最近、女性の間では男子を虐めるのが流行なのか!?

そんな事を思うも、後ろから取り押さえられ、そのまま間接技を決められたのでやめる事にした。

「俺の存在意義って……何だろうな。トト、俺は一体何のために生きている？」

最近ウインやエリアが俺に対して暴力的となっている。

これは……過去を聞いたのが原因か？

『と言うよりは、ただ単に遊画に変な虫が寄ってこないようにしているだけだとは思うが……』
変な虫？

「俺自身が虫野郎とでも言いたいのか？」

『そうではないが……お前はもしかしたら、俺以上に鈍感なのかもな』

何の事だ？俺は鈍感な性格では無いとは思うが……。

「……いや、貴方は普通に鈍感だと思う」

いつの間にかウインが俺の隣にいた。

「気配を消して俺の横に来る上に思考を読み取るとは……お前は一体何者だ」

『まあ、ウインやエリアのように好きと言えなくて……』

ウインはすぐに俺の顔1センチ手前まで顔を近づけた。

「……トト、恐らく貴方が言おうと思っている事、言ったら殺すわよ」

『……ウイン、お前は超能力者か？それとも感が強いだけか』

と言うよりは、昨日のエレナと同じような状況となっている。

数センチ顔を動かせば……。

「キスでもできるとでも思っているの？バカなお兄ちゃん」

ライナ、お前はいつからそこにいる！？

「ライナ……お前って言うヤツは……人を小馬鹿にするような事を言っな！！」

「ん、何か言った？童貞鈍感デユエリスト」

「その言葉……その毒舌……妙に心に刺さるから、そして凄く痛いからやめろおおおおおおおお」

絶叫だった。

もはや俺は存在意義を失いそうになっていた。

『相変わらずだな・・・ライナの毒舌を超えた嫌がらせは』

トトもまた、何故か感心していた。

「トト・・・感心してないでどうにかしてくれ」

『そんな事言ってもな、コイツの言葉は滝のごとく、始まったらすぐには止まらない』

最悪だ・・・。

「バーカ、バーカ、アンポンタンの痴漢野郎」

ただ俺は、聞こえてくる言葉を受け流しては聞き入れて、鬱になるのくり返しだった。

流石に2時間もすれば飽きたらしく、すぐにどこかへ行きやがった。

「んのヤロウ・・・言葉の攻撃とは・・・やってくれんじやねーか」

危うくライフポイントが0になる所だった。

バーンか、アイツの攻撃は全てバーンなのか!?

「ライナ・・・確かに恐ろしい子やな」

「ん、ヒータ、今日はアカデミア大学部は無いのか?」

「今日は3時限からや、やからまだ家にいても大丈夫って事や」

なるほど、大学部の仕組みが良く分からないが・・・まだ家にはいると言う事か。

「ここは日本文化を強く取り入れている地区だからな、それも日本の昔からの伝統なんだろうな」

「ネオ童実野シティなんかは外国文化も取り入れとるからな、ほんで・・・朝っぱらからギタギタにやられとったな、ホンマアレはウチでもキツイと思うで」

心理攻撃、そして俺の欠点ばかりを言うバーン攻撃・・・。

「はああああああああ」

「えらい深いため息をついたな。それ程辛かったんか」

それはもう……言葉では繰り返したくない言葉ばかりでした。

「……ウチも昔、ようやられておったな」

ヒータは何かしみじみと言っていた。

「お前も被害者だったんだな」

「そうや、ウチもあのアホから……伊勢関西人とか、よう言われよった」

不純にも俺もそれは思った。

「今さつき、失礼な事思わへんかったか？」

「いいえ、何も思っておりません」

そう言いながらも、きっちり襟を捕まっていた。

「ほんならええけど」

一度霊使いに関して調べた方が良さそうだ。

一部では「霊使いは大人しく、優しい」と言われているが……現実とは違うぞとも言いたい。

実際には……本能的に暴れ、優しくない。むしろ暴行的だと！

『まあ一応モンスターだからな』

そんなツツコミは気にせず、話を続けた。

「お前も大変だったな」

「……やけど」

何だ、急に深刻な顔になって。

「ライナの話で……1つだけ毒を吐かない話があるんや」

毒を吐かない話……それってまさか。

「ライナの過去と関係ある事じゃ」

「多分そうや、ライナの話で……頭の良さだけは絶対にかわへんのや」

頭の良さが……。

「バカとか言っていたが、アレは頭が悪いと言う意味じゃないとすると、何かあるな」

まさかとは思うが……ライナは頭が悪いのか。

そう思い、とりあえずそれを確かめる為に、大量の教科書を用意した。

「ライナ、この式は分かるか？」

「ABPと直線CRにメネラウスの定理を用いると……。BC分のCP・PO分のOA・AR分のRB \parallel 1……。(1)」
うん、非常に良い頭ではあるな。

「じゃあ遊画、APCと直線BQにメネラウスの定理を用いると？」

「PB分のBC・CQ分のQA・AO分のOP \parallel 1……。(2)だな」

流石にそれは分かる。

「ふーん、バカな見た目とは大違いに勉強はできるんだね」

「バカとは何だバカとは！！」
恐らくだが、コイツはあの連中の中では一番頭が良い。

だがしかし、何でコイツは……。

「人の顔をジツと見るなんて、私に興味を持ったのかな？」

「い……。別に無い」

「ふーん……。それなら良いけどな」

そう言っているライナの顔は少しにやけていた。

クツ……。腹立たしいが、可愛い。

『公栄遊画、ライナに興味を持った模様でござる。すぐにウイン殿に報せなきやいけないでござる』

「待て、さつきから恐ろしい事ばかり呟いているその忍者、お前は誰だ」

堂々と俺の後ろにいるが……。俺のように途中から髪の色が緑からオレンジになった髪に忍者の格好に杖を持ち、胸がないこの女性は誰の差し金だ！？

『申し遅れました、拙者はウイン殿の幼なじみであり、同時に遊画

殿が変な行動をすればすぐにウイン殿に知らせる役割を英子殿から任されている、リーズ・スフィアードと申すでござる」

呆気なく秘密をバラして良いのかと思ったが、バラされなければ何も知らずに地獄を見るハメとなる所だった。

「って母からか!」

『そうでござる。英子殿からウインの役に立ちなさいと言われて、ウイン殿が喜ぶ事を英子殿に聞いたら、遊画殿の監視をすれば良いと申されておりましたので』

母よ・・・どんだけ息子を追い詰めれば気が済むんだ。

「へー、じゃあ私が遊画にイヤらしい事をすれば、遊画はウインにボッコボコとやられるんだね」

これは・・・やな予感が。

「さて遊画、保健のテストでもしようか」

何でこのタイミングで保健のテストなんだ!?

『遊画殿がライナ殿と保健のテストをしようとしているでござる・・・と。任せたでござるぞ、スクレイ』

リスみたいなモンスターに手紙を食わえさせ、それを外に放した。

「待てリーズ、お前は俺がどうなっても良いのか!」

するとリーズは、ハッキリと・・・こう言った。

『拙者は、ウイン殿が喜べばそれで良いでござる』

「俺の都合はどこにある!」

『安心せいでござる、遊画殿の都合は、ウイン殿と英子殿の次に考えているでござるので』

全く持って安心できねえ。

そう思った刹那、スクレイが窓からピヨコンと戻ってきた。

『早かったでござるなスクレイ、ウイン殿は一体何と?』

すると、スクレイは食わえている手紙をリーズに渡した。

『うむうむ、帰ってくるまで遊画殿を逃がさないようにとござるか』
.....

『何処へ逃げる気でござるか遊画殿?ウイン殿からは絶対に逃げら

れないでござるよ』

「分かつてらあ！だがな、逃げたい時には意地でも逃げたい時だつてあるんだよ！」

まさに俺は、絶体絶命の境地に立たされている気分だ。

だったら、その境地を超えてやる！

「諦めな、どうせボコボコにされるんだから」

お前は黙っている、ライナ。

「ってか、元々はお前のせいだろうがライナ」

「うるさいやーい、このおバカの無駄に頭が……！！！」

ライナは急に頭を抱えた。

「っ……っ……っ……」

「どうしたんだ、ライナ！」

明らかにこれは本能的に拒絶している！

どういう事だ！？

「……何でもない、今の事は忘れて」

そう言つて、ライナは何処かへと立ち去つていった。

「……トト、ライナのあんな姿を見た事があるか？」

『いや……俺でもあんな行動は初めて見る』

やはりな、何か、自分で言つた言葉で自爆しているのは見て分かる。

だが……彼女が何で無駄に頭がと言つた瞬間、まるで恐怖に怯

えるような仕草をしたのか。

それにしても

「俺の事を無駄に頭が良いと言おうとしたのか……待てよ」

確かヒータの話では……

「ライナの話で……1つだけ毒を吐かない話があるんや」

毒を吐かない話……それってまさか。

「ライナの過去と関係ある事じゃ」

「多分そうや、ライナの話で……頭の良さだけは絶対にからかわへんのや」

遊画に……ダルク!!

「やはり、話を聞く必要があるなライナ、過去に……どんな事を教えられたのかを」

他人を見下す事により、より自分を強く見せる生き方をした……そんなふざけた生き方、絶対に間違っている。

「他人を見下しても、何も自分は強くなる。それ所か、より自分を弱く見せている」

そうだ、人は見下しても決して弱くはならない。

その行為は、自分を弱くしているだけだ。

「ライナさん、自分は正しいと思っっている事だけが正しい訳じゃ無いです。貴方は一体何を教えられたのですか？僕はそれが不思議でしょうがありません」

ダルクを呼んだのは、光の心を聞くには闇の心もあった方がいいかなと思っただからだ。

「………つるさい」

ライナは顔を下に向けたまま、そう答えた。

「五月蠅い、黙れ、この最小権力のクス共が！」

「……!!」

「私は知っている、人の心の悪を。私はそれに従って生きているだけだ。私は、そんな生き方を間違っただけだ。ライナの顔の眉間にしわが寄っていた。」

もう、いろいろな意味で怖いな……今のコイツは。だが、負ける訳にはいかないな。

「それが間違っただけだ！何が人を見下すだ、そんな事やって、自分も悲しいだけだろ!!」

「私は悲しくない！それが正しいと思っっているから」

「思っっているんじゃない？それは間違っっている!!それに何で正しいと言っ切れていない!？」

「っ……」

「お前も気づいているだろ！こんな考えは間違っていると、だから断言出来ないんだ」

「……だつたら何が正しいの？」

「……やっぱりコイツ。」

「だつたら何が正しい生き方なの！？こんな生き方しか知らない私に……教えてよ。他者を蹴落としてまで上に行こうとした私に……どんな生き方があるって言うのよ！」

俺はその時、考えさせられた。

正しい生き方、それは一体何だろうな。

目の前には泣き崩れたライナ、そして横には心配そうに様子を見ているダルク。

考えるんだ俺！何か良い答えがあるはずだ。

「……無いのね」

！！

「貴方には正しい生き方は無いのね。そうよね、だつて人はただ、自分よりも上の人間を超えようと卑怯な手を使うような生き物ですもん」

しまった！！このままでは……。

「貴方みたいなバカには分からないでしょうね、一度、他者からどんな底まで落とされかけた恐怖を」

開き直つた上に……性格まで。

クッ……コイツの過去に何があつたんだ。

知りたい……俺は知りたい。

コイツを……救いたいんだ。

俺は……バカでもいい。

バカはバカなりに……やれる事だつてあるはずだ！！

『……貴方はやっぱり、ある意味危険な人です』

「！！！」

空耳か……？

その瞬間、俺の右目に再び映像が映し出された。
ライナの心の闇ともなった……元凶が。

今回は見てきた映像とはちよつと違った。

俺自身が宙に浮いている？

そして、俺の下には……野原か。

そしてアレは……当時のライナか。

しかし様子がおかしい、何だ、目の前の女性4人組は。

『……どうして』

『どうしてって、何がよ』

『どうして私を騙したの！私は貴方達を信用して、アイツを死へと陥れた。でも実際は、アイツの方が正しかったじゃない』

死へと陥れた！これは一体。

『そりゃ、簡単よ。貴方とアイツがうざかったからよ』

！！

『アイツは私たちが何をやらかすのかを知っていた。そして貴方はそんなに頭が良いから、私たちにとって邪魔なだけだったからよ。』

貴方が頭が良かったのは幸いだったわ、おかげで、無駄に手を血で染めなくて済んだ訳だし、貴方には殺人と言う名の枷が積まれた訳だもの。優等生が一瞬にして、ただの殺人犯になった訳だし、もう用済みね、さつさと目の前から消えて』

な……何て奴らだ。

アイツがうざかった？

そしてライナを使って人を殺させただと！

ふざけるな、人を物みたいに扱いやがって……。

怒りで俺は我を忘れていた。

そして気づいた時には、ライナ1人だけだった。

『……そうよね、他者を使って人を蹴り落とすのが人として正

しい生き方なのよね。私はただ、間違った事を教えられていただけなんだよね」

急にコイツは何を。

「だったら……アイツ等に教えてあげる。私の……復讐を」
その時のライナの顔は……恐ろしく怖かった。

そして、映像が移り変わり、場所はどこかの建物の中となった。

「ゆ……許して。ホラ、私たち……仲間だったじゃない」

さっきの女4人組が怯えた様子で座っていた。

いや、アレは腰を抜かしているだけか。

「……誰が許す物ですか。私は苦しんだよ、人として何かを失ったよ。痛かったよ、心がもの凄く、だからね、私は知ったんだよ、人を見下して、蹴落とすのが……正しい生き方だよ」

ライナは笑っていた。

怯える4人を見下し、あざ笑うかのように。

「知っているでしょう、ここはアイツが自殺した場所、アイツはこの建物から飛び降りて……死んだの」

恐ろしい、まさかコイツは……殺したヤツの自殺場所まで4人を誘導したのか。

恐ろしい頭だ。

「ひ……ひい」

「さあ、死んで」

その時、ライナの笑い声しか聞こえなかった。

4人がどうなったかと言うのは、俺は知らない方が良いと思った。

「優秀すぎる人間は……その能力の高さがイヤになる……か」
それもそうだ、自分が優秀すぎたせいで……人を死へと追いやったんだ。

そしてここで、映像が途切れた。

「……他者から蹴り落とされた恐怖か」

その答えを知った俺には、どうする事も出来ない恐怖だ。

「ただ自分は良いように利用され、人を死へと追い込んでしまったのは、確かに恐怖を感じるだろうな」

「……!!んな……」

ライナは絶句していた。

「ただ自分は知らなかった、でも利用された。だから分かった、人を蹴落としてまでも、優秀になりたいと思ったと」

「っ……っ……」

「それであんな生き方しか知らないとなるのは分かる。確かにそんな生き方しか出来ないと思っても仕方がない事だ。だがな」

ライナを、見下すようにして言い放った。

「そんな考えは間違っている。そんな生き方をすれば、いずれ自分がどん底に突き落とされるハメになる。何である時アイツ等の事を信じた」

「……私に……優しくしたから」

「優しくしただけで人を信じるな。自分を分かってくれる人こそが、最も信じる価値があるんじゃないのか」

「……私は」

「優秀だからこそ、そこは気付け、お前は……本当のバカじゃねーか」

「!!!……う……うわああああああ」

急に立ち上がり、俺をはり倒した。

「っ……」

そして、ベランダへと走っていた。

「私は……私は……もう、生きる価値すら無い……
・ただの殺人犯……もうこんな枷なんかいらぬ。もう、こんな枷ごと……私は」

窓を開けベランダへと行き、そして取っ手をよじ登ろうとした……
・その時。

「やめるライナ!!!」

俺は思いつ切り、ライナを引っ張り、2人同時に後ろに倒れた。しかもよりによって、ライナの胸を触ったまま状態で。

「放して……んあ、放して」

俺だってこんな所を触ったままの状態なんてイヤだ。

「だが放せば、お前は死のうとする。だから絶対に放さない」

「放して……アイツと同じように……死んでやるしか」

「いい加減にしろ！」

そんな叫び声が聞こえた。

「ダルク……？」

このダルクは……兄のダルクか。

「……アンタは何を勘違いしている」

「……え？」

「……アイツと同じように死んでやる？バカを言うな、お前は
その分生きる」

「……私はその分、生きる？」

「……人を事故で失わせたのなら、お前はその分生きる。それが、
アンタの正しい生き方だ」

ダルク……。

お前はやっぱり。

「……それが……私にとっての正しい生き方。でも……
出来るかな」

「そこは安心しろ」

「……遊画」

「俺達が側にいる。アイツ等のように、お前を利用なんかしない。
まあ、あんな事があればそんな事を信じるのは無理かもしれないが、
だがお前が信じなくても、俺達が信じさせてやる」

「……っ……っ……っ……っ……私にも……
……居場所が出来たのね……」

ライナは涙を流していた。

俺は静かに手を放すと、ライナを起きあがらせた。

「これからも宜しくな、ライナ」
小さくだが、コクンとうなずいた。

私に居場所が出来てしまった。

トト以来、私に居場所が出来てしまった。

悔しいけど、何だか嬉しい。

そしてその横では。

「……ライナに何をした」

「場合によつては、始末する必要があるですわね」

ウィンとエリアが遊画に問いつめていた。

「ライナ、お願いだから俺の無実を照明してくれ!!」

遊画からのお願ひ……。

……でもいつか。

「遊画は私の胸を触った」

その瞬間、遊画は何処かへと連れて行かれた。

私は遊画を信じている訳では無い。

でも、少しぐらいなら信じてても良いかな……とも思った。

ただし、面白いから遊画に対してだけは毒舌や嫌がらせをやめないようにしようとも思った。

次回予告

「死神の力を得て、我らは世界の神となる」

「ふざけるな、そんな事、俺が阻止してやる」

「だったら面白い、ただの人間が、選ばれし人間に勝てると思
うな!!」

次回、遊 戯 王Fate 第20話「人類支配計画」

「決着を付けよう、公栄遊画！」

次回のキーカード

英雄士ヘラ・戦士族・ATK900・地・2・チューナー

第19話「光の代価」（後書き）

あとがき

どうも、声が異様に変で有名な Raago です。

やっと心理フェイズ編は終了です。

次回からはまともなデュエルを書いていきます。

オリジナルのカードやオリジナルのキャラクターも出てくるこの作品。

皆さまがどう思っているのかが気になって仕方ないと言つのもあります。

どうか感想の方もよろしくお願いします。

それでは次回、とうとう始まる戦い。

死神のカードの正体とは。

どうか次回もよろしくお願いします。

次回も・・・デュエル！！

12月12日 自宅にて

第20話「人類支配計画」(前書き)

肩こりが激しい、肩が痛い。

どうでも良いが。

そして、前回ミスって書いたキーカード、結局キーカード枠には入らなかった。悲しき運命なり・・・。

第20話「人類支配計画」

「……なあ、エレナ」

再びエレナに問いつめた。

「五月蠅いぞ、私は言う気は無いと言っているだろ！」

「そうは言ってもな、俺はお前を知りたいんだ。お前が一体どんな事で苦しんでいるかを」

そんな感じで説得しているが、何も効果は得られない。

当たり前か、多分コイツが……一番何かに苦しんでいるであろう。

「どんな事で苦しんでいるか？そんな負扱けた事を言うな!!」
怒鳴られた、不純に怒鳴られた。

だが、ここで引き下がる俺ではない！

「エレナ、お前は俺を信じていないのか！」

「違う!!」

エレナの叫びに俺は少し引き下がった。

「な……何が違うと……」

「私は……信じられる事が嫌いなんだ。自分で発案しておいて言うのも何だが……私を信じるのはやめろ！」

この答え……エレナは何を言っているんだ？

「エレナ……」

「もう良い、私は寝る！」

そう言つて、エレナは前方に現れた輪の中に入り、消えていった。

「信じられるのが嫌い……お前は絆を知らないのか」

絆があるこそ、人は信じられる。

彼女は多分、絆を失ったんだと思う。

人の過去に存在する闇は深い。

だからこそ、俺は助けなければならぬ。

頼まれたから？違う！

「もはやこの事は……絆を強くする為だ！」

俺は前まで、絆と言うのを知らなかった。
でも今はどうだ。絆があるから、遊星と分かり合えた……あの仲間と分かり合えた。

そして……アイツ等と分かり合えた。

「……明日か」

明日が、あの日から1週間後となる。

何が起きようとも、俺は絶対に逃げない。

「そうさ、この町を……世界を救うために」

俺は自分の部屋に戻り何故か夜空を見ていた。

デュエルとは何か、それは己自身の限界を相手とぶつけ合う決闘。

デュエルとは何か、それは相手との絆を深め、共に信じ合う心を生む為の決闘。

そして、デュエルとは何か、それは、偶然と信じる心が奇跡を生む決闘。

この物語は、そんな純粹で鈍感な心を持つ少年、公栄遊画とその仲間たちによる、熱く、激しい戦いによる絆で世界を救う、カードゲームラブコメディである！

第20話「人類支配計画」

その日、俺は1週間ぶりにアカデミアへと登校した。

1週間もアカデミアに来なかったんだ。

そりゃ周りのみんなが心配してくれていた。

「遊画くん、大丈夫だった？」

「遊画くん、貴方がいなかったから、クラスのみんなが心配していたよ」

など、女子ばかりが俺の側に集まっていた。

「……」

妙にウインの目線が刺さりまくっているが、これは後で覚悟をしなきゃな。

キーン、コーン、カーン、コーン

相変わらず、このアカデミアは日本の学校のようなチャイムで知らせてくれる。

ドアが開き、そこから俺達の担任、新和が現れた。

「はい、みんな席に着け。今からホームルームを行うぞ。特にその問題児、お前が欠席していたおかげで、他の教師からイヤな目線がガンガン飛んでくるんだが。勘弁してくれよな。俺だって好きで休ませている訳じゃねーのにな」

いきなり愚痴とは・・・この教師、やる。

「新和、お前とは1度対等に話し合う必要があると見た」

「・・・遊画、先生を呼び捨てで言うのはあまり良くない」

ウイン、キサマはアイツの味方をするのか！

「まあ、冗談はほつといてだ。皆よく聞け」

急に新和の態度が一変した。

「今日は騒がしい1日になると予測される。どっかのバカ共が世界征服をして、そして正義の味方が戦う並に騒がしくなるとな」

「先生、例えばそのままじゃないのでしょうか？」

さりげない沙耶のツッコミである。

「まあな、だが奴らは本当に強い」

その意味を理解するには数秒とかならなかつた。

しかし、クラスの連中はそれを理解するのに数十秒かかった。

「え・・・どういう意味？」

「本当に・・・そんな漫画みたいな事が」

「うそ・・・」

など、様々な言葉が言われた。

「遊画、お前は特に奴らから目を付けられている。何にせリドウを負かしたデュエリストとして、すぐに狙われるだろうな。だから言わせて貰おう」

新和は俺を見つめ、口を開いた。

「今のままでは……お前は負ける」

予想はしていたが、その現実からは目を逸らす事は出来ないであろう。

「……分かってている……分かってるさ！だがな、俺だって奴らには負けたくない！俺は守りたい奴らがいる。だからこそ、俺は絆を信じて、全力で立ち向かう！！」

クラスの女子が「きゃー」と黄色い悲鳴を上げた。

「遊画くん格好いい」

「ステキ、こんな彼氏が欲しい」

「面倒くさい」

途中で何か聞こえたが、無視しよう。

「……はあ、そんな甘い考えでよくぞまあここに来れたな」

「俺は昔までは絆を知らなかったから。だからこそ、今その意味を本格的に知りたいんだ！！これは俺自身の為に……そして、みんなの為に」

その一言は、以外にもウインに突き刺さったらしい。

「……じゃあ、貴方は私が助けを求めたら、助けに来てくれるの？」

そんな事、考える事もない。

そう思い、俺はウインの方を見て、言い放った。

「その時はお前を助け出すさ。俺達は絆で結ばれた仲間だろ」

「……まだ、仲間なんだね」

ウインはその言葉を聞いて何かを呟いた。

「……貴方は」

「……？」

「……貴方は、もしも私が、仲間以上の存在になりたいと言ったら……もし、私は貴方の事を……」

その瞬間、外で謎の爆発が起こった。

「なに！！！」

クラスが騒ぎ出した。

何事だと言う声と、逃げたいと言う声が聞こえていた。

その時、教室のドアが開いた。

そこには、人の形をした、トレーニング用のデュエルロボが大量に教室に押し寄せていた。

「これは！！デュエルロボ」

無数のデュエルロボが、ゆっくりとだが、デュエルモードへと変換していた。

『デュエル』 『デュエル』 『デュエル』 『デュエル』 『デュエル』

『デュエル』 『デュエル』

それにつられ、俺達はデュエルデスクを腕に装着した。

「クツ・・・やるしか無いのか」

そして、無数のデュエルロボを相手にデュエルを・・・かと思っただが、先に動いた人物がいた。

「・・・つたく、ウチの生徒に手を出そうぞ、そんなマネをさせてたまるか」

その人物は、腕にすでにデュエルディスクを到着し、まるで今までの態度を一変させているかのようになり、鋭い目つきをしていた。

「一気に来いよ。俺がまとめて相手になつてやるからよ！！」

無茶だ！こんな数十台のデュエルロボを相手に・・・。

『デュエル！！』 『SinwaVSDuel
robotx20 LP4000』

『ワタシノターン』

『ワタシノターン』 『ワタシノターン』

『キャノン・ストーカーヲ守備表示ダ』 『キャノン・ストーカー・機

械族・DEF1000・地・3・効果』

『キャノン・ストーカーヲ守備表示ダ』 『キャノン・ストーカー・機

その時、大量のキャノン・ストーカーが召喚された。

『カードヲ2枚伏セターンエンドダ』

『カードヲ2枚伏セターンエンドダ』 『カードヲ2枚伏セターンエンドダ』

異様だ。ハツキリ言って異様だ。

だが、キャノン・ストーカーには効果がある。

相手のエンドフェイズ時に、相手に500ポイントのダメージを与える効果が。

それを喰らえば、例え相手も新和でもどうにもならない。

どうするんだ、新和。

「見ている遊画」

「！！何で俺を。」

「これが、最強のデュエルと・・・」

「言う物だ！」

「！！そ・・・その声は。」

急に外から再び爆発音が聞こえた。

何が起こっている・・・。

すると、煙の向こうから、1人の男が現れた。

その男は、1年の教室に窓を突き破り入ってきた。

「んな・・・。」

その男こそ、俺の父親である元プロデュエリスト、公栄^{こうえい} 真^{まこと}である。

「・・・テメエ、俺のセリフを持っていきやがって！」

「フン、キサマのセリフなどすでに聞き飽きた。あの時の決着でも付けたい所だが」

流石に目の前の現実からは目をそらせないだろうな。

「1人で20機を相手か・・・緩いな。俺は倍の40機を相手にする！！」

父さんも、デュエルディスクを展開させた。Sin LP400

0

「意地を張りやがって・・・。だったら俺はその倍の80機を撃墜してやらあ」

2人は、同時にカードをドロウした。

「俺のターン」

「被るな！！」

何と言うか……子どもかお前らは!!

「チィ、どうも調子が上がらねえな」

「こっちのセリフだ」

「……だつたら見せてやろうじゃねーか。俺の本気をな」

「良いだろ、まずはお前から行け」

「上等だコラ、ここ全てのデュエルロボを撃破してやるぜ。俺は魔法カード、侍の弔い合戦を発動!! 相手フィールド上に存在する全てのモンスターの表示形式を変更する。侍の弔い合戦・魔法・効果、相手フィールド上に存在する全てのモンスターの表示形式を変更する。その後、手札からレベル4以下の戦士族モンスター1体を特殊召喚する事ができる。全てのモンスターを変更!」

「クツ……。ハキャノン・ストーカー・DEF1000 AT KO」

「そしてその後、手札からレベル4以下のモンスター1体を特殊召喚! 来い、英雄士デメテル。英雄士デメテル・戦士族・ATK1900・地・4・効果。さらにデメテルの効果発動! このモンスターが特殊召喚に成功した時、デッキから英雄士メストラを特殊召喚!! デッキより現れよ、英雄士メストラ。英雄士メストラ・戦士族・DEF1400・地・4・効果。すげえ……。状況を一気に覆した。」

だが、キャノン・ストーカーの数はまだ減っていない。これをどうするか……。

「さらにチューナーモンスター、英雄士ヘラを攻撃表示で召喚。英雄士ヘラ・戦士族・ATK1000・地・2・チューナー。レベル10の……シンクロをするつもりか!!」

「さらにヘラの効果発動、フィールド上に英雄が2体以上存在する時、このモンスターが召喚に成功した場合、相手のセットしてある魔法、罠カードを全てを手札に戻す」

「ンナ……。」

デュエルロボが伏せていた全てのカードが消え、相手の手札に戻っ

た。

「レベル4の英雄士デメテルと、レベル4の英雄士メストラに、レベル2の英雄士ヘラをチューニング 4 + 4 + 2 = 10」
やはり・・・レベル10。

「ギリシヤに伝わりし聖なる神よ、今ここに神々の王となりて、この世界を支配せよ!!」

ヘラの周りが透明となり、その中から2つの星が現れ、そしてその星が巨大な輪を作った。

そして、2体のモンスターも透明となり、中の星がその輪に目掛けて飛んでいった。

「シンクロ召喚!!最高神、英雄神王ゼウス!!」

現れたモンスターは、外に現れた。

いや、あまりに巨大すぎて、建物に入り切れていないだけだ。

なんだ、この威圧は。

「見たか真、これが俺の第1の神、英雄神王ゼウスだ。英雄神王ゼウス・幻神獣族・ATK3600・神・10・シンクロ、効果」
英雄・・・神王ゼウス。

新和が持つ・・・最強の戦士。

こんなモンスターを1ターンで出すとは・・・コイツは何者だ。
「行くぜ、英雄神王ゼウスで、全てのキャノン・スナイパーを攻撃!!」

「全てに!?!」

「ゼウスの効果は、相手フィールド上に存在するモンスターに攻撃ができる効果と、破壊されても墓地から特殊召喚される効果がある!!」

んな・・・それじゃあ、このモンスターは・・・。

「ある意味・・・完全無欠の・・・モンスター」

「ライトニング・スピリット!!!」

ゼウスの手に、雷型の雷霆が現れ、そしてそれが解き放たれた。

雷が分離し、フィールド上に存在していた全てのキャノン・ストー

カーが全滅した。

そしてそれと同時に、新和は速攻魔法まで発動していた。

「速攻魔法、突進を発動し、攻撃力を700ポイントアップへ突進・表側表示モンスターの攻撃力を、ターン終了時まで700ポイントアップする」へ英雄神王ゼウス・ATK3600 4300」

おお、何とも懐かしいカードを。

そう考えたが、一瞬にして、その考えが消え失せた。

相手のライフを全て削る攻撃力、そして目の前には……敗北した、大量のデュエルロボが……。

『グ……グガガガガガガ』へLP4000 0」

煙を出し、そして電源が切れるデュエルロボ。

これが……新和 千字のデュエル……。

「どうだ、これでもまだバカに出来るか、ああ？」

「……甘い」

んな……それでも父さんは甘いだと。

「俺のプレイを見せてやろう。まだまだデュエルロボはあるらしいしな」

見ると、動かなくなったデュエルロボを押しつけ、新たなデュエルロボが現れた。

『デュエルダ』 『デュエルダ』 『デュエルダ』 『デュエルダ』

まだこんなにたくさん……。

「フン、どうせまた……」

『ワタシノターン』

『『『『『ワタシノターン』』』』』

『キャノン・ストーカーヲ守備表示ダへキャノン・ストーカー・機

械族・DEF1000・地・3・効果』

『『『『『キャノン・ストーカーヲ守備表示ダ』』』』』

再び、大量のキャノン・ストーカーが召喚された。

『カードヲ2ライフセターエンドダ』

『『『『『カードヲ2枚伏セターエンドダ』』』』』

「同じようなプレイしかしらないんだろうな。流石は機械だ。命令通りにしか動かないのが主らしいな。だが、そんな事で、この俺は倒せん!!」

父さんは、再びデッキからカードを1枚ドロウした。

「俺のターン、どうせまた、このターンのエンドフェイズまで全てを倒さなければ、一気にダメージを喰らうようだな。だが、甘い」
父さんの手札は7枚、これをどう乗り切るか？

「手札から魔法カード、錬金術の失敗品を発動。手札の魔法使い族1枚をコストに、お互いの場の全ての守備表示モンスターを破壊し、その後、攻撃力0の、戦闘では破壊されない錬成トークン1体を相手の場に攻撃表示で特殊召喚。錬金術の失敗品・速攻魔法・効果、手札の魔法使い族モンスター1体を捨てて発動する。お互いのフィールド上に存在する守備表示モンスター全てを破壊する。その後「錬成トークン」（悪魔族・闇・星4・攻/守0）を、破壊した数だけ攻撃表示で特殊召喚する。このトークンは戦闘では破壊されない。この効果により破壊されたモンスターは、このターンのエンドフェイズ時に墓地より特殊召喚される。その効果により、お前等の場のモンスターは全て錬成トークンと化す」

場に存在していたキャノン・ストーカーは全て破壊され、変わりにその場には、変なモンスターが存在していた。

『バカナ・・・・・。錬成トークン・悪魔族・ATK0・闇・4・トークン』

ただ、このターンの内に勝負を決めなければ、どっちみち父さんは負ける。

「行くぜ、手札よりナイト・レイ・マジシャンを攻撃表示で召喚。ナイト・レイ・マジシャン・魔法使い族・ATK1300・闇・4・チューナー。そしてこのモンスターの召喚時、墓地に存在するレベル4以下の魔法使い族モンスター1体を、効果を無効にし特殊召喚できる!!来い、混沌の術者。混沌の術者・魔法使い族・ATK1500・闇・4・効果。レベル4の混沌の術者にレベル4の

ナイト・レイ・マジシャンをチューニング 4 + 4 = 8
父さんも・・・シンクロ使い！

「魔法術、シンクロ発動！リリースレベルフォープラスフォー、形成、同調率110%、覚醒せよ、レベルエイト！！」

父さんの声に伴い、星が集まり、そして徐々に魔法陣を作り始めた。
「シンクロ召喚！！降臨だ、ヘル・デスロック・マジシャン」
現れたモンスターは、黒いマントを着たモンスターであった。

禍々しいと言えども、何かそれがまた怪しげな声を上げ、奇妙なモンスターであった。

「これが・・・俺の使う僕だへヘル・デスロック・マジシャン・魔法使い族・ATK3000・闇・8・シンクロ、効果」
つて、攻撃力が高っ！！

ウソだろ、この攻撃力は・・・ジャックのレッド・デーモンズ・ドラゴンや、海佐のクオンタム・ドラゴンに値するぞ。

「そして、拡散する波動、続けてハリケーンを発動！！拡散する波動の効果により、ライフを1000払い、俺の場の魔法使い族モンスター1体は、全てのモンスターに攻撃できるへ拡散する波動・魔法・効果、1000ポイントを払う。自分フィールド上に存在するレベル7以上の魔法使い族モンスター1体を選択する。このターン、選択したモンスターのみが攻撃可能となり、相手モンスター全てに1回ずつ攻撃する。この効果で破壊された効果モンスターの効果は発動しない」続いて、ハリケーンの効果により、フィールド上に存在する全ての魔法、罫は手札に戻るへハリケーン・魔法・効果、フィールド上に存在する魔法、罫カードを全て持ち主の手札に戻す」
これが・・・父さんのプレイング。

最強じゃないか・・・。

1ターンで・・・これだけの引きがあるなんて。

「更にシンクロ素材とされた混沌の術者の効果により、このモンスターをシンクロ素材とした魔法使い族モンスターは、魔法カードが使用されるたびに、そのターンのエンドフェイズまで1枚につき5

00ポイントアップする」

とすると・・・4000の攻撃力!!

「攻撃力を4000へヘル・デスロック・マジシャン・ATK3000 4000」そしてバトル、ヘル・デスロック・マジシャンで、錬成トークンへの攻撃!!ヘル・マジックバスター!」

無論、拡散する波動の効果もあり、放たれた波動が、分裂して相手を襲った。

『グググ・・・ダガソノ瞬間、手札ノストーン・ストーンノ効果ヲ発動。コノモンスターヲ手札カラ墓地ヘト送り、コノターン受ケル戦闘ダメージヲ0ニスル』

それはマズイ!!

これでは、このターン中には決着が・・・。

「あ、言い忘れていたが、ヘル・デスロック・マジシャンには、自分のバトルフェイズ終了時まで相手は手札からカードを捨てる効果を発動出来ない効果もある。つまり、お前は手札からモンスターを墓地へは送れない」

無論、そのまま全ての攻撃が通り、相手は全滅した。

『グ・・・グガガガガガガ』LP40000
すげえ、何だかセコイ気もするが・・・それでもすげえ。

「どうだ新和、これが俺のプレイだ」

「へっ、何がプレイだ。俺はライフを維持したまま相手を全滅へと追い込んだ。テメエはライフを1000失ったじゃねーか」

「・・・言わせておけば・・・だったら言うが、お前が破壊したモンスターの数は、俺の破壊した数よりも少ないぞ。何にせ俺は、これで合計190機を撃破した」

「あんだ等は子どもか!!」

低レベル過ぎる・・・父さんと新和は一体何の関係があるんだ!?

「・・・つと、久しぶりだな遊画、大きくなったな」

急に父親らしい振る舞いを見せた父さん。

何だろうな……急に照れる。

「……まあ、子どもじゃないから……な」

こう言った事には慣れてないからな……。

「……遊画？」

気づくと、近くにウインが駆け寄っていた。

「っと、俺の役目はここまでだ。さあ行け遊画、俺はコイツと決着を付ける」

「上等じゃねーか、その面泣き目にさせてやる」

そう言つて、2人は何処かへと走つて、消えていった。

クラスのみんなは「……」と、2人の恐ろしいプレイングと、さつきまでの行動に呆気だった。

まあ、誰でもあんな姿だと、驚くし、呆れるだろうな。

「……行こう遊画、まだあのロボはいるだろうし、それを操作しているヤツを止めれば、被害が少なくて済むハズ」

ウインの言う通りだ。

俺はすぐに走り出した。

駐輪場まで走ると、そこにはフルがいた。

「フル、お前何を!？」

俺の顔を見る也、フルはフツと笑った。

「そりゃ決まつてんだろ。お前と一緒に戦うだけだ」

戦う！フルは何を……。

「俺は薄々感づいてはいたが、これも運命なのかもな」

そう言つと、フルは手の甲を俺に見せた。

そして、その手の甲が……光り出した。

何かの紋章が浮かび上がり……。

「これは!?!」

「見ての通りだ。俺も……とある呪いを受けたデュエリストだ」とある……呪い？

「正式には、高性能の呪いかな。人類が進歩するたびに俺の家はその呪いを受け続けた」

高性能の・・・呪い。

「別に生命に影響する呪いじゃねえ。ただ、感じるんだ。物を雑に扱うと、その物の声が聞こえる程度の・・・呪いさ」

「それって、俺のこれと同じ」

そう言つて、俺は手の甲と目をフルに見せた。

「！！お・・・お前・・・」

フルは何故か驚いていた。

「魔女の呪いに・・・ウルズのルーン」

フルは一体何処まで知っているんだ？

「・・・そうか、古文書による中心の存在の正体がな・・・まさかお前だとはな」

「その意味を俺は知りたい」

フルは、その問いに対して、笑っていた。

「あつははははは、ダメだ。お前はまだ知る時ではない・・・と、それは冗談だ。俺でも中心の存在の意味は分かっていない。だが」
再び、目力が入った。

「俺はお前を支える存在だ。だから一緒に行かせてもらうぞ。公栄
遊画」

・・・フル。

「分かった、付いてこいフル。俺達の力で、奴らを倒そう」

「そうは行くか」

「！！！！」

そ・・・その声は。

急いで自分のD・ホイールに跨り、そしてその声の主を見た。
そこには、2度の攻防戦を繰り返した、リドウの姿があった。

「リドウ・・・キサマが原因か！」

「そうだ、少なくとも俺を倒さない限り、この周辺のデュエル口ボ
は停止しない」

んだと・・・。

「そこでだ、これまでの屈辱を晴らす為に・・・デュエルと行く」

うじゃねーか、なあ、公栄遊画」

っ………良いだろう。」

「その勝負、受けて立つ」

「強がりな、俺は死神の力を得ているんだぞ。死神の力を得て、我らは世界の神となる」

神だど………。」

「ふざけるな、そんな事、俺が阻止してやる」

「だったら面白い、ただの人間が、選ばれし人間に勝てると思
うなー！」

「だったら見せてやる。ただの人間の強さを！」

D・ホイールのモニターが表示され、全ての計器に異常が無いのを
瞬時に確認すると、ハンドルに設置されてあるボタンを押し、そし
て一気に加速した。

「『フィールド魔法、スピード・ワールド2、セット、オン！』」

『デュエルモード、オン。オートパイロット・スタンバイ』

「いや、今回はマニュアルモードだ」

再び、別のボタンを押しした。

『オートパイロットモード、オフ。マニュアルモードへと移行しま
す』

電子音と共に、自分でD・ホイールを操作する、マニュアルモード
へと変更された。

そして、レーンへの近道が道路から出て、一気にデュエルレーンへ
と走った。

「遊画、気をつける。相手は恐ろしい力を秘めている」
分かっている。

「ライディングデュエル」

「アクセラレーション」 Y u g a V S R i d o u L P 4 0 0 0 }

最初から俺は全力だった。

あのコーナーを曲がれば、先行は貰える。

「………だったら先行は譲ってやるよ」

リドウが減速をした。

何だ、やけに大人しく下がったぞ。

そう思いながらも、俺は先行のまま、レーンを走りきった。

「俺のターン、手札からランス・フェクターを守備表示で召喚へランス・フェクター・機械族・DEF1700・闇・4・効果ㇿカードを2枚伏せてターンエンド」

「俺のターン」

Yuga・Spcl・LP4000

Ridou・Spcl・LP4000

「ドロー！俺はコザツキーを守備表示で特殊召喚へコザツキー・悪魔族・DEF400・闇・1・通常ㇿ」
なに！！特殊召喚だと。

「手札のワン・ドックの効果により、このカードを手札から墓地へ送る事により、手札のレベル1モンスターを特殊召喚できる」
クツ・・・先手を取られた。

コイツの場合、コザツキーを召喚されたらその瞬間、連鎖コンボが発動する。

「安心しろ、これで終わりじゃない」

「だったら安心できねえな」

大体の予測は付いた。

何らかの方法で、前みたいなモンスターを展開させてくるだろうな。

「俺は、コザツキーをリリースし、手札のダークチューナー、悪魔の契約者をアドバンス召喚へDT・悪魔の契約者・悪魔族・ATK0・闇・8・ダークチューナーㇿ」
んな・・・。

「レベル8のモンスターを、モンスター1体で召喚したぞ！！」

「このモンスターは、レベル1のモンスター1体をリリースする事により、手札からアドバンス召喚できるモンスターだ」

だが、攻撃力は0、それじゃあ何故・・・。

「さらに、ワン・ドックの効果により、このカードをゲームから除

外し、墓地よりレベル1モンスター1体を特殊召喚できる」
速攻で・・・それにダークチューナー。

「黄泉より蘇れ、コザツキー、コザツキー・悪魔族・DEF400・闇・1・通常」

この流れ・・・まさか!!

「ダークシンクロ!!」

確か邪心ウインダールの話では、冥府を操る力が無いと・・・使えないハズじゃ。

「そうさ、死神のカードにはな、冥府を操る程度の力があつたんだよ」

なに!!!

「俺はレベル1のコザツキーにレベル8のダークチューナー、悪魔の契約者をダークチューニング」

悪魔の契約者が透明となり、その中から大量の星が離れていき、コザツキーの体にのめり込んだ。

『ぐふ、ぐふふふふふ』

コザツキーは苦しんでいるが、どこか快感を得ているような感じでもあつた。

「遊画・・・って、何じゃありゃ!？」

フルもようやく追いついたが、目の前の異様な光景に啞然としていた。

「生け贄に捧げられし極悪なる研究員よ、悪魔となりて、暗黒より姿を現せ!!」

そして、コザツキーの中の星が全て消え、黒い星が輪を作った。

「ダークシンクロ!!今こそ地獄を見せろ、デビル・コザツキー、デビル・コザツキー・悪魔族・ATK2700・闇・7・ダークシンクロ、効果」

「んな・・・」

たった1ターンで・・・ダークシンクロ。

現れたモンスターも、コザツキーが巨大化し、更に背中から悪魔の

第20話「人類支配計画」（後書き）

あとがき

はあ……鬱だ。

こんにちは、いや、今はこんばんはです。

こんばんは、今日も疲れました。

そろそろ5D、sが終わりますね。

そして次に、かつとピングなデュエリスト、九十九 遊馬が主人公の新たなる遊戯王、遊戯 WZEXALが放送開始のようですね。これはテンションが上がってきた。

東京が変な行動起こさない限り、俺のテンションは満足に足している。

不満足にさせんじゃねーぞ、東京。

ここで文句は言えないが、少なくともバカなマネだけはすんじゃねーぞ。

いや、すでにバカなマネはしたか。

……まあ、東京オワタな。

愚かなマネをしてくれたモンだ。

では次回、1週間以内に会えたらまた会いましょう。

次回も、かつとピング!!!

12月18日 自宅にて

遊 戯 王 F a t e ラジオ小説その5 (前書き)

人気投票ランキングなんて物は……無かった。

遊 戯 王Fate ラジオ小説その5

遊画「第20話を過ぎた時点で来るかと警戒していた今回のラジオ小説」

ウィン「……予想は大当たり」

遊画「大体、あの方法はおかしいだろ！何で……」

流れ……遊画「んでさー、そんな感じなんだよな」友達「マジでか、遊画」その瞬間、後ろに気配が 遊画「来るか！！」 必死の抵抗、友達「……じゃあ、俺は行くな」遊画「行くな！！」

英子「召喚、ワッパー・ドラゴン」 遊画「卑怯な！！」 英子「じゃあ、惑星からの物体Aで……」 遊画「ぎゃあ……だが、だんだんと気持ちよく……なる……か」 英子「だったら破壊輪で……」 遊画「それは……ふああ……やめ……ろ……」
で、気づいたらここに。

エリア「触角プレイとは……見てみたかったですの！」

遊画「お前は一体何を期待している！！おかげで体はベタベタ、危うく目覚める所だったぞ！！」

ウィン「……そのまま目覚めれば良かったのに」

遊画「お前らは何をやるうとした、特にウィン、手に持っているその危ない物をこっちに寄せせ！！」

エリア「女性から物を取り上げるなんて……最低ですの」

遊画「俺の自由は！？」

ウィン「……さて、放送開始」

遊画「いきなりか！！まあ、始まってしまった物は仕方がない。どうも、今回も始まりました、遊戯王Fate ラジオ小説第5弾」

エリア「今回も豪華な流れでお送りしますですの」

ウィン「……さて、まずは、人気投票ランキングから」

(BGM一時的にストップ)

遊画「……」

ウィン「……………」

エリア「……………」

遊画「……………無かった事で」

ウィン&エリア「異議なし!!」

(BGM再び)

遊画「では、気を取り直して、次のコーナー」

ウィン「……………ゲストへの質問をやる、質問コーナー」

エリア「このコーナーでは、特別ゲストを迎え、どしどし私たちが質問するコーナーです」

遊画「新しいコーナーだな、で、記念の第1回は誰が？」

エリア「それでは、遊戯王5D'sよりお越し下さいました、永遠の絆を信じる男、不動遊星です」

遊画「待てコラ」

奥から遊星登場。

(BGM、Yusei's Theme)

遊星「ここは一体？」

遊画「遊星……………お前も犠牲者なんだな」

遊星「遊画！久しぶりだな」

遊画「ああ、お前も相変わらずだな」

遊星「ところで、ここは一体何処なんだ？さっきまでジャックがムダ使いしているのをクロウが見つけて、それで口論になっているのを目撃して、俺が止めに入ろうと思ったら、突然ワッパー・ドラゴンに挟まれて、気づいたらここに」

遊画「ほとんど俺と同じ状況か!!つてか、ジャック、アンタは何やってんだ!何処で生き方を間違えた!？」

ウィン「……………あの……………そろそろ再会を」

遊星「あ……………ああ、すまない。ところで、ここはラジオ局のような感じがするんだが」

遊画「当たりだ。ここはラジオ放送局だ、そして今は強制的に……………」

「

ウィン&エリア「アタック」(遊画の腹に2人同時にパンチ)
遊画「ぐあっ!!」

遊画、意識不明

遊星「・・・遊画？」

エリア「遊星さん、今はゲストへの質問タイムとなっておりますので、私たちがどしどし質問するので、お答えしていただければ良いだけです」

遊星「そうか、ならば俺に対する質問を言ってくれ」

ウィン「・・・遊星さんにとって、スターダスト・ドラゴンはどうなモンスターですか？」

遊星「俺にとつてスターダストは、かけがえのない、大切なパートナーだ。ピンチの時は、いつでも側にいてくれた、そして一緒にピンチを救ってくれた、大切な仲間でもある」

ウィン&エリア「・・・かつこいい」

遊画「・・・はっ、俺は何を」

ウィン「・・・ねえ遊画、貴方にとって、私たちはどんな存在？」

遊画「いきなり何を!？」

エリア「それは私も知りたいですわね」

遊星「まあ、気軽に答えた方が良いと思う」

遊画「何でゲストが質問する位置にいるんだ!!まあ、それは一歩譲っても良いとして・・・俺にとってのお前らの存在か・・・大切な存在だろうな」

ウィン&エリア「!!」

遊画「デッキに入っている事での意味でも大切な存在だし、クラスメイトと先輩と言う意味でも大切な人だし、そして何よりも・・・姉と妹と言う意味でも大切な存在だ」

ウィン「・・・家では妹扱い」

エリア「家では姉扱い・・・」

遊画「何故だ、何でお前らは落ち込んでいる？」

遊星「さあな、何か不安な事でもあったのか？」

ウィン＆エリア「似た者同士……」

遊星＆遊画「え？」

ウィン「……コホン、さて、次に行く」

エリア「続いての質問、アキさんとはいつ結婚するのですか？」

遊星「アキとの結婚の話はしていない。それにその質問だとまるで俺に興味がないアキにまで迷惑が及ぶ。だから答えない」

遊画「だろうな、噂だけでそんな質問はあまり本人もいい気にはならないしな」

ウィン＆エリア「やっぱり似た者同士」

遊画「だから何の話だー！」

エリア「あとでアキさんに呼ばれても知らないですよ、遊星さん」

遊星「……？」

ウィン「……ダメだこりゃ」

遊画「お前らは一体何の話をしているんだ？」

エリア「……つと、それでは次に行くのです。その髪型はどうなってそうなっているのですか？」

遊星「自然にこうなっている。別に手を加えている訳ではない」

エリア「それでも異様ですわね」

遊星「……え？」

エリア「何でも無いですわ」

ウィン「……次でラスト」

遊星「以外と早かったな、だが、俺はどんな質問にも答えて見せる」

遊画「じゃあ、俺から言わせてもらっぜ。アニメでは現在、アーケクレイドル内部にいるお前だが、不安じゃ

無いのか？」

遊星「……」

遊画「お前は死ぬと宣告され、それでも戦いに行くお前のその意思は、どんな物なんだ」

遊星「……それは、未来を変える希望だ」

遊画「未来を変える……希望？」

遊星「そうだ、どんな運命だろうとも、人はそれを変える事ができる。決して過去は変える事はできない。だが、俺達がいる限り、そんな破滅の運命なんかは訪れさせはしない。俺達は、チーム5D'sは、絆で繋がっているんだ。だからこそ、みんなが一丸となれば、未来を変えられる！」

遊画「・・・そう答えるだろうと思ったよ」

遊星「遊画？」

遊画「だってよ、チームサティスファクションでチームの絆を覚えてお前に、WRGPなんかで負ける事は絶対に無いと分かっていたんだぜ。鬼柳の事は残念だったが、最後まで鬼柳を捨てなかつたお前が、仲間を、町の奴らを見捨てる事なんて絶対に出来ないとも分かっていた。つまり俺は、お前の事を全てお見通しして事だ」

遊星「・・・ああ、俺もお前の事を良く知っている。1週間と言う短い付き合いの中で見つけたお前との絆、1度繋がった絆は、どんな強力な刃物でも、決して千切れる事のない糸となる。遊画、俺は信じている。お前が死神を倒し、そして平和を取り戻すと」

遊画「とは言っても、あの話、ダークシグナー事件から2ヶ月しか経っていないんだけどな」

遊星「そうなのか？」

遊画「一応、作者曰く、遊星達がWRGPに向けて準備をしている時の裏話と言っているからな」

遊星「そうか、だが今の状況から見て言わせてもらおう」

ウイン「・・・ダークシンク口が出て、遊星は何を感じた？」

遊星「まさかダークシグナーの他にダークシンク口をしてくるヤツがいるとは思わなかつた。遊画、ダークシンク口は危険なシンク口だ。待てよ、ちょっと疑問に思う事がある」

エリア「疑問？」

遊星「本来、マイナス回転のモーメントが近くに存在してこそダークシンク口の真の効果が発揮する。あの周辺にはマイナス回転をするモーメントは存在しないはずだ。なのに何故？」

遊画「そうなのか？だが遊星、細かい事を気にしていたら埒が明かなくなるぞ」

遊星「そうだった、だが一応忠告はしておく。無理に破壊しようとするな。ダークシンクロモンスターは無理に破壊しようなら、とんでもないどんでん返しを喰らう事となる」

遊画「忠告ありがとう、遊星。お前はお前で死ぬなよ。アーククレイドルは腐っても神の居城とも言われている。あの建物自体からモイヤな予感がプンプンしかない」

遊星「ああ、俺は自分が死ぬ運命を変えてみせる。中にいるとされるZONEを倒し、ネオ童実野シテイを破滅から救ってやる」

遊画「その活きだ遊星、それじゃあな、お前も大変だろうから、無理をせずに頑張れよ」

遊星「ああ、また会う時まで」

遊星退場

(それと同時にBGM変更)

ウイン「……ちなみに、どうしてアーククレイドルの中にいる遊星がここにいると言うツツコミは無しで」

遊画「流石に空気を読んでツツコむ奴らはいないだろうな」

エリア「それでは、次のコーナー」

遊画「何だろうな、久しぶりに充実した気がする」

エリア「毎度お馴染み、シンクロ召喚台詞コーナー」

遊画「今回は16話から20話までか」

ウイン「……それでは、どうぞ」

「レベル4の英雄士デメテルと、レベル4の英雄士メストラに、レベル2の英雄士ヘラをチューニング 4 + 4 + 2 = 10」
やはり……レベル10。

「ギリシアに伝わりし聖なる神よ、今ここに神々の王となりて、この世界を支配せよ!!!」

ヘラの周りが透明となり、その中から2つの星が現れ、そしてその

星が巨大な輪を作った。

そして、2体のモンスターも透明となり、中の星がその輪に目掛けて飛んでいった。

「シンクロ召喚！！最高神、英雄神王ゼウス！！」

遊画「新和が使った恐ろしいモンスター……」

ウイン「……英雄神王ゼウス」

エリア「攻撃力が3600と、恐ろしい力を秘めた最上級神属性モンスター」

ウイン「……言わば、極神シリーズと同列にある、ギリシャのシンクロモンスター」

遊画「だが、何故そんなカードを新和が」

エリア「そんな事は今は知らない方がマシと思うですわ」

ウイン「……じゃあ、次に」

「行くぜ、手札よりナイト・レイ・マジシャンを攻撃表示で召喚へ
ナイト・レイ・マジシャン・魔法使い族・ATK1300・闇・

4・チューナー」そしてこのモンスターの召喚時、墓地に存在する
レベル4以下の魔法使い族モンスター1体を、効果を無効にし特殊
召喚できる！！来い、混沌の術者へ混沌の術者・魔法使い族・AT
K1500・闇・4・効果」レベル4の混沌の術者にレベル4の
ナイト・レイ・マジシャンをチューニング 4 + 4 = 8」

父さんも……シンクロ使い！

「魔法術、シンクロ発動！リリースレベルフォープラスフォー、形
成、同調率110%、覚醒せよ、レベルエイト！！」

父さんの声に伴い、星が集まり、そして徐々に魔法陣を作り始めた。

「シンクロ召喚！！降臨だ、ヘル・デスロック・マジシャン」

遊画「流石は父さん、言い方が面倒くさい言い方だ」

エリア「でも、魔法使いって感じで良いですわ」

ウィン「……同じく」

遊画「お前らな……俺の時だけ批判するつもりか!？」

ウィン&エリア「うん」

遊画「相変わらずひでえなオイ、お前らにとって俺は何なんだ」

ウィン「……え……えっと……恋人^{ボソリ}」

エリア「そ……その……好きって言つか……なんと言うか(ボソリ)」

遊画「何で赤くなって顔を逸らしているんだお前ら？」

ウィン&エリア「き……聞こえた？」

遊画「いや……別に」

ウィン&エリア「……」

遊画「な……何だ、その目は」

ウィン「……聞こえていなかったのは良かったけど、何だかムカツク」

エリア「そうですね、これは女性の感情を弄ぶような感じがするのです」

遊画「誰だ、そんな女性の感情を弄ぶヤツは……」

ウィン&エリア「お前だああああああああああ」

同時にアッパー

遊画「グベバア」

その場に倒れ込む遊画

ウィン「……遊画のバカ」

エリア「……いい男なのに……もったいない」

ウィン「……つと、そろそろ時間だ」

(BGM変更)

エリア「本当ですわ。そろそろお別れの時間ですわ」

遊画「……勝手に……進めるな」

エリア「あら、もう復活したのですの？」

遊画「誰かさんのおかげでな、耐久力が付いてしまった」

ウィン「……誰だろうね、一体」

遊画「俺の目の前にいるお前らだ……」
ウイン&エリア「「じ

「
遊画「調子に乗ってスイマセンでした」

エリア「分かれば」

ウイン「……良し」

遊画「お前ら本当に仲が良いんだな!!」

ウイン「それでは、お別れです」

エリア「それでは、また来週」

遊画「会おうぜ」

終わり

その後

ウイン「……さて、久しぶりに2人でデュエルしようエリア」

エリア「良いですわよ、何でまた」

遊画「おっ、デュエルか。俺は見学させてもらうよ」

ウイン「……勝った方は、明日1日中遊画とデートが出来る」

エリア「やるですわ!!」

遊画「俺の権利は!？」

ウイン&エリア「「権利、何それ?」」

遊画「あーもう、そんな事を言わなくても、デートぐらい2人まとめて連れて行ってやるから、俺の自由を村長させてくれ!」

ウイン&エリア「「!!」」

遊画「何だ、2人まとめて?」

ウイン「……約束だよ」

エリア「絶対に連れていくですわよ。破ったら承知しないですわ」

何故か2人とも顔を赤くして、俺に問いかけた。

……やっぱり俺には信頼が無いらしいな。

ちっとも俺の事を信じていないし。

……だが安心しろ。

遊画「誰が破るかよ、2人とも俺にとって……大切な女性だからな」

俺の事を最も心配してくれる、数少ない女性は、多分コイツ等だけだろうな。

信じてはいないが、心配はしてくれる。

そんな、隠れた所に優しい所がある、女性だからな、コイツ等は。

ウィン「あ……っ……貴方は……本物のバカだわ」

エリア「っ……っ……っ……さりげなく……

心が苦しい。ドキドキが……止まらない」

急にウィンとエリアが俺に抱きついてきた。

遊画「うおっ、何だ一体!？」

ウィン「……絶対に離さない」

エリア「さっきの言葉、責任を持ちなさいですの」

全く、とことん甘えん坊な奴らだな。

まあ、しばらくはこれで良いか。

別に悪い気はしないし……何だか地雷を爆発させた気はしたが、でも……。

遊画「明日のデートってヤツ、俺は良く分かんないから、アドバイスを頼むよ、2人とも」

ゆっくり時間をかけて、信じさせれば良いさ。

急ぐ必要なんて……どこにもありはしないから。

第5回、ラジオ小説終わり

遊 戯 王Fate ラジオ小説その5（後書き）

あとがき

遊画君は鈍感でのるけです。

つてか、俺はこんな主人公大好きです！！

どうも、Ragoです。

やっぱり主人公は暴走型も良いけど、鈍感でヒロインの好意を感じ取れないタイプの方が良いですね。

さっきの「2人も俺にとって・・・大切な女性だからな」と言うセリフ、書いた瞬間急にクラツと来ました。

慣れない事をしたからだとは思ったが、まさか体が拒絶するとは・・・

・・・だが、後悔はしていない！！

そんな訳で、疲れたので終わります。

次回を宜しく、お願いします。

それでは、ガツチャ！楽しいデュエルだったぜ。

12月19日 自宅にて

第21話「第1の死神、Death・Grim Reaper Nergal」

やはり、最近肩のこりが半端ねえ。
それでも書くのが俺だ。

フィールドには、守備力1700のランス・フェクターが存在し、伏せカードは2枚。

だが、相手の場には攻撃力2700のダークシンクロモンスター、デビル・コザツキーが存在する。

どうにかしないとな・・・あのモンスター。

「バトル、デビル・コザツキーでランス・フェクターを攻撃！！ギガンテック・クロー！！」

デビル・コザツキーの腕が変形し、巨大な手となり、ランス・フェクターを切り裂いた。

「遊画！！」

「・・・っ、だがその瞬間、ランス・フェクターの効果を発動！このカードが破壊され墓地へ送られた時、相手フィールド上に存在する、このモンスターの守備力よりも高い攻撃力を持つモンスター1体を破壊する！」

ランス・フェクターの持たれていたランスが放たれた。

そして、デビル・コザツキーに直撃し、爆発を起こした。

「やったか！！」

「バカめ、よく見て見ろ！」

「なに！！」

煙が晴れた、そこには『グフフ』と笑うデビル・コザツキーの姿があった。

「っ・・・っ」

「何故だ、コザツキーはカード効果により破壊されたはずだろ！」フルも、そんな疑問を抱いた。

「デビル・コザツキーの効果発動、墓地のコザツキーと名の付くモンスター1体につき攻撃力が300ポイントアップし、墓地のコザツキーの数だけ戦闘、またはカード効果では破壊されない」

「ウソだろ、そんなデタラメなモンスターがいるのかよ!!」
と、言う事は・・・攻撃力は。

「デビル・コザツキー・ATK3000」
いつの間にか攻撃力が上がっていた。

「ちっ」

「俺はカードを1枚伏せターンエンドだ!苦しめ、そして足掻け」
「誰が、そんな情けない事をするか!俺のターン」

「その前にデビル・コザツキーの効果を発動する。このモンスターは自分のターンのエンド時に、デッキから闇属性モンスター1体を墓地へ送る事ができる。俺はデッキからジャイアント・コザツキーを墓地へ送る」

ジャイアント・コザツキー・・・コザツキーの1種だから、攻撃力は更に300ポイントアップか。

「それにより、2回の破壊体制と、300ポイントの攻撃力を得た!!」
「デビル・コザツキー・ATK3000 3300」
厄介だ、まずはアレをどうにかしなければ・・・。

デュエルとは何か、それは己自身の限界を相手とぶつけ合う決闘。
デュエルとは何か、それは相手との絆を深め、共に信じ合う心を生む為の決闘。

そして、デュエルとは何か、それは、偶然と信じる心が奇跡を生む決闘。

この物語は、そんな純粹で鈍感な心を持つ少年、公栄遊画とその仲間たちによる、熱く、激しい戦いによる絆で世界を救う、カードゲームラブコメディである!

第21話「第1の死神、Death・Grim Reaper
Nergal」

ただ、人は運命を信じる生き物。

だから私は、あの男がどうも信じられない。

自分の分身だと言っのに。

運命を変える？

バツカじゃないの。そんな事は出来ないに決まっている。

運命からは逃れられない、ノルンは一体何を考えているの？

あの子達もいつか彼に巻き込まれて、彼を拒絶する。

その前に、私はあの子達を救い出す。

ただ・・・この戦いが終わってから。

それからでも遅くはない。

私はカードの精霊。

三姉妹の、神。

「さあ、お前のターンだ！」

「っ、ドロー！」

Y u g a ・ S p c 2 ・ L P 4 0 0 0

R i d o u ・ S p c 2 ・ L P 4 0 0 0

「手札からパワー・スター・マジシャンを特殊召喚。自分の場にモンスターが存在しない場合は通常召喚でき、相手の場にモンスターが存在する場合、このモンスターは特殊召喚できる。パワー・スター・マジシャン・魔法使い族・ATK2100・光・5・効果。そしてスピードスペル、エンジェル・バトンを発動。自分のスピードカウンターが2つ以上存在する場合に発動する事ができる。デッキからカードを2枚ドローする。その後、自分の手札からカードを1枚選択して、墓地に送る。そして、手札からレベル・スター・ビーを墓地へ送る。」

手札は残り3枚、行ける。

「そして、墓地のレベル・スター・ビーの効果発動。自分フィールド上に存在するスター・マジシャンのレベルを1下げる事により、

墓地よりこのモンスターを特殊召喚できる！来い、チューナーモンスター、レベル・スター・ビーハレベル・スター・ビー・昆虫族・DEF500・光・1・チューナーハパワー・スター・マジシヤン・54」

「よし、これでエンジェル・スター・マジシヤンがシンクロ召喚できる」

「フン、シンクロ召喚でも狙っているのか？だが甘い！！」
「なに！！」

「永続罫、音程大破のスピーカーを発動。このカードがフィールドに存在する限り、お互いにシンクロ召喚が出来ず、モンスターの特殊召喚を無効にし、破壊する事ができるハ音程大破のスピーカー・永続罫・効果、このカードはチューナーモンスターが召喚、反転召喚、特殊召喚に成功した時にのみ発動する事ができる。このカードがフィールド上に存在する限り、お互いにシンクロ召喚する事ができず、モンスターの特殊召喚を無効にし、破壊する。自分のエンドフェイズ毎に1500ライフポイントを払う。払わない場合、このカードをゲームから除外する」

んな・・・シンクロを封じられただと！！

「何だアイツは、遊画の戦術までもを見抜いているのかよ！！」

「チイ、前回戦った時にすでに対策を練っていたか」

「カードを1枚伏せてターンエンド！」

まさか相手がシンクロ封じをしてくるとは・・・厄介だ。

「俺のターン」

Yuga・Spcc3・LP4000

Ridou・Spcc3・LP4000

「バトル、デビル・コザツキーでパワー・スター・マジシヤンを攻撃！ギガンテック・クロー！」

再び巨大な手が現れ、パワー・スター・マジシヤンを切り裂いた。

「ぐああっ！！」ハLP4000 2800」

「遊画！！」

思いつ切り、バランスを崩した。

「っ……っ……っ……」

何だこの痛みは。

前にデュエルを行った時よりも遥かに痛みが増している！

「おおっと、言い忘れていたが、このデュエルは真正銘の闇のデュエルだ」

闇の……デュエル？

「まさか……あの、禁断のデュエルが……」
フルは何かを知っているようだ。

すると、リドウはそれを察して、笑った。

「あーっはははははは、ちなみにプレイヤーが受ける戦闘ダメージは、現実の物となり、徐々に命を削っていく」

ウソだろー！

「そんな事が……俺はそんなオカルト染みた話など信じるか！

「フン、そんなオカルト染みた話があんだよ」

……このヤロー。

「お前らは何が目的だ！こんな危険な事やって、何がやりたい！」
リドウの笑いが止まった。

「……人類の支配だ」

「なにー！！」

「我々エクスが、人類の頂点に立つ、それが目的だ！！」
んだと……。

「ふざけるな！！そんな事やって、誰も幸せにはなりはしない」
そうさ、誰かが独断で支配をやっても、ただ悲しいだけだ！！

「……だったら、俺は一体何を幸せとすれば良いんだ」
いきなり何を……。

「まあ良い、否定してもそれが現実なのだからな。俺はターンエンド。そして、エンドフェイズ毎にライフを1500ポイントを払わなければならないが、そんな物は破棄する！」

音程大破のスピーカーが、渦に飲まれ消えていった。

これで、シンクロ召喚が出来る！

「行け、遊画」

「ああ、俺のターン！」

Yuga・SpC4・LP2800

Ridou・SpC4・LP4000

来た！

「手札からゴースト・スター・マジシャンを攻撃表示で召喚！
「ゴースト・スター・マジシャン・魔法使い族・ATK1800・光・

4・効果」ゴースト・スター・マジシャンの効果が発動！このモンスターを墓地へ送る事により、デッキよりレベル4以下の魔法使い族モンスター1体を特殊召喚する事ができる」

「なっ……デッキからの特殊召喚だ！」

「ゴースト・スター・マジシャンをリリースし、来い、憑依装着ダルク^へ憑依装着ダルク・魔法使い族・ATK1850・闇・4・効果」

フィールドに、いつものダルクが姿を現した。

『……フツ、やはり俺を必要としたか』

「兄のダルク、お前の力が必要だ。力を……貸してくれるか」
ダルクの答えは、まるで当然のごとく、早かった。

『俺はお前の力その物だ。主人を裏切るようなマネはしない』
だろうな。

「だったら、力を貸してくれ！デッキから闇の翼ダルクの効果を発動し、憑依装着ダルクの特殊召喚に成功した時、特殊召喚できる！
来い、闇の翼ダルク^へ闇の翼ダルク・魔法使い族・ATK200・闇・4・チューナー」

俺の目の前に、翼の生えたダルクが姿を現した。これで行ける！

「レベル4の憑依装着ダルクに、レベル4の闇の翼ダルクをチューニング 4 + 4 = 8」

宙に浮いた闇の翼ダルクが透明になり、中から4つの星が出て、それが輪を作り、憑依装着ダルクを覆いつくした。

「闇を操る魔術師よ、混沌の夜空から舞い降り、義なる光を破壊せよ!」

一気にモンスターが光り出した。

「シンクロ召喚!闇を集えよ、闇霊神ダルク!」
「闇霊神ダルク・魔法使い族・ATK2800・闇・8・シンクロ、効果」

光と共に、中から新たな闇の魔術師が現れた。

両手に2本の杖を持ち、そして怪しげな雰囲気と共に、それがどこか神秘的な感じを醸し出している男性の姿だった。

「フン、そんなモンスターでどうするつもりだ」

「見てみれば分かるさ、闇霊神ダルクの効果発動。1ターンに1度、相手の墓地に存在する闇属性モンスターを2体までデッキへ戻す事ができる!」

「なに!」

リドウの墓地から、コザツキーと、ジャイアント・コザツキーのカードが出された。

「ちい」

渋々、カードをデッキへ入れ、自動でシャッフルされた。

「それにより、デビル・コザツキーの攻撃力は元に戻る!」
「デビル・コザツキー・ATK3300 2700」さらに、この効果でデッキへ戻したモンスターの数×200ポイント、攻撃力がアップする!」

「何だと!」

「ダルクの攻撃力は3200となる」
「闇霊神ダルク・ATK2800 3200」

「バカな・・・俺のコザツキーが、こんな下級ごときに負けるとでも言うのか!」

「バトル、闇霊神ダルクで、デビル・コザツキーを攻撃!ダーク・フォース・バスター!」

2つの杖を重ね合い、そこから黒弾が作り出され、それをデビル・コザツキーに向けて発射された。

『グオオオオオオオオオオオオ』

そして、デビル・コザツキーはその黒弾を喰らい、砕け散った。

「ぐああああああああ」〔LP4000 3500〕

「っ……認めん」

「どうだ、これが……絆の力だ。ピンチの時に……必ずコイツ等は来てくれる。この絆がある限り、俺は負けない!!」

「っふ、流石は遊画だな」

「そのようね」

フルの後ろから、もう1台D・ホイールがやって来た。

「「沙耶!!」」

「私だけを置いていくなんて、私も貴方達の仲間の1人なんだから、行くなら行くって言いなさい」

「……認めん」

リドウの声が、霞んだ声となった。

「認めん、認めん、認めんぞおおおおお

!!この俺が、たかがガキ1人ごときに……恐れを抱くなど……俺は認めんぞおおお!!」

何だ急に!?

「良くもやつてくれたな、公栄遊画!!だがな、その行為が、更なる引き金にも繋がった。見せてやる、真の恐怖を……俺が受けた恐怖をな!」

俺が受けた恐怖!?

「リドウ、お前に一体何があつた。お前が受けた恐怖を……何故俺達にぶつける必要がある!」

「だったら教えてやるよ、俺が受けた、苦しみを!」

「これは……うあっ」

何だ、地面のこの紋章は……っ。

「ここは……」

気づくと、そこは豪邸があった。

そしてここは……その庭か。

「ここは、俺が育った場所、そして、復讐を誓った場所だ」

目の前には、リドウが浮かんでいた。

「復讐……?」

その時、誰かの声が聞こえた。

『2番だと、1番になれ!!!』

バシン……そんな、殴られた音が聞こえた。

『でも、俺の先には、もつと優秀な人が』

『殺してでも1番を取れ!!そうじゃなければ……我が家に傷

が付く!』

何だよ……家の事情で1番にのみなれって、おかしいだろ!?

『今日は飯抜きだ!!そこら辺の草でも食つとれ!!』

そんな声と共に、1人の少年が庭に放り出された。

アレが……。

「そうだ、アレが昔の俺だ」

その顔には、赤く腫れ上がったほっぺが。

『……憎い、俺はアイツが憎い。何で1番じゃなければ……』

『……いけないんだああああああ』

空しい叫び声が、豪邸中に響いた。

『……見せてやる……この俺を……侮辱したこの罪、

死を持ってして、裁く!』

その目には、もはや光など無かった。

その時、急に空間が捻れ、場所が豪邸の中と思える場所になった。

目の前には、血だらけになった数々の人と、恐怖で腰が抜けた、男がいた。

「アイツこそが、俺の心に傷を負わせた我が父、ガガリス・アーウィン」

ガガリス・アーウィンって、確かモーメント実験施設を提案し、設

計したあの、ガガリス・アーウインの事か!?

「確かその人は、謎の暗殺により死んだとか言われているが……まさか!?!」

少年は、血糊がベッタリとした服とナイフで、ゆっくりと、ガガリスに近づいていた。

『何を……何を、フオード・アーウイン!?!』

フオード・アーウイン!?!?

「まさか、アレがお前の」

「そうだ、その名は捨てた名前だ。あんな父親に授かった名前など汚らわしくて耐えに耐えきれなかった。だから俺は改名して、リドウとした」

リドウの眉間にしわが寄っていた。

「そして、散々俺をこき使い、尚かつ、自分の理想の手駒にしようと考えていた父親に復讐しようと思った。だが、そんな事で、俺の心は満たされなかった」

それじゃ……まさか!

「お前は……他人を巻き添えにして、自分が受けた苦しみを与えていたのか!」

「そうだ、そしてそんな事をやっていく内に、俺はその行いに快感を得た。人が苦しむ姿を見て、快感だと思え始めた。分かるか遊画!」

そんな心なんか……分かってたまるか!

「ふざけるな、自分が受けた苦しみを……他人にぶつけるなどと……万死に値する!」

そしてその瞬間、俺の意識が元に戻った。

「つ……俺は今まで何を……」

目の前にはリドウが……そうか、アレは……リドウの記憶。

「万死に値するだ……その後、とある宗教に入り、イリ

アステルにより団体ごと消滅させられ、テメエの時なんか、ミルラを置いて逃げるしか無かったあの時を……あの時の屈辱を！！それでも万死に値するとも言うのか！！

「あぁ、お前はそんな事をやってしか満足できないような人間だ。そんなヤツは万死に値する！お前、実は弱いだろ！」

リドウの口からキリキリと聞こえた。

「俺が……弱いだと！！」

「そうだ！！もっと別の方法があったはずだろ！そんな……実の父親を殺してまでも傷を消したかったのかよ。人を殺してまでも、やり遂げて得るものなんて何も無い！」

「黙れ！！黙って聞いていれば……キサマは何も分かつちやいなえ。良いか、そんな綺麗事を言ってもな、所詮人間はそんな生き物だ！自分の欲の為には、例え他人の幸せをも嘲笑いながら蹴り飛ばすような、バカな生き物なんだよ！」

「それは違う！！」

「じゃぁお前は自分の欲のためならば他人を蹴り落とす事はしないと言う事か！」

「そんな事じゃ無い！」

「俺は他人を蹴り落としてまでも掴む幸せなんてゴメンだ！俺は……自分は幸せになりたい。だが、周りの奴らと共に……俺一人だけじゃ無く、みんなと共に幸せになりたい！」

「綺麗事ばかり言いやがって……」

「心に受けた傷は、一生治りはしない。でも、仲間がいれば、お前の傷は少しでも満たせたんじゃないのか！周りに共感できる友達がいれば……そんな親殺しの悲劇をやらなくて済んだんじゃないのか！」

「っ……」

リドウの顔に焦りが出た。

「何でその時に仲間を作らなかった。お前の周りには……友達

「がいたハズだろ！」

「黙れ！俺は一匹狼のような存在だったんだ。そんな甘ったれた物など作る気など無かった」

「そんな・・・」

「もう良い、キサマは俺の気持ちを分かりそうにない！だったら、俺が受けた苦しみを受けて貰う」

「だったら・・・。」

「キサマを倒し、気づかせるしか無いのか」

「俺を倒すだと、もはやそんなチャンスなど無い。何故なら・・・キサマは貴様自身で自爆スイッチを押したようなもんだからな」

「なんだと！！」

「見せてやる、デビル・コザツキーが戦闘により破壊され墓地へ送られた時、デッキから闇属性モンスターを5体墓地へ送り、破壊したモンスターを破壊する！」

「しまった、ダルクの効果範囲はフィールドのみ、墓地からの発動には対処できない！」

「デッキからコザツキー、ジャイアント・コザツキー2体にパーフェクト・コザツキー、そして、レベルテン・デスサーチを墓地へ送り、闇霊神ダルクを破壊する。デス・ソウル！！」

リドウがカードを墓地へ送り、コザツキーらしき何かが見れ、そのままそれが黒い弓となり、放たれた矢がダルクに突き刺さった。

『ぐっ・・・ぐあああああああ』

そして、ダルクが消え去った。

「ダルク！！」

「まだ終わりじゃねえぜ」

何だと！

「レベルテン・デスサーチの効果を発動。このカードが墓地へ送られた時、自分のデッキからレベル10のモンスターを手札に加える！俺が手札に加えるモンスターは・・・」

リドウのデッキから、1枚のカードが選ばれ、それを勢い良く抜い

た。

「デス・グリム・リーパー・ネルガルを手札に加える！」
何だ、そのカードは。

だが、レベル10のモンスターを召喚するには、2体か3体のリリ
ースが必要になる。

だったら、次のターンは確実に凌げる。

「バカが、どうせ次のターンは確実に凌げるとでも思っているんだ
ろ！」

んな・・・読まれている！

「そんな事で俺を倒そうなんて甘いんだよ！！俺のターン！！」

Y u g a ・ S p c 5 ・ L P 2 8 0 0

R i d d o u ・ S p c 5 ・ L P 3 5 0 0

「公栄遊画、ここからが本番だ。死神の前で絶望するが良い！墓地
のモンスター4体をゲームから除外する！」

「墓地のモンスターをコストにしただと！！」

しくじった。死神、それは死者の魂を喰らうのでも有名な事を・・・

「墓地よりコザツキー、ジャイアント・コザツキー、パーフェクト・
コザツキー、そして、レベルテン・デスサーチをゲームから除外し、
相手を死へと追い詰める、デス・グリム・リーパー・ネルガル！！
！」

地面が急に揺れた。

「な・・・何だ！？」

「一体何が起きているんだ」

「きゃあ、何、一体？」

刹那 地面が砕け、その砕けた地面の中から、1体の何かが浮遊し
てきた。

体全体をマントに覆われ、手には巨大すぎる鎌を持ち、顔は禍々し
いライオン型の被り物を被った、死神が・・・。

『又オオオオオオオ』

』

体全体が光り出した。

まるで、自分を漆黒の太陽と偽るように、神々しく、そして禍々しく、強い光を……。

「これが、死神」

「そうだ、これこそが俺が持つ第1の死神、デス・グリム・リーパー・ネルガルだ！！」
「Death・Grim・Reaper・Nerガル
gal・悪魔族・ATK3000・闇・10・効果」

「なによ……アレ」

「これが……死神」

フルも沙耶も、その姿に見とれていた。

「デス・グリム・リーパー・ネルガルの効果発動！1ターンに1度相手プレイヤーに1000ポイントのダメージを与える」

「何だつて！」

「ブラック・サンシャイン！！」

ネルガルの禍々しい光が1つに集中し、それが巨大なエネルギーとなって俺を襲った。

「ぐああああああ」
「LP2800 1800」

「遊画！！」

「そしてバトル、デス・グリム・リーパー・ネルガルで、レベル・スター・ビーを攻撃！ソウル・ダスト・デスサイズ！！」

巨大な鎌が振り下ろされ、糸も簡単にレベル・スター・ビーを切り裂いた。

「つ……衝撃波だけでも、この衝撃か」

死神……何とも恐ろしいモンスターだ。

このままでは……マジでヤベエぜ。

「苦しめ、そして足掻け！！俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ」

クツ……やるしか無いのか。

「俺のターン」

Y u g g a ・ S p c 6 ・ L P 1 8 0 0

これは！！

「スピードスペル、ハイスピード・クラッシュを発動！自分のスピードカウンターが2つ以上ある時、自分フィールド上のカード1枚と、フィールド上のカードを1枚破壊する！ハSp-ハイスピード・クラッシュ・Sp魔法・効果、自分用スピードカウンターが2つ以上ある時ある時に発動する事ができる。フィールド上に存在するカード1枚と、自分フィールド上に存在するカード1枚を破壊する」
それにより、俺は伏せカードの1枚を破壊し、お前のネルガルを破壊！！」

俺の伏せカードが粉碎され、相手の場のネルガルにも、電撃が走った。

「よし、これで」

「行けるとでも思ったのか、バカめ」

「何だと！！」

「デス・グリム・リーパー・ネルガルの効果発動、このカードがカード効果により破壊される場合、500ポイントを払う事により、このカードは破壊されない」ハLP3500 3000」

ネルガルの周りの電撃が、ネルガルの意思により消し去られた。

「っ……だが、俺は破壊した霊使い封印の石版の効果発動。このカードが墓地へ送られた時、デッキから霊使いと名の付くモンスターを2体まで手札に加える事ができる」ハ霊使い封印の石版・罫・効果、このカードが墓地へ送られた時、デッキから「霊使い」と名の付くモンスターを2体まで手札に加える事ができる」

デッキがシャッフルされ、2枚のカードを抜き取った。

「俺は水霊使いエリアと風霊使いウインを手札に加える！」

あえて闇霊使いダルクを手札に加えなかったのは、すでに墓地に憑依装着ダルクが存在するため、コントロールを得た所でこのモンスターに憑依装着できなければ意味がないし、それに迂闊にこのカードを使ってカードの力で自爆すれば、元もない。

そんな事で、今はまだ意味が無さそうなこの2体に賭けるしか無さそうさ。

「そして、ガード・スター・マジシャンを守備表示で召喚へガード・スター・マジシャン・魔法使い族・DEF2000・光・4・効果^ㇿ俺はターンエンドだ」
クツ、本当に何も出来ない。

「今ならばまだサレンダーできるぞ？どうする、このまま死神の餌食となるか？」

つ……そんな負抜けた事、できるか！

「確かにサレンダーと言う手もある。だが、俺には守りたいヤツがいるんだよ！」

「フン、バカが、俺のターン!!」

Yuga・Sp c 7・LP1800

Ridou・Sp c 7・LP3000

「俺はスピード・ワールド2の効果を発動する！自分のスピードカウンターを7つ取り除き^ㇿスピード・ワールド2・Sp c 7 0^ㇿデッキからカードを1枚ドローする！」

ドローしたカードを見て、リドゥはニヤリと笑った。

「だったら良いだろ、テメエだけは……絶対に俺が倒す。そう俺が決めたからな。だったら、これで最後だ」

何をやるつもりだ？

「手札から、アルファ・バスターを攻撃表示で召喚へアルファ・バスター・機械族・ATK1700・闇・4・効果^ㇿそして、このモンスターの召喚時、相手に800ポイントのダメージを与える！
アルファ・バスターの砲が、俺を照準に合わせ、そして、狙いが定まった瞬間、バズーカ砲を撃ってきた。

「ぐあつ……!!」^ㇿLP1800 1000^ㇿ

「これで終わりだ、デス・グリム・リーパー・ネルガルの効果発動！1ターンに1度、相手に1000ポイントのダメージを与える！
ブラック・サンシャイン!!!!」

俺に向けて、再び強大な量の光が浴びせられた。

これが通れば、俺は敗北。

「遊画!!!」

「遊画、希望を捨てないで!!!」

そんな声が聞こえた。

このまま……このまま……。

「あーっはははははは、あっはははははははは、俺はやった、ついに、公栄遊画を倒す事に」

続く

次回予告

「しつこいやツだ!このままやられれば良かった物を」

「誰が……こんなデュエルに易々と負けてられるか!!!」

「遊画……お前は何で、そんなに戦う事ができる!!!」

「エレナ、これは俺自身の為に戦っているんじゃないか!これは……

……俺を信じてくれてる奴らの為に戦っているんだ!!!」

「信じている……奴らの為に……」

次回、遊 戯 王 Fate 第22話「信じてくれる人のため」

「エレナ、俺は絶対にお前を裏切ったりなんかはしない、だから……

……俺を信じてくれ!!!」

次回のキーカード

全霊使いエレナ・魔法使い族・ATK1500・光・6・融合、
効果

第21話「第1の死神、Death・Grim Reaper Nergal」

あとがき

やっと・・・スフィアードが当たった。

この子はツンデレですか？最後の最後に出てきやがった・・・も
っと早く出てきてよ、どうせなら！！

そんな愚痴も束の間、どうも、Ragooです。

いやー、最近は疲れ気味です。

ネタが尽きてきてきたし・・・。

ちなみに次回は番外編があつてから、第22話となります。
番外編はカオスなネタを満載にお送りします。

それでは次回も宜しく、もとい、アクセラレーション！！

12月23日 自宅にて

第22話「信じてくれる人のために」(前書き)

今年ももう少しで最後か・・・。

第22話「信じてくれる人のために」

「これで終わりだ、デス・グリム・リーパー・ネルガルの効果発動！1ターンに1度、相手に1000ポイントのダメージを与える！ブラック・サンシャイン！！！」

俺に向けて、再び強大な量の光が浴びせられた。これが通れば、俺は敗北。

「遊画！！！」

「遊画、希望を捨てないで！！！」

そんな声が聞こえた。

このまま……このまま……。

「あーっはははははは、あっはははははははははは、俺はやった、ついに、公栄遊画を倒す事に」

……このまま、やられる訳が……あるか！！

「罠カード、発動！ダメージ・ブロック。相手がダメージを与える効果を使用した時、そのダメージを無効にし、デッキからカードを1枚ドロウする！ダメージ・ブロック・罠・効果、相手がダメージを与える効果を発動した時に発動する事ができる。そのダメージを無効にし、デッキからカードを1枚ドロウする」

強大な光は、俺の前で止まり、はじき返された。

「しつこいやつだ！このままやられれば良かった物を」

「誰が……こんなデュエルに易々と負けてられるか！！！」

そして、俺はデッキからカードを1枚ドロウした。

「ダメージ・ブロックの効果で、カードを1枚ドロウ！！！」

俺はドロウしたカードを見た。

「スピードスペル、スピード・フュージョンか」

今来て欲しいカードは……これじゃ無い。

「どうするリドウ、いや、フォード」

「キサマ……その名で俺を呼ぶな！！！」

あえて言わせてもらったが、やはりコイツは自分を嫌っている。

「ガード・スター・マジシャンは1ターンに1度、戦闘では破壊されないモンスターだ。ガード・スター・マジシャン・DEF2000。このまま攻撃しても無意味だ。」

「クツ・・・カードを1枚伏せてターンエンドだ。」

これで一応はこのターンを凌いだ。

次のターンで・・・決着を付けなければ、俺は負けだ。

この極限の状況で・・・何が出来ると言っんだ!?

デュエルとは何か、それは己自身の限界を相手とぶつけ合う決闘。

デュエルとは何か、それは相手との絆を深め、共に信じ合う心を生む為の決闘。

そして、デュエルとは何か、それは、偶然と信じる心が奇跡を生む決闘。

この物語は、そんな純粹で鈍感な心を持つ少年、公栄遊画とその仲間たちによる、熱く、激しい戦いによる絆で世界を救う、カードゲームラブコメディである!

第22話「信じてくれる人のために」

デュエルサーキットに4台のD・ホイールが駆け抜けていた。

そして、1人は巨大な死神と、1体のモンスターが存在し、もう片方はモンスター1体の状況であった。

後ろの2人は、緊張してそれを見ていた。

「・・・っふふ、あーっはははははははははは!!だがな、お前はもう、どうする事もできない。たかが残り伏せカードは1枚。そして手札は4枚。こんな絶望的な状態でもまだ勝つ自信なんてあんのかよ?。」

「そんな事は、やってみなきゃ分かんねーだろ!俺のターン!」

Y u g g a ・ S p c 8 ・ L P 1 0 0 0

Riddou・Spcc1・LP3000

俺は恐る恐る、引いたカードを見た。

来た!!!

「チューナーモンスター、バルド・スター・マジシャンを守備表示で召喚へバルド・スター・マジシャン・魔法使い族・DEF800・光・2・チューナーレベル4のガード・スター・マジシャンにレベル2のバルド・スター・マジシャンをチューニング 4+
2〃 6 守りを固めし厚き魂よ、仲間を守りて絆を見せつけよ、シンクロ召喚、超えられない壁、ビッグガード・マドルへビッグガード・マドル・魔法使い族・ATK1800・水・6・シンクロ、効果」

フィールドに、巨大な盾を持った魔術師が現れた。

「クッ、あの時の・・・モンスター!」

「ビッグガード・マドルの効果により、アルファ・バスターの表示形式を変更!!!」

「んなに!!!」
「アルファ・バスター・ATK1800 DEF700」

アルファ・バスターが、攻撃の構えを見せた。

「バトル、ビッグガード・マドルで、アルファ・バスターを攻撃!ガード・アタック!!!」

アルファ・バスターに向けて、盾を振り下ろし、アルファ・バスターは粉碎された。

「つ・・・んの、ガキの分際で!!!」

最後の頼みの絆だ。このカードで、うまく行けば。

「俺はカードを1枚伏せてターンエンド。そして効果でビッグガード・マドルは守備表示へと変更されるへビッグガード・マドル・ATK1800 DEF2800」

これで、俺の手札は3枚、この状況を・・・どう乗り切る!

「俺のターン!!!」

Yuga・Spcc9・LP1000

Riddou・Spcc2・LP3000

「あのモンスターさえどうにかすれば良いだけの話だ。別にこのターンで閉める必要は無い！」

何を言っているんだ、アイツは。

「罨カード、ライトニング・キャノンを発動。手札を1枚捨て、相手の場に存在する全ての表側表示モンスターを破壊する！」

「なに!!!」

「そして、破壊したモンスター1体につき、300ポイントのダメージを与える!!!」
「ライトニング・キャノン・罨・効果、このカードは自分のターンにのみ発動できる。手札を1枚墓地へ送る。相手フィールド上に存在する表側表示モンスターを全て破壊する。その後。破壊したモンスター1体につき、相手に300ポイントのダメージを与える。この効果を使用したターン、自分はバトルフェイズを行う事ができず、相手に効果ダメージを与える事もできない」
「光が集約されたキャノンがリドウの場に現れ、そして、そのキャノンから、暴力的なビームが放たれた。

気づけば、俺のフィールド上に存在していたビッグガード・マドルが消滅していた。

「クツ・・・」
「LP1000 700」

「だが命拾いしたな。この効果を使用したターン、俺は効果ダメージも与えられず、バトルフェイズも行う事ができない。だが一応、保健はしておこう。手札からアームズ・ロボを守備表示で召喚
アームズ・ロボ・機械族・DEF2000・闇・4・効果」

この野郎、壁を作りやがったか。

「ターンエンドだ」

・・・だが。

「俺は決して諦めねえ、どんなに絶望的な状況であっても・・・俺は、信じてくれるヤツがいるから・・・俺は・・・諦められないんだ!!!」

そうさ、信じてくれている仲間の為にも・・・俺は!!!

『・・・どうしてだ』

この声はー！！

『どうしてだー！！もしも自分がへマを咬まして、それで他人が傷ついたら・・・そんな事も考えずに、遊画・・・お前は何で、そんなに戦う事ができるー！！』

エレナか・・・。

「エレナ、お前は勘違いしてないか？」

『・・・え？』

「エレナ、これは俺自身の為に戦っているんじゃない！これは・・・俺を信じてくれてる奴らの為に戦っているんだー！！」

『信じている・・・奴らの為に・・・』

エレナはその言葉に、啞然としていた。

『・・・だが、可能性はどこまでもある。この状況で・・・一気に逆転できる可能性が・・・』
なんだって！

「エレナ、それは本当か！」

エレナの顔は、別の方を向いていた。

『ああ・・・でも』

何だ、焦れつたい。

『・・・っ』

・・・いや、エレナは何かを拒んでいる。

自分に対する、何かを。

「エレナ、お前は何を隠している。まるで、自分を拒否しているかのように・・・何を隠しているんだー！！」

それでもエレナは口を開こうとしない。

・・・考える。

ウイン、エリア、ヒータ、ダルク、アウス、ライナの時みたいに、何か過去にあったハズだ。

彼女の言葉を1から思い出して見る。

俺は、エレナの言葉を思い出してみた。

「エレナ、お前は俺を信じていないのか！」
「違う!!!」

エレナの叫びに俺は少し引き下がった。

「な……何が違うと……」

「私は……信じられる事が嫌いなんだ。自分で発案しておいて言うのも何だが……私を信じるのはやめろ！」

この答え……エレナは何を言っているんだ？

「エレナ……」

私を……信じるのをやめる……。

私を信じるのを完全に嫌がっている。

それは何故だ。

……答えは簡単だ。

過去に、自分が言った言葉のせいで、人を傷つけたか、人を不幸にさせたかに違いない!!

「エレナ、お前は……過去に自分のせいで、人を傷つけたのか？」

『……っ!!』

どうやら当たりのようだ。

「フン、何だその精霊は？お前のご奉仕様か。いいねえ、世界の支配者になった暁には、その精霊を頂くとするか」

こ……このヤロー!

「そんな事をさせるかよ!!コイツは……俺にとって大切な仲間なんだ!!だから……コイツにだけは……不幸な目には合わせはしない!そうさ、コイツは……俺が命を賭けてでも守つてやる!!」

『!!き……キサマ』

エレナは、顔を赤くして俺の前へと近づいた。

『さっきの言葉の意味、分かっているのか!?!』

「ああ、お前が不幸な目に合うのなら……俺はお前を守ってやる。ただ……それだけの事だ!!」

それ以外にどんな意味がある？

『……っ、公栄遊画……最初は面白がっていたが、今はお前が憎い』

な……何だ急に!?

「キサマは私たちを不幸にさせる存在になっている。何が仲間を守るだ、何が命を賭けてだ!!何が……私を守る……だ」

エレナの目から、何かの滴が垂れた。

アレは……涙。

何でエレナは……泣いているんだ。

「エレナ……何でお前は」

『悲しいからだ!!』

悲しい……?

『私が……この私が……ここまで信じられても良いのか？ここまで……ここまで男性に信じられても良いのかと聞いている!!』

……。

「答える、公栄遊画!!!」

男性に……信じられても良いのか？

それって……。

その瞬間、俺の目が発動した。

エレナが一体、何を見たのか。

そして、それを見た俺は、一体どんな反応をすればいいのか。

それを、俺は考えた。

気づけば場所は、野原だった。

「……アレは……」

見ると、大量の兵士が剣を持って戦っていた。

まさか!!

「戦場なのか、ここは!!」

ある者は馬に乗り、ある者は剣を持って、相手に斬りかかったり、斬られたりと、そんな連鎖のくり返しだった。

そしてその中に、見覚えのある顔がいた。

その兵士は、周りが男性ばかりなのに、女性用の鎧を着て、専用の剣みたいな物を持ち、そして、勇敢に戦う姿だった。

そう、彼女こそがエレナであった。

敵が斬りかかると、それをヒラリと避け、そして背後からズバツと斬り、四方から斬りかかれても平然と避ける。

これが・・・エレナの身体能力。

『来たぞ、銀色の紫悪魔、エレナ・スリーンだ!!』

エレナ・スリーン、それがエレナの名前か。

エレナは巧みな剣術で、敵を見事にうち倒し、栄光をつかみ取った。凄い、昔から、エレナは強かったんだな。

そう思うや否、場所が急に変わった。

次に見えたのは、何処かの小屋であった。

『いたか』

『いいえ、何処にも』

2人の兵士が、誰かを捜しているようだ。

『くっそ、何処に行きやがった、エレナ』

!!な・・・。

すると、微かにだが、声が聞こえた。

『・・・私は・・・』

エレナの声か・・・。

『・・・私は、ただ騙されただけなのに・・・。2人の男に乱暴されそうになり、そして気づけば、その2人を殺し。そして、私が立てた作戦が見事に失敗して・・・私は、どうすればいい。もう誰からも信頼されず、一気に英雄から人殺し、更には責任を問いつめられ、私は・・・もう、生きる資格なんて無いのか!』

泣きそうな声であった。

そんな声を聞いた俺は、どうする事も出来なかった。

いや、過去にあった事だから、どうする事も出来ない。

一度犯した失敗は、どうする事も出来ない。

それはどんな事に対しても同じだ。

人は、失敗すれば誰だって落ち込む。

それが、自然な対応だ。

だが、彼女の場合は重すぎた。

恐らく、彼女が立てた作戦のせいで、大量の血が流れたに違いない。

それが、エレナの心の闇。

男性に騙され、乱暴されそうになり、拳げ句の果てには自分のせい

で、味方が大量に死亡。

そんな事があれば、誰だって自分を信じられなくなる上に、人を信

じれなくなる。

だが、それじゃ悲しいじゃないか。

エレナ自身は悪くない。

ただ、先が見えなかっただけだ。

そんな、物事が自分の思うように進むのであれば、誰だってそれを

望む。

だが、現実はそう甘くない。

そんな事は知っている。

例えばどんなに自分の思惑でない事に物事が進んでも、その時は自分

の力で変えるしかない。

それが、信頼する相手との間に発生させなければならぬ、決め事

だ！！

現実に戻った。

ヘルメットで目のが発動した事が知らないと思うが、それが丁度良
い。

エレナ、だったら答えようじゃないか。

「信じればいい」

『……!!』

単刀直入に言った。

「いや、信じれば良いと言う話じゃ無い、俺を信じる!!」

『バカな事を……だつたら……』

エレナの言いたい事は分かる。

『男性に暴行されそうになった私が……男性であるお前を信じる事など……』

「俺は、お前の体などに興味は無い!!」

『!!』

「俺が興味あるのは、お前の考えた、今の状況を逆転する方法と、お前との絆だけだ!!そんな、女性の気持ちを考えずに、自分の欲望だけを考えて行動する奴らと一緒にするな!!」

『……お……お前』

「エレナ、俺は絶対にお前を裏切ったりなんかはしない、だから……俺を信じてくれ!!」

『……だがそれに』

俺は、曲がり角に差し掛かった為に、D・ホイールを巧に操りながら、言葉を続けた。

「自分が言った事が、もしも失敗しそうになっても、その時は俺が何とかする」

『……!!ゆ……遊画。まさかキサマ、私の過去を……見たのか!!』

「ああ、お前は恐ろしく、悲しい出来事が起こった。だが、それは奴らにも責任がある!!」

『……アイツ等には……責任などは!!』

「無いとは言わせないぜ!お前にはかり頼りすぎて、予定外の事が起きた時、自分たちでどうにかしなきゃいけない時がある。そんなお前だけの責任で、アイツ等は解決しようとした。だが、実際に考える!!」

『實際を・・・考える?』

「そんなの、自分勝手だろ! 予定外の事があれば、自分の力で何とかするのが普通だろ!! お前は何も責任を負う必要なんて無い」

『・・・だが遊画、それだとお前は私を信じないと』

「分かっている、だから俺はあえて言わせてもらう!! それでも俺は・・・お前を信じる!!」

『それは矛盾しているんじゃない?』

「矛盾なんて何もない。ただ俺は、お前を信じると言った。予定外の事や、お前が良く思っていない事が起きた時には・・・俺が何とかする!!」

『っ!!・・・本当に』

エレナの表情が見えないが、それでも俺は、エレナを睨み付けるような目をしていた。

そしてエレナも、唇を噛みながら、俺を睨んだ。

『私は・・・お前が憎いよ!!』

その瞬間、目に何か違和感を覚えた。

そして、両手の手の甲に再び、紋章が浮かび上がった。

「これは!!」

また、紋章が・・・。

『俺が何とかするだと? 元々私は作戦指揮官だ!! そんな素人に任されているんじゃない、私の名が汚れる!!』

・・・いつものエレナに戻ったな。

『ふふん、この私を誰だと思っている? 才色兼備、料理の腕もピカ一の上に、みんなから信頼されている、そしてみんなのアイドルでもある、この、エレナ・スリーンちゃんだ!!』

「・・・ただし、撃たれ弱いかな」

『うぐっ、それは永遠のアイドルの年齢と同じぐらい言わない約束だ』

「何だよそれは!!!??」

クッ、大事な戦いだと言うのに・・・何故か楽しいぞ。

「キサマら……俺を忘れて……ふざけんなあああああああああああー！」

ついにリドウは切れた。

「何が仲間だ！何が信じるだ！お前らの茶番にはもう付き合いきれねえよ！さあ、さつさとカードをドロ―しろ！そして苦しめ！そして、俺に苦痛を見せる！……！」

「『黙れ、この雑魚が！』」

2人同時の叫びだった。

「んな……雑魚だと」

「ああ、お前は雑魚だ」

『もしかして嫉妬か？ん、自分がやりたかった事を目の前でやられて、イヤだったのか？』

2人して、リドウを挑発した。

「……うわあ……」

「この2人と言い、最悪ね」

後ろで呆れられているが、そんな事はどうでもいい。

「んのヤロー、俺を弄びやがって……。次のターンを後悔するがいい。どうせ次のターンで終わりだからな」

俺はその言葉を聞いて、ニヤリとした。

「次のターンなんかこねえよ」

「んなに!？」

「なんだって、このターンでケリを付けるからな」

「……」

リドウは顔を引きずっていた。

「……ケツ、冗談は休み休みにしろ!!大体無理なんだよ、このターンで決着を付ける事などはな。次のターンが来れば」

「『だから話を聞いているか？お前のターンなど、絶対にこねえよ』」

「」

「……俺達って、案外似た者同士なのかもな。」

「エレナ、お前が言っていた逆転と言うのは、一体どうするんだ？」

するとエレナも、ニヤリと笑った。

『私を使う事だ!』

……まあ、大体は予想していたがな。

「……分かったよ、お前を信じて……俺は勝つ!!行くぜ
リドウ、これが……俺達の絆だ!!俺のターン!!」

Yuga・Spcl0・LP700

Ridou・Sp3・LP3000

「エレナ……お前の力を……借りるぞ!!」
俺は、手札のカードをデュエルディスクに差し込んだ。

「スピードスペル、スピード・フュージョンを発動!!自分のスピ
ードカウンターが4つ以上ある時、手札、またはフィールド上に存
在する融合素材モンスターによって決められたカードを墓地へ送る
事により、エクストラデッキより融合モンスター1体を特殊召喚す
る!!」
「Speed・スピード・フュージョン・Sp魔法・効果、自分用
スピードカウンターが4つ以上ある場合に発動する事ができる。手
札、またはフィールド上から、融合モンスターカードによって決め
られたモンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をエクス
トラデッキより特殊召喚する(この特殊召喚は融合召喚扱いとする)
」
「手札のウイン、そしてエリアを墓地へ送り、融合!!」
2人の魔法使いが、渦の中に入り、その中から1人の魔法使いが現
れた。

足がほつそりとしており、美しい手足、それに豊かな胸に肩まで伸
びた紫色の髪。

そう、モンスターとしてのエレナが今、ここに降臨した。

「融合召喚!舞い降りよ、全霊使いエレナ!!」
「全霊使いエレナ・
魔法使い族・ATK1500・光・6・融合、効果」

そして、エレナはフツと優しい笑みを浮かべた。

『……ありがとう』

……どうも参るな、人から感謝されるのはあまり慣れてないし……

「・・・つと、そんな事は後からでも考えれば良いか」

そして俺は、リドウに向かって、言い放った。

「行くぜリドウ！これが・・・仲間との絆による、奇跡の逆転だ！！全霊使いエレナの効果発動！1ターンに1度、自分の墓地に存在する魔法使い族モンスター1体をゲームから除外し、それと同じ属性のモンスターのコントロールを得る！！」

「フン、死神をお前の物にしようと言うのか！だが無駄だ！」

「誰がそんな趣味が悪いモンスターを奪うと言った？」

「なんだと！」

「俺が得たいモンスターは・・・アームズ・ロボだ！！墓地の憑依装着ダルクをゲームから除外し、アームズ・ロボのコントロールを得る！エレメント・コントロール！！」

墓地に存在していた憑依装着ダルクが除外され、同時にリドウの場に存在したアームズ・ロボがこちら側に移された。

「フン、そんな雑魚モンスターで一体何が出来る？キサマは何も出来ないままにくたばりな」

「まだ、俺は事を全て済ませてねえぜ？」

「！！ば・・・バカな、まだ、何かあるとでも言うのか！？」

当たり前だ、こんな中途半端で終わる俺では無い。

「効果名、エレメント・フュージョン。この意味、分かるか？」

「フン、そんな事は知っている。属性融合と言う意味だろ！そんなのを聞いてどうする気だった！？」

フツ・・・当たり前だ。

「全霊使いエレナと、アームズ・ロボをゲームから除外し、融合！！」

「んだと！！融合カード無しに融合させるだと！？」

これが、エレナの力だ。

「全霊術師エレナよ、真の姿となりて、今ここに降臨せよ！！」
そして、エレナは第2形態となった。

「これが・・・属性を操る霊使いの・・・真の強さだ！！」
「全霊術

師エレナ・魔法使い族・ATK3000・闇・8・融合、効果」
「……つふふふ、だが、攻撃力は同じだぞ？それをどうやって・
」

無駄な事を言う物だ。

「全霊術師エレナの効果発動。全霊使いエレナ以外の、ゲームから除外したモンスターにより、このモンスターの効果は決まる。俺が除外したモンスターは闇！それにより、このモンスターの効果が発動し、光と闇の効果を得る！」

「光と闇の力だと！！」

「光と闇の力の効果は、1ターンに1度、相手フィールド上に存在するモンスターの攻撃力を半分にする！」

「ば……バカな」

「エレメンタル・エナジー・ライトアンドダーク・フォース！！」
エレナの周りに強大なオーラが現れ、そのオーラが相手を包み込んだ。

「こ……この、この……死神の力を制御するとも言つのか
！？^{デス}Death・^{グリム}Grim・^{リーパー}Reaper・^{ネルガル}Nergal・ATK3000 1500」

「さらに、半分にした攻撃力分、攻撃力をアップさせる！^ハ全霊術師エレナ・ATK3000 4500」

「しかも……死神の力を……自分に吸収しただと！」

ここまで来れば、もう迷う必要なんて無いぜ。

「バトル、全霊術師エレナで、デス・グリム・リーパー・ネルガルを攻撃！！」

エレナは構えを見せると、即座に巨大な相手に向かって、杖から2体の龍を発生させた。

「^ハライトアンドダークネス・エンドバスター！！」

そして、俺は1つの伏せカードをオープンしていた。

「さらに畏カード、ストライク・ゲイナーを発動！相手モンスターを戦闘により破壊した時、攻撃力を半分にする事により、もう1度

だけ攻撃ができる！ハストライク・ゲイナー・罨・効果、自分フィールド上に存在するモンスターが相手フィールド上に存在するレベル8以上のモンスターを破壊した時に発動する事ができる。攻撃したモンスターの攻撃力を半分にする事により、相手プレイヤーにダメージトアタックができる」

「んなに・・・！！」

これで、終わりだああああああああああ！！

それは瞬間の出来事だった。

エレナの攻撃は、死神の腹部に当たり、そのまま腹部を突き抜けて、死神は陥没しながら・・・崩れ落ちた。

そして、それを見る間もなくエレナは、自分の力を制限して、そのままリドウへと攻撃。

その衝撃で、リドウは転倒。

その間、10秒程度の出来事であった。

「ぐおおああああああああああああ」LP30000

転倒したリドウは、そのまま受け身を取る事ができず、転がった。

そして止まった時には、体中から血が出ていた。

「大丈夫か！」

俺が駆け寄ろうとしたが・・・。

「来んじゃねーよ！！」

リドウは無理矢理立ち上がった。

「・・・き・・・きひひひ・・・、久々だ、これ程までに・・・快感を得られたのは・・・。キサマにもっと苦しんで欲しかった・・・」

俺に苦しんで欲しいだど！

「ふざけるな！俺はこれ以上、苦しむ訳にはいかねーんだ！！」

「・・・つふ、綺麗事が何度でも言えるがな・・・。だが遊画、俺は今ので敗者となった。この意味、分かるか？」

敗者の意味？

「そ・・・それは・・・死だ！！」

リドウの足元から、謎の黒い何かが発生した。
そしてその中に、リドウは沈んでいた。

「んな！リドウー!!」

俺はリドウに駆け寄り寄ろうとした・・・が。

「やめる遊画、お前まであの中に飲まれたいのか？」

「彼はもう無理よ。そんな、貴方まで死ぬ事なんて無いわ」

フルと沙耶に取り押さえられ、動けなくなった。

「見る、これが・・・敗者が味わう、永遠の無と言う苦しみだ！」
クツ・・・。

「さらばだ公栄遊画、俺は地獄の底から再び舞い戻り、そしてキサマを・・・殺す！」

「リドウーリド

ウー!!」

そしてリドウは、その黒い何かに、完全に沈んだ。

恐らくコザツキーも、あの中に飲まれただろう。

「・・・自分の快感の為に自分を犠牲にするとは・・・バカが」
これが・・・闇のゲーム。

こんなデュエルが・・・まだあると言うのかよ。

俺は・・・怖い。

俺が負ける事によって・・・誰かが傷つく事が・・・何よりも怖い。
だが・・・ここまで来たらやるしか無い。

「ここからが・・・本当の勝負だ!!」

そうさ、ここからだ・・・。

続く

次回予告

「リドウが負けるなど・・・フン、死神を使いこなせていなかったバカだったからな」

「ニコラ！死者を侮辱するその行為・・・万死に値する！！」

「・・・遊画、俺に行かせる」

「フル？」

「俺は・・・お前の力になりたいんだ」

次回、遊戯 王Fate 第23話「確率の狭間・異次元の伴い」

「あの永続罨・・・厄介だ」

次回のキーカード

Death・Grim^{グリム}・Reaper^{リーパー}・Ereshkigal^{エレシキガル}・悪

魔族・ATK2700・闇・10・効果

第22話「信じてくれる人のために」（後書き）

あとがき

ふう、そろそろ今年は終わりか……。

どうも、作者のRagoです。

いやー、今年もいろいろな事がありました。

語り出すとキリが無いので、そこはパス。

あと少しで、2011年か……遊戯王も、まだまだやっていくつもりです。

そして、この小説も、僕が描いている通りに完結させたいと思います。

ただ、この小説、2013年に完結予定ですので、長々と見て下されば幸いです。

それでは次回、新年でお会いしましょう。

では、良いお年を。

12月27日 自宅にて

遊 戯 王 F a t e ラジオ小説 誕生日スペシャル(前書き)

今日は俺が生まれた日なので、何となく書きました。
見ていただけたら幸いです。

遊 戯 王Fate ラジオ小説 誕生日スペシャル

遊画「さて、今回は作者の誕生日、12月30日を祝いまして、緊急ラジオ小説をする事になったが・・・」

Rago「内容はいつもと同じで、ラジオ小説だ」

遊画「それって全く意味無くない?」

Rago「良いんだよ、別に、そんな小さい事気にしないし」

エリア「人柄が大きいんだか、それともただ面倒くさがっているのがよく分からないのですわ」

Rago「後者が正解だな」

遊画「ただの面倒くさがり屋かよ!!!今までよくそんな性格で生きて来れたな!!!」

ウィン「・・・ある意味、凄いとさえ言えば凄い」

Rago「ああ、これまでの道のり・・・長かったな。まずこの小説の基礎となったあの、遊戯王マジック&デュエルを書いて、あれからすでに一年半か。第19話まで書いて、全て消去したのは心が痛かったが、今ではアレで良かったと思っっている」

遊画「まあ、アレは俺でも消えたい黒歴史だと思っ」

ウィン「でも、それ程までに書く自身なんて、どこにあるの?」

Rago「そりゃ、中学2年生の頃に、小説版銀を見た影響で、クラスプロフィール集に2年B組の騒ぎと言う小説を書いたぐらいだからな」

遊画「何だ、その今日の の2と涼宮ハヒの憂鬱を混ぜたような名前は?」

Rago「クラスのみんなは面白いと言っていたがな・・・」

遊画「今聞いて見る、絶対につまらなかつたと言っと思っぞ!」

Rago「まあ、そんな感じで、書く自身よりも、想像力が異常にあるから、ここまで書けるんだ」

遊画「想像力?妄想力の間違いじゃねーのか?」

R a g o「妄想言つなー!!」

ウィン「・・・さて、作者のコメントも言ったところで、そろそろ本題に入ろうと思う」

R a g o「そうか、それじゃ、俺はおさらばさせてもらおうとするか」
エリア「またのご来店、お待ちしておりますわ、ご主人様」

遊画「何処のメイド喫茶だ!!」
R a g o「YES、俺は君に会うためなら、どんな苦難をも乗り越えてみせる」

遊画「見る、作者が鼻血を出しながら、しかも目が完全にイカれているぞー!!」

R a g o「ふははははは、また会おう、遊画、エリア、ウィン」
一同「・・・いや、断ります」

R a g o「ぐふっ・・・ツンデレとは・・・成長したな、遊画」
遊画「何で俺だけ!？」

R a g o「でえーは、さらあーば、だああー!!」
遊画「ああ、何か変な発音と共に何処かへと走っていったぞ」

R a g o、退散

遊画「・・・さて、いつものラジオ小説に戻るか」

ウィン「・・・賛成」

エリア「ですわね」

(B G M開始)

ウィン「・・・さて、始めました。遊戯王Fate ラジオ小説
司会は、最近D・・・?にもはまっている雅こと、ウィン・ダ・ア
ーケインライラと」

エリア「遊画を虐めて、何だか胸が熱くなるこの私、エリア・ルイ
マリンド」

ウィン&エリア「お送りします」

遊画「オイコラ待てコラ、何で今D・・・?の話が出るんだウィン
!そしてエリア、それは危ないからそろそろ自重しろー!!」

エリア「断りますですの」

ウイン「・・・イヤです」

遊画「どうせそうだと思ったよ！ってか、さっさとラジオを始めろ！」

エリア「そうでしたわ。それでは最初のコーナー、オリジナルカード診察コーナー」

(BGM変更)

遊画「ああ、よくある小説オリジナルのカードを診察するコーナーか」

エリア「その通りですわ。それではまず1枚、どうぞ」

ツイン・シンクロン・戦士族・地・4・チューナー

このモンスターが召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル3以下のモンスター1体を選択し、自分フィールド上に表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化される。また、このモンスターは「ツイン・ウォーリア」のシンクロ素材にしか使用できない。

ATK1600・DEF1000

遊画「毎度お馴染みのシンクロンシリーズの1枚。このモンスターでツイン・ウォーリアを呼べるぞ。実を言うとこのモンスター、サテライトで偶然拾ったカードでな、一緒にツイン・ウォーリアも拾った」

エリア「何と言う偶然ですの」

ウイン「・・・まさに、カードは拾った」

遊画「そして、次が俺の元エースだ」

ツイン・ウォーリア・戦士族・地・7・シンクロ、効果

「ツイン・シンクロン」+チューナー以外のモンスター1体以上

このモンスターが攻撃を行う場合、このモンスターの攻撃力は、バトルフェイズ終了時まで600ポイントアップする。また、このモ

ンスターが戦闘によりモンスターを破壊した場合、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を破壊する事ができる。

ATK2300・DEF1300

ウィン「……元エース？」

遊画「今でも活躍するが、主なエースはエンドレス・ドラゴンが持つていったからな」

エリア「それでも、攻撃時に600ポイントアップの効果は良いと思うですわ」

遊画「セキュリティのゴヨウ・ガーディアンを破壊できる程度の力があるからな、便利と言えば便利だ」

ウィン「……それに、戦闘でモンスターを破壊できれば、もう1体を破壊できる」

遊画「その効果も魅力的だ。高レベルモンスターを戦闘で破壊できなくても、効果で破壊すればいい話だしな」

ウィン「……次は、遊画のエースモンスター」

エンドレス・ドラゴン・ドラゴン族・地・8・シンクロ、効果

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

1ターンに1度、以下の効果を発動する事ができる。・相手が魔法、罫、効果モンスターの効果を発動した時、手札を1枚墓地へ送るか、300ポイントライフを払う事により、このモンスターは発動されたカード効果を受けない。・自分フィールド上に存在するこのモンスター以外のモンスターが攻撃された場合、このモンスターの攻撃力を半分にする事により、このモンスターへ攻撃対象を変更できる。この効果で攻撃された場合、自分への戦闘ダメージは0となり、1度だけ戦闘では破壊されない。

ATK2500・DEF2100

ウィン「効果が長い……」

遊画「まあ、このモンスターは効果による耐久と仲間を守る盾の機

能が付いた、まさに俺のイメージのようなモンスターだな」

エリア「それはあえて否定しますが」

遊画「あえて否定するな！」

エリア「スターダストとは違い、受けない物ですから、迂闊に奈落の後に攻撃して、聖なるバリアが来てしまえばドカンですが」

ウィン「……でも、異次元の女戦士の効果も受けなくするのは凄いな」

遊画「実質、使いどころが豊富なモンスターだな。以外にもこのモンスター、まだまだ進化があったりしてな」

ウィン「……デブリ・ドラゴンみたいな」

遊画「それは退化しているな。アレはスターダストの進化前……つて、何言わせとんじゃ！！」

エリア「無駄なツツコミ来ましたわね」

遊画「無駄言うな！」

ウィン「……さて、ここでカードコーナー終了としまして、続いてはトークコーナー」

遊画「え、何が始まるんだ？」

ウィン「……このコーナーでは、最近起きた事を話すコーナー」

エリア「ではまず私から」

遊画「主な話内容の説明は！？」

エリア「アレは今から、数週間前の話です」

遊画「何だ、しんみりして」

エリア「私はその時、ただ単にリチュアデッキを整理していました」
遊画「デュエリストらしい行動だな」

エリア「そしてその時、ヒマだったのでテレビをつけました」

ウィン「……そして、どうなったの？」

エリア「……まあ、夢中になってけいん見ていただけけどね」
遊画「何でけいんを見るだけの話をしてんだ！！つてか、お前は人の家のテレビをよくぞまあ平然と使えるな！」

エリア「その時、私は気づいたの」

遊画「……何にだ？」

エリア「ギー太もアリですけど、ギタ子もアリだと思つのですわ！
！」

遊画「知らねえよ！！何でそこでギターの話が出てくんだ！！つて
か、何だそのズラ子的なネーミング。ダサイわ！」

エリア「水霊術・氷！」

いきなり、遊画の体が動きを止める。

遊画「！！か……体が凍ったぞ！つてか動けねえ！！」

エリア「ふふふ……可愛がつてあげるのですの」

遊画「や……や……やめるおおおおおおお」

しばらくお待ちください……。

エリア「ふー、スッキリしたのですの」

遊画「……（ビクッ、ビクッ）」

ウイン「……感じている？」

遊画「……（ビクッ、ビクッ）」

エリア「反応がない、まるで屍のようなんですの」

遊画「……つ……つ……か、あ……危つく……

天に召されるところ……だった」

ウイン「……もう少し、いじつてもいいかな」

遊画「やめる！！」

エリア「あ、元に戻った」

ウイン「……では、次は私が」

遊画「……少し後遺症は残るが……大丈夫になった」

ウイン「……アレは確か、36万、いや、1万4千年前だった

か……」

遊画「そのネタはやめる！！真面目に話せ」

ウイン「……まあいい、私はその時、深夜遅くまでモン
ン3を
やっていた」

遊画「お前は完全にオタク化しているぞ」

ウイン「……私はその時、1人プレイをしていた」

遊画「……何だか無駄に真面目な雰囲気だな」

ウイン「……そして私は、間違つてオンラインに入ってしまった」

遊画「まあ、時間の無駄だろうな。オンラインは入ったら結構時間食うもんな」

ウイン「……すると、周りには私1人のハズなのに、集会所に誰かがいた」

遊画「!!」

ウイン「……私は周りを確認した。でも、誰もいない」

遊画「心霊か……イヤだな、俺は心霊が大っ嫌いなんだが」

ウイン「……でも、誰かの視線を感じる。私はその視線の正体を見つめようとした」

エリア「……その時、誰かいたのですの？」

ウイン「そして、私はその正体らしき人影を見つけた。私のすぐ後ろに」

エリア&遊画「!!」

ウイン「恐る恐る後ろを振り向いた。するとそこには!!」

エリア&遊画「そこには!？」

ウイン「……電子体 霊の、可愛い女の子が……」

遊画「オイコラ待てコラ、何でバドの水 憐が出てくんだ!!?」
てか、何年前の作品だ!何人に通じてんだ、このネタ!？」

ウイン「……その後、一緒にナガを倒しに行った」

遊画「仲良くなるな!!本気で怖がつて損したわ!何だこのガツカリ感、もはやガツカリ通り越して呆れたわ!」

ウイン「……そこまで酷く言わなくても」

遊画「つと、スマン。悪気は……」

ウイン「責任として、私を貰って」

遊画「断る」

ウイン「……風霊術・拘」

遊画「……はっ」

遊画が目覚めます。

遊画「危うくヴァルハラに辿り着くところだった……って
目の前、わずか1mに2人の顔が。」

遊画「……」

ウィン「……み、見るな。恥ずかしい」

エリア「っ……この、変態!!」

バチン

遊画「いつて、何で俺がビンタされなきゃいけないんだ!!」

エリア「うるさい、うるさい、貴方がいけないのですわ!!」

ウィン「……遊画の、大バカ」

遊画「何でこの2人は俺を遠ざける。やっぱり俺が信頼されてい
ないからか……」

ウィン「……多分、遊画はとんだ勘違いをしていると思う」

エリア「多分じゃなくて、絶対だと思うです」

遊画「何を話している、2人して?」

エリア「何でもないです。それでは、エンディングコーナー」

遊画「俺の話は無し!?!」

(BGM変更)

ウィン「……今日も、遊画のフラグクラッシャーがむかついた」

エリア「そうですわね、アレだけフラグがあるのに、フラグを全て
壊すのが遊画だと忘れていたです」

遊画「お前ら……何の話を?」

ウィン&エリア「貴方には関係ない!!」

遊画「だよな……」

エリア「それでは、次回のゲストは?」

ウィン「……ヒータとダルクを迎えてのラジオ小説になります」

遊画「今気づいたが、このラジオ小説は作者の誕生日スペシャルじ
ゃ……」

エリア「それではまた次回も、宜しく願います」

遊画「……まあ、いいか」

ウィン「……それでは次回も」

エリア&ウィン&遊画「また見て(ですわ)(ね……)(よな)」

収録語

遊画「だから、何をそんなに怒っている？」

エリア「知らないですわ、私たちは別に何も……怒っては……いない、ですの」

ウィン「……うん、私も別に……怒っていない」

遊画「……？別の方を向いて、何で赤くなっているんだ」

ウィン「……やっぱり、無理なのかな」

遊画「何がだ？」

エリア「……人とモンスターが、恋愛するのって」

遊画「……何の話かは知らんが、それは無いと思うぞ」

ウィン「……それって、どう言う意味？」

遊画「だってさ、そんな恋愛なんて、人と人の間だけがすると言うようなモンじゃねーだろ？それに、愛なんて、どれだけその人を好きかだろ？それが別の生き物だろ？が、好きになれば可愛がるのが普通だろ？」

エリア「でも、私たちは恋愛と」

遊画「それにだ、元々お前ら人間だろ。人間同士の恋愛なんて、誰もケチつけねーよ」

ウィン&エリア「……そう言えば、そうだった」

遊画「だからさ、思いつ切り、気になるヤツに告白すればいいって話だ」

ウィン「……でも、その人は告白しても、すぐに自分じゃダメだと言いつつ」

エリア「それは……言えているですわ」

遊画「……それじゃさ、時間をかけてゆっくりと気づかせれば良いと思う」

エリア「……っ、でも」

ヴァニティ「エリー、もう言ってしまった方が良いと思う……」
エリア「貴方は黙ってらっしゃい！」

ヴァニティ「……シヨボーン」

遊画「ああ、ヴァニティが急に出てきたと思いきや、エリアの一言で落ち込んだ!？」

カーム「ヴァニティ君の言う通りだと思うわあ、ウィンちゃん?」

ウィン「お……お姉ちゃん!？」

カーム「だつてさあ、このまま放っておくとさあ、時が来ちゃうよあ?」

ウィン「……!!!それでも、私は……」

カーム「あれれえ、ウィンちゃん、照れているのかなあ?」

エリア「ちよつと、カームさん!それは……」

カーム「エリアちゃんもお、自分の気持ちぐらいはあ、伝えた方が良いかもよあ?」

遊画「カーム?楽しんで無いか?」

リーズ「楽しんでるでござるな」

ウィン「リーズまで!?一体何の為に」

エリア「……それでも」

遊画「?」

ウィン「……そうね、私たちは、徐々にこの気持ちを伝えていく」

リーズ「……それが例え、どんな結果にもなるうともでござるか?」

エリア「ええ、それに、この場で告白しても、どうせ振られるのは目に見えていますからね」

ウィン「……急ぐ必要はない。ただ、この気持ちだけは、変えたくない」

カーム「……クスッ。貴方達、随分と大人になつたわねえ」

ウィン「……ええ、遊画に出会えて良かった」

エリア「遊画に出会えなければ、私たちは異性の事を知らずに、ただ過去の事を引きずって生きていくと言った生き方しかできなかった」

遊画「あのー、何の？」

ウィン&エリア「だから、これからも宜しくね、遊画」

遊画「え……あ、ああ、これからも宜しくな……あ？」

ウィン

どうも、遊画に興味を持たせるのは難しい。

でも、どうにかしなければ、いずれは誰かと結ばれなければならぬ……。

それが私やエリア以外の人ともあり得る。

どうにかしなければ……。

遊画「ん、どうしたんだ？ウィン」

！！、真剣な眼差し。

ウィン「な……何でも無い！！」

うつつ、そんな目で私を見ないで。

私自身が……熱くなるから。

エリア

やっぱり、遊画は場の空気に乗せられやすいけど、恋愛に乗せるのはちょっと無理がありそうですね。

なににせ、遊画は鈍感で、バカで、それでも、仲間想いの、先を見ずに私たちを守ると言い張って……。

無責任なところもあるけれど、私は少なくとも、この人の事を本気で嫌いだと思ったのは多分最初だけだと思う。

だって、自分の過去を見られて、そしてそれを弱みに何かをするのでは無いかと言う事も思ったりした。けれども、遊画はそんな事はしない。

遊画は人の気持ちを分かり過ぎた人だもの。
そんな事はしないと分かっている。
それでも・・・遊画を見つめると・・・。
遊画「エリアまで、一体どうしたんだ、2人して
うつ・・・眼差しが、眩しい。
エリア「こつちを見ないで頂けます？」
やっぱり、遊画に冷たくしてしまう。
でも、この胸の圧迫感、それに、頭が真っ白になってしまふ。
これが・・・恋なんですね。
・・・でも、気持ちだけが・・・暖かい。

遊画

うつ、ウインから見つめられている。
遊画「ん、どうしたんだ？ウイン」
ウイン「な・・・何でも無い！」
っ、颯爽とそつぽを向きやがった。
それに・・・さっきからエリアの視線も気になるな・・・。
遊画「エリアまで、一体どうしたんだ、2人して」
エリア「こつちを見ないで頂けます？」
うつつ、エリアまで・・・俺はやっぱり、信頼されて無いんだな。
・・・まあ、そう簡単に信頼される程、世の中は甘くはない。
・・・だが、少しは信頼されても良いと思う。
コイツ等にしる、何かしらの信頼を・・・欲しいとも思ったりはす
る。
それがどんな信頼でも良い。
どんな・・・。
ヒュウウウウウウウウウ
遊画「うつつ、今日も冷えるな」
以外と寒かったな、今日は。
もっと着て込めれば良かったか・・・。

そう思った矢先、右手にウインが、左手にエリアが抱きついてきた。
遊画「ちよつと、お前ら??」

ウイン「……このままじゃ、冷えるでしょう?だから、私が貴方を暖めてあげる」

エリア「……ちよつとは私たちを使いなさいですわ。貴方は一応私たちからすると、ご主人様なのですから」

ご主人様って……。

遊画「でも、少し離れてくれないか?その……恥ずかしいじゃん」

それに、さつきから妙に、心臓がドキドキする。

こんな気持ちは今まで無かったのに。

何だか……心が苦しい。

それだけじゃない、気持ちが……何だか暖かいし、どうなっているんだ??

遊画「つ……エリア、ウイン」

エリア「困っているですわね。その顔が良いですわ」

遊画「結局それが目的か!!」

油断した、まさかこんな所でそう来るとは……。

ウイン「……」

それに、2人して力一杯腕を抱きしめるなんて……冬だからまだいいが……いや、良くないが……。

これが夏だったら……恐ろしい事になっているだろうな。薄着的な意味で。

遊画「……あのー、そろそろ」

エリア&ウイン「ダメ」

遊画「……はあ、諦めよう」

これ以上何を言っても放してくれそうに無いし。仕方なく、俺はそのままの状態で帰る事にした。

ウイン「……遊画、このままいつまでも」

エリア「一緒にいて下さいですの」

・・・甘えん坊な2人だ。

遊画「・・・俺だつて、一緒にいたいさ。だが、いつか時が来れば、そんな事が出来なくなる。それが・・・」

ウィン「でも！私はその中でも信じている。今のままの幸せが、いつまでも続くと言う事を！」

！？今までにない、ウインの叫び。

エリア「それは私も同じですの、貴方とこのまま・・・離れたくない！」

お前ら・・・全く。

遊画「・・・分かったよ、このまま一緒に神社まで行くか？どうせ正月も近いし。そして一緒に祈ろうぜ。俺達の願いを」

すると2人は、笑顔で・・・言いやがった。

ウィン「・・・分かった。それなら、行こう」

エリア「素直じゃ無いですわね。それなら、行くのですの」

・・・まあ、行くのはいいが、何を願うか・・・いや、迷わなくてもいいか。

ウィン（行くとしたら、私の願いはただ1つ）

エリア（願い事・・・昔の私なら、男が滅びますようにとでも祈っていたかもしれないけど、今はもう違う。今の・・・私の願いは）

ウィン&エリア（遊画と、幸せに過ごせますように）

俺の願い、それは・・・。

遊画（今まで通りに、みんなを守れますように）

それが、今一番願いたい・・・願いだ。

誕生日スペシャル、終わり。

遊 戯 王Fate ラジオ小説 誕生日スペシャル(後書き)

あとがき

本当に、自分の誕生日の日に何やっているんでしょか。

まあいいか、俺特な感じになったし。

・・・ああ、前回で今年最後と言っていたが、本当の最後がこの話になったな。

そんなこんなで、31日は紅白とガキ を録画して、バイトをしなから年を明かしたいと思います。

皆さま、今年もお疲れさまでした。

また新年で、清々しい1年を願って会いましょう。

今回は1週間以内には仕上げたいと思いますので、それと、今後の作品作りの為に、作品の評価と共にアンケート、更にはコメントの方を宜しく願います。

本当に今年もお疲れさまでした。

では皆さま、よいお年と共に、良いデュエルを作者はお祈りします。それでは、よいお年を。それでは。

12月30日 自宅にて

第23話「確率の狭間・異次元への伴い」(前書き)

以外にも今回の5D・sは燃える展開だった。
そんなわけで、本編に負けないぐらいの気力で始めます。

第23話「確率の狭間・異次元への伴い」

「……リドウがやられたようだ」

フン、そんな事は見るまでもない。

アイツがやられる事ぐらい、俺は予想済みだった。

……覚悟を決めた。

「何処へ行く？まさかリドウの仇を打とうとしているんじゃない」

「まさか、俺はリドウを倒したヤツに興味があつてな、是非ともデ

ュエルをやりたいんだ」

「……死神のカードをすでに1枚失っている。これ以上戦って、やられれば」

オイオイ、俺を誰だと思っている？

「俺は、ヤツに復讐する為にここにいる。だから……ガキ相手にやられる訳にはいかなーんだ」

そうさ、俺は……奪われた政権を再び奪い返す為に……アイツ等を地獄のどん底に突き落とさなければならねえ。

俺の親父が味わった……極上の苦痛と言つ物を……我がアザゼル家の誇りにかけて……。

デュエルとは何か、それは己自身の限界を相手とぶつけ合う決闘。

デュエルとは何か、それは相手との絆を深め、共に信じ合う心を生む為の決闘。

そして、デュエルとは何か、それは、偶然と信じる心が奇跡を生む決闘。

この物語は、そんな純粹で鈍感な心を持つ少年、公栄遊画とその仲間たちによる、熱く、激しい戦いによる絆で世界を救う、カードゲームラブコメディである！

第23話「確率の狭間・異次元の伴い」

3台のD・ホイールが道を駆け抜けた。

すでに死神の1枚、デス・グリム・リーパー・ネルガルを手に持ち、一時的にアカデミアへと帰還していた。

「それにしても、凄い量のデュエルロボね。こんな物一体どこから……」

「恐らくだが、どこかの会社を乗っ取って、そのまま自分たちの思うがままのロボを築き上げたんだろ」

「どっちみち、ひっでえ話だ。死神の力を利用して、世の中を支配しようとは……アホとしか思えないな」

俺は、道ばたに落ちていたリドウの死神のカードを手にとった。

こんな小さなカードに、恐ろしい力が込められているとは……恐ろしい物だ。

このカード1枚で、一体どんな恐ろしい事が起こるんだ？

……想像もしたくない。

そんな事を思い、死神のカードをポケットにしまい、自分が持っている、もう1枚のカードを取り出した。

いつ見ても、空白のカード。

これが一体、どんな効果があるのか……。

もしかしたら、死神以上の恐ろしさを持つカードなのかもしれない……。

そうだとしたら、俺はこのカードをどうすればいい。

捨てるのか？ いや、そんな事をやれば……きつと、あの子は悲しむ。

それに、あの子は言った。

『この3枚のカードは、いずれ貴方の力になります。そして貴方を助ける事でしょう』

3枚のカード、その意味は、よく理解している。

あの3枚のカード……そして、そのカードの中の1枚。

こんなカードが、俺をどう導くのか……。

何か、不安でいっぱいだった。

そう思っていた時、目の前にアカデミアが見えてきた。

「遊画、アカデミアが見えてきたぞ！」

それぐらい、見れば分かる。

「さっさとこのカードを封印しましょう。何か起こる前に」

沙耶がそう言うと、俺達はD・ホイールを加速させた。

・・・のと同時に、それは現れた。

急に目の前にD・ホイールが現れた。それも、ドハデで眩しい、D・ホイールが・・・。

D・ホイールの周りに数百個の電球が取り付けられており、もはやこれがかっこいいと言うヤツがバカに見えるような姿、形のD・ホイールだった。

「イヤッツホオオオオオオウ！」

そのドハデなD・ホイールは、一時的に宙浮いていたが、万有引力の力で地面に降下し、ギユインと言う音を立てながら、俺達の前で停止した。

「キサマがリドウを倒したデュエリストか」

・・・リドウの名を口にした。

・・・そうか！！コイツはあの時の・・・。

「だったらどうする」

すると、その人はヘルメットを脱いだ。

年齢的には24歳ぐらいの顔立ちに、特徴的な口元のほくろ。

そんな感じの男性が、俺をジッと見た。

「ほうほう、こんなガキにアイツはやられたのか。バカだな」

っ！！

「キサマ！！もう一度言ってみろ！！」

「キサマ？オイテメエ、誰に向かってそんな口を聞いている？」

っ、感じ悪いヤツだ。

「俺にはな、ニコラと言う名前があんだよ？それにな、アイツを笑って当然だ。リドウが負けるなど・・・フン、死神を使いこなせ

ていなかったバカだったからな。いや、クズとでも言おうか」
「……っ……」

「ニコラ！死者を侮辱するその行為……万死に値する！！」
「だったらどうした。俺とデュエルで勝負するか？」

「つと言っよりは、その為にここに来たんじゃねーのか？だったら
そのデュエル、俺が挑んでやる！」

「分かりが早いヤツだ、さて、さっさとケリをつけて……」
「待て！！」

俺がD・ホイールに取り付けられているライディングデュエル、開
始のボタンを押そうとした時、いきなり後ろからフルが叫んだ。

「フル、どうしたんだ」
「フル？」

「俺は……お前の力になりたいんだ」

「……俺は、悩んだ。」

行かせてもいいのか、もし、行かせたとしたら……フルは間違
いなくさっきのようなデュエルの痛みを受ける事になる。

あんな痛み、受けるのは俺1人で十分だ！

「……いや、ダメだ。あんな危険なデュエル、お前まで巻き込
む訳には」

「遊画、お前……忘れて無いか」
「……フル？」

「俺はアカデミア1強いと言われたデュエリストだぞ。そんな、い
ない相手を侮辱するような相手に、負けてられるかよ」

「……ふっ、お調子者が。」

「……っ、俺を見下すとは……キサマ、覚悟はしている
んだろうな」

するとフルは、今まで通りの声で、答えた。

「おうよ、俺は最強を目指すデュエリストでもあるんだぜ。いろい
ろな相手を倒す事により、成長し、そして最終的には……キン
グを超えるデュエリストになってみせる」

お前は・・・全く。

「分かった、俺はお前を信じる。だが油断はするな、ネルガルのような恐ろしい効果があると思われる第2の死神。無理に突破しようとする・・・」

「んな事は分かっているって。俺がそんな憶測だけで突き進むような熱血バカに見えるか？」

それもそうだな。

「んじゃ、まかせたぞフル。光栄たる我が遊画の名の元に、このデュエル、お前に託すぜ」

俺は少しD・ホイールをバックさせると、後ろからフルが前へと進んだ。

「ほう、なかなか度胸のあるデュエリストじゃねーか。俺があ頃俺だったら、間違いなく城に読んでいただろうな」

「ゴチャゴチャと言わずに始めよーぜ！」

「フン、そうだな。フィールド魔法」

「スピード・ワールド2、セット、オン」

いつもの声と共に、フルの画面に1枚のカードが現れた。

『デュエルモード、オン。オートパイロット・スタンバイ』

そして、目の前に信号が現れた。

この信号が赤から青に変わった瞬間、デュエルはスタートする。

10、9、8、7、6、5、4、3、2・・・。

「ライディング」

「デュエルー！」

1、0、GO

「アクセラレーション！！」
「FULLVSNikora L
P4000」

一斉に2台のD・ホイールが走り出した。

続いて俺達も走り出した。

出発点が普通の道だったため、途中でデュエルレーンへと続く道が現れた。

『デュエルが開始されます、デュエルが開始されます、ルート上の一般車両の方々は回避をお願いします』

一般道の車がルート上から回避し、その道を俺達が通っていった。……ツツこんでも良いならツツこむが、一般人からすれば、迷惑極まりない光景だと思う。

もう慣れてるから別に良いが。

そんな事をフツと思ったが、とりあえず、2台のD・ホイールはコース内へと入り込んだ。

そして先行レーンを、我が先にと走っていた。

「先行は頂いた」

フルがそんな事を口走った矢先、ニコラのD・ホイールが脅威の加速と、脅威のテクニクで先行レーンへと入った。

「う……ウソだろ!! あんなスピードで!!」

啞然とするフルを後目に、ニコラは先行を走り込んだ。

「まずは俺のターンだ! 俺は異次元の悪魔を相手フィールド上に特殊召喚」

あ……相手フィールド上にだと!

フルのフィールド上に、悪魔モンスターが現れた。

「一体なんのつもりだ………異次元の悪魔・悪魔族・ATK1

00・闇・2・効果」

「そして、カードを2枚伏せてターンエンド」

この戦術……何をやらかすつもりなんだ。

「何がやりたいかは知らねーが、俺の場にモンスターを送り込んだ事に後悔するんだな。俺のターン!」

N i k o r a ・ S p c 1 ・ L P 4 0 0 0

F u l l ・ S p c 1 ・ L P 4 0 0 0

よし、このままこの手札で……。

「このまま終わらせる俺だとも思ったのか? 相手にモンスターを送ってやったんだ。お前にも落とし前をつけてもらわなきゃな。永

続闘、発動!!」

こ……この罠は!

「狭小の地下道。これでお互いにフィールド上に存在できるモンスターは1体となった。狭小の地下道・永続罠・効果、お互いのプレイヤーが自分フィールド上に召喚し存在できるモンスターは1体までとする。自分フィールド上にモンスターが2体以上存在する場合、1体になるように自分フィールド上のモンスターを破壊する。それにより、お前はこれ以上モンスターを展開できない」

油断した……まさか俺がシンクロ使いだと知っての戦術か。

「ならば、異次元の悪魔を守備表示へ……」

「ちなみにコイツは守備表示にはできない」

「っ、俺はカードを3枚伏せてターンエンド!!」

「っふ、俺のターン」

N i k o r a ・ S p c 2 ・ L P 4 0 0 0

F u l l ・ S p c 2 ・ L P 4 0 0 0

「ドロー」

ヤツは一体、何のカードを引いたんだ?

「……っふ、相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、手札から異次元の格闘家は特殊召喚できる。現れよ、異次元の格闘家。異次元の格闘家・戦士族・ATK2400・地・6・効果」

攻撃力2400!!この攻撃が通れば……。

「バトル、異次元の格闘家で、異次元の悪魔を攻撃!!アーム・グランド・チョップ!!」

させるか!!

「罠発動!!瞬着ボマー装置!相手の攻撃時に、その攻撃を無効にし、デッキから瞬着ボマーを相手モンスターに装備させる!!瞬着ボマー装置・罠・効果、相手の攻撃宣言時に発動する事ができる。その攻撃を無効にし、デッキから「瞬着ボマー」を3体まで、相手フィールド上に存在する表側表示のモンスターに装備させる。この

効果で装備された「瞬着ボマー」の効果は発動される。それにより、俺はその攻撃を中断させ、異次元の格闘家に瞬着ボマーを装備させる!!!」

瞬着ボマーが、攻撃を行った異次元の格闘家の腕に絡まり、格闘家は攻撃が出来ないと判断し、元の位置に戻った。

「チィ、だが、手札を見てみな?」

「???手札だ・・・!!こ、これは・・・。

手札が・・・一枚無くなっている。

「異次元の悪魔の効果。それは、コントローラーが魔法、または罠を発動させる時、手札一枚をランダムにゲームから除外してしか発動できない。つまり、コイツをどうにかしない限り、お前は手札が無くなっていくと言う事さ」

するとヤツのデッキは・・・。

「異次元型の手札、及びデッキ破壊型か!!」

「そうさ、俺はターンエンド」

残る手札は・・・3枚。

「っ、俺のターン!!」

N i k o r a ・ S p c 3 ・ L P 4 0 0 0

F u l l ・ S p c 3 ・ L P 4 0 0 0

よし、これなら。

「自分フィールド上に存在する、異次元の悪魔をリリースし、手札からパルド・ブースターをアドバンス召喚!」
「パルド・ブースター・機械族・ATK2000・闇・5・効果」

「フン、そんな攻撃力が低いモンスターなど、敵では無いわ!」

「それはどうかな?」

「なに!!!」

何にせこのモンスターには・・・。

今の状況を打開できる効果がある!!!

「パルド・ブースターの効果発動!このモンスターの召喚時、手札からチューナー1体をこのモンスターへ装備できる。その効果によ

りチューナーを装備したこのモンスターの攻撃力は500ポイント
ダウンする。俺は、手札のボム・ゼロを装備。それにより、このモ
ンスターの攻撃力は500ポイントダウンする！ハパルド・ドライ
バー・ATK2000 1500」

「んな！！フル、攻撃力が下がったぞ！これは一体どういう事だ！
？」

「フン、わざわざ自滅への道を選んだか。ならばそのままターンエ
ンドしろ」

・・・バーカ、誰がそのままターンエンドするかよ。

「パルド・ブースターの効果発動！このモンスターがシンクロ素材
となる時、チューナーは魔法、罨ゾーンに存在するモンスターで代
用できる！」

「んな！狭小の地下道の効果を逆手に取りやがっただど！！」

「フィールドが空いていない事もあるからな、これぐらいどおって事
ねーよ。」

「俺は、レベル5のパルド・ドライバーにレベル4のボム・ゼロを
チューニング 5 + 4 = 9 大いなる機械のゴーレムよ、完
全なる力と完全なる火力を備え、この戦場を弾圧せよ！！」

4つの星が空を舞い、そして4つの輪を形成し、その中にパルド・
ドライバーが入り込み、そのまま強い光が発生した。

「シンクロ召喚！！起動せよ、パワー・フレーム・ゴーレム！！」
フィールドに、1体の大型機械族モンスターが現れた。

背中には巨大なミサイル・ランチャーに、右腕には大型のガトリン
グ砲、更には左手には巨大な盾を持った、まるで対巨人を想定した
ような装備をしたゴーレムであった。

「チッ、この状況でシンクロ召喚を許すとは・・・」

「そうさ、俺は・・・あらゆる状況を想定してこのデッキを使っ
ている。だからこそ、コイツを呼び出す事ができた！！ハパワー・
フレーム・ゴーレム・機械族・ATK3200・地・9・シンク
ロ、効果ハパワー・フレーム・ゴーレムの効果発動！このモンスタ

ーのシンクロ召喚時、自分の墓地に存在する機械族モンスター1体をこのモンスターに装備できる。俺は、ボム・ゼロを装備!!」
ボム・ゼロが現れ、パワー・フレーム・ゴーレムの胸元に装着された。

「これにより、攻撃力が300ポイントアップ
パワー・フレーム・
ゴーレム・ATK3200 3500」

「っ、この状況で……」

「更にパワー・フレーム・ゴーレムの効果により、フィールド上の装備カード1枚につき相手に300ポイントのダメージを与える! 食らえ、アーミー・ミサイル!!」

ミサイルポットから、2発のミサイルが放たれた。

そして、見事にニコラに直撃した。

「装備カードは相手も合わせて2枚、よって、600ポイントのダメージとなる!」

「……!!ちっ」
LP4000 3400

「そのままターンエンド」

ターンエンドだ!!

相手を戦闘で破壊せずに……。フルのヤツ、何を考えている……。

「俺のターン!!」

Nikora・Sp4・LP3400
Full・Sp4・LP4000

「このスタンバイ時に瞬着ボマーの効果により、お前の異次元の格闘家を破壊する!!」

ボムが膨張し、そのまま爆発を起こした。

「さらに、パワー・フレーム・ゴーレムの効果により、このモンスター以外の装備モンスターを装備したモンスターが破壊された時、相手に500ポイントのダメージを与える。ビッグ・ガトリング!

！」

パワー・フレイム・ゴーレムのガトリングから火が吹いた。

そして、ニコラは大量の弾丸を浴びせられた。

「ぐあああああつ、このヤロ―が！」　「LP3400　2900」

このままの調子で行けば完璧だ。

「んの・・・図に乗るな！！」

「どうやらお前も口だけのようだったな。強いのかと思えば、とんだ勘違いだったようだ」

つついっ相手を挑発した。

「んの・・・調子に乗るな！！このクソガキが！テメエに何が分かる。ただ単に正義のために死神を取り返しに来たんだろ？がな、俺は・・・このカードを奪われる訳にはいかねーんだよ！！」

「いきなり何を言う！」

「俺はな・・・奪われた国を奪い返す為に・・・負ける訳にはいかねーんだよ」

奪われた国・・・一体何を言っているんだコイツは。

「・・・あー！！思い出した」

急に後ろの方で沙耶が唐突に叫んだ。

「この人・・・バチカン市国の元教皇、ニコラ・アザセルじゃない」

教皇だと！！

「そうだ、俺はバチカンの教皇をしていた・・・ニコラ・アザセルだ！俺は数年前まで・・・バチカンの教皇をしていた・・・だが数年前」

）数年前

「父上、これは一体どう言う事だ！」

「見ての通りだ。我がバチカン市国は・・・今現在、危機に陥っている。このままではバチカン自体が消滅してしまう。そのために私は、とある会社と契約した。これで、少しは良くなったと言って

いる」

「ですが父上、アイツ等は何か企んでいるハズです！バチカンの地下に存在する、あのカードを狙っているかも知れません」

「……ニコラ、人を信じるのも、社会に貢献するための手でもあるのです。だから、やたらむやみに人を疑ってはいけません。これは、神のお告げでもありません」

「父上……」

そうして、俺は親父を信じてヤロー共を放っておいた。だが！！

「これは一体どういう事だ！我らが……サテライトに強制轉換だとは！」

サテライト、日本の荒れた地域である場所に……強制轉換されたのだ。

「これは国民の意志でもありませんぞ？変わりに私たちが教皇を勤める。そして、元々いた奴らをサテライトに送りつける。これで満場一致しました」

ウソだ！！

国民が……俺達をそんな事にさせるなどしない。

これが……カードを手に入れたい奴らの意思かよ。

ふざけんな……ふざけんな……。

「さあ、出て行って貰いましょう」

そうして、俺達は行き場を失った……。

「その後、ナスカ様にこの身を拾われたのだ」

こ……こんな事って……。

「だから俺は誓ったんだ。ナスカ様と共に、この世界を手に入れ、俺達を蹴り落とした奴らを……殺すと」

「な……何も殺しまでは」

「親父はその後、この事に責任を感じ、自殺した」

「」「！」「！」「」

こんな、重い事に・・・どう対処すればいいんだよ。
俺は、どうすれば!!

「だったら、お前の親父さんと同じ思いをさせるのか!」
ゆ・・・遊画?

「ああそうだ、俺は、奴らに同じ絶望を味合わせようとしている」
「ふざけるな!! そんな事をやって、お前の親父さんが喜ぶ訳が無いだろ!」

「いや、俺の親父は喜ぶ。あんな憎たらしい奴らを殺せるのなら・・・」

「お前の親父さんは、国の為にその会社と契約したんだろ! だったら・・・そいつ等を、別の方法で見返してやれ!」

「だったらどんな方法があるとしても言うんだ! 殺しの他に・・・方法が」

「それは・・・」
遊画の言葉が詰まった。

「フン、ガキの分際で、容易く口を出すな!!」
ニコラは、手札のカードをデュエルディスクに差し込んだ。

「手札からスピードスペル、鉄塊の鉄食い虫を発動。自分のスピードカウンターが4つ以上の時に発動する事ができる。お互いのデッキから自分のスピードカウンターの数だけ、相手と自分のデッキからカードを墓地へ送る。Sp-鉄塊の鉄食い虫・Sp魔法・効果、自分のスピードカウンターが4つ以上の時に発動する事ができる。お互いのデッキから自分のスピードカウンターの数だけ墓地へ送る。それにより、お互いにデッキからカードを4枚墓地へ送ってもらおうか」
俺もニコラも、デッキからカードを墓地へ送った。

「クツ・・・せっかくのカードが」
だが、その中にはチェスト・アカツカーも存在していた。
これは・・・今度こそ。

「フン、何か企んでいるようだがな、そうはいかねーんだよ!」
んな!!

「俺はさつき墓地へ送ったモンスターの数は3体、そして、元々い

たモンスターは、異次元の悪魔、そして、異次元の格闘家、この意味、分かるか？」

「モンスターの合計は・・・4体。まさか!!!」
遊画は何か感づいたようだ。

一体何が・・・？

「フル、忘れたのか。死神の召喚条件は・・・墓地のモンスター4体を除外しての特殊召喚だ！」

っは!!!

まさか・・・こんな短期間で・・・すぐにレベル10のモンスターを召喚できるとは・・・。

「そのまさかだ!!!自分の墓地に存在する、異次元の悪魔、異次元の案内人、異次元の管理者、そして、異次元の砲術師をゲームから除外し、手札から、異次元を操りし死神、デス・グリム・リーパー・エレシユキガルを・・・特殊召喚!!!」

その時、リドウの時と同じように・・・地響きが起こった。

そして、地面が割れ、中から1体の巨大な何かが動き出した。

女性を思わせる体に、死神らしい巨大な鎌、そして、ネルガルとは違った違和感・・・。

コイツには、一体どんな能力が備わっているんだ!

「これが、俺が操る死神・・・。デス・グリム・リーパー・エレシ

ユキガル。相手を帰す所を無くす死神だ!!!^{デス}Death・Gri

^ムm・Reaper・Ereshkigal・悪魔族・ATK270

0・闇・10・効果」

これが・・・第2の死神。

デス・グリム・リーパー・エレシユキガル・・・。

「だが、攻撃力はこっちの方が上だ。それを一体どうしよう?」

「エレシユキガルの効果発動!エンドフェイズまで、相手フィールド上に存在するモンスターの攻撃力の半分アップする」

「んな!!!」

「それにより、エレシユキガルの攻撃力は、攻撃力3500の半分、

1750の攻撃力をアップさせる!!
Death・Grim・Reaper・Ereshkigal・ATK2700 4450デス・グريم・リバー・エレシユキガル
ただし、この効果は2ターンに1度しか発動できない。そのままバトルだ、エレシユキガルで、パワー・フレイム・ゴーレムに攻撃！
ソウル・ダスト・デスサイズ!!」

その巨大な鎌が振り上げられ、糸も簡単にパワー・フレイム・ゴーレムを引き裂いた。

パワー・フレイム・ゴーレムが、あんな簡単に……。

そして、爆発を起こした。

「うああああああ!!」LP4000 2750クツ、体に痛みが。

クツ、体に痛みが。

これが……闇のデュエル。

「そして、エレシユキガルがフィールド上に存在する限り、墓地へ送られるカードは墓地へは行かずに、ゲームから除外される!」

「んな!!」

墓地からパワー・フレイム・ゴーレムが出された。

俺はそれを抜き取り、除外用の収納ケースへと入れた。

「俺はターンエンドだ。それと同時に攻撃力は元に戻る」
Death・Grim・Reaper・Ereshkigal・ATK4450デス・グريم・リバー・エレシユキガル
2700クツ、体に痛みが。どうだ、痛いだろ。これが……俺が受けた心の

傷だ!!」

……だが、こんな所で負けられないな。

何だつて、その後ろには……。

「フル、負けるな!!」

「フル、頑張つて!!」

俺の仲間が見ているんだ。

こんな所で、負け恥をさらす訳にはいかない!!

死神なんだか知らねーが、こんな所で……。

負ける訳にはいかねーんだよ!!

続く

次回予告

「俺はとあるデュエリスト達に出会った。そして、知らされたんだ！カードとは、決して道具ではない。俺達の・・・命その物だ」と！

「そんな寝言がいつまで言えるのか、これで終わりだ！」

「そんな事はさせねーぜ！いつだって、俺は勝利だけを望む男だ！こんな所でくたばるような、安い男では無い！」

次回、遊戯王Fate 第24話「望みの果て」

「これが・・・」

「俺達の・・・」

「絆だ！！」

次回のキーカード

確率の狭間・異次元への伴い・永続罫・効果

第23話「確率の狭間・異次元への伴い」（後書き）

あとがき

どうも、あけましておめでとугоざいます。

ついに第24話まで来た、この小説。

いい加減さし絵を追加したい物ですが、絵の方がドヘタな物で、誰かに頼んでもすぐに忘れられ・・・。

本当に、今年は大丈夫かな。

そして、個人的な心配に来年で高校卒業できるかな・・・。

つと、愚痴をスイマセン。

それでは次回、1週間以内で書き終えますので、宜しく願いします。

また次回、満足しようZ E

1月5日 自宅にて

第24話「望みの果て」(前書き)

冬休み最後の思い出がこれになるとはな。

第24話「望みの果て」

「そのままバトルだ、エレシユキガルで、パワー・フレイム・ゴレムに攻撃！ソウル・ダスト・デスサイズ！」

その巨大な鎌が振り上げられ、糸も簡単にパワー・フレイム・ゴレムを引き裂いた。

パワー・フレイム・ゴレムが、あんな簡単に……。
そして、爆発を起こした。

「うあああああああ！！！！」LP4000 2750

クツ、体に痛みが。

これが……闇のデュエル。

「そして、エレシユキガルがフィールド上に存在する限り、墓地へ送られるカードは墓地へは行かずに、ゲームから除外される！」

「んな！！」

墓地からパワー・フレイム・ゴレムが出された。

俺はそれを抜き取り、除外用の収納ケースへと入れた。

「俺はターンエンドだ。それと同時に攻撃力は元に戻る」Death

h・Grim・Reaper・Ereshkigal・ATK44
デスリム・リーパー・エレシユキガル

50 2700 ㍷どうだ、痛いだろ。これが……俺が受けた心の傷だ！」

……だが、こんな所で負けられないな。

何だつて、その後ろには……。

「フル、負けるな！！」

「フル、頑張つて！！」

俺の仲間が見ているんだ。

こんな所で、負け恥をさらす訳にはいかない！！

死神なんだか知らねーが、こんな所で……。

負ける訳にはいかねーんだよ！！

「フン、苦しんでいるようだな」

チツ、気楽にしているな、アイツ。

「俺のターン!!」

N i k o r a ・ S p c 5 ・ L P 2 9 0 0

F u l l ・ S p c 5 ・ L P 2 7 5 0

・・・ダメだ、今はこれじゃない。

「クツ、ターン・・・エンド」

「悪あがきが、俺のターン!」

N i k o r a ・ S p c 6 ・ L P 2 9 0 0

F u l l ・ S p c 6 ・ L P 2 7 5 0

「バトル、デス・グリム・リーパー・エレシユキガルで、フル・アルカデスにダイレクトアタック!ソウル・ダスト・デスサイズ!」

「フル!!」

・・・ニヤリ。

俺はずっと、この時を待っていた!!

デュエルとは何か、それは己自身の限界を相手とぶつけ合う決闘。

デュエルとは何か、それは相手との絆を深め、共に信じ合う心を生む為の決闘。

そして、デュエルとは何か、それは、偶然と信じる心が奇跡を生む決闘。

この物語は、そんな純粹で鈍感な心を持つ少年、公衆遊園とその仲間たちによる、熱く、激しい戦いによる絆で世界を救う、カードゲームラブコメディである!

第24話「望みの果て」

「バトル、デス・グリム・リーパー・エレシユキガルで、フル・アルカデスにダイレクトアタック!ソウル・ダスト・デスサイズ!」

俺に目掛けて、巨大な鎌が振り下ろされた。

「フル!!」

・・・ニヤリ。

俺はずっと、この時を待っていた！！

「畏発動！！リバーズ・アンド・シンクロ。相手が直接攻撃を宣言した時、その攻撃を無効にする。そして、ゲームから除外されているチューナーと、チューナー以外のモンスターをデッキへ戻し、そのレベル分のシンクロモンスター1体を、自分のエクストラデッキから特殊召喚する！！」
「リバーズ・アンド・シンクロ・カウンター
畏・効果、相手が直接攻撃を宣言した時に発動する事ができる。その攻撃を無効にする。その後、ゲームから除外されている自分のチューナーと、チューナー以外のモンスター1体を選択して、選択したモンスターをデッキへ戻す事により、エクストラデッキより、戻したレベル分のシンクロモンスター1体を、シンクロ召喚扱いとして自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。この効果を使用した場合、次のターン、自分はシンクロ召喚ができない」
「相手ターンに・・・しかも除外を逆手に取っただと！！」

「俺は、除外されているレベル3のカノン・サーチャーに、レベル4のボム・ゼロをデッキへ戻し、チューニング！ 3 + 4 =
7
」

「んな！！2体とも俺の記憶には・・・そうか！！あの時」
まず1体は装備カード扱いになって一緒に除外され、もう1体は異次元の悪魔の効果で！！
高度な計算の元でやったな、フル・アルカデス！！

「稲妻に紛れし竜よ、混沌の空と混沌の海にて全てに光りを照らし出せ」

渦の中から2体が出て、ボム・ゼロの星が輪となり、そしてその中にカノン・サーチャーが入り込んだ。

「シンクロ召喚！光り輝け、フラッシュ・ボルテッカー・ドラゴン
ハフラッシュ・ボルテッカー・ドラゴン・ドラゴン族・ATK2700・光・7・シンクロ、効果」

トゲトゲと、まるで稲妻をかたどったような竜が舞い降りた。

「クツ・・・攻撃を邪魔された挙げ句、今度は除外ゾーンからシンクロとは!!」

「へへっ、今はその罠、ただの邪魔にしかなくてないな」

「チツ、いい加減この狭小の地下道がただの邪魔にしなくなつた・・・。だったら、俺も、ガキ相手だが、本気を出す。俺はもう1枚のスピードスペル、パラサイト・ドストロイを発動。自分のスピードカウンターを4つ取り除く事により、自分フィールド上に存在する永續罠を破壊する」
「SpC6 2」

フィールド上に浮かんでいた狭小の地下道が粉々に砕けた。

「んな・・・自分の永續罠を破壊した！」

何かイヤな予感しかしねーな。

「そして、相手のデッキからカードを、自分フィールド上に存在するモンスターのレベルの合計分墓地に送る!」
「Sp-パラサイト・ドストロイ・Sp魔法・効果、自分のスピードカウンターを4つ取り除き発動する。自分フィールド上に存在する永續罠を破壊し、相手のデッキから、自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターのレベルの合計分のカードを墓地に送る」

「んなに!!」

「俺の場のモンスターの数は1体、だがレベルは10だ。デッキから10枚墓地へと送つてもらおうか」

俺のデッキの枚数は40枚、だが、今の数は・・・19枚!

手札の数も考えれば・・・残り、3ターンが限界と言う事か!

「クツ、それに・・・」

エレシユキガルがフィールドに存在する限り、デッキから墓地へと送ったカードは全て・・・ゲームから除外される。

だから、迂闊に放置していたら・・・デッキ切れで俺は負ける。

「どうすれば・・・」

せめてあの罠が来れば、だがヘタすれば、そのカードが除外される確率がある。

つまり今の俺には……どうする事もできない。

「だが……ここで諦めない。俺は……必ず勝てる」と信じて
!!!」

「無駄だ、お前は俺に勝てはしない。ターンエンド」
だったら……やってみなければ分かんねーだろ。

「俺のターン!」

N i k o r a ・ S p c 3 ・ L P 2 9 0 0

F u l l ・ S p c 7 ・ L P 2 7 5 0

またか。

「俺はカードを1枚伏せてターンエンド」

「何がやりたい。ただカードを1枚伏せただけで何になる。俺のタ
ーン!!!」

N i k o r a ・ S p c 4 ・ L P 2 9 0 0

F u l l ・ S p c 8 ・ L P 2 7 5 0

「伏せカードが2枚で、このまま攻撃するのは怖い気はする。そこ
でだ、エレシユキガルのもう1つの効果を発動!」

んな!まだ効果があるのかよ。

「相手のデッキからカードを7枚墓地へ送る。ただしこのターンは
攻撃が行えない。さあ、デッキから墓地へは送れねーからな、除外
してもらおう」

「ん!!!」

デッキからカードが7枚、渦の中に吸い込まれた。

残り12枚!

「ははははは、ターンエンド」

っ、後2ターンでスピードカウンターが10になり、スピード・ワ
ールド2の効果でアレを破壊できる。

だが……その場合だと、残る俺のデッキは4枚になる。
どうすればいい。

無闇に攻撃して、デッキを更に破壊されたら……。

「フル!!!」

ゆ・・・遊画。

すると、遊画は俺のところまで一気に加速してきた。

「フル、お前はこんなところで果てるようなヤツじゃねーだろ！自分を信じる。自分を信じて・・・デッキを信じる！」

遊画・・・お前ってヤツは。

「俺に残された希望は・・・次のターンのドローのみだ！」

何が来るかで・・・勝負が決まる。

「俺の・・・ターン！！！」

N i k o r a ・ S p c 5 ・ L P 2 9 0 0

F u l l ・ S p c 9 ・ L P 2 7 5 0

「ドロオー！！！」

引いたカードは、まだ手元にある。

何を引いた・・・そして、これで決まるのか。

俺は恐る恐る、引いたカードを見た。

確率の狭間・異次元への伴い

これだ！！

「カードを1枚伏せてターンエンド」

「悪あがきもここまでだな。俺のターン」

N i k o r a ・ S p c 6 ・ L P 2 9 0 0

F u l l ・ S p c 1 0 ・ L P 2 7 5 0

「俺は再びエレシユキガルの効果を発動。相手のデッキからカードを7枚墓地へ送る。デスサイズ・スラッシュ！」

また俺のデッキから・・・カードが墓地へと送られた。

これで残るは4枚。

「これで後が無くなったぞ、さあ、どうする？」

だが、これで全てが整った。

「・・・昔な、とある人から言われた」

「ああ？何の話を」

「カードとは、決して道具では無い。デュエリストの魂その物だと」「ケツ、何を言い出すのかと思えば。良いか、カードはな、結局は

道具なんだよ。デュエルでしか使用できない……ただの小道具なんだよ」

「違う！カードは……そいつの魂その物だ！！」

これは……俺のデュエルの師から教えられた……デュエリストとして忘れていけない事だ。

「俺もかつて、カードは道具としてしか見ていなかった。だが……そんな妄想は打ち砕かれた」

「打ち砕かれた……だと」

「そうだ、とある場所で出会ったあのデュエリスト達、俺は無謀に勝負を挑んだ。そして……俺は負けた」

だが、それが原因で俺は思い知らされた。

「相手はその後聞いてきた。お前にとって、カードとは何かと」

「んで、お前は何と答えた？」

「……ただの道具だと。するとその瞬間、一発殴られた」

子ども相手にも関わらず、俺は思いつ切り、殴られた。

「そしてその人はこう言ったんだ」

『お前にとって、カードがそのくらいの価値しか無いとは……』

カードが泣くぞぞ！』

「んな……バカかそいつは、カードが泣く？そんなばかばかしい事が……」

「だが実際、俺のカード達は泣いていた！」

そうさ、俺には……高性能の呪いがあるから、勝手にカードの声が聞こえたんだ。

「ば……そんなバカな事が……」

「これは空想では無い。そして、俺はしばらくその事を考えるのをやめにした。そして俺はある日、とあるバカに出会った」

そう、とあるバカにな。

「そいつはな、自分を信じてくれるヤツの為にデュエルをしていた。昔は連勝記録を更新したヤツでな、その時は逆に連敗していた」

後ろで「オイコラ待てコラ、それはまさか」と聞こえたが、無視し

て話を続けた。

「いくら負けても、信じてくれる仲間がいれば……カードが答えると言っていた」

そうさ、そいつこそが。

「それを見て俺は思った。カードとの絆は……デュエルだけの物では無いと。絆とは……いつも一緒にいてこそ、得られる物だ……！」

「バカを言え、だからどうした」

「つまり……俺はとあるデュエリスト達に出会った。そして、知らされたんだ！カードとは、決して道具ではない。俺達の……命その物だと！そして……絆とは、信じれば叶えてくれる物だと」

「そんな寝言がいつまで言えるのか、これで終わりだ！そんな寝言など……これで消し去ってやる。手札から異次元の昆虫を準備表示で召喚へ異次元の昆虫・昆虫族・DEF1300・闇・3・効果このモンスターの召喚時、相手はデッキからカードを3枚墓地へと送らなければならない」

つ……俺は、デッキからカードを3枚……ゲームから除外した。

「これで残りはあと1枚。ライフもたつぷりある。俺はターンエンドだこのまま行けば俺の勝ちだな」

「いいや、お前は敗北で終わる」

「なに……！」

「勝つだど？そんな事はさせねーぜ！いつだって、俺は勝利だけを望む男だ！こんな所でくたばるような、安い男では無い！」

「だったらやって見る。今の絶体絶命の状況で勝つ方法をな」

ああ、やってやる。

「俺の……ターン……！」

N i k o r a ・ S p c 7 ・ L P 2 9 0 0

F u l l ・ S p c 1 1 ・ L P 2 7 5 0

これでデッキが無くなった。

だが、これでいい。

「俺はスピード・ワールド2の効果発動。自分のスピードカウンタ
ーを10個取り除く事により、Spcc111、フィールド上のカ
ード1枚を破壊する。俺は、エレシユキガルを破壊!!」

俺のD・ホイールから雷撃が走った。

が。

「言い忘れたが、このモンスターは魔法、罠カードの効果で破壊さ
れる場合、500ポイントを払う事により、その効果では破壊され
ない。俺は500ライフを払い、破壊を阻止する!!」LP29

00 2400

エレシユキガルは、その雷撃を叫び声でうち消した。

「グオオオオオオオオオオオオオオオ」

半端じゃない声に、俺は恐れを抱いた……ん。

魔法、罠カードの効果……。

「ニコラ、お前は言ったな。魔法、罠の効果だと」

「ああ言った。だがお前にはどうする事は」

「フラシユ・ボルテッカー・ドラゴンの効果発動!1ターンに1度、
手札1枚を墓地へ送り、相手フィールド上に存在する表側のモンス
ター1体を破壊する!」

「んなに!!モンスター効果だと!?!」

俺は恐れていた。

もし、この時破壊できなかつた場合、俺は負けだと確信した。

だが今は違う。

弱点を見つけ出し、対抗策も万全だ。

「ボルテッカー・シヨット!」

ボルテッカー・ドラゴンの口から、巨大な電気弾が吐き出され、そ
れが死神に、直撃した。

「グオオオオオオオオ!!」

そして死神は、みるみるうちに灰と化し、最後には消え去った。

「ば……万全の……俺のデッキ破壊が」

「仲間を信じれば……奇跡は起こる!!」

「……だ、だがまだだ。このターンを凌げば、俺の勝ちだ」

確かに、デッキは現在0枚。

これはもう、どうする事もできない。

それに、相手も伏せカードが1枚だけある。

だったら……ここは賭だ。

「永続罨オープン、確率の狭間・異次元への伴い。1ターンに1度、コインストを行い、それが表だった場合、自分は墓地、またはゲームから除外されているモンスター1体を選択して、そのモンスタ―を特殊召喚する」

「んなに!!もしこれで表だった場合……」

「ただし、裏だった場合は……自分のデッキからカードを2枚除外しなければならぬ。これは言わば、ギャンブルだ! 確率の狭間・異次元への伴い・永続罨・効果、1ターンに1度、コインストを1回行う。そして出た目によって以下の効果を得る。・表、自分の墓地、またはゲームから除外されている自分のモンスター1体を選択して自分フィールド上に特殊召喚する。・裏、自分はデッキからカードを2枚ゲームから除外しなければならない。また、この効果は相手も使用する事ができる」さあ、運命の時間だ!」

目の前に、巨大な異次元隔離マシンが姿を現した。

そして、中には表と裏と描かれたスロットがあった。

アレで決めるらしい。

「では、スロット、オン!!」

目の前のスロットが、回転を始めた。

表、裏、表、裏と、止まる気配も無く、それは周り続けた。

……よし。

「ストップ!!」

随分と回っていたが、ストップのかけ声と共に、回転がゆっくりになつた。

表、裏、表、裏、表……。

緊張の瞬間だ。

これで裏が出た場合、俺は負け。

……っ。

「お願いだ、表で止まれ!!」

裏……表!!

パッパパッパッパ!

ラッパの音と共に、スロットの中から1体のモンスターが現れた。

「表の効果により、ゲームから除外されている、サイバー・ドラゴンを特殊召喚する!」サイバー・ドラゴン・機械族・ATK2100・光・5・効果」

光の中から、機械で出来た体を持った竜が、姿を現した。

「さ……サイバー・ドラゴンだと!!」

相手はその姿に絶句した。

このモンスターは、答えを見つけた俺が、その人に言った時に貰ったカードだ。

その時、その人は言った。

『よくぞ答えを見つけた。そうだ、カードとは、決して道具では無い。俺もまた、それに気づかされた人間だ。何、過去にいろいろとな……そうだな、そんなお前にプレゼントだ。俺が愛用していた……最上級のカードだ』

そう言っただけで渡されたこのカード。

俺はこのカードを大事にしている。

その人のおかげで……俺は強くなる事ができた。

絆を知っているからこそ、俺は!

「バトル、フラッシュ・ボルテッカー・ドラゴンで、ニコラに攻撃! サンダー・ショット!」

フラッシュ・ボルテッカーの口が再び開き、その中から今度は青白い電気弾が発射された。

「……特攻バカとはこんな物か。伏せカードを意識せずに攻

撃するとはな。畏発動！異次元からの出撃！ゲームから除外されている俺のモンスター1体を俺のフィールド上に特殊召喚する。異次元からの出撃・畏・効果、相手が直接攻撃を宣言した時に発動する事ができる。自分のゲームから除外されているモンスター1体を選択して、表側表示で特殊召喚する。これでお前が攻撃を行ってもな、ダメージが0にはならない。これでもう」

まだだ！

「最後の畏発動！！双葉の転生」

「んな！！そのカードは！」

「相手が手札、デッキ以外から特殊召喚を行う場合、そのモンスターを俺のフィールド上に特殊召喚する。双葉の転生・カウンター畏・効果、相手が手札、またはデッキ以外からモンスターを特殊召喚する効果を発動した場合に発動する事ができる。その効果で特殊召喚されるモンスターを、代わりに自分フィールド上に特殊召喚する。こちらに現れよ、異次元の管理人！」

このカードは以前、遊画が俺にくれたカードだ。

あの時アイツは、こう言った。

『お前は一人じゃない。いつでも俺が・・・側にいる！』

その時俺は、初めて居場所を知った。

コイツは、俺の居場所を作ってくれた。

そして・・・俺にカードの意味と、そして・・・絆を教えてくださいました。

「っ・・・っ・・・バカな、最後の最後で・・・この俺が、こんなガキに！」

「遊画、お前には感謝するぜ。お前がくれたこのカードのおかげで・・・俺は勝つことができた」

遊画は、ニヤリと笑った。

「ああ、俺達の絆は、どんな鎌だろうが、どんな剣だろうが、絶対に引きちぎれない何かで結ばれている。これが・・・」

「俺達の・・・」

「「絆だ!!!」」

俺のフィールド上に異次元の管理人が特殊召喚された。

「異次元の管理人・魔法使い族・ATK1700・光・4・効果」
そして、フラッシュ・ボルテッカーの攻撃は、何も邪魔される事も無く、そのまま相手を貫いた。

「グハアアアアアアアアアアアア!!!」
「24000」

Nikora・Sp7・0
Full・Sp11・Win

ニコラのD・ホイールに、自動ブレーキシステムが発動し、そのまま急停車された。

バカな……この俺が……負けたと!!!

こんなハズじゃ……イヤだ、親父の仇をとらなければならねーんだ。

親父は苦しんだ。

そして……国から捨てられ、そして、そして!!!

「もう、こんな事はやめにしよーぜ」

!!!

フル……アルカデス。

D・ホイールを降りたフル・アルカデスが、俺の前まで近寄った。

「いくらお前が仇をとったって、お前の親父さんは戻ってくる訳じゃ無いだろ。それに、もしも国から追放されたのだったら、何か根拠があるハズだろ。恐らく国の奴らは騙されて、お前らを追い出したんじゃねーのか」

そ……それは。

「今のお前では、どうにもする事が出来なくても、仲間がいれば、どうにか出来るんじゃないのか?」

つ……。

「ニコラ、お前は復讐しか視野に入れずに、他の方法を思い浮かべなかった。それが……今のお前の失態だ」

こ……公栄……遊画。

「だからさ、徐々に仲間を増やそうぜ。仲間がいれば、何も怖がる事もねーし、暖かいぞ」

暖かい……っ、だが。

「それは……、無理な話だ」

「無理って……まさか!」

リドウの時と同じで……負けたヤツは……死。

するとニコラの足元から、リドウの時と同じように……黒い底なし沼が現れた。

そしてみるみる内に、ニコラがそこに沈んでいった。

「最後にお前らに会えて……いや、もっと昔に……お前らみたいなのヤツに……会いた……かつ」

その言葉を最後に、完全に沈んだ。

そして、その跡地には、エレシユキガルのカードが1枚、落ちていた。

「……考えもせず、自分の思うままに行動するからだ。バカが」

俺は、その死神のカードを拾い上げると、アカデミアへ向けて出発しようとした。

その時だった。

「死神を返して貰おう、それは私の物だ」

そんな声が聞こえた。

「この声、最後のメンバーか!」

俺達は辺りを見渡した。

そして、レーンの奥から、巨大なD・ホイールが向かってきている事に気がついた。

あ……あんなサイズのD・ホイール、今まで見たこと無いぞ! 遠くからでも分かるが、タイヤが6つあり、そして高さが、恐らくだが4メートルほどある、重量級のD・ホイールが、こちらに向か

つてきていた。

「逃げる、あんなD・ホイールに捕まったらただじゃ済まねえぞ！」
フルのかけ声と共に、俺達は走り出した。

相手も、それと同時に加速してきた。

クツ、だが、この戦いが終われば……また今まで通りに平和が戻る。

今俺達は逃走者。

だが隙が出来れば……俺は、コイツを倒す！
続く

次回予告

「死神を倒すとは、キサマらは何者だ！」

「俺達はただの高等部の生徒だ。だが、お前らの行動によってお前らと戦うハメとなった……デュエリストだ！」

次回、遊戯 Fate 第25話「誇りと希望を胸に」

「いつまで耐えられるか、今の状況を！！」

次回のキーカード

人形師ゲルド・魔法使い族・ATK3000・闇・8・効果

第24話「望みの果て」(後書き)

あとがき

疲れた……。

どうも、以外とガスタで六武衆を倒したRagoです。

いやー、明日から新学期かぁ……地味にイヤだな。

どうしても学校が始まると言うのは、なかなか好きにはなれません。どうしてでしょうね……。

つと、愚痴もこれぐらいにしてつと。

それでは次回、ついに死神編、最終決戦へと突入です。

決着はどうなるのか、そして……彼らの真の目的とは!!
次回も、デュエルだぁ!!

1月10日 自宅にて

もしかしたら、ニコ動の方でゴールドパツクの開封動画をするかもしれないので、その辺4649

が、見事に失敗。世の中は不便に出来ているようだ。

第25話「誇りと希望を胸に」(前書き)

……ドゥン、ドゥン、ドゥン。

らと戦うハメとなった・・・デュエリストだ！」

「・・・っは、ジョークがくだらんヤツだ。名を何と言う？」

「・・・公栄遊画、そして・・・光栄たる我が遊画の名の元に、悪を倒すデュエリストだ！」

デュエルとは何か、それは己自身の限界を相手とぶつけ合う決闘。デュエルとは何か、それは相手との絆を深め、共に信じ合う心を生む為の決闘。

そして、デュエルとは何か、それは、偶然と信じる心が奇跡を生む決闘。

この物語は、そんな純粹で鈍感な心を持つ少年、公栄遊画とその仲間たちによる、熱く、激しい戦いによる絆で世界を救う、カードゲームラブコメデイである！

第25話「誇りと希望を胸に」

「・・・公栄遊画、そして・・・光栄たる我が遊画の名の元に、悪を倒すデュエリストだ！」

「っは、面白い事を言う。だが俺を倒す事は不可能だ。世界の支配者となる男を倒す事など」

んな事、させるか。

「俺の名はナスカ・アルヘルト。デュエルだ、公栄 遊画！！」

「・・・やってやる、世界は・・・そう簡単に手に入れない物だと、あの野郎に教えてやる。」

「「フィールド魔法、スピード・ワールド2、セット、オン！」」
画面にスピード・ワールド2のカードが映し出され、D・ホイールのデュエルディスク部分が展開した。

『デュエルモード、オン。オートリペーション』

「ライディング」

「デュエル」

「アクセラレーション」「Yuga VS Naska LP4000」

「始まったわね」

「ああ、始まったな」

フルと沙耶は、そんな言葉を口にした。

だが、そんな事はお構いなしに一気に、俺達のD・ホイールはレーンへと直進した。

体制を整えながらも、なるべく早く、早く、2台のD・ホイールはそのまま先行レーンを曲がりきった。

その時、少しでも前に走っていたのは……。

Yuga・Spco・LP4000

Naska・Spco・LP4000

俺の方が早かった。

「まずは俺のターン、俺は憑依装着ウインを攻撃表示で召喚へ憑依装着ウイン・魔法使い族・ATK1850・風・4・効果」そして、カードを1枚伏せてターンエンド」

恐らく相手は敵の幹部だ。

恐ろしい戦術などが予想される。

「俺のターン」

Yuga・Spc1・LP4000

Naska・Spc1・LP4000

「俺は、覇術師の乱舞者を攻撃表示で召喚へ覇術師の乱舞者・戦士族・ATK1900・闇・4・効果」

レベル4で、攻撃力1900だど!!

「バトルだ、覇術師の乱舞者でその小娘を攻撃しろ！オブ・クラッシュ！」

このまま……やらせるか。

「畏発動、混沌の地割れ。相手が攻撃した時、そのモンスターを破壊して、ゲームから除外するへ混沌の地割れ・カウンター畏・効果、相手が自分フィールド上に存在するモンスターを攻撃した場合に発

動する事ができる。攻撃を行ったモンスターを破壊し、ゲームから除外する」

突然出てきた暗闇の穴の中に、覇術師の乱舞者は吸い込まれていった。

そして、そのまま中で押しつぶされたらしく、爆発が起きた。

「・・・フン、だがそれぐらいは予想済みだ」

「んな!？」

予想済みだと!

「こんな小娘ごときにそんな高価な罫を発動させるとはな、見損なつた。そんな事では俺は倒せない」

この余裕、コイツはどれだけだけの強さを秘めているんだ。

「覇者の乱舞者が破壊された時、その効果を発動する。このモンスターがカード効果により破壊された時、手札のレベル4以下のモンスター1体を、特殊召喚する。来い、マリオネット・マスター」
「マリオネット・マスター・魔法使い族・ATK1200・闇・4・効果」

レベル4のモンスターを召喚して、一体どうする気だ。

「そして、マリオネット・マスターをリリースし、手札から人形と名の付くモンスター1体を特殊召喚する事ができる」

相手の手札は残り4枚。

その中に・・・高レベルのモンスターがいるとでも言うのか!

「マリオネット・マスターをリリースし、手札から人形師ゲルドを特殊召喚!」

フィールドに、大量の糸をまき散らした人形師が現れた。

「人形師ゲルド・魔法使い族・ATK3000・闇・8・効果」
このモンスターに・・・一体どんな効果があると言うんだ。

「カードを2枚伏せてターンエンドだ。弱者の足掻きを見せる」
偉そうに・・・やってやる。

「俺のターン!」

Y u g g a ・ S p c 2 ・ L P 4 0 0 0

これなら・・・。

「手札からスピードスペル、オーバー・ブーストを発動。自分のスピードカウンターを4つ増やす。Sp・オーバー・ブースト・Sp魔法・効果、自分用スピードカウンターを4つ増やす。エンドフェイズ時に自分用スピードカウンターを1つにする。ただし、この効果を使用した場合、エンドフェイズ時にスピードカウンターは1つになる。Sp・c・2・6」

「フン、何をするつもりかは知らんが。無駄だ、無意味にカウンターを増やした所で、カードの1枚もドロウする事もできない」

「まだまだ、誰もこれで終わりとは言っていない。手札からスピードスペル、天使の祭壇を発動。自分のスピードカウンターを6つ取り除く事により、手札のカード2枚を墓地へ送り、デッキからカードを3枚ドロウする。Sp・天使の祭壇・Sp魔法・効果、自分用スピードカウンターを6つ減らす。自分の手札からカードを2枚を捨てる事により、デッキからカードを3枚ドロウする。それに、スピードカウンターを6つ取り除き。Sp・c・6・0。手札からカードを2枚墓地へ送り、デッキからカードを3枚ドロウ！」

「更に墓地へ送った罫カード、クロツクの副写像の効果により、このカードが墓地へ送られた時、墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事により、デッキからカードを2枚ドロウする。クロツクの副写像・罫・効果、このカードが墓地へ送られた場合、墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事により、デッキからカードを2枚ドロウする。デッキから更にカードを2枚ドロウ！」

「一気に手札を補充しただと！」

さて、行くか。

「俺はチューナーモンスター、ツイン・シンクロンを攻撃表示で召喚。ツイン・シンクロン・戦士族・ATK1600・地・4・チューナー。そして、このモンスターが召喚に成功した時、自分の墓

地に存在するレベル3以下のモンスター1体を特殊召喚する事ができる……」

その瞬間、相手のゲルドの糸がツイン・シンクロンに絡まった。

「んな!？」

そして、その糸に絡まったツイン・シンクロンは、強制的に相手のフィールドに移された。

「人形師ゲルドの効果発動。相手が通常召喚した時、そのモンスターのコントロールを得る」

そんな効果があったのかよ!

……チツ、これで迂闊にモンスターを召喚出来なくなった。

モンスターのコントロールを得る効果は厄介だ。

……だが、この効果は発動させてもらう。

「ツイン・シンクロンの効果により、墓地の火霊使いヒータを特殊召喚へ火霊使いヒータ・魔法使い族・DEF1500・炎・3・効果」

つ、今のターン、出来る事は……ここまでしか無い。

「そして、憑依装着ウインを守備表示へと変更へ憑依装着ウイン・ATK1850 DEF1500」カードを2枚伏せてターンエンド……」

今出来る事を尽くして……次のターンへと繋げる。

「そして、オーバー・ブレストの効果により、自分のスピードカウンターを1にする」Spco1」

「俺のツアーン」

Yuga・Spcc2・LP4000

Naska・Spcc3・LP4000

「フン、こんな雑魚を場に残してもしょうがないからな。ありがとう使つとするか」

んな!俺のモンスターを雑魚扱いだと……。

コイツ……絶対に許さねえ。

「俺は、ツイン・シンクロンをリリースし、手札から人形職人をア

ドバンス召喚へ人形職人・魔法使い族・ATK2300・闇・6・効果♡コイツはアドバンス召喚に成功した時、相手フィールド上に存在する守備力が一番低いモンスターを墓地へ送る」

んな、墓地へ送るだと！

「俺が選ぶモンスターは、火霊使いヒータだ。ワイヤード・フォー
ル！！」

ヒータの周りに糸が絡まり、そのままヒータごと地面へと引きずり
込んだ。

『くあっ！』

「ヒータ！！」

そして、その場には何も残らなかった。

「クツ、俺の仲間を・・・」

「フン、何が仲間だ。カードごときで仲間とほざくとはな」

ナスカのD・ホイールは、俺の隣まで加速した。

「カードと言うのはな、結局はただの物にしかすぎんだよ。何が
仲間を信じるだ、何が絆だ。そんなクソツたれた物などに価値など
無い。価値があるのはな、この世界を支配する者しか無いのだよ」
そ・・・そんな事は。

「違う！価値と言う物は、1つ1つにある物だ。価値が無いものな
どはこの世には無い」

「だったらお前は、何もできない人間のクズにも価値があるとでも
言うのか。ただ何もしない、働かない、そんなクズにもお前は」

「そんなヤツにでも、価値はある！」

この世の中に・・・必要ない物なんてたくさんある。

だが、全てが価値がないと言う事は決して無い。

「例え世間からクズと言われる奴らにだって、何か才能がある。人
の中に、クズと言えるヤツなんて何処にもいやしない！ナスカ」
ナスカを指さし、俺は言った。

「世界は、1人1人で動いている。誰かが全てを支配して動く世界
なんて、ただつまらないだけだ。何故それが分からない」

「知るか、俺は世界を支配する。そして……俺はこの世界の神となる！」

か……神に。

「ふざけるな、人間は神にはなれない」

「だっいたらなつてやるよ、こんなクソツたれた世界で……俺は神になつてやる」

この分からず屋め……。

「ここまでか、お前が言えるのは？」

クツ……もう、コイツを倒すしか、方法が無いと言うのか。

「人形職人は召喚したターンは攻撃が行えない。バトルだ、人形師ゲルドで、憑依装着ウインを攻撃！ソード・ロッド！」

人形師ゲルドは、手に持った剣を相手に投げ飛ばした。

それをウインは、手に持った杖ではじき飛ばした。

しかも、よく見ると、細い糸でしっかりと固定され、一度ははじき飛ばされた剣を、再びウインに向かって投げ飛ばした。

急な攻撃だったため、そのままウインの腹部に刺さった。

『か……はっ』

そのままウインは、粉々に砕かれた。

「っ……」

「ターンエンドだ。どうした、俺を倒すんじゃなかったのかぁ？」

っ……！

「いつまで耐えられるか、今の状況を！！俺のターン」

くれ。

「ドロー！！」

Y u g a ・ S p c 3 ・ L P 4 0 0 0

N a s k a ・ S p c 4 ・ L P 4 0 0 0

何が来た。

何でもいい、カードよ、俺は信じている。

そう思いながら、引いたカードを確認した。

引いたカードは……憑依装着ヒータ。
来た！！

「モンスターを通常召喚するたびにコントロールを得る効果がある、あのモンスターをどうにかしない限り、俺はモンスターを召喚すればするだけ不利になる」

「そうだ、モンスターを召喚すればするだけ、お前のモンスターのコントロールは俺に移る」

「だったら、召喚しなければいいだけの話だ」

「……なに？」

「モンスターを召喚しなければいいだけの話だよな？」

「大事な事なので、2回言いました。」

「はっ、確かにそうだが、そう簡単にモンスターを特殊召喚できる状況じゃ……」

「手札のサモン・スター・マジシヤンの効果発動。このモンスターを手札から墓地へ送る事により、手札に存在するレベル4以下の魔法使いモンスター1体を特殊召喚できる」

「んな！！」

手札からサモン・スター・マジシヤンを墓地へ送り、自分の手札にあつた憑依装着ヒータを特殊召喚した。

「来い、憑依装着ヒータ！！」憑依装着ヒータ・魔法使い族・ATK1850・炎・4・効果」

俺のフィールドに、お馴染みのムードメーカー、ヒータが現れた。

『遊画、ようやくウチの力が必要になつたかいなあ？』

「ああ、お願いするぜ、ヒータ！！」

そして、デッキからとあるカードを取り出し、デュエルディスクに召喚した。

「憑依装着ヒータが特殊召喚に成功した時、デッキから火の翼ヒータを特殊召喚」火の翼ヒータ・魔法使い族・ATK100・炎・

4・チューナーレベル4の憑依装着ヒータと、レベル4の火の翼ヒータをチューニング 4 + 4 = 8」

火の翼ヒータからチューニングリングが現れ、その中に憑依装着ヒータが入り込んだ。

「燃え盛る轟炎よ、深紅の聖域にてその大地を燃やし尽くす術者となれ!!」

そして、ヒータが光り出した。

「シンクロ召喚、爆炎を扱いし者、火霊神ヒータ!!」
炎にまとわれて、ヒータは現れた。

杖も更に巨大化し、ゆっくりと開かれた瞳には、より一層力の増した目をしており、髪も1つに束ねられた姿をしたヒータが、そこにいた。(ただし、相変わらず胸は無いが)

『これが、ウチの本気や!!』

「頼んだぞ、ヒータ!!」
「火霊神ヒータ・魔法使い族・ATK2900・炎・8・シンクロ、効果」

「・・・フン、そんな小娘に何ができる。攻撃力が100足りないばかりに、役立たずになった小娘に、何が」

「いいや、役に立つから呼んだに決まっているだろ」

コイツにも、コイツなりの効果がある。

だが、その前に。

「墓地のサモン・スター・マジシャンの効果発動。自分の墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事により、このターンの終了時まで、自分フィールド上に存在する魔法使い族とドラゴン族モンスターは攻撃力を300ポイントアップする！」

「んな!!」

攻撃をする時は・・・今だ。

「バトル、火霊神ヒータで、人形師ゲルドに攻撃!マジカル・フレーム!!」

火霊神ヒータの杖から、巨大な火の玉が放たれた。

そしてその玉が、ゲルドを飲み込み、その場で爆発が起きた。

「クツ・・・!!」
「LP4000 3800」

「だがその瞬間、畏カード発動。人形師の定規。相手が自分フィー

ルド上に存在する人形師を破壊した時、そのモンスターを破壊する。そして、自分のデッキから人形を3体まで墓地へ送る。人形師の定規・罨・効果、相手の攻撃により自分フィールド上に存在する「人形師」と名の付いたモンスターが破壊された場合に発動する事ができる。攻撃を行った相手モンスターを破壊する。その後、デッキから「人形」と名の付いたモンスターを3体まで墓地へ送る。」

相手フィールドから、光の刃がヒータに向かって放たれた。つ、このままやらせる訳にはいかねえ。

「罨発動、くず鉄のカラーズプレー。相手フィールド上に存在するモンスター1体の属性を、次のターンの終了時まで変更する！くず鉄のカラーズプレー・罨・効果、1種類の属性を宣言し、相手フィールド上に存在するモンスター1体を選択して発動する。選択したモンスターの属性は、次のターンの終了時まで宣言した属性になる。発動後、このカードは墓地へは送らず、そのままセットする。」

それにより、俺は炎属性を宣言し、お前のフィールド上に存在する人形職人の属性を炎へと変更する！人形職人・闇 炎」

「それがどうした、ただの足掻きには見苦しい。消える」と、放たれた光の刃が弱まった。

「な・・・何が起きた!？」

そして、ヒータはその刃を杖で砕いた。

「火霊神ヒータの効果、それは・・・相手フィールド上に存在する炎属性モンスターの数だけ、カード効果では破壊されない効果だ!」

「なん・・・だと」

「そして、くず鉄のカラーズプレーの効果により、このカードを再びセットする」

発動したカードが、再びセットされ、消えた。

「俺はターンエンドだ」

いいぞ、このまま行けば。

「・・・つぶ、バカだなお前」

「……!!急に何だ!?

「お前は知らなかったと思うが、俺の墓地には、すでにモンスターが揃っている!」

「……そう言えば、相手の墓地に存在するモンスターの数は……」

「クツ、迂闊だった!」

「すでに遅い、俺のツアーン!」

Y u g a ・ S p c 4 ・ L P 4 0 0 0

N a s k a ・ S p c 5 ・ L P 3 8 0 0

「……チツ、俺は人形職人を守備表示へと変更へ人形職人・A
TK2300 DEF1000」カードを1枚伏せてターンエンド
だ」

よ……良かった。

「くず鉄のカラー Sprey の効果により、属性が戻るへ人形職人・
炎」

だが、ここで気を抜いてはダメだ。

確実に……次のターンで決着をつける気力で行かなければ……

「俺のターン!」

Y u g a ・ S p c 4 ・ L P 4 0 0 0

N a s k a ・ S p c 5 ・ L P 3 8 0 0

相手の場にはモンスターが1体。

そして、伏せカードは2枚。

「……正直、何かイヤな予感がするが……仕方ない。

「火霊神ヒータで、人形職人を攻撃!マジカル・フレイム!!」

ヒータの放った火の玉が、ナスカの場にいる人形職人を燃やし尽くした。

「グオオオオオオオ!!」

バアーン、そんな音がして破壊した直後……

やはり予想は的中した。

「フン、無闇に攻撃するのは見えていた。俺は罾カード、大魔王の生け贄を発動。自分フィールド上に存在するレベル5以上のモンスターが相手によって破壊された時に発動する事ができる罾カードだ」
「やはり、一筋縄ではいかないか」

「自分のデッキから、レベル8以上のモンスターを手札に加えるハ大魔王の生け贄・カウンター罾・効果、相手によってモンスターが破壊された時に発動する事ができる。自分のデッキからレベル8以上のモンスター1体を手札に加え、バトルフェイズを終了させる」
「なにっ!!」

「無論、俺が手札に加えるのは・・・」

ナスカは、自分のデッキから、カードを抜き取った。

「デス・グリム・リーパー・ナムタル!!」

「・・・このターンで・・・死神を手札に・・・」

「俺はスピードスペル、エンジェル・バトンを発動。自分のスピードカウンターが2つ以上ある時、デッキからカードを2枚ドローするハSp・エンジェル・バトン・Sp魔法・効果、自分用スピードカウンターが2つ以上ある場合に発動する事ができる。デッキからカードを2枚ドローし、その後手札1枚を墓地へ送る」その後、手札1枚を墓地へ送る」

手札にあった、風霊使いウインのカードを墓地へと送った。

「・・・ターンエンド」

「っは、もう足掻きは終わりか。だったら見せてやる、最後の死神を。俺のツアーン!!」

Y u g a ・ S p c 5 ・ L P 4 0 0 0

N a s k a ・ S p c 6 ・ L P 3 8 0 0

「自分の墓地に存在する、魔法の操り人形、人形師ゲルド、人形職人、マリオネット・マスター、そして、影の人形師をゲームから除外し、現れる、デス・グリム・リーパー・ナムタル!!」

相手がカードをデュエルディスクに召喚した、瞬間だった。

辺りの景色が薄暗くなり、そして、雷が鳴り始めた。

「な・・・何だ！」

「何が起きているの？」

そして、そんな気味が悪い雲の中から、1体の死神が・・・降臨した。

・・・とうとう、召喚させてしまった。

どんなモンスターなのか、そして、どんな効果なのか・・・。未知なるモンスターを前に、俺は戦ってきた。

だが、俺の本能が言っている。

・アレは・・・冗談抜きでヤバイと。

・・・面白い、だったらやっつけてやる。

どんなモンスターを前にしても、昔の俺ならば逃げていただろう。だが、今は違う。なんのために戦うか、それは・・・。。守りたいヤツがいるからだ！！

続く

次回予告

「ひれ伏せ、この死神の前では、どんなに強いモンスターであろうと、破壊する事は不可能だ」

「クツ、俺は・・・勝ちたい。どんな手を使っても・・・俺は・・・俺は！！」

次回、遊戯王Fate 第26話「第3の死神、ナムタルの脅威」

「貴方は・・・勝つためなら仲間との絆を捨てる覚悟があるの？」

次回のキーワード

Death・Grim・Reaper・Natal・悪魔族・A
TK1000・闇・10・効果

第25話「誇りと希望を胸に」(後書き)

あとがき

思考回路、停止状態。

本当に眠い。

はい・・・そんな訳で、手っ取り早くあとがきします。

最初に一言・・・。

今回は1週間以内には終われなかった。

理由は、本当に忙しかったからです。

終わり。

・・・ハイ、ついでに言うと、何か公式の企画があった時の為に、
1つ、オリジナルの小説を書いていました。

・・・スマン、限界だ。

そんな訳で、対ナス力編も、もうすぐ終わりへと近づいています。
ちなみに、2月1日から、東京、新潟へと修学旅行ですので、その
期間は絶対に投稿できません。

ので、御了承下さい。

それでは次回も、宜しく。

1月22日 自宅にて

第26話「第3の死神、ナムタルの脅威」(前書き)

明日は、修学旅行。

・・・別に、ドキドキしている訳では無いからな。

第26話「第3の死神、ナムタルの脅威」

「自分の墓地に存在する、魔法の操り人形、人形師ゲルド、人形職人、マリオネット・マスター、そして、影の人形師をゲームから除外し、現れる、デス・グリム・リーパー・ナムタル!!!」

相手がカードをデュエルディスクに召喚した、瞬間だった。

辺りの景色が薄暗くなり、そして、雷が鳴り始めた。

「な……何だ!」

「何が起きているの?」

そして、そんな気味が悪い雲の中から、1体の死神が……降臨した。

黒く、禍々しく、そして、骸骨の仮面に、巨大な鎌と言った、他の死神と共通する所もあるが……だが、その迫力は違った。

言葉では表せない……最悪の憎悪。

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!』

つ……震えが、止まらない。

「怯える、これが最強の死神、デス・グリム・リーパー・ナムタルだ!!!」
Death・Grim・Reaper・Namtalデス・グリム・リーパー・ナムタル・悪

魔族・ATK1000・闇・10・効果」

んな!!!攻撃力が……たったの1000だと!

「……へっ、死神の割には、結構しよぼい攻撃力じゃねーのか」

「戯れ言を。そんな言葉、いつまで通用するか」

「んな、どう言う意味だ!」

「ナムタルの効果により、このモンスターの召喚時に、フィールド上にセットされたカードを全て破壊する!」

なんだって!!!

「だったら、伏せていた1枚の罠カード、アンバランスな塔を発動。セットされていたこのカードが破壊され墓地へ送られた場合、デッキからカードを1枚ドローする」

そのかけ声と共に、両者の魔法、畏カードが全て破壊された。

「フン、無駄な事を」

「それはどうか、明らかに俺のモンスターの方が攻撃力は上だ」
「……だが、油断は出来ない。何故なら……攻撃力が攻撃力なら、効果があるはずだ。一体あの死神には、どんな効果が。」

『はあっ……ゆう……遊画』

急に、弱ったヒータの声が聞こえた。

「どうした、ヒータ!!」

『ウチの……力が……出らへんのや』
力が……出ないだと。

俺は試しに、ヘルメットからヒータの今の状況を見ることにした。
その瞬間、俺は驚愕した。

「……ウソだろ。」

「火霊神ヒータ・ATK100」

「……これは!!」

「攻撃力が……下がっているだ」と!

これはバグでは無さそうだ……そうなる。

「死神の効果か!」

「そうだ、ナムタルの効果により、このモンスターがフィールド上に存在する限り、このモンスター以外のモンスターの攻撃力と守備力を全て100にする」

「んな!!」

「そんな……」

「インチキか、コイツは!」

その会話が聞き取れているのだろうか、沙耶とフルまでもが驚きを隠せなかったようだ。

「無論、コイツはカード効果では破壊されない。行け、デス・グリム・リーパー・ナムタルで、火霊神ヒータを攻撃!パーフェクト・デスサイズ!!」

そのままナムタルの振り上げた鎌からは逃れる事もできず、ヒータ

は俺の前で・・・両断された。

『がはっ！！』

そして、光となって消えた。

「っ・・・！！」
「LP4000 3100」

「カードを1枚伏せてターンエンドだ」

最悪だ・・・確実に相手を戦闘破壊できるモンスター。

コイツを攻略する手口は・・・あるのかよ！

デュエルとは何か、それは己自身の限界を相手とぶつけ合う決闘。

デュエルとは何か、それは相手との絆を深め、共に信じ合う心を生む為の決闘。

そして、デュエルとは何か、それは、偶然と信じる心が奇跡を生む決闘。

この物語は、そんな純粹で鈍感な心を持つ少年、公栄遊画とその仲間たちによる、熱く、激しい戦いによる絆で世界を救う、カードゲームラブコメディである！

第26話「第3の死神、ナムタルの脅威」

・・・運命を信じるのなら、私は貴方を試したい。

一体貴方が、どれ程運命から見放されているのか、そして、あの子達との絆が・・・一体どんな物なのか。

運命を変える、そんなバカな事があるのなら、私は見たい。

だが、本当にこの方ならありえそう。

公栄遊画、貴方は極めて危険だ。

もしも貴方が望むのであれば、それなりの代価を支払ってもらおう。

それが例え、自分の大切な記憶だとしても、仲間を守り、敵を倒したいかと言うのを・・・見てみたい。

それで一体、どんな道が現れたとしても、貴方はそれを乗り切る事ができるのか。

つふ、その先でどんな運命が待ち受けるのか楽しみになってきたわ。私には、未来の運命が見渡せる事ができる。愚かな人間共の進化の先の、破滅の未来が……。……ノルン、貴方は本当に思っているの？この方が、そして、不動遊星と言う男が……。破滅の未来を変えらる。

「……フン、そんな考えなのね。」

「んなー!!」

私が動けば……。恐ろしい事になるですって……。

……。だったら、私はそんな運命を信じない。

それは屁理屈じゃない!

それが……。未来を見通す神の……。定めだからよ。

*** ** ** ** **

「さあ、テメエのターンだ!」

「っ、俺のターン!」

Y u g a ・ S p c 6 ・ L P 3 1 0 0

N a s k a ・ S p c 7 ・ L P 3 8 0 0

「ドロー!!!」

そして俺は、カードをデュエルディスクに差し込んだ。

「俺はスピードスペル、風の中の棺を発動。自分のスピードカウンターが4つ以上の時、デッキからカードを1枚選択して、そのカードを除外する。そして、発動から2ターン後のスタンバイフェイズ時に、そのカードを自分の手札に加える。Sp-風の中の棺・Sp魔法・効果、自分用のスピードカウンターが4つ以上ある場合に発動する事ができる。自分のデッキからカードを1枚選択して、裏側表示のままゲームから除外する。発動から2ターン後のスタンバイフェイズ時、この効果で除外したカードを手札に加える。その効果

により、俺は……」

俺は、カードを選ぶ為に画面を確認した。

……ん？

すると、その中に俺が入れた訳では無いカードが、混入していた。何だ、このカードは。

極星命デイス……？こんなカード、デッキに入っていたっけなそう思った。しかし、極星の文字を見て、俺は仰天した。

極星、そのカードの種類は、神を操るデュエリストしか保有しない伝説級のモンスター種であり、誰もが欲しがるカードでもある。

このカード……一体何処から、そして、何で俺のデッキの中に……。

そう考えた、そして俺は、とある決意をした。

「デッキからカードを1枚、ゲームから除外する」

そのカードを除外した。

もしも、このカードが勝つために現れたキーカードなのであれば、俺は……それに賭ける。

「そして、手札を2枚、墓地へ送る事により、手札からセブン・スター・マジシャンを特殊召喚する！来い、セブン・スター・マジシヤン！ハセブン・スター・マジシャン・魔法使い族・ATK2200・光・7・効果」

そして、墓地より、カードを取り出した。

「更に、自分フィールド上にチューナー・モンスターが存在しない場合、自分の墓地に存在するクリボーナイトは1度だけ、特殊召喚できる。墓地より蘇れ、クリボーナイト！ハクリボーナイト・悪魔族・ATK200・闇・1・チューナー」

『クリクリ』

よし、これで……。

「レベル7のセブン・スター・マジシャンに、レベル1のクリボーナイトをチューニング！ 7 + 1 = 8」

クリボーナイトの中から、チューニングリングが現れ、セブン・ス

ター・マジシャンを覆いつくした。

「迷えし星の運命が、無限の道を作り出す歯車となる、終わり無き運命を作り出せ!!!」

そして、その中から、竜が現れた。

「シンクロ召喚!!!運命をはばだけ、エンドレス・ドラゴン^ハエンドレス・ドラゴン・ドラゴン族・DEF2100・地・8・シンクロ、効果^ヾ」

『ウオオオオオオオオオオ!!!』

エンドレス・ドラゴンの咆吼が、辺りに響いた。

「フン、だがナムタルの効果により、守備力は100になる」

「っ……^ハエンドレス・ドラゴン・DEF2100 100^ヾ

それでも……このカードがあれば、しばらくは……。

「俺はカードを1枚伏せてターンエンド」

「フン、無駄な足掻きを。俺のツアーン!!!」

Y u g a ・ S p c 7 ・ L P 3 1 0 0

N a s k a ・ S p c 8 ・ L P 3 8 0 0

2ターン後、確実に防ぐ手だてがなければ、エンドレス・ドラゴンは確実に破壊される。その前に、キーカードを引き当てる!

「何を企んでいるかは知らねーがな、どうせ無駄な事だ!バトル、デス・グリム・リーパー・ナムタルで、エンドレス・ドラゴンを攻撃!パーフェクト・デスサイズ!!!」

そのかけ声と同時に、ナムタルの鎌が、エンドレス・ドラゴンに向けて振り下ろされた。

この時、俺は1枚の罨カードを発動していた。

「罨カード、盾の守り神を発動。このカードは発動後、自分フィールド上に存在する守備表示モンスターに、装備カード扱いで装備され、そのモンスターが守備表示で存在する限り、戦闘では破壊されない!^ハ盾の守り神・罨・効果、発動後、このカードは装備カードとなり、自分フィールド上に存在する守備表示モンスター1体に装備する。装備モンスターが守備表示の時、そのモンスターは戦闘で

は破壊されない。また、このカードが墓地に存在する場合、墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事により、自分フィールド上に存在するモンスターの表示形式を変更する。この効果は自分のバトルフェイズ中にのみ発動できる」それにより、エンドレス・ドラゴンは戦闘では破壊されない！」

振り下ろされた鎌は、エンドレス・ドラゴンの手によって、受け止められた。

よし、これでこのターンは乗り切った。

そう思ったが否、俺は何かの衝撃波を喰らった。

「ぐあああああ！！」
「LP3100 2200」

確かに、エンドレス・ドラゴンは攻撃を受け止めたハズなんだが・・・。

まさか！！

「貫通ダメージ！！」

「そうだ、エレシユキガルの効果により、守備力を攻撃力が超えていけば、その分だけ貫通ダメージを与える効果がある！！」
チィッ。

「俺はターンエンド」

クッ、状況は最悪じゃないか。

このまま、地道にダメージを負っていくしかないらしい。

「だが、この状況で・・・必ず何か方法があるハズだ！俺は・・・それを信じる！！俺のターン！」

Y u g a ・ S p c 8 ・ L P 2 2 0 0

N a s k a ・ S p c 9 ・ L P 3 8 0 0

「俺は、ガード・プロフェッショナルを守備表示で召喚しガード・プロフェッショナル・悪魔族・DEF1800・闇・4・効果」
フィールド上に、ゴールキーパーのようなモンスターが出現した。

「ナムタルの効果により、守備力は100になる」ガード・プロフェッショナル・DEF1800 100」そして、スピード・ワールド2の効果を発動。スピードカウンターを7つ取り除く事により、

「Sp c 8 1 デッキから……カードを1枚、ドローする！」

そして俺は、デッキからカードを、1枚ドローした。

「ドロー！」

……これだ！

「俺はスピードスペル、魔法石の解放を発動！ 自分用のスピードカウンターを取り除いたターン、スピードカウンターが3つ以下の時に発動する事ができる。自分の墓地に存在する魔法カードの数だけ、自分用のスピードカウンターを上げる！ Sp - 魔法石の解放・Sp 魔法・効果、自分用スピードカウンターを取り除いたターン、自分用スピードカウンターが3つ以下の時にのみ発動する事ができる。自分の墓地に存在する魔法カード1枚につき、自分用のスピードカウンターを1つ乗せる」

「んな！」

「俺の墓地に存在する魔法カードは全部で4枚。それにより、スピードカウンターを4つ上昇させる！！ Sp c 1 5」

「あの状況で、一気にスピードカウンターを上昇させるとは……。流石だけ、遊画」

「っ、だが、たかがスピードカウンターが上昇しただけだ。何の足掻きにもなりはしない」

誰が足掻きの為にカードを発動させる。

これは……勝利への一手だ！

「さらに手札からスピードスペル、リード・スナイプを発動。自分のスピードカウンターが4つ以上ある時、自分フィールド上に存在するシンクロモンスター1体を選択し、そのモンスターの攻撃力を、次のターンのスタンバイフェイズ時まで0にする事により、相手にそのモンスターの守備力分のダメージを与える！ Sp - リード・スナイプ・Sp 魔法・効果、自分用スピードカウンターが4つ以上ある場合に発動する事ができる。自分フィールド上に存在するシンクロモンスター1体を選択し、そのモンスターの攻撃力を、次のタ

インのスタンバイフェイズまで0にする事により、相手に選択したシンクロモンスター元々の守備力分のダメージを与える。それにより、相手に・・・2100ポイントのダメージを与える！。エンドレス・ドラゴン・ATK1000。}

エンドレス・ドラゴンの口から、強大な波動弾が放たれ、それが相手を襲った・・・ハズだった。

「そう簡単にやられると思ったか！罨発動、ダメージ・ドロー。相手がダメージを与える効果を発動した時、そのダメージを無効にし、そのダメージ1000ポイントにつき、デッキからカードを1枚ドロウする！！。ダメージ・ドロー・罨効果、相手がダメージを与える効果を発動した場合に発動する事ができる。そのダメージを無効にし、その時発生したダメージ1000ポイントにつき、デッキからカードを1枚ドロウする。}

巨大な渦が発生し、その中に放たれた波動弾が吸い込まれていった。

「そして、デッキからカードを2枚ドロウ」

「・・・もう、為すすべは・・・無いのか。」

「・・・ターンエンド」

「フン、俺のツアーン！！」

Y u g a ・ S p c 6 ・ L P 2 2 0 0

N a s k a ・ S p c 1 0 ・ L P 3 8 0 0

「無駄な足掻きもここまでだ。俺はスピード・ワールド2の効果を発動。自分のスピードカウンターを10個取り除く事により。Sp c 1 0 0。フィールド上のカード1枚を破壊する。俺は、盾の守り神を破壊！！」

俺のフィールド上に存在していた、カードが破壊され、粉々に粉碎された。

「クツ・・・」

「さらに、手札から悪魔の人形を攻撃表示で召喚！！。悪魔の人形・悪魔族・ATK0・罨・1・効果。そして、このカードをリリースする事により、デッキから同名モンスターを2体、特殊召喚する

「悪魔の人形・悪魔族・ATK0・闇・1・効果」
「悪魔族・ATK0・闇・1・効果」

一気にモンスターが3体に……だが、一体何をやりたい。

「そして、手札の人形師の小人を墓地へ送る事により、このターン、もう1度だけ人形と名の付くモンスターを通常召喚できる」

「……バカな、この状況で……もう1体召喚するだ！」

「俺は、2体の悪魔の人形をリリースする事により、手札から暗黒の人形職人をアドバンス召喚！
「暗黒の人形職人・戦士族・ATK2400・闇・7・効果」

2体が重なり合い、そしてそこに現れた空間から、1体の黒ずくめの男が現れた。

「このモンスターは、攻撃力が変化しない効果を持っている！」

「なんだと!!」

ナムタルの効果を受けない……人形モンスター。

厄介にも程がある！

「さあ、このままバトルだ！」

そして、ナムタルの鎌が、エンドレス・ドラゴンの前で振り上げられた。

「パーフェクト・デスサイズ!!」

そして、その鎌が……振り下ろされた。

その時、その場に煙が舞い上がった。

振り下ろした衝撃によって発生したのであろう。

周りがどんな事が起こっているのかは全く見えない。

ただ……俺は、衝撃に耐えながらも、心の中で思った。

もし、このターンでエンドレス・ドラゴンが破壊されれば……

俺は……

だが、目の前に1枚のカードが表示された。

ガード・プロフェッショナル

このカードの効果……そうか!!

遠く意識を取り戻し、俺はナスカに追いつく為に、加速した。

そう言えば、コイツの効果には……あの効果がある。
だから……エンドレス・ドラゴンはまだ、生きている！

「フツ、死神の前にひれ伏したか……」
完全に勝った気でいやがるが……だが、俺は負けていない！
視界が元に戻った。

すると、俺の予想通り、俺のフィールド上には、豪快に飛ぶ、エンドレス・ドラゴンの姿があった。

「んな！！バカな、一体……何があつた！」
俺のライフが表示された。

HP 1300

「これは……そうか、お前の場にいた、あのモンスターか！
そうさ、全ては……コイツのおかげだ。」

「ガード・プロフェツシヨナルの効果により、自分フィールド上に存在するモンスターが戦闘を行う時、フィールド上に存在するこのカードを墓地へ送る事により、このターンのエンドフェイズまで、戦闘を行うモンスターは戦闘、及びカード効果では破壊されない！」

「っ、だが、暗黒の人形職人は、守備力を攻撃力が超えていれば、半分の数値ダメージを与える！」

恐らく、これが最後の……攻撃だ。

「ニードル・シュート！」

人形職人の手から、小さな針が取り出され、それをエンドレス・ドラゴン、及び俺の方へと投げた。

「っ……！！」HP 1300 150

確実に、やばくなってきた。

「俺はターンエンド！」

確実に次のターン、鍵となるカードを引き当てなければ……
敗北。

その文字が、頭をかすめた。

クツ……一体、どうすれば。

……絶体絶命、いい気味ね。

・・・何だ、一体？

- それでも貴方は、まだ諦めないつもりね。バカな男。
その瞬間、俺の目が光った。

自分でも分かる、これは・・・誰かが俺に問いかけている。

- ウルズのルーンを持つ者、貴方は運命を変えようとしている。その行為は、未来の神でもあるこの私が許す訳がない。貴方は・・・負ける。

んな！！俺が・・・負けるだと。

- そう、貴方は次のターン、鍵となるカードを引けず、そのまま死神の餌食となる。そして、世界は支配者によつて、支配される。

・・・そんな未来、あつてたまるかよ。

- 未来を変えたい、その意思が、無駄に未来を変えようとする。貴方と言い、不動遊星と言い、この世界には厄介者が多い。

・・・いや、それは違う！

- へえ、何が違う。

未来は、変えられる。どんな未来が待ち受けようとも、どんな運命が待ち受けようとも、人には・・・可能性がある限り、知った未来を変える力がある！だから俺は・・・絶対に諦めたりはしない！
-・・・バカね、だったら見せてもらおうじゃないの。貴方の未来を変える、その意思を。

・・・見せてやる、だったら・・・見せてやる！！

-・・・本当にバカね、一つ忠告しておくわ。貴方が、本当に運命を変えた瞬間。貴方の大切な記憶が失われる。

な！俺の・・・大切な記憶が・・・失われるだと。

- そう、それは絶対に逃れられない運命。貴方が勝った瞬間、貴方は波動に飲み込まれ、転倒する。そして、打ち所が悪く、大切な人の記憶を・・・全て失う！

・・・それで？

- つ、そんな大切な事に対して、それで・・・で済ませただと！

確かに、大切なヤツの事に関する記憶が消えるのは正直困る。だが、

この世界が不幸になるのでは、全然釣り合いが違う。

・貴方は・・・あの子達を悲しませる事になるのだぞ！それでも、この私を使うとでも言うのか！！

ああ、アンタが何者かは知らないが、俺は・・・アイツ等が無事なら、そして、この先生生きていられるのなら・・・俺は、自分を犠牲にできる覚悟はある！

・っ、貴方は・・・貴方自身の命を何だと思っているの！？

俺の命・・・。

俺は、俺に関する事に対して、全く知らない。

自分が何処で生まれ、そして、どうやってあの母に拾われたのか・・・。

それに対して、アイツ等は、生まれながらにして、不幸な運命を背負い・・・それでも、懸命に生きるその姿は・・・いかに俺の存在がちっぽけに見える。

それを考えると、俺の命には・・・価値すらない。

・っ・・・っ・・・自分の命さえも否定するとは・・・好きにしる、私は・・・お前が大っ嫌いだ！！

・・・嫌われるのは、慣れていく。

するとそこで、声がかきこえなくなった。

相手も諦めたのであるう。

・・・正直、あの話が真実から、どちらかと言えば、ウソだと思いたい。

それでも、運命からは逃れられない・・・。

いや、何弱音を吐いているんだ。

俺は決めたんだ・・・。

絶対に、アイツ等を・・・いや、この世界を救うと。

その為なら・・・この命、運命に授ける。

「俺の・・・」

デッキの上に、指を置いた。

そして、カ一杯、カードをドローした。

「ドロォー!!」

Y u g a ・ S p c 7 ・ L P 1 5 0

N a s k a ・ S p c 1 ・ L P 3 8 0 0

来たカードは・・・スピードスペル、ギガクラッシュ。

・・・それに、確かこのターンは。

「スピードスペル、風の中の棺の効果発動!発動から2ターン後のスタンバイフェイズ時、このカードの効果によりデッキから除外したカードを、手札に加える!!」

フィールド上に、棺が現れた。

そしてその中から、カードを1枚、取り出した。

すると、取り出したカードのテキストが浮かびだした。

このカードの効果・・・待てよ、このスピードスペルと組み合わせれば・・・。

行ける、このデュエルに・・・終止符を打てる。

「手札からスピードスペル、ギガクラッシュを発動。自分のスピードカウンターが7つ以上の時、発動できるスピードスペルだ。このターン、戦闘によって破壊されたモンスターのレベル×の200ポイントのダメージを与える!!」
「S p - ギガクラッシュ・S p 魔法・効果、自分用スピードカウンターが7つ以上の場合発動できる。このターン、戦闘によってモンスターが破壊された場合、そのモンスターのレベル×200ポイントのダメージを相手に与える!」

「無駄だ、そんなカードを発動した所で、どうにもなりはしない!」

「それはどうか」

「なに?」

「俺はまだ、可能性を捨ててはいない。例えこの身が果てようとも俺はお前を、倒す。それが光栄たる遊画の・・・成す事だ!!」

「フン、バカげた事を。この状況を打開できる訳がない!」

だが、この状況を・・・俺は打開できる!

フツと、俺は笑みを浮かべた。

「手札から、極星命デイスを攻撃表示で召喚!!」
「極星命デイス

ス・魔法使い族・ATK1400・光・4・チューナー」

俺のフィールド上に、女神が舞い降りた。

「そして、このモンスターの召喚に成功した時、墓地、または手札からレベル3以下の魔法使い族モンスター2体を、特殊召喚できる
！！」

「んな！この状況で・・・レベル10のシンクロモンスターを召喚できる状況を作り出したと！！」

「墓地より蘇れ、風霊使いウイン、そして、火霊使いヒータ！
風霊使いウイン・ATK500」
「火霊使いヒータ・ATK500」
俺のフィールド上に、2体の・・・仲間が姿を現した。

そう言えば、色々な事があつたな・・・。

ここまで来るのに、俺は・・・。
そう考えてくると、記憶を失うのはキツイ。

だが、一度決めた事は仕方ない。

俺は・・・信念を貫く！！

『・・・どうしたの、そんな難しい顔をして？』

ウインが、俺の顔を見るなり、そんな事を聞いてきた。

「・・・いや、何でもない」

・・・本当は、何でもない訳が無いのだが・・・この事を知った瞬間、コイツは意地でも断るだろうからな・・・。

コイツに限った事ではない。

アイツ等全員に・・・言える事だ。

・・・余計な心配はかけられたくは無い。

運命に従い、俺は・・・仲間を守る！

「レベル3の風霊使いウインと、火霊使いヒータに、レベル4の極神命デイスをチューニング！！」

デイスの体が透明になり、その中から4つのチューニングリングが発生し、そのリングがウインとヒータを覆いつくした。

「運命を知りし大いなる女神よ、神々の運命を悟り、その道を受け
！！」

そして、俺は空白のカードを手に持った。
と、その瞬間、そのカードの絵柄とテキストが現れた。
そこに書かれたカード名……。

『極神聖帝スクルド』

そう、極神の中で、オーディンと同じ位を持つ、神。

「シンクロ召喚!!」

そのカードを、デュエルディスクに召喚した。

「運命の三姉妹、極神聖帝スクルド!!」

そして、その場に、ツインテールの藍色の髪をした、少女が現れた。
空中をクルクルと周りながら舞い、そして、一瞬俺を睨んだような
視線を感じつつも、俺はその姿に見とれた。

だが、それと同時に、これから起きる悲劇の……引き金となっ
た。

そんな事はまだ、誰も知ることもなかった。

記憶を失う事により、起こる悲劇。

神を使った代償は……大きい事に、俺は気づかされるハメにな
るとは……その時の俺は、知る余地もなかった。

続く

次回予告

「何故だ……何故お前は……戦える!？」

「……守りたい」

「なに？」

「俺は……何かを犠牲にするのが、もうイヤなんだ!!」

次回、遊戯 王 Fate 第27話「運命を変えた代償」

「ここは……それに、お前は……誰だ？」

次回のキーカード
極神聖帝スクルド・幻神獣族・ATK0・神・
10・シンクロ、
効果

第26話「第3の死神、ナムタルの脅威」(後書き)

あとがき

とりあえずは、2月に入る前に完成させたのですが、どうでもいいです。

今回も時間がありません。

そんな訳で、明日から4日間、修学旅行で文章書けません。

そして、次回は2週間後になる恐れがあります、以上。

そんな訳で、今回はここまで。

東京、新潟、もしもスキー場で「いやあああああっほおおおおおお！」と言っているヤツがいたら、生暖かい目で見守って下さい。

それでは、次回も、皆さんを満足させるZ E

1月31日 自宅にて

第27話「運命を変えた代償」(前書き)

実際には、昨日と今日で書き終えました。

どんだけ暇人なんだよ、俺。

とか言いつつも、これで第1章前半が終了です。

第27話「運命を変えた代償」

「レベル3の風霊使いウインと、火霊使いヒータに、レベル4の極神命デリースをチューニング！」

デリースの体が透明になり、その中から4つのチューニングリングが発生し、そのリングがウインとヒータを覆いつくした。

「運命を知りし大いなる女神よ、神々の運命を悟り、その道を導け！！！」

そして、俺は空白のカードを手に持った。

と、その瞬間、そのカードの絵柄とテキストが現れた。

そこに書かれたカード名……………。

『極神聖帝スクルド』

そう、極神の中で、オーディンと同じ位を持つ、神。

「シンクロ召喚！！！」

そのカードを、デュエルディスクに召喚した。

「運命の三姉妹、極神聖帝スクルド！！！」

俺の目に、ルーンの瞳が輝きだした。

そして、その場に、ツインテールの藍色の髪をした、少女が現れた。空中をクルクルと周りながら舞い、そして、一瞬俺を睨んだような視線を感じつつも、俺はその姿に見とれた。

へ極神聖帝スクルド・幻神獣族・ATK0・神・10・シンクロ、効果」

「これが……………神のモンスター」

途方もない迫力に、俺は……………怯えているのか。

体が、死神を見た時以上に……………震えが、止まらない。

これは、恐怖なのか？

それとも、強力な力の前に、怯えているのか？

……………だが、ここまで来たからには、もう後戻りはできない。

そうさ、俺は……………例えどんな運命であろうとも、決められた

道を……壊してでも変えてやる。
それが……光栄たる、我が遊画の成すべき事だ！！

デュエルとは何か、それは己自身の限界を相手とぶつけ合う決闘。
デュエルとは何か、それは相手との絆を深め、共に信じ合う心を生む為の決闘。

そして、デュエルとは何か、それは、偶然と信じる心が奇跡を生む決闘。

この物語は、そんな純粹で鈍感な心を持つ少年、公栄遊画とその仲間たちによる、熱く、激しい戦いによる絆で世界を救う、カードゲームラブコメディである！

第27話「運命を変えた代償」

「んな！！」

「何、このモンスター！？」

後ろから着いてきていたフルと沙耶が、その姿に啞然としていた。

「バカな……極神だと。何故キサマが、ミズガルズの守護竜を持つキサマが……そんな物を持っている！！」

「……これは、俺の覚悟だからだ」

「なに！？」

「これが……運命を変える……この俺の、覚悟の象徴だ！！」

「何を訳の分からん事を、攻撃力がたかが0のモンスターごときに、死神を倒せる物か！それにな、死神ナムタルの効果により、攻撃力は100になる！」

ナムタルの鎌から、何かのエネルギー波がスクルドを襲った。

「クツ……極神聖帝スクルド・ATK0 100」

「フン、そんなクスを使って、何になる。結局は、強者だけが世界を操れるんだよ。キサマらみたいな下級は、駒みたいに操られ、そ

して捨て駒となる結末なんだよ」

そんな言葉を浴びせられたが、それでも俺は、言葉に戸惑う事もなく、ナス力を睨みつけた。

「……………それでもな、お前が言う、下級の駒には、強者を倒す力が……………秘められているんだ！」

「何だ、その目は……………気に入らん」

「……………力とは、全員が持つ物だ。個人個人の力では何にもならないが……………それでも、仲間同士で繋がれば、莫大な力となる！！」「お前は勘違いしている」

「んなに！！」

「人とは、信じ合えばそれが力となる。孤独な力とは違い、暖かく、優しい力を。この力が、この世の中で最も大きな力だ！」

「ツチ、いつまでも戯れ言を」

「これは戯れ言ではない！！仲間は繋がり、そして、絆が生まれる。そして時にその絆が、仲間のピンチに強大な力を発揮する。例えばどんな無理な状況でも、例え自分が挫けそうになっても、支えてくれる仲間がいる限り……………人は、立ち上がる事ができる！！」

「フン、そんな事を言ってもな、今の状況を覆すカードがフィールド上にあるか！お前のフィールド上にはエンドレス・ドラゴンに、極神聖帝スクルド。どう考えても、勝つのは不可能だ」

「……………昔」

「いつまでも言うつもりだ、このクソガキが」

「昔、ヤツは言っていた。孤独に生きるよりも、仲間を作って、楽しく生きる方がよっぽど楽しいと」

「それがどうした」

「俺は分かったんだ。今になって、その言葉の意味を。そうさ、歴代のデュエルキング、武藤遊戯さんや、アカデミアの英雄となっている遊城十代さんは……………決して1人では無く、数々の仲間を作り、そして……………成長していたんだ。だからこそ、俺も……………その流れを、不動遊星と同じように、受け継ぎたいんだ！！」

この状況を打開するキーカード、その運命が本当であるのなら、俺は……運命を受け入れ、そして、記憶を取り戻すまでだ！

「極神聖帝スクルドの効果発動。1ターンに1度、相手フィールド上に存在する、攻撃力が一番高いモンスターと、このモンスターの攻撃力を入れ替える！！」

「……なに、攻撃力を……入れ替えるだと！！」

「パワー・ドレイン！！」

スクルドの体から、藍色のオーラが放たれ、そのオーラに飲み込まれたナムタルは、徐々に弱体化しているのが分かった。

「グオオオオオオオオオ！！」
Death・Grim・Reape

デス・グリム・リーパー・ナムタル

r・Namtal・ATK1000 1000
「極神聖帝スクルド・ATK1000 1000」

「バカな……何故だ……何故お前は……戦える！？こんな不利な状況でも……何故キサマは……戦える！」

戦う意味、そんな事、決まっているじゃねーか。

「……守りたい」

「なに？」

「俺は……何かを犠牲にするのが、もうイヤなんだ！！海佐の時だって、自分は何も出来ずに、ただ恐怖に怯え、そして目の前で殺された。そんな、何かを失うのはもう、イヤなんだ」

「何かを……守りたいから……だと」

「そうさ、この逆転が不可能と思える状況でも、俺は、全ての仲間を……カードを信じて、お前を倒す。もう終わりにしようナスカ、こんなバカげた、世界を支配するなんて事は」

「……ふん、だったら面白い。だったら俺の野望を阻止しようとする、お前の力を見せてみる、公栄遊画あ！！」

コイツ……. だったらやっつてやる。

そう思うと、自然に笑みを浮かべた。

「スピード・ワールド2の効果発動。自分のスピードカウンターを7つ取り除く事により」
SpC7 0
デッキからカードを1枚、

ドローする！！」

俺は勢い良く、カードを引いた。

「このモンスターは、自分のターンにシンクロ召喚を行った場合、手札から特殊召喚できる。ディフェンド・スター・マジシャンを特殊召喚！！」
「ディフェンド・スター・マジシャン・魔法使い族・ATK0・光・1・効果」
そして、召喚したこのモンスターをリリースする事により、このターン、シンクロモンスター1体は、戦闘によって破壊されず、ダメージステップ終了時に墓地からレベル4以下の魔法使い族モンスター1体を特殊召喚できる」

「クツ、このまま攻撃をされれば・・・ちいっ」

行ける、このまま行けば、俺は・・・勝てる。

「バトル、極神聖帝スクルドで、デス・グリム・リーパー・ナムタルを攻撃！！デステイニー・ギガドライブ！！」

スクルドが、手を前に沿えると、そこから魔法陣が現れた。

そして、その魔法陣から、恐ろしい量の弾丸が発射され、その全てが死神に襲いかかった。

「グアアアアアアアアアアア！！！」

そして死神は、そんな悲鳴と共に・・・崩れていった。

生き物とは思えない、体が溶け始め、そして急に発生した黒い空間へと、引きずられていった。

「死神が存在しなくなった事により、俺のフィールド上に存在するモンスターの攻撃力は元に戻る」
「エンドレス・ドラゴン・DEF100 2100」
「極神聖帝スクルド・ATK100 1000」
「・・・だがまだだ、死神はいくらでも蘇る。手札の罠カード、アドバンス・サルベージがある限り」

このカードの効果は、墓地からレベル10以上のモンスターを手札に加え、戻したモンスターのレベル×100ポイントのダメージを相手に与える効果がある。次のターン、あのクソガキに勝てる！

無駄だ、アドバンス・サルベージを発動される前に……この
ターンで決着を付ける！！

「スピードスペル、ギガクラッシュの効果により、破壊したモン
スターのレベル×の200ポイントのダメージを与える！！」

「クツ、その効果があつたか！」

空から、雷撃が発生し、その雷撃がナス力を襲った。

「ぎゃあああ！！つ」LP3800 2000

このまま、突き進む。

それが……この俺だあ！！

「そして、デイフェンド・スター・マジシャンの効果により、墓地
より憑依装着ウインを特殊召喚する。蘇れ、憑依装着ウイン！！」
憑依装着ウイン・ATK1850

「このままどうする気だ。まさか暗黒の人形職人までもを破壊する
気ではないだろうな」

そのまさかだ。

俺の墓地には……鍵となるカードが2枚ある！！

「墓地に存在する、盾の守り神を発動」

「バカナ、まだ手があるだつ！！」

「このカードをゲームから除外し、エンドレス・ドラゴンの表示形
式を変更する」
エンドレス・ドラゴン・DEF2100 ATK2
500

「バカナ……この俺が、負けるだつ。こんな小娘ごときに……
こんなガキ相手に、負けるだつ！？」

「そしてエンドレス・ドラゴンで、暗黒の人形職人を攻撃。パラデ
イン・クロー！！」

エンドレス・ドラゴンが舞い上がり、そして一定の高さまで飛び上
がったかと思つたら、そこから急降下を始めた。

そして、手の爪を剣状にすると、その爪で、暗黒の人形職人を、切
り裂いた。

「ぐおあああああ」LP2000 1900

「そして、ギガクラッシュの効果により、レベル×200ポイントのダメージ。計1400のダメージを与える！」

再びナスカの上空から、雷撃が発生した。そして、ナスカを襲った。

「ぐあああああああ」HP1900 500

「トドメだ、憑依装着ウインで、相手にダイレクトアタック。ストーム・サイクロン！」

その時にナスカを見たが、ナスカの表情は、恐ろしい物となっていた。

目はヘルメット越しからでも分かるが、完全にイッており、まるでリドウが追い詰められた時のように、目が開き、そして、思いつ切り口が開きつぱなしになっていた。

「やらせるか……俺は……神になる男だ！墓地に存在する、暗黒の人形職人の効果発動、このカードと、モンスター1体に、魔法、罠カードをそれぞれ1枚ずつゲームから除外する事により、攻撃を無効にし、そのモンスターを破壊する！」

すると、そのままウインの前に、さっき破壊した人形職人が現れた。そして、ウインに襲いかかった。

「い……いや、来ないでえええええええ」

それと同時に、俺は墓地から、とある罠カードを取り出した。するとウインは、人形職人に向かって、風の魔術を発動させた。

その後、人形職人は……発生した竜巻に飲み込まれ、そのまま消え去った。

「そんなバカな……何故だ……」

ナスカの目線が、俺のフィールド上のカードに切り替わった。

「そ、そのカードは……！」

「そうさ、ナムタルの召喚時に破壊した罠、アンバランスな塔だ！このカードは破壊された時、デッキからカードを1枚ドロウする効果だけではない。墓地に存在するこのカードをゲームから除外し、相手が発動したモンスターを破壊する効果を無効にし、破壊する効

果がある！ハアンバランスな塔・罾・効果、セツトされたこのカードが破壊された場合、デッキからカードを1枚ドロウする。また、墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事により「フィールド上のモンスターを破壊、または除外する効果」を持つモンスター効果を無効にし、破壊する」これで終わりだ、攻撃だ、ウィン！

ウインの持っている杖の周りに風が集まり、それが竜巻並に強くなつた。

そして、その竜巻が……無防備なナスカを、巻き込んだ。

「うあああああああ」LP5000

全てが終わつた。そう、俺は思った。

するとその瞬間、相手に変化があつた。

「何だ、死神が……うわっ！！」

「んな！！」

するとそこには、倒したハズの死神、ナムタルが……姿を現した。

何があつたのか。どうして、デュエルは終わったハズなのに。

そんな疑問を抱いていた。

「まさか、アイツが……俺を、利用しただけだというのか……」

……うあああああああ！！」

ナスカのD・ホイールは、ブラックホール状の何かの中に、吸い込まれていった。

そんな事が後ろであつている。そんな事がハッキリと伝わっていく現状だつた。

すると、俺の目に違和感を覚えた。

ルーンの瞳が再び発動したのだ。

そこに映し出されていた光景、それは……。

とある塔が立っていた。

これは……闇の時計台か？

そんな事を思った。すると、そこに、2人の人影があつた。

1人は・・・仮面をした女性に、もう1人は・・・。
赤い髪にロングヘアが特徴の・・・トト！！

それにあの女性、仮面をしているが、あちらも黒髪のロングヘアに、豊かな胸。

だが、俺は知った。

アレは・・・間違いなく・・・。

そう考えた時、次の映像が頭を過ぎった。

何も無い、荒れ果てた荒野の風景が。

ここは・・・。

すると、目の前の風景に、俺は目を疑った。

アレは・・・ダイダロス・ブリッジ！！

かつてサテライトの伝説を生んだ・・・橋。

何でそんな物が・・・それに、地上のあちらこちらに、石版が・・・。

しかも、よく見てみると、それは・・・シンクロモンスターが描かれた石版。

何で、こんな物が・・・つ。

すると、そこで俺の意識は失われた。

突然、別の場所から、何かの衝撃を受けたかのように・・・。

「ぐはっ！！」

そして、我に返った俺は・・・そのまま転倒した。

しかも、運が悪い事に、ヘルメットが・・・割れた。

普通ではあり得ない事だが、それだけ衝撃が激しかったと言う事になる。

・・・そうか、運命を変える事は・・・それなりの代償があるんだな。

ごめんな、俺は・・・1人で突っ走った結果、お前らを悲しませる事になるとは。

・・・海佐、お前は今の俺を見て、何を思う。

多分だと思うが・・・「情けない」とは言うと思う。

実際、情けないぜ。

何だって……運命を変えろと言いながらも、実際には……
告げられた運命に逆らう事もできていないんだし……。
後は……まかせた……フル、沙耶……。

瞬間、放り出された遊画は、着地の時に、思いつ切り頭を強打した。
「がはっ!!」

そしてその後、地面を5度ほど転がり、止まったと思えば、そのま
ま動かなくなつた。

「遊画!!」

「遊画、しっかり!」

すると、空間に穴が開き、その中から7人の霊使いが現れた。

「しっかりしてください、遊画さん」

「シヤレじゃあらへんで!死ぬな、遊画」

「このまま死なないで下さい、遊画さん」

「……妙だ」

「っ、早く目を覚まして」

「……遊画」

「この程度で死ぬような男じゃないでしょう!目を開けなさい、遊
画」

1人を除いて、全員が遊画の心配をしていた。

すると、遊画の目が……静かに開きだした。

『遊画!!』

一斉に、喜びの声が上がった……が。

「……」

遊画は、無言だった。

「……遊画?」

すると遊画は、全員が耳を疑うような言葉を、言った。

「ここは……それに、お前は……誰だ？」

その瞬間、その場の空気が凍りついた。

「……え？」

「お前は誰だと聞いている。何故この俺の名前を知っている。女のクセに生意気だ」

そう、遊画の記憶は……失われていた。

「……そ、そんな……遊画」

「黙れ、女に俺の名前を言われると虫酸が走る。それに、目障りだ」
「っ!!」

パチン。

ウインは、遊画に向かって平手でビンタをかました。

「……貴方は、女性をそんな目で見ていたの？」

「……何が悪い。俺はいつも、孤独の中で生きてきた存在だ。俺がお前らをどう見ようが関係ない」

「……そんな、貴方は……本当に遊画なの？」

愕然としている沙耶に向かって、遊画は……トドメの言葉を口にした。

「真正正銘、公栄遊画……いや、俺は神の出来損ないだ」

神の出来損ない、そんな言葉は今はどうでもいい事だった。

「遊画、様がおかしいぜ。昔のお前でも……そこまで質が悪いヤツじゃない!!」

「部外者は黙っている」

「んな!!」

遊画の鋭い言葉に、フルは撃沈したようだ。

「うぐ……」

完全に沈黙した。

「……どうやら、コイツは私たちを覚えていないどころか、今までの記憶と共に、コイツ自身の本音が出ているようだな」

そんなエレナの声が聞こえた。

「……それが、貴方の本音なのね」

「見損なつたですわ。貴方に心を癒されたと考えたと考えると、無性に腹が立つのですの」

ウィンとエリアが、遊画を見下した。

「……気に入らねえな、その瞳」

「フン、覚えていないのなら、私たちは精霊界に帰るまでだ」

「ああ、だったら2度と俺の前に現れるな。憎悪がする」

エレナの言葉に、遊画が喧嘩腰の言葉を発した。

「……やはり妙だ」

そんな事を呟きながらも、エレナは遊画のデッキから、カードを抜き取った。

「それじゃ、私たちを返してもらおう。キサマが迂闊に破り捨てる事のないようにな」

「勝手にしろ。俺には関係のない事だ」

その言葉を合図に、霊使いのみんなは、自分用のワープホールに入つていった。

最後に……。

「遊画さん、さようなら」

「バカはやっぱり、死んでしか治らないらしいね」

「ホンマウチは、絶望の言葉を知つたで」

「……遊画、お前は」

「……やはり、何か影がある」

「……遊画なんて、大っ嫌い」

「貴方なんて死んでしまえですわ」

そんな事を全員が言うと、静かに……ワープホールが閉じた。

「……くだらない。俺は、俺は……」

『俺は、孤独とでも言いたいのか？』

遊画の中から、声が聞こえた。

「……誰だ」

『そう睨むなよ。俺は俺で、お前は俺だ』

「……意味が分からない」

「まあいい、時が来れば分かる事だ。それにな、ヘルも、トトに早く復讐させると鬱陶しく騒いでいるからな。まあ、お前には関係のない事だが」

「関係のない事？」

「っ……全てお前の仕業か！俺の記憶を失わせ、更にアイツ等にあんな酷い事を言わせた犯人は……お前だったのか！」

その時、まるで遊画は……自分で無い、何かと対立していた。

「さあ、何の事だか」

「ふざけるな！お前の目的は一体何だ、何で俺の中に……いる」

「……ただ、殺りたいからさ」

殺したいから……？

「俺は、心の闇に、核心を付く物。名を、幻魔と言う」

「幻魔……」

「そうだ、今俺は、お前の心の中にいる。俺は心の闇を通じて、人の中に侵入する事ができる。公衆遊画、その内、お前を利用してもらう。その為にも……お前の友情や絆は、邪魔になるだけだっ、そんな理由で……俺の仲間だと思える奴らに……あんな酷い事を！」

「さらばだ、また会おう。お前は、運命の神を持つ者、そして、前世が千年アイテムの犠牲者でもあり、それまた前世が冥界神、つまりお前は、使い方次第では……世界を滅ぼす存在ともなる」

俺が……世界を滅ぼす存在だと。
「ってか、何だよ、前世の前世って……。まるで話が……滅茶苦茶だぞ」

「いずれ分かる事だ。何故キサマが生まれたのか、そして、キサマが何者なのか。それは、神を作ろうとした組織が作り出した、失敗作だからだ」

っ、訳の分からない事を。

「キサマには、失敗作の後遺症によって作り出された人格を使って、

再び俺が、冥界へと戻る手伝いをさせてもらおう。そして・・・俺を倒した忌まわしき不動遊星を倒すためにな」

つ、そんな好き勝手には・・・。

『あばよ、俺はお前から出ていく。ついでに記憶を消去しておく、面倒な事になる前にな』

「ま・・・て・・・っ」

急激な頭痛が脳を襲った。

・・・あれ、俺は何を・・・。

「遊画、さっきの叫びは一体」

沙耶からの問いに、遊画は答える事は出来なかった。

「・・・ゴメン、俺は、記憶を失っている。だから、答える事ができない」

フルはその答えに対して、不快感を覚えていた。

「しゃべり方が変わっている。それに、小言で言っていた・・・。何故俺の中にいる・・・。ちょっと、イヤな予感しかしないぜ」

『それで、死神のカードは全て回収できたのか？』

「・・・いいや、最後の一枚の、ナムタルのカードだけが今でも行方不明のままよ」

ここは、カードステーション社の大型モニター室。

そこに、英子はいた。

そして、画面には、1人の欧米人の男性が映っていた。

髪は白く長めで、髪と眉毛が繋がっており、目つきはキリッとしているのが特徴的な人だった。

『・・・そうか、それは残念だ。我々でも搜索してみるとするか』

「お願いね、ハラルド」

そのハラルドと呼ばれた男性は、ちょっとした笑みを浮かべた。

『分かっている、私たちはノルンを知る者。これぐらいの事はする

さ。ところで、後ろの2人は一体何をしているのかな?」

「後ろ?」

英子は、すぐに後ろを振り向いた。

するとそこには、腕を組みながら柱に寄りかかっている新和の姿と、その横には……。

「真!」

公栄英子の夫である、真の姿もあった。

「……悪かった、ちよつと厄介事に巻き込まれてな。危うく暗殺されかけていた」

すると英子は、いきなり真の胸に思いつ切りダイブした。

「うおつと!」

真は、英子の体を支えると、英子の顔を見るなり、苦笑を浮かべた。「ヤレヤレ、こんな妻を持っていれば、浮気なんてできねえな、真」新和も、この状況で茶化した。

「ああ、俺も、自分の妻にこれ程ときめいた事は無かったぞ」

その時の英子の顔は、涙を浮かべながらも、ニツコリと、笑っていた。

「悲しませるんじゃないわよ、バカ」

「ゴメンな、英子」

「それで、今回の一件は、まだ別の組織が関与しているとも言えるのか?」

体制を整えた真は、コクンとうなずいた。

「ああ、どうやら今回の事件、イリアステルの連中が時を操っているせいで現れた化け物が関わっているらしい」

「ほう、流石はエリファスの血を持つ者だけはあると言う事か。それで、その化け物とは一体何なんだ?」

「それは……俺にも分からない。ただ言える事がある」

「言える事?」

「遊画が……危機に陥る」
ハッキリと言った。

その言葉で、カードステーション側の空気が凍った。

「……ちよつと待ちなさい。遊画が危機に陥るって、一体どう言う事よ！」

「流石にその言葉は聞き捨てならないな真。自分の息子のピンチに、ノコノコとこんな場所で油を売っているヒマがあるのかよ」

そんな罵声を浴びせられたが、真は冷静だった。

「……俺も、さつき知った、占いの結果だ」

真の場合、魔術師の血を持っている為、彼の占いはある意味、本物の占いなのだ。

そんな彼の言葉に、間違いなど無い。

「しかも、もう手遅れだ。遊画は……自分自身と戦うハメになる」

第1章前半「エクス編」終わり。

第1章後半「闇の道」へと続く

次回予告

「デュエルだ、公栄遊画！！」

「お前は、一体」

「拒否権は無い、お前は俺に倒される」

「……面白い、受けてやろう、そのデュエル」

次回、遊戯王 Fate 第28話「新たな脅威、消失する遊画」

「この顔を忘れたとは言わせんぞ！！」

「お……お前は！」

次回のキーワード

アンデッド・デス・イーター・アンデッド族・ATK2700・闇
- 6・ダークシンクロ、効果

第27話「運命を変えた代償」(後書き)

あとがき

やっと終わった、第1シーズン前半。

とりあえず、30話以内にまとめる事ができたのは良しとします。

・・・言える事はそれだけです。

さて、次回からついに新章突入です。

次回予告にあった、遊画の消失とは。

そして、冥界とは一体。

それでは今日はこの辺で。

次回も、いいデュエルをご用意しております。

2月6日 自宅にて

第28話「新たなる脅威、消失する遊画」(前書き)

ついに、第1シーズン後半です!!

第28話「新たなる脅威、消失する遊画」

「しかも、もう手遅れだ。遊画は……自分自身と戦うハメになる」

その時に、英子は愕然とした。

「ウソよ……何で、私は、この事件で解決すると思っていたのに」

『どうやら、イリアステルが動いたせいで、予知も出来ない事が起こっているらしいな。私のルーンも、そう感じている』

ハラルドの目に、ルーン文字の瞳が浮かんだ。

「……オーデインを意味する文字か」

『そうだ、私は極神聖帝オーデインを所持する者。そして、これから起こると言われているフィンブルの冬に備えて、準備をする者でもある』

「それぐらいは知っている。そう言えばハラルド、この土地の伝説は知っているか？」

真は、唐突にそんな事を聞いた。

『知っている、アーカイトシティ。そこに存在する、時計台の伝説。正直私も、あの時計台は好きではない』

「と、言うത്？」

『嫌いなのだよ、オーラと言うか、禍々し過ぎる雰囲気だ』

「……やはり、何かあるんだろうな。この町には」

真の呟きと同時に、ハラルドは手を挙げた。

『なににせ、今回の件に関しては私もお手上げた。そちらで頑張ってくれ』

「そうするわ、それじゃ、そっちも頑張ってね」

『ふっ、姫様から言われれば、悪い気はしないな。私たちも、WR GPに向けて頑張るとしよう。また会える日を、姫様、そして魔術師の血を持つ者に、オニユンポスの最高三神を持つデュエリストよ』

そうやって、ハラルドはモニターの画面を切った。

部屋に、沈黙が続いた。

「……んで、どうするんだ真。お前が占った結果が本当なら、お前は助けに行かなければならない立場じゃないのか？」

「その言葉、お前にだけは言われたくないセリフだが……仕方ない」

「オイ、仕方ないって」

新和は、少し動揺したが、続く真の言葉に、更なる動揺を見せた。

「俺はまだ、動ける状態じゃない」

「って！！正気かお前。自分の息子を見捨てる事を」

「いいや、実際に動けないんだ。忘れたのか、俺はこの1時間以外の時には、つねに監視されている事を。へたに動けば、俺達の計画が台無しになる」

「クツ、それはそうだが……」

新和が反論しようとしていたが、その反論は英子によってうち消された。

「……分かったわ」

「ってオイ、お前まで」

「新和、貴方の言いたい事は分かるわ。でもね、だからと言って、私たちは、今の状況をどうする事もできはしない。ここはもう、遊画自身に任せるしかないようね」

英子は、消えた画面を見つめながら、呟いた。

「頼んだわよ、トト・モーラン」

第28話「新たな脅威、消失する遊画」

ここは、アーカイトシティ、高級マンションの一室。

部屋番号、27室の2階、個人部屋の中で、踞っている一人の男がいた。

名を、公栄遊画こうえいゆうがと言う。

今、彼の顔つきは最悪である。

顔色が真っ青になり、生きているかどうかも疑うような、死んだ魚のような目をしていた。

アレからすでに、2ヶ月が経過した。

あの時に帰っていった奴らは、もういない。

アイツ等が俺にとって、かけがえのない存在だと言うのは、感じ取れる。

だからこそ、俺は酷く後悔した。

何で……あの時、自分の意識を取り止める事ができなかったのかを。

俺の意識とは逆の事を言い続け、そして……その後の記憶を失ってしまったのか。

俺にはサツパリ分らない。

俺が一体何者なのか……。

そして、何がどうなって、今ここにいるのか。

そう考えた俺はしばらく、家にこもった。

アカデミアに行く事もなく、ただ呆然と、時間だけが過ぎていく、今の時を。

俺は感じた。

神は……俺を嫌っているのか？

俺は神様に喧嘩を売った覚えはない。

……いや、少しあやふやな記憶はあるが、しかし、ここまで不幸になるまでやらかした記憶はない。

だがしかし、そんな事を永遠と考えても仕方がない事だ。

「……たまには、外の空気を吸うのもいいかもな」
そう考えた遊画は、立ち上がり、外へと出た。

**

**

**

**

**

**

しばらく遊画は、D・ホイールで道を走っていた。

久々に感じる風、心地よい物である。

「風が気持ちいい。まるで、俺の心の何かを取り払うような感触だ」
「……何か、思い出すような感じがする。」

何か……、大切な事を。

『大切な事を……ね。お前は大切なヤツに関する記憶を失っているからな。ある意味無理もない』

心の中で、そんな声が聞こえた。

一応、俺の中に住んでいると言っている、トト・モーランと言うヤツらしい。

コイツは、記憶を失ってから三日後に、突然俺の心の中から姿を現したヤツだ。

そりゃ、最初はビビってしまったさ。

だが慣れていく中に、コイツは……俺を知っていると感じていた。

だからこうやって、たまに話し相手になってくれたりする。

「まあな。俺は、大事な人に関する記憶だけを失ってしまったと言う、裁かれた人間なんだよ」

『裁かれた人間ねえ……』

心の中だが、何故かトトが明後日の方向を向いているのが分かる。

「……どうしたんだ、トト？」

『……いや、何でもない』

トトは、何か思いあたる事があるようだが、まだ今は話さないつもりである。

「……なあ、トト」

『何だ？』

「一つ、大事な事を聞いてもいいか？」

俺は、今一番聞きたい事がある。

どうしても、それを今知りたい。

『ど……どうしたんだ一体？まあ、答えられる分には答えるが』

「……記憶を失う前の俺って、一体どんなヤツだったんだ？」

何度も言うが、心の中でも分かるが、トトは目を大きく開き、そして『……あっはははははははは』

急に、笑い出した。

「な……何を笑っているんだ！」

『あっはははははは……ゴメンゴメン、つい可笑しくなっただけ。俺はてつきり、俺の正体や、これから何が起こるのかと聞いてくるのだと思ってしまうてな』

まあ、その辺も気になるところだが、まだ俺は知らない方がいいだろう。

そうじゃなくても、何度も聞いているが、コイツは答えようともしないし。

それだったら、聞かない方が身のためだと俺は思った。

『そうだな……昔のお前は、最初はネガティブだったが、ちょっとした事がきっかけで、絆や友情を中心に物事を考えるヤツだったな』

絆や友情……。

「そんな、熱いやツだったのか、俺は」

『そうだな。お前は、どんな時でも仲間を守る意思があり、仲間の心の闇を聞き出し、そしてその闇を軽くしようとしていたからな』
……そんな事、今の俺だったら、絶対に出来ないだろうな。

「……俺は、記憶があつた時の俺が、羨ましい」

『どうしてだ？と、聞くまでもないか』

「『そんな、人の事を考えられる人間は、結ばれた固い絆を有しているから。俺は今、孤独で鬱だ。だからこそ、早く記憶を取り戻して、失われた絆を、取り戻したい』」

2人の言葉が被り、遊画は焦った。

「って、何で分かったんだよ！？」

顔を赤くし、慌てる姿は、暗かった頃の遊画を忘れさせるような姿であった。

『あっはは、お前は俺で、俺はお前だ。昔からの付き合いで、分か

らない事もないだろ』

「確かに、そうだが……」

遊画は俯いた。

『それにな、お前が考えそうな事は、記憶を失う前と変わんねーから、すぐに分かった』

「……俺をからかうのは、それ程楽しいか？」

『ああ、楽しい』

こ……コイツは。

「ハツキリ言いやがった！何の迷いもなく、楽しいと言いやがった！何様だ、お前は！！」

『……』

「何だ、その呆れたと言いたそうな沈黙は」

『いや、記憶を失っても、本能だけは働くんだなと思って』

それはどう言う意味か、大体の予測はできたので、これ以上問うのはやめにした。

「……ハア、何だか家に隠っていたのがバカバカしく思えてきた」

『だったらアカデミアに行けばいいじゃねーか。前から言っていたが』

……それもそうだな。

俺の場合、記憶を取り戻さない限り、始まらない事もあるのだからそれだつたら、アカデミアに行き、記憶の手がかりを探した方がよっぽどいいか。

『それも一理あるな。お前の手がかりを探す為にも、俺も知らない事がありそうだからな』

どうやら遊画の想いは、トトにも伝わったようだ。

「つてかトト、お前は俺の事を知らないのか？」

遊画の素朴な疑問だが、トトは意外な答えを出した。

『……すまない、俺の記憶には……役に立つ記憶は全く無いんだ』

それはつまり、海佐の事や、遊画に関する暗い事しか無いため、その事を遊画自身に教える訳にはいけないと言う事だ。

「そうか、それは・・・残念だ」

遊画も遊画で、自分が不利になる事だと感で感じたのか、その事を問うのは辞めにした。

「・・・アカデミアか。どんな場所なんだろうな」

遊画は、ヘルメットで現在地を確認すると、アカデミアに向けて方向転換を行った。

『ヤレヤレ、お前は分かりやすいヤツで良かった』

「その意味、一字一句違える事無く、詳しく説明してもらおうか？」

そんなツツコミを入れながらも、遊画のD・ホイールは確実に、アカデミアへと向かっていった。

「見つけた・・・見つけたぞ！」

長年の恨み、お前が存在したから起こった事件。

俺はどれだけ、この時を待っていた事か。

妹を巻き込み、殺した罪。

今ここで・・・晴らさせてもらおう。

お前の命で！！

・・・いや、今は命令を遂行する。

殺すのはその後でも遅くはない。

公栄遊画、その体、利用し、利用し、最後には捨て駒のごとく、果てるがいい！！

ゾクッ

「っー！！」

何だ、さっきの殺気は。

いや、別にシヤレと言う訳ではないが・・・。

だが、今の殺気は本物だ。

冷や汗が止まらず……体が怯えている。

一体誰の……誰の殺気だ!!

『遊画、気をつける。何か来る!』

「分かっている。トト、お前も感じ取ったのか」

『ああ、この殺気はヤバイと俺でも分かる』

コイツにも感じ取れる程の殺気とは……。

すると、後ろから1台のD・ホイールが走ってきていた。

ゾクッ

その瞬間、感じた殺気がどんどん悪化した。

「っ!!また、この感じが」

『どうやら、原因はアレのようだな』

向かってきていたD・ホイールは、更に加速を始めた。

「クッ、何かヤバイ予感しかしない。ここは……逃げるのみ」

ギューン、ギューン

こちらもちちらで、加速をした。

70キロ……79キロ……そんなスピードを出してい

た。

だが、相手はそんなスピードでも、いや、それ以上のスピードを出

して、俺の所まで走ってきていた。

「っ、何なんだ。アイツは!」

相手は、俺の隣まで走ると、俺の方を向いた。

何かを言っているようだ。

「デュエルだ、公栄遊画!!」

んな……。何で俺の名前を。

「お前は、一体」

「拒否権は無い、お前は俺に倒される」

断言しやがった……。

「……面白い、受けてやろう、そのデュエル」

「そつだ、お前には拒否権などないのだから」

『遊画、大丈夫なのか。お前は、記憶を失っているのだぞ！』
ああ、問題ない。

「デュエルに関する事は、運良く残っているからな。それに、コイツは逃げようにも逃げられない・・・地獄に堕ちようが、それでもしつこく付きまとうつもりらしいからな」

『それは、直感で感じ取ったのか』

「いや、感だ」

俺はD・ホイールのハンドルに設置されているスイッチを、軽く押した。

「フィールド魔法、スピード・ワールド2、セット、オン！」

『デュエルモード、オン。オートパイロット、スタンバイ』

周りの空間が、少し暗くなった。

そして、いつものセリフで、決闘は開始された。

「デュエル！」　「Yuga VS Souma LP4000」

お互いに、デッキがシャッフルされ、デッキからカードを5枚ドロースすると、それを腕の手札ホルダーにセットした。

そして、デュエルレーンまでの道が現れ、その道を俺達は走っていた。

「・・・面白い、これは最高に面白い」

相手の小言も聞こえたが、今はそれどころではない。

精神を集中し、デュエルを行わなければ・・・俺は、マジで負ける可能性がある。

「公栄遊画、恐怖を見せてやるよ」

そうしている内に、デュエルレーン内部へと侵入していた。

そして、最初の先行レーンは、相手が相手なので、俺は後へと下がった。

「様子見か、いいだろう。だったら見せてやるよ。俺のターン！」
相手はデッキからカードを1枚ドロースすると、それを手札ホルダーにセットし、別のカードを手を持った。

「俺はミイラの化身を守備表示で召喚☆ミイラの化身・アンデッド

族・DEF100・闇・4・効果」そして、カードを1枚伏せて
ターンエンドだ」

何だ、先行から飛ばして来ると思ったら、以外と普通じゃないか。

「俺のターン！」

Souma・Spcc1・LP4000

Yuga・Spcc1・LP4000

「手札から、ジェット・スター・マジシャンを召喚(ハ)ジェット・ス
ター・マジシャン・魔法使い族・ATK1600・光・4・効果」
「

俺のフィールド上に、魔術師だが、背中に変なブースターをつけた
人が現れた。

「そして、自分フィールド上に、スター・マジシャンと名の付くモ
ンスターが存在する時、サイト・スター・マジシャンは特殊召喚で
きる。来い、チューナーモンスター、サイト・スター・マジシャン
！(ハ)サイト・スター・マジシャン・魔法使い族・ATK1200・
光・2・チューナー」

今度は、全身電子でできたような、半透明な魔術師が現れた。

「シンクロ召喚か」

「そうだ、俺は、レベル4のジェット・スター・マジシャンに、レ
ベル2のサイト・スター・マジシャンをチューニング。サイト・ス
ター・マジシャンの効果により、このモンスターはスター・マジシ
ヤンと名の付くモンスター以外のシンクロ召喚には使用できない

4 + 2 = 6 輝く星の流れよ、漆黒の空にて道を描く流れ星
のごとく、道を作れ！」

1体のモンスターが、チューニングリングを作り、そしてその中に、
もう1体のモンスターが入り込み、そして一気に光り出した。

「シンクロ召喚！流れよ、ハレー・スター・マジシャン！！(ハ)ハレ
ー・スター・マジシャン・魔法使い族・ATK2400・闇・6・
シンクロ、効果」

フィールド上に、箒に乗った魔女が現れた。

「早速、攻撃力が高めのモンスターを召喚したか」
相手も、その腕は認めているようだ。

「更に、シンクロ素材となったサイト・スター・マジシャンの効果により、デッキからカードを2枚確認し、その中の1枚を手札に加え、残る1枚を墓地へ送る」

デッキからカードを2枚ドロし、その中の1枚を手札に加え、もう1枚を墓地へ送った。

「バトル、ハレー・スター・マジシャンで、ミイラの化身を攻撃！
スター・ボルテック！！」

ハレー・スター・マジシャンの杖から、電撃が発生し、その電撃がミイラの化身を襲った。

『グオオオオオオオ』

そして、砕け散った。

「さらに、このモンスターが戦闘を行った事により、ダメージステップ終了時に守備表示となるハレー・スター・マジシャン・ATK2400 100」そして、このモンスターが守備表示となった場合、デッキからレベル4以下のスター・マジシャンを手札に加える事ができる」

デッキが自動的にシャッフルされ、その中からカードが1枚、選ばれた。

「俺は、オーム・スター・マジシャンを手札に加える。そして、カードを1枚伏せてターンエンド」

伏せられたカードが、現像となって消えた。

・・・そして、相手も動いた。

「公衆遊画、お前はやっぱりバカだ」

「何だと！」

「モンスター効果を考えずに攻撃するとは、もはや笑い物だな」
どう言う意味だ、それは。

「破壊されたミイラの化身の効果発動。このモンスターが破壊された場合、そのターンの終了時に、デッキからレベル3以下のアンデ

ツド族モンスターを2体まで、特殊召喚できる」

んなー！エンドフェイズ時にだどー！！

「ただし、この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効となる。俺はデッキからゾンビ・ハッカーと、ヴァンパイア・ジュニアを特殊召喚！
ハゾンビ・ハッカー・アンデッド族・ATK1000・闇・3・効果
ハヴァンパイア・ジュニア・アンデッド族・ATK1000・闇・1・効果
」

一気にモンスターを2体。

これは・・・次のターン、アドバンス召喚を狙ってくるな。

「俺はターンエンド」

「俺のターン！」

Souma・Spcc2・LP4000

Yuga・Spcc2・LP4000

「手札からスピードスペル、アンデッド・リビングデッドを発動。自分のスピードカウンターが2つ以上ある時、自分フィールド上に存在するアンデッド族モンスターの攻撃力を、このターンの終了時まで500ポイントアップさせる。そして、このターンの終了時にデッキからアンデッド族モンスター1体を墓地へ送る
ハSp・アンデッド・リビングデッド・Sp魔法・効果、自分用スピードカウンターが2つ以上ある場合に発動する事ができる。自分フィールド上に存在するアンデッド族モンスターの攻撃力を、このターンの終了時まで500ポイントアップする。また、このターンのエンドフェイズ時に、デッキからアンデッド族モンスター1体を墓地へ送る」
それにより、このターンの終了時まで、俺のフィールド上に存在するアンデッド族モンスターは、全て攻撃力を500ポイントアップさせる！」

ハゾンビ・ハッカー・ATK1000 1500」

ハヴァンパイア・ジュニア・ATK100 600」

これは・・・来る！

「そして、自分フィールド上に存在するゾンビ・ハッカーをリリース

スする事により、手札からダークチューナー、墓場のマミーをアドバンス召喚する！！^ハD T 墓場のマミー・アンデッド族・ATK 0・闇・6・ダークチューナー^ハ」
んな！！

「ダークチューナーだと！！」

遊画はその時、失われた記憶の一部を取り戻していた。

そう、それはダークシンクロに関する事だ。

邪心ウインダールの時と、リドウ戦の時に使われたダークチューナー。

そこから生まれる、最悪のモンスター。

ダークシンクロ。

最も思い出したくない、苛酷なモンスターを前に、遊画は更なる追い打ちをかけられる事になった。

「これで終わりではない。墓場のマミーの効果により、このモンスターのレベルを、自分フィールド上に存在するアンデッド族モンスターのレベル分上げる事ができる。これにより、墓場のマミーのレベルは、7となる^ハD T 墓場のマミー・6^ハ」

これは予想以上にヤバイ気がする。

「そして、レベル1のヴァンパイア・ジュニアに、レベル7となったダークチューナー、墓場のマミーを、ダークチューニング！！

1 - 7^ハ - 6^ハ

マミーが、空中に星をばらまき、ばらまかれた星が、ヴァンパイア・ジュニアの身体の内部にめり込んだ。

そして、ヴァンパイア・ジュニアの中にある星1つを・・・対消滅させた。

「冥界の扉が開く時、恐怖の捕食者が魂を補食する。はい上がれ、地上界へ！！」

そして、ヴァンパイア・ジュニアの体が砕け、その中から7つの星が現れ、何かの門を作り出した。

「ダークシンクロ！食べ、アンデッド・デス・イーター！！」

暗闇の中から、巨大な口を持ったモンスターが、姿を現した。

あまりにも巨大すぎる口は、体の大半を占めており、それ以外の部分は、手足が飾りのように付いている程度の物だった。

「あ……あ……あ……」

「怖い、恐怖か、これがお前に味合わせる恐怖だ！　ハアンデッド・デス・イーター・アンデッド族・ATK2700・闇・ - 6・
ダークシンクロ、効果」さらに、アンデッド・リビングデッドの効果により、攻撃力を500ポイントアップする！　ハアンデッド・デス・イーター・ATK2700 3200」

「これで終わりじゃない。畏発動、ゾンビの進化。このターン、アンデッド族モンスターがフィールド上に存在し、相手モンスターを破壊した場合、相手にそのモンスターの攻撃力の半分のダメージを与え、守備力を攻撃力が超えていた場合、相手に戦闘ダメージを与える！　ハゾンビの進化・畏・効果、アンデッド族モンスターがフィールド上に表側表示で存在する場合にのみ発動する事ができる。このターン、アンデッド族モンスターが相手モンスターを戦闘により破壊した場合、相手に破壊したモンスターの攻撃力の半分のダメージを与える。また、アンデッド族モンスターが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手に戦闘ダメージを与える」

「……インチキカードが。
「終わりだ。バトル、アンデッド・デス・イーターで、ハレー・スター・マジシャンを攻撃！　デス・イーター！！」

アンデッド・デス・イーターの巨大な口が開き、ハレー・スター・マジシャンを丸飲みしてしまった。

「そして、ゾンビの進化の効果により、お前は……負ける」
つ……」

「さあ、何かあるか。今のお前に、この状況を覆すようなカードが」

・・・手札にも、何も無い。

ましてや伏せカードも、転生の予言。

つまり今、俺は・・・負けしか、道はない。

「ち・・・・・・・・ちくしょおおお！！！！」
「LP40000」

最悪の・・・1ターンキルだ。

ゾンビの進化、だが、あんなカードは見たことがない。

だったら、一体どこから手に入れたカードなんだ・・・。

そんな事を思うも、強制ブレーキによって、その思考は途切れた。

急激な衝撃に耐えながらも、バランスを取り、そして・・・停止した。

「・・・・・・・・っ」

何だ・・・・・・・・体が・・・痛い。

それに・・・・・・・・呼吸が乱れている。

そう考えている時、相手は自分のD・ホイールから、降りた。

「・・・・・・・・虫酸が走る！」

その瞬間、俺はネックを捕まれた。

「お前が・・・・・・・・妹を。お前が・・・・・・・・」

妹？何の事だ。

「待て、一体何の話だ。俺は何も・・・・・・・・」

「とぼける気か。この顔を忘れたとは言わせんぞ！！」

相手は遊画を放すと、自分のヘルメットを強引に外した。

顔つきは、青少年を絵に現したようなキリッとした顔、だがどこかムスツとしたような目。

この顔を見た瞬間、遊画は・・・・・・・・愕然とした。

「お・・・・・・・・お前は！」

その時、遊画は・・・・・・・・再び記憶の一部を取り戻した。

だがその記憶は・・・・・・・・海佐の事に関する記憶。

つまり、自分のせいで、海佐が殺されたと言う記憶が蘇った。

それは何故か・・・・・・・・理由は簡単だ。

「・・・・・・・・炎宇津 相馬。何で・・・・・・・・海佐の死後1年後に死んだ・・・

「お前が・・・生きている！」

相馬はその答えには応じず、変わりに・・・ポケットから一枚の、空白の罫カードを取り出した。

「敗者には罰ゲームを、それが・・・暗黒のルールだ」
すると、そのカードが・・・光り出した。

そしてその光は、遊画を包み込んだ。

「う・・・うああ・・・うあああああああ！！！」

そしてその場で、遊画は倒れた。

目には、色が無く・・・ピクリとも動かなくなった。

そして、相馬が持っていた罫カードのイラストが浮かび上がった。

そのカードの名は・・・

『魂の十字架』

漆黒の中にある十字架に、遊画が吊されていた。

「・・・体が消えていない。これは・・・」

すると、遊画の体に異変が起こった。

髪色が赤色に変化し、そして髪型も、長髪で、横髪が長い髪型になり、背も遊画よりは少し高めになっていた。

「・・・なるほど、この体のあまりと言う訳か」

相馬はそんな事を呟くと、自分のD・ホイールに乗った。

「これでは、作戦通りに行けば・・・っふ」

相馬はニヤリと笑った。

「また再び、この男と交える時が来るだろう。その時まで・・・あばよ」

そして、相馬はペダルを踏み、その場を後にした。

「・・・遊画・・・オイ、返事をしろよ。」

ウソだろ、こんな事が・・・こんな事が・・・。

トトは、残った力を振り絞り、立ち上がろうとした。

そして・・・。

「こんな事が、あつてたまるかあああああああ！！！！！」

彼の叫びが、町中に木霊した。

続く

次回予告

「守れなかった。遊画を……アイツを守れなかった」

「それは仕方のない事よ、遊画の中の人。それは悔やんだって仕方がない」

「だったら、どうすれば!」

「落ち着いて、方法は……1つしかないでしょう!」

「っ……それもそうだな」

次回、遊 戯 王Fate 第29話「取り戻す決意、そして現れる仮面の女」

「遊画を……取り戻す!」

次回のキーカード

ジャスティス・マジシャン

J M - 紅のツバキ・魔法使い族・ATK1800・炎・4・効果

第28話「新たなる脅威、消失する遊画」（後書き）

あとがき

あつぶね！。

危うく10ページ以内で終わらない所だった。

そんな訳で、ついに始まった第1シーズン後半。

これから始まるデュエルとは一体。

そして、主人公不在のまま話が進んでいきます。

それではこの辺で。

時間も無いし。

それじゃ、また来週！

2月10日 自宅にて。

第29話「取り戻す決意、そして現れる仮面の女」(前書き)

やっとの事で出来上がった。

これで今日は、心おきなく寝れる。

第29話「取り戻す決意、そして現れる仮面の女」

目が覚めたらそこは、病室だった。

一体何が起こったのか、そして、何でこんな所にいるのか。

トトは、さつきまで起こっていた事を一から思い出していた。

そして、辿り着いた答えが……遊画が連れ去られ、そのまま自分は意識を失った。

こんな答えしか、出なかった。

「クツ、守れなかった。俺は……遊画を守れなかった。ただ見ているだけのデュエル……そして、危険だと分かっていたけど、体が動かずに……遊画の意識の中でただずっと、見ているだけだった。何でだよ、何で遊画が……連れさらわなければならなかったんだよ！」

病室のベッドに向かつて、強めに叩いた。

「遊画……すまない。ただ見ているだけの俺を……嘲笑ってくれよ。そうじゃないと」

「いいえ、遊画はそんな事は望みません」

横から声が聞こえた。

振り向くと、そこには短髪で、青い髪をした少女、あやなか綾中 さや沙耶が病

室のイスに座っていた。

「お……お前は」

「遊画の中の人、貴方のことは英子さんから聞いております。一体さつきまであそこで何が起きていたのか、そして、遊画の魂がカードの中に封じ込められてしまった事も。今回の事は、英子さんにとっても、予定外の事だったそうです」

「オイオイ、それって……」

「何か別の事が起きようとしていると言う事なのか」

沙耶は、下を向くと、辛そうに答えていた。

「私にも、よく分かりません。私は……今回の事件の事を聞い

て、すぐさまこの病室に向かいました。けれど、そこには遊画の姿はない・・・変わりに、遊画の中の貴方がそこにいた。私は、遊画を守りたかった。いつも話し相手になっけてくれたあの人を・・・

「それは俺だつて同じだ！だが俺の場合は、遊画のすぐ側にいたクセに、遊画を守れなかった。遊画を・・・守れなかった」

トトは、布団を握りしめると、そこに一滴一滴、目から涙を零していた。

「それは仕方のない事よ、遊画の中の人。それは悔やんだって仕方がない」

「だったら、どうすれば！」

「落ち着いて、方法は・・・一つしかないでしょう！」

沙耶の目に、とある決断があるのが分かった。

その決断、その意味は、トトもよく理解できた。

「っ・・・それもそうだな」

取り残された俺。

そして・・・今できる事と言えば。

「遊画を・・・取り戻す！」

世界は、闇があるから光がある。

そしてそれは、決闘でも一緒の事だ。

伝説となった決闘者、そのほとんどが・・・光を持って、闇を持つ。

その2つの存在が分裂した時、2つは争う関係となる。

そう、ジャステイスと、ダークの関係となり。

第29話「取り戻す決意、そして現れる仮面の女」

部屋に、しばらくの沈黙が続いた。

何だか変な感触にでもなっているであろう。

沙耶は沙耶で、遊画と一番密着関係にある人を前に、自分の心境を語ったが、話が途切れると、急に黙り込んだ。

「・・・それにしても」

トトの顔立ちは、遊画のように・・・いや、それ以上に整っており、そして少し黒っぽい肌に赤い髪。

そして、服で分からないが、以外にも鍛えられている体をしているのが、近くにいると分かる。

多くの女性が理想とするような男性を前に、沙耶は少し緊張していた。

「・・・あの」

沙耶は思い切って、質問をした。

「貴方は遊画の事を、どう思っているのですか？」

「・・・はい？」

トトは、疑問視するような声を上げた。

「何をいきなり」

流石に突然そんな事を聞いて申し訳ないかと思った沙耶は、顔を赤くした状態で俯いた。

「・・・いえ、何でもありません」

トトはしばらくポカーンとしていたが、沙耶の想いを知ってか、少しにやけた顔になった。

「それって、つまりは遊画の事を知りたいと言う事だな」

ハッ！！

「い・・・いいえ、そんなんじゃない・・・でも、いなくなった人の事を聞くのはちょっとかな・・・と、思ってしまった。で、でも、知りたいと言えば知りたいし・・・いや、そんな訳じゃなくて・・・

その、昔から付き合いがあるから、彼の事を少しでも多く知った方がいいかな・・・と、思ったりして・・・」

沙耶は、アタフタ、アタフタし始めた。

「・・・その言い方だと、付き合いがあるからすでに遊画の事を知っていると聞こえるが」

トトの正確なツッコミに、沙耶はトトをジーツと見つめた。

「意地悪です、遊画の中の人は意地悪です」

「……ハア。」

全く、少しは落ち着けっつーの。

「お前な、遊画の中から見ているお前とは違うぜ。お前はもっとならかに、そして笑顔を絶えさせないヤツじゃなかったっけ？」

だが、そんな事は本人にも分かっている事だ。

「……そうですが、なにせ状況が急に起きた事ですから、対応が出来ていないのです。フルなんか、昨日謎のD・ホイラーに襲われて、意識不明の重体になっているし」

サラリと重要な事を、トトは聞き逃す事は無かった。

「待て！謎のD・ホイラーに襲われただど！！」

沙耶はビクツと肩を震わせた。

「ひっ……」

トトはもう一つ、ある重要な事を思いついた。

「お前、俺が倒れてから一体何日経過している！」

少なくとも、倒れてから1時間以上は経過しているはずだ。

それに、フルが襲われたと言う事件は、聞いていない。

少なくともそんな事があれば、すぐに遊画の方に連絡が行く。

「え……ええっと、貴方が救急車で運ばれてから……5日は経過しています」

お……オイ。そんなに時間が経過していたのかよ。それに、遊画の事と言い、何だか関連がありそうだ。

その5日間に、一体何が起きたと言うんだ！

「……そしてですね、私には沙耶と言う名前があるのです。だから私を呼ぶ時には、沙耶って呼んで下さい」

沙耶の顔が、少しムスツとなっていた。

コイツは……全く、何処かのわがまま娘に似ているな。

髪色と言い、今の状態と言い。

「分かったよ、それだったら俺の事は、トトとでも言ってくれ」

なれ合う気は無いが、本人がご不満な事なら、こちらだってそれなりの事は言う。

まあ、別にどうでも良いんだがな。

「……トトさん、貴方は気づきましたね」

沙耶の突然の問いだが、トトは慌てる様子も無く「ああ、大体の予想がな」と、答えた。

その大体の予想、多分……。

「フルを襲った奴は、遊画の魂を連れ去ったヤツと関係がある……だろ」

「ふふつ、御名答よ。すでにフルを襲った奴は、今現在何処で出没しているのかは、英子さんの情報で明らかになっています。すぐにそこに行きましょう。遊画を……救い出すために」

病院を抜け出したトトは、遊画のD・ホイールを使い、デュエルレインを走っていた。

「それにしても、貴方は本当にこれがD・ホイールを運転するのは初めてなの？初めてにしては、凄く安定した走りを見せているけど」

「一応はな、昔の馬に乗るのに比べれば、どうって事も無い」

トトはそう言うと、更にD・ホイールを加速させた。

腕には、沙耶が英子から渡された、カードホルダーに、トト専用のデュエルディスクを遊画のD・ホイールに装備していた。

遊画のセンスをイメージしたデュエルディスクと比べると、トトのデュエルディスクは、六神官が腕に装着していたディアディアンク（古代のデュエルデスク）を連想させるようなデュエルディスクである。

それを、D・ホイールに装備している。

遊画のデュエルデスクの変わりに、装備できる仕組みになっているのである。

そして、トトのデツキホルダーには、ちゃっかりデツキが入れられていた。

元々六神官の時代の精霊を、偶然ペガサス会長がカード化していたので、それを英子が集めて、トトに託したのである。

これは、彼にとっても好都合な事でもあった。

久々に会うパートナーに、トトはある意味心を躍らせていた。

まさかこんな形で、再会するとは思ってもいなかったからでもあり、それがカード化され、いつも近くにいると言う親近感があるのも、彼にとっては嬉しかった事である。

まあ、そんな事は子どもじゃないので、声にまでは出さなかったが。

「……っふ」

ただし、笑みだけは浮かべていた。

「だがしかし、英子は一体どうやってこんなカードやデュエルディスクの事を知ったんだ。それに、このデュエルディスクの形……まるで、ティアディアンクのような形をしているし……」

トトの直感で、何かを感じ取った。

英子は……何かを企んでいる。

それは、良い意味か、悪い意味か。

それに、以前から英子の動きはおかしな事が多かった。

一体何を考えているんだ、英子は。

「……そう言えば」

沙耶が、何かを思い出したのか、口を開いた。

「フルが意識を失う前に……変な事を言っていたらしいの」「意識不明の重傷を負った状態で言っているのに、よくぞまあ変な事と言えるな。」

「何かをね、一体どんな事を言っていたんだ」

「それがね……」

「しつかりしろ、誰にやられたんだ！」

現場は騒然となっていた。

近くには、炎上まではしていないが、ボロボロになったD・ホイールが近くにあり、フル自身も、ピクリとも動かない状態であった。そして、救急車に運ばれている時、フルは……最後の力を振り絞って、何かを語った。

「……ゆう・は、じゃ……に……られ……そして、いし・完全に、別のじん……かく」
そして、フルは静かに目を……閉じた。

「ゆうはじゃにられそして、いし完全に、別の人格？」
全く意味すら分からない。

……いや、本当に苦しまぎれの言葉だったんだろう。
途切れ途切れだが、確実に何かを伝えようとしている。

……意思完全に別の人格。

多分、これは合っていると思う。

問題が、ゆうはじゃにられそして……の部分だ。

ゆうは……遊画はとも言いたいのか？

……いや、それだったらおかしい。

何故なら今遊画は、体を持っていない。

魂が分離しても、肉体がなければ、人としては活動出来ないハズだ。
それだったら、他に考えられる事はないか……。

トトの表情が険しくなった時、いきなりD・ホイールのブザーが鳴り始めた。

「ん？」

すぐに、後ろの映像が映し出された。

そこには、黒いD・ホイールがこちらに向かって加速していた。

その瞬間、トトと沙耶は、すぐに感じ取った。

コイツだー！

すぐさまトトは減速し、向かってきたD・ホイールの隣に並んだ。

「お前か、俺の仲間を襲ったのは」

トトは、相手D・ホイラーを睨んだ。

ヘルメットをしても見えるが、黒い仮面をしており、黒髪のス
トレートヘアに、男性ならば必ず目に入る巨大な胸。

コイツは……女性か。

そして、D・ホイールも、まるで船を連想させるような形をしてい
た。

すると相手のD・ホイラーは、静かに、反応した。

「……だつたらどうした、負けた雑魚の仇をとろうとでも言う
のか」

「……遊画の仲間を、雑魚だとー！」

「ふざけんなー！デューリストに対して、雑魚と言うとは……
デューエルだ！遊画の仲間の仇、そして見下した罪、この俺が裁く！
！」

「フン、面白い事を言う。お前が裁く者なら、俺はお前を裁く者に
なる」

「……、どう言う意味だ。」

「まあいい、デューエルを申し込まれたなら、それに対応するのが常
識と聞くからな。そのデューエル、受けて立つ」

「話が分かりやすいヤツだ。行くぞー！」

カチツ、2人は同時にハンドルのスイッチを押した。

「「フィールド魔法、スピード・ワールド2。セツト、オン！」」

『デューエルモード、オン。オートパイロット、スタンバイ』

アナウンスが入り、辺りの空間が少し薄暗くなった。

そして、場所がデューエルレーン内部だったために、そのままのスタ
ートとなった。

「「デューエル！」」トトのVSN o Information
n LP4000 }

前を走っていた沙耶は、2人のデュエルモードと共に、後ろへと下がった。

「これは……見物ね」

先行は、先に走っていたトトからだった。

「俺のターン、手札からジャステイス・マジシャン・鑑のライブを

攻撃表示で召喚ジャステイスがマジシャン」

「ジャステイス・鑑のライブ・魔法使い族・ATK1500・

光・3・効果」

周りに、大量の本を浮かせている魔術師が、姿を現した。

「カードを2枚伏せて、ターンエンドだ」

ソリットビジョンの巨大なカードが2枚、隣に現れ、そして消えた。

「相手のターンか……」

何か、イヤな予感がするぜ。

フルを倒した実力はあるからな……。

「私のターン!!」

Toto・Spcc1・LP4000

No Information・Spcc1・LP4000

「相手フィールド上のみモンスターが存在し、自分フィールド上

にカードが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚できる。

「ダーク・マジシャンダーク・マジシャン・悪意のジレンマを特殊召喚する!!」

「DMDM・悪意のジレンマ・魔法使い族・ATK3000・闇・1・効果」

「つ!!レベル1で、攻撃力3000だつ!!」

「どんだけ恐ろしいモンスター保有してんだよ、お前は!!」

「このモンスター、本当にアリなの!？」

2人して、このモンスターの恐ろしさに驚愕した。

「これが、俺の実力だ。バトル、ダーク・マジシャン・悪意のジレ

ンマで、ジャステイス・マジシャン・鑑のライブを攻撃!ダーク・

ガン!!」

悪意のジレンマの目の前に、巨大な漆黒の弾が出来上がり、そしてそれが、鑑のライブに向かって発射され、見事に粉碎された。

「ぐあああつ!!」

「LP4000 2500」

一気にライフが削られた。

「トト!!!」

沙耶が心配してくれているようだが、俺はそれよりも、恐ろしいと思っってしまった。

コイツの腕は、本物だ。

「だが、ジャステイス・マジシャン - 鑑のライブの効果により、このモンスターが破壊された時、戦闘ダメージの半分回復し、デッキから受けた戦闘ダメージ以下のジャステイス・マジシャンと名の付くモンスター1体を特殊召喚できる。俺は750ポイント回復しLP2500 3250^Yデッキからジャステイス・マジシャン - 輝のリュウムを準備表示で特殊召喚!!!^{ジャステイス・マジシャン}」
「法使い族・DEF1000・風・2・効果^Y」
「フィールド上に、光に纏われた子どもが、元気よく出てきた。

「・・・フン、そんな子どもを場に出して、何になる。俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド」

いや、違うな。

リュウムは見た目とは裏腹に、強力な力を持っているんだ。

「俺のターン!!!」

Toto・Spcc2・LP3250

No Information・Spcc2・LP4000

「手札からジャステイス・マジシャン - 紅のツバキを召喚!!!^{ジャステイス・マジシャン}」

・紅のツバキ・魔法使い族・ATK1800・炎・4・効果^Y」

茨の剣を持った、美しき剣士が舞い降りた。

「そして、輝のリュウムの効果発動!!!自分フィールド上に、ジャステイス・マジシャンと名の付くモンスターが召喚された時、デッキから、そのモンスターと同じ数だけめくり、その中に存在するレベル4以下のジャステイス・マジシャンと名の付くモンスター1体を特殊召喚する事ができる」

「んなに!!!こんな子どもに・・・」

トトはカードを4枚めくると、その中にあったカードを見るなり、

ニツと微笑んだ。

「俺はデッキからレベル4のチューナーモンスター、ジャステイス・マジシャン・天のアリスを特殊召喚！！」ジャステイス・マジシャン「JM - 天のアリス・魔法使い族・ATK1800・光・4・チューナーレベル2のジャステイス・マジシャン - 輝のリユウムに、レベル4のジャステイス・マジシャン - 天のアリスをチューニング 2 + 4 = 6 聖なる正義が、刹那の鼓動を貫く意思になる、導け、光を！！」

チューニングリングが、アリスの中から現れ、リユウムを包み込んだ。

そして、一気に光り出した。

「シンクロ召喚！！切り裂け、ジャステイス・マジシャン - 乱舞のセツカ！」ジャステイス・マジシャン「JM - 乱舞のセツカ・魔法使い族・ATK2400・地・

6・シンクロ、効果」

右手に2つの日本刀、そして左手に3本の日本刀を持った戦士が姿を現した。

見るからに、トトのモンスターは魔法使いと言うよりは、戦士族に似たモンスターが多い。

ジャステイス・マジシャンのモンスターは、和をイメージしたモンスターが多い。恐らくペガサス会長の気まぐれでこうなったのかもしれない。

それでも、トトは今の姿を気に入っていた。

ガチガチの鎧を身に纏ったモンスターよりは、動きがしなやかそうな格好のモンスターの方が、見た目的にも強そうと言う、何とも言えない理由である。

「だが、攻撃力は悪意のジレンマの方が高い。それをどうやって超えると言うんだ！」

フツ……だったら、その攻撃力を超えてやる！！

「畏発動、ジャステイス・パワー。相手フィールド上に存在するモンスター1体を選択して、そのモンスターの攻撃力をこのターンの終了時まで半分にする。そして、自分フィールド上に存在するジャ

ステイス・マジシャンと名の付くモンスターの攻撃力を1000ポイントアップさせる。ジャステイス・パワー・罨・効果、自分フィールド上に「JM」と名の付くモンスターがフィールド上に存在する場合にはのみ発動する事ができる。相手フィールド上に存在するモンスターの攻撃力を半分にし、自分フィールド上に存在する「JM」と名の付くモンスターの攻撃力を1000ポイントアップさせる。これにより、悪意のジレンマの攻撃力を半分にし、ダイク・マジシャンDM・悪意のジレンマ・ATK3000 1500。俺のフィールド上に存在するジャステイス・マジシャン - 乱舞のセツカの攻撃力を1000ポイントアップさせる！。JM・乱舞のセツカ・ATK2400 3400。

「バカな、こうもアツサリと・・・攻撃力を上回ったぞ!!」
「バトル、ジャステイス・マジシャン - 乱舞のセツカで、ダイク・マジシャン・悪意のジレンマを攻撃!! ジャステイス・ブレード!!」
乱舞のセツカが構え、そして悪意のジレンマに向かって飛びかかった。

悪意のジレンマは漆黒の弾を作り上げ、それを撃ったが、撃った弾をセツカは左手で切り裂いた。

そして、ジレンマの目の前に現れたセツカは、構えた右手で、ジレンマを切り裂いた。

切り裂かれたジレンマは・・・そのまま爆発を起こした。

「つ・・・」LP4000 3600

「続いて、紅のツバキでダイレクトアタック! ストリーム・ニードル!!」

ツバキが剣を構えると、相手に向かって、構えた剣を振った。

すると、剣に付着していた棘が取れ、無数の棘が相手を襲った。

「つ・・・!!」LP3600 1800

「凄い、一気にライフをあんなに削るなんて・・・流石は遊画の中の人だけはある」

「俺は、ターンエンド」

よし、大幅にライフを削る事ができた。

このままの調子で行けば……。

「調子に乗るな!!」

んな!!

「俺が……正義になど、負けてられるか!!俺のターン!」

Toto・Spcc3・LP3250

No Information・Spcc3・LP1800

「手札からスピード・スペル、エンジェル・バトンを発動。自分のスピードカウンターが2つ以上の場合、デッキからカードを2枚ドロし、そして手札1枚を墓地へ送る。Sp-エンジェル・バトン・Sp魔法・効果、自分用スピードカウンターが2つ以上ある場合に発動する事ができる。デッキからカードを2枚ドロし、その後手札1枚を墓地へ送る。デッキからカードを2枚ドロ。その後、手札1枚を墓地へ送る」

相手はデッキからドロしたカードを見て、微かな口の動きを見せた。

「さて、見せてやるよ。闇を操る魔術師の実力をな」

「随分と余裕じゃねーか。だったら来いよ、お前の實力を見せる!

」

「いいだろう。俺とお前の差という物を思い知るがいい!!手札からダーク・マジシャン・夜行のロードを守備表示で特殊召喚。このモンスターは、手札に存在する場合、特殊召喚できる。DM・夜行ダーク・マジシャンのロード・魔法使い族・ATK0・闇・2・効果」

相手の場に、鼻が長く、黒い羽衣を着たモンスターが出現した。攻撃力が0……これは、アドバンス召喚か。

「更にこのモンスターをリリースする事により、手札からダークチユイナー、アーク・クエイサーをアドバンス召喚する!!このモンスターは、闇属性モンスター1体でアドバンス召喚できる!!」
HD
T アーク・クエイサー・悪魔族・ATK0・闇・8・ダークチ

「ユーナー」

「レベル8のモンスターを……1体のモンスターで召喚しただと。そんなのアリか!!」

相手フィールド上に渦が発生し、その中から闇の球体が姿を現した。「これが……冥府の力だ。更にアーク・クエイサーのアドバンス召喚に使用した夜行のロードの効果により、このモンスターが闇属性モンスターのリリース、またはシンクロ素材になった時、デッキからカードを1枚ドローする!!」

相手はデッキからカードを1枚ドローした。

「そして、アーク・クエイサーの効果により、1ターンに1度、墓地に存在するレベル4以下の闇属性モンスター1体を特殊召喚できる。リリースしたダーク・マジシャン・夜行のロードを特殊召喚!

「DM・夜行のロード・ATK0」

この流れ……まさか

「ダークシンクロか!!」

「そうだ、俺のマイナスエネルギーを使い……ダーク・マジシャンは進化する。レベル2のダーク・マジシャン・夜行のロードにレベル8のダークチューナー、アーク・クエイサーをダークチューニング! 2 - 8 = 6」

う……ウソだろ、冥界の力を持ったダークシンクロを……

「復讐の闇よ、天空を切り裂く刃となりて、魔女の十字架の罪を背負え!!」

アーク・クエイサーの中から星が現れ、夜行のロードの中にのめり込んだ。

そして、その体の中では次々と星が対消滅していき、最終的に全ての星が消え、夜行のロードの体が砕け、そこに黒い空間が現れた。

「ダークシンクロ!!恨みを晴らせ、ダーク・マジシャン・ウィザード・デスサイズ!!」

空が裂け、そこから1人の魔術師が急降下してきた。

巨大すぎる杖を軽々と持ち、漆黒の服を着たその魔術師は、不気味な笑みを浮かべていた。

『ダーク・マジシャン テイヤアツ^ハDM・ウィザード・デスサイズ・魔法使い族・ATK2500・闇・ -6・ダークシンクロ、効果^ハ』
攻撃力が2500。

「そして、夜行のロードの効果により、デッキからカードを1枚ドロ―」

再び相手はデッキからカードを1枚ドロ―した。

だが、普通に俺のフィールド上のモンスターの方が、攻撃力は上だ。「ここで終わると思えば大間違いだ、畏発動。ドレッド・マジック。相手フィールド上に存在するモンスター1体を守備表示にする事により、このターン自分フィールド上に存在するダーク・マジシャンと名の付くモンスターが戦闘によりモンスターを破壊した場合、その守備力を攻撃力が超えていた場合、相手に戦闘ダメージを与える。また、自分が戦闘ダメージを与えた場合、デッキからカードを1枚ドロ―する^ハドレッド・マジック・畏・効果、相手フィールド上に存在する表側攻撃表示で存在するモンスター1体を表側守備表示にする事により発動する。このターン自分フィールド上に存在する「DM」と名の付くモンスター1体を選択し、選択したモンスターが戦闘によりモンスターを攻撃した場合、その守備力を攻撃力が超えていた場合、相手に戦闘ダメージを与える。また、戦闘により相手プレイヤーに戦闘ダメージを与えた場合、デッキからカードを1枚ドロ―する^ハこれにより、お前のフィールド上のジャステイス・マジシャン・乱舞のセツカの表示形式を守備表示へと変更する！」
「っ！まさかこれを狙ってか^ハJM - 乱舞のセツカ・ATK3400 DEF1700^ハ」
それに・・・マズいな。

伏せカードはあるものの、これを今使う訳にはいかず、更に確実に相手はこのターンデッキからカードを1枚ドロ―する気だ。

「バトル、ウィザード・デスサイズで、乱舞のセツカを攻撃！デス・

カット!!」

ウィザード・デスサイズが持っている杖から、巨大すぎる刃が現れた。

そして、その現れた刃で、フィールド上に存在している乱舞のセツカを……一刀両断で真つ二つに裂いた。

直後、爆発が起こった。

「っ……!!」 ㄥLP3250 2450ㄝ

「効果により、デッキからカードを1枚ドロー」

クツ……相手の手札を増やしてばかりでいる。

どうすれば……この状況を打開できる。

「随分と焦っているな。だが、これで終わりじゃない。このモンスターは1ターンで2回の攻撃ができる」

んなに!!

「今度はジャステイス・マジシャン - 紅のツバキを攻撃! デス・カ
ツト!!」

再び巨大なビーム刃が現れ、その刃でツバキは真つ二つに切られた。

「ぐあああああ!!」 ㄥLP2450 1750ㄝ

一気にD・ホイールのバランスを崩した。

それと同時に、相手はトトを追い抜いた。

「これは……私よりも強い。デッキから大量のカードをドロー
するこの展開、見事としか言いようがない」

沙耶でさえも、この腕は認めるしかないようだ。

「……そして、デッキからカードを1枚ドロー」

クツ、どんだけ強いんだよ相手は。

「だが、ジャステイス・マジシャン - 紅のツバキの効果発動。この
モンスターが破壊され墓地へ送られた場合、自分の墓地にジャステ
イス・マジシャンと名の付くモンスターが1体でも存在する場合に
1度だけ、デッキからカードを1枚ドローする事により、墓地から
特殊召喚する事ができる」

デッキの上に、手を置いた。

そして、勢いよくカードをドローした。

「ドローー!!」

何が来るか。

恐らく、このドローで勝負は大きく傾く事になるだろう。

……俺のカード達よ、俺の声に……答えてくれ!!

続く

次回予告

「何をやっても無駄だ、正義は悪には勝てない」

「いや、違う。正義は……悪を倒す為の奴らじゃない。間違っ
た奴らを……倒す奴らだ!!」

「……だったら、お前は間違っている」

「……え?」

「お前がいたせいで……俺は!」

次回、遊 戯 王 F a t e 第30話「正義VS闇、埋まらない両
者の溝」

「どんな理由があっても、遊画を取り戻す為に……俺は勝たな
ければならないんだ!」

次回のキーカード

ダイク・マジシャン

D M ・ ウィザード ・ デスサイズ ・ 魔法使い族 ・ A T K 2 5 0 0 ・ 闇 ・

- 6 ・ ダークシンクロ ・ 効果

第29話「取り戻す決意、そして現れる仮面の女」（後書き）

あとがき

ふう、やっとここまで書けた。

どうも、作者のRagoです。

いやー、ついにここまで来ましたよ。

思い返せば夏休み、最初の1話が完成して、三日坊主にならないかな……と、心配するも、次で30話ですよ。

以外とやってきた甲斐があると言う物です。

そして、バレンタインの話を書きたかったと言う後悔と共に、来週は試験です。

なので、確実に3週間以内でとりあえず仕上げます。

……マジで、今回の試験は俺の卒業かかっていますので、頑張ります。

それでは、今日はこの辺で。

次回も、宜しく。

2月14日 自宅にて

第30話「正義VS闇、埋まらない両者の溝」(前書き)

タイトル変更してからの投稿です。マジで金、土は地獄だった。

第30話「正義VS闇、埋まらない両者の溝」

「ジャステイス・マジシャン - 紅のツバキの効果発動。このモンスターが破壊され墓地へ送られた場合、自分の墓地にジャステイス・マジシャンと名の付くモンスターが1体でも存在する場合に1度だけ、デッキからカードを1枚ドローする事により、墓地から特殊召喚する事ができる」

デッキの上に、手を置いた。

そして、勢いよくカードをドローした。

「ドロー!!」

来たカードは……。

ジャステイス・マジシャン - 鴉のセキ

来た!

「何か良いカードを引いたらしいが無駄だ、お前は俺には勝てないのだから。俺はカードを2枚伏せてターンエンド」

さて……伏せた2枚のカード……少しは警戒した方がいいな。

トトはそう思いながら、デッキの上に手を置いた。

「俺のターン」

Toto・Spcc3・LP1750

No Information・Spcc3・LP1800

「手札からスピードスペル、エンジェル・バトンを発動。デッキからカードを2枚ドローし、手札1枚を墓地へ送る」Sp・エンジェル・バトン・Sp魔法・効果、自分用スピードカウンターが2つ以上ある場合に発動する事ができる。デッキからカードを2枚ドローし、その後手札1枚を墓地へ送る」デッキからカードを2枚ドロー!

手札のカード1枚を手にとった。

「そして、手札1枚を墓地へ送る」

さてと、ここからが本番だ
トトは、そう確信した。

世界は、闇があるから光がある。

そしてそれは、決闘でも一緒の事だ。

伝説となった決闘者、そのほとんどが・・・光を持って、闇を持つ。

その2つの存在が分裂した時、2つは争う関係となる。

そう、ジャステイスと、ダークの関係となり。

第30話「正義VS闇、埋まらない両者の溝」

デュエルレーンに、2台のD・ホイールが走っていた。

片方は、伏せカードが2枚と黒い魔術師が1体。

そしてもう片方は、伏せカードが1枚と魔女がフィールド上に存在していた。

そしてその後ろからは、もう1台D・ホイールが走っていた。

「どんな戦術で来るのか、予想はしていたが・・・まさかここまで強敵とは」

すでに相手の場には、レベルがマイナスのダークシンクロモンスター、ダーク・マジシャン・ウィザード・デスサイズが存在している。

ウィザード・デスサイズの効果により、2回の攻撃が可能となっている。DM・ウィザード・デスサイズ・ATK2500

さて、動くか。

トトは、手札ホルダーからカードを1枚手に取ると、それをデュエルディスクに召喚した。

「手札からジャステイス・マジシャン・歪のテイラを召喚。このモンスターは、自分フィールド上にジャステイス・マジシャンが存在する時、手札から召喚できる。JM - 歪ひずみのテイラ・魔法使い族・A

TK2100・光・6・効果」

「だが、攻撃力は足りない。このままどうやって倒すと言うの？」
攻撃力の差、その差はわずかに400。

この差をどうにかして埋めないと、次のターン、確実に2体とも破壊されてしまう。

それだけは避けたい。

「カードを1枚伏せてターンエンド」

「何も無いなんて・・・どうするつもりなの、トト」

分かっている、分かっているが・・・クツ、相手のターンで・・・
全てが決まる！

「何をやっても無駄だ、正義は悪には勝てない」

正義は・・・悪には勝てない・・・。

「違う!!」

「何が違うと言うんだ。結局最後は正義が勝つとでも言いたいのか？
だがな、所詮は正義と言う物は、人が作り出した正論に過ぎない。
これまで、正義と言って、勝ってきたヤツがいたか？悪が正義を名乗って好き勝手にしてきたただけだ。だから正義は、悪と同じなんだよ!!」

「いや、違う。正義は・・・悪を倒す為の奴らじゃない。間違っ
た奴らを・・・倒す奴らだ!!」

そうさ、俺は間違ったヤツを行いにより、この時代を生きている。
ヤツのせいで・・・俺は!

「・・・だったら、お前は間違っている」

「・・・え？」

「お前がいたせいで・・・俺は!」

何を言っている?

「お前に分かるか？俺が愛した奴を・・・奪われた悲しみ、憎し
みが!」

愛する奴?

「そうさ、俺は・・・彼女を愛した」

!!か・・・彼女!?

「俺は、彼女の事が好きだった。だが、その彼女をお前は奪った。いや、お前らは奪った！」

「一体何の事だ!？」

「お前は、俺からノルンを奪った、そう言いたいんだ!!」
んな!!

「何故お前が、ノルンの事を」

すると、相手のD・ホイラーは、トトの隣まで加速してきた。そして隣に並んだ。

「トト・モーラン、キサマは俺にとって敵だ。お前が過去に……過去に俺の存在を知ってから、俺を邪心と勝手に決めつけ、消去しかけた時の恨み、そして……ノルンを奪った憎しみ。キサマには分かるまい。俺は、お前の中で苦しんだ。お前の存在自体が鬱陶しい、お前が……全ての元凶だ!!」

俺が……全ての、元凶。

「っ、それでも……」

それでも、俺は。

「どんな理由があつても、遊画を取り戻す為に……俺は勝たなければならぬんだ!」

もう、クル・エルナの惨劇のような思いは……したくない!

盗賊共の村だったが……奴らも人間だ!

そんな……自分たちの欲望の為に生け贄に捧げても良い訳がない。

そして、ヤツの思惑に填り、俺は……死にかけた。

だからこそ、俺は言いたい。

遊画を……何かの生け贄か何かに捧げようとも言うのなら……

俺は、全力で阻止する!!

「自分勝手な、俺が受けた憎しみや悲しみを……今お前にぶつけてやる!俺のターン!!」

T o t o ・ S p c 4 ・ L P 1 7 5 0

「畏カード、オープン。正義の復活!!」

「んな!!」

「相手が直接攻撃を行った時、その攻撃を無効にし、自分の墓地に存在する、ジャステイス・マジシャンと名の付くモンスターを1体選択し、特殊召喚する!」
「正義の復活・畏・効果、相手が直接攻撃を行った場合に発動する事ができる。その攻撃を無効にし、自分の墓地に存在する「JM」と名の付くモンスターを1体選択して、特殊召喚する」
「その効果により、墓地より現れよ。ジャステイス・マジシャン - 乱舞のセツカ!!」

空間が切り裂かれ、その中から1人の女戦士が現れた。

『はあっ! JM - 乱舞のセツカ・ATK2400』

「無駄だ、このモンスターは2回の攻撃ができる。再び遊画にダイレクトアタック!!」

再び杖から、巨大すぎる刃が現れた。

そして、その現れた刃をトトに向け、一気に振り下ろした。

「続いて、手札からジャステイス・マジシャン - 鴉のセキを特殊召喚! このモンスターは、相手の直接攻撃宣言時に、手札から特殊召喚し、バトルを終了させる」
「JM - 鴉のセキ・魔法使い族・ATK800・風・2・チューナー」

トンガリ帽子を被った鳥が、勢いよく飛びだした。

「クッ……ターンエンド」

ピシッ

トトは、何かを祈るようにして……デッキの上に手を置いた。

俺の仲間よ……この俺に答えて、そして力を貸してくれ!

目をカッと開き、カードを引いた。

「俺のターン!!」

Toto・Sp5・LP150

No Information・Sp1・LP1800

そして……トトは引いたカードを確認するなり、少し笑った。

「信じていたぜ、流石は俺の仲間だ」

そう言うと、トトは早速そのカードをデュエルディスクに召喚した。
「手札からジャステイス・マジシャン・魂のソウラを召喚！^ハJ M
・魂のソウラ・魔法使い族・ATK0・闇・1・効果^ヱ」
フィールド上に、魂のような浮遊物が現れた。

「フン、たかがレベル1のモンスターか。そんなモンスターで、俺に勝てると思うな！」

「たかがレベルが1でも、コイツには効果がある。魂のソウラの効果発動。自分フィールド上に存在するジャステイス・マジシャンと名の付くモンスターの攻撃力の合計が、このモンスターの攻撃力となる！」

「何だと!!！」

「ただし、他のモンスターは攻撃ができない。フィールド上には、乱舞のセツカ、鴉のセキ、歪のテイラ、それに、紅のツバキが存在する。それにより、攻撃力はその合計、7100がこのモンスターの攻撃力となる！^ハJ M・魂のソウラ・ATK0 7100^ヱ」
浮遊物が変化し、霧状の魔術師のような姿になった。

「ば・・・バカナ、攻撃力が・・・7100だと!!！」

まだ、俺は終わりじゃない。

「更に、乱舞のセツカの効果発動。自分のターンに、自分フィールド上に存在するこのモンスターを、このターンの終了時までリリースする事により、お互いにこのターンの終了時まで魔法、罫カードを使用、及び発動ができない。攻撃力は下がるが、それでも十分に倒せる攻撃力だ!!^ハJ M・魂のソウラ・ATK7100 4700^ヱ」

「バカナ・・・こんな事が」

このまま行くぜ!!！」

「バトル、ジャステイス・マジシャン・魂のソウラで、ダーク・マジシャン・ウィザード・デスサイズに攻撃!!ソウル・ブラスト!!」

ソウラの変化により現れた巨大な杖から、これまた巨大な魂の塊の

ような物が現れ、それがウィザード・デスサイズにへと体当たりをした。

無論、重さに絶えきれず、そのまま爆発を起こした。

「きやああああああああ！！！！」
「LP18000」

Toto・WIN

Her・DEFEAT

プシュー

そんな音を立て、相手のD・ホイールに強制ブレイキシステムが作動し、ブレイキが掛かっていた。

「クツ……」

そして、完全に停止した。

トトは、相手のD・ホイールの近くに停車すると、相手に近づいた。そしてその後ろからは、沙耶も近づいていた。

「さあ、俺が勝つたんだ。遊画の居場所を教えてもらおう」

2人は、相手の近くで相手を睨んだ。

「……っふ」

相手は、不意に笑った。

「誰がそんな条件を出した。それに俺はただ、お前の腕を試しただけだ」

そう言うと、デュエルディスクから1枚のカードを取り出した。

「！！！！」

それを見た2人は、動揺した。

伏せられていたカードは……威嚇する咆吼

そして、手札には、SP・オーバー・ブースト

つまり、やろうと思えばあのターン、決着がついていたのである。

「……これは！！！！」

「何故だ、何故……オーバー・ブーストの効果でスピードカウンターを4つまで増やした後、スピード・ワールド2の効果を発動していれば……お前が勝っていたはずだ！それなのに何故……」
「……お前の手の内を知りたかったからだ」

俺の・・・手の内？

「今日のデュエルは、ただの遊びのようなデュエルだ。だがお前は、明日俺と戦う運命にある」

「明日・・・」

沙耶が呟くと、トトは叫んだ。

「一体何が始まると言っただけだ！」

「さあね、俺はただ、言われた事をやっただけだ。フル・アルカデスを倒し、アンタを誘い出す。それが、俺の使命だ」
使命・・・それじゃあ、コイツは。

「何にせよ、アンタとは戦う事は事実。何故なら・・・」

そう言うと、相手D・ホイラーは、自分のヘルメットを脱いだ。
そして、付けていた仮面を・・・外した。

「・・・んな!!」

「これって!!」

トトと沙耶は絶句した。

こ・・・コイツは・・・！何故生きている・・・いや、何故・・・何故お前がここに。

「・・・どうした、何か不都合な事でもあったのかあ？」

クツ、そうなればコイツは・・・。

「さて、ごた事はここまでだ。明日を楽しみにしていな、トト・モラン。それに、綾中沙耶」

相手D・ホイラーは、急にアクセルを踏むと、一気にその場から離れるように走り出した。

「っ、待て、ヘル!!」

トトは自分のD・ホイラーに乗ると、すぐに走り出そうとした。
その時だった。

『やめなさい。トト』

D・ホイールの画面が、通信モードへと切り替わった。

そして、そこに映し出されていた人物、それは。

「・・・公栄英子」

遊画の義母であり、カードステーションの社長である女。

それが、公栄英子である。

「何故だ！アイツは……」

「無駄よ、今追っても相手を見失うだけ。それに、貴方には言いたい事があるの」

その言葉に、トトは冷静を取り戻した。

「っ……っ……」

「貴方の言いたい事も分かる。あの女、ヘルは貴方にとって、ある種大事な人だと言うのは、あの反応を見れば私でも分かるわよ」

トトは、沈黙を続けた後、英子に問いかけた。

「……それで、言いたいことって言うのは」

「……どうもあの死神事件の背後に、今回、フルを襲ったり、遊画の魂を奪っていった奴らが関連しているようなの」

何だと！

「それって、どう言う意味ですか？」

隣を見ると、沙耶が画面を覗いていた。

「そのままの意味よ。どうやら未来の改ざんによって、ある事になった事が今、起きているっぽいのよ」

未来の改ざん……いや、今はそんな事はどうでもいい！

「それじゃ、明日起こると言うのは！」

「ええ、何かしら……イヤな予感がしていたのよ。そしたら、見事にその予想が的中したわ」

D・ホイールの画面が、突如別の画面へと変わった。

そこには、2つの画像があった。

1つは、アーカイトシティの時計台の画像と、その周辺のサーモグラフィックのような画像だった。

「見ていけば分かると思うけど、これが1週間前の時計台。そしてこれが……」

急に、別の画面へと切り替わった。

『今の時計台』

外見は別にならなくてはいないが、問題は……サーモグラフィックの画像だった。

時計台を中心に、黒い何かが周りにウヨウヨとしていた。

「これは……?」

「私には分からない……とは、言えないのよ。これは、マイナスエネルギーを持った、モーメントエネルギーよ」

ま……マイナスエネルギーを持ったモーメント!

「あら、この反応だと、モーメントの事ぐらいは知っているようね」「当たり前だ、モーメントの知識ぐらいは遊画の中から取り入れた入れ知恵だが……マイナスエネルギーを持ったモーメントと言っただけ」

「あらあら、多分貴方の思うような感じのエネルギーよ。人の欲望、憎しみ等を動力源とする、史上最悪のモーメント」

何でそんな物が、あの時計台に!

「……誰か近づいてくる」

そう言うと、英子はトトを向くと、言い放った。

「トト、遊画を取り戻したければ……ヘルに勝つしか方法がない。彼女は今……何か恐ろしい物に取り憑かれている」

それは、言われなくても分かる。

ただ、何に取り憑かれているんだ?それだけは……俺にも分からない。

「彼女の呪縛を解くには……貴方がいかにして、女性を口説くかに鍵があるようね」

じょ……女性を口説く!?

「……ただこれは、冗談では無い。これからの戦いに……私は関与出来ないけれど、私は信じているわ。貴方が……遊画を取り戻す事を」

そう聞かされて、モニターは切れた。

だが、その前に、英子が何か口を動かしたのが見えた。

トトは、口の動きを見て、その言葉を知った。

時計台は、偽り。

一体どう言う意味かは分からない。

だが、とても重要な事だと言うのは分かっている。

だが、その思考は、自分たちの方に走ってきたD・ホイールにとって、かき消された。

一般的なD・ホイールがトト達の前で停止した。

そして、乗っていた人が、ヘルメットを脱いだ。

「誰だ!!!」

トトは警戒したが、相手は落ち着いた反応で、トトに接近した。

「これはどうも、時計台の管理をしています、バーム・バエルと申します」

？何だコイツは。

「あ、バームさん」

沙耶は、その男を見ると、すぐに反応した。

「おや、これは沙耶ちゃんではないか。どうしてキミがこんな所に？」

沙耶とも面識がある……一応は信用しても良いのか。

「それで、俺に何の用だ？」

時計台の管理人が、こんな場所にノコノコと訪れるような珍妙な事はしないだろう。

だとすれば……何かしらの用があつてここまで来たのであろう。

「……ハイ、実はと言うとですね。貴方達にお願いがあるので」

お願い……？

「時計台を、守って下さい」

単刀直入に言われ、トト達は一瞬ポカーンとした。

「……ちよつと待て、それは一体……どう言う意味だ？」
すると、バームは急に下を向いた。

「……実はですね、あの場所は……人の怨念や、人の負のエネルギーが集まりやすい場所なんだよ」

負の感情が集まりやすい場所、その意味はよく知らなかったが、それでも2人には、恐ろしい場所なんだとは思った。

「そこに目を付けて、冥界と現実世界を繋げようとするヤツが現れました」

冥界！！

トトは、その言葉を聞くだけで、過剰に反応した。

「冥界と現実世界を繋げるとは、どう言う事だ！」

バームは、更に言葉を続けた。

「聞いての通りです。人間の世界と、死人がいる世界を繋げようとするヤツが、つい先日現れたのですよ」

・・・それは、恐ろしい事じゃねーか。

この世に未練を残した奴らが・・・こつちの世界に現れたら。

大パニックの騒ぎでは済まされないぞ！

「・・・トト・モーランさん。明日です、明日が・・・その作戦が敢行される日です。幸い、まだこの日だけは時間があります。ですので、この町を・・・守って下さい」

・・・。

「分かった」

トトの言葉に、迷いは無かった。

「この町を・・・そして、遊画を取り戻す為に・・・俺は、戦う！！」

トトの意思は固まった。

そして、バールも、その反応を見て、満足そうにトトを見つめた。

「ハイ、それでは良しと言う事で、異論は無いですね」

「ああ、俺は・・・遊画を取り戻す為に・・・そいつ等と戦う！！」

「・・・そうね、私も戦うわ。遊画を取り戻す為に」

沙耶も、それに同意したようだ。

「それでは、明日奴らが動き出します。その時に・・・ご命運をお祈りしますよ、お二方」

そう言つて、バームは自分のヘルメットを被つて、自分のD・ホイールへと戻る為に、後ろを振り向いた。

「……………つぶ」

その時、トトは見逃さなかつた。

一瞬だつたが……………バームの表情が、変わっている事を。

その表情は……………ニヤリと、口を歪ませていた。

だが、トトはこの時、それを見て見ぬふりをした。

……………あの表情、何か裏がありそうだ。

「トトさん、頼みましたよ」

そう聞こえると、バームのD・ホイールは走り出した。

そしてトトも、自分のD・ホイールに跨つた。

「ちよつと、調べたい事がある。また明日、お互いに頑張ろう」

「そうね、明日はお互いに頑張りましょう。それで、貴方は一体何を調べると?」

「……………狐女に、ちよつとした用さ」

トトは呟くと、すぐにアクセルを踏み、颯爽と走り出した。

そしてしばらく走ると、通信モードを押した。

「……………聞こえていたんだる英子、ちよつくらアンタに聞きたい事がある」

トトは、気になっている事を口にした。

すると、英子は頭を抱えて、こう答えた。

『……………アンタには分かつたのかい。だが、バームは今回の事件には関与していない。今はまだ、ね』

その言葉、成る程な。

「ありがとう英子、後は任せな」

そう言つてトトは、勢いよく走り出した。

そして、通信ボタンをオフにした。

「……………遊画」

トトは、心の中で思った。

明日起きる事、恐らくそれで死神事件が本当に解決する。

それに、ヘル。

お前は……そんなヤツでは無かったハズだ。

……全ては、明日になれば明かされるとも言うのか？

……面白い。

だったら俺は、全てを知った上で、ヘル、お前の呪縛を解いてやる。

待っているヘル、そして……待っている、遊画！！

続く

次回予告

「我が名は幻魔、この町は今、我々が占領した。すぐにお前らは・

・生け贄となるのだ。再び自縛神を復活させる為に」

「そんな事で……この町の住民を……生け贄にさせてたまるか！！」

「無駄だ、我々7人を倒さない限り、この儀式は終わらない！！」

次回、遊 戯 王 F e t e 第31話「闇の道、ダークロード」

「恐怖を……恐怖を見せる！！」

「お……お前は、リドウ！」

次回のキーカード

デビル・コザッキー・悪魔族・ATK2700・闇
-7・ダイ
クシンクワ、効果

第30話「正義VS闇、埋まらない両者の溝」(後書き)

あとがき

やべえ・・・やる気がでねえ。

どうも、毎度毎度お馴染みのRagooです。

なにげにタイトル変更しました。

・・・英語が苦手なので、英語の意味を勘違いしていたのが原因です。

・・・ダウンで死ねそうだ。

そんな訳で、今日はここまでとします。

今回は、2週間以内でどうにか仕上げます。

そんな訳で、今日はこの辺で。

それじゃ、かつとビングだぜー、いえーい(棒読み)

2月27日 自宅にて

第31話「闇の道、ダークロード」(前書き)

最近、インフィルニティに負けっぱなしなのが無償に腹が立つ(オ
イ、ここで愚痴るな。

そんな訳で、31話です。

第31話「闇の道、ダークロード」

数日前

アーカイト時計台前に、7人の人影があった。

個性的なメンバーの中、仮面を付けた女が、とある男から話を聞いていた。

「そんな訳だ、お前はトト・モーランから裏切られ、ノルンを寝取られたと言う事だ」

「っ……っ……」

その女は、愕然と跪いた。

「そこでだ、我々に協力する気はないか？トト・モーランをこの世から消滅させ、ノルンを自分の物にする為に」

その女は、ゆっくりと立ち上がると、男を見た。

「……私は、いや俺は、ノルンを救うために……お前らに協力する。それがどんな結末になっても……俺は、ノルンを守ればそれでいい」

その女の言葉に、迷いなど無かった。

「……っふ、それでいい。俺達はお前の力を必要としている」

「何が言いたい？」

「お前は、単独で冥界に行けると聞いた」

「っ……何故その事を！！」

「そこでだ、冥界に存在すると言われている……とある物を持つてきてくれないか」

その言葉に、女は迷いが生じたようだ。

「……だが、アレは」

「安心しろ、我々は力が欲しいのだ。トト・モーランを倒したいんだろ？」

「……分かった、でも1つだけ条件がある」

「……ほう」

「その、計画の日に……トト・モーランと最初に戦わせる」
女の言葉は、何かの決意に満ちた物である。
当然、それは男も知っている事だろう。

「良いだろ、それがお前の条件なら、俺は別に吞んでも構わない。
だが、そしたらそしたでお前も力が必要になつてくる」

「そうね、俺がトトを倒す為に……私は、力をお前らに与える
！！」

そう言つて、女は1枚のカードを、取り出した。

「お前らが欲しいのは、これだろ」

そのカードは、シンクロモンスターである。

ただ、一部特殊な……シンクロモンスター。

「……シンパシーシンクロ、これが……冥界の力」

その場にいた男の中の1人が、呟いた。

世界は、闇があるから光がある。

そしてそれは、決闘でも一緒の事だ。

伝説となつた決闘者、そのほとんどが……光を持って、闇を持
つ。

その2つの存在が分裂した時、2つは争う関係となる。

そう、ジャスティスと、ダークの関係となり。

第31話「闇の道、ダークロード」

昨日の事件後、俺はデッキを見直した。

このままでは負ける。そう思ったからだ。

相手は冥界の女王。油断すれば、すぐに隙を付かれて敗北する。
それだけは避けたい……いや、させてはならないんだ。

「どうにかして……ヘルに、勝つ」

その為には、まずはデッキを見直す必要がある。

そしてトトは、デッキの調整が終わると、すぐに立ち上がった。

「……相手は、強敵だ。何か裏をかかないと、相手が裏をかくと、俺はすぐに騙されるだろう。だったら……」

そう言い聞かせ、地下のD・ホール収納庫へと向かい、自分のD・ホールに跨ると、すぐにマンションから出た。

そして、誰もいない道を走り出すと、そのまま直進ゾーンに突入した。

「……感じる、風を。そして……魂を！」

そう言って、トトはとあるカードを取り出した。

そして一言、言い放った。

「クリアマインド！」

トトは、持っていたカードをデュエルディスクに、召喚した。

そして、現れたモンスターを見ると、ご機嫌そうに、笑った。

「よし、成功だ」

彼は知っていた。

限界を超えた時に、人は境地に辿り着く事が出来ると。

そして彼は、最初の境地へと、すでに辿り着いていた。

……だが、もう一つ、知っている事があった。

それは、更にその先もあると言う事も、すでに知っていた。

しかし彼では、すでにこれが限界だと言う。

「……限界を更に超えた時、人間は……更なる力を発揮する」

恐らくそれを取得するのは、神に近い存在のヤツしかいないだろう。

……いや、もはやすでに神の領域に到達する者か。

不動遊星、彼は恐らく、この境地に辿り着くと予測される。

そして同時に、遊画もまた、この境地ではない、別の境地を手にするであろう。

「その為には、あのわがまま娘をどうにかしなければならぬだろうがな」

スクールド、何でお前は遊画を信じようとしぬい。

お前だって、本当は分かっているんだろう。

そして思っているんだろ。

未来を、救いたいと。

ただ、プライドが高く、認めようとしない意地っ張りな性格が・・・
・仇となる。

「お年頃の女とは、よく分からない物だな」

トトは、そんな事を呟くと、ため息混じりだが、くすりと笑った。

＊＊ ＊＊ ＊＊ ＊＊ ＊＊ ＊＊ ＊＊ ＊＊ ＊＊

＊＊

それから3時間後

それは・・・起きた。

突如、地面が光り出した。

「何だ!？」

すると、辺りに画面が表示された。

この画面、ソリットビジョンか。

その画面に、男が映し出され。

『我が名は幻魔、この町は今、我々が占領した。すぐにお前らは・・・
・生け贄となるのだ。再び自縛神を復活させる為に』

生け贄・・・だと。

「バカを言うな!お前らの野望の為だけに・・・そんな事で・・・
この町の住民を・・・生け贄にさせてたまるか!！」

それが聞こえたのか、幻魔と名乗った人物は、トトの方を見下した
ような目で見つめた。

『無駄だ、我々7人を倒さない限り、この儀式は終わらない!!』

すると、辺りにドームのような薄い光が、アーカイトシティを覆い
つくした。

「何だ、アレは!」

『アレはちよつとしたバリアだ。もはや誰1人として、この町から
は出られない』

画面の表示が変わると、丁度ドームの端の光景が映し出された。

そこには、人々がドームに向かって群がっている光景だった。

『出してくれ、ここから……出してくれ!!』

『いやぁー!!死にたくない!!』

『出させる、ここからだ出させてくれえええ!!』

人々の醜い光景に、トトは胸くそが悪くなった。

「キ……キサマア!!」

『良いね、その目。憎い者を見るその目。まさにエネルギーとしては最適だよ』

エネルギー？

『まあ、そんな事はどうでもいいとする。このままエネルギーが溜まるのを待っているのもアレだ。暇すぎてしょうがない。そこでだ、我々とデュエルで勝負をしようではないか』

幻魔は、自分のデッキをデュエルディスクのデッキホルダーへと装着した。

『7人のデュエリストがアーカイト周辺にいる。それら全員を、明日の18時までに全て倒せばお前らの勝利で、町は開放される。だが、18時を過ぎれば……お前ら全員は生け贄となり、町自体が消滅する』

何だよ、それって。

「圧倒的にお前らの方が不利じゃねーか」

『そうだろうな。だが!!』

すると、とある場所で……爆発が起きた。

「んな!何事だ」

見ると、画面が切り替わっており、その場所には、この場にいるはずのない男が、いた。

『恐怖を……恐怖を見せる!!』

は……バカな!!

「お……お前は、リドゥ」

トトは愕然と、その光景に絶望していた。

リドウに挑んだデュエリストが、光となって消えていた。

『このデュエルで負けた者は、生け贄の材料となる』

トトは、改めて幻魔の方を睨んだ。

「何がやりたい！この町を、いや、命を何だと思っている！」

『さあな、俺にとって命をは、俺の為にあるような物だ』

クツ・・・最悪なヤローだ。

『それじゃあ、せいぜい足掻くんだな。捨てられた側近』

「ま・・・待て、っ」

空中に映されていた画面がブツリと切れた。

「クツ・・・何者なんだ、幻魔」

何で、俺が最も嫌がる事を・・・。

「トト！」

その声は

「沙耶か」

どうやら、沙耶は無事にここまで来れたらしい。

「トト、これが・・・昨日言っていた」

「ああ、どうやらそのようだな」

あちらこちらで爆発や、悲鳴が聞こえている。

まるでこれは悪夢だ。

「・・・ねえ、私」

沙耶は、怯えたような声を出していた。

「怖い、人の本能が。逃げたいとか、自分さえ助かればそれでいいとか・・・そんな気持ち、伝わってくるの」

沙耶・・・？

「・・・どうすればいいの？ねえ。私は、この恐怖に、どう立ち向かえば」

「己の限界を超えればいい」

トトは、キツパリと答えた。

「お前が怖いと思うのは、それは自分の何処かに、今の状況を受け入れたくないと思っているからだ。だが現実には、目の前をつねに写

している。それを受け入れる事が、沙耶、お前に必要な事だ!!」
沙耶は、啞然とした。そして、素直にいつものように優しく微笑むと、呟いた。

「そうね、死神も時も、結局何も出来なかったものね。だから、また自分が何も出来ないんじゃないかって言う心配も、冷静に考えれば、あつたのかもしれない。ありがとうトト、おかげで、目が覚めたわ」

トトは、急に微笑んだ沙耶を見て、照れくさそうに顔を背けた。

「コイツ自身には、悪気はないようだがな」

だが、急に微笑んだりすると、大抵の男は心奪われるぞ。

それでも何も感じないとは・・・遊画、お前は何者だ。

と、その時

「見つけたぞ!!」

自分たちの後ろの方から、怒鳴り声が聞こえた。

「その声は!!」

2人は、聞いた事があつた。

遊画に恐怖を思い出させ、人々に恐怖を与える事を生き甲斐としていた、最低な人物。

「リドウ・・・」

「死んだハズのリドウが、どうしてここに・・・」

沙耶の疑問に、リドウは嘲笑った。

「お前らのせいで、俺は確かに1度死んだ。いや、死んだハズだった。だが、幻魔の力により、幻魔の僕となる事を条件に俺は冥界から生き返った。だが、俺は僕などと言う物はどうでもいい。俺は、公栄遊画を殺せればそれでいいんだ」

リドウは、自分のD・ホイールに跨ると、トト達の元へと走り出した。

「さあ、デュエルだ!お前さえ消せば、遊画は2度とこの世には現れる事もない」

つ、狙いは俺かよ。

「しょうがない、俺が・・・相手に」

「ちよつと待った!!」

突然、リドウの走ってきていたルート上に、1台のD・ホイールが乱入してきた。

「!!!んの・・・」

リドウは正面衝突を恐れ、急カーブでスレスレ躲した。

「キサマ・・・邪魔をするな!!」

リドウは怒鳴っていたが、俺達は少なくとも目を開き、現れた人物を凝視した。

現れたのは・・・入院しているハズの、フル・アルカデス。

「フル、何をやっているの!? 大人しく病院で治療しないと」

「・・・それが、大人しくできなくてな。病院自体が奴らによって、俺以外の奴らは・・・全て光になって、消えてしまった」

最悪か・・・。

動けない病人などをすでに吸収するとは・・・。

「そ・・・そんな、それじゃ」

「ああ、だが安心しろ。俺はいたって元気だ。それにトト・モーラ
ン」

フルは、トトを見ると、ニツと、笑顔を見せた。

「お前は遊画を取り戻すと言う、大切な使命があるだろ。だからさ、
行けよ」

「だが!!」

「安心しろって、俺は、必ず勝ってみせるから
・・・そうだな。」

「必ず勝てよ、フル・アルカデス」

トトとフルは、お互いの手の平をパチンと、叩いた。

「おうよ、俺はそう簡単には負けないんでね」

トトはフルの姿を目に納めると、自分の相手、ヘルを探すために、
D・ホイールへと乗った。

そして、その場から走り出した。

「……沙耶、お前もこの場から離れる。お前も、やる事があるだろ」

沙耶はその言葉を察し、すぐに頷いた。

「分かったわ。でも、負けないでね、フル」

言葉を交わすと、沙耶も自分のD・ホイールに跨り、すぐに走り出した。

「……ふう、何となく格好つけてはみたが、やはり、精神異常者相手では、何となく恐ろしいと言っか、今までの震えが今更来ているからな」

そんな言葉を口にし、フルはリドウの方へとD・ホイールを向けた。

「そんな訳でだ、お前の相手は、俺だ!!」

リドウは、不気味に笑っていた。

「面白い、そんなに死にたいんなら、まずはお前から葬り去ってやる」

そしてお互いに、D・ホイールのスイッチを押した。

「「ホイール魔法、スピード・ワールド2。セット、オン」」

画面に、スピード・ワールド2のカードが現れ、そしてデュエルフィールドが映し出された。

それと同時に。

フルとリドウのD・ホイールの下の方から、何やら黒い何かが浮き出ているのが確認できた。

「何だこれは？」

すると、浮き出てきた黒い何かが、突如空中にも現れ、そのまま道を作り出した。

「んな!!」

「驚いたか、これは闇の道、ダークロードだ。今からこの上でデュエルを行う。準備はいいか」

「……そんな事でビビってどうする、俺。」

「ああ、いいぜ」

そして、お互いにアクセルを踏んだ。瞬間、お互いのD・ホイール

が走り出した。

「ライディングデュエル、アクセラレーション!!!」
「Ridou vs Full・LP4000」
先行は、先を走っていたフルだった。

「俺のターン。俺は、バスター・シエイルを守備表示で召喚
バスター・シエイル・機械族・DEF2000・地・4・効果」
フルの目の前に、貝の形をした砲台型モンスターが現れた。

「そして、カードを2枚伏せてターンエンド」
来いよりドウ、お前の戦術の裏を掻いてやる。

「フン、随分と守りを固めたいらしいな。だが、こんな事じゃ俺は倒せないぜ。俺のターン」

Full・Spcl・LP4000
Ridou・Spcl・LP4000

リドウは、ドロウしたカードをそのまま手札ホルダーにセットすると、別のカードを手にとった。

しかも、顔をにやかせながら。

「手札からダークガーディアンを攻撃表示で召喚！
ハダークガーディアン・岩石族・ATK1800・闇・

4・効果」

リドウの目の前に、1体の盾を持った悪魔らしきモンスターが現れた。

「クケケケケケケケケケ」

しかも、鳴き声は気味が悪かった。

「だが・・・」

「一体どう言う事だ？このまま攻撃を行ってもただ単にダメージを喰らうだけだしな。」

「いや、このまま終わるとも限らない。」

「何か・・・相手に考えがある！」

フルは直感で感じ取った。

そして、その直感は見事に当たった。

「ダークガーディアンの召喚に成功した時、手札、またはデッキから闇属性レベル1のモンスター1体を特殊召喚できる」

ゲツ、闇属性、そしてレベル1となると……。

「現れよ、コザツキー」

リドウの隣に穴が開き、その中から1体の悪魔が姿を現した。

『クヘヘヘヘ、久々の復活ですぞ』コザツキー・悪魔族・DEF 400・闇・1・通常』

リドウのデッキ構成、それはフルにも分かっていた。

そう、コザツキーを出された瞬間、それは始まるのだ。

「更に、自分フィールド上にコザツキーと名の付くモンスターが存在する場合、手札から闇の儒教者を特殊召喚できる。来い、闇の儒教者へ闇の儒教者・悪魔族・ATK1000・闇・3・効果」
黒いパーカーを纏ったモンスターが現れた。

「だが、守備力2000のバスター・シエイルには全然攻撃力が足りない」

「それはどうかな？」

「なに！！」

「ダークガーディアンの効果発動！1ターンに1度、このモンスターを除く、自分フィールド上に存在する闇属性モンスターの数×300ポイント、攻撃力を上げる事ができる！」

「何だと!？」

つまり、攻撃力は……2400!!

「それにより、ダークガーディアンの攻撃力は600ポイントアップする」ダークガーディアン・ATK1800 2400」

早速、跳ばしていやがる。

「バトルだ。ダークガーディアンで、バスター・シエイルを攻撃！
！アームズ・キャノン！！」

ダークガーディアンの腕が変形し、キャノン砲となった。
そして、それをバスター・シエイルに向けて、発砲した。

「その瞬間、畏カードオープン。万能地雷グレイモヤ。相手モンス

ターの攻撃時、相手フィールド上に存在する攻撃力が一番高いモンスター1体を破壊する。万能地雷グレイモヤ・罾・効果、相手モンスターへの攻撃宣言時に発動する事ができる。相手フィールド上に表側表示で存在する攻撃力が一番高いモンスターを破壊する。それにより、攻撃力が一番高いダークガーディアンを破壊！！」

攻撃を行ったダークガーディアンは、どこからか発生した爆発に飲み込まれ、そのまま木っ端微塵に粉碎した。

「クツ……カードを1枚伏せてターンエンド」

いいぞ、このまま行けば。

「俺のターン」

Full・Spcc2・LP4000

Ridou・Spcc2・LP4000

「俺はチューナーモンスター、ディスク・スケルテンを攻撃表示で召喚。ディスク・スケルテン・機械族・ATK1000・闇・3・チューナー」

円盤状の髑髏が、姿を見せた。

「レベル4のバスター・シエイルと、レベル3のディスク・スケルテンをチューニング！ 4 + 3 = 7 稲妻に紛れし竜よ、混沌の空と混沌の海にて全てに光りを照らし出せ」

星が一直線に並ぶと、光り出した。

「シンクロ召喚、光り輝け、フラッシュ・ボルテッカー・ドラゴン。フラッシュ・ボルテッカー・ドラゴン族・ATK2700・光・7・シンクロ、効果」

「グオオオオオオオオオオ！！」

フラッシュ・ボルテッカー・ドラゴンの咆吼が響いた。

「更に、ディスク・スケルトンの効果発動。このモンスターがシンクロ素材となった時、デッキからカードを1枚ドローする」

フルはデッキからカードを1枚ドローした後、手札を1枚墓地へ送った。

「そして、フラッシュ・ボルテッカー・ドラゴンの効果発動。1タ

ーンに1度、手札1枚を墓地へ送る事により、相手フィールド上のモンスター1体を破壊する。俺は、コザツキーを破壊する!!!」
フラッシュ・ボルテッカー・ドラゴンの口から、電気の弾が発射された。

そして、その電気の弾は、何の問題もなくコザツキーを貫く……ハズだった。

「その瞬間、闇の儒教者の効果発動。このカードをリリースする事により、このターンコザツキーと名の付くモンスターは戦闘、及びカード効果では破壊されない」

闇の儒教者が光となって消えたかと思えば、次の瞬間にはコザツキーの前で電気の弾を受け止めていた。

「更に、破壊を無効にした場合、相手に400ポイントのダメージを与える」

闇の儒教者から、黒い弾丸が発射され、フルに直撃した。

「ぐはっ!!!」
LP4000 3600

D・ホイールが揺らぎ、闇の道のギリギリを走っていた。
無論、ガードレールなどと言う物はない。

フルは痛みを絶えながら、とにかく体制を立て直す事を考えた。
道を外れないようにして、ゆっくりとだが体制を整えていた。

そして、何とか体制を立て直す事に成功した。

「クッ、だが」

何よりも、フルは恐ろしい事を知った。

このデュエル、油断すればそのままライフが0になる前に落下して、そのまま死。等という事があり得るのだ。

以外と高い場所でデュエルを行っている。

それを頭に入れておかないと、大惨事を招く危険がある。

「それにな……」

もはやこのターンは動けない。

コザツキーが戦闘破壊されない上に、迂闊に攻撃すれば、再びダメージが発生する。

フルは歯を噛みしめながら、宣言した。

「ターン・・・エンドだ」

リドウは高笑いをしながら、フルを見つめた。

「あーっははははははは、あははははははははは！結局何も出来ず仕舞いじゃねーか。こんなんで、俺を倒すと？笑えるぜ。俺のターン！」

Full・Spcc3・LP3600

Ridou・Spcc3・LP4000

「コイツは笑える。まさかこうも早くお見えになるとはな
何をするつもりだ？」

「自分フィールド上に存在するコザツキー1体をリリースし、手札からダークチューナー、悪魔の契約者をアドバンス召喚（DT・悪魔の契約者・悪魔族・ATK0・闇・8・ダークチューナー）」
「ダ、ダークチューナー！」

「そして、墓地に存在する闇の儒教者をゲームから除外し、墓地に存在するコザツキーと名の付くモンスター1体を、特殊召喚できる。現れよコザツキー（コザツキー・ATK400）」
は・・・早い。

まさか、これを狙って。

「俺はレベル1のコザツキーにレベル8のダークチューナー、悪魔の契約者をダークチューニング」

悪魔の契約者が透明となり、その中から大量の星が離れていき、コザツキーの体にのめり込んだ。

『いいですね、この、自分を追い詰めているこの感覚・・・』
コザツキー自身も、何かしらの快感を得ているように思える。

「生け贄に捧げられし極悪なる研究員よ、悪魔となりて、暗黒より姿を現せ！」

そして、コザツキーの中の星が全て消え、黒い星が輪を作った。

「ダークシンクロ！！今こそ地獄を見せろ、デビル・コザツキー（デビル・コザツキー・悪魔族・ATK2700・闇・7・ダー

クシンク口、効果」

現れたモンスターも、コザツキーが巨大化し、更に背中から悪魔の翼が生え、完全に原型を無くした悪魔がそこにいた。

「現れたな、化け物が!!」

フルも、焦りを見せていた。

「デビル・コザツキーの効果発動。自分の墓地に存在するコザツキーの数だけ、攻撃力を300ポイントアップさせ、破壊される場合、代わりに墓地のコザツキーを除外する事ができる」
「デビル・コザツキー・ATK2700 3000」

攻撃力3000。

以外とヤバイかもな。

「バトル、デビル・コザツキーで、フラッシュ・ボルテッカー・ドラゴンを攻撃!ギガンテック・クロー!!」

デビル・コザツキーの腕が変形し、巨大な手となり、フラッシュ・ボルテッカー・ドラゴンを切り裂いた。

そして、そのまま爆発を起こした。

「ぐあああつ」
「LP3600 3300」

再び体勢を崩しかけたが、何とか踏みとどまった。

「ターンエンドだ」

リドウは勝ち誇った顔をした。

しかし、フルは諦めていなかった。

「その瞬間、手札からバトル・レスキューを墓地へ送り、戦闘で破壊されたフラッシュ・ボルテッカー・ドラゴンを特殊召喚する」

フルのD・ホイールから1枚のカードが出され、そのカードをフルは手に取ると、デュエルディスクに召喚した。

「復活せよ、フラッシュ・ボルテッカー・ドラゴン!」
「フラッシュ・ボルテッカー・ドラゴン・ATK2700」

「ええい、しつこい。そんな雑魚は一生墓地にいれば良い物を」
「つ、コイツ……俺のモンスターを侮辱しやがったな。」

「お前……その言葉を後悔させてやる!!」

「いいだろ、そこまで言うんなら、この状況を逆転してみる。とは言っても無駄だろうがな」
リドウは高笑いをしていた。
しかしその瞬間、フルの本能に火がついた。
絶対に・・・倒してやると。
だが、フルは知らなかった。リドウが言った言葉の真意「この状況を逆転してみる」。
その言葉の裏には、恐ろしい秘密が隠されている事を。
「・・・っふ」
リドウはニヤリと、笑っていた。
続く

次回予告

「破壊したと思ったら、次は何だ一体！」
「これこそが、共鳴。そして同調だ」
「一体何を・・・？」
「そしてそれを介して行われる、ユニゾンチューニング!!」
「んな、何だそりゃ!？」
次回、遊戯 王 Fate 第32話「シンパシーシンクロ」
「バカな・・・チューナー同士でシンクロだと!!」

次回のキーカード

冥界地皇ペルセポネ・悪魔族・ATK2300・地・8・シンパ

シーシンクロ、効果

第31話「闇の道、ダークロード」（後書き）

あとがき

最近、見られてはいるが、全然評価がない事に、少し不安を感じつつあるRagoです（主にpixivの方で）

まあ、評価が無くても続けるつもりですが。

そんな訳で、いつものようにテンション　　で行きましょう（いや、最後の矢印意味無いやん！

ああ、肩いてえ・・・そしてあとがきのネタが尽きてきてるわあ。そんな訳で次回、ついに姿を現す謎のシンクロモンスター、シンパシーシンクロ。

一体どうなる事やら、そしてヘルの心境とは・・・。

熱き戦いは、まだまだ続きます。

と言う事で、今回はここまでにします。

それじゃあ、次回も元気に、デユエッ

3月5日　自宅にて

第32話「シンパシーシンクロ」(前書き)

まあ、最近はまあまあの調子で始まります。

第32話「シンパシーシンクロ」

「手札からバトル・レスキューを墓地へ送り、戦闘で破壊されたフラッシュ・ボルテッカー・ドラゴンを特殊召喚する」

フルのD・ホイールから1枚のカードが出され、そのカードをフルは手に取ると、デュエルディスクに召喚した。

「復活せよ、フラッシュ・ボルテッカー・ドラゴン！ フラッシュ・ボルテッカー・ドラゴン・ATK2700」

「ええい、しつこい。そんな雑魚は一生墓地にいれば良い物を」

「っ、コイツ・・・俺のモンスターを侮辱しやがったな。」

「お前・・・その言葉を後悔させてやる！！」

「いいだろ、そこまで言うんなら、この状況を逆転してみる。とは言つても無駄だろうがな」

リドウは高笑いをしていた。

しかしその瞬間、フルの本能に火がついた。

「そこまで言うのなら・・・やってやる！俺のターン！」

Full・Sp4・LP3300

Ridou・Sp4・LP4000

「手札からスピードスペル、ネクスト・ドローを発動。自分のスピードカウンターが4つ以上ある時、デッキからカードを1枚ドローし、そのカードが魔法カードだった場合、更にデッキからカードを1枚ドローする。ネクスト・ドロー・Sp魔法・効果、自分用スピードカウンターが4つ以上ある場合に発動する事ができる。自分のデッキからカードを1枚ドローする。また、カードが魔法カードだった場合、更にデッキからカードを1枚ドローする。デッキからカードを1枚ドロー！」

引いたカードは、Sp・エンジェル・バトンだった。

「引いたカードは魔法カードだ。それにより、もう1枚ドロー！」
そしてフルは、さっき引いたカードをデュエルディスクに差し込ん

だ。

「更に俺はスピードスペル、エンジェル・バトンを発動。デッキからカードを2枚ドロし、その後手札1枚を墓地へ送る。S p・エンジェル・バトン・S p魔法・効果、自分用スピードカウンターが2つ以上ある場合に発動する事ができる。デッキからカードを2枚ドロし、その後手札1枚を墓地へ送る。デッキからカードを2枚ドロし！」

引いたカードを見た後、手札のカード1枚を手に取り、墓地へ送った。

「そして、ロック・クラスターを守備表示で召喚。ロック・クラスター・機械族・DEF1600・闇・3・効果」

横から、岩に擬態化したロボが現した。

「無駄だ、それでもデビル・コザッキーの足元にも遠く及ばん！」

「それはどうかな」

「んだと！」

そうさ、手札はこの4枚。この絶好調時しか、チャンスは無い。

そう、フルは思った。

世界は、闇があるから光がある。

そしてそれは、決闘でも一緒の事だ。

伝説となった決闘者、そのほとんどが・・・光を持って、闇を持つ。

その2つの存在が分裂した時、2つは争う関係となる。

そう、ジャステイスと、ダークの関係となり。

第32話「シンパシーシンクロ」

町に、黒く禍々しい道が1本だけ空中に浮いていた。

その道を、2台のD・ホイールが走っていた。

ちなみに、リドウのフィールド上には巨大な研究員が悪魔になった

姿のモンスター、デビル・コザツキーへデビル・コザツキー・ATK3000に対してフルのフィールド上には、今はまだ効果が発動できないフラッシュ・ボルテッカー・ドラゴンへフラッシュ・ボルテッカー・ドラゴン・ATK2700としてついさつき召喚したロック・クラスターへロック・クラスター・DEF1600が存在している。

お互いに伏せカードは1枚ずつ、まだ勝負は分からない。すると、リドゥを挑発したフルは、早速動いた。

「手札からスピードスペル、ハーフ・シーズを発動。自分のスピードカウンターが3つ以上ある場合、相手フィールド上に存在するモンスター1体の攻撃力を半分にする。そして、その数値分自分のライフを回復する。Sp・ハーフ・シーズ・Sp魔法・効果、自分用スピードカウンターが3つ以上ある場合に発動する事ができる。相手フィールド上に存在する表側表示で存在するモンスター1体の攻撃力を半分にし、ダウンした数値分だけ自分のライフポイントを回復する。」

「クツ、都合良く引けていたのか」
デビル・コザツキーから、黒いオーラが放たれ、その放たれたオーラがフルに降り注いだ。

「・・・腐ってもコイツはコイツか、嫌気がするぜ」LP3300
4800」

「クツ・・・クソガキがへデビル・コザツキー・ATK3000
1500」

何とか行けそうな感じた。

「バトル、フラッシュ・ボルテッカー・ドラゴンで、デビル・コザツキーを攻撃！サンダー・ショット」
ボルテッカーの口が大きく開き、その中で電気の弾が作り出され、そしてそれがデビル・コザツキーへ向けられて発射された。

「クツ、だがデビル・コザツキーの効果により、墓地のコザツキーを除外し、破壊されない!!」

コザツキーの残照がデビル・コザツキーの目の前に現れ、飛んできた電気の弾に当たり、粉々に砕け散った。

「だが、戦闘ダメージを受けて貰うぞ！」

「クツ・・・。LP4000 2800」

そしてフルは、手札を確認すると、2枚を手に取りディスクに差し込んだ。

「カードを2枚伏せてターンエンドだ」

さて、恐らく相手は次のターン、防御に差し掛かるだろう。

その時を狙えば・・・。

「俺のターン!!」

Full・SpC5・LP4800

Ridou・SpC5・LP2800

「スピード・ワールド2の効果発動。自分のスピードカウンターを4つ取り除く事によりLP500 1手札のスピードスペル1枚につき、相手に800ポイントのダメージを与える。手札のスピードスペルは3枚、よって、お前に2400ポイントのダメージを与える!!」

「クツ、手札にスピードスペルが3枚だと!!」

リドウのD・ホイールから電撃が撃たれ、フルのD・ホイールへと見事に命中した。

「ぐああああああ!!」LP4800 2400

一気にライフを削られた。

危なかった、あのターンでライフを回復していなければ・・・。レイドゾーンへと突入していた。

「・・・。チツ、デビル・コザツキーを守備表示へと変更へデビル・コザツキー・ATK1500 DEF2400」ターンエンドだ」

どうやらリドウは、ネタが尽きたようだ。

「だったら、スピードスペルが無い今、一気に勝負に出るぜ。俺のターン」

Full・SpC6・LP2400

た事を後悔させてやるぜ!!」

「……っふ」

わ……笑っているだど!!」

「何が可笑しい!?!」

するとリドウは、「クツクツク」と、再び怪しい笑みを見せ始めた。

「笑えるぜ、まさか本当にデビル・コザツキーを破壊するとはよ」

「一体何を?」

すると、何かの違和感に気づいた。

リドウの場をよく見てみると、そこには、ダークシンクロ素材として墓地へ送られたハズのダークチューナー、悪魔の契約者が存在していた。

「っ、いつの間に!」

「俺はデビル・コザツキーが破壊された時に、このカードを発動していた。罨カード、ダークシンクロ・リバース。このカードは、ダークシンクロモンスターが破壊された時に発動でき、破壊されたダークシンクロモンスターに使用されたダークチューナー1体を墓地から特殊召喚する。ただし、この効果で特殊召喚されたダークチューナーはダークチューナーとしては使わず、チューナーとして扱う。ダークシンクロ・リバース・罨・効果、自分フィールド上に表側表示で存在するダークシンクロモンスターが破壊され墓地へ送られた場合に発動する事ができる。そのモンスターのダークシンクロ素材として墓地へ送られたダークチューナーが墓地に存在する場合、そのモンスター1体を墓地から特殊召喚する。その後、相手フィールド上にセットされている魔法、罨カード1枚を選択して破壊する。また、この効果で特殊召喚されたダークチューナーはダークチューナーとしては扱わず、チューナーとして扱う。更に、相手フィールドのセットカード1枚を破壊する」

「んだと!?!」

「右のカードを破壊!!!」

ガツシャーン

そんな音を立て、伏せられていたカード、魔法の筒は破壊された。

「クツ・・・破壊したと思ったら、次は何だ一体！」

「これが、俺のしぶとさだ」

「タ・・・ターンエンド」

「・・・だが、このターンは乗り切れる。」

何故なら、俺が伏せているカードは、リベンジ・バック。このカードは、相手が攻撃を行った場合、強制的にエンドフェイズにスキップするカード。そして、墓地からレベル4以下のモンスター1体を特殊召喚できる、そんなカードだ。

それに、ロック・クラスターの効果により、このデュエル中に1度だけ、戦闘、または効果によるダメージを無効にし、その数値分のモンスターの攻撃力にする事ができる効果を持つ。さっき発動しなかったのは、恐らくリドウは一気にこちらに大ダメージを与える瞬間を狙っている可能性がある。

あの時発動していれば、ライフは温存できていたかもしれないが・・・だが、それでも相手の計画に支障を与える事もできる。

これなら、どんな事があっても、決して負けはしない。

そう、断言できる状況にあった。

「・・・ただし、今は。」

「俺はターンエンド」

「・・・待っていたぞ、この時を」

リドウは、急に肩を震えさせていた。

「・・・何だ一体？」

フルは、不思議そうに見つめていたが。

「っ!!!」

直感で、何かを感じ取った。

「何だ、この気配は。まるで、死神の時みたいに・・・恐ろしい一体何が・・・始まると言っんだ。」

「見ていなフル・アルカデス。キサマに・・・本当の冥土の土産と
言う物を見せてやる。俺のターン！」

F u l l · S p c 7 · L P 2 4 0 0
R i d o u · S p c 3 · L P 2 8 0 0

「面白い事を教えてやろう」

いきなり何を言い出すんだ？

「シンクロは同調し、そして別の姿へと姿を変える。それは知っているよな？」

「それはバカでも分かる。だがそれが一体どうした!!」

「だったら、同調する条件として、何が必要になる」

さつきから、シンクロの基礎を何で今？

「・・・チューナーだ」

「そうだ、だったらチューナーは、チューナー同士で存在する時、どんな事が起こるか知っているか？」

チューナー同士で存在する時・・・？

「・・・シンクロが同調なら、チューナーは・・・そのチューナー同士で・・・共鳴する」

多分、そうだとしか言い切れない。

するとリドゥは、急に笑い出した。

「・・・つふ、あつははははは!! 正解だ。これこそが、共鳴。そして同調だ」

「一体何を・・・？」

「そしてそれを介して行われる、ユニゾンチューニング!!」

「んな、何だそりゃ!？」

結局、何が言いたいんだ!？」

「手札からスピードスペル、ストリーム・サイクロンを発動。自分のスピードカウンターが2つ以上あつ時、相手フィールド上の、魔法、罫カード1枚を破壊する。Sp・ストリーム・サイクロン・Sp魔法・効果、自分用スピードカウンターが2つ以上ある場合に発動する事ができる。相手フィールド上に存在する魔法、罫カード1枚を選択して破壊する。その後、手札から罫カードを発動できる」

「

急に強い風が吹き、伏せてあったカード1枚がその風によりバラバラに砕け散った。

「クツ……」

「まだこれで終わりじゃないぜ。どうせここでダメージ効果を発動しても、その岩によって無効にされてしまうだろうからな」

な……読まれている!!

「あの時発動したのは、どうせ後でかいダメージを与えるだろうと思わせる為に発動したんだ。この次のターンまで待てば、さっき使ったスピードスペルを合わせて、3600のダメージを与える事だつてできたからな。だが、それをしなかったのには……分かるな？」

な……何か来る。

「俺は自分フィールド上に存在するダークチューナー、悪魔の契約者のレベルを1つ下げ、手札からチューナーモンスター、レベル・クラッシュャーを特殊召喚へDT・悪魔の契約者・87レベル・クラッシュャー・悪魔族・ATK0・闇・1・チューナー」

「……?チューナー同士で、一体何が始まるとも言うんだ」

そう思った時だった。

突然2体のモンスターが光り出した。

「何が……一体何が!!」

「っふ、見るがいい。レベル1のチューナーモンスター、レベル・クラッシュャーと、レベル7とり、チューナーとなったダークチューナー、悪魔の契約者をユニゾンチューニング!!」

「バカな……チューナー同士でシンクロだど!!」

2体のモンスターから、無数の星が現れ、チューニングリングを形成した。

それが縦に並ぶと、一筋の光る塔となり、地上と空を繋ぐ、柱となった。

「何事だ!?!」

トトの場所からも、その光景は目に入った。
まるで、天と地を結ぶ柱のように伸びているチューニングリング。
そして、その周りは突如として光に覆われた。

「っ、光が……」

沙耶も、その光景に絶句した。

何か、恐ろしい事が起きている気がする。

それは直感ではなく、確実な物だ。

「アレは……一体何なの!？」

まるで……冥界から伸びた柱のように、それは輝き続けていた。

「オイオイ……冗談だろ」

フルも、自分が危機に瀕している事ぐらいは理解できていた。

チューナー同士をチューニングさせる等と言う事は聞いたことも無ければ、見たことも無い。

だが、相手はそれをやっている。

「見るがいい、これが……冥界より生まれし力だ!!今こそ舞い降りる、復讐と憎しみに満ちた女神よ、復讐の為に!!」

その瞬間、柱になっていた物から翼が現れた。するとすぐに、その柱は螺旋を描くようにして、消え去った。

「シンパシーシンクロ!!出現せよ、冥界地皇ペルセポネ!!」

消え去った柱の中心部だった場所に、1体のモンスターが飛翔した。背中からは翼が生え、顔つきは女神像のように固まった表情をしており、手には何も持っていないが、手の平に魔法陣のような何かを描かれていた。

「クオオオオオオオオオオオ!!冥界地皇ペルセポネ・悪魔族・ATK2300・地・8・シンパシーシンクロ、効果」

「あ……ああ」

その姿は、見る者を恐怖へと突き落とすかのような感覚に陥れた。

「だ……だが、攻撃力はこっちの方が上だ。そう簡単に倒され

訳じゃ」

「残念だな、冥界地皇ペルセポネは、1ターンに1度、相手フィールド上に存在するモンスターの攻撃力を0にし、攻撃力を1000ポイント、このターンのエンド時まで上げる効果がある」

「な・・・何だって!!」

「冥界神の前に、最強のヤツなどいない。デスペア・シャウト!」
その女神は、急に口が開き、そして・・・。

『キエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ!!』

♡冥界地皇ペルセポネ・ATK2300 3300♡

禍々しく、恐ろしい音量で、叫び始めた。

「っ・・・っ・・・っ・・・」

ヘルメットをしても、その五月蠅さは確認できた。

仕舞いには・・・。

「うあああああああ!!」

「五月蠅い、叫びが・・・頭があああああ!!」

「オギヤー、オギヤー」

「誰か、誰かアレを止めてくれえええええ!!」

地上からの叫び声や、脆い物が崩れる音からガラスが割れる音など、大パニックとなっていた。

「クッ、このままじゃ!!」

そして、その叫びを喰らったボルテッカーは、徐々に弱っていつているのが分かった。

『グ・・・グオオオオオオオ!!♡フラッシュ・ボルテッカー・

ドラゴン・ATK27000♡』

「ただ、まだあの岩ヤローがいるからな。手札を1枚セットして、スピードスペル、ハイスピード・クラッシュを発動!スピードカウンターが2つ以上ある場合、自分フィールドのカード1枚と、相手フィールド上のカード1枚を破壊する!!♡Sp・ハイスピード・クラッシュ・Sp魔法・効果、自分用スピードカウンターが2つ以上ある時ある時に発動する事ができる。フィールド上に存在する力

「ド1枚と、自分フィールド上に存在するカード1枚を破壊する」
「そんな・・・バカな」

「俺は、俺の伏せカードとお前のロック・クラスターを破壊する！」
2つのカードが光に包まれ、バラバラになった。

「そして、最後のスピードスペルだ。スピードスペル、手札封じの仮面を発動！自分のスピードカウンターが3つ以上ある場合、お互いに手札を捨てる効果、または手札から効果を発動する効果を発動できない！S p -手札封じの仮面・S p魔法・効果、自分用スピードカウンターが3つ以上ある時ある時に発動する事ができる。お互いに手札から発動する、または手札を捨てて発動する魔法、畏、効果モンスターの効果を発動できない」

「！！！」

封じられただと・・・。

これじゃ、手札から速攻のかかしを発動出来ない。

これが・・・リドウ。

記憶を抹殺し、相手を苦しませる事に快感を得ている男の・・・強さ。

「さあ、覚悟は出来たか？」

「・・・ああ、来いよ。俺は敗者だ、だったら・・・お前に倒される覚悟はすでに出来ている！！！」

「あーっはははははははは、あはっははははははははははははははは！！俺に倒される覚悟は出来ているだと？笑えるぜ。お前は負けるしか道は無かったんだよ。お前に勝つという選択肢は何処にも存在していなかった、だからな、くたばれ、ガキが」

その言葉に、フルは憎悪を抱いた。

「・・・だが！！この俺の力、フラッシュ・ボルテッカーだけは、何としても逃がしたい。」

「バトル、冥界地皇ペルセポネで、フラッシュ・ボルテッカー・ドラゴンを攻撃！！果てな、地獄の果てまで！！ガイア・デストロイド！！！」

瞬間、巨大な腕が宙に現れ、その腕がフラッシュ・ボルテッカー・ドラゴンを握りつぶした。

そして、その腕はグーの形になり、そのままフルの元へと殴りかかった。

「っ、後は頼んだぞ。遊画!!」

フルはフラッシュ・ボルテッカー・ドラゴンのカードを手に取ると、それを地上に向けて投げ捨てた。

「うまく拾ってくれ・・・そして、俺の意思を・・・受け継いでくれ!!」

とまで言い切った刹那、フルのいた場所は、巨大な拳が振り下ろされていった。

ソリットビジョンとは思えない程、その衝撃は巨大な物だった。

周りには砂埃が舞い上がり、その真下の方は、衝撃でビルのガラスが割れたりしていた。

フルはその衝撃に絶えきれずに、そのまま転倒した。

「うああああああああ!!」LP28000」

そして、フルは地上へと投げ出された。

落下している時、自分の体が粒子となっている事に気がついた。

「これが・・・負けた者への罰ゲーム・・・こんな・・・事が」

その横には、自分のD・ホイールが自分と同じスピードで落ちていた。

D・ホイール自体は、この高さから落ちても別に問題は無いが、身の人間はそうはいかないだろう。

そうじゃ無くても、体は消えつつある。

「クソッ・・・やっぱり、俺が止められなかったのは・・・悔い・・・だな」

最後の言葉を呟くと、そのまま体は、消え去った。

＊＊

トトは、カードが落ちる場所まで一時的に向かった。

そして、落ちて来ているカードを確認すると、それを絶妙なタイミングを図り、見事にキヤッチした。

その後、また元の道へと戻っていった。

「……クソッ、勝つと言ったクセに……結局は負けてんじやねーか」

トトは、一筋の涙を零していた。

「幻魔、これが……キサマのやり方だと言うのか。こんな……犠牲のあるデュエルが……キサマの望む事なのか！」

トトの目には、決意が満ちていた。

「……遊画、お前は絶対にこの状況を許せないハズだ！多くの命を弄び、自分の仲間を失わせた。そんな事が許されるハズが無い。だが、俺にはどうする事もできない……いや、違う！！俺には、遊画を救う事しか出来ない。だから……待っている遊画！！」

＊＊ ＊＊ ＊＊ ＊＊ ＊＊ ＊＊ ＊＊ ＊＊ ＊＊ ＊＊

＊＊

「……来たか」

アーカイトの海岸沿い、そこに、見覚えのあるD・ホイールと人影があつた。

船のような形をしたD・ホイールに、ヘルメットの奥には仮面をしている女。

「……ヘル、何故だ。何故お前が……こんな場所に！！」

「五月蠅い、それは俺の自由だ！お前が口出ししても良い事じゃない！」

この様子、一体ヤツから何を聞かされたとも言つんだ？

「……まあいい。お前を倒せるのなら……そんな事は知る

理由もないだろう」

「んだとー!!」

コイツ……何故ここまで余裕なんだ。

「フン、早く始めようじゃないか。どちらかが消えるまで続く戦いを」

ヘルは自分のD・ホイールに跨ると、そのままトトの近くまで走り出した。

「……ここじゃやる気が起きない。別の場所でやるとする」と、トトの目に前に、黒い道が姿を現した。

「こ……これはー!!」

フルの時と同じ……道。

「これこそが、闇の道、ダークロードだ。落ちたら死ぬぞ」

仮面越しにニヤリと笑むと、その道に沿って、走り出した。

「っ、行くしかないのかー!!」

トトも続けて、走り出した。

しばらく走ると、ヘルの近くまで追いついた。

「いつのタイミングでデュエルを始めるつもりだ。そろそろドームギリギリまで上がっているぞ!」

「……言っただろ、こんな閉鎖された空間でデュエルをやるつもりは無いと」

ヘルが呟いた瞬間、目の前に……黒い穴が開いた。

「こ……これはー!!」

その穴はまるで、モンスターが召喚された時に発生する召喚ホールのようなだった。

「ここから通じて、精霊界へと移動する」

「せ……精霊界だとー!!」

ヘルは何のためらいもなく、その中へと突入した。

続いてトトも、覚悟を決めてその中へと突入していった。

「ここから先、何が待ち受けているのか」

正直、不安しか無いだろうな。

だが……これは覚悟を決めるしかない。

遊画を助け出す為に……そして、ヘルを元に戻す為に。

その為にも……絶対に、勝つ。

「勝負だヘル！」

「フン、覚悟を決めたようだな。この空間を抜けた瞬間、デュエルの開始だ！」

面白い、だったら……俺の全力をぶつけてやるぜ！！

そう、トトは決心した。

そして時は、数分前の、精霊界へと戻る。

ここでは、デュエルトーナメントが開催されていた。

精霊界一、誰が強いのかと言うトーナメントが。

「……ついに、決着ね」

緑髪のポニーテールの女性が、そう呟いた。

ここまで勝ち上がって来た。それは私の意思だから。

そして彼女も、ここまで勝ち上がってきているでしょう。

だから、私も全力を尽くす。

そう思い、彼女はデュエルフィールドへと足を運んだ。

そこにいたのは……。

「決着を付けましょうウイン。貴方と私、どちらが強いのかを！」

青いストレートヘアをした少女、エリアである。

「……ええ、ここまで勝ち上がってきたものね。私は」

「私は」

「貴方を倒して、最強になる」

続く

次回予告

『ついに始まった、精霊界王者決勝戦!!どちらが勝つのか!』

「……負けたくない、それが私の意思」

「それは、私も同じですわ」

「……遊画の事を、少しでも忘れてしまいたい」

「それが、私たちの参加理由。王者になれば、遊画を超えられる」

次回、遊 戯 王 F a t e 第33話「風と水、強者を目指して」

「……でも、やっぱり……忘れたくない!!」

次回のキーカード

リチュア・オター・獣族・ATK800・水・2・チューナー

第32話「シンパシーシンクロ」（後書き）

あとがき

・・・地獄を見た気がする。

そんな訳でこんにちは、いつもいつもガスタ、リチュア強化される！！と思いつけている作者、Ragoです。

俺の目の前には、カードケースを両面テープで固定して、ポスターのごとくカードが大量に貼られております。

この前友人に見せたら「カード屋か、ここは！！」と、ツツこまれました。

そんな事はどうでもいいとして、最近あった事をお話しします。

俺「なあ、お前リア充だろ」

友人「何を言う、俺はリア充じゃねーし」

俺「だってさ、お前は男子や女子から期待されたりしているし、運動神経抜群だろ？」

友人「いや、それだけでリア充とかどんだけや。リア充はな、休み時間にベランダでポケモンしないだろ」

まあ、確かにそうやな！

ちなみに、話し方方言なので、少し分かりやすく解釈しました。

・・・ハイ、サーセンwww

そんな事で次回、しばらく空気となっていた霊使いの活躍です。

エリアVSウイン、一体どちらが勝つのか！

勝負の行方は・・・次回にて！！

ほんな訳で、作品に出ているカードはほとんどがオリ力ですが・・・次回もまた、ご期待下さい。

次回に向けて、俺のターン！！

3月9日 自宅にて

第33話「風と水、強者を目指して」(前書き)

ネットで知り合った人や、この小説の読者が心配ですが、それでも小説は続けます。喜びを、再び与えたいので。

第33話「風と水、強者を目指して」

ここは、精霊界にある闘技場。

普段は、モンスター達の特訓場や人気精霊によるライブ場になっている。

しかし今日は、普段とは違う光景を見せていた。

それは……。

『ついに始まった、精霊界王者決勝戦！！どちらが勝つのか、楽しみだ！』

大きな声のアナウンスが辺りに響いた。

そう、今日は精霊界一のデュエル王者を決める大会があっているのだ。

闘技場外では、パフォーマンス用のモンスターが宙を舞い、出店や観客など、まるで人間界と同じような光景がそこにあつた。

「ついに始まりましたね」

そう、メガネを掛けた女性が呟いた。

「ホンマやなアウス、この日の為に2人はよう頑張ったからやな」

その隣にいた赤髪の少女は、膝を組んだ姿勢で競技場を見つめていた。

「ちよつとヒータ、行儀が悪いですよ！！」

アウスは速急にヒータの姿勢を戻させようと必死だった。

「あつはははは、相変わらずエセ関西人はマナーと言う物も知らないだね」

「ライナ、ウチの杖から火が吹く前に、その言葉やめてもらえまへんか？」

気がつくくと、ヒータはいつの間にか立ち上がり、恐ろしい目つきでライナを睨みながら、杖をライナの頬に突きつけていた。

「あはは、冗談だよ冗談。3分の1冗談だよ」

「残り3分の2は本気と言う意味やないか!!」

ヒータは叫んだ。

「……………」

すると、周りの人たちはそれを冷たい視線で見ている。

「……………ハイ、スイマセン」

ヒータは周りに謝ると、再びイスに腰を下ろした。

「……………ヒータ、静かに」

「ほんくらい分かってるわ!!ダルク」

ヒータが再び騒ぎ出したが、ダルクはそれを気にせず再び闘技場へと視線を戻した。

あの2人が戦うとは……………以外に見物だな。

そう思うと、何だか笑えてくるな。

ダルクはフツと笑みを見せた。

闘技場、王女席

闘技場の上の方には、普段は立入禁止区域に指定されている場所があった。

そこに、2人の人影があった。

1人は紫色の髪色に、スラリとした生足を見せ、巨大な胸の前で腕を組んでいる女性、名をエレナと言う。

そしてもう1人は、藍色のツインテールに、首には赤い宝石を填めた首輪をしており、少し幼い顔つきをしている少女、スクルドである。

「始まったわね」

スクルドが言うと、エレナはすぐに反応した。

「だな。まさか彼女たちがここまで勝ち上がってくるとは……………何か仕組んでいないか？スクルド姫」

スクルドはそれを聞くと、フフツツと笑った。

「まさか、私はそんな事をするようなマネはしませんよ。少なくとも

も、真面目に頑張ってきた方たちにはね」

エレナは、静かに視線を元に戻した。

「ウイン、エリア……お前らの全力、見せて貰うぞ!!」

世界は、闇があるから光がある。

そしてそれは、決闘でも一緒の事だ。

伝説となった決闘者、そのほとんどが……光を持って、闇を持つ。

その2つの存在が分裂した時、2つは争う関係となる。

そう、ジャステイスと、ダークの関係となり。

第33話「風と水、強者を目指して」

『さて、これで決勝戦だ!! 一体誰が、栄光を掴み取るのか! まずは選手の入場だ!』

選手入場用のゲートから、1人の女性が姿を現した。

『最強の儀式使い。相手の手札とフィールドをギタギタにして勝ち上がってきた、エリア・ルイマリン選手!!』

会場からは、歓声の聲が上がった。

『続いて、深き森のガスタ使い。破壊されても破壊されても復活するその姿は、もはやエンドレスと言える戦術で相手を圧倒してきた、ウイン・ダ・アーケインライラ選手です!』

再び、歓声の聲が上がった。

「……ついに、決着ね」

緑髪のポニーテールの女性が、そう呟いた。

ここまで勝ち上がって来た。それは私の意思だから。

そして彼女も、ここまで勝ち上がってきているでしょう。

だから、私も全力を尽くす。

そう思い、彼女はデュエルフィールドへと足を運んだ。

そこにいたのは……。

「決着を付けましょうウイン。貴方と私、どちらが強いのかを!!」
青いストリートヘアーをした少女、エリアである。

「…………ええ、ここまで勝ち上がってきたものね。私は」
「私は」

「貴方を倒して、最強になる」

『それでは、決勝戦。スタンディングデュエルの開始だ!!』
『お互いに、デュエルディスクを展開されると、声を揃えた。』

「デュエル!!」
「Wynn VS Eria LP4000」
先行は、ウインのターンからだった。

「……私のターン、私は手札からガスタの巫女ウインダを守備表示で召喚。ガスタの巫女ウインダ・サイキック族・DEF1000・風・2・効果。カードを1枚伏せてターンエンド」

最初のターンは、守りを固めるつもりでしょうね。

そう、エリアは考えた。

「だったら、私は行かせてもらいますですね。私のターン!!」
エリアは引いたカードを見ると、急に真剣な眼差しになった。

「私は魔法カード、儀式の前触れを発動。手札の儀式力魔法を墓地へ送り、デッキからカードを2枚ドローするのです!!」
「儀式の前触れ・魔法・効果、手札の儀式魔法1枚を墓地へ送り発動する。デッキからカードを2枚ドローする」
「それにより、手札に存在するリチュアの儀式鏡を墓地へ送り、カードを2枚ドロー!!」

「自分のキーカードでもある儀式カードを……何かありますね」
「ダルクは今の状況に、興味を示した。」

エリアは、手札のカードを華麗に手に取り、デュエルディスクに召喚した。

「私はリチュア・チェインを攻撃表示で召喚!」
「リチュア・チェイン・海竜族・ATK1800・水・4・効果」
「このモンスターの効果により召喚に成功した時、デッキから3枚をめくる」

エリアはデッキからカードを3枚引いた。

「その中に存在する儀式モンスター、または儀式魔法を手札に加え

る事ができる。私はイビリチュア・ソウルオーガを手札に加える！」
ウインは、そのカードにちよつとした危機感を察知した。

あのカードは・・・私の脅威になるカード。

戦闘で破壊しない効果は、私にとって厄介になるだけ。

「そして残りはデッキに・・・と、言いたい所ですが、もう1つ効果を発動するのですわ！！」

え、このタイミングで！？

「カードをめくる効果、または確認する効果によりカードを確認、またはめくったカードの中に、このリチュア・オターが存在した場合、デッキからこのカードを特殊召喚できる！！」

デ・・・デッキから直接特殊召喚！？

「現れなさい、チューナーモンスター。リチュア・オター！！」
「リチュア・オター・獣族・ATK800・水・2・チューナー」
チューナー！！

エリアの目の前に、川獺の形をしたモンスターが元気よく出てきた。

「まさか、貴方も・・・シンクロを！！」

「悪い？私がシンクロを使って悪いのですの？」

っ・・・迂闊だった。

まさか相手が・・・シンクロを使うなんて。

「残りの1枚をデッキへと戻す。さて、これで準備が整いましたですの」

来る！

「レベル4のリチュア・チェインにレベル2のリチュア・オターを
チューニング！！ 4 + 2 = 6」

リチュア・オターの口が開き、その中から2つの星が吐き出された。そして、その2つの星はチューニングリングとなって、リチュア・チェインを囲んだ。

「全てを儀式に捧げし時、儀水鏡より新たなる邪心が生まれる！全てを捧げよ！」

囲まれたリチュア・チェインが星になり、チューニングリングと共に

に光り出した。

「シンクロ召喚！儀水鏡の僕、イビリチュア・オターキメラ！！」
エリアの目の前に、1体のモンスターが降り立った。

川瀬の顔に、河童のような体つき。

これこそ、キメラの名前にふさわしい体型をしていた。

『ティアツ！！イビリチュア・オターキメラ・水族・ATK23
00・水・6・シンクロ、効果』

『おーっと、早速シンクロ召喚に成功した！！これから一体、どんな戦術が見せられるのか？』

攻撃力はレベル6にしては低い。

そうになると、何かイヤな予感がする。

「イビリチュア・オターキメラの効果により、このモンスターがシンクロ召喚に成功した時、自分の墓地に存在する儀式魔法をこのカードに、装備カード扱いとして装備する事ができるのですわ」

エリアは、墓地からリチュアの儀水鏡を取り出すと、それを魔法、罨ゾーンに差し込んだ。

「・・・何をやるつもりなの？」

ウインは不思議そうに思ったが、それをすぐに知る事となった。

「そして更に、イビリチュア・オターキメラの効果発動！1ターンに1度、装備された儀式魔法の効果を、発動できるのです！！」

「・・・！！」

手札にはソウルオーガ・・・まさか、これを狙って！

「発動せよ、リチュアの儀水鏡！イリチュアの儀水鏡・儀式魔法・効果、「リチュア」と名のついた儀式モンスターの降臨に必要。手札、自分のフィールド上から、儀式召喚するモンスターと同じレベルになるようにモンスターをリリースしなければならぬ。また、墓地に存在するこのカードをデッキへ戻す事で、自分の墓地に存在する「リチュア」と名のついた儀式モンスター1体を選択して手札に戻す」私は手札のシャドウ・リチュアの効果により、このモンスター1体でリリースを賄える」

シャドウ・リチュアのカードから、魚の形をしたモンスター現れ、それが儀水鏡の上に立った。

その瞬間、儀水鏡が光り出し、1体のモンスターがその場に現れた。「現れなさい、イビリチュア・ソウルオーガ！」

シャドウ・リチュアの形をしているが、それが巨大化し、たくましい姿となっていた。

『グオオオオオオオオオオオオ！！イビリチュア・ソウルオーガ・水族・ATK2800・水・8・儀式、効果』

クツ、たった1ターンで、2体の上級モンスターを……。流石はエリアつて所。

「イビリチュア・ソウルオーガの効果発動。手札のリチュア1体を墓地へ送る事により、相手フィールド上に存在するモンスター1体をデッキへ戻す」

「っ！！」

「手札のリチュア・エリアルを墓地へ送り効果発動！クライン・サンクチュアリ！！」

ソウルオーガがウインダの目の前に現れると、ウインダを荒々しく掴み、ウインに向かって投げ飛ばした。

『クギュー！！』

「……？」

次の瞬間

ゴッーン

そんな鈍い音と立て、ウインダとウインと衝突した。

ウインダの方は、光になり、消え去った。

「……痛い」

ウインはでこを押さえながら、何とか体制を立て直した。

『おおっと！まさかのフィールドがから空きだ！このまま攻撃を許してしまうのか！？』

「どう、ウイン？これが、私の実力ですわ」

「……その瞬間、畏発動！ガスタの増援！相手によってガスタ

と名の付くモンスターがフィールドを離れた場合、デッキからそのモンスターのレベル以下のガスタ2体を特殊召喚できる！
「ガスタ」の増援・畏・効果、相手によって自分フィールド上に表側表示で存在する「ガスタ」と名の付くモンスターがフィールド上に表側表示で存在に発動する事ができる。自分のデッキから、フィールドから離れたレベル以下の「ガスタ」と名の付くモンスター2体を表側攻撃表示で特殊召喚する。この効果で特殊召喚に成功したモンスターが攻撃された時、その時に受ける戦闘ダメージは相手も受ける。それにより、デッキより現れよ。ガスタ・イグル、そしてガスタ・スクレイ
「ガスタ・イグル・鳥獣族・ATK200・風・1・チューナー」
「ガスタ・スクレイ・雷族・ATK0・風・2・チューナー」
小型の鳥と、電気を灯したりスが現れた。

「ここで危機一髪、フィールドのから空きを防いだ！！」

「やつぱり、一筋縄じゃいかないようですわね」

「・・・負けたくない、それが私の意思」

「それは、私も同じですわ」

2人は、じつと相手を見つめていた。

「・・・遊画の事を、少しでも忘れてしまいたい」

「・・・やつぱりですわね。それが、私たちの参加理由。王者になれば、遊画を超えられる」

そう、今回2人が参加した理由、それは・・・遊画を超える為だった。

アレだけの事があれば、誰だってその人を忘れなくなる。

だからこそ、2人は勝ち上がってきた。

大切だった人を、超えるために。そして、忘れるために。

「・・・あの時、私は大いに傷ついた。どうすればいいのか、そして、何を信じればいいのか」

「私も悩んだ。いつまでも、いつまでも。そんな時に、この町の王女が交代し、このデュエル大会の開催を宣言した」

「この大会は、精霊界一のデュエリストを決める大会であり、優勝

者には王者の称号と、莫大な財産が与えられる」

「・・・ネオ童実野シティで行われたデュエル・オブ・フォーチ
ユンカップの精霊界バージョンとも言えるこの大会。私は・・・い
や、貴方も思ったハズ」

「・・・そうね」

「「遊画を超えれば、忘れられるハズだと」」

王者になれば、相当なデュエル界の権力となる。

かつて、ジャック・アトラスはキングとなり、大いなる力を得たと
言う。

それが本当なら、私たちは自らの意思でそれに挑み、力を得たい。

そう、考えたのだ。

「・・・私は、すぐにでも忘れない。だから、こうやって勝ち上
がってきた!!」

「それは私も同じですわ。だから、勝たせてもらおうですわ!」

エリアは、ウインに向けて指を差すと、すぐに行動を開始した。

「バトル!!イビリチュア・ソウルオーガで、ガスタ・スクレイを
攻撃!!一気にダメージは与えるのです!!」

ソウルオーガの手から、水の弾が発生し、それをガスタ・スクレイ
に向けて放った。

「アクア・キャノン!!」

水の弾を喰らったスクレイは、その衝撃に飲み込まれ、爆発と共に
散った。

「クツ!!」HP4000 1200

するとその瞬間、爆発地から風が発生した。

「な・・・何事ですの!!」

風は、破壊されたスクレイとなり、エリアの元へと体当たりをした。

「クレーイ!!」

「が・・・」HP4000 1200

エリアは状況が把握出来なかった。

何故・・・私にもダメージが。

「……ガスタの援軍の効果により、この効果で特殊召喚されたガスタを通じて発生する戦闘ダメージは、相手も受ける」

「っ！！このまま攻撃しても、ただ相打ちになるだけ」

まさか……これを狙って。

「カードを2枚伏せてターンエンド！！」

まさか、ウインがここまでやるなんて。決勝戦まで勝ち上がってきた腕はあるようですね。

「……私のターン、ガスタの静寂カームを攻撃表示で召喚ハガスタの静寂カーム・サイキック族・ATK1700・風・4・効果として、レベル4のガスタの静寂カームと、レベル1のガスタ・イグルをチューニング！ 4 + 1 = 5」

イグルが透明になり、その中から星が現れ、チューニングリングを形成し、その中にカームが入り込んだ。

「響け、邪心に捕らわれし友を救うため、舞い降りろ！シンクロ召喚！羽ばたけ、ダイガスタ・ガルドス！！」
「ダイガスタ・ガルドス……」
「サイキック族・ATK2200・風・5・シンクロ、効果」
「ダイガスタ・ガルドス！！このモンスターの効果は！」

「ダイガスタ・ガルドスの効果発動！1ターンに1度、自分の墓地に存在するガスタを2体デッキへ戻す事により、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を破壊する！！」

「っ！！」

「ガスト・シヨック！！」

ガルドスの上にいるウインダが立ち上がり、何かの呪文を唱えた。すると、ソウルオーガ周辺に強風が発生し、竜巻が舞い上がった。

「っ……ウソでしょう！！」

竜巻はその後、風を弱めて消え去ったが、竜巻は発生した場所に、ソウルオーガは存在しなかった。

「……でも、攻撃力はこっちの方が上ですわよ」

「……それは、言わなくても分かっている。手札から速攻魔法カード、ガスタの救済を発動。デッキからカードを4枚確認し、そ

の中に存在するガスタと名の付くモンスターを全て墓地へ送り、墓地へ送ったモンスターの数×300ポイントアップする。ガスタの救済・速攻魔法・効果、自分フィールド上に存在する「ガスタ」と名の付くモンスター1体を選択する。デッキの上からからカードを4枚確認し、その中に存在する「ガスタ」と名の付くモンスターを全て墓地へ送り効果を発動する。このターンの終了時まで、選択したモンスターはこのカードの効果により墓地へ送られた「ガスタ」と名の付くモンスター1体につき攻撃力を300ポイントアップする。その後、残りのカードは全てデッキへ戻す。デッキからカードを4枚をめくる」

ウインはデッキの上からカードを4枚取り出すと、その中身をエリアに見せた。

「……前から、ガスタ・ガルド、ガスタ・イグル、ガスタの静寂カーム。そして、念動収集機」

な……モンスターが3体!!

「これにより、攻撃力は900ポイントアップ!」ガスタ・ガルドス・ATK2200 3100」

こ……これで、全てモンスターだったら……。

そう考えただけで、ゾツとするですわ。

「バトル!ガスタ・ガルドスで、イビリチュア・オターキメラに攻撃!ミディエム・サイキック!!」

上に乗っているウインダが再び立ち上がり、上に向かって杖を振り上げると、そこからビーム状の柱が発生し、それをエリアに向かって振り下ろした。

振り下ろされた場所は、砂埃が舞い、しばらくは視界が見えない状態になった。

「きゃあああああ!!」LP1200 400」

残り400、もう1体いた場合……100。

……でも、相手も残り1200、まだチャンスは残っている。

それに……まだ負ける状況には無い!!

エリアの顔に、焦りの顔など無かった。
視界が晴れてくると、ウインは目を疑った。

「……！！そ、そんな」

エリアの場には、シンクロ素材となって墓地へ送られたモンスター一組が、蘇っていた。

「イビリチュア・オターキメラの効果により、このモンスターが相手によって破壊され墓地へ送られた場合、その素材となった一組を墓地から特殊召喚する。ただし、この効果で特殊召喚されているモンスターは、儀式の為にしかリリースできない」

……厄介だ。

ウインの頭に、その文字が浮かんだ。

するとエリアは、それを読み取ったかのように、鼻を鳴らした。

「やっぱり、私も負けてられませんからですわね。恐らく、次がラストターンですわ！」

それは、百も承知。

「私はカードを3枚伏せてターンエンド。そして、攻撃力も元に戻る。ハガスタ・ガルドス・ATK3100 2200」

伏せたカードに、未来を託す！

「行くですわ！！私のターン！」

……来た！

「手札から儀式の準備を発動！自分のデッキからレベル7以下の儀式モンスター1体を手札に加える。そして、墓地から儀式魔法カードを1枚手札に加える！ハ儀式の準備・魔法・効果、自分のデッキからレベル7以下の儀式モンスター1体を手札に加える。その後、自分の墓地から儀式魔法カード1枚を手札に加える事ができる」それにより、デッキからイビリチュア・マインドオーガス、そして墓地からリチュアの儀式水鏡を手札に加える！」

デッキがシャッフルされ、1枚のカードが取り出された。その後、墓地からも1枚のカードが取り出された。

「そして発動せよ、リチュアの儀式水鏡！」

リチュア・チェインとリチュア・オターの真下に儀水鏡が現れ、その2体が光に包まれた。

そして、その中から1体のモンスターが現れた。

下半身が魚で、上半身がまるで何かに取り憑かれたかのような顔をした、エリアルルの姿が。

「現れなさい、イビリチュア・マインドオーガス！　ハイビリチュア・マインドオーガス・水族・ATK2500・水・6・儀式、効果」

「はあっ！　！」

上の方のエリアルルが、ウインに向けて杖を突きつけた。

「ちなみに、リチュア・オターをリリースして儀式召喚されたモンスターはカード効果では破壊されませんの」

「……！！」

「だから、何をしようと無駄な事ですわ！　イビリチュア・マインドオーガスの効果発動！　このモンスターの儀式召喚時、お互いの墓地に存在するカードを5枚までデッキへ戻す！　ウイン、貴方の墓地の全てのガスタをデッキへ戻させて貰いますわ！」

イビリチュア・マインドオーガスの杖の先から、黒い何かが発生し、それがウインのデュエルディスクに向けて侵食しようとした……瞬間だった。

「やっぱり、墓地を戻す効果を狙っていた。でも、それは読み切っていた事！　畏発動、ガスタの意地。自分の墓地に存在するガスタと名の付く全てのモンスターをデッキへ戻す事により、自分フィールド上に存在するガスタと名の付くモンスター1体の攻撃力を、1体につき200ポイントアップさせるハガスタの意地・畏・効果、自分の墓地に存在する「ガスタ」と名の付くモンスターを全てデッキへ戻し効果を発動する。この効果によりデッキへ戻したモンスター1体につき、攻撃力を200ポイントアップさせる。私の墓地に眠るガスタは4体。よって、攻撃力は800ポイントアップし、3000になる！　ハガスタ・ガルドス・ATK2200　3000」

「クツ、リリースエスケープの一種を利用したですわね」

その時、ウインは急に下を向いた。

「……ダメ、やっぱり」

頬に一筋の涙が流れていた。

「ど……どうしたの！ウイン」

「……私は、遊画を忘れる為に、ここまで勝ち上がってきた」

ウイン……？

「……でも、やっぱり……忘れたくない……」

その叫び声に、会場は沈黙に包まれた。

「ウ……イン？」

「……やっぱり、忘れたくない。あの時の思い出、そしてあの時の笑顔。そして……あの時の熱いデュエル。何もかも、このデュエルを通じて、感じる物がある！それは、お互いに負けたくないと言う、闘争心。そして、最初に遊画とデュエルをした時に感じた……あの感触……」

「……でも、貴方は忘れたいと」

「エリア、貴方も同じでしょう！記憶を失った遊画を、私たちは認めようとしなかった。そして、遊画の本心を認めなくなかった！今考えたら、私たちも、十分に悪いに決まっている」

「……」

エリアも、俯いた姿勢になっていた。

「ウイン……」

アウス達も、その意見に賛同しかなかった。

「何で……あの男に一体何があると言うのよ……！ついさっきまで一生懸命忘れたいと思っていたのに。それなのに、今度は忘れたくない……」

スクルドは、その光景に忌ましめていた。

「そんなヤツが、光栄遊画だ」

その反面、エレナは満足そうに、王女席から見ていた。

「エレナ・・・貴方は知っていたのね。最初から、あの2人が勝ち上がり、遊画の信頼を、また復活させる事を!!」

「さて、何の事だか？私はただ、似た者同士戦う事により、お互いの本音確かめられると思ってやっただけだが？」

「っ!!貴方が発案した時点でおかしいと思うべきだったっ!!」

「それに、ちよつとした薬になると思ってたな」

「一体何の薬に・・・そう言おうとしたが、すぐにその正体に気がついた。」

「・・・まさか、私の」

「フツ、さあな。アンタが考えたように、考える程、私は賢くはない」

「私を神と知つての行いをしているの？」

「・・・スクルド姫、アンタは間違いを犯している」

「ま、間違いですって!!」

スクルドは、エレナに対して、少し戸惑いを見せていた。

「そう、絆と言うのは、切っても切っても、また復活するような物。例え誰かが手を加えて再生出来なくなっても、別の場所でまた、繋がる」

「・・・」

スクルドは、黙り込んだ。

「さて、このデュエルもどうなる事やら」

「ヤレヤレと、肩をすくめていた。」

会場の沈黙も、すでに収まっていた。

「・・・そうね、私は自分を正当化しすぎていた。アレが遊画の本音なのなら、それを解消すると言う手だてを思いつかなかった自分に今度は腹立たしくなつたのです!!」

再び、エリアとウインの顔に活気付いた。

「勝負ですわウイン!手札から速攻魔法、リチュアの絆!自分フィールド上に存在するリチュア1体の攻撃力を、自分の墓地に存在す

るリチュアと名の付くモンスター1体につき200ポイントアップさせる！「ハリチュアの絆・速攻魔法・効果、自分フィールド上に存在する「リチュア」と名の付くモンスター1体の攻撃力を、このタインのエンドフェイズ時まで、自分の墓地に存在する「リチュア」と名の付くモンスター1体につき200ポイントアップする。また、このカードは墓地に存在する場合、自分の墓地に存在する「リチュア」と名の付く儀式モンスター1体をデッキへ戻す事により、手札に戻す事ができる」私の墓地に存在するリチュアは6体！よって、攻撃力は3700になる！「イビリチュア・マインドオーガス・ATK2500 3700」

『おおつと、これは大幅に攻撃力が上昇した！』
エリアに迷いは無かった。

このまま攻撃をして、ウインを倒すのみ！！

「バトル！イビリチュア・マインドオーガスで、ダイガスタ・ガルドスを攻撃！これが、私の全力ですわ！！リチュア・ミラーマジック」

イビリチュア・マインドオーガスの儀水鏡から魔術が唱えられ、そこから巨大な水の柱が発生し、その柱を振り下ろした。もはや、ガルドスを守る物は何もない。

このまま攻撃が通るのか、そんなざわめきが囁かれた。だが、このまま終わる、ウインでは無かった。

「再び速攻魔法発動！ガスタの解放！相手が自分フィールド上に存在するガスタと名の付くシンクロモンスターと戦闘を行った時、そのシンクロモンスターの攻撃力を倍にする！！「ガスタの解放・速攻魔法・効果、自分フィールド上に表側攻撃表示で存在する「ガスタ」と名の付くシンクロモンスターが戦闘を行う時、そのモンスターの攻撃力をバトルフェイズ終了時まで倍にする」これにより、攻撃力は倍の6000になる！「ダイガスタ・ガルドス・ATK3000 6000」

「甘いですわ！！私も伏せていた速攻魔法発動！リチュアの封印解

除！自分フィールド上に存在するリチュアと名の付く儀式モンスター
ーが戦闘を行う時、その攻撃力を倍にする！
「リチュアの封印解除・速攻魔法・効果、自分フィールド上に表側攻撃表示で存在する「リチュア」と名の付く儀式モンスターが戦闘を行う時、そのモンスターの攻撃力をバトルフェイズ終了時まで倍にする」
それにより、攻撃力を倍の7400にする
「ハイビリチュア・マインドオーガス・ATK3400 7400」
お互いに、似たようなカードを同時に発動した。
この時、両者の思う事は一致していた。

「……このまま戦闘を行っても、結果は私の負け。それだけは避けたい。それなら！！」

「ウインの事ですから、何か隠している可能性があるですわ。そうになると、ちよつと危険かもしれないのですわ。それなら……」

「「罨発動！オーバー・ゼロ！」」

そして両者は、全く同じカードを発動した。

すると、お互いのモンスターはお互いをすり抜けて、プレイヤーへと攻撃を行った。

「つ……！！そ……そんな！
「LP1200 0」

「引き分け……って事ですね！
「LP400 0」
会場はざわめいた。

「オーバー・ゼロの効果は、相手モンスターの攻撃力が変化した数値だけ、その攻撃力を下げ、その戦闘による戦闘ダメージは0になる。だが、そのバトルの終了時に、攻撃を行ったモンスターの攻撃力分だけ相手にダメージを与える効果がある
「オーバー・ゼロ・罨・効果、相手フィールド上に存在する攻撃力がアップしたモンスター1体を選択して発動する。そのモンスターの攻撃力をこのターンの終了時まで、アップした数値分ダウンさせる。また、選択したモンスターと戦闘を行う場合、発生する戦闘ダメージは0となり、バトルステップ終了時に、戦闘を行った自分のモンスターの元々の攻撃

力分のダメージを相手に与える。この効果を発動したターン、自分は1度しか攻撃を行えない」

エレナの親切な説明である。

「そ．．．そんな事って！．．．これが、絆なの？」

スクルドも、啞然としていた。

「やはり、似た者同士は仲が良いと言う事か」

「す．．．．．凄いな」

ダルクも今回ばかりは、驚きを隠せなかった。

「流石はあの2人と言う事ですね。胸が熱くなりました」

「化け物か！あの2人は化け物ちゃうか！？」

「ヤバイね、今回だけは何も言えない」

残りの3人も、今回のデュエルに見入っていたらしい。

「はあ．．．．．はあ．．．．．」

「この腕は．．．認めざるが負えないって事ですわね」
恐らく、今回のような事は初めてだ。

決勝戦で、引き分けの結果が出るのは。

「．．．．．さ、サイコーだったぞ！！」

「僕たちに、熱いデュエルをありがとう！！」

会場中から、盛大な拍手が起こった。

「．．．．．でも、悔しくはない」

「そうですわね。これが、正々堂々の対決だったですから。また、戦いましょうウイン。次戦う時は、必ず勝ってみせるですわ！」

「．．．．．それは、こっちも同じ」

お互いに優しい笑みを見せ合い、手と手をしっかりと握りしめた。だが、そんな裕福な時も、ここまでだった。

突然、辺りの空間が薄暗くなった。

「な．．．．．！！」

「何が起きているのですのー！！」

闘技場上空

ここに、巨大なホールが開いた。

するとその中から、2台のD・ホイールが姿を現した。

出てきた先には、地上近くまで繋がっている黒い道が敷かれていた。

そして、同時に……アーカイトを賭けたデュエルが、開始された。

「来い、キサマを倒して、ノルンを俺の物にする！」

「ヘル、このデュエルで……お前を救い出す!!」

「デュエル!!」

続く

次回予告

「何が原因なんだ！一体……」

「黙れ！俺は……お前をぶっ潰さなければ気が済まない!!」

「ヘル……俺は何を言っても、伝わらないのかよ!？」

次回、遊戯王Fate 第34話「愛する者が故に」

「トト!! 貴方は……諦めるのですか？大切な人なら……やる事は1つでしょう!!」

次回のキーカード

ジャスティスひびき隊シヤン
JM - 歪のテイラ・魔法使い族・ATK1000・水・3・効果

第33話「風と水、強者を目指して」（後書き）

あとがき

本当に、大災害でしたね。

今回の東北地方太平洋沖地震により、多くの死者と行方不明者を出したあの地震。

僕は住まいが九州なので、被害はありませんでしたが、テレビを見た時には、胸が痛くなりました。

流されていく家、車、そして・・・見えない場所で流される人。

地震自体は、建物の耐震があつたにも関わらず、津波のせいで全てが流された。

そこで生き残った人たちは、この絶望の中で、どう生きるのか。考えただけで、気持ちが悪くなります。

ですが、今の状況を乗り切って、希望を持ちましょう！

僕はまだ高校生なので、募金しかしてやれる事はありませんが、それでも、少しでも被災者に希望を与え続けたいです。

人は、希望を捨てない限り、生きようと努力します。

なので、希望を捨てず、明るい未来を切り開いていきましょうじゃないですか。

人生は何が起きてもおかしくない。

それで、どんな絶望があつたとしても、希望を持ちましょう。

最初は弱音を吐いたっていい。でも、そこから立ち直って、明日を生きて下さい。

そして、再びデュエルや小説などで、喜びを取り戻して下さい。

今、僕が言える事はこれぐらいですが、皆さんも、希望を持って、明日を生きて下さい。

それでは次回、皆さんを楽しませる展開を、用意させていただきま
す。

次回も、未来に向けて、走り出せ！！

3月14日 自筆にて

第34話「愛する者が故に」(前書き)

エクシーズ召喚、何だかシンクロと同じようにエクシーズが世界を滅ぼした的な展開になりそうだと思うこの頃。

第34話「愛する者が故に」

「一体何が起きている!?!」

闘技場は、慌ただしい光景に包まれていた。

「分かりません。急に周りの空間が薄暗くなり、そしてこの上空に、謎のホールが開きました!?!」

「謎のホールだと!」

スクルドとエレナは、すぐさま上を向いた。

そこには、黒い道みたいな物が、目で辿ると分かるが地上に向けて敷かれており、それはまるで・・・

「死者が辿る道みたいなのに、禍々しい道だ」
エレナは呟いた。

だが、スクルドは違った。

「あ・・・アレは・・・闇の道、ダークロード!」

その言葉に、エレナはすぐにスクルドに問いつめた。

「闇の道、ダークロード!それは何だ一体!」

スクルドは口を閉じていたが、しばらくして口を開いた。

「・・・あの道は、冥界を繋げる道。そして、冥界と地上界を繋ぐ儀式に用いられる、闇の力を宿したコース」

「・・・冥界を繋げる、道」

すると、王女席の方に、1人の女性が寄ってきた。

「スクルド姫!異次元の偵察機を配置しました。今すぐにでもその様子を確認出来ます!」

「・・・分かったわ。闘技場中央に映して頂戴」

闘技場中央に!!

「スクルド姫、それじゃここにいる全員に知られる事に!」

「それでもいい!恐らく上で行われているデュエルは・・・私たちが想像している以上にとんでもないデュエルだと思うから。それに、会場の人たちは、パフォーマンズだと思うだろうし」

「分かりました。それでは、会場中央に、大型モニターを展開させます」

「お・・・オイ待て!!!」

エレナの意見を無視して、その女性はすぐさま身を引いた。しばらくすると、闘技場リングの中央に巨大なモニターが映し出された。

このモニターは、現実世界のソリットビジョンシステムを参考に精霊界に適したシステムで作りに出された立体映像で、場所を問わずに映し出す事の出来るモニターである。

そこに、2台のD・ホイールが走っている映像と、その2台の情報が半面ずつに映し出されていた。

そこに映し出されていた情報に、2人は・・・いや、観客席の4人とモニターの目の前にいる2人を含めて、目を丸くした。

T o t o ・ S p c o ・ L P 4 0 0 0

H e r ・ S p c o ・ L P 4 0 0 0

そこには、表示されるハズのない名前が、表示されていた。

「トト・モーラン。何故お前が・・・この時代に」

エレナは、少し前の、遊画の言葉を思い出した。

「マイナスな事じゃない、これは現実だ。あの時だって・・・俺は海佐を守れなかった。それどころか、その記憶をトト・モーランが勝手に封じ込めた。だがな、俺は思いだして後悔したんだよ、何で俺が生まれたのか、そして何故、神のなり損ないとか言われているのか・・・そんな俺の苦しみ、お前に分かるか」

まさか、その話が本当だとは。

「だったら、何故今再び・・・」

しかし、そのぼやきは、隣のスクルドによってかき消された。

「あ・・・あの人は・・・何・・・で」

スクルドは、肩を震わせていた。

「どうした！スクルド姫！！」

「ヘル・・・貴方が、どうしてトトと戦っているのよ！！」
この声は、叫びと言うよりは、嘆きに聞こえた。

世界は、闇があるから光がある。

そしてそれは、決闘でも一緒の事だ。

伝説となった決闘者、そのほとんどが・・・光を持って、闇を持つ。

その2つの存在が分裂した時、2つは争う関係となる。

そう、ジャステイスと、ダークの関係となり。

第34話「愛する者が故に」

「デュエル！！」トト VS Her LP4000

先行は、トトのターンからであった。

「俺のターン！手札からジャステイスマジシャン・歪のテイラを攻

撃表示で召喚！ジャステイスの仲間JM・歪のテイラ・魔法使い族・ATK1000・

水・3・効果」

勢いよく、1人の子どもがフィールドに飛び出してきた。

「はあっ！！」

「カードを2枚伏せてターンエンド」

D・ホイールの隣に2枚のカードが現れ、姿を消した。

相手は恐らく、再びあの戦術をするハズだ！

「俺のターン！」

Toto・Spcl・LP4000

Her・Spcl・LP4000

「その瞬間、歪のテイラの効果発動！相手ターンのスタンバイフェイズ時に、フィールド上に存在するこのモンスターをゲームから除外する！」

子どもの魔術師は、自分に対して魔法を唱えると、姿を消した。

「これにより除外した場合、エンドフェイズ時にフィールドに戻り、このターンに1度だけ戦闘によるダメージを半分にする！」

モニターの前で、エリアとウインは見取られていた。

「何故なの！？フィールドに残した方が、戦闘ダメージを免れるはずなのに」

「いや、アレで上級モンスターの特殊召喚は免れる！」

そんな声が聞こえた。

その声の主は、誰であろうダルクだった。

「アレで、バイス・ドラゴンやサイバー・ドラゴンのようなモンスターの特殊召喚はできないハズだ。それを狙った戦術だろ」

「でもや、相手がモンスターの特殊召喚でトトに大ダメージを与えたとしたらどうするのや！」

「その為の伏せカードですよ」

「そうだね、もしもそのまま攻撃して普通にダメージを与えさせるヤツがいたら、それはただのバカだからね」

上の連中は、暢気に観賞していた。

「これで、ダークマジシャン・悪意のジレンマは特殊召喚できない！」

「……つぶ」

わ……笑っている！まさか、封じていないとでも言うのか！？
「これで、俺の戦術を封じたとも思っているのか！舐められた物だな。手札からダークマジシャン・反逆のツレチエリを特殊召喚！このモンスターは相手フィールド上にモンスターが存在しない場合、相手フィールド上に特殊召喚できる！」

「んなー！」

トトのD・ホイール前に、老婆が現れた。

『クツヒヒイヒヒ（ダークマジシャン）DM反逆のツレチエリ・魔法使い族・ATK2

000・闇・6・効果』

「そして、相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にカードが存在しない場合、手札からダークマジシャン・悪意のジレンマを特殊召喚する！」

ヘルは手札ホルダーから1枚のカードを手に取ると、それを召喚した。

『ダークマジシャンDM・悪意のジレンマ・魔法使い族・ATK3000・闇・1・効果』

悪魔の姿をした魔術師が、フィールド上に姿を見せた。

「……!!」

「そんな……」

「レベル1で、攻撃力3000やて!!」

「こんなモンスターアリですか!？」

「何と言う恐ろしいモンスターだ!」

「あはははは、もう笑うしかないね。チートも程々にだね」

あの6人でさえも、こんな感じた。

「オイ、ウソだろ」

「召喚条件軽すぎだろ」

「何様だよ、アイツ!!」

会場内は、もつと囁かれていた。

「早速かよ……これはマジでやめてくれ」

「何と言おうとも、この現実からは逃れられない!バトル、ダークマジシャン・悪意のジレンマで反逆のツレチエリを攻撃!裏切り者には死、あるのみ!ダーク・ガン!!」

悪意のジレンマから、巨大な漆黒の弾が撃たれ、反逆のツレチエリを貫いた。

「ぐあつ!!」LP4000 3500

危うくバランスを崩しそうになったが、何とか体制を立て直した。

「チッ、テイラの効果により戦闘ダメージは半分か。だが、反逆の

ツレチエリが破壊された時、俺はデッキからカードを1枚ドロウする。そしてカードを2枚伏せてターンエンド」

「この瞬間、除外された歪のテイラはフィールドに舞い戻る」

姿を消した魔術師が、元気いっぱいフィールドに姿を現した。

『テイア!!』

「今更何ができる。そんな雑魚に」

「違う!テイラは・・・雑魚なんかじゃない!!それを今から証明してやるぜ!」

「面白い、その言葉に偽りが無い事を見せて貰おう」

ヘル・・・お前は今、お前じゃないんだな。

「俺のターン!」

T o t o ・ S p c 2 ・ L P 3 5 0 0

H e r ・ S p c 2 ・ L P 4 0 0 0

「チューナーモンスター、ジャステイスマジシャン - 民のセイジュを攻撃表示で召喚!」ジャステイスマジシャン

3 0 0 ・ 光 ・ 3 ・ チューナー」

そしてトトは、手札のエンジェル・バトンを見て考えた。

・・・賭けるしかないか。

「そして、手札からスピードスペル、エンジェル・バトンを発動。

自分のスピードカウンターが2つ以上ある時、デッキからカードを

2枚ドロウする。その後、手札1枚を墓地へ送る」S p ・ エンジェ

ル・バトン・S p 魔法・効果、自分用スピードカウンターが2つ以

上ある場合に発動する事ができる。デッキからカードを2枚ドロウ

し、その後手札1枚を墓地へ送る」

トトは、デッキの上からカードを2枚引いた。

すると、笑みを見せた。

「そして、手札1枚を墓地へ送る」

引いたカードの中の1枚、ジャステイスマジシャン - 鉄のアサシンを墓地へ送った。

「その瞬間、墓地へ送ったジャステイスマジシャン - 鉄のアサシン

の効果発動。このカードが墓地に存在する時に1度だけ、自分フィールド上にジャステイスマジシャンと名の付くモンスターが存在する時、

墓地から特殊召喚できる。来い、ジャステイスマジシャン - 鉄のアサシン！」

墓地から、黒い忍者服を着たモンスターが飛び出た。

『ジャステイスマジシャンフン！！』JM - 鉄のアサシン・魔法使い族・ATK100・闇・

1・効果』

「レベル1の鉄のアサシン、レベル3の歪のテイラ、そしてレベル3の民のセイジユをチューニング 1 + 3 + 3 = 7」

3つのチューニングリングが現れ、残りの2体を覆いつくした。

「強なる正義が、弱者を守る力となる！光を導け！！」

そして、光り出した。

「シンクロ召喚！業火となれ、ジャステイスマジシャン - 爆炎のバースト！！」

トトは、1枚のカードをデュエルディスクに召喚した。

すると、フィールドに1人のモンスターが現れた。

全身に炎が灯った、熱き魔術師が。

『ジャステイスマジシャンホオツ、ハアツ！！』JM - 爆炎のバースト・魔法使い族・AT

K2500・炎・7・シンクロ、効果』

「だが、攻撃力はこつちが上だ」

「それはどうかな？」

「なに！」

「ジャステイスマジシャン - 爆炎のバーストの効果により、攻撃力を自分の墓地に存在する魔法使い族モンスター1体につき200ポイントアップさせる！」

「バカな！！」

相手にとつても、予定外の事だったのであるうか、少し焦っているようにも見えた。

「よって、攻撃力は600ポイントアップし、3100となる！！」

ジャスティスマジシャン

「JM - 爆炎のバースト・ATK2500 3100」バトル、ジャスティスマジシャン - 爆炎のバーストで、悪意のジレンマを攻撃！響け、俺の想いよ！シユールディング・バーニング！！」

爆炎のバーストが呪文を唱えると、周りから火の玉が発生し、その火の玉が悪意のジレンマを一気に襲った。

「きゃあああああ！！」LP4000 3900」

「そして、爆炎のバーストが攻撃表示のモンスターを破壊した時、相手に1000ポイントのダメージを与える！ホールド・バーニング！」

再び火の玉が、今度はヘルに向けて襲いかかった。

「っ！！」LP3900 2900」

これで一気にライフを削った！

「調子に・・・乗るな！畏発動、闇より現れし魔術師！自分フィールド上の闇属性、魔法使い族モンスターが破壊され墓地へ送られた時、デッキからその攻撃力以下のモンスター1体を特殊召喚する！」
「闇より現れし魔術師・畏・効果、自分フィールド上に存在する闇属性、魔法使い族モンスターが破壊された場合に発動する事ができる。自分のデッキから破壊されたモンスターの攻撃力以下の攻撃力を持つ闇属性、魔法使い族モンスター1体を特殊召喚する」
「それにより、俺はデッキから、ダークチューナー、ダーク・マジシャンを特殊召喚！！」
「DT ダーク・マジシャン・魔法使い族・ATK0・闇・10・ダークチューナー、効果」

トトは、再び振り出しに戻された感覚に陥った。

「何が原因なんだ！一体・・・」

すると、それを嘲笑うかのようにヘルは言った。

「俺に勝とうとするからだ。元々お前は天罰を下される存在だからな」

「っ、だが！！」

「遊画を取り戻す為なら、天罰だろうと何だろうと、全てを超えてみせる！」

「黙れ！俺は・・・お前をぶつ潰さなければ気が済まない！！」
「ヘル、俺が一体何したと・・・待てよ！！」

トトは、とある違和感を感じた。

俺に恨みと言っているが・・・俺はそんな事をやった覚えが無い。
コイツは、一体何をこんなに恨んでいるんだ？

コイツに対しては、何もしていないハズなんだが・・・。

「お前、何をそんなに恨んでいる！俺は別に、何もしていない・・・
訳では無いが。少なくともお前に対しては、何もしていないハズだ
！！」

「減らず口を！お前のゴタ事には貸す耳も持たないわ！」

「聞けヘル！俺は・・・」

「聞かないって言っているでしょう！！」

この言葉に、トトは諦めるしかなかった。

「ヘル・・・俺は何を言っても、伝わらないのかよ！？」

その言葉は、惜しみの言葉が当てはまるような言いぐさだった。

「ターンエンド！！」

「フン、無駄な時間を過ごさせて、何をやりたいのよ！！時間稼ぎ
か？どっちにしても、お前が負けるのは火を見るより明らかだ！俺
のターン！！」

T o t o ・ S p c 3 ・ L P 3 5 0 0

H e r ・ S p c 3 ・ L P 2 9 0 0

「っふふふふ、あっははははははは！！」

急にヘルが笑い出した。

「何が可らしい！？」

「全て消え去ればいいのよ！！俺に求められるのは・・・闇の嫉
妬のみだから」

ヘル、やはり様子がおかしい。

「最初に出会った時は・・・こんな感じじゃ無かった・・・」

↳ 数千年前

エジプトのとある町

そこに、六神官と呼ばれる者たちの1人がいた。名を、トト・モーランと言う。

彼は王の側近候補として、一生懸命に仕事に精を尽くしていた。ある時、彼は町の付近を観察していた。

何も無い・・・平凡な日々を送り続け、ヒマだと彼は思っていた。そんな時、彼の目の前に1人の女が現れた。

彼女は、肌は白いが、黒いストレートヘアに黒く禍々しい眼差しをしている少女だった。

「・・・何の用だ？」

「別に、貴方は今をつまらないように生きているな・・・と、思っただけ」

「そうか、それは御名答だ」

「貴方は汚れすらない。だからこそ、無駄に欲を求めない」

「・・・くだらん」

そんなやり取りをしていた。

だが、彼はいつもそこに訪れては、彼女と出会っていた。

徐々にだが、彼は心を開いていった。

だが、そんな日々はそうは続かなかった。

ある時、クル・エルナ村の住民を使って千年アイテムと言う物が作り出されると言う知らせが入った。

その計画を知ってもなお、トトは興味を示さなかった。

だが、その少女は止めようとした。

「何故だ、別にお前には関係ない事じゃ・・・」

「違う!!この世に・・・奪われてもいい命なんて何処にもない!!」

「っ!!」

その言葉に、トトは圧倒された。

だが、すでに時遅し。

すでに千年アイテムを生産し終えていたのだ。

2人は、力を合わせてそれを壊そうと立ち向かった。

だが、1人の六神官によつて、彼らは罫にはまり、仲間割れをした。その男は、彼女が冥界の強力な力を宿していると知った。

彼女を捕らえ、そして彼女を使い、強力な魔力を千年アイテムにそそぎ込んだ。

そしてトトもまた、裏切り者としてその場で処刑され、死を迎えた。その直後、トトの魂は何もない空間へと送り込まれた。

「ここは……?」

『貴方はまだ、死ぬべきじゃない』

何処からか、声が聞こえた。

「お前は……誰だ?」

『貴方はまだ、死ぬべきじゃない。そう、運命が言っている』

「運命が……だと」

『そう、貴方は元々、生まれるはずの無かった人間。歴史の改ざんによつて生まれた存在、だから、貴方は運命を変える力を持っている』

「……だがよ、すでに死んでしまった存在だぞ。再び生き返るならば話は別だが」

『大丈夫、貴方は再び蘇る。記憶を残したまま、今度は少女たちを救うために』

……バカバカしい。

「少女たちを救うだと。そんな事が、本当にあるのかよ」

『ある。その少女たちもまた、歴史の改ざんによつて死ぬ運命にある存在。だから、運命を変えてあげなさい』

……ここまで言われたら仕方ない。

そう、トトは思った。

「分かった。俺がどうにかするしか無いのなら、クル・エルナ村の償いとして、そいつ等を助ければ良い話だ」

トトはこの時から分かっていた。

自分は変わり始めていると。

ヘル、お前に会えたから……俺は絆を知った。
愛を知った。

そして何より……命の大切さを知った。
だからヘル、それを知らせてくれたお前を……愛している。

「本当に何が変わったんだよ！冥界の何だか知らないが、俺は……俺は……！」

「何が言いたいの？私はただ、ノルンを愛していた。でもね、貴方がいたから……ノルンは貴方だけしか見なくなつた！そして、私を……いや、俺を裏切つて仲間に魔力を奪わせて！」

「な……何を言っている！？」

「待て！俺はお前を裏切つた覚えは無い！」

「ウソを言つな！俺はしつかりと覚えている、アクナデインが言つた事を」

「ヤツが……何を言つたんだ！？」

「トト・モーランよ、お前はいい仕事をした。コイツがいれば、完璧な千年アイテムを作り上げれると。そう言っていたわ！！」

「つ、あのヤロー……！」

「それはヤツのウソだ！！俺はお前を裏切る気なんか微塵もなかった」

「黙りなさい！今更命乞いをしても意味無いわ！これ以上ゴタ事に付き合つ気は無い！」

「っ……ヘル」

一度失つた絆は……もう取り戻せない。

それが……定めなのかよ！

「デュエルの続行よ！！手札からダークマジシャン・茨道のローズ・ヴァインを召喚！^{ダークマジシャン}DM・茨道のローズ・ヴァイン・魔法使い族・ATK900・闇・2・効果」

ヘルの目の前に、棘で作られた服と、棘に覆われた杖を持った魔術師が出てきた。

「そして、レベル2のダークマジシャン・茨道のローズ・ヴァインに、レベル10のダークチューナー、ダーク・マジシャンをダークチューニング!! 2 - 10」 - 8

ダーク・マジシャンの体が消え去り、その場所から星が大量に放出された。

そして、放出された星はローズ・ヴァインの中へと入り込み、中から星を対消滅させていた。

「復讐の闇よ、夜空の星々を漆黒の闇に染め、魔女の十字架の罪を背負え!!!」

次の瞬間、ローズ・ヴァインの体が破壊され、中から大量の黒に染まった星が、まるで闇から何かを呼び出すように輪を作りだした。

「ダークシンクロ!! 罪深き罪人を裁け! ジャッチメント・ブロー・ドラゴン!!!」

その輪の中から、1体の巨大なドラゴンが現れた。

黒き体に、処刑人を連鎖させるようなギロチン状の爪を持った、見るだけでも恐ろしい外見だった。

『グオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!! (ジャッチメント・ブロー・ドラゴン・ドラゴン族・ATK3000・闇・

- 8・ダークシンクロ、効果)』

「何だ、あのモンスターは!!!」

「ブローは、処刑人を意味する言葉ですからね。それをイメージさせたドラゴンって事でしようね」

「せやなーって、感心している場合ちゃうやろ。アウス!!!」

思い切ったヒータのツツコミが行われていた。

一方、下の2人は今までのやり取りを思い出していた。

「……あの言い方、トトはヘルを愛しているとしか思えない」

ウインは、2人を何か悲しそうな目で見つめていた。

「トト!!! 貴方は……諦めるのです? 大切な人なら……やる事は1つでしょう!!!」

エリアもまた、トトの様子を見てイライラしていた。

「ウイン、ガルドスを呼んで！あのバカに愛を教える必要があるのですわ！」

「……分かった！」

ウインは指を口に銜えると……

ピュイイー、ピュイイー

口笛を鳴らした。

すると、そこに1匹の巨大な鳥が姿を現した。

「きゃー！！！」

「何だ！あの鳥は！！！」

「とーばーさーれーるー！」

羽ばたきによつて会場中突風に襲われたが、そんな物お構いなしと言わんばかりに、2人ともすぐに飛び乗ると、トト達のいるダークロードへと向かつて飛び立った。

「ちょ、待たんかエリア、ウイン！！！」

ヒータが叫んだ時には、すでに手遅れだった。

「あつはは……こんな時には行動力が早い2人だね」

ライナは相変わらず笑っていた。

「兄さん。あの2人を見て、俺も行きたいと思つていませんか？」

ダルクはダルクで、何か深いため息を吐いていた。

「うむ、あの発言……何かイヤな予感がするな」

エレナは、真剣な眼差しでその様子を窺っていた。

「スクルド姫……あの2人は止めるべきだと私は思う」

スクルドは、それを聞いて頷いた。

「分かっているわ。ヘルの言っている事、大半が勘違いをしているから」

勘違い？エレナは疑問を抱いた。

「勘違いとは一体！」

「……ヘルは恐らく、ノルンの興味がトトにしか示さなかった

と思っているのだと思う。それに彼女は昔から思い込みが激しいから
それは、苦勞をかける人のような口調で顔を手で押さえながら言っ
ていた。

道は地上に向けての下り坂となっており、今は地上から数十メートル
付近となっていた。

「バトル！ジャッチメント・ブロー・ドラゴンで爆炎のバーストを
攻撃！ライトニング・ボイス！」

ジャッチメント・ブロー・ドラゴンの口が開くと、そこから電磁波
が発生した。

電磁波は爆炎のバーストを囲み、一気にまとわりついた。

「無論、このままでは攻撃力が足りないこちらが破壊される。だが、
ジャッチメント・ブロー・ドラゴンは戦闘を行う時、相手フィール
ド上のモンスター効果を全て無効にする効果がある！」

「何だつて！！」

効果が無効化された爆炎のバーストの攻撃力は2500までダウン
する。

「ぬ・・・ぬおおおおおジャスティスマジシャン J M - 爆炎のバースト・ATK 31

00 2500」

攻撃力が下回った為に、爆炎のバーストは爆発して、光となった。

「ぐああああああああ！！」LP 3500 3000

「俺はターンエンド」

負ったダメージに苦しみながらも、どうにか意識は保っていた。

「苦しいか？辛いかな？これが、俺が負った悲しみだ！！」

最も、最悪の戦いになりそうだ。

精神的にも、体力的にも。

・・・それでも、俺は戦わなければならない。

アイツは、俺の・・・大切なヤツなんだ！

このまま誤解されたままで、終われるかよ！！

続く

次回予告

「聞きなさいヘル！貴方は間違っている！！」

「ウソだっ！！だって私は……」

「聞いてくれヘル。俺は……お前の事を愛している！！愛しているヤツを騙すヤツなんてこの世の中には存在しない！！」

「そんな……俺は、いや私は……勘違いしていったって事？」

次回、遊戯 王 Fate 第35話「真実の姿、狂乱者」

「ウソだろ……遊画！！」

次回のキーカード

冥界光皇ヘルヘイム・天使族・ATK2500・光・8・シンパ
シーシンクロ、効果

第34話「愛する者が故に」(後書き)

あとがき

俺「募金はしなければな」

財布から105円を取り出す。

そしてそれを募金箱の中へ

「えー、百円シヨップじゃあるまいしwww」

カチン

俺「分かったよ！！あと100円入れりゃいいんだろ、入れりゃ！

！」

「まいどー」

こんな感じで、地味に出費が最近酷いRagoです。

遊戯王の小説を書いている訳ですが、最近思いつきました。

「・・・アレ、このストーリー構成上、主人公の実年齢そのままにして5D'sからZEXALへと時代変化させる事可能だ」

一応、途中経過までは書き終わっていましたが、再びリセット。

その為、この小説を第110話以内には終わらせなければならぬ状態になりました。

困ったな、やりたい事結構あったのにな。

ですが、背に腹は変えられません。

まあ、面白ければそれでいいんです。

現在それに向けて、着々と準備に取りかかっております。

これからもFateを、よろしく願います。

それでは次回、やっと遊画登場です。

狂乱者の意味とは、そしてトトとヘルの恋の行方は一体？

何故ヘルは、ずっと勘違いをしていたのか。

その答えは、光の中にある！！

次回もまた、デュエルしようぜ！！

3月18日 自宅にて

追加：ヤバイ、遊戯王デュエルモンスターズ第206話「千年アイテム誕生の秘密」の回だけ見てねえ。

何か間違いがありましたら、指摘をお願いします。

第35話「真実の姿、狂乱者」(前書き)

眠い中、やっております。以上

第35話「真実の姿、狂乱者」

「俺はターンエンド」

負ったダメージに苦しみながらも、どうにか意識は保っていた。

「苦しいか？辛いかな？これが、俺が負った悲しみだ！！」

っ、これがお前の苦しみ。

こんな苦しみを、コイツは絶えてきたのか。

「……っ」

ダメだ！今はデュエルに集中しなければ。

「永続罫、シンクロ・バンクを発動！破壊されたシンクロモンスターのレベル分のシンクロカウンターがこのカードの上に乗る。爆炎のバーストのレベルは7。それにより、このカードの上にシンクロカウンターが7つ乗る！！」

壺の形をした巨大な貯金箱が現れた。

すると、その中にレベル分の星が入っていった。

「何をやっても無駄だ！俺はターンエンド」

いや、まだ分からない。

諦めたら、そこで全てが終わる。

「無駄だと分かっても、やらなきゃならねーんだよ！遊画を救うために。そして、ヘル！お前の誤解を解くために！！」

「抜かすな！誤解だと？俺は俺が正しいと思いつけている。俺は愛した、ノルンを。いつも影からずつと見つめていた。だが、俺は女性だ。禁断の愛も考えた。だが、それも失敗に終わった。だから一度、地上に出た。何か良い方法が無いかと。そこでお前と出会った。お前は暗く、死んだ目をしていた。俺は知らぬ内にお前と親しくなっていた。だが、それも全てお前自身がぶち壊した！！」

「違う！俺は何もやっていない。少なくとも俺は、お前を殺すような事は絶対にしない！！」

「性懲りもなく同じことを！」

「性懲りも無くないからこうやって言っているんだ!!」

ダメだ・・・全然相手にされない。

それどころか、俺を拒絶していやがる。

「ノルン、愛しているよ。ノルン可愛いよ、ノルン。貴方しか見えない、俺はお前が一番好きだ」

仕舞いには自分の世界へと行っているな、アレ。

「どうすればいいんだ!このデュエルで勝つしか無いのか。だが」
問題があるのはすでに承知済みだ。

何故なら、このデュエルは負けた方が消滅するデュエルになっている。

俺が勝てばヘルは消え、ヘルが勝てば俺が消える。

だからこそ、ヘルを説得させる必要がある。

俺には遊画を救うと言う目的があるが、コイツを失いたくはない。

「お前のターンだよ。早くカードを引け!!」

「っ!迷っているヒマは無いか。俺のターン!!」

T o t o ・ S p c 4 ・ L P 3 0 0 0

H e r ・ S p c 4 ・ L P 2 9 0 0

トトは恐る恐るカードを見ると、目を開いた。

このカードは!!

「それにこの手札・・・そうだ!!」

頭の中で、経路を造り出していた。

もしも相手があのパターンで攻撃を行えば、それに合わせて・・・

その後、強力なモンスターが出て攻撃を行い、破壊された瞬間・・・

・・・いや、こっちじゃダメだ。もっと簡単な道があるはずだ。

何千通りの中から、選りすぐれた経路を、辿った。

そして、ついに経路の終点にまで辿り着いた。

「行ける!!」

あとは英子の言った口説き次第で、このデュエルに・・・終止符

を打てる！！

トトは思惑通りに行くかは不安だったが、決断を下した。

「この決断は、俺に吉と出るか凶と出るかの定めによって、運命が決まる事になる」

トトは、覚悟を決めた。

絆、それは切つても切り落とせない頑丈な物。

仲間、それは自分をとり囲む大切な存在。

希望、それはどんな状況でも必ずある物。

そして信じる想い。

それは、絆、仲間、希望が集まりし時に発生する、大いなる力。

どんな力にも負けず、どんな悪にも負けない。

それが、絆で結ばれた者たちの力である。

第35話「真実の姿、狂乱者」

今現在、コースは螺旋状になっており、急カーブを減速無しで2台は走っていた。

「っ……！！っ……！！」

しばらくして、そのコースを抜けると、トトはすぐに動いた。

「手札からジャステイスマジシャン・同のフォートを攻撃表示で特殊召喚！このモンスターは相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、手札から特殊召喚できる！」ジャステイスマジシャン
「J M - 同のフォート・魔法使い族・ATK1300・光・5・効果」

羽の生えた老人が、杖を振り回しながら姿を現した。

「そんな攻撃力不足のモンスターを出して、もはや諦めたのか？」

「違うな。このモンスターは墓地へ送る事により、自分の墓地に存在するジャステイスマジシャンと名の付くモンスター1体を特殊召

喚できる効果を持っている」

「何だと！」

ヘルは驚いた表情になった。

「それにより、俺は同のフォードを墓地へ送り、蘇れ！爆炎のバースト！」

手に取ったフォードを墓地に送ると、墓地から1枚のカードが出てきた。

そしてそれを再び手に取り、デュエルディスクに召喚した。すると、トトの横の方から1体の魔術師が再び姿を見せた。

『ふおお！！』^{ジャスティスマジシャン}JM - 爆炎のバースト・魔法使い族・ATK2500・炎・7・シンクロ、効果』

「お互いに譲りを見せない戦いだね」

「そうやな。これはウインとエリア以上に難易度高いデュエルやで」

「……そうだな」

「ダルク？いつの間にか裏に切り替わっていますね」

そんなやり取りが、闘技場の観客席の方から聞こえた。

「それにしてもな、ウインとエリアは今どこを飛んでいるのやるヒータはそんな事を口にした。

「あつはは……あの2人は思い立ったらすぐに行動するような人ですからね。もうすぐモニターに映されてもおかしくない頃ですね」

アウスは、呆れ半分なのか、乾いた笑いをした。

「……何か、イヤな予感がする」

そう言い出したのは、ダルクである。

「どうしたんや、ダルク？」

「……いや、どうも様子が変なんだ。ヘルとかと言うアイツ、俺には分かる。目に見えない糸に操られている、操り人形になったかのように、相手を倒す事だけを考えているように思える。その語源に感情が見当たらない。それに、さっきからトトを否定している

が、どこかアイツは泣いているようにも思える」

ダルクは俯くと、咄嗟にこんな事まで呟いた。

「……感じる、ヤツの中から何か強力な悪がいる」

「悪ねえ、ダルクには感じるんでしよう。闇を操る魔術師として」
ライナは珍しく、その意見に同感したような口調を見せた。

「……それがどうした！それでも攻撃力が足りないぞ！！」

「そうだろうな。効果により攻撃力は800ポイントアップし、3300になるが、JM-爆炎のバースト・ATK2500 3300、それでも、ジャッチメント・ブロー・ドラゴンの効果により戦闘時に効果が無効化され、再び2500までダウンする。これじゃさつきと同じ展開だ」

「それじゃ、無駄と言う事……」

ヘルの言葉よりも早く、トトは言い出した。

「だが、手札にはカードはある！それがある限り、俺は屈しない！
手札からスピードスペル、スピード・エナジーを発動！自分のスピードカウンターが2つ以上ある場合、自分フィールド上に存在するモンスター1体の攻撃力は、このターンのエンドフェイズまで自分のスピードカウンターの数の200倍の数値となる、Sp-スピード・エナジー・Sp魔法・効果、自分のスピードカウンターが2つ以上ある場合に発動する事ができる。このターン終了時まで、自分フィールドのモンスター1体の攻撃力は、自分用スピードカウンター1体の数×200ポイントアップする、俺のスピードカウンターは4。これにより、攻撃力を800ポイントアップさせる。これで、攻撃力はこつちの方が上だ！、JM-爆炎のバースト・ATK3300 4100」

「バカな！攻撃力4100だと！！」

これで、例え効果で無効になっても攻撃力は3300までしかダウンしない。

「バトル！爆炎のバーストで、ジャッチメント・ブロー・ドラゴン

を攻撃！シューティング・バーニング！！」

爆炎のバーストが呪文を唱えると、周りから火の玉が発生した。すると、周りから火の玉が大量に現れた。

その火の玉が一斉にジャッチメント・ブロー・ドラゴンに向けて飛び立つと、ジャッチメント・ブロー・ドラゴンは向かってきた火の玉を、口から出した電磁波で迎え撃とうとした。

一度目の電磁波は、爆炎のバーストに向けて放たれ、爆炎のバーストを弱らせた。

『ぐ、ぐおおおおおおお』JM - 爆炎のバースト・ATK4100 3300』

だが、二度目の電磁波は、火の玉に向けて放たれたが、それを破壊する事は出来なかった。

一度は爆発を起こしたものの、すぐに残りの火の玉が飛び出し、ジャッチメント・ブロー・ドラゴンを囲んだ。

そして、一斉に襲いかかると、衝撃に絶えきれなくなったジャッチメント・ブロー・ドラゴンが、爆発を起こした。

爆発の勢いは、ヘルにまで襲いかかった。

「きゃあああああああ！！』LP2900 2600』」

そしてそれに追い打ちをかけるように、次の効果を発動した。

「・・・そして、爆炎のバーストが攻撃表示モンスターを破壊した時、相手に1000ポイントのダメージを与える。ホールド・バーニング！」

再び火の玉が現れ、ヘルに向けて襲いかかった。

「っ！！』LP2600 1600』」

ヘルは思いつ切り体制を崩しかけた。

「しまっ！！！！」

右の方に重心が行き過ぎてしまい、転倒しかけていた。

「ヘル！！！！」

トトは、ヘルのD・ホイール近くまで来ると、右側の方からD・ホイールをぶつけ、ヘルの体制を左側へと押していた。

「っ！何故だ、何故俺の為に！！」

「何故って・・・何故だろうな？俺も気づいたらやってた」

ヘルは体制を立て直すと、トトから逃げるようにして前へと走っていった。

「お前は敵だ！そして俺は敵だ！それなのに何故、お前は俺を助けた！！」

「そんな物、今はどうだっていいだろ」

トトは、言い放った。

「なに！？」

「それはそれ、これはこれだ。助け合いの無い戦いなんて、やってたって全然勝った気にはならない。むしろ、転倒して勝っても、俺は嬉しくもないし、何よりもお前を傷つけたくない」

「俺を、傷つけたくないだと？」

「そうさ、俺は・・・」

バサバサバサ

大切な事を言おうとした時、隣から鳥の羽ばたく音が聞こえた。

「って、大切な時に何だ一体！」

見ると、そこには1匹の大きな鳥と、その背中に2人の人影が見えた。

緑色の髪をしたポニーテールの少女と、青髪のロングヘアの少女。トトはすぐさま当てはまる人物を頭の中に描いていた。

「まさか・・・ウインにエリアか！！」

「「気安く呼ぶな、この裏切り者！！」」

咄嗟に出るセリフがそれかよ！！

「貴方は一体、いつまで気持ちを変えないつもりですの！」

「いや、今言う所だと気づかないのか！？ってか、ただ単に邪魔しに来ただけだろお前ら！」

「お黙りなさい！！」

「絶対に今言われる筋合いすら無いよな！ってか、否定していないところを見ると完全に邪魔しに来ただけじゃねーか！！」

「……私たちが、そんなマネをすと思う？」

エリアとの口喧嘩中だったが、ウインがそんな事を口にした。

「いや、思いたくは無いが……状況的に」

「……ただ単にデュエルを邪魔しに来ただけだから安心して、邪魔されて」

「そうか、それなら……って、オイ!!」

アホか！邪魔されてたまるか。

「絶対に状況合わせて来ただろ！俺が告白する丁度良いタイミング見計らって」

「「悪い？」」

「悪いわコンチクショー!!」

毎度の事ながら、この2人は息がピッタリだ。

何処かでうち合わせしたのかと疑いたくなるね。

「……それに、貴方が言う前に、先に言わせておかなければならない人がいる」

「いきなり何だ、ウイン!？」

すると、モニター部分が通信モードへと切り替わった。

そこに映されていたのは……

『やめなさいヘル！貴方はこのヤローと戦う意味は無いわ』

ノルンの一部であり、未来を見通す女神、スクルドであった。

それにしても……何奴も此奴も、俺の扱いは変える気はないらしいな！

「戦う意味が無いって……だって俺は」

『聞きなさいヘル！貴方は間違っている!!ノルンは最初から貴方を見捨てたり、トトに興味を移した覚えすらない』

「ウソだっ!!だって私は……」

ヘルが動揺している！

「……俺、いや私は覚えている。私が、ノルンに見捨てられた事を……」

『それはデマよ！貴方にそんな態度を取った覚えはまるっきり無い

！」

「そんな……私は、騙されていたと言っの？愛するが故に、それを核心付かれて、利用されていた……」

「私は……私は……」

もう、言うには今しかない！

「聞いてくれヘル。俺は……お前の事を愛している！！愛しているヤツを騙すヤツなんてこの世の中には存在しない！！」

「そ……そんな事、今言う！？」

戸惑いの態度と、顔を赤らめる仕草が同時だった。

「そんな、私は貴方を今まで恨んでいた。殺してやりたいと思った。そんな私を……愛しているって。それに私は、ノルンを……」

「それでもいい！！お前はノルンを愛し、俺を恨んでいた。だが、

それでも俺はお前の事が好きなんだ！あの時、お前に会わなかったら俺はずっと孤独を感じるハズだった。お前がいなければ、ウインやエリア、それにアウス、ヒータ、ダルク、ライナ、エレナ。そして……遊画には出会えなかった！お前に出会えて、俺は孤独を感じなくなった。だからヘル、一緒に帰ろうじゃねーか。そして、バカげた計画を止めよう！！」

「っ……そんな、私が百合だと言っのは百の承知なハズなのに……それでも受け入れてくれるなんて……やっぱり貴方は、バカね」

そのバカの言葉はグサツと心に刺さったぞ。

「……ごめんね」

「……え？」

「私が暴走して、貴方の声や気持ちを聞き取れなくて」

ヘルは、仮面を外すと、こちらに向かって微笑んでくれた。

その顔は、冥界の女王とは思えない程に、美しかった。

「私はずっと、ノルンを大いに讚っていた。それが愛となり、ずっ

とノルンを愛していた。でも、それがいつの間にか歪んで、ノルンが認めた人を妬ましくなっていた。そんな時、貴方に会えた。それはノルンが与えた運命なのかもしれないわね。今思えば」
さつきまでの雰囲気とは一変して、優しさに満ちあふれた顔をしている。

「……もう、このデュエルに意味は無いわ。私がサレンダーすれば、この道は消滅して、一つの難関が解除される。そうすれば、残り6つの奴らさえどうにか出来れば、この計画を止める事ができる」

「ヘル……お前は、どうするんだ」

「そりゃ……このまま貴方達に協力して、一緒に戦ってもいいわ。冥界の王の計画を止めるには、戦力が必要でしょう？」

「……ああ、そうさせてもらおう」

ヘルは、自分のD・ホイール部分のサレンダーボタンに手を伸ばした。

- 戦え。

「うっ!!」

あと一步のところまで、ヘルの手が止まった。

「どうしたんだ、ヘル!!」

「か……体が、動かな……っ!!」

「どうした？これがお前の本能じゃなかったのか？」

「ち……違う！私は、こんな事を望むような人じゃ……」

- 人？笑わせるぜ。お前は冥界の女王だ。この世界の人と同じじゃない。

「そ……それは、そうだけど」

何だ、一体誰と話しているんだ？

- 絶望、恐怖、それが望む事じゃなかったのか？

「っ……そんな訳、ないでしょう！」

- 負の感情、お前がそれを断ち切ってしまうのなら、俺が再び復活させてやるよ。狂乱者としてな!!

「い……いやああああああああ！！」

急にヘルが叫びだした。

「どうしたんだ、ヘル！」

「た……倒して、この私を……倒して！邪悪な思念が、私を……取り込んでいる」

「何だって！！それはどういう意味だ」

「もう……後戻りは出来な……」

そこで、ヘルの意識は途切れた。

「ヘル？」

ぐったりとなつたヘルが、しばらくして再び顔を上げた。

「……つぶ、無惨な物だよ、愛と言うのは」

再び、元の口調に戻ったと！

「誰だお前！お前がヘルに偽の記憶を植え付けたのか？」

その顔は、さつきまでの優しいヘルでは無く、目が充血し、口元に皺が寄つて、ただただ病んでいるとしか思えないような姿になっていた。

「そうと言えばそうだ。俺はコイツで、コイツは俺だ」

何を訳を分からない事を……。

「俺の名は狂乱者^{バサーカー}、そして千年アイテムに注がれた魔力その物だ
んな！」

「何でそんな物が……ここに」

「考えてみる。冥界の女神の魔力だぞ。邪悪じゃない訳ないだろ。」

注いだのはいいが、あまりにも邪悪な魔力があり過ぎて、暴走を起こしかけたんだ。結局その魔力は排除され、消滅されかけた」

されかけた？

「ところがどっこい、俺は逃げ出したんだよ。隙を見てその場からそして長い年月を得て、とある研究所へと足を運んだ」

「……研究所？」

「そう、その研究によってとある人間が作り出されていた。その人間は、神を作る研究の第1過程にあった。そこで俺は考えた。この

人間が神なのなら、それに乗り移る事により、俺が神になれるとな」
神を作る・・・それに乗り移る。

「まさか！お前」
ウソだろ・・・そうで無いと言いたい。だが、そうとしか考えられない。

「さて、何を考えたのかは分からないが、結局失敗作だったそいつは、破棄されかけていた。生きていても、ただ危険物資になるだけだからと言う理由で」

少なくとも、その近くにいた俺達は信じられなかった。

「ウソでしょ・・・そんな、実験の失敗作と言う理由で、その人を破棄するなんて」

「・・・人権が保障されている今、そんな事をやったってバレたらただじゃ済まされないでしょう」

「確かにそうだろうな。少なくともその中には俺がいたんだ、当然処分されれば俺は死ぬ。そこでだ、研究所の奴らを抹殺すれば、俺は死なずに済むよなあ？」

邪悪な意思が伝わってきた。

それは、トトに限らず、それを見ていた奴らにも感じ取れた事だ。

「・・・！！」

「まさか、数十年前に起きた爆発の原因は！！」

エリアが、啞然としていた。

これは数十年前の事件記録である。

とある研究所にて、謎の爆発が起きた。

当時政府は、その爆発の原因を調べるべく、セキュリティを近くに派遣した。

しかし、その研究所は跡形もなく全壊し、残っている物は何一つ無い状態であった。

その後、政府はこの事件をただの自然災害として、永遠に捜査、及び事件に関連する資料の閲覧を禁止した。

不快に思つて調べた者は、行方が分からなくなる上に、人々から忘れられると言つた悲劇にまで陥ると都市伝説までにもなつていた。それで、興味本意で調べる者も少なくともはなかった。

何にせ、数年前にネオ童実野シティでは自然災害が起こり、シティが2つに分離したのだから。

それと関連するのでは無いだろうかとの理由で。

しかし、事実上答えに辿り着く者はいなかった。

完膚無きまでに情報が消去されている上に、真実に近づいた者が突然行方不明になる等の魂胆で、以後その事件を調べる者はいなくなり、歴史の闇に葬られる事になった。

それが『第88番地人体実験研究所抹消事件』の、唯一の記録である。

「そんな事件が・・・起きていたのか!!」

トトは、愕然とていた。

「そうだ、俺は研究所内のモーメントを使った小型発電所、通称『イルミネイト・フェイト』に邪悪な意思をそそぎ込み、モーメント自体をマイナス回転化させた。それにより、すぐさま暴走が起き、研究所は小規模なゼロ・リバーズを引き起こした」
自分が生きる為に・・・そんな事を!

「おおっと、俺を恨んだら困るぜトト・モーラン。俺が事を起こさなければ、お前は今、この場にはいないのだからな」

「んな!! どういう意味だ!!」

「知りたいのか? 知りたいのなら教えてやる。このデュエルを通じてな!!」

デュエルを通じてだと?

「・・・カードを1枚伏せて、ターンエンド」

ここは、相手に従うしかなさそうだ。

「フン、素直に聞いたな。だが、教える時まで生き残れたらの話だな!!」

「チイツ、だったら生き残ってやらあ！お前から教えられるまで」
「良い度胸だ。これは倒し甲斐がある。俺のターン！！」

T o t o ・ S p c 5 ・ L P 3 0 0 0

H e r ・ S p c 5 ・ L P 1 6 0 0

「永続罨発動！ダーク・グレーション！自分の墓地に存在するダークチューナー1体を選択して特殊召喚する。この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効になり、レベルが4つ下がり、ダークチューナーとしては扱わず、チューナーとして扱う！！」
「ダーク・グレーション・永続罨・効果、自分の墓地からダークチューナー1体を選択し、特殊召喚する。また、この効果で特殊召喚されたモンスターの効果は無効化され、レベルが4つ下がり、ダークチューナーとしては扱わず、チューナーとして扱う。このカードがフィールドに存在しなくなった場合、そのモンスターを破壊する。そのモンスターがフィールドから離れた時、このカードを破壊する」
「墓地より蘇れ！ダークチューナー、ダーク・マジシャン！」
黒い煙が舞い上がったかと思っただ瞬間、その中から1人の魔術師が復活した。

「フオア、ハアツ！！！！」
「D T ダーク・マジシャン・魔法使い族・A T K 0 ・闇・ 1 0 ・ダークチューナー」

「そして効果により、レベルは4つ下がり、チューナーとなる」
「D T ダーク・マジシャン・ 1 0 6 ・ダークチューナー チューナー」

まさかコイツ、シンクロ召喚を行うつもりか。

「どうせシンクロ召喚を行うと思っているだろ。だが、甘いんだよ！」

「どういう意味だ、それは！！」

「手札からチューナーモンスター、ダークマジシャン・呪縛のアイを攻撃表示で召喚！」
「ダークマジシャンDM呪縛のアイ・魔法使い族・A T K 0 ・闇・

2 ・チューナー」

チューナーが2体だと！

「何をするつもりだ！」

「大いなる力を見せてやる。だがその前に、召喚した呪縛のアイの効果を発動。召喚に成功した時、手札の畏カードを発動できる！」
このタイミングで畏だと？

「俺は畏カード、魂の十字架を発動！」

そ・・・そのカードは！！

出現したカードのイラストには、捕らわれた遊画の姿があった。

「ウソだろ・・・遊画！！」

カードの中から、十字架に手足を釘で止められ、まるで魂がない目をした遊画が・・・そこにいた。

「・・・ゆ、遊画！！」

「何で貴方が、そんな姿に！」

クツ、近くにこの2人がいるのはマズイ！

「オイお前ら・・・」

「誰がこの場から離れるものか！！」

読まれた！思考が読まれただど！！

「貴方だけが遊画を求めていると思っていいたら大間違いですわ！！」
「・・・それに、さっき私たちは気づいた。やっぱり私たちは、遊画の近くにいたい。その為に、このデュエル、最後まで見届けさせてもらう！」

ダメだ。こうなった以上、この2人は動く気配すら見せない。

「分かったよ！だったら俺にまかせろ。絶対に、遊画を救い出す！」

「そんな軽口がどこまで通じると思っているんだ？魂の十字架の効果は、相手が攻撃を行った時、このカードの上に呪縛カウンターが1つ乗せる事に攻撃を無効にできる。そして3つめのカウンターが乗った時、このカードは破壊され、捕らわれた魂は消滅する。魂の十字架・永続畏・効果、相手が攻撃を行った時、このカードの上に「呪縛カウンター」1つを乗せる事により、その攻撃を無効にする事ができる。また、このカードの上に「呪縛カウンター」が3つ乗

った場合、このカードは破壊される」

「なんだと!!」

人質と言う事か。

道理でヘルはこのカードを使わなかった訳だ。

「卑怯ですわ!そんなの、デュエリストのやり方じゃありませんわ!!」

「勝てば良いんだよ勝てば!それに俺はデュエリストじゃねえ、バ―サーカーだ!」

「・・・っ!!もはやデュエリストですら無いとでも言うの?」

それに、相手は何かをやるうとしている。

一体何を・・・?

「覚悟を決めたか、トト・モラン?お前の無力さを証明させてやるよ。冥界の力でな!!レベル2のチューナーモンスター、ダークマジシャン・呪縛のアイに、レベル6となり、チューナーとなったダークチューナー、ダーク・マジシャンをユニゾンチューニング!
! 2 + 6 = 8」

「ユニゾンチューニングだと!??」

聞いたことのない単語だ。

「チューナー同士をチューニングした!??」

「・・・何か、胸騒ぎがする」

2体のモンスターが透明になったかと思えばその瞬間、一気に大量の星が現れた。

そしてその星は、輪を作りだし、チューニングリングを作り出た。

8つのチューニングリングは上に向かって一列に並んだ。

すると、並んだチューニングリングは輝きだし、1本の柱を作り出した。

「な・・・まさか、あの時に起きたアレも!!」

フルが戦っていた時に起きたあの現象も、全てこれだったのか。

「死者を操りし大いなる女神よ、生者を亡き者へと変え、拒絶の光を世界に注げ!!」

輝いている柱が、徐々に光を失い、その中から……1体の女神がいた。

「シンパシーシンクロ！！冥界の秘密をその身に宿せ！冥界光皇ヘルヘイム！！」

その女神は、顔を仮面で隠しており、上半身が普通の体をしている反面、下半身は腐りきったような緑色の皮膚をしていた。そして、背中には骨のような羽を生やしていた。

『グオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！冥界光皇ヘルヘイム・天使族・ATK2500・光・8・シンパシーシンクロ、効果』
その叫びは、まるで悲しみを叫ぶようにも聞こえた。

「ヘル……お前、悲しんでいるのか？」

答えはないが、それでもトトには伝わってきた。
私を、倒せと。

「だが、俺はお前を救い出す！少なくとも、お前だけを死なせはしない！待っているヘル、そして……遊画！！」
その声は、彼の本意も混じった、言葉である。

トトは、D・ホイールの出力を上げると、加速を始めた。

そうさ、このターン生き残れば……弱点のチャンスが見えてくる！

俺の力で、狂乱者を、倒す！！

続く

次回予告

「俺のせいで……たくさんの命が失われた！」

「違う！！お前のせいじゃない。お前が責任を背負う必要はないんだ！！！」

「だが!!」

「俺がいたから、俺なんて、存在するんじゃないんだ!!」

次回、遊戯 王Fate 第36話「想いが繋ぐ力」

「見る狂乱者!これが、仲間の絆だ!!」

次回のキーカード

シンクロ・バンク・永続罨・効果

第35話「真実の姿、狂乱者」(後書き)

あとがき

35話ですね。

毎度思いますが、飽きずに頑張ったなと感心しております。

最近、特に面白い事も無いことですし……って、終わっていいですか？

……あるとすれば、友達との戦いで、エクシーズ出したのは良かったが、次でライボル喰らわせられたとかしかありません。

空しい、そして悲しい。

以上

そんな訳で次回、ついに決着です。

切羽詰まったトトが行う戦術とは一体？

遊画とヘルはどうなる！

気になる次回は、来週中をお楽しみに。

不特定な更新で毎度毎度スイマセンね。

そう言う訳で、また来週も、デュエルだ！！

3月22日 自宅にて

第36話「想いが繋ぐ力」(前書き)

今日はこの後久々に大会に出るか。無論結果は負けて帰ってくるのがオチだがな。やべっ、ため息しか出ねえや。

第36話「想いが繋ぐ力」

「死者を操りし大いなる女神よ、生者を亡き者へと変え、拒絶の光を世界に注げ！！」

輝いている柱が、徐々に光を失い、その中から……1体の女神がいた。

「シンパシーシンクロ！！冥界の秘密をその身に宿せ！冥界光皇ヘルヘイム！！」

その女神は、顔を仮面で隠しており、上半身が普通の体をしている反面、下半身は腐りきったような緑色の皮膚をしていた。

そして、背中には骨のような羽を生やしていた。

『グオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！冥界光皇ヘルヘイム・天使族・ATK2500・光・8・シンパシーシンクロ、効果ㄹ』

「何だ、この禍々しい雰囲気は」

そのおぞましい迫力に、圧倒されていた。

「ふ……震えが止まりませんわ」

「……これって、恐怖？私は、恐怖を感じているの」

ガルドスに乗っている2人も、恐怖を隠しきれずにいた。

「恐ろしいか？これが冥界神の力だ。コイツがお前を地獄の底へと陥れる死神となる。冥界光皇ヘルヘイムの効果発動！1ターンに1度、手札のモンスター1体を墓地へ送る事により、自分の墓地に存在する、墓地へ送ったモンスターよりもレベルが低いモンスター1体を、召喚条件を無視して特殊召喚できる！」

「何だと！！」

召喚条件を無視してって事は……まさか！！

「俺は手札のダークマジシャン・荒波のトーチアーを墓地へ送る。

荒波のトーチアーのレベルは3。よってレベル3以下のモンスター、ダークマジシャン・悪意のジレンマを特殊召喚！！」

ヘルヘイムの腹がボコボコと割れ、その中から悪魔の姿をした魔術

師が、フィールド上に姿を見せた。

『ヘイア！！！！』DM・悪意のジレンマ・ATK3000』
レベル1の・・・攻撃力3000のモンスター。

そんなモンスターが、再び復活した。

「マズイ、これで効果による破壊がなされれば・・・終わりですわ
！！」

分かっている、そんな事！

「あつははははははは、これで終わりだ！トト・モーラン。バトル、冥界光皇ヘルヘイムで、爆炎のバーストを攻撃！！」

「バカな、爆炎のバーストの攻撃力の方が上だぞ！！』JM・爆炎のバースト・ATK3300』

何か、イヤな予感しかない。

「その瞬間、冥界光皇ヘルヘイムの効果が発動！このモンスターよりも攻撃力が高いモンスターと戦闘を行う時、このモンスターの効果で特殊召喚したモンスター1体を墓地へ送る事により、このターンの終了時まで、そのモンスターの攻撃力分アップする」

んな！？

攻撃力が・・・3000ポイントアップし、5500だと！？

『又オオオオオオオオオオ！！』冥界光皇ヘルヘイム・AT

K2500 5500』

これが・・・冥界の力だと言うのか。

相手を地獄へと誘う、それが・・・冥界。

「ヘル・ブライネス！！」

ヘルヘイムの周りから、輝かしい光が放たれた。

その光を浴びた爆炎のバーストは、徐々に溶け始めていた。

その後、物の数秒で、跡形も無く散っていた。

トトもトトで、光を浴びてただじゃ済む訳も無く、精力が根こそぎ奪われた感覚に陥った。

「はあ・・・はあ・・・ち、力が、はい・・・らない」

P3000 800』

D・ホイールのバランスも崩れ、グラグラと揺れているのを見れば、今にも転倒しそうな勢いでもあった。

「トト!!」

・・・情けないよな。

自分が頑張ると言いながら、結局はこんな感じで弱っているんだぜ。

「だが、シンクロ・バンクの効果によりカウンターを7つ乗せるが、これに乗るカウンターは12が限界だ」

「無駄な事を、このターンで終わらせてやる。スピード・ワールドの効果を発動。自分のスピードカウンターを4つ取り除く事により、SpC5 1マ手札のスピードスペル1枚につき、相手に80ポイントのダメージを与える」

お・・・オイ、マジかよ!!

「俺の手札には、1枚のスピードスペルがある。これで終わりだ、死ね!!」

ヘルのD・ホイールから、雷撃が発生した。

アレが当たれば、俺は負ける。

一体・・・どうなるのか。

絆、それは切つても切り落とせない頑丈な物。

仲間、それは自分を取り囲む大切な存在。

希望、それはどんな状況でも必ずある物。

そして信じる想い。

それは、絆、仲間、希望が集まりし時に発生する、大いなる力。

どんな力にも負けず、どんな悪にも負けない。

それが、絆で結ばれた者たちの力である。

第36話「想いが繋ぐ力」

「これで終わりだ、死ね!!」

ヘルのD・ホイールから、雷撃が発生した。

アレが当たれば、俺は負ける。

だが、ここで終わらせる訳にはいかねーんだよ！

「畏発動！リフレクト・ネイチャー！！このターン相手が発動したダメージ効果は、相手ライフにダメージを与える効果になる！へリフレクト・ネイチャー・畏・効果、このターン、相手が発動したライフポイントにダメージを与える効果は、相手ライフにダメージを与える効果になる」

「何だと！！」

俺の周りにバリアが発生し、雷撃から俺を守った。

そして、その雷撃ははじき返され、ヘルの方へと向かった。

「ぐああああああ！！」
LP1600 800

体制を保ったまま、ヘルは俺を睨んだ。

「この・・・人間の分際で」

どつちみち、このターンはやる事が無かったのか、ヘルはそのまま

「ターンエンド」と宣言した。

「俺のターン！！」

Toto・Spcc6・LP800

Her・Spcc2・LP800

スピードスペル・シフト・ダウンか。

このカードの効果は、自分のスピードカウンターを6つ取り除く事により、デッキからカードを2枚ドロウする効果だ。

だが、そんな事をしなくても、相手にダメージを与える効果を発動すれば・・・

「・・・っふ」

一瞬、相手が笑ったような動作を見せたのを、トトは見逃さなかった。

笑っている？これは一体・・・待てよ。

確か前のターン、アイツは荒波のトーチチャーを墓地へ送ったよな。

何か引つかかる。アイツは焦っているようにも思えるが、それでもどこか落ち着いた雰囲気醸し出している。

「……チィ、どつちが狙いか見せてもらおうじゃねーか！
「手札からスピードスペル・シフト・ダウンを発動！！自分のスピードカウンターを6つ取り除き、デッキからカードを2枚ドロースる！〜Spシフト・ダウン・Sp魔法・効果、自分用スピードカウンターを6つ減らして発動する。デッキからカードを2枚ドロースる〜スピードカウンターを全て取り除き〜Sp c 6 0〜デッキからカードを2枚ドロースる！」

「んなアホな！？そのままダメージを与えたら勝っていたやろうに！」

「……いや、そうとは限らない」

ヒータはぎよっとダルクに反応した。

「何や、自分あのままダメージを与えとっても無駄言うてんか？」

「……さつき墓地へ送られたカード。一瞬効果が見えたが、このカードが墓地に存在する時、相手がダメージを与える効果を発動した場合、墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事により、そのダメージを無効にし、相手に800ポイントのダメージを与える。と、書かれてあった」

「何やて！？ほんなら、さつきダメージ与えとうたら……」

「ダメージを無効にされ、そのままサヨナラ……って所でしょうね」

まだまだこの戦いは続きそうだ……そう、4人は思った。

「クツ、見抜かれたか」

「お前が一瞬笑みを浮かべなかつたら、俺はそのままダメージを与える効果を発動していただろうな」

「チィ、鋭い洞察力を持つているとは」

だが、この状況を打開できるカードは何もない。
だが……。

手札にある、ハーフ・チューナーを見つめた。

このカードが発動されれば、俺はまだ・・・逆転できる！

「カードを1枚伏せ、手札からジャスティスマジシャン・守のガードイアンを守備表示で召喚へJM・守のガードイアン・魔法使い族・DEF1900・風・3・チューナー・ターエンダだ」

さつき確認したが、相手の手札にも、スピードスペル・ジ・エンド・オブ・ストームがある。アレは発動したら、モンスターを全て全滅させ、そのコントローラーに1体につき300ポイントのダメージを与える。

だが、そのカードを発動させるにはスピードカウンターが10個必要になる。

だからそれは、考えなくてもいい。

問題が、次の俺のターン終了後だ。

それにより、スピードカウンターが5になり、俺は相手が発動したスピード・ワールド2の効果によりダメージを受け、そのまま敗北する。

それだけは・・・避けたい。

「っふ、敗北を連想するその姿、実に醜く笑える」

「っ、キサマ！」

「へっ、お前から睨まれても何ともねーわ。俺はお前を倒して、仲間を倒して、殺して、殺して、殺しまくらなければ気が済まないんだよ！俺の気が満足するまではな」

狂乱者と言っただけあって、その本心は根っから腐っているのがよく分かる。

嫌気が差してくる。

「俺のターン」

T o t o ・ S p c 1 ・ L P 8 0 0

H e r ・ S p c 3 ・ L P 8 0 0

「っふふふふ、お前等に良い物を見せてやるよ」

良い物を見せてやるだど？

「手札からダークマジシャン・自爆のリザードを攻撃表示で召喚！

「DM・自爆のリザード・魔法使い族・ATK100・闇・1・効果」

トカゲの形をした魔術師が現れた。

だが、これの何処が面白いと・・・？

「このモンスターは1ターンに1度、相手フィールド上に存在するモンスターを攻撃表示にさせ、そのモンスターと戦闘させ、更に相手が攻撃を行った事にする事ができる！」

んな！！

確か、魂の十字架の効果は！

「相手が攻撃を行った時、カードの上に呪縛カウンターを1つ乗せる事により、その攻撃を無効にする。そして3つ乗った場合、このカードを破壊する。そして、捕らわれた魂は、消滅する」

「っ、強制的にバトルをさせるなんて・・・それじゃ遊画に」

「・・・呪縛カウンターが1つ乗る！」

そうこうしていた時、リザードの口から火が吹いた。

その火に飲まれたガーディアンは、攻撃モードへと切り替わった。

「JM・守のガーディアン・DEF1900 ATK1000」

そして、守のガーディアンはリザードに向けて接近した。

ある程度の距離まで来ると、持ち前の盾を振り上げ、それをリザードに向けて振り下ろした。

「やめる！！！」

「この瞬間、魂の十字架の効果が発動し、その攻撃を無効にし、呪縛が打ち込まれる」

リザードの目の前に、禍々しいオーラをした巨大な釘が現れ、後ろの部分でその攻撃を受け止めた。

その瞬間、打ち込まれたかのように、遊画の方へと飛んでいき、一度手の平に突き刺さった。

「！！！！！」

その衝撃は、もはや言葉にすら出てこない程に呻いた。

「っ・・・」

遊画は、その衝撃で目を開いた。

その目に光は無く、ただただ目に見えない恐怖に怯えているように見えた。

「遊画、無事か!？」

答えはない。

「遊画、返事をして!しなければ許さないですわよ!」

それでも返事がない。

「……貴方はまだ、死ぬべきじゃない!こっちを向いて、遊画!」

「……」

無言のままだ。

そう思った瞬間、遊画は口を開いた。

「……罪深き人は、死んだ方がマシなんだ」

一体何を!そう、トトは思った。

「俺は、研究によって生まれ、そして……死ぬハズだった」

死ぬハズだった?

「俺は見せられた。自分の過去を、俺が生まれくる瞬間を」

「生まれる瞬間だと!」

瞬間、辺りが暗くなった。

「何だ一体!？」

「何が起きているのですの?」

「……これは」

瞬間、3人は同じ光景を目の当たりにする事となった。

数十年前、第88番地人体実験研究所

巨大な装置の中に、1人の人影があった。

そして、装置の目の前に……No.0001・Yugaと書かれたプレートがあった。

すると、その装置に異常を示すアラームが鳴り続けていた。

その時、1人の女性が、その装置開けると、中にいる赤ん坊を、優しく抱き上げた。

しばらくして、研究所は慌ただしくなった。

「どうなっている！コイツはすぐに破棄するべきじゃなかったのか！」

「知りません。我々がここに駆けつけた時にはすでに、赤ん坊は姿を消していました！」

「クツ、裏切り者としてアイツを始末しろ！アイツは邪心である実験台を連れ出したんだ。場合によってはその場で射殺しても構わん！」

「はっ」

研究所の廊下を、1人の女性は走っていた。

赤ん坊を抱きかかえたまま。

「はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……」

息切れしている上に、少しふらつき気味だった。

「……ふえ、フエエエエエエエン！！」

更に追い討ちをかけるように、赤ん坊が泣き出した。

すると、その女性はより力強く赤ん坊を抱きしめた。

「大丈夫よ、貴方は私が守るから。だから……安心しなさい。遊

画」

そうやって赤ん坊をあやしていた。

しかし、すぐに後ろから「いたぞ、あそこだ！！」と、声がした。

「クツ、早い反応なこと」

すぐさま女性は、ポケットからハンドガンを取り出すと、それを声がかした方に撃った。

パァンと、音を立て。

「ぐあっ！！！」

1人に当たったようで、うめき声が聞こえた。

「このまま逃げ切れれば！」

そう思ったが、そうはいかなかった。

反撃するように銃弾が、彼女の肩を撃ち抜いた。

「っ！！！」

その痛みには耐えきれず、手に持っていたハンドガンを落とした。

「でも……この子だけは……生きてて欲しい！」

女性は、近くの部屋に逃げ込んだ。

「はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……」

撃ち抜かれた肩からは、ドクドクと血が流れていた。

それでも女性は、必死に赤ん坊を抱いて、近くにあった毛布に赤ん坊を包み、*dust box*と書かれた中に、その赤ん坊を投げ入れた。

「これで……遊画はゴミ溜部屋に行ったはず。後は……私
が！」

だが、その女性の願いは儚く、1発の銃弾によって散っていった。
気づけば銃弾が女性の左胸に、撃ち込まれ、そこから赤い物が服に
滲んでいた。

「……え？」

女性は意識が遠のくのを感じていた。

そして力を失い、前方に向けて倒れていった。

だが最後に見せた女性の顔は、遊画の将来を思ったのか、綺麗な笑
顔を見せた。

「……でも、成長を……見たかつ」

ドサツ、その場で女性は……倒れた。

「赤ん坊は何処だ！まさか隠したんじゃないだろうな！」

「探せ！近くにいるはずだ！！」

再び慌ただしくなった時だった。

ビー、ビー、ビー、ビー

『緊急事態発生、緊急事態発生。小型モーター、イルミネーシ
ョン・フェイト』内部ニテ、異常ガ発生シマシタ。タダチニコノ場

カラ避難シテクダサイ』

いきなりの非常事態宣言に、研究員達は更に慌ただしくなった。

「何だつて！今すぐ逃げなければ、俺達は・・・爆発に巻き込まれるぞー！」

「いやあー！死にたくない！」

その場から逃げ出す人もいたが、すでに時は遅かった。

その研究所を含むその周辺の森林は、一瞬にして光に覆われた。

唯一助かったのは、そこから数キロ離れたゴミ溜場ぐらいである。

研究所自体が山の中にあつたため、そこだけは山のふもとに建設されていた。

恐らくは、ゴミ収集車がわざわざ山まで入らないようにするためあろう。

そのゴミ溜場には、赤ん坊の他に、アナウンスを聞いて慌てて自らをダストボックスに投げ込んだ人が数名いた。

最初に目を覚ました1人の男性は、近くにあつた毛布を見て、恐る恐る中を確認した。

そこには、自分が何よりも恐れていたそれが、そこにいた。

「っ・・・お前のせいだー！」

その人は、赤ん坊に向かつて銃口を突きつけた。

だが、撃つことは出来なかった。

汚れ無きその目をみるなり、その人は銃を降ろした。

「な・・・何だよ、どうしてそんな目で見える」

思い立ったその男性は、すぐに赤ん坊を抱いて、近くの広場に駆け込んだ。

そして倉庫からスコップを取り出し、赤ん坊1人が入れる程の穴を掘った。

その中に、毛布で包んだ遊画を入れそのまま・・・上から土を被せた。

「悪く思つな。お前が悪いのだから」

男性は呟くと、その場から逃げるように立ち去っていった。

しばらくして、その場に1台の車が止まった。

そして中から、1人の女性と1人の男性が現れ、埋められた場所を再び掘り返した。

毛布に包まれた何かを発見し、それを優しく、抱いた。

「……さっきの男、アイツがその人ね。それにパンドラの箱の予言通り、赤ちゃんがここにいたわ」

「まったく、酷い物だ。実験によって失敗した赤ん坊を、まさか破棄するとは。だが、安心しろ。お前は俺達が面倒を見てやる。えーつと、名前は……」

男性は、赤ん坊の胸元にプレートがあるのを見つけた。

そこには、Yugaと刻まれていた。

「遊画……お前は今日から、公栄遊画だ」

そう言った時、赤ん坊は笑った。

「……可愛いものね。こんな天使みたいな物が、悪魔になるんだから油断できないけど」

近くの街灯に明かりが灯された。

「……英子」

「ええ、彼は……私たちの計画阻止に賛同してくれると信じてくれるわ。だから……こんな場所では死なせない！」

彼女、英子の目には、より一層力が入っていた。

「さっきのは……遊画の過去なの!？」

「悲惨すぎますわ……あんな、実験の為に殺されかけるなんて!」

トトは、あたりの衝撃的な光景を目の当たりにし、ショックを受けていた。

「俺が……知らない事が。まさか!」

さっき言っていた、俺が事を起こさなければ、お前は今、この場に

はいないのだからなって意味は！

「お前が・・・ゼロ・リバーズを起こしたから、お前自身、俺自身は死ななかつたって事か」

「そうだ！俺が見せた映像はどうだったかな？トト・モーラン」

「ふざけるな！あんな事が起きていてたまるかよ。あんな悲惨な、何で失敗したからって破棄されなきゃならねーんだよ！」

もはや心は、怒りでいっぱいだった。

「知るか。だが俺は自己防衛をしたただけだ、悪いのは、生まれてきた遊画、ただ1人なんだよ！」

ヘルは遊画を指さした。

「・・・そうだよ、全て俺のせいなんだ！！俺のせいで・・・たくさんの命が失われた！」

「違う！！お前のせいじゃない。お前が責任を負う必要はないんだ！！」

「だが！！」

見るからに遊画は自暴自棄になっていた。

「俺がいたから、俺なんて、存在するんじゃなかったんだ！！」

「遊画！お前がそう言うのなら、お前自身はそうなのかも知れない。だがな、俺は少なくとも、お前にいて欲しい！！」

遊画は、ハツとした。

「トト・・・」

「俺は気づけばお前の中にいた。それは恐らく俺がお前の前世だからだ！俺はすでに2回死んでいる。だがな、今も俺はこうやって生きている！それは、お前がいるからだ！！」

「吠え面を、今すぐ黙らせてやる！」

クツ、狂乱者が・・・。

「まだヘルヘイムの攻撃があるんだよ！このまま果てる。ヘル・ブライネス！！」

ヘルヘイムの周りから、禍々しい光が放たれた。

瞬間、トトがいた場所は・・・光に覆われた。

「トト!!」

「へっはははははは!!これで終わり……だ!!」
ヘルは目を丸くした。

光に覆われた場所に平然と、トトがいたのである。

「っ……危なかつたな。多少は」LP100」

「な……何故だ。さっきの攻撃が通れば、お前のライフは……」
それに答えるように、トトは自分の隣にあるカードを指さした。

「罨カード、ハンズエド・ストップと、ハーフ・チューナーを発動した。ハンズエド・ストップは自分のライフをこのターンの終了時まで100以下にならない効果があり、ハーフ・チューナーは、相手が攻撃を行った場合、ダメージステップ終了時に攻撃を行ったモンスターのレベル以下のチューナーモンスター2体を墓地から特殊召喚する効果がある!」ハンズエド・ストップ・罨・効果、発動したターン、自分のライフポイントは100以下にはならない」ハーフ・チューナー・罨・効果、相手が攻撃を行ったバトルステップ終了時に発動する事ができる。自分の墓地から、攻撃を行ったモンスターのレベル以下のチューナーモンスター2体を特殊召喚する」
来い、守のガードディアンに、民のセイジユ!!!」JM・民のセイジユ・ATK1300・チューナー」JM・守のガードディアン・ATK1000・チューナー」

「一気にモンスターが2体揃ったと!だが、リザードの効果により、このカードは手札に戻す事ができる。そして、ヘルヘイムの効果により、リザードを墓地へ送り、蘇れ!悪意のジレンマ!!!」DM・悪意のジレンマ・ATK3000」
悪魔が再び蘇った。

「ターンエンド!」

ヘルもヘルで、ヤケクソだった。

「見る狂乱者!これが、仲間の絆だ!!」

「仲間の絆だと?笑わせるな。この状況でどう勝つと言うんだ!!」
「俺はお前を許さない。自分の欲望によって他者を傷つける事を平

然とやるお前を・・・俺は！！俺のターン！！」

T o t o ・ S p c 2 ・ L P 8 0 0

H e r ・ S p c 4 ・ L P 8 0 0

「シンクロ・バンクの効果発動！このカードに乗っているカウンターを任意の数取り除く事により、そのレベルのトークン1体を特殊召喚できる！ただし、この効果を発動できるのは3回までだ！ハシンクロ・バンク・永続罨・効果、シンクロモンスターが破壊される度に、このカードの上に「シンクロカウンター」を、破壊されたシンクロモンスターのレベル分乗せる。この効果で乗せられるカウンターの数は12個までとする。また、このカードに乗っているカウンターを任意の数取り除く事により、取り除いた数値のレベルの「シンクロトークン」（天使族・光・星？・攻/守0）1体を特殊召喚する。この効果を3回使用した場合、このカードは破壊される。俺はまず、カウンターを3つ取り除き！ハ12 9 ヽ1体目のシンクロトークンを特殊召喚！ハシンクロトークン・天使族・ATK0・光・3・トークン。そして、再びカウンターを1つ取り除きハ9 8 ヽレベル1のシンクロトークン1体を特殊召喚！！ハシンクロトークン・1」

貯金箱の中から星が現れ、それが1つの塊となり、巨大な星を作り上げた。

「そして、レベル3のシンクロトークンと、レベル3の民のセイジユをチューニング！ 3 + 3 〃 6 シンクロ召喚！切り裂け、ジャステイスマジシャン・乱舞のセツカ！ハJM・乱舞のセツカ・魔法使い族・ATK2400・地・6・シンクロ、効果」

「ハアツ！！」

二刀流の戦士が出てきた。

「何をするつもりだ？今更何をやっても無駄・・・」

「まだだ！！レベル1のシンクロトークンに、レベル3の守のガードイアンをチューニング！！ 1 + 3 〃 4 次なる正義が、想いを繋ぐ架け橋となる。導け、光を！！」

3つのチューニングリングの中に、1体のシンクロトークンが入り込み、輝きだした。

「シンクロ召喚!!!期待の星、シンクロチューナー、ジャスティスマジシャン-希望のイモーション!!!」
「JM-希望のイモーション・魔法使い族・ATK1400・光・4・シンクロ、チューナー」
中から、黒いロングヘアをした、黒魔術師を連想させる男性が出た。

『ホオアアア!!!』

「シンクロモンスターが2体・・・それに、その中の1体は・・・シンクロチューナー?」

「・・・何を、やるつもりなの?」

どことなく、辺りは疑問系な空気に包まれた。

「見るよ、これが・・・クリアマインドだ!!!」
境地。それが・・・

一気にアクセルを踏むと、加速を始めた。

キイイイイイイイイ
ン

「今更加速を始めて・・・何をやるつもりだ!?!」

・・・まだまだ、こんな物じゃない。

もつと風を・・・信じる。

そして感じる、己が限界を感じた時に、もつと奥があると! 決して恐怖を感じない。

何故なら、俺の周りには・・・。

カッ!!!

トトは目を開いた。

「仲間いるから!!!レベル6のジャスティスマジシャン-乱舞のセツカと、レベル4のシンクロチューナー、ジャスティスマジシャン-希望のイモーションをチューニング!!!
6 + 4 = 10」

「バカな!シンクロモンスター同士でシンクロ召喚を行うだと!」

希望のイモーションの中から星が飛び立ち、それが前方へと飛んでいった。

すると、ルート上に4つのチューニングリングに囲まれた道が現れ、そこに到達した。

「心が奇跡を繋ぐ時、新たな正義が生まれる！導け、光をおおおおおおお！！！」

D・ホイール前方が摩擦により衝撃波が発生していた。

それでもトトは、減速せずに、そのまま走っていた。

「アクセルシンクロオオオオオ！！！」

それは、とある男から伝えられた、至難の技。

彼は今でも覚えている。

人は……限界を超えた時に、新たな境地に辿り着く事ができると。

それが、クリアマインド！！

プオワーン

そんな音が聞こえたかと思えば、そこにトトの姿は無かった。

「き……消えた？」

すると後ろから、謎の衝撃波がヘルを襲った。

「クッ」

そこには、消えたハズのトトの姿と、ついさっきまではいなかったモンスターの姿が、あった。

「限界を突破せよ！レジェンド・ジャスティス・ウィザード！！！」

巨大な槍と、巨大な杖を持ち、顔は老人顔の渋系の顔だった。

そして、全身にチューニングリングを纏い、体中から粒子らしき光が輝いていた。

『トオツ、ティア！！レジェンド・ジャスティス・ウィザード・

魔法使い族・ATK3300・光・10・シンクロ、効果』

「何だ……このモンスターは！！！」

「行くぜ、お前を倒して、ヘルと遊画を救い出してやる！」

「！！何でだ、何でお前は……俺の為なんかに」

続く

次回予告

「この俺が負けるなど・・・まだ俺は発狂したい！殺したい、破壊を楽しみたい！」

「いい加減に諦める！お前はもう、逃げる事はできない！！」

「ん・・・だったら、力づくで！」

「チイ、ついに狂いやがったか！」

次回、遊戯王Fate 第37話「失われた光」

「・・・滅ぼす、何もかも・・・全て消し飛ばせ！！」

次回のキーカード

レジェンド・ジャスティス・ウイザード・魔法使い族・ATK33

00・光・10・シンクロ、効果

第36話「想いが繋ぐ力」(後書き)

あとかき

まあ、予想はしていたが……この話でこのデュエルが終わらなかつただと!!

やっべえ、計画に支障が生じたわ。

最高11ページを基準として製作している為、たまりにページの都合であやつて無駄にページを消費して、最後にページが無い……つて事にもなります。

アホやな、俺。

何やつているんだか。

………気を取り直して次回、本当に決着です。

トトは果たして遊画とヘルを救い出す事ができるのであろうか。

気になる次回は、1週間から2週間程度お待ち下さい!

今回みたいに1週間以内に出来上がる事は、多分今後はありませんので。

そんな訳で、次回もお楽しみに!!

3月26日 自宅にて

第37話「失われた光」(前書き)

ぼちぼちの調子で、やります。

第37話「失われた光」

「限界を突破せよ！レジェンド・ジャスティス・ウィザード！！」
巨大な槍と、巨大な杖を持ち、顔は老人顔の渋系の顔だった。
そして、全身にチューニングリングを纏い、体中から粒子らしき光
が輝いていた。

『トオツ、ティア！！レジェンド・ジャスティス・ウィザード・
魔法使い族・ATK3300・光・10・シンクロ、効果』

「何だ・・・このモンスターは！！」

ヘルは、目を大きく開いてそのモンスターをガン見した。

「行くぜ、お前を倒して、ヘルと遊画を救い出してやる！」

「！！何でだ、何でお前は・・・俺の為なんか」

突然の言葉に、遊画は戸惑った。

何故！？何故って、決まっているじゃねーか！

「俺はお前を必要とするからだ！」

「お・・・俺を？」

以外にも、遊画は驚いた顔をしていた。

だが、すぐにシュンとした顔に戻ってしまった。

「・・・ウソを言うな。俺みたいなヤツが必要とされるだと？笑わ
せるぜ。本当に必要とされているヤツと言うのはなトト、お前みた
いなヤツなんじゃねーのか？」

「違う！！」

必死になってトトは否定するものの、遊画自信がそれを否定する連
鎖が続いていく。

「何が違うと言うんだ？お前は有能だ。有能だから、シンクロを超
えたアクセルシンクロを行えた。だが、俺はどうだ。自分がなり損
ないだから、研究所から捨てられ、中のアイツが研究所を滅ぼした。
これじゃ、最悪の根元だよ」

「それでも、お前の方が有能だ！！有能だから、ウィンやエリアは

お前と心を通わせた！お前は人の気持ちを分かり合える心を持っている！俺のこの力も、俺の親父、シモン・ムーランが助言してくれたおかげで、俺は手に入れる事ができた！」

シモン・ムーラン。

かつて、王の側近として働いていたトトの義父である。

彼は、親子関係を隠す為に、トトの名字をムーランからモーランへと変更して、自分の跡継ぎをトトへと継がせようとした人物なのである。

「俺は、元々捨て子だった。俺は親から捨てられ、危うく地獄へと連れて行かれそうになった！だが、そんな時に親父は俺の前に現れた！そして俺を、自分の息子のように仕立て上げ、可愛がった。俺は今、後悔している！何故その時に、愛を感じられなかったのか。何故、感謝が出来なかったのか！その時、何故俺は退屈だったのか！」

一筋の涙が、トトの頬を伝った。

「だから遊画、俺はお前に伝えたいんだ！絶対に……自分を諦めるな！！」

「うるせえよ！！」

痺れを切らした遊画が、キレた。

「うるせえよ、お前はお前だ。俺は俺だ、お前が何を言おうとも、俺の気持ちは変わらない。結局俺は、悲しい現実から目を背いて生きていた！あの人が俺を助けても、結局は何も、変わらなかったんだよ！！」

十字架に縛られたままの遊画。

それをじっと見つめるトト。

いつの間にか2人は、説得する側と説得される側になっていた。

しかし、それは思わぬ形で、終わりを迎えた。

「っ！！」

ウインとエリアは、不愉快な表情に包まれていた。

すると、ガルドスを思いつ切り遊画の方へと向け、そして……

ゴフツ！！

エリアの拳が、遊画の頬に直撃した。

「……………」

瞬間に、周りの空気がシンとなった。

「…………ふざけるな」

最初に口を開いたのは、エリアだった。

「ふざけるな！何で貴方は、自分を否定ばかりするの！！私は……いや僕は、そんな姿を、もっと許せない！！」

両手を封じられている今、遊画は頬を手で押さえる事も出来ず、ただ呆然としていた。

更に口の中から、生暖かい何かを感じた。

殴られた拍子に口を切ったようだ。

「…………さつきから黙って聞いていれば。どうして、生かされた事を粗末にしようとする！！」

ついにウインも、口を開くと、怒りを露わにした。

「貴方はあの人から助けられたのでしょう！それなのに、どうして生きる希望すら持てない！助けられたのなら、その人の分まで生きなさいよ！それが…………助けられた人の定めでしょ！！」

言葉のナイフが、遊画の心を突いた。

「…………希望を持って、とでも言いたいのか？」

瞬時に、ウインは答えた。

「そうよ。希望があれば、生きる力ができる！希望があるから、私たちは生きています！絶望の中に生きる希望なんて物は何処にもない！だから…………生きて、生きるのよ！公栄遊画！！」

失われた希望を、取り戻した感覚に陥った。

「…………だったら、助けてくれよ」

微かな呟きだったが、それはこの場にいる全員が聞き取れる音量だった。

そして、小さく、トトは頷いた。

「ああ、その言葉をどれだけ望んだことか。お前がいなければ、ど

うやうや今を過ごす。それこそお前を失えば、ノルンから何をされるか分かったもんじやないし、何よりも俺が自分自身を許さない」
しばらく瞑っていた目を、開いた。

決意に満ちたその目は、深紅に満ちた瞳が神々しく輝いていた。

「決着だヘル……いや、狂乱者！お前を裁く時がやって来た。
自分の罪を……己自信で味わえ！！」

絆、それは切っても切り落とせない頑丈な物。

仲間、それは自分をとり囲む大切な存在。

希望、それはどんな状況でも必ずある物。

そして信じる想い。

それは、絆、仲間、希望が集まりし時に発生する、大いなる力。

どんな力にも負けず、どんな悪にも負けない。

それが、絆で結ばれた者たちの力である。

第37話「失われた光」

闇の道が、地上の方へと到達した。

町中はパニックとなり、普段は賑わいを見せている町の中心の道は、シンとしていた。

シンとなっている道に、2台のD・ホイールは降り立った。

町中を飛ぶことが出来なくなったため、ウイン達を乗せたガルドスは一度近くの広場に降り立つべく、コースを外れた。

「……最後まで見届けたかったけど、仕方ない！」

「ですわね」

そのぼやきを最後に、広場に向かって方向変換を行った。

まだまだ黒い道は、道を外れる事無く続いて、道筋が地上に示されていた。

その道に従って、2人は走っていた。

「何か希望だ！結局コイツに何ができた？死神を倒して町を救った

？女どもの闇を解消した？それがどうした！お前が思っている以上に、コイツの罪は重い・・・」

話の途中だったが、トトは自分の言葉でそれを打ち切った。

「その罪を重くしたのはお前だ！お前が研究所を破壊したせいで、多くの尊い命が散った！それを遊画に罪を着せて、お前はそれを嘲笑っている。それが遊画の罪だとすれば・・・その罪を元に戻すまでだ！！」

「口では達者だな。だが、今の状況でそんな事を言えるのか？攻撃力3000と、攻撃力2500のモンスターを前に、しかもヘルヘイムの効果により、攻撃を行えば攻撃力は5500へとアップする！だからと言って悪意のジレンマと戦闘を行えば、ライフは300ポイントしか減らず、しかもそれ以前に攻撃を行えば、魂の十字架にカウンターが1つ乗り、遊画を苦しませる事になる！だからと言って、このターンをエンドすれば、次のターン、スピード・ワールド2の効果により800ポイントのダメージを受けお前は負ける。こんな状況で、何ができる！」

「それはどうかな？」

「なに！」

「シンクロ素材となった希望のイモーションの効果発動！このモンスターがシンクロ素材となった時、カードを1枚ドロウする！」

手札には、スピードスペル・ダッシュ・ビルファアしかない。

このカードは、相手フィールド上に存在するモンスター1体のコントロールをエンドフェイズまで得る効果がある。

ただし、必要とされるスピードカウンター数は4。

今の段階で俺のスピードカウンターは2、発動できる魔法カードではない。

ここで運良くスピードスペル・オーバー・ブーストを引けば、この効果は使える。

どうなる、引くか引かないか。

運命は、このドロウに委ねられた！

「カードを……ドロオオオオオオオオ!!」

デッキの上から勢いよくカードを引くと、それを見た。杖の精霊魔術師と書かれたカードであった。

「これは……そうか!」

トトは、勝機を確信した。

この手があつた!

「レジェンド・ジャステイス・ウィザードの効果発動!!1ターンに1度、手札を1枚墓地へ送る事により、相手の魔法、罠ゾーンに存在するカードを全て、手札に戻す!」

「何だと!？」

十字架に縛られていた遊画の姿が、徐々に消えていた。

「……ありがとう」

その言葉を残して、消え去った。

「安心しろ遊画、お前を救い出すまでは……俺は負けない!」
キツと、ヘルを睨んだ。

「さらにこの効果を使用したターン、このモンスターの攻撃力は1000ポイントアップする!」

体の周りの粒子が集合して、一ヶ所に集まり、巨大な玉となった。

『又オオオオオオ!!レジェンド・ジャステイス・ウィザード・
ATK3300 4300』

「……攻撃力が、4300だと!?!だが、冥界神特有の効果として、相手はこのモンスター以外のモンスターとは戦闘できない!」

「もう1度言う。それはどうかな」

「んだと!」

トトが持つ最後の1枚の手札、この手札が……彼の勝機を確実にさせるカードである。

「手札から、杖の精霊魔術師を召喚!杖の精霊魔術師・魔法使い族・ATK200・光・1・ユニオン」

杖が現れ、その杖の周りに小さな魔法使いが、姿を見せた。

「さらに、このモンスターをレジェンド・ジャステイス・ウィザードに装備！装備モンスターが戦闘を行う時、お互いのモンスターはモンスター効果を発動できない！！」

つまり、このモンスターとヘルヘイムが戦闘を行ったとしても、効果自体を発動できなくなり、攻撃力が変わらないままヘルヘイムは破壊され、戦闘ダメージ1800を、相手は受ける。

「バカな！！この俺が負けるなどと・・・まだ俺は発狂したい！殺したい、破壊を楽しみたい！」

絶望を感じたのか、ヘルは驚愕した。

「いい加減に諦める！お前はもう、逃げる事はできない！！」
追い詰められたヘルは、自暴自棄となってグネグネと滅茶苦茶に走っていた。

「ん・・・・・・・・だったら、力づくで！」

何かを決意し、ヘルはトトの隣まで加速した。

そして、D・ホイールに向かって体当たりをし始めた。

「があっ！チィ、ついに狂いやがったか！」

これじゃ、攻撃宣言をする事も、自分の事で一杯一杯になって宣言できない。

それ以前に、しばらく攻撃を受け続けていたら、いずれか転倒する危険がある！

どうすれば・・・・・・・・。

「あっはははははは！！そのまま朽ち果てるがいい・・・・・・・・ぐあっ！？」

急にヘルが、苦しみ始めた。

「ぐああああああ！！な・・・何をする、ヘル！！」

「・・・・・・・・これ以上、お前の好きには、させない！」

「・・・・・・・・この、冥界の化け物が！己自信の邪心に勝てるだけでも・・」

「・・・・・・・・俺は、あのバカから守る大切さを知ったんだ。だから・・・・・・・・今、アイツを傷つけているお前を俺は許せない！」

「ま・・・守る、大切さだと!？」

・そうだ。人は、守りたいヤツがいれば、いつだって強くなれる！俺は冥界の女神だが、それでも、アイツのせいで人になりたいと思っってしまった!！これは、アイツから悪影響を受けたかな・・・いや、どつちも似たようなヤツだったからか。

「何を言いたい、ヘル!？」

・つまりは、遊画とトトは、かけがえのない絆を有している!いや、それ以前に遊画の存在が大きすぎたんだ。遊画は、アレだけの事を言っておきながら、仲間から見捨てられていない。これは、アイツ等が遊画の事を、愛しているからだ!！愛は絆を超え、例え想いが届かなくても、届こうとする意思が紡がれる。

「馬鹿馬鹿しい!！」

・トト・モーション!貴方の手で、止めを刺して。この人格が、二度と出てこないように!

「っ・・・うおおおおお!!！」

突然ヘルは、呻きだした。

その時、ヘルが手を伸ばすと、そこに何かを唱えていた。

「生意気な・・・だったら俺の中から出ていけ!冥界の化け物が!！」

瞬間・伸ばしていた手の側に、もう1人のヘルが現れた。

しかも、頭を掴まれた状態で。

「っ・・・!!ダメ、遊画を使ったら・・・」

ミシミシと音を立て、苦しそうにしていた。

「き・・・キサマ!！」

トトはヘルの場所まで、加速を始めた・・・時だった。

「コイツはお前にくれてやる!!！」

ヘルはヘルを、トトに向かって投げ飛ばした。

目の前にヘルが映ったと思った次の瞬間には、トトに直撃し、バランスを崩した。

「っ・・・ぐあっ!!！」

トトの手元には・・・ヘルが。

「こ・・・ここで、落としてたまるかよ！うおおおおおおお！」

落ちかけているヘルを、必死になって押さえていた。

元々からバランスが崩れており、そのまま受け止めれば転倒するのは間違いなしの状況だが、それでもトトは諦めなかった。

「折角手に入れた・・・大切な物を、ここで落とすわけには！」
ガクンと、体が斜めに倒れ込んだ。どうにか受け止める事はできたが、それでも転倒は避けられそうにもない。

ヘルを一生懸命抱きながら、衝撃に備えた。

そして、ボクツと鈍い音がしながら、トトは転がった。

幸いヘルメットがあるおかげで頭は無事だったが、肩に大きな負担が掛かってしまい、ジンジンと痛みが込み上げてきた。

そしてD・ホイールも運転手を失い、横に倒れた。

ズガガガガガと音を立て、しばらく引きずられると、停止した。

プシューと、D・ホイールから煙が出ている。

微かに見えるがその画面には「CALLED OFF（強制終了）」の文字が浮かんでいた。

どうやら、デュエルは強制終了で終わっただけらしい。

「か・・・体が、痛い」

よろよると蹠跟けながら、トトは立ち上がろうとした。

「た・・・立ち上がるな、トト。お前の体が限界に近いんだ。だつたら・・・俺の側から離れるな」

ギョツと、ヘルはトトを抱きしめた。

「もしもお前が離れるのなら、俺はもう自分自身を呪う。ノルンは最初から、こうなる事を見ていたのかは分からないが、それでも俺は、大切な者を、手に入れたんだ。だから、側にいてくれ。トト・モーラン」

「・・・ああ、それは分かっている。だが、遊画を・・・俺

の大事な仲間も、取り戻したい！」

突然、ヘル表情が悲しげな表情へと変化した。

「遊画は、遅かった。もう、手遅れ」

微かな声だが、それを聞き逃すはずは無かった。

「なに！！それはどう言う事だ！？」

するとヘルは、狂乱者の方を指さした。

元となる魂を失い、黒い煙状の何かとなっていた。

「ぬおおおおおおおお！！まだだ・・・まだ俺は、負けていない！！！」

往生際が悪い為か、完全に負けを認めていなかった。

「そうさ・・・俺は、まだ！！！」

崩れた顔に、笑みが浮かばれた。

「公栄遊画・・・キサマを乗っ取り、俺は神になる！」

ヘルの手札ホルダーにある、魂の十字架を狂乱者は手に取った。

「待て・・・っ、何をするつもりだ！！！」

「俺は狂乱者だ！発狂者だ！殺戮者だ！もっと・・・苦しみを味合わせてやる！！！」

カードに向けて、何かを唱え始めた。

「ダメ・・・その力を手に入れては・・・アイツは自滅する！！！」

傷ついた体で一生懸命立ち上がりながら、ヘルは叫んだ。

「自滅するって、どう言う意味だ！」

途中で力が無くなったのか、ヘルは再び膝を折った。

「クッ」

ヘルとトトは、お互いに支えながらどうにか立ち上がった。

「考えてみる。アイツが研究所の遊画に乗り移ったとしても、それが気づかれていなかった。それなのに、何故遊画を破棄しようとしたか、分かるか？」

確かに、考えてみればそうだ。

乗り移った拍子に何かのトラブルがあれば、すぐに何かの処置は施

せていたハズだ。

だが、少なくともコイツから何かをやらかしたとは一言も聞いていない。と言う事は、別に何か原因があったとしか考えられない。

「遊画が何故、失敗作と呼ばれていたのか・・・それは、モーターメントを通じて、人々の邪念が集合してしまったからだ！」

衝撃的な事実には、トトは驚きを隠せなかった。

「なん・・・だと」

「しかも、集合した邪念は、最も質が悪い「不必要な者を排除したい」と言う人々の心から生まれた、破壊の使者となって、研究所の一部を破壊した」

狂乱者が見せたあの映像だけでもウソだと信じたかったのに、更に追い討ちをかける言葉だった。

「ウソだ・・・ウソだ!!」

駄々を捏ねるように、トトは全てを全否定していた。

「現実から目を逸らすなトト！俺も最初は俺の仮設に違和感を持ったが、遊画から感じられた邪念と狂乱者の見せた記憶で、事実だと知った」

だとすると、精神状態が最も不安定な今、ヤツが体に乗っ取れば・・・まさか!!。

そのまさかが起こった。

何かを唱え終わった狂乱者は、クツクツと笑っていた。

「これで、再び・・・」

瞬間、カードが光り出し、その光が狂乱者に放たれた。

神々しく光り続けたカードの中には、縛る者を失った、ただの十字架が描かれていた。

「俺は、最強に・・・ぐふっ!!」

狂乱者の体から、強烈な何かが込み上げてきた。

それは、破壊を望む意思と、今まで仲間を傷つけられたと言う、遊画の邪念。その2つが重なり合い、邪心を抹消しようとしていた。

「な・・・何だ、この力は」

- 破壊する、滅ぼす！俺の仲間を傷つけたその報い、許される行為ではない！

「クツ……公栄遊画、お前は分かっているのか！お前がいたから」

- お前みたいなのヤツがいるから、俺は苦しむ。だったら、お前を消し去るまでだ！！

「け……消し去るだど！？戯れ言は程々にしろ！」

- 全てを消し去る。お前も、仲間も、そんな奴らがいるから……俺は苦しんでいる！

「何を言っている、コイツは……」

- 滅んでしまえばいいんだ。俺を苦しめる全てを。周りの人々が俺を苦しめ、俺の気持ちなど誰も分かってはいない。そうやって人は、苦しんでいる事も知らずに、人を平然と傷つける。俺はもう、そんな連鎖を断ち切りたい！

「そ……そうだ、俺にその体をよこせば、願いは叶う」

- お前も、苦しめる1人だ。俺は孤独だ！余計な欲は持たない。だが、今は欲を持っている。俺をバカにする奴らを、消し去りたい！！

「ぐ、お前……俺は最も恐れているとでも言うのか？最も俺が望んでいた孤独、そして恐怖。それに俺自身が……怯えているとでも言うのか！？」

- 弾ける狂乱者。己が俺に裁かれるのを光栄に思いながら！！
声に出せない程、狂乱者は呻きだした。

そして刹那、狂乱者の体が遊画へと変化した。

それと同時に、狂乱者は黒い何かへと変貌を遂げ、遊画の体から離れていった。

『俺は死ぬのか……。こんなガキに、俺は……。認め……。言葉の途中だったが、徐々に消滅していき、結局最後まで言葉を出せずに、消え去った。』

その時、近くの広場に降り立ったウィンとエリアが、急いでやって来た。

「トト！デュエルは・・・」

お互いに支え合っている姿を見て、2人は胸をなで下ろした。

「・・・勝ったみたい」

「良かったですわ。これで・・・遊画を」

2人は遊画の方を振り返った瞬間、ヘルが叫んだ。

「いや、まだ終わっていない！今度は遊画自信が闇に捕らわれた！
！」

2人は、すぐに固まった。

まだ、終わっていない？遊画が闇に捕らわれた？

疑問が、彼女たちの脳内を駆けめぐった。

「・・・それって、あの人格が遊画を？」

「それならまだマシだ。今の遊画は、人々の「破壊を望む意思」によって、感情を破壊にしか向けられない人形と化してしまっている
！！」

言葉が終わったのと同時に、遊画の口が開いた。

「・・・滅ぼす、何もかも・・・全て消し飛ばせ！！」

救われたと思われていたその少年は、人々を親の仇を見るような目で、見ていた。

「ゆう・・・が？」

「貴方、自分が何を言っているか分かっているの！」

ウィン達を無視するようにして、D・ホイールへと乗り込んだ。

「いずれ、お前らを殺しに来る。デュエルでな！！」

その言葉を最後に、遊画はペダルを踏み、全速力で走り出した。

「ま、待ちなさい！！」

「・・・逃がさない！！」

ウィンとエリアが後を追おうとした。

しかし、相手はD・ホイールだ。無駄な足掻きになくなっていない。だが、遊画はそれを尻目にカードを1枚取り出すと、それをデュエルディスクに召喚した。

「碎ける、お前らはここで死ぬ」

瞬間、近くで爆発が起こった。

トトを含めてその場にいた全員は、最初は何が起こったのかは分からなかった。

巨大なモンスターが現れたかと思った瞬間、その場は爆風に飲み込まれた。

誰一人として、その爆発がモンスターの攻撃だと分らないまま、全員が吹き飛ばされた。

宙に舞いながらも、エリアは遊画の姿を確認した。

その瞳には、誰一人として見てはいなかった。

ただ、孤独を感じる寂しそうな目を、ただ見つめるしかできなかった。

「どうして……そんな悲しい目をするの？ 私じゃ……ボクじゃダメだったの？ ねえ遊画、ボクたちを見捨てないで……ボクは貴方の事を……好きだから」

いつもはお嬢様風な口調のエリアが、ここまで素に戻っていた。

今の現場を、認めたくないと思いつながら、地上に叩きつけられるのを待つばかりであった。

気づけばエリアは、宙に浮く何かを感じ取った。

それは、エリア自信の瞳から溢れている、涙である。

「あ、今ボク泣いている？ 泣いているの……不思議なものね。

昔のボクなら、男の事で泣くことはまず無かったのに。今じゃ自分の命が散りそうな状況でも、遊画の事で泣いている。多分、昔のボクに見られたら「情けない」とでも言われそうね。でも、昔のボク・

……いや私に、胸を張って言い切れそうだよ。「遊画は周りにいるような男じゃない！ 遊画は……遊画だ！」って

言いたいことを言い切ったが、その意識はすぐに途切れた。

「……リア、エリア!!」
声が聞こえた。

更に揺すられている。意識が戻ったのを確認すると、静かに目を開いた。

「ここは……?」

辺りを確認すると、トトとヘルが横たわっていた。

そして、自分を揺すっていた人物は誰かと疑問を持ちながら、横を振り向いた。

「気がついた!良かった」

涙目をした、ウィンが目映った。

「ウィン……そうか、私たちは遊画のモンスターによって飛ばされて、意識を失ったのね」

体に異常が無いのを感じたのか、スツと起きあがった。

「体は、せいぜいかすり傷ぐらいね」

それでも、ある程度の高さから落下したのだ。

人一倍に体が丈夫なのを感謝するぐらいだわ。

と、エリアは考えた。

「……これから、どうする?あの調子じゃ、遊画はこの町周辺のデュエリストに、デュエルを挑むでしょうね。破壊を望む者なら」

「分かっている!分かっているけど……今の私に、遊画を追う資格なんてない!ずっと側にいれば、分かっていたはずなのに、自ら手を引いて、遊画が孤独になっても何もしてあげられない。そんな私に……ボクに、追う資格なんてあると言うの?」

気がつけば、エリアの目からも涙が溢れだしていた。

そして2人同時に、ガクリと膝をついた。

どうする事もできない今。

それでも助けたいと思う意思。

でも、自分のせいでそれができない。いや、やる資格がない。

彼女は、大いに苦しんでいた。

それは、ウインも同じだ。

「……私も、遊画を追いたい。でも、自ら手を引いちゃったうえに、死んでしまえとまで遊画に言ってしまった。私の方が、もつと酷い事を言ってしまった!」

ただただ溢れる涙。

止めたいと思う意思。

遊画をこれ以上、傷つけさせたくはない!

ウインも、最悪の連鎖で、苦しんでいた。

「ボクは……どうすればいいの? 誰か答えてよ、お母さん」

エリアは、どうする事も出来ない今、存在しない者までも頼ろうと
していた。

しかし、それ程までに追い詰められている状態であるが故である。
誰も、助けてもらえない。

今の絶望に、彼女たちは立ち上がる事すらできなかった。

ただ、泣くことしかできない今……

「エリア。そんな涙を見せるものじゃありません」

「しっかりしな! こんなガキがあたしの孫だなんて、みっともないよ!」

突然、優しい声とあら荒々しい声が同時に聞こえたような気がした。

「……え?」

ウソ……と、疑いたくなるような感じに陥った。

声が出た方を振り向くと、エリアは目を丸くした。

そこに、いるはずのない2人がいるのだから。

片方は、貝鬚のように髪がグルグルに、まるで巻き貝のような赤い髪色の髪型をしており、顔がおばちゃんな顔つきで、服装は巨大なヒレ状の襟と思える装飾品が特に目立つのが特徴で、言葉が年寄り臭い。

悪印象しか持てないこの人がエリアの祖母、ノエリア・ルイマリン。そんな祖母とは逆対象の、穏やかそうな顔つきに、クセのある赤いロングヘアをしており、服装も貴族を思わせるドレスに、フリフ

リのスカートにストッキングをした。少女とも思えるその容姿。今まで愕然としていたエリアが、恐る恐る聞いてみた。

「エミリアお母さんに、巻き貝ババア」

「誰が巻き貝ババアよ!!」

思いつ切り、ノエリアはエリアに向かって持っていた杖を容赦なく叩きつけた。

プシューと、エリアの頭にたんこぶができた。

「い・・・痛い。流石に言い過ぎた」

若干は反省しているものの、それでも言い過ぎたぐらいにしか反省していないのがよく分かる。

「フン、まだまだ青ケツのガキのクセに、年寄りをバカにするモンじゃないわよ。あたしはね、少なくともアンタよりは知識として優れているんだよ。それにエミリア、アンタはアンタでこの子を甘やかしすぎなんじゃないのかい?ここまで酷くなっているわよ」

「それは昔からでしょう?お母様がエリアに向かって「巻き貝ババア」とやったから、それがこの子とってトラウマだったんじゃないのかしら?お母様怖いし」

穏やかそうに言っているが、サラリと最後の言葉はただの批判にしかなくていいのに、当の本人は気づいていないらしい。

「正論だけどね、そこまでハッキリあたしの事を怖いと言えるのはエミリア、アンタぐらいしかいないと思うわよ!!何処で育て方間違ったのかしらね、この娘は!!」

半分キレかかっているノエリアに、エミリアは更に拍車をかけた。

「あらヤダお母様。私は最初から、お母様を見て育ってきたのだから、お母様に原因があると思われまますわ」

「ムキイイイイイイイイイイ」

「!!」

もはやどうする事もできない怒りを、言葉に出していた。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

置いてけぼりの2人は、ただポカーンとしていた。

「私は辛かった。どうして、私だけ、こんな運命を背負わなければならなかった、でも……」

「甘ったるいわね。そんなに救いたいのなら、救えばいいじゃない」
大体の予測ができたのか、ノエリアは口を挟んだ。

「……え？」

「だから、救えばいいじゃないって言っているのよ。何処までものるまなのよ、アンタは」

指をさされたまま、エリアは啞然としていた。

続く

次回予告

「救えばいいじゃない。救いたい人を救うのは、常識だと思わないのかい？このガキは」

「で……でも、私にそんな資格なんて！」

「五月蠅いわね。あるないの問題じゃないと、何度言ったら分かるの？用は、気持ちの問題でしょ」

次回、遊 戯 王Fate 第38話「救いたいと思う気持ち」

「エリア、貴方がやりたいようにやればいいのよ。その結果がどうであれ、最後に笑いたいでしょ？」

次回のキーカード

スター・マジシャン - 相殺のクラッシャー・魔法使い族・ATK2

800・闇
9・シンクロ、効果

遊 戯 王 F a t e ラジオ小説その6 (前書き)

しばらくやらないとは思っていたが、ヒマなのでやりました。

遊 戯 王 F a t e ラジオ小説その6

エリア「それで、いつになく連れてこられた感想は？ですわ」

遊画「……………」

ウイン「……………返事がない、ただの屍のようだ」

遊画「屍でいいよ。もう俺には、生きる勇気なんて何一つ残っていないのだからな……………」

何が起こったのか、説明。

流れ……………遊画「ただいまー」 テーブルの上に、怪しいDVD

遊画「……………母の仕掛けか？やられてたまるか！」 窓からポ

イ 何故か近くにいた子ども「お……………お兄ちゃんが、ボクの大切なDVDを捨てた。死んでしまったおばあちゃんの、大切な形見だったのに」 遊画「うつ……………悪気はなかった……………の、だが」

子ども「人でなし！お兄ちゃんなんて、電撃の中で気絶してしまえばいいんだ！！」 遊画「……………つてか、何でこんな場所に子どもいるんだよ！？ここ俺ん家だぞ！」 ……「はーっはははは

はははは！！！！」 遊画「この無駄にビツクリマークが多い笑い

声は！」 ……「その人の心を持たないクズ！正義の味方の生まれ変わりであるこの私が成敗してやる！！！！」 遊画「恥ずか

しくないのか！正義の味方の生まれ変わりつて、最近の戦隊系でもそんな言葉言わんぞ！！それに俺は、悪気はなかったと……………」

子ども「うつつ……………おばあちゃん」 ……「大丈夫だ、お姉ちゃんがああを成敗してやるから」 遊画「イヤにリアルでイ

ヤだな！！何でおばあちゃん、DVD形見に残したんだ！そして加奈、クズからゲスへとマイナスにランクを上げるな！！エクシース

でもやるつもりかお前は！」 ……「黙れ、この大気中に舞っているハウスタストのほんの一部分にも満たない細胞部分」 遊画「

長っ、そしてついには人間扱いさえもなくなった！！俺、死んだ

細胞扱い!?」 ??? 「正義の味方、カイバーマンもお前を許さないだろ!」 遊画「そしてそこでカイバーマンなんだ!お前の思考は読めないわ!!」 ??? 「食らえ!!」 遊画「来るか!」
??? 「スタンガン!!アタック!!!!」 一瞬にして、遊画の首筋へ 遊画「そして攻撃はリアルにスタンガン・・・ぎゃああああああああああ!!」 んで、気づいたらここへ 遊画「ツッコミ疲れた・・・ 我が義妹は、容赦なく俺に襲いかかりやがった」
エリア「そこは加奈さんですからね、兄に対する愛が伝わってきましたわ」

ウイン「・・・兄弟愛」

遊画「兄弟愛じゃない!もはや愛が悲しむの哀だ!!」

エリア「あ、ちなみに本番始まっていますよ」

遊画「言うの遅くね!?これが本物のラジオなら放送事故レベルの出来事だよ!」

ウイン「・・・そんなこんなで、始まった。ラジオ小説」

エリア「今回も辛いテンションでお送りしますです」

遊画「辛いテンションでやる必要性を、一字一句違えることなくキツチリと説明してもらおうかあ?」

(BGM開始)

ウイン「・・・それじゃ、最初のコーナーから」

遊画「ああ、始まるんだな。最近無かったから、作者が飽きたと思つたのに」

ウイン「・・・公栄遊画の、キザ台詞集」

遊画「誰がキザ台詞言った!?俺、一度もキザな事言った覚えがまるつきり無いんだが!!」

エリア「このコーナーは、これまでに遊画がほざいたキザな台詞を放送事故レベルでお伝えするコーナーです」

遊画「だったらやるなよ!しかも言ったじゃなくてほざいたですからね、おまけに放送事故レベルならなるなよ!」

ウィン「……最初の台詞は、これ」

「だが今なら分かる、仲間と言うものが、そして仲間が傷つく所なんて、俺は見たくない。お前の父親への恨みを晴らせないのなら、俺がお前が受けた痛み、いや、それ以上の痛みを受けてやる」

「!」

雅は再び下を向いた。

「……痛いじゃ済まされないかもしれない」

「それならそれでいい、俺は死んでもいいからな、だからその受けた痛みを、俺にぶつける。男である、お前の嫌いな、男に向かって」

エリア「うわー、ドMですわね」

遊画「どう受け取ったらそんな解答になる？」

ウィン「……今、同じことを言ってみて？」

遊画「それはただの変態だからな！何で何もない状況でお前に殴られなきゃならねーんだよ!!!」

ウィン「……私たちを吹き飛ばした、あの時の恨み」

遊画「本編の恨みここでぶつけるな!!!」

エリア「そ……そんな訳で、今度はこの台詞」

「私は、確かにお母さんの事からずっと逃げてきた。それって、へんなのかを聞きたいの」

……その事が。

「別に変ではない」

「……え？」

「俺も少し考えたが、それは別に変ではない。ただ、その事をずっと引きずっていたら、そりやおかしいさ。誰でも、自分の娘が自分のせいで落ち込んでいるとなれば、それこそそれが相当な悔いとなるだろうな。だってさ、お前だってそうだろう、自分の友達が自分のせいで落ち込んでしまった時、それを引きずっていたら、お前だっ

て「あの時、あんな事をしなければよかった」と後悔するだろ。それと同じだ、前にも言ったと思うが、誰も忘れるとは言っていない、むしろ忘れてはいけない。思い出は、楽しい事だけでは無い、悲しい事だってある。それをどう乗り越えるかがお前の課題だ」

ウィン&エリア「何様のつもりなの（でしょうね）」

遊画「言うと思ったよ！最近の調子から考えれば、少なくともお前はそう言うだろうな！！」

エリア「まあ、今の段階では貴方にそんな事を言う資格なんて無いですけどね」

遊画「だろうな！今現在、昔の事をネチネチ言っている俺にそんな事を言う資格は無いだろうな！！」

ウィン「・・・次は、これ」

「・・・うるせえよ・・・お前には・・・分からないだろうな・・・」

再びもう1発右頬を殴った。

「そりゃあ分からないわよ。そんなウインを殴ったりする行動、もはや分かりたくも無いわよ！」

「・・・そつちじゃねえ」

「・・・？」

「・・・っ、お前には分からないだろうな・・・守りたい・・・」

守りたい？

「守りたい者を守りたかった。それでどうなるうとも俺はどうでも良かった。今までは無意識で雅を殴ったりしたが、もう俺は気づいたんだ。あんな思いはしたくない。大切な人を失う悲しみはもう・・・だから俺は体を張って雅を守り抜いた。俺は死んでも良かった、無意識に発動した時、俺は久しぶりに守りたい・・・と思った。雅が無事なら・・・俺は、お前らに嫌われても・・・」

ウイン「……………これ以上言ったら、殴る」

バキッ

遊画「グハッ!!」

バタッ

遊画「ま……待てウイン、これは過去の回想シーンで……」

ウイン「……………問答無用」

遊画「な……何を、すぎやああああああああああ!!」

エリア「向こうの方で、表現できないような酷い事が起こっていますので、次のコーナーに参ります」

バキッ、バキッ、バキッ、グチャッ

ウイン「……………ただいま」

エリア「おかえりですね。返り血を浴びていますので、ハイ、タオ
ル」

ウイン「……………ありがとう」

遊画「目が、目があああああああああ!!」

エリア「五月蠅いですわね。そんなに呻きたいのなら、別の場所で
呻いたらどうですか?」

遊画「そ……そうか、だったら外に出て……」

ウイン「……………逃がさない」

遊画「クツ、脇を掴まれ……ひゃっ!」

エリア「そう言えば、遊画はくすぐりには弱かったですわね。ニヤ
リ」

遊画「やべっ、目が見えない上に何か邪悪な感情が伝わってくる」

エリア「怖くないですわよ。全然、怖くないですわよ」

遊画「やめっ……そ、そこは……ら、ダメ……だ」

ウイン「……………完全に放送事故レベルなので、次のコーナー。シ
ンクロ召喚台詞」

(BGM変更)

エリア「このコーナーでは、これまでに言ってきたシンクロ召喚の

浪漫な台詞を紹介するコーナーですの」

ウィン「あ、戻ってきた」

遊画「はあ・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・なあ、帰って
もいいか？答えはいいえ、イヤ以外で」

ウィン&エリア「No!!」

遊画「お願いだから帰らせてくれ!!」

エリア「それでは、ご覧下さい」

「俺は、レベル5のパルド・ドライバーにレベル4のボム・ゼロを
チューニング 5 + 4 = 9 大なる機械のゴーレムよ、完
全なる力と完全なる火力を備え、この戦場を弾圧せよ!!」

4つの星が空を舞い、そして4つの輪を形成し、その中にパルド・
ドライバーが入り込み、そのまま強い光が発生した。

「シンクロ召喚!! 起動せよ、パワー・フレイム・ゴーレム!!!
! ムパワー・フレイム・ゴーレム・機械族・ATK3200・地・

9・シンクロ、効果」

「レベル4の憑依装着ヒータと、レベル4の火の翼ヒータをチュ
ーニング 4 + 4 = 8」

火の翼ヒータからチューニングリングが現れ、その中に憑依装着ヒ
ータが入り込んだ。

「燃え盛る轟炎よ、深紅の聖域にてその大地を燃やし尽くす術者と
なれ!!」

そして、ヒータが光り出した。

「シンクロ召喚、爆炎を扱いし者、火霊神ヒータ!! ム火霊神ヒ
ータ・魔法使い族・ATK2900・炎・ 8・シンクロ、効果」

「レベル3の風霊使いウィンと、火霊使いヒータに、レベル4の極
神命デイスをチューニング!!」

デイスの体が透明になり、その中から4つのチューニングリング

が発生し、そのリングがウインとヒータを覆いつくした。

「運命を知りし大いなる女神よ、神々の運命を悟り、その道を導け
！！」

そして、俺は空白のカードを手に持った。

と、その瞬間、そのカードの絵柄とテキストが現れた。

そこに書かれたカード名……。

『極神聖帝スクルド』

そう、極神の中で、オーデインと同じ位を持つ、神。

「シンクロ召喚！！」

そのカードを、デュエルディスクに召喚した。

「運命の三姉妹、極神聖帝スクルド！！」
「極神聖帝スクルド・幻神
獣族・ATK0・神・10・シンクロ、効果」

「俺は、レベル4のジェット・スター・マジシャンに、レベル2の
サイト・スター・マジシャンをチューニング。サイト・スター・マ
ジシャンの効果により、このモンスターはスター・マジシャンと名
の付くモンスター以外のシンクロ召喚には使用できない 4+

2」
6 輝く星の流れよ、漆黒の空にて道を描く流れ星のごとく、
道を作れ！」

1体のモンスターが、チューニングリングを作り、そしてその中に、
もう1体のモンスターが入り込み、そして一気に光り出した。

「シンクロ召喚！流れよ、ハレー・スター・マジシャン！！」
「ハレー
スター・マジシャン・魔法使い族・ATK2400・闇・6・
シンクロ、効果」

「そして、レベル1のヴァンパイア・ジュニアに、レベル7となっ
たダークチューナー、墓場のマミーを、ダークチューニング！！

1 - 7 = 6

「マミーが、空中に星をばらまき、ばらまかれた星が、ヴァンパイア・
ジュニアの身体の内部にめり込んだ。」

そして、ヴァンパイア・ジュニアの中にある星1つを……対消滅させた。

「冥界の扉が開く時、恐怖の捕食者が魂を補食する。はい上がれ、地上界へ!!!」

そして、ヴァンパイア・ジュニアの体が碎け、その中から7つの星が現れ、何かの門を作り出した。

「ダークシンクロ! 食べ、アンデッド・デス・イーター!!!」
「アンデッド・デス・イーター・アンデッド族・ATK2700・闇・
- 6・ダークシンクロ、効果」

ウィン「……とりあえず、28話までの台詞」

エリア「ここまで振り返ると、いろいろな台詞がありますですわね」

遊画「と言うよりは、作者がサボってラジオ小説書かない……」

エリア「水霊術 - 清」

遊画を包むように、氷の檻が出来上がり。

遊画「……!!!」(バンバン!)

ウィン「……そう言えば、そろそろ時間が迫ってきた」

エリア「そう言えばそうですわね。時間が過ぎるのは速いですわね」
ガシャン

遊画「ぜー、ぜー、ぜー、ぜー。それはそうと、今日はダルクとヒータを交えた放送だったんじゃない……」

エリア「それでは、次回も」

ウィン「お楽しみに」

遊画「逃げた! 結局今回のこれは一体何だったんだああああああああ!!!」

ウィン「……ちなみに、作者曰く「最近、シリアル……じゃなくてシリアスばかりだったから、息抜きに遊画に酷い目に遭わせたいなと思って」だって」

遊画「本編のアレ以上に、酷い仕打ちはあるのか!？」

収録終了

その後

遊画「それにしても、結局加奈は一体何をやりたかったんだ？」

加奈「呼んだ？兄さん」

遊画「そりゃな・・・って、おわっ！！いきなり出てくるな加奈！」

加奈「ごめんなさいね、バカ兄」

遊画「バカ言っている時点で絶対反省の意識限りなくゼロだろ、お前！！」

加奈「何を、そんな当たり前な事を言うの？」

遊画「予想的中！！でも嬉しくない！！ハッキリ言って、悲しいだけ。何だ、この連鎖！？」

エリア「それが、加奈ちゃんクオリティ」

遊画「ただただ悲しいだけのクオリティだな！」

ウイン「・・・」

遊画「そして何でお前は無言なんだウイン！！」

ウイン「・・・いや、最近遊画、老けたなーって」

遊画「誰のせいだと思ってる！！」

加奈「まあ、兄さんの事だからそれは仕方ないっ」と

遊画「この何気ない嫌味は母譲りなのか？なあ加奈、お前は兄に対して尊敬の意を」

加奈「してないよ、尊敬の意を罵っているだけだよ」

遊画「さらに酷いわ！！」

加奈「でもね・・・兄さんに対しては、尊敬の意を表すんじゃないよ・・・その、もっと側にいたいな・・・って、思ったりはしてさ」

遊画「加奈？」

加奈「あ、でもでも、結局私たち兄妹だからさ、兄妹の絆で・・・繋がっているなどは・・・ああもう！冷静になれ、私！！」

遊画「結局何が言いたいのやら・・・」

エリア&ウイン「「ジー・・・」」

遊画「うおっ！！まるで敵を見るような目を！」

エリア「いつの間にか加奈ちゃんルートを攻略中ですか？鈍感男は某どころかのインなんとかさんから噛み砕かれればいいですわ」

ウィン「・・・風穴、開けるわよ」

遊画「最悪だ！！エリアがイン　ックスのごとく顔つきが凶暴になった上に、ウィンが緋弾に出てくるような台詞を！ってか、何でア

アなんだよ！？しかも言い方レ　の言い方だし！！」

エリア「覚悟」

ウィン「・・・しなさい！」

ウィン&エリア「「合同術 - 嫉妬！！」」

遊画「うわっ！いきなり杖を持ったかと思ったら、いきなりそこから水と風が何かの反応を起こして・・・ぎゃああああああああああああ！！！！」

チユドーン

加奈「あははははは！兄さんは相変わらずいろんなフラグを作ってはへし折っているだね。でも、安心したよ」最後に加奈が何を安心したのか分からないまま、俺はしばらくの間、動くことすらできない状況にあったとさ。

終わり

遊 戯 王 F a t e ラジオ小説その6 (後書き)

あとがき

本編から、先行登場しました、公栄加奈ちゃんです。

作者のお気に入りの中の1人であり、ツインテールに金髪の妹キャラクター全開。

ただし、中二病も全開の問題児でもあります。

はてさて、今日の夕方から作り始めてすでに4時間。

まあ、こんな感じかな。

それでは今回はここまで。

次は本編でお会いしましょう。

それでは。

4月4日 自宅にて

第38話「救いたいと思う気持ち」(前書き)

久々の投稿だ、以上。

第38話「救いたいと思う気持ち」

「だから、救えばいいじゃないって言っているのよ。何処までも
るまなのよ、アンタは」

指をさされたまま、エリアは啞然としていた。

「……あ、あの？」

「ああ？余所は黙ってる」

ノエリアから睨まれたウインは、まるで蛇から睨まれたカエルのよ
うに竦んでいた。

「ちよつと巻き貝……」

ドオオオオオン！

ノエリアがボソリと言い放つと、近くにあつた建物が、半壊した。

「もう一度言ってみる？このバカ娘」

そしてノエリアの顔は、半分が化け物じみたような顔つきとなつて
いた。

ガクガクガクガク

エリアは本気で身の危険を感じた。

「イヤですわお母様……」

「その段階でアンタが余計な事を言うのはすでに予想済みよ！だか
らアンタはもう口を挟むな！！」

ギロリと、ノエリアはエミリアを睨んだが……。

「そんな、この私がそんな扱いだなんて。やっぱり悲劇のヒロイン
はお母様から嫌われ、妬まれ、こき使われるのが宿命と言うのです
ね！」

やはりエミリア。黙れと言われてもただで済むばかりではなく、相
手にちよつとした苛つき感を与えてしまった。

「お黙りなさい、妄想女。アンタはヒロインじゃなくて、ただの貴
族なのよ！」

「ヤダお母様。私が夢を見るのも悪いと言いたいのか？酷い……」

これだから老婆と言うのは……ううっ」

口に手を当て、悲しげにしているエミリアとは裏腹に、言葉で責められたエミリアはもはや爆発寸前だった。

「アンタねえ……何となくさに紛れて老婆と言ってるのよ。あたしはそこまで年寄りと思っただ事は……」

「でもすでに数千年生きていますのでしょう？ だったら老婆と言っても……って、ヤダ。その理屈だと私も老婆になるわ。こんなヤツ……じゃなくて、お母様みたいになるかと思っただら、もう少し良い化粧品を買い集めないと」

「あーはははははははははは！ おもしろい事を言うわね。この、娘はあああああああ！」

ついに壊れたノエリアは、髪をグチャグチャにして、高笑いをはじめた。

「……………」

そして、完全に置いてけぼりの2人は、ただただ啞然とその姿を見るしかなかった。

心の中では、哀れだな……と、同時に思いながらも。

「……………はあ、はあ、と、とりあえず、気を取り直して。エリア、アンタは遊画ってガキを救いたいと言っていたわね」

とりあえずは元に戻ったノエリアの問いに、エリアは「……………」

と、無言だった。

「救えばいいじゃない。救いたい人を救うのは、常識だと思わないのかい？ このガキは」

ノエリアのズツパリとした、言葉の矢がエリアの心に刺さった。

「……………でも、私にそんな資格なんて！」

「五月蠅いわね。あるないの問題じゃないと、何度言ったら分かるの？ 用は、気持ちの問題でしょ」

エリアは再び、俯くような姿勢になった。

それは、ウインだつてそうだ。
救いたいの救いたい。

だがしかし、彼女たちは遊画の気持ちなど理解していなかった。
私たちの事を忘れてしまった。

その悲しみと怒りで、彼に無駄な感情をぶつけた。

そして、今まさにその結果が帰ってきている。

・・・イヤ、見捨てないで。

私は、貴方を・・・。

「「愛・・・なのね、この感情が」

2人は、改めて実感した。

本当に守りたい人がいると、心が苦しくなることを。

「・・・遊画。私は、貴方を・・・助けたい」

絆、それは切つても切り落とせない頑丈な物。

仲間、それは自分を取り囲む大切な存在。

希望、それはどんな状況でも必ずある物。

そして信じる想い。

それは、絆、仲間、希望が集まりし時に発生する、大いなる力。

どんな力にも負けず、どんな悪にも負けない。

それが、絆で結ばれた者たちの力である。

第38話「救いたいと思う気持ち」

「ふふふ、やっぱりウインちゃんはツンデレなんだな。って実感
したよ。」

緩やかな、優しい声がウインの耳に入った。

その声は・・・

すぐに後ろを振り向いた。

そこにいたのは、

「何をそんなに悩んでいるんだ。我が娘は、そんな事があってもす

ぐに行動するようなヤツだと思っていたぞ。だが、それも勘違いだったようだな」

「ヤレヤレ、それは言い過ぎだウィンダール。こんな切羽詰まった状態で冷静に考えろと言われる方が無理に決まっているだろ」

「ウィンおねーちゃん、そんなにクヨクヨするなって！ボクがいるからさ」

「全くでござるな。そんな時に、我々がその辺をフォローするでござるから、元気を出しなでござる」

のほほんな空気を醸し出している、ちょっと母性が強いウインの姉、カーム・ラ・アーケインライラ。

そしてその横には、ダンディな細めの目つきに、なかなかな筋肉質の、ウインの父親であるウィンダール・ル・アーケインライラに、オールバックにヒゲを生やした中年ぐらいのおじさん。

名を、ムスト・スフィアードと言っ。

そして、その近くにはウインと同じようにポニーテールをしており、背の小さな男の子。

名はカムイ・スフィアード。

そのカムイを抱くようにしている女性は、ツインテールに、女性ながらも筋肉が目立っている、口癖に、忍者を尊敬して「ござる」と言っている少女。

リーズ・スフィアードである。

「お姉ちゃん、お父さん……ムストおじさんにカムイ！？それにリーズまで！」

すると、ウィンダールは「ゴホン」と、咳払いをした。

「その辺は気にするなウイン。俺だって、自分が何なのかを思い出させてくれた、あの男を助きたい。ただそれだけだ」

だが、そう言っている割にはちよつとそっぽを向いていた。

「も〜う、お父さんったら。照れちゃって」

「ば……バカ言え！俺は別に……」

ムストは、口を挟もうと「ウィンダールよ」と呟いたが、カームと

ウィングダールの口論が始まった事により、結局はあちらを無視して、ウインの方を振り向いた。

「……おじさん？」

「久しぶりだなウイン。俺もガスタの血筋でね、精霊となって生まれ変わったのだよ。ぶつちやけた話、自分でもあり得ないと思っっているさ」

フウ……と苦笑したムストは、隣でリリースに抱かれている……と、言うよりはただ単に暴れないように押さえているだけのような姿勢のカムイを引き寄せた。

「おまけに、カムイもこの頃の姿に戻ってな。しかも精神年齢が6歳にまで逆戻りしていやがる」

今度は苦笑を超えて、溜息をついた。

しかし、カムイはそんな自分の父親の姿には目も呉れず、ウインの近くに来るなりウインに向かって飛びかかった。

「久しぶりー、ウインおねーちゃん！」

それをうまくキャッチしたウインは、まるで我が子のように抱いていた。

しかし、その豊乳に顔をうづくめたカムイは、ちょっと苦しそうにも思えた。

「……えーっと、どなた？」

エリアの視線で我に返ったウインは、抱きしめているカムイを降ろすと、

「……こちらがムストおじさん。そしてこの子が、カムイ。私のいとこに値する」

と、ウインの説明を聞き、エリアはホッと胸をなで下ろした。

「……どうしたの？」

「いや、ただカムイちゃんがあまりにも貴方に似ていたからですね。もしかしたら妹か娘かと思って……」

近くでカムイが「ボクはれっきとした男だー!!」と騒いでいた。

「……まあ、否定はできない。カムイはいとこだけど、妹とし

て扱ってきたから」

「ねえ、ボクは男だと何度言ったら・・・？」

「まあまあ、カムイ殿。そなたは弟分ではなく、妹分でした方が何とぞ関わり合いやすいと言うか・・・」

「だーかーらー、ボクは男として見られたいのー!!」

すると近くで、カームとの口論を終えたウインダールが「ゴホン」と、再び咳払いをした。

「とにかくだ。ウイン、エリア、お前は遊画を救う勇氣はあるのかと聞いている」

話題を戻され、核心を触れられた2人は・・・

ただ、黙ったままだった。

目を逸らし、黙ったままコクコクと時間が過ぎていた。

沈黙の中、ついにウインダールは

パチイン

ウインの頬を、平手で叩いた。

その場は啞然とした。

しかし、ウインダールは父親としてのプライドを、捨てていなかった。

「甘ったれるな!! そんな覚悟で、救いたい? でも、救う資格がないだと? お前ら2人ふざけた事をぬかしてんじゃねーよ!! この世に愛する者を持ったなら、奪う覚悟でも取り返して来いや! 誰かを救うのに、資格などいらねーんだよ! お前らは数千年と生きた人間だろ!! だったら、自分が何をやりたいかぐらいは・・・自分で決める!!」

ウインダールの怒鳴り声が、周辺に響いた。

カムイは、まだまだ子どもなので耳を塞いでガクガクと怯えていた。すると、そんなカムイをリーズが優しく抱いていた。

「・・・くいたい」

ウインの瞳から、一粒の涙が溢れた。

そして、次々にその涙の量が増してきた。

「救いたい。私は、あの人を……心の闇から救いたい。私がどんなに嫌われていても、振り向かせたい気持ちが……あるから」

そんなウインを、ウインダールは優しく

「そうだろ。そんな気持ちがあるんだつたら、アイツの元へと今すぐにも行けばいい。どんなに変わっていても、お前の気持ちが変わらない限り、いつかは振り向いてくれる」

と、父親らしい笑顔を、見せていた。

その時、エリアはエリアでノエリア達から

「フン、アイツもやってくれね。まさか堂々と、甘ったれている部分を平手打ちだよ。アレでこそ父親だとあたしは思うよ」

フンと鼻を鳴らしたノエリアの隣では

「そうですね。アレでこそ本当の家族と想ってきましたわ」

と、エミリアが珍しくノエリアに同感していた。

「お母さん……私」

エミリアは、スツとエリアの唇に人差し指を当てた。

「エリア、貴方がやりたいようにやればいいのよ。その結果がどうであれ、最後に笑いたいでしょ？」

母親らしい仕草に、エリアは改めて、やっぱりこの人は、私の母親だと実感した。

「……行こうエリア」

「そうですね。私たちは遊画によって、心の闇を軽くした。決して完全に消した訳じゃないけど、それでも、その恩返しを、するですわ！」

この瞬間、2人の意思は共通した。

見ていた周りの人たちは、スーツと体が透明になっていた。

「だったら、俺達の力を使え。確実に、救う気持ちをアイツにぶつけて、目を覚まさせてやる」

ウインダールの言葉を最後に、皆はそれぞれ光となって、デュエルディスクへと吸収された。

「……ありがとう、お父さん。私は……やる！」
そして2人は、遊画が走っていった道を辿りながら、歩き出した。
まだ、全てが始まっていない事を祈りながら。

ここは、精霊界の無法地帯。

そこには、精霊界で犯罪を犯した者や、重罪を持つ者、追われ身の者までがたくさんいる場所である。

崖が近くにあり、その下には海が見える。

裏切り者がいれば、そこから突き落とすためにだ。

しかも、質が悪いのはその数だ。

少し数えただけでも数百はいる。

それが故、数が数なので、警察も迂闊に手を出せず、大いに悩まされていた。

そんな中で、

「げはははははははは！今日はどこでギャングデュエルをやるのか？場合によっては、今まさに近くの町で精霊界王者決定戦ってモンがあつていろいろらしいぜ」

「おおつ、知ってる知ってる。そこでは、キングの栄光を勝ち取るらしいな」

「しかも、速報だ。そこで優勝したヤツは、美少女2人だつてさ」

「オイマジかよ。だったら襲おうぜ、アレ的な意味でもな」

と、男達の高笑いが聞こえていた。

周りには、デュエルディスクをつけた者達がウジャウジャと居座っており、その全ての人々が悪人面な顔つきをしている。

しかも、

「それ、俺も参加するぜ」

「よしておけ、お前じゃ勝てねーよバーカ」

「何を言っている？勝った後の勝負に決まっているだろ」

「ケツ、横取りは無しだぜ」

ゲスな会話が、周りを盛り上がらせていた。

そんな中……

『誰だ、ここがどこだか知っているのか！』

外から、警備兵の声が聞こえた。

どうやら、よそ者がここにやって来たらしい。

「ふひひひひ、誰だあ？女か？それだったら真っ先に俺の所に連れてきな」

しかし、その予想はアツサリと裏切られ、男の声で

『デュエルだ』

「チツ、野郎かよ。だったら用はねえ。さっさと追い返しな。それとも、その男を生け捕りにして遊び道具とするか？それでもいいかもな」

再び「げはははははははは」と、笑い声が聞こえた。

『何だと？何を言っているお前は』

『デュエルをしる。俺は今、求めている。恐怖と憎悪をぶち壊す事に。無法地帯の奴らと、デュエルをさせろ！！』

だが、そこから聞こえてくる会話は、だんだんとシヤレにはならないような状態へとなっていた。

『何を言っても無駄か？いいだろ、警備の為だ。殺しても文句は言えまい』

外で、デュエルが始まったようだ。

しかし、男達はうんともすんとも心配などはしなかった。

「バカなヤツだ。ここの警備兵は熟練されたデュエルの腕を持つ、傭兵だぞ。そんなヤツに、勝てる訳が」

「なあ、どっちが勝つと思うかあ？」

隣にいた蛇人間が、聞いてきた。

男は、悩む時間もなく即答に

「警備兵が勝つに決まっているだろ」
すると突然、

強力な、爆発音が聞こえた。

「な・・・何だ!!」

「落ち着け、どうせ警備兵のモンスターだろうが」
だが、男達は想像を絶する会話を耳にする。

『バカな・・・何だそのモンスターは!!』

焦りの声が聞こえた。

警備兵の方の

「っ!何だと!!」

流石に男は、声が警備兵の物だと分かった瞬間、立ち上がった。

そして慌てて、外を確認すべく扉を突き破って外に出た。

そこに映っていたのは・・・

巨大なガトリングを両手に装備し、肩には大型キャノンを2門あり、しかし全体は黒煙で全く見えていない、大型モンスター。

「な・・・何だこれは!!」

男は、これまでにない恐怖を覚えた。

その砲門は、まるで自分に向けられているような感触に陥ったり、
モーション1つ1つでビクツと反応したりと、見て分かるように怯えていた。

「雑魚が、消えろ」

瞬間、全ての砲という砲から、火が吹いた。

場にいたモンスターに砲弾の雨が降り注がれ、あっという間に碎け散る音が響いた。

そして、警備兵のいた場所にも、砲弾の雨が降り注ぎ、そして・・・
「う、うわあああああああ!!」
「LP15000」

叫び声の後に、その場は爆発した。

砂埃が視界を悪くし、何がどうなっているのかすら分からない。

しかし、砂埃が収まった時には、警備兵がいた場所に、誰もいなかった。

ただ、撃たれてスタボロになったデュエルディスクが、破片となつて辺りに飛び散っているぐらいだ。

「ヒッ！！」

視線が、男の方に向かれた。

その目は、見る者全てに恐怖を与える、レッドアイ。

男は腰を抜かしたが、駆けつけてきた仲間を見るなり、慌てて腰を上げた。

「……何を恐れているんだ。俺には大量の仲間がいるじゃねーか。野郎共、ヤツをぶち殺せ！！」

「うおおおおお！！」

と、かけ声の元、男達は自分のデュエルディスクを展開させた。

だが、彼は何も動じなかった。

数百もいる相手の前で、何も……。

「行くぞ！最後に笑うのは俺達だ！！」

しかし、この時、最後に笑うのが相手の彼だと言うことを、誰も考えもしなかった。

彼は、自分のポニーテールをほどくと、ニヤリと邪悪な笑みを、浮かべた。

「それで、エリアとウインは遊画の元へ行ったのね」

トトの顔を覗き込みながら、スクルドはトトの胸元を掴んでいた。

もはやボロボロで、何も抵抗できないトトにとって、隠す必要性すら感じていないのか、口を開いた。

「……ああ、動けない体でも意識はあつたからな……。アイツ等は遊画を、救いに行くために……止めればよかったが、俺はこんな体だ。どうにも止める事すら、出来なかった」

悔やんでいる姿を見れば、体力的にも限界が近いことを物語っている。

流石にそこを責める程、スクルドは酷くはないので、これ以上トトを責めても仕方がないと思ったのか……掴んでいた胸ぐらを放した。

「今すぐにも……止めに行ってくれ。今のアイツは、闇の意思によって支配されている。俺には、どうする事もできない程に、ヤツは強いだろう。こんな時に、動けよ……俺の体！動けよ！！」

どうする事もできない怒りを、言葉としてぶつけていた。しかし、スクルドはいたって冷静だった。

何故なら、彼女はワインとエリアの絆を、知っているからだ。そして、想いを。

「大丈夫。エリアもワインも、無事に帰ってくる。貴方が心配しなくても、ね」

だが、そうは言っても心配な物は心配だ。現に近くでアウスに介抱されながら

「ごめんなさい、ごめんなさい」と呟いているヘルを見ると、心が痛くなる。

自分のわがままで、人をああも追いやった。

そんな自分が、情けない。

「だから、行くしかないようね」

立ち上がったスクルドに、エレナが近づいてきた。

「どうだ？私の仲間は。思ったよりもこう行動だけは速い、バカ達だろ？」

そんな皮肉が、スクルドにとっては丁度良い言葉に聞こえた。

「そうね。でも、バカだからこそ、やれる事だってあるのよ？貴方だってそうでしょう」

スクルドは皮肉を皮肉で返すと、エレナは苦笑した。

「そうだな。私にも、そんな時があった物だ」

「ホント、そんな頭をしていそうだから……ね」

同意を最後に、スクルドは宙に浮かぶと、飛んでいった。

ワインとエリアを探すために。

「……運命の神か。そんな彼女でも、予想もできない事だつてあるって事。本当に世の中は、運命だけが取り柄じゃないと分かるよ」

エレナの瞳には、飛んでいるスクルドの姿しか映っていなかった。

「た……助けてくれ！！命だけは……命だけは！！」

血で濡れた顔で男を見下し、相手に恐怖を与えていた。

男は顔色が青くなっている。これは死を直前にした時に感じる恐怖による発作のような物であろう。

しかし、彼の眼中に男の姿など無いに等しかった。

例え、辺りが火災によつてメラメラと燃えているにしても。

デュエルの影響は、予想以上に大きかった。

謎のモンスターを召喚するたびに、1人ずつが倒され、数百人いた連中は、わずかに1人となった。

「お……お願いだ。そ、そうだ。俺の仲間にしてやる。そうしたら、女だろうが金だろうが大量に貰えるぞ。お前は強いから……」

彼の瞳が、より一層赤く染まった。

「女？金？くだらねえ、そんな物に俺は興味がない。俺はただ、人々の悪意を、ぶつ潰したいだけだ。そんな強欲に溺れるお前など、今すぐにでも……死ね」

男がいた場所に、砲火された。

「ぎ……ぎゃあああ！！」

短い叫びの後、爆発が起きた。

そして、彼の顔に、赤い何かが数滴飛び散ってきた。

「……これが、裁きだ」

彼の変わり様は半端ではないほどまでに達していた。

これが、あの公栄遊画だと言われて、誰が納得するのか。

「……………ん？」

遊画は、足音を感じ取った。

ザッ、ザッ、ザッ、と

その足音は、確実に自分の方へと近づいてくるのがよく分かる。振り返ると、そこには

「……………遊画」

悲しそうな瞳で、変わり果てた遊画を見つめるウィンと

「もう、貴方を失う訳にはいかない。その責任を、果たしてもらってくださいわ」

しっかりとした目線で遊画を見つめる、エリアの姿があった。

「……………ここに来たからには、やる事は分かっているだろうな？」遊画のデュエルディスクが、展開した。

あの時のデュエルディスクとは違い、まるで斧みたいな形になっている。

しかし、負けじと2人も、デュエルディスクを展開させた。

「クッ……………」

「……………」

そんな姿を見て、遊画は不気味に笑った。

「そつだ、お前達がここに来たからには、もはや逃げ道などは何も無い」

3人揃って、カードを引いた。

「…………デュエル！！」 「…………Yuga VS Wynn & amp;

Eria・LP4000」

先行は、遊画のターンからだ。

「俺のターン！俺はデプレシー・スター・マジシャンを攻撃表示で召喚！…デプレシー・スター・マジシャン・魔法使い族・ATK1300・闇・3・効果」

遊画の目の前に、半分死んだような目をした老人が、姿を現した。

「そして、カードを2枚伏せてターンエンドだ」

それぞれ先行は、攻撃できない。

だから、攻撃表示で出しても構わない。

「・・・私のターン。手札からモンスターをセツト。そしてカードを2枚伏せてターンエンド」

「私のターン！手札のシャドウ・リチュアを墓地へ送り、デッキから儀式カードを手札に加える！」

デッキがシャツフルされ、1枚のカードが出てきた。そしてそれが取り出された。

「リチュアの儀水鏡を手札へ！そして手札から、リチュア・ビーストを守備表示で召喚！」
「リチュア・ビースト・獣族・DEF1300・水・4・効果」

まるで半分が犬のような体つきに、半分が人魚のような青い体をしたモンスターが現れた。

すると、ビーストは目の前の空間を切り裂くと、その中からシャドウが出てきた。

「リチュア・ビーストの効果により、このモンスターが召喚に成功した時、墓地のリチュアと名の付くレベル4以下のモンスター1体を守備表示で特殊召喚できる。シャドウ・リチュアを特殊召喚！」

「ぬおおっ」
「シャドウ・リチュア・海竜族・DEF1000・水・

4・効果」

「そして、発動せよ！リチュアの儀水鏡！！」

上の方に、罫體のマークが入った紋章が映し出された。

すると、その中に場にいたシャドウが飛び上がり、光となって吸収された。

このカードはリチュア専用の儀式カードですわ！「リチュアの儀水鏡・儀式魔法・効果、リチュア」と名のついた儀式モンスターの降臨に必要。手札、自分のフィールド上から、儀式召喚するモンスターと同じレベルになるようにモンスターをリリースしなければならぬ。また、墓地に存在するこのカードをデッキへ戻す事で、自分の墓地に存在する「リチュア」と名のついた儀式モンスター1体

を選択して手札に戻す。私は手札のシャドウ・リチュアの効果により、このモンスター1体でリリースを賄える。現れよ！イビリチュア・ソウルオーガ！！」

瞬間

上にあつた紋章が、足元にまで映し出され、その中から巨大な魚人間が現れた。

ガツチリとした体つきに、胸の真ん中に特有の紋章の入った儀水鏡を備えて。

「グルルルルル、グオオオオオオオ！！ハイビリチュア・ソウルオーガ・水族・ATK2800・水・8・儀式、効果」

（よし、このまま効果を使って相手のフィールドをがら空きにすれば）

策を練っていたらしく、効果を発動しようとした。

だが、遊画はそんな事をさせる程、甘くはなかった。

「畏発動！ゼロセブンの幻影！このターン、お互いのプレイヤーのモンスター効果は発動できない！607の幻影・畏・効果、このターン、お互いのモンスターの効果は無効化され、発動する事ができない」

背後に、巨大な天使が現れた。

すると、その天使からあふれ出す何かがソウルオーガを押しとどめていた。

それにより、ソウルオーガは動くことすらできない状態になった。

「クツ、カードを1枚伏せてターンエンド！！」

苦虫を噛みつぶしたような顔をしながらの宣言だった。

しかし、それ程このモンスターを守りたかったというのは、次のターン、何かが来ると予想はついた。

すると、遊画がカードを引いた。

「俺のターン、ドロ」

華麗にカードを手札に加えると、無表情で手札を1枚手に取り、墓地へ送った。

「手札1枚を墓地へ送り、手札からチューナーモンスター、エーヌ・スター・マジシャンを通常召喚。このモンスターは手札を1枚墓地へ送る事により、リリース無しで召喚できる。{エーヌ・スター・マジシャン・魔法使い族・ATK1000・闇・6・チューナー}」
トゲトゲとした人間が出てきた。

しかも、顔が完全に病んでおり、体から発せられるオーラは、憎しみを思わせる負の感情だ。

まるで、生きている事に憎んでいるかのように……

「このモンスターで、一体何をやるつもりですか？」

「……何か、イヤな予感がする」

その予感は、的中した。

「このモンスターの効果発動。この効果により召喚に成功した時、レベルを3つ下げる事により、フィールド上にエーヌ・トークンを1体特殊召喚する！分離せよ、エーヌ・スター・マジシャン！！」
すると、ズブズブ……

体が2つに割れ、1体から2体のモンスターへと分離した。

{エーヌ・スター・マジシャン・6・3}

{エーヌ・トークン・魔法使い族・ATK0・闇・3・トークン}

「だが、この効果で特殊召喚したトークンは、チューナーと合わせて3体のモンスターでしかシンクロできない。だが、すでにモンスターはいる」

2人の目に、デプレシー・スター・マジシャンが飛び込んだ。

「っ、このために！！」

「わざわざ残したのですわね！」

「そうだ、そしてこれが……人々の心が作り上げた、星の魔術師だ！レベル3のデプレシー・スター・マジシャンにレベル3のエーヌ・トークンと、レベル3となったエーヌ・スター・マジシャンをチューニング！！
3 + 3 + 3 = 9」

デプレシーと、エーヌ・トークンの体が透明となり、中から6つの星が姿を現した。

そして、エーヌの体からも星が3つ出現し、チューニングリングと
なつて現れた6つの星を覆った。

「戦火の轟音が響く、殺戮と破壊の連鎖に授かれし大いなる災いよ、
今こそ姿を見せろ!!」

指をパツチンとさせると、それと同時に輝きだした。

「シンクロ召喚!! さあ、パーティの幕開けだ! スター・マジシャ
ン・相殺のクラッシャー!!」

巨大な、銃機関銃を備えた化け物が、姿を現した。

肩からはキャノン砲を2門装備され、腕にはガトリング砲を両手合
わせて2門。

顔も、ただ人を撃つためにしか想定されていないので、スコープや
マスクなどで覆われ、全体的には見えていない。

見る人を圧倒する、モンスターである。

『又オオオオオオ、ホアツ!! ムスター・マジシャン・相殺のク
ラッシャー・魔法使い族・ATK2800・闇・9・シンクロ、
効果』

恐ろしい、2人は恐怖を感じずにはいられなかった。

「行くぜ。相殺のクラッシャーで、相手フィールド上に存在する伏
せモンスター、リチュア・ビースト、イビリチュア・ソウルオーガ
を一斉攻撃!!」

「んな!!」

「何ですって!?!」

「相殺のクラッシャーの効果により、このモンスターは相手フィー
ルド上に存在する全てのモンスターに一斉に攻撃する事ができる。
しかも、その時このモンスターの攻撃力は、攻撃対象モンスター1
体につき、400ポイントアップする」

「クッ」

エリアは苦しい表情になった。

なぜなら、最初にダメージを喰らうのは、攻撃表示にしているソウ
ルオーガがいるため、しかもライフは共通。

なので、迂闊にダメージを喰らえば、それが2人を敗北へと誘うのである。

「食らえ、一斉射撃!!! ロックオン。ジ・エンド・オブ・ファイア
ー!!!」

ズガガガガガガガガガガガ
ズドーン、ズドーン

一斉に全ての砲という砲から火が吹いた。

そして、その場にいたモンスター全てを撃ち抜いた。

「さらに、攻撃力をアップさせる!!! ハスター・マジシャン・相殺
のクラッシュャー・ATK2800 4000」

貫通した弾が、エリアを襲おうとした。

1200ポイントのダメージ。

ここで喰らったら、後々に響いてくる。

どうすれば……。

「つぶ、つぶつぶつぶつぶ……砕ける、玉砕せよ」

遊画の目の前に映るのはただ、破壊と殺戮の現場。

それだけだった。

続く

次回予告

負けたくない気持ち。そして、それに打ち勝つために、私たちは、
戦っている!

それなのに……。

「……つぶ、楽しい。破壊と殺戮、これこそが、俺に流れる意
思だ」

……ダメ。

これ以上、自分を壊さないで!!!

次回、遊戯王Fate 第39話「気持ちが築き上げる愛」

「っ、なぜだ……なぜお前らは、戦える！」

「……それが、貴方への気持ちだから」

次回のキーカード

イビリチュア・マインド・ドラゴン・海竜族・ATK2900・水・

8・シンクロ、効果

第38話「救いたいと思う気持ち」（後書き）

あとがき

ガチで言おう。

更新遅すぎてスイマセン。

おかげで少しお気に入り件数が減りました。

自業自得ですね。

何やってんだか。

とまあ、自分否定はこの辺りにしてつと、どうも久しぶりです。つ
いさつき強謙とファルコス、フェニクスを交換してもらったR a g
oです。

強謙とつて、合わねーじゃんと思っっている方もいるかもしれません
が、俺の中にはこんな言葉があります。

欲しい物に対しては、それ以上の物をやれ。

そして、欲しいと言われた物に対しては、それと平等な物をやれ。

つまりは、自分が欲しいと思った物に対しては、それ以上の物をや
れって意味です。

その時、自分は決して特をしてはいけない。

できるだけ、損をしる。

それが、物に対するありがたみが分かる第一歩です。

まあ、そんな感じですよ、最近。

それでは次回、決着がつきます。

結構2対1のライフ共通はキツイです。

別々にすれば、遊画のライフが8000にしなければならぬし。

しかもそれじゃ、次で決着つくかがあやふやだし。

と、こちらの都合なので無視して下さい。

今回は、できれば5月中にはアップしたいと思います。

理由は、5月31日を締め切りにラノベ新人賞募集のヤツを書いて
いるからです。

それじゃ、今日はこの辺で。
ターンエンドー！
4月30日 自筆にて

第39話「気持ちが築き上げる愛」(前書き)

感想をお待ちしております。そしてなにげにお気に入り件数が減っていると言つ絶望が心を揺らがせる。そんな日々。

第39話「気持ちが悪くなる愛」

「食らえ、一斉射撃！！ロックオン。ジ・エンド・オブ・ファイア
ー！」

ズガガガガガガガガガガガ
ズドーン、ズドーン

一斉に全ての砲という砲から火が吹いた。
そして、その場にいたモンスター全てを撃ち抜いた。

「さらに、攻撃力をアップさせる！！「スター・マジシャン・相殺
のクラッシュャー・ATK2800 4000」
貫通した弾が、エリアを襲おうとした。
1200ポイントのダメージ。

ここで喰らったら、後々に響いてくる。
どうすれば……。

「っふ、っふふふふふふ……砕ける、玉砕せよ」

「……させない！」

「なに！？」

ウインが動いた。

デュエルディスクのボタンを1つ押すと、ピツと音がした直後、目
の前に畏カードが現れた。

「畏カード、ガード・ブロックを発動！このターン、自分が受ける
戦闘ダメージを1度だけ0にする「ガード・ブロック・畏・効果、
相手ターンの戦闘ダメージ計算時に発動する事ができる。その戦闘
によって発生する自分への戦闘ダメージは0になり、自分のデッキ
からカードを1枚ドロウする」そしてその後、デッキからカードを
1枚をドロウする！」

ギリギリ、エリアへのダメージは通らずに済んだ。

襲ってきた弾も、エリアの横を掠めていった。

「チイツ、案外やる！」

遊画の表情が歪んだ。

歯をギリギリさせながら、ウイン達を睨み付けていた。

「……それで、貴方は終わり?」

「……あ、ん?……!!んな!」

ウインの言葉により、言葉を詰まらせていた遊画が、目を開いた。全滅したハズのフィールドに、1体のモンスターが存在していた。

「ば……バカな。なぜ……」

そこにいるのは、ウインを庇うようにして翼を閉じている、ガスタ・ガルド。

「ガスタ・ガルド・鳥獣族・DEF500・風・3・チューナー」

「……私が伏せていたモンスターは、ガスタの希望 カムイ。

カムイはリバースした時、自分のデッキからガスタと名の付くチューナー1体を特殊召喚できる効果を持っている。だから、私が呼び出したのは、ガスタ・ガルド。そしてこのモンスターもまた、リリース、シンクロ素材以外でフィールドから墓地へ送られた時、デッキからレベル2のガスタを特殊召喚できる効果がある」

「破壊しても、またデッキから呼び出され、だからと言ってそのまま残っていた場合次のターン、シンクロ素材となる。ウザイ戦法だ」
遊画は手札を1枚手に取り、それをデュエルディスクの魔法、罨ゾーンに伏せた。

「カードを1枚伏せてターンエンドだ」

「……そりゃどうも。ウザイぐらいが丁度良いつて言うでしよう?」

「それはどんな時ですの……?」

さりげないツツコミはさておき、ウインは目を細めながらカードを引いた。

「……私のターン、ドロ」

引いたカードを確認すると、口が歪んだ。

つまりは、笑っていた。

「……来てくれたのね。私は、ガスタ・コドルを召喚」ガスタ・

コドル・鳥獣族・ATK1000・風・3・効果」

バツバサと、コンドルのようなモンスターが飛び上がった。

「そして、レベル3のコドル、そしてレベル3、チューナーモンスターのガルドをチューニング 3 + 3 = 6」

コドルとガルドが空高く舞い上がった。すると、3つのチューニングリングと、3つの星が空から降ってきた。

チューニングリングが縦になり、その中に星が3つ中へと入った。

「疾風の少女が永遠の命を築く、その痛みを力に変え、少女は姿を変える！」

一筋の光が輝き、辺りに閃光が放たれた。

「シンクロ召喚！特攻せよ、ダイガスタ・スフィアード！！」

ワープホールの穴が開き、中からリーズが現れた。

しかし、この姿のリーズは、まるで忍者のような格好だ。ツインテールだった髪をほだき、全体的にも服装が変わっている。

『ティア、でござる！ハダイガスタ・スフィアード・サイキック族・ATK2000・風・6・シンクロ、効果』

ここからが、勝負！！

ウインの心の中にある闘士に、火がついた。

デュエルモンスターズ、それは古の時代から受け継がれしゲーム。

デュエル、それは決闘者同士で強さを求める儀式。

ライディングデュエル、それはスピードの中で進化したデュエル。

この物語は、絆と仲間で繋がれたデュエリスト、公栄遊画を中心とした、熱きデュエルが繰り広げられる勇気と愛の物語である。

人は後に彼のことを、フェイトデュエリストと呼んだ。

第39話「気持ちが高ぶる愛」

シンと静まり返った中で、3人は互いに睨み合っていた。

その光景はまるで、蛇と蛙が睨み合う光景のように、誰一人として動かずにいた。

「……………チツ、スフィアードか!!」

最初に口を開いたのは、遊画である。

あのモンスターの効果は確か……………。

すると、ウインは察される前に行動を開始した。

「ダイガスタ・スフィアードの効果により、墓地のカムイを手札に加える」

墓地からカードが1枚取り出され、手札に加えられた。

「そしてダイガスタ・スフィアードで、相殺のクラツシャーを攻撃
!!」

杖の周りに、風が群がり、それが相手に向かって放たれた。

しかし……………

「ダイガスタ・スフィアード・ATK2000」VS「スター・マ
ジシャン・相殺のクラツシャー・ATK2900」

誰がどう見ても、攻撃力の低いスフィアードがやられるのが目に見えるている。

だが、スフィアードには効果がある。

「このモンスターは戦闘では破壊されず、ガスタと名の付いたモンスターとの戦闘により発生する戦闘ダメージは、全て相手が受ける
!!」

「っ!!やはりか」

攻撃されたクラツシャーは、その風をはじき飛ばすと、スフィアードに向けてキャノンを一発放った。

しかし、その弾はスフィアードには当たらなかった。

途中で、何かに拒まれたのだ。

見るとスフィアードは、風に覆われていた。

そして、放たれた弾の軌道をずらし、丁度遊画に直撃するコースを見極めたのか。

別の方へと向けられ、再び飛んでいった。

しかも、少し曲がりながら、一周するような形で遊画の方へと確実に飛んでいる。

次の瞬間には、遊画のいる場所に爆発が起きた。

発射されたキャノン砲を、スフィアードが跳ね返したのだ。

「っ！！」 ㄥLP4000 3100ㄝ

「やった！先制攻撃ですわ！！」

「…………いや、何かある！！」

遊画はデュエルディスクの方へと手を伸ばしている。

何かしらの罠を発動する気であろう。

「…………ダメージを跳ね返す戦術を取るとは、流石は小娘と言ってやろう。だがな、こんな事でへたばる俺じゃねーんだよ！！罠発動！戦術爆破装置！！このカードは戦闘ダメージを受けた時に発動できる。攻撃モンスターを全て破壊し、相手にそのモンスターの攻撃力分のダメージを与える！！ㄥ戦術爆破装置・罠・効果、自分が戦闘によりダメージを受けた時に発動する事ができる。その時に発生したダメージを相手に与え、このターン戦闘を行った相手モンスターを全て破壊するㄝ」

バチバチバチバチ

巨大な機械が目の前に現れ、その中から電流が流れていた。

すると、中の電流がプレイヤーと、スフィアードへと撃たれた。

『ぐああああああああ！！！！』

「きやああああああ！！」

「っ…………！！」 ㄥLP4000 2000ㄝ

最悪だった。

せっかく前のターン戦闘ダメージを負わずに済んだのに、今度は自分のせいでダメージを喰らってしまった。

しかし、そんな様子も気にしないような口調で、エリアは励ました。

「気にしないでですわ。結局攻撃を行えば、同じことでしたし」

「…………エリア」

ウインの心に、何か迫る物を感じられた。

それが何かは分からない。

だが、何となくなら分かった気がしている。

「……同じ者を取り戻そうとする、意思」

「何か言ったのです?」

「……何でもない。私はターンエンド」

ウインの声と同時に、エリアはカードの上に手を置いた。

「私のターン!!!」

エリアは、デッキの上のカードを引くと、引いたカードをそのまま召喚した。

「私は、リチュア・ノエリアを攻撃表示で召喚!!!
「リチュア・ノ
エリア・魔法使い族・ATK1700・水・4・効果」そして、
ノエリアの効果発動!!!このモンスターが召喚に成功した時、デッ
キの上からカードを5枚めくり、その中にある儀式魔法カード、ま
たはリチュアと名の付くカードを全て墓地へ送る!!!」

デッキの上から引いたカードの順番は……
リチュア・アビス、リチュア・ヴァニティ、イビリチュア・マイン
ドオーガス、トレード・イン、リチュア・バブルス。
最後にあつたカードを見るなり、急に笑顔になっていた。

「リチュア・バブルスの効果発動ですわ!!!このカードをめくらる、
または確認する効果によってこのカードがその中に存在した場合、
このカードは特殊召喚される!!!」

「この口調だと、強制効果か!!!」
トレード・イン以外のカードが墓地へ送られる中、そのカードだけ
がフィールド上に召喚された。

「現れなさい!チューナーモンスター、リチュア・バブルス!!!
「リチュア・バブルス・水族・ATK1600・水・4・チューナ
ー」

大量の泡が出てきた。

よく見ると、その中に体があつた。

体を泡に囲まれ、涼しそうなイメージだ。

「ノエリアの効果により、トレード・インをデッキの一番下へと戻す。そして、レベル4のリチュア・ノエリアにレベル4のリチュア・バブルスをチューニング!! 4 + 4 = 8」
バブルスの体にあつた全ての泡が弾け、中の子人が露出した。すると、その子人がいきなり透明になり、その中から4つの星が姿を現した。

ノエリアも、空中へと飛び上がり、徐々に透明になりつつあつた。するとそんな中で、バブルスだった星がチューニングリングを描くと、その中へとノエリアが侵入を果たした。

「儀水鏡より捧げられし水竜よ、今ここに新たなる心となりて、世界を弾圧せよ!!」

キイイイイイ
ン

音が鳴ると、それが光り出した。

その中から、一体の竜が姿を見せた。

「シンクロ召喚!! 同士の象徴、イビリチュア・マインド・ドラゴン!!」

周りに水が溢れてきた。

どこから湧き出たのかは知らない。

だが、その水の中に・・・何かいる。

瞬間、それは現れた。

青い体をその身に纏い、あちらこちらに儀水鏡を取り付けてある、水竜。

『グオオオオオオオオオオオ!! ハイブリチュア・マインド・ドラゴン・海竜族・ATK2900・水・8・シンクロ、効果』

遊画は何よりも、その攻撃力に驚きを隠せなかった。

「攻撃力・・・2900だ!!」

「そうですね。相殺のクラッシュヤーの攻撃力は2800。つまりは、こちらの方が上ですわ!!」

すると、エリアは手札のカード1枚を墓地へ送った。

「さらに、マインド・ドラゴンの効果発動！！自分の手札を1枚墓地へ送る事により、墓地に存在する儀式モンスター1体を特殊召喚できる！！」

「なん・だと」

「蘇れ！イビリチュア・ソウルオーガ！ハイビリチュア・ソウルオーガ・ATK2800」

巨大な魚、ソウルオーガが姿を現した。

「ただし、この効果で特殊召喚されたモンスターの効果は無効化される」

しかし、例え効果が無効化されても、戦闘破壊さえできれば、伏せてある罠カード、リチュア・バーストを発動させた瞬間、勝利が確定する。

リチュア・バーストの効果は、儀式モンスターが戦闘を行った場合、攻撃力を1000ポイントダウンさせてもう一度攻撃できる効果がある。

しかも、永続罠。決まらなくてもまだ使える。でも、相手はもはや、伏せカードも無い状態。

これは、決まったも同然ですわ！！

「バトル！！イビリチュア・マインド・ドラゴンでスター・マジシヤン・相殺のクラッシャーを攻撃！！イービル・バイス！！」

マインド・ドラゴンの口が開き、そこから咆吼が響いた。

しかも、それを長時間聞いていた相殺のクラッシャーは、ついには爆発を起こした。

「やったですわ！！」

続いて・・・と、言いかけた。

だが、それは言えなかった。

確かに爆発は起きた。しかし、誰も本体が爆発したとは一言も言っていない。

煙が収まった時に、エリアは目を疑った。

今まで通り、重装備の巨大ロボットが、その場にいるのだから。

「んな・・・そんな、戦闘破壊されたんじゃ」

その呟きに嘲笑うかのように、遊画は言った。

「・・・っふ、言い忘れていたが、このモンスターは1ターンに2度までは戦闘では破壊されない」

「っ!!」

2度、その言葉は、自分にとっての不都合極まりなかった。

例えばソウルオーガで攻撃を行っても、こちらが破壊される。

「でも、戦闘ダメージは受けてもらうですわ」

「たかが100ポイントのダメージだ。騒ぐ必要もない」HP3
100 3000」

「・・・カードを、1枚伏せてターンエンド!!」

恐らくは次のターン、遊画が動けば勝負が分かれる。

どっちの道に行くのか。

どっちにしても、この伏せカードに、未来を託したですわ!!

エリアは伏せたカードを見ながら、そう思った。

「俺のターン!!」

引いたカードを見もせず、怪しく笑った。

「これでお前らは終わりだ!全て消滅せよ!!ジ・エンド・オブ・クラッシュユ!!」

突然、相殺のクラッシュャーの様子がヘンになった。

急にギギギギと鳴り出したかと思えば、あちこちから煙が上がっていた。

「これは一体?」

「・・・クラッシュユ?っ!!まさか!!」

ウインはいち早く、遊画が何をしようとしているのかが分かった。だが、すでに遅かった。

「相殺のクラッシュャーの効果により、自分のスタンバイフェイズ時に、フィールド上のカード全てを破壊する事ができる」

「!!」

ま・・・負けたくない!!

負けたくない気持ち。そして、それに打ち勝つために、私たちは、戦っている！

それなのに・・・それなのに！！

「・・・つぶ、楽しい。破壊と殺戮、これこそが、俺に流れる意思だ」

もはや遊画の目には、破壊しかない。

・・・ダメ。

これ以上、自分を壊さないで！！

しかしその想いは、今の遊画には届くはずもない。

瞬間

その場に、爆発が起きた。

相殺のクラッシュヤーが自爆し、フィールド上のありとあらゆる物が壊された。

伏せカードも粉々に砕け、ソウルオーガも耐えに耐えたが、やはり最後には爆発に飲み込まれた。

マインド・ドラゴンも同じだ。

『グギャアアアアア』と叫びを上げるも、すぐにその叫びは爆発音と共に消えていった。

これで、フィールドはがら空きになった。

「・・・でも、貴方もそれは同じ。これで攻撃力2000以上のモンスターを出せるって話なら、まだ別」

「甘いな」

「・・・んな！！」

すぐに返された。

しかも、余裕の表情。

「これって」

「まさか・・・」

2人は胸騒ぎがした。

こんな状況で、あんなに余裕な表情をしていると言う事は・・・。
伏せていたもう1枚のカードか！！

「破壊され墓地へ送られた罨カード、破壊と言う名の再生を発動！このカードが破壊され墓地へ送られた時、カード効果によって破壊された自分のモンスター1体を特殊召喚できる。破壊と言う名の再生・罨・効果、相手がモンスターの特殊召喚を行った時、特殊召喚されたモンスターを裏側守備表示にする。また、セットされたこのカードが破壊され墓地へ送られた時、自分の墓地にカードの効果によって破壊されたモンスターが存在する場合、そのモンスターを特殊召喚する。」

突如、真ん中にホールが現れた。

その中から、ついさつき自爆した相殺のクラッシャーが……復活した。

もはや絶望的だ。

伏せカードもなければ、壁となるモンスターもない。

しかも、相手フィールド上には攻撃力2800のモンスターが存在する。

さらに、自分たちのライフは、わずか2000。

負けたも同然である。

むしろ、この状況で負けなければおかしい話だ。

「……どうした。俺に勝つんじゃないのか？」

「っ……!!！」

「結局人は、自分の欲望があっても、目の前に人がいる限りは、それを掴み取る事はできない。今だってそうだ。俺と言う壁があるから、勝利はすでに、失われている。」

「……それでも」

「あん」

「それでも、まだ分からない!!！」

ウインは、最後の力を振り絞っていた。

「まだ……勝負は見えていない。ライフポイントが0にならない限り、まだ勝負は……終わらない!!！」

「抜かせ。すぐにも終わらせてやるよ、相殺のクラッシャー!!！」

ジ・エンド・オブ・ファイアー!!」

ズガガガガガガガガガガガ

ズドーン、ズドーン!!

相殺のクラッシュヤーの全ての砲から、火が吹いた。

2人は、その様子をただ黙って見ているのみだった。

何もできなかった・・・。

そんな悔やみが、エリアを直撃した。

どうして・・・こうなったのか。

ボクじゃ・・・どうにもできなかったの？

「ねえ、ウイ・・・」

言葉が止まった。

なぜなら、ウインは全くそんな表情すら見せていなかったからだ。

むしろ、勝てる希望が、まだあるような・・・そんな顔をしてい

た。

(それにあの手札・・・そうですわ!!)

やっとの事で、ウインがあれ程までに平然としていられるかが分か

った。

まだ勝負は、終わっていない!!

遊画は、ライフポイントを見らずにその場を離れた。

どうせ、アイツ等は負けたのだろう。

・・・そんな死に様など、見たくもない。

しばらく歩くと、崖に辿り着いた。

下には海が見える。

しかも、近くには台が敷かれてあった。

多分、死刑囚などを突き落とすための台であろう。

そう考えると、やはり生き物は愚かだと改めて実感した。

自分のためにしか、行動しない。

相手がどんなに苦しんでも、それに気がつくこともしない。

自分がどんなに苦しんでも、それに気がつくこともしない。

自分がどんなに苦しんでも、それに気がつくこともしない。

俺は、ずっと孤独だ。

記憶を失い、仲間からも離れ、ずっと……孤独を感じていた。しかし、今はそんな孤独が丁度良い。

誰もが、欲望を持っている。

人々の欲望は、あまりにも強欲だ。

人は、自分の欲望のためなら……仲間さえも売ったりできる。そんな生き物だ。

……醜い。

「……誰も、俺の気持ちすら知らない。だから、孤独を感じた方がいいんだ」

これからも……

「それは違うのですわ!!」

っ!!

その声は……まさか!!

遊画は慌てて振り返った。

すると目には、倒したハズの2人が……まだ立っていた。

「とは言っても、ウインのおかげですけど」

「……どうも」ハLP2000

おかしい、さっきとライフが全く変わっていない!

「っ、なぜだ……なぜお前らは、戦える!」

考えてみれば、おかしな話だ。

相手はモンスター、こちらは決闘者。

使う者と、使われる者の関係だ。

「俺は、お前らを使う側の人間だ!それなのに、なぜお前らは戦えるんだ!!」

「……それが、貴方への気持ちだから」

き……気持ち?

それは一体何だ?

俺の頭の中では、意味不明としかならないぞ！

「……私は、貴方を想う気持ちがある。それはエリアも同じ」
何を言っているんだコイツは！！

意味不明だぞ！

「想いがあるから、守りたい人ができる。守りたい人がいるから、人は……人を想いやれる」

「……だから、絶対に諦めない！！どんな茨の道が貴方と私を突き放そうとも、その茨を超えて、貴方を救い出す！！それが、私たちの想い！！」

気が付けば、ウインの目の前に鳥が一匹だけポツンといた。

まるで、小さな体でウイン達を守っているみたいに。

「ガスタ・パラクート・鳥獣族・DEF500・風・1・チューナー」

「こ……このモンスターは」

「ガスタ・パラクートは相手が直接攻撃を行った時、自分のガスタと名の付くモンスターを2体デッキへ戻す事により特殊召喚できる。そして、バトルフェイズを終了させる」

恐らくではあるが、ウインにとって全体破壊される事は、すでに予想済みだったと言う事だ。

しかも、バトルフェイズを終了されて、何もできなくなっていると
言う状況まで作り出している。

「カードを1枚伏せてターンエンド！！」

つまりは、次のターンで全てに片が付く。

「……私のターン、ガスタの神官 ムストを召喚！
「ガスタの神官 ムスト・サイキック族・ATK1800・風・4・効果」
フィールドに、さつきとは違いヒゲを剃った後のムストが現れた。

「……レベル4のムストに、レベル1のパラクートをチューニング
グ 4+ 1= 5 シンクロ召喚！！」

バサリと、鳥が舞い上がった。

「羽ばたけ、ダイガスタ・ガストス！！
「ダイガスタ・ガルドス・

サイキック族・ATK2200・風・5・シンクロ、効果」

ウインはそして、2枚のカードを差し込んだ。

「カードを2枚伏せてターンエンド。エリア、勝負を決めて!!」

この伏せカード2枚は、エリアをサポートするカード。

その事を知ったエリアは、責任感を感じた。

次のターン、あのカードを引けば……。

でも、怖い。

私が、もし私のせいで……

「……怖いのか？そこで諦めるのか？」

ウインから放たれた二言。

諦める……？誰が、こんな場所で諦める物ですか!!

「私は戦う！どんなに極限のピンチでも、想う人がいれば……

人は誰でも戦えるのですわ!!ドロー!!」

引いたカードを、恐る恐る見た。

引いたカードは、リチュア・アビス。

「来た!!これで勝てる」

これは核心だった。

なぜなら、ウインが伏せているカードは恐らく……。

「私は、リチュア・アビスを召喚ですわ!!」リチュア・アビス・

魚族・ATK800・水・2・効果」そして効果により、デッキ

からシャドウ・リチュアを手札に加える!!」

鯨が姿を現したかと思えば、その鯨の額が輝きだした。

すると、エリアの手札にカードが1枚追加されていた。

「だからどうした!!こんな物でこのモンスターは倒せない!!」

「あら、忘れていらっしやるようで。私の墓地には、アレがあるの

ですわ!!」

エリアの墓地には、アレがある。

そう、リチュアの儀式水鏡が。

「墓地にあるリチュアの儀式水鏡の効果発動!!このカードをデッキ

へ加える事により、墓地の儀式モンスターを手札に加える!!」

墓地から出てきた儀水鏡をデッキへと戻すと、またもや墓地から何かが出てきた。

出てきたのは、マインドオーガス。

「そして、手札からシャドウを捨て、儀水鏡を手札へ！！そして、発動せよ、リチュアの儀水鏡！！」

再び、上の方に紋章が浮かび上がった。

「手札のエリアルと、フィールドのアビスをリリースし、降臨せよ、イビリチュア・マインドオーガス！！」

2体のモンスターが光となって消えた。

すると、上にあつた紋章が今度は下へと移っていた。

その中から、半分魚のエリアが現れた。

『ハアツ！！イビリチュア・マインドオーガス・水族・ATK2500・水・6・儀式、効果』

瞬間、ウインが動いた。

「畏発動、異種族の繋がり。別の属性同士のモンスターがフィールドに存在する場合、そのモンスターの攻撃力をエンドフェイズ時まで1100ポイントアップさせる！！異種族の繋がり・畏・効果、自分フィールド上に、別の種族のモンスターが存在する場合に発動する事ができる。モンスター1体の攻撃力を、エンドフェイズまで1100ポイントアップさせる。ダイガスタ・ガルドスの攻撃力を1100ポイントアップ！！ダイガスタ・ガルドス・ATK2200 3300」

「それがどうした！選択するモンスターを間違えたか！！」

「・・・いや、違う！私の狙いは・・・こつちだ！！もう1つの畏発動！！結束術・絆」

「んな！！」

「自分フィールド上に存在するモンスター2体と、相手フィールド上のモンスター1体を選択して発動する。選択したモンスター2体を1つの攻撃として、選択した相手モンスターと戦闘を行う！！」
結束術・絆・畏・効果、自分フィールド上に存在するモンスター2

体と、相手フィールド上に存在するモンスター1体を選択して発動する。選択したモンスター2体の攻撃を、1体のモンスターの攻撃として攻撃力を合計し、その数値で選択した相手モンスターと戦闘を行い、ダメージ計算を行う」選択するモンスターは、ダイガスタ・ガルドスと」

「イビリチユア・マインドオーガス」

2人の息がピッタリ合った。

「んな・・・バカな!!」

「確か、たかが100ポイントと言いましたですわよね？」

「それがどうした!!」

「貴方のライフ、丁度0になる計算ですわよ」

「っ!!」

「たかが100、されど100。小さなダメージも、後に大きな過ちになると言う事ですわ」

バカな、こんな小娘に・・・バカにされるとは!!

「これが、絆の力ですわ!!どんなに孤独を感じても、絆があれば、それを乗り越える事ができる!!ウイン、貴方はそれをこのデュエルで教えてくれたのですわ!そして遊画からも、貴方からはすでに教えてもらっていたですわ!!これが、私たちの想い!受け取れええええええええ!!」
「ATK5800」

マインドオーガスと、ガルドスの杖が重なった。

そこから、強大な何かが発生していた。

まるで、2人の絆を象徴するかのような、青と緑色の混じった円球体。

「「受け取りなさい(ですわ!!)2つの絆!!」」
ダブル・ボンド
バシユツ

勢いよく放たれたそれは、相殺のクラッシュャーに向かっていた。

向かい撃つように相殺のクラッシュャーは、肩のキャノン砲や腕のガトリング砲で対応していたが、決してそれが壊れる事はなかった。

「クツ・・・畏・・・」

「……もう、やめておけ。」

「これ以上何をやっても、アイツ等は俺をさらに超える戦術をするだろう。それに、もういいんだ。アイツ等の言うことが本当なら、俺は仲間を傷つけている事になる。」

「……お前は、そう望むのか？アイツ等に倒されるのが、望まれるのか？」

「……ああ、自分でアイツ等を倒すよりは、アイツ等から倒される方が……よっぽどマシだ。」

「……お前らしい答えだ。」

「そりゃどうも。なあ、お前は今が楽しいか？」

「……それを聞いてどうする？俺は、お前自身だ。トトとも違う、本当のお前自身だ。」

「……どう言う意味かは聞かずにいる。どうせろくでもない話があるに違いないからな。」

「フツ、だったら聞かずにいる。」

「……そうだな。こんな、つまらない今を過ごしている今は、聞かずに……いるよ。」

相殺のクラツシャーに攻撃が通り、その頑丈な体を乱暴な光が貪っているようにも見える。

装甲がバリバリと剥がれ、腕や肩の武器は光となって消えていつていた。

そして、放たれた円球体はここでは止まらずに、遊画のいる場所までもを襲いかかった。

何も装備のない生身の人間が、丈夫で固いロボットを一瞬にして破壊した光に包まれた。

「……何だ、この光は？まるで、暖かい光だ」
HELP
30000}

しかし、その光は言葉の通り、優しく、暖かい光。

自分の中にある悪意を取り払うかのような、そんな感じになった。

「・・・人の心を通わせる・・・モーメントだからこそ、感情が・・・って事か。やさぐれさせる」

その顔には、さっきまでの憎しみ、悲しみなどはなく、むしろその正反対の、喜びや憂いが見受けられていた。

「・・・想いか。悪くない感情だ・・・」

その時、遊画の表情が、元の死んだ目をしているような目つきになった。

元に戻れた。

遊画の脳内に、その言葉が過ぎった。

しかし、ついでにこんな言葉までもが過ぎった。

「・・・でも、衝撃が強いな。しかも、ここは崖。

イヤな予感を連想させるような口調だ。しかも、その数秒後、連想したできごとが起きた。

ピシピシピシ！！

デュエルの衝撃が強かったのか、遊画の足場にビビが入った。

「・・・！！！」

「遊画！！！」

「・・・何でアイツ等、俺の心配をしているんだ？」

俺は、あんなに酷い事を言ったのにも関わらず、どうして・・・。考えるだけ無駄か。

どうせ俺は・・・死ぬのだから。

瞬間、遊画のいた場所が一気に、崩れた。

足場を失った遊画は、下へ下へと、万有引力を感じさせるように落ちようとしていた。

「・・・これで、楽になれる。」

ゴメン、トト。俺が先に逝く事になって。

だが俺は、最初から存在してはいけない存在。

どんな裁きを喰らおうとも、それは俺に着せられた運命。

抗う事は・・・できないんだ。

パシユツ。

・・・・・・？

いつまで経つても、体が下へと落ちない。

それどころか、腕を誰かが掴んでいる。

(何が・・・起きているんだ？)

遊画は、上を見上げた。

目に飛び込んできたのは、さつきまで自分と戦い、傷ついていた・・・それでも必死になって遊画を助けようとする、少女たちの姿。エリアとウィンが、一生懸命になって遊画の右腕を掴んでいたのがある。

「・・・っ!!」

あり得ない!! どうしてコイツ等は・・・俺を助けている!!

「その手を放せ!! お前らまで巻き添えを食らうぞ!!」

見れば、あの2人の足場までもがミシミシと軋みを上げている。

このまま遊画を放さなければ、3人まとめて海へと転落する。

そんな事、俺は望まない!!

しかし、そんな意思とは裏腹な答えが、遊画の心を貫いた。

「イヤ!! もうこの手を放さない!! せっかく取り戻した大切な人を・・・また失ってたまるものですか!!」

「・・・っ、もう、放さない。この手が千切れても、貴方だけは・・・絶対に連れ戻したい!!」
な!!

「どうしてだ!! どうしてお前らは・・・俺を見捨てようとしてない!!」

「どうしてって、決まっていますの!!」

「貴方が・・・好きだから!!」

ウィンの瞳から滴が落ちた。

その滴は、遊画の頬に当たり、下へと垂れ流れた。

「好き……だから？」

聞く限り、疑問系なのは明白だ。

無理もない。

遊画には、最初から「好き」と言う感情は始めから無かった。

作られた人になど、誰かを好きになる行為が、許されないと証明されるような……

悲しい現実だった。

続く

次回予告

ゴメン、救われたすぐに悪いけど……俺は行かなければならぬい。

あの町は、俺達の町だ！！

冥界を支配する者かは知らんが、そんな物、俺が壊してやる！！

次回、遊 戯 王 F a t e 第40話「脱出、2人の精霊から逃げ切れ！！」

「……行っちゃダメ！！もう貴方が、傷つけられる姿を見たくない！！」

次回のキーカード

ガスタの希望 カムイ・サイキツク族・ATK200・風・ 2・
効果

第39話「気持ちが築き上げる愛」(後書き)

あとがき

し・・・死ぬかと思う、蒸し暑さ。

そして頭痛がする、梅雨の時期。

何で今、雨が降る。そして蒸し暑くなる!!

腹立たしい、頭痛い。

そして間に合うのか、原稿!!

こんな調子の俺龍Yn・Ragoです。

流石に堪えます。

これ程までに辛い時期が来るとは、正直萎えます。

まあ、こんな調子でございます。

愚痴を言っけても何とやらって事で、ここで終了。

それでは次回、デュエル無しの追いかっこの始まりです。

遊画の性格が思いつ切り表に出ます。

ちなみに、次回は6月上旬です。

その間に、こちらの都合があまりにも詰まりすぎているので、御了承下さい。

トドのつまり、次回も楽しみに。

5月9日 自宅にて

第40話「脱出、2人の精霊から逃げ切れ」（前書き）

40話突入！ でも、やる気が起きない！ 理由？ 梅雨だから！

第40話「脱出、2人の精霊から逃げ切れ」

「……………」

俺は、絶句している。

少し前に、自分で傷つけた人から、「好き」と言われた。

これは、一体どう言う事だ？

好き…………俺の知っている事で言えば、心が引かれること。気に入ること。また、そのさま……。分からない。俺には、なぜ俺に向かつて好きと言えるのか？

何か気に入られる事でもしたのか？

何か心が引かれる事をしたのか？

答えは、否。そんな事をやった覚えも無ければ、やるハズもない。

もしも、気に入られる事を行ったにしても、なぜ自分を傷つけた相手を、ここまで守ろうとする。

なぜ……………」

「……………どうしてなんだよ」

俺は、今の心のモヤモヤの原因が分からずにいる。

その答えを、どうしても知りたい。

俺の心に響く、この言葉の原因を。

「……………どうしてって、決まっているでしょ!」

「好きな者を…………守りたいと思ってる何が悪いのよ!」

……………守りたい者とも言いたいのか？

この俺が、守られる側だと。

「……………ははっ、冗談はやめてくれよ……………」

ギョツと、より一層掴まれる力が強くなっている。

「これが冗談と言えるの!!」

冗談は……………」

「冗談だと言ってくれ! そうじゃなければ…………俺は、死に
きれる物も死にきれねーよ!」

「だったら……死ぬつもりなら、それを全力で阻止するまでよ！ 私たちは、貴方が勝手に死なれたら困るのよ！ 生きて！ 生きて……これが私たちの願いよ！！」

ピシピシピシ

更に、地面にヒビが入っていく。

このままでは、コイツ等まで下に落ちてしまう！

だが、絶対に手を放す気すら無いようだ。

「っ、もう俺の事はいい。そろそろここが陥落するぞ！」

「そんな自分勝手な言い分が通用すると思ってるの！？ 少なくとも私は、」

「私たちは……」

「この手を放す気なんて絶対にない！！」
と、次の瞬間。

ワインとエリアがいた場所が、一気に崩れ崩壊した。

下は海だが、落ちれば一溜まりもないであろう。

しかし、そんな中でも……2人の手が放される事は無かった。ものの数秒の間だが、俺には数十秒の感覚だった。

2人は……まるで俺を守るかのように俺を、優しく抱きかかえていた。

い……以外と苦しい。

だが、何だ？ この安心感。

……そうか。これが……安らぎと言う物なんだな。つて、感心している場合ではない！！

本当にこのままでは、3人とも一緒に死ぬぞ！！

それだけは避けたい。

だが……俺がそんな力が……そうだ！

……ダメだ！ モンスターを召喚しようにも2人が邪魔で腕が動かない。

どうしてだよ、どうして……………。

「本当に、無茶をするんだから。このおバカさん達は」

まるで、女神のような声が聞こえたかと思った。

そして俺の意識は、深い暗闇の奥へと落とされていった。

デュエルモンスターズ、それは古の時代から受け継がれしゲーム。デュエル、それは決闘者同士で強さを求める儀式。

ライディングデュエル、それはスピードの中で進化したデュエル。この物語は、絆と仲間で繋がれたデュエリスト、公栄遊画を中心とした、熱きデュエルが繰り広げられる勇気と愛の物語である。人は後に彼のことを、フェイトデュエリストと呼んだ。

第40話「脱出、2人の精霊から逃げ切れ!!」

「……………全く、こんな場所で何をイジイジしているんだ?」
体育座りをしている俺の目の前に、赤い髪の男がいる。

……………黙れ。俺は別にイジイジなどはしていない。

「……………ごめんなさい。俺の、いや私のせいで……………こんな事になるなんて」

しかもその横には、黒い髪の女性が。

「……………ほら、立てよ」

赤い髪の男、トトが俺に手を差し伸べた。

……………不思議と、手が伸びていく。

何故だろうな? 俺は、不思議に思いながらも、差し伸べられた手を……………固く握った。

「……ん？　ここは。」

「まぶた瞼から、微妙に光が目に入っているのを確認すると、自分の感覚では重く感じていた瞼を開いた。」

「ここは……どこだ？」

「見れば、俺はベッドに寝させられているらしいし、するとここは？」

「……どこかの家って事か」

「しかし、家と言うよりは城に似たような感じだ。」

「家の作りが煉瓦れんが風だし。昔にこんな風景を写真で見た事がある。」

「……間違いない。ここは城だ。」

「だとすれば……。」

「……周りに誰もいないな。多分、買い物か何かをしている頃だろう」

「そして俺は、ベッドから立ち上がると、こっそりとドアの外を見た。見張り兵らしき人影がある。」

「……だったら、窓からか。」

「すぐさま俺は、窓の外を確認した。」

「だが、とてもではないが人が飛び降りたら呆気なく死ぬるレベルの高さだ。」

「……チツ、ここもダメか。」

「……早く行かなきゃな。オイ、トト。お前、起きているだろ」

「……お前は察しがいいな。どうせここから抜け出して、現実世界へと戻る気だろ」

「当たり前だ。そうでなければ、すぐに起きあがりはしない。」

「……ゴメン、救われたすぐに悪いけど……俺は行かなければならない。」

「時計を見て分かるが、俺の意識が途切れてからすでに7時間は経過している。」

「アイツは、言った。明日の18時が、タイムリミットだと。」

「すでに時間は、残されていない。」

・・・見捨てはできない。

あの町は、俺達の町だ！！

冥界を支配する者かは知らんが、そんな物、俺が壊してやる！！

・・・そんな事だ。

「さて、行くか」

生憎、捕らわれた姿のままの状態なので、キツチリと服が捕らわれた時のままになっている。

しかも、俺が鬱になっている時には、何もやる事がなかったので暇つぶしに色々な物を開発していたしな。まさか、こんな場所で役に立つとは。

俺はそう思うと、苦笑した。

そして俺は、窓の外へと足を運ぶと、超極細のワイヤー仕込みの腕時計を使って、下へ下へと降り始めた。

騒動が起きたのは、それから数分後である。

多分、誰かが部屋に入ったのかは知らないが、俺が脱走したと伝えられたらしい。

おかげで、町へ逃げ込んだはいいが、すぐに追っ手が駆けつけている。

町を徘徊しているようだし・・・どうした物か。

『このルートなら、裏道を通って行けば・・・』

「バカ言うな。すでに裏道は待ち伏せされているだろ。そうじゃなければ、こんな裏道でカラのゴミ箱の中に身を潜めたりはしていない」

おまけに、ここでモンスターを召喚しようにも、デュエルディスクがない。

しかもD・ホイールまで。

まず最初に、それを探するのが先決だろう。

・・・が

突然、元気一杯な声が聞こえた。

「だ……誰だ!」

俺は慌てて振り向くと、1人の男の子が、明るい笑顔で俺の真後ろに立っていた。

「お前は……」

「うん、僕の名前はカムイ。ウィンねーちゃんのお・と・う・と・
・だよ」

何故か弟と強調して言っているが、何故だ?

「うーん、おねーちゃんがザンボルトを使って遊画を捕まえようとしていたけど、そのザンボルトがまさか遊画に甘えてしまうとはね。僕たち以外にここまで懐く事は絶対に無いと思っていたのにな」

「ま、そんな所だ。生憎、もはやザンボルトはすでに俺に懐いてしまっているからな。コイツはもう、使い物にはならないだろ」

そう言いつつも、なでるのは止まっていない。

コイツも、気持ちよさそうだし。

「そうだね。もうザンボルトは使い物にはなくなっちゃったからね。

でもね……」

カムイが怪しく笑みを見えた。

と、次の瞬間。

「ていあー」

「んな!」

み……見えなかったぞ。

いきなりカムイが目の前に現れたかと思えば……気が付けば後ろにいる。

この一瞬で何が……?

「もーらい」

見ればカムイの手には、俺のヘアゴムが。

「い……いつの間に!」

クツ、あの緑髪女の弟だけはあるな。

素早い動きなのは、アイツと同じとでも言っておこう。

「へへっ、これから鬼ごっこをしよう。僕を捕まえられればこのへアゴムを返してやるよ」

フツと、すぐにその場からカムイがいなくなった。

野郎、俺が追われの身なのを知ってやっているな。

だが……

「こっちにも、考えがある」

そっちがその気なら、こっちだってやってやらあ。

見てろよ……あのガキ。

ポケットから、化粧品を取り出した。

タツタツタツタツタ……

「へへっ、迂闊にはあの場から動けないだろうな」

カムイはそう呟くと、再び大通りに出た。

手に持っていたへアゴムをポケットの中にしまい、走りやすい状態になった。

「ここまで目立つような大通りに出れば、追いかけて来れないハズ……」

あのまま見逃しても良かったけど、その場合だとおねーちゃんから酷い体罰を喰らうハメになるからね。流石に耐久性ない僕だから、それは勘弁してもらいたいけど。

……アレ？

カムイは不信に思った。

何か背中から、違和感が漂っている。

いや、本当に何か引っ付いているような……何故だろう？
……まさかね。

一旦大通りから、路地の方へと向かった。

そして、背中に手をやると……やっぱり何かあった。

それを取ってみると、丸い球体の何かだった。

「・・・・・・・・？ なにこれ？」

真ん中部分からは、チカチカと赤いランプが点灯している。
これって、もしかして。

「・・・・・・・・発信器？ いや、まさか」

そのまさかだった。

ガツとカムイの首筋を持たれた。

「ひゃいー!!」

恐る恐る見ると、ニッコリと笑っているながらも何か怖い雰囲気を漂わせている・・・・・・・・女性だった。

「みーつけた」

ゾクツとした。

声が・・・・・・・・遊画の声だからだ。

「え・・・・・・・・あ、遊画のおにーちゃん？」

「正解だ。俺は元々女性よりの顔つきだからな。化粧さえすれば周
りから怪しまれずに追いかけられたって事だ」

しかし、服が遊画の服装のままだったが、その辺を気にするほど、
この辺の住人はお人好しではない。

それを知ってかは知らないけど、見事としか言いようがない。

「さて、俺のヘアゴムを返せ」

「イヤ」

「ほう、返さないと云うのなら・・・・・・・・ここか？」

グイッとポケットの中に手を入れられた。

「ひゃいー!!」

ゴソゴソとされた後、その中からヘアゴムが出された。

「く・・・・・・・・くすぐったいよ」

しかも、その時のカムイの表情は・・・・・・・・弱った子犬のような愛ら
しい表情をしている。

すると再び、遊画の心の中で、何かが弾け飛んだような感触がした。

「く……くすぐつたいよ」

や……ヤバイ。何だ、この可愛い動物。

いや、もはや動物と言っではいけない。この可愛さは、男の娘レベルの可愛さだぞー!!

いじりてえ、すつごく俺の母性が反応しているのだが。いや、実際は男だから母性と言っるのはおかしいとは分かっているが。

「こ……怖いよ。何でそんな獣のような目をしているの?」
獣のような目か。むしろそれでよし!

「さて、俺のヘアゴムを取ったお仕置きをしなきゃな」

「ど……どうしたの急に!? 何だか目がイッている上に息づかいが荒れているんだけど! ムキユ」

ほっぺをムギユツと掴むと、上へ横へと伸ばしていく。

以外と伸びるな、コイツのほっぺ。

「むぎゅ、はめて、おふえふあい(むぎゅ、やめて、お願い)」

「え? もつとやってって?」

「ふおんふあふおとふあひつてひふあいふおー(そんな事は言っていないよおー)」

……あ、何だか目覚めそうだ。

俺は、つい手を放してしまう。

「うつつ、遊画のおにーちゃんのバカ! ショタコン野郎!」

「むしろ、それでいいような気がする……」

「つて、何で遠い目になっているの!? ダメだよ、本当にショタコンになったら……変態になるから」

「変態ねえ……女性を汚していないから、別に変態ではない!」

「それは言い切るような事じゃ……あつ」

ナデナデと、カミイの頭をなでる俺。

子どもの手なずけは得意なので、とりあえずは黙らせる。

「うつつ、もうおムコには行けない……」

「ん? だったら、俺がもらうゲブア!」

俺の顔が、思いつ切り壁へとめり込んだ。

「……は、ははは。いつの間に、しかも気配まで消して。」

「……私の妹に何をしたの？ このシヨタコン」

見えてはいないが、多分恐ろしい顔つきになっているに違いない。つて、妹と言っているのにシヨタコンつて、矛盾していないか？

「ベ……別に、何もしてなんか……」

「うつつ、もうおムコには行けない……」

ギリギリと、壁に押しつける力が更に力を増していく。

もうこれ以上喋るな、カムイ。

確かに、取り乱した俺も悪いと思うが、そもそも原因作ったのお前だろ！！

「……このまま取り押さえられていたら、いずれ捕まるのがオチだから……つと。」

服の中から、球体の何かを取り出すと、それを地面に向けて投げつけた。

ボムッ！！

「っ！！」

「まわりが見えないよぉー！」

辺りに煙幕が張られ、路地は煙に覆われた。

そして、今のうちにと言わんばかりに、俺はその場から逃げ出した。

「……行っちゃダメ！！ もう貴方が、傷つけられる姿を見たくない！！」

そんな声が、後ろから聞こえた。

「……傷つけられる姿か。」

ゴメン、それでも行かなければならねーんだよ。

元々は俺のせいで、こんな事になってしまったんだ。

『いや、それは俺のせいなのよ。だから、貴方がどうこうする筋合いはない』

「……そうは言うがヘル、お前が俺の中にいる時点で、お前は俺だ」

『っ、で……でも!』

「……いや、そうできてくれ。俺は、過去の事がある。俺が造られたあの日から、俺は何も知らずに生きてきた。だが、俺は真実を知った。そして俺は生きている。どうすれば、罪を償えるのか? 答えはもう出ている。今回の事件を引き起こす事になった、幻魔をこの手で倒すのみだ! だから、理解してくれ、ヘル」

『遊画……』

どうやら、納得はしたようだ。

こうなった以上、俺が事件を止めるしかなさそうだ。

それに、相馬の事もある。相馬は、俺がいたから妹が死んだと言っていた。

……否定はしない。あの日、海佐が俺に関わった事で起きた事件だ。

だが、だからと言って、町を滅ぼすのに手を貸しても良い訳がない! 俺が目覚めさせなければ……今のアイツは復讐しか考えていない、ただの復讐者だ。

そんな兄を見ても、海佐は悲しむだけだ。

待っている相馬、俺が目覚めさせてや……

「いたのですわ!! 待ちなさい遊画!!」

でもその前に、今は逃げなければいけないな。

「ってか、なぜ俺だとバレた!! 普通の人が見ても分からないレベルの変装だぞ!」

「私を誰だと思いで? その服装に、顔つきを見れば遊画だと一目瞭然ですわ」

オイオイオイオイオイ、冗談だろ?

どんだけ察しが良いんだよコイツは。

「いた、待てや遊画!!」

「待って下さいよ、遊画さん」

「いました、待つて下さい遊画さん」

「あははは、バカがいたよ」

.....

どうやら、記憶を失う前の俺が、とんでもない事をやらかしたよう
だ。

もうここまで来ると、出す言葉すらない。

だが、戻りたいのは事実無言なので、一応は逃げるが。

そう思いながら、俺は一生懸命逃げていった。

それから数分後

追ってから逃げた俺は、橋の下に身を潜めていた。

ここなら、何とかなるハズ.....

「ばあー！」

「ぎゃあああ！！！」

誰だ、急に古風的な驚かし方をやる奴は！

キツと、俺はそっちの方を振り向いた。

が、見た瞬間に固まった。

緑色のポニーテールの、悪魔が。俺のメノマエ.....

「あつははははははははは！！ 何をそんなに固まっているの？ 別

に私は、ウインとは少し違うような奴なのよ」

.....確かに、あのウインよりは、少し御転婆おてんばと言つような言葉

使いだし、何よりも言葉に感情がある。

コイツは一体.....？

「あ、私の名前はウインダ。私はウインとは違って元々から、精霊
界にいるのよ。多分、ウインが憧れた性格がそのまま実体化して、
私が生まれたと思うけど」

自分の事なのに、自分でも理解していないとは.....

流石はウインの意思と言うべきか。

だが、一体なぜここにいるんだ？

「まさか、俺を捕まえに」

「まさか。そんな事をやるような見た目に見える？」

「やははははははと、笑っているようにも見えるが。」

「……だがまあ、アイツがこれに憧れるのは、ちよっとは理解はできるかもしれない。」

無表情で、何を考えているかが分からないアイツにとって、明るい表情を作り出すのは、ある種不可能とも言えるし。

「それで、そんなお前が一体何の用だ？」

「うーん、一種のお悩み相談、乗るよとでも言うておく」

「……もしかしてコイツ、全てを理解しているとかじゃねーだろうな。」

「……言うてもいいのか？ 追われの身の俺に対して」

「平気平気 どうせ捕まえる気なんて真っさらないんだし」

案外サツパリとした奴なんだな、コイツは。

そう、苦笑しつつも、少しは考えはした。

そして、ある程度話す内容を考えた俺は、口を開いた。

記憶を失った後の、心の心境。

捕らわれた後の、束縛されながらも真実を見た瞬間。

そして、海佐の事や、その兄の事。

話せる内容を、全てぶちまけた。

しかし、そんな俺に対して、ウインダは耳を傾けてくれた。

それどころか……

「……そうなんだ。キミはそんな悲しい事を、思い、想い、苦しんでいたんだね」

こうやって、同情してくれていた。

「……やめてくれ、俺がどれだけ苦しんでいたのか分かってい
るような仕草をしやがって……」

急に、涙が出てくるじゃねーか。

全てを解放したような感じに襲われ、ボロボロと、俺の目から滴が
．．．

「．．．．．見つけた。こんな場所にいるとは
声が聞こえた。」

振り向けば、そこにはウインがいる。

だが、俺の表情を見るなり、少し固まったような感じになっている。

「．．．．遊画に何をしたの？ ウィンダ」

少し、怒りを覚えているような声を出している。

何か、怒らせるような事を行ったのか？ コイツ。

「いや、別に。ただ、お悩み相談をしていただけだよ。」

それでも、笑顔を絶やす事もなく、ウィンダは微笑みを見せていた。

「．．．．それで、何でこんなに遊画が泣いているの？」

ウインが口走った言葉に、ウィンダはピクリと眉を動かした。

「それが分からないとは．．．．まだ子どもだね、ウインは」

「．．．．．どういう事なの、それ？」

「まだ分からないの？ 遊画は、苦しんでいるのよ。過去の事から、
今の罪の重さまで」

ウインは、予想もしていなかった言葉だったからであろうか。聞く
なりその場で絶句しているのが確認できた。

出す言葉すらもないのである。ワナワナと震えるばかり。

それでもウィンダは、言葉を続けていた。

「キミは何も分かっていない。何故遊画が苦しんでいたのか？ 何
故遊画が、異性を拒絶していたのか。私には分かる。多分遊画には、
恋愛や異性としての何かが、最初から欠けていたんだと思う」

俺にとっての、恋愛や異性としての何か．．．。

確かに、何も思えないのが事実だ。

だが、それが何の関係が。

「．．．．．どうして、そう思えるの？」

「決まっているでしょ。この人は、神として生まれてくるはずだっ
た人。だったら、ただの人間に興味を持たせるような事を、あの研

究所の奴らがやると思う?」

「……成る程、つまりは恋愛や女性の何かを、最初から脳に教え込まれていないどころか、無理矢理排除していたのか。」

「最悪、神としての資質を意地する為に……とても言いたいのか?」

「……それでも」

「……?」

「それでも、遊画を諦めたりはしない! 例え私を想っていないくても、私は想い続けたい。その先にあるのが、どんな感情だったとしても、私は……知った愛を手放したくない!!」

何を言っているんだコイツは?

知った愛……。誰かを愛しているとでも言いたいのか?

「でも、実際にそれが遊画に伝わるとでも思っているの? さつきまで話を聞いている遊画の表情が変わっていないのを、キミは気づいているでしょ。それでも気が付こうともしない」

「分かっている! 分かっているけど……」

「認めたくはない……と言う事ね。分からなくはないけど、それがキミの……いや、キミたちの悪い所とでも言っておこうかな。さつきから盗み聞きしているのは分かっているから、早く出てくるといいよ」

「……」

橋の丁度死角から、5人の人影が見えた。

さつき、俺を追い回していた連中だ。

「……貴方達」

「つ……ついこつそりと、聞き耳を立てていただけですわ!

それに……」

エリアは、ゴニョゴニョと目を逸らしている。

「つまりは、自分に当てはまる事ばかりで返す言葉も見当たらない……つてところかしら」

「つ……!」

多分、コイツはあの白髪の女の子以上に毒舌家だと思う。

結構、躊躇ためらいもなくズバツと言っているのだから。

・・・そろそろ、帰りたいのだが。

そうじゃなければ、町が・・・消滅する。

・・・まだまだ話は、続きそうだ。

続く

次回予告

ついに俺は、現実世界へと帰る事に成功した。

だが、待っていたのは第3の刺客、シーザーであった。

まだ体力が完全に回復していないのに、どうしろと!!!

次回、遊戯 王Fate 第41話「参上、その名はヒーロー仮面」

「こんな私は、光栄かな？」

次回のキーカード

アドバンスド・ヒーロー

A・HERO タイガー・シンクロン・戦士族・ATK200・地・

1・チューナー

第40話「脱出、2人の精霊から逃げ切れ」（後書き）

あとがき

・・・・・・・・・・・・・・・・（半死状態）

ど・・・・・・・・どうも、梅雨入りして偏頭痛が続いております、R a g
oです。

いや、マジでこの頭痛のせいで、出すはずだった小説も間に合わず
仕舞いですよ。

全く、勘弁してくださいと言いたいところですが、小説間に合わな
かった原因は中間テストですがね。

点数は控えさせてもらいますが。

・・・・・・・・さて、最近相変わらずコダロスビートや魔轟神からフ
ルボッコですよ。

ガチで、勘弁してくれ。

・・・・・・・・最もながら、原因はクシャノですが。マジでアレは制限か
禁止に入れるべきだとは思うのは俺だけか？

まあ、最近のできごととそれぐらいです。

・・・・・・・・あとは、調理の検定近いのでお弁当のメニューを授業で作
った結果、きんぴらの醤油の分量を書いておらず、ただただ醤油を
大量に入れてしまった結果、おお、ご飯が進む、進む。悪い意味で
・・・・・・・・悲しき運命なり。

気を取り直して、それでは次回、やっとデュエル編です。

長々と待たせますが、次は2週間以内に書き終えたいと思います（
とは言っても、期待して待っているのは数名だけだとは思いますが・・・

）
へたすれば、ファンタジアかMF文庫に、出すはずだった小説を出
すかもしれないので2週間以上かかる可能性があります、その辺
りは御了承ください。

それでは次回も、宜しくねー。

第41話「参上、その名はヒーロー仮面」(前書き)

アレです。最近腹痛が収まりません。

第41話「参上、その名はヒーロー仮面」

今、この町は危機に陥っている。

辺りでは、デュエリストが負けては消滅し、負けては消滅し……のくり返しである。

こんなピンチの中だからこそ、彼女は待っていた。

自分の兄さんを。

こんな時だからこそ、待つ。

自分の中の、ヒーローだからこそ、一緒に戦いたい。そんな思いが込められている。

敵にバレないようにと、静かに……息を潜めている。

ツインテールで、仮面をした少女は、願っていた。

早く……早く戻ってきてと。

みんなが待っている、この町へ。

そして、別の場所でも同じ願いが込められていた。

祈りを捧げるような格好で、これまた息を潜めながら天に向かって。

「お願い……早く戻ってきて。遊画」

残り時間は……あわずか。

この極限の状況で、少女達は待ち続けている。

何の為に？ それは、待つ者を待つためにだ。

「兄さん……早く戻ってきて。もう、時間が無い」

デュエルモンスターズ、それは古の時代から受け継がれしゲーム。

デュエル、それは決闘者同士で強さを求める儀式。

ライディングデュエル、それはスピードの中で進化したデュエル。

この物語は、絆と仲間で繋がれたデュエリスト、公栄遊画を中心とした、熱きデュエルが繰り広げられる勇気と愛の物語である。

人は後に彼のことを、フエイトデュエリストと呼んだ

第41話「参上、その名はヒーロー仮面」

「……………」

「……………」

しばらくは、睨み合いである。

核心を突かれたエリアが、ただ呆然としている訳がない。

多分、威圧か何かをしているに違いない。

俺は黙って、その様子を見るしかない。

……本当は、今すぐにも逃げ出したい。

だが、このまま逃げてしまっても周りの奴らに取り押さえられるのがオチだ。

今はまだ、動けない。だが、タイミングを計ってすれば…………。

「…………ウインダ。貴方は、何がやりたいの？ 私たちをそこま
で追い詰めて」

「…………分かっていないのねウイン。だからキミは、自分の想いを
あんな状況でしか言えなかったのね。納得するわ」

「…………どう言う意味？ 場合によっては」

「貴方を潰す…………とでも言いたそうだけど、私の話は全て真実
よ」

未だに毅然^{きげん}として、言い続けるウインダ。

もはや、女同士の戦いになってきている感じがしてきた。

「真実…………ですって？ どう言う意味なのですわ！」

ついにはエリアまでもが参入してきた。

これは、長くなりそうだ。

「…………私は、ウインの心が生みだした精霊。人の心を読むのは
簡単さ。でも、遊画だけは読み取れなかった。読み取ったにしても、
それは悲しみの感情だけ。私は気づいていた。この人は、何かおぞ
ましい過去を持っているに違いないと。だから、私はこの人に近づ
いてみた。すると、やっぱり予想が的中したわ。この人の過去は、
重すぎると」

ウイン達を見る目が、より一層強くなる。

俺ですらも、恐怖を覚えるぐらいだ。

「それでも、この人に付いていける自信があるの？ 私だったら無理よ。だって、こんな人と一緒にいたって、自分までもが暗くなるだけだから」

正論だ。俺といたって、周りまでもが暗くなるに違いない。

俺は、造られた人間だ。人から生まれてうんぬんが無い。俺は、化け物だ。

こんな俺に、付いてくる奴なんて・・・

「・・・それでも」

ウインは、震えた声でも・・・ハッキリと、告げた。

「それでも、私はこの人と共にいたい！ 例えその先に、どんな苦難が待ち受けようとも、私は・・・いえ、私たちは、それを超える力を持っている！ そうでしょ？ エリア、ヒータ、アウス、ダルク、ライナー！」

「・・・そうですわね。遊画が何処で、どんな形で生まれてきたのかはどうでもいいですわ。私は、守りたい人の側にいる事こそが、最高だとしか思っていない」

「全くやな。遊画が造られた？ 根が暗い？ そんな事、知ったことじゃないつちゅーねん。あの時は怒りで我を忘れていたけどな、ウチは、守ると決めた人を守りきれなくて、何が女だ！ と、後で自分を責めたで。だから、もうねじ曲げないで。この意思是、もう「そうですわね。私も、もうお姉さんだから、子どもの口の悪さは少し多目に見てあげないと。そうでなければ、本当に、おさらばですよ。そんな事、あつてはいけません。もう、誰かを失うのは・・・ね」

「まあ、僕も同じですよ。例えどんな闇を抱いていたって、それはその人の意思とは無関係・・・とまでは言いませんが。でも、それを誰かに打ち明かす事も大切ですから。ですから、僕はこの人の横に、いたいです」

チツ、後ろを振り向いた瞬間、ワインに襟を掴まれた。

感だけは良いヤツめ。おかげで逃げそびれた。

「…………でも、行くんでしょ？」

「…………まあな。俺は、行かなければならないんだ。俺が捕まった事によって起きた事件だ。別に罪滅ぼしって訳でもないが、それでも俺は行く。あの町は、俺の町だからな」

シンと、辺りが静まりかえる。

急に言われて、重く答えたのが不味かったのか？

だが、これも真実だ。思った事を答えなければ、後々になって面倒な事が起こりかねない。

ここで誤魔化しても、後に「何である時誤魔化した」と問いつめられても困るからな。

全く、本当に面倒くさいな。だが、それ程俺に何かを寄せているって意味になるな。

一体何を寄せているんだ。信頼？ 友情？ 権力？ いや、流石に権力は無いが…………。

だったら何だ？ 僕とご主人様しもへってか。いや、それはない。ってか、それを口に出した瞬間、ボコボコにやられるのがオチであるから、この考えはやめにしよう。

…………もし、寄せられている感情がそんな、生ぬるいもの以外だとすれば、それは何だ？

まさかとは思うが…………あ

「静寂すぎる空気は、あまり好きじゃないんだがな」

頭の中で考えている途中で、別の声が入ってきた。

紫色の髪の女に、ピンクの髪の女だ。

「エレナに、スクルド様」

黒髪の少年が呟いた。

エレナにスクルド、俺の記憶にない名前だ。

記憶を失う前の俺でも知らない奴か？

だが、そんな思いもすぐに違つと知らされた。

「遊画、コイツ等はお前の返事を待っている。私もその一人だ。だから、一緒に行くか行かないか、どっちかを今すぐ決めてくれ」
しかも、何やらとんでもない選択肢を押しつけられている。

一緒に行くか行かないか。そりゃ、答えはNOに決まっている。

見知らぬ誰かを巻き込んで、戦いに行くほど俺は脳無しではない。

「……イヤって顔をしているね。その表情を見れば分かるわ」
スクルドは、どうやってかは知らないがその感情を見破っている。

コイツ……何者だ？

「でも、無理もないわね。記憶を失って、今は赤の他人になっている人を巻き込むようなバカじゃないから、貴方は」

すると、スクルドは俺の前まで歩いてきて、そして……

「ごめんなさい！」

そのまま、頭を下げた。

「え……えつと、俺に頭を下げられても……」

「いいえ、アンタが記憶を失ったのは私のせいなの。私が、余計な力を加えなければ……アンタがここまで墮落するハズでも無かった！ だから、全て私の……せいなもの」

「……いいや、違う。全ての元凶は、幻魔だ」

俺は知っている。

どっちみち、当たり所が良かったにしても、あの直後の俺は俺ではなかった。

記憶が無事でも無事でなくても、俺がコイツ等にああ言うのは変わっていないかった。

それを考えれば、コイツに罪などない。

「それでも、私は自分がやった事に対しては責任を感じているわ。

だから……」

ヒュルリ

「……ん？ ヒュルリと、何かがほどける音がしたような。

「わ……私を、好きにしなさい。今、ここで」

俺の思考が停止した。

目の前には、着ている服の紐をほどき、その服が万有引力によって地面に引かれた……つまりは服がはだけたスクルドの姿が目映し出されている。おまけに……

「お……オイ、スクルド。お前、下着は？」

普通、服がはだけたとは言え、下着が露出するのが一般だ。

だが、コイツはそんな事はなく、そのまま生身の体が露出している訳だが、言いたい。何でだよっ！

「し……下着なんて、昔から付けていないわよ！ 神だから……その」

恥ずかしがるスクルド。顔を赤くして、目線を逸らす俺。

一瞬見えたが、スタイルが良く、胸もけっこうあったし。しかも、コイツの肌は本当に綺麗だった……って、何を考えているんだ俺！！

落ち着け、とりあえず今の状況を整理しよ……

「……いつスクルドフラグを立てた？」

「良い覚悟ですわね。まさかスクルドをすでに攻略済みとはですわね。しかも、ここで野外プレイをさせるまでの関係になっていたとはですわね。どういう事が説明してもらおうですわ」

整理しようにも、目の前にいるこの2人をどうにかしなければならなさそうだ。

しかも、2人とも目がレイプ目になっているし。おまけに黒髪少年が「スクルド様」と言ったにも関わらず、コイツ等呼び捨てだぜ。

……生命の危機を感じた時、ここまで汗が止まらなくなるんだな。

始めてなのに、改めて実感した気分だ。

「ま……待て。どうしてそんなに怒っていらっしやる。俺は別にやましい事をやるつもりもなければ、女性に襲いかかる事もしない……って、同じ意味か。あ、何で、どこからそんな杖を取り出したんだお前ら？ え？ 女の敵はみんなの敵？ これは嫉妬じゃなくて、ただのお仕置きですわ？ ちよっと待ってくれ。俺の言い分は

？ 聞く耳持たず？ 聞いてなんぞや？ あ、そうですか。それは俺はこの辺で……逃げろおおおおお！！」
「逃がさない（ですわ！！）」
後ろから水と風の連携攻撃が、俺に向かって飛んできた。
本当に、生きてここから帰れるのか？
そう思った瞬間であった。

時を進めて、数分後

「その、裸を見せたのはアンタ等が初めてだから……」
「そんな事は今はいい。そしてウイン、エリア。なにげに杖を構えるな」

俺を殺すような視線がザクザクと、背中に突き刺さっている。

さっきまで追い回し、追い回し、捕まえては手足を押さえ、蹴っては殴りのくり返しをしていた2人。

おかげで、体から痛みが消えない。

……だけだったらまだ良かった。

俺が抵抗して、腕を上げた瞬間、同時に2人の胸を触ってしまい、再びリアル鬼ごっこ開始。

2人は顔を赤らめながら、俺は顔を真っ青にしながら追いかけてそんぶん存分に堪能した訳だが……。

いい加減にイライラしたエレナから呼び戻され、今は城の中にいる。そして、その廊下を俺達は歩いてた。

しかも、目の前には服を脱いで、俺が2人から追い回される原因を作った奴がいるし。

「……アンタに、お詫びをしてやれないのが残念よ」

「いや、アレをお詫びと言うのはあまりにも苛酷だと思っるのは俺だけか？ それに、お前はすでにお詫びをしているだろ。お前は俺達を助けた」

知らないと言わせない。

あの時、崖から俺達を救ったのは、紛れもなくコイツだ。落ちていく最中に聞こえた声、間違はなくコイツの声だ。

「・・・それでも、まだまだ私の罪は消えていない。せめて、私の体で^{やま}疚しい事をすれば」

「これ以上は言わないでくれ。そうじゃなければ、俺が死ぬ」

ゴゴゴゴと、一気に殺気が増した気がする。

ダメだ、耐えきれない。

「・・・この事件が終わった後、ゆっくりと話をしよう。遊画」

「そうですね。この続きはベッドの上で、ゆっくりとお話をしましょうかですわ」

「ベッドの上で何をやるつもりだ！ アレか？ 毛布で俺を被せて、周りを真っ暗にした後に寝技でも決めるつもりなのかお前らは！！」
「もしもそうだったら恐ろしい。」

何が起きているのか分からずに、ただただ何が来るのかが分からないまま、暗闇の中で怯え続ける。

何とも悲惨な考えだ。

「・・・何でそんな考えになるのかが、私には分からない」

「そうですね。普通の男子は、ベッドと聞いて真っ先にアレを思い浮かべるのが普通だと思うのですわ」

何故か深い溜息をする2人。

何だか苦勞しているような眼差しだ。

「何をそんなに落ち込んでいるんだ？ もしもアレなら相談に乗ってもいいが」

などと言うと、急に視線が冷たく感じられた。

「・・・（ジー）」

呆れられたような視線に、俺はうつかりそっぽを向いた。

何がいけなかつたんだ？ 俺はコイツ等の悩みでも聞いてあげようとしていただけなんだが。

「そ、それだつたら・・・この4人で」

「スクルド様、調子に乗るな」

「……ハイ、スイマセン」

神が、普通の少女達に威圧されている。

コイツ、恥ずかしい事があった後だところなるのか？ だったら神様ってよりは、普通の女の子だな。

「な……アンタ、何をそんな目で見ているのよ。笑いたければ笑えばいいじゃない」

「いや、別にそんな目で見た訳じゃねーよ。ただ、お前も女の子だなって思ってる」

「お……女の……子。ば……バカ言っていないで早く行くよー！」

スタスタとスクルドは早歩きをし、俺はポカーンとしていた。

「何だ？ 正直に言っただけなんだが」

「それが原因だと思う」

口を揃えたウインとエリアから、何故かツツこまれた。

目の前には、俺のデュエルディスクとD・ホイールがある。

俺が気を失っている間に、トトの使っていた物をここまで運んでいたのである。

なので、デュエルディスクはトトバージョンのままか……と思いきや、あのデュエルディスクは特別らしく、トトが現れた時にのみ現れる仕組みらし。

なので、どうやってか回収された俺のデュエルディスクがD・ホイールに搭載されている。

「さて、ここで選択だ遊画。このまま1人で行くのか、はたまた私たちを連れていくのか」

「言わせるままだったら、答えは決まって……」

「やっぱり、予想通りの解答ね」

言う前から、スクルドはまるで予言でもしていたかのような発言をした。

まだ行くか行かないかの返事すらしていないのだが……。

「……貴方の事なら、すぐ分かる。記憶を失っている今でも……巻き込めたくないと言う気持ちがあるのは百も承知」

「でも、それでも私たちは行きたいのですわ。例えばどんな苦難が待ち受けても、覚悟を決めた私たちと一緒になら、何とかなる」

徐々に、俺は追い詰められているのを感じた。

本当に、これでいいのかと。

本当に、俺は一人なのかと。

本当は、コイツ等と一緒に戦いたいのではないのかと。

俺は、悩みに悩んだ。

すると、先に動いたのはスクルドだった。

「……やっぱり、記憶のないアンタに期待しても、結論は変わりそうに無いわね。でも、記憶があるアンタなら、そうは言わないわ」

何を根拠に、そんな事を言える。

「エレナから聞いていたアンタは、仲間を信じ、この子達を信じ、そして何より、信頼していたわ。だから、お願い」

「……俺は、そんな奴だったのか？」

多分、この事を聞かなければ俺の心は揺れ動かなかったであろう。しかし、聞いてしまったものは仕方がない。例えそれがウソであろうとも、アイツ等を見れば分かる事だ。

……仲間とは何か、そしてカードとは何か。

全く、仕方のない連中だ。

そこまでして、どうして俺に付いて行きたがる。

でも、何だか連れていってもいいような感じになってきた。

「ふっ、しゃーなしだな。分かったよ。これから起こる戦いだ。仲間が一人でもいれば、勝機はあるだろうからな」

「やっと応じてくれたで。ここまで頑固だとは思わへんやったわ」

「ふふっ、確かにですね。でも、遊画さんがいるから、自分が自分であるような気がするのです」

「……ふっ、確かにな。だが、また一緒に戦えるのかと思うと、
光栄に思える」

「あつははは、ダルクってば、遊画の口癖が移っているゾ」
皆が皆、楽しげにはしゃいでいるのを見ると、何だか俺は安心感を
持ててきた。

そうか、俺は……寂しかったのか。
失ったハズの絆を、再び取り戻したからか？ それとも、俺を受け
入れてくれる奴がいてくれたのが嬉しかったのか？
答えは分からない……いや、ぶっちゃけどうでもいい。

今はそれよりも、早く仲間の所へと行かなければ。

「話が決まれば、行くぞ！ 俺の町へ」

「……いや、私たちの町へ。あの町を、失わせる訳にはいかない
！」

これで決まりだ。

俺はD・ホイールに跨ると、各経路を示すモニターを瞬時に目を通
した。

デュエルシステム、問題なし。モーメント、異常なし。このまま、
突き進む。

「頼むぜ、スクールド！」

「オーケー、任せなさい！」

そして俺は、全速力でその場かは走った。
スクルドの力で、現実世界へと戻るために。

『やっと戻ってきたわ。あのバカ息子が』

呆れ半分の口調で、英子が通信でそう告げた。

しかし、それは嬉しい事だ。今まで遊画が来るまで動くなと言われ、
そしてその彼がやっと現れた。

自分が、一緒に戦いたい人がやっと……。

『……加奈、これからの戦いは本物よ。今まで通りでやってい

たら、間違いないか迎えるのは……死」

ゾクツと、感じる何かがあった。だが、それは一瞬に過ぎない。

「お母さん。この私が、しかも今の私が負けると思っているの？」

フフツツと英子は笑い、ニヤリと、加奈は笑った。

「そうね、貴方は正義の味方なものね。悪に負けるハズがないものね」

「ふははは、正義は悪に負ける要素など何もない！」

そう言っつて、高笑いをする加奈。

それを見た英子は、苦笑した。

『まあ、相変わらずの調子ね。そこまでしてヒーローに憧れているの？』

「いや、これは憧れではない！ 完全になっっているのだ！」

『そう……ね。まあ、頑張つてきなさい。それと、負けないように』

そう言っつと、英子は通信を閉じた。

「待っつてね、兄さん……ではなく、遊画。この私が、助けに行く！」

そう言っつて加奈は、立ち上がると自分のD・ホイール、「武帝丸^{ぶていまる}」へと跨り、辺りを警戒しながら走り出した。

……戻つてきたのは良しとする。

だが、俺は計算外の事に出くわしていた。

まさか、戻つてきたすぐに敵に見つかるとは。

……いや、これは待ち伏せでもされていたのか。

「俺の名はシーザー。幻魔様の刺客の一人だ」

見れば分かる。そしてわざわざ自己紹介をありがとつ。

しかし、幻魔の刺客とならば油断はできない。

おまけに、まだ俺は戦える状況ではない。

少なくとも、1時間はデュエルを行っつてはならない。

デュエルエナジーが完全ではない今、デュエルを行った所で途中で倒れてしまったりしてしまう。

それ程までに、エナジーは必要な物である。

どうすれば……。

「遊画！」

突然、後ろから声が聞こえた。

見れば、一人の女の人がD・ホイールに乗って向かってきている。

アレは確か、クラス表で見た……綾中沙耶。

キイイイツと、俺のすぐ横に止まった。

「やっと戻ってきてくれたのね。でも」

沙耶も、相手の方を睨んだ。

「どうやら、再会を喜んでいるヒマはないようね」

「ああ、まずはコイツをどうにかしなければ……だが」

俺は、デュエルができない。

代わりに沙耶がやる手がある。

俺は、沙耶に視線を送ると、それを知った沙耶は頷いた。

「分かったわ。だったら私が……」

「ふははははははは！！　そこまでだ、悪の化身！！」

突然、辺りにやかましい程の大声が響いた。

「な……何者だ！！」

シーザーも、突然の大声に驚きを隠せていない……つてか、何だか雑魚キャラっぽい口調で辺りを見渡した。

するとその直後、上から……1台のD・ホイールが落下してきた。

しかも、うまく着地し、俺達の真ん前に姿を現したそれは……

「か……加奈ちゃん！？」

そう、記憶を失ったとは言え、家族の名前ぐらいは知っておかなけ

ればと思い、家族写真などを目にした時に、度々俺と一緒に写っていた。俺の義妹にあたる……公栄こうえい加奈である。

しかも、へんてこなヘルメットをしているし、アレは戦隊物のマスクによく似ている。

だとすれば、俺の義妹は戦隊オタクか？

「加奈？ 誰だそれは。私は……」

一々降りなくてもいいものを。わざわざD・ホイールから飛び上がると、近くにあった電灯に飛び移り、腕を組んだ姿勢で……

「ある時はファッション雑誌のモデル。またある時は一般の中学生。そしてまたある時は、大企業のお嬢さん。だが、その正体は……」

「バツと、手を上げた。」

「弱き者を強き者から救いの手を伸ばし、正義をこよなく愛し、悪を絶対の領域まで許さない！ それがこの私、その名は……ヒ

ーロー仮面！！」

シーンと、周りが静寂に包まれる。

相手も相手で、そんな加奈の姿に唖然としたいた。

横を見ると、沙耶が呆然と半目の状態で加奈を見つめている。

……やめてくれ。俺の素質が疑われる。

そんな視線に気づいたのか、加奈は最後に

「こんな私は、光栄かな？」

と、ウインクをした。

いや、光栄かな？ と言っている時点でお前は加奈だ。

しかし、あえて口には出さない。

「……ふざけた野郎だ」

何か、イライラしているような感じが、相手から感じられた。

「何が正義だ、何が悪を許さないだ。悪こそが全て、いや、悪がこの世界の全てだ！！」

あ、相手もこの手の人間か。

「面白い！ だったら私が正義で、お前が悪だ。正義と悪、どっち

が強いのかを確かめようじゃないか！」

「フン、面白い！ だったら、デュエルだ！！」

「望むところだ！」

シュバツと再び飛び上がると、加奈は自分のD・ホイールに飛び移り、そして……。

「『フィールド魔法、スピード・ワールド2。セット、オン！』」
画面にカードが映ると、辺りが少し薄暗くなった。

そして、目の前に黒い道が天に向かって伸びていった。

「これは……ふうん、わざわざ道まで用意しているとは。気が利くね」

「戯れ言は程々にな。正義が俺は嫌いだ。だから、全力で潰させてもらおう」

「『デュエル！』」
「Kana VS Caesar LP40
00」

ギューーンと音が鳴ると、2台はすぐに走り出した。

そして、モニターには、シーザーが先行を示していた。

「俺のターン！ 俺は爆弾の総統を攻撃表示で召喚！ 〔爆弾の総統そう」

統・サイキック族・ATK1800・闇・4・効果〕そして、カードを1枚伏せてターンエンドだ」

先行は、まずは様子見って所か。

相手は、結構な腕を持っていると見る。どうなる事やら……。

「……加奈相手に、それは失敗のようね」

いつの間にか、ウインが隣で見物している。

「失敗って、どういう意味？」

「……加奈のデッキ、それはヒーローとしての素質がある者にしか扱えない究極のデッキ、と聞かされている。どんなデッキかは分からない。でも、これだけは英子から聞いている。先行1ターン目で様子を見ようなら、相手は大ダメージを喰らうと」

途轍とつもない何かを、この時感じた。

すると、それに答えるかのように加奈のターンが回ってきた。

「私のターン！」

C a e s a r ・ S p c 1 ・ L P 4 0 0 0

K a n a ・ S p c 1 ・ L P 4 0 0 0

ニツと、加奈は笑った。

「私は手札から、アドバンスド・ヒーロー　ヒーローサモンを墓地へ送り、効果を発動。手札のアドバンスド・ヒーローを特殊召喚できる。来い、アドバンスド・ヒーロー　タイガレス・シンクロンを特殊召喚！　アドバンスド・ヒーロー　A・HERO　タイガー・シンクロン・戦士族・ATK200・地・1・チューナー」

加奈のフィールドに、虎の赤ちゃんみたいな可愛らしいモンスターが姿を現した。

「そして、このモンスターをリリースし、手札からアドバンスド・ヒーロー　サンダーイエローをアドバンス召喚！　A・HERO　サンダーイエロー・戦士族・ATK1700・光・6・効果」
タイガレス・シンクロンが渦に飲まれ、その中から雷を纏い、マスクをした奴が現れた。

だが、レベル6にしては攻撃力が少なすぎる。

これは一体？

「この瞬間、タイガレス・シンクロンの効果発動！　アドバンスド・ヒーローと名の付くモンスターのアドバンス召喚に使用された時、デッキからカードを2枚ドロウする！　そして、サンダーイエローの効果により、アドバンス召喚に成功した時、墓地からアドバンスド・ヒーローを1体特殊召喚できる。蘇れ、私のヒーローとなる素質よ。タイガレス・シンクロン！」

渦が現れたかと思えば、そこから子どもの虎が「ガー」と鳴きながら姿を現した。

「見ていなさい、これが・・・私の力だ!!!」

加奈は、余裕の表情を崩さずに、相手を挑発した。

第41話「参上、その名はヒーロー仮面」(後書き)

あとがき

.....

無言で通す訳にはいかなさそうですし、どうも、やっぱりテンションが思いつ切り下がっているRagooです。

ハッキリ言います。怠いです。

でも、やらなければと思うとやります。

..... ああ、疲れた。

とまあ、最近は大体こんな感じです。ハイ。

外では蛙がゲコゲコと鳴き、雨の音がザーッと鳴っている。

..... 早く、夏休みに入らないかな？

はあ、テンション下がっているので、手早くします。

さて次回、加奈の実力をお楽しみに。

加奈のデッキは、見て分かる通り、特撮物のヒーローデッキです。

別に、僕が特撮マニアって訳ではありませんが、何となく昔憧れた、

ヒーローを思い出したら、そうになりました。

以上です。

それでは次回も、栄光のドロー！

6月19日 自宅にて

遊 戯 王 F a t e ラジオ小説その7 (前書き)

当分の間、頭が使い物にならない。そう思う今日この頃。

遊 戯 王 F a t e ラジオ小説その7

ウィン「……今回も、ここにいる理由は？」

遊画「聞くまでもないだろ！？ 連れてこられたんだよ！ 母から
エリア「それで、どんな連れてこられ方を？」

流れ……遊画「ただいま……」 目の前に、明らかに狙っ
ている工口本が置いてある 遊画「……さて、クラスのカ
共に高値で売りつけるか」 工口本を手に いきなり電流が 遊画
「ぎゃああああああ！！」 そして、いつものここへ

遊画「……つてな訳だ」

ウィン「……遊画？」

遊画「何だ！？ いきなり殺気が込められた眼差しで！」

ウィン「……その本は、遊画のお気に入りがあった？」

遊画「いや、読んでないが。何でだ？」

ウィン「……そう、健康な男の子は、そんな物が好きって聞い
たから。遊画は不健康なのかなって思っ

たから。遊画「俺は普通に不健康だ！」

エリア「それは胸を張って言える言葉じゃないと思うのですわ！？」

ウィン「……不健康なら、今からでも健康にしてあげる」

遊画「スイマセンでした！！」

エリア「それもいいかもしれませんが。どうせ遊画ですし、抵
抗とかしなくなるですわね」

遊画「エリア？ お前は一体何の話を……」

ウィン「……賛成」

遊画「だから何の話をしているんだ！」

エリア「分かっているクセに、言わせるつもりですわの？ だっ
たから教えてあげるのですわ」

遊画「別に言えって言った覚えは無いんだが……。まあ、いいや」
ウイン「……。ただ単純に、子作りするだけ」

遊画「へー、そーなんだー」

エリア「(ミシツ)殴るですわよ?」

遊画「な……。殴った後に……。言うな! しかもなにげに、腹にめり込んだぞ!」

ウイン「(ミシミシミシ)……。」

遊画「ぎゃあああああああ!」

しばらくお待ち下さい

遊画「死の淵を、見た気がする」

エリア「それはきつと気のせいですわ。だったらこの後、天国を見せて上げるですわ」

遊画「ご勘弁を!」

ウイン「……。だったら、既成事実を」

遊画「却下だ」

ウイン「……。こんなだから、少子化が止まらない」

遊画「急にリアルな話を持ちかけるな!! それと、それとこれとは全然関係ねーよ!」

エリア「だったら、将来的にはいいって話ですわね」

遊画「あ……。ああ。って、何を言わせているんだお前は!」

ウイン「……。うまく頓知を使ったね、エリア」

エリア「それ程でも」

遊画「ってか、何で始まる前からこんな恥ずかしい談話になっているんだ。始めるならさっさと始める」

ウイン「……。逃げた」

エリア「逃げたですわね」

遊画「黙れ、魔女共」

ウイン「……。本番5秒前、4、3、2……。」

エリア&ウィン「言葉使いを考える」

2人してダブルパンチ

遊画「グボア!!!」

ウィン「0」

(BGMスタート)

エリア「さて、今回も始めました。ラジオ小説」

ウィン「・・・今回も、いつものメンバー+屍でお送りします」

遊画「・・・(そーっと、そーっと)」

エリア「水霊術・固」

扉が氷漬けに

遊画「出せ、この獣の檻から出してくれ!!!」

ウィン「・・・獣とは失礼。せめて、可愛いうさちゃんの檻と言
うべき」

遊画「うさちゃんの表現が俺と全く同じだ!」

エリア「ツツコミそこですの!?!」

ウィン「・・・さて、今回の最初のコーナー」

遊画「パーソナリティが、他のパーソナリティに断りを入れずに勝
手に進めていやがる!」

エリア「シンクロ召喚台詞コーナー」

(BGM変更)

遊画「出たよ、ページ減らしのコーナー」

ウィン「・・・黙れ(ドゲシツ)」

遊画「グボア!」

エリア「このコーナーでは、シンクロ召喚に使用される台詞を紹介
するコーナーですわ」

遊画「まあ、しばらくストックがあるから大変だとは思いますが・・・

┌

ウィン「・・・それでは、一気にご覧下さい」

遊画「手抜きかよっ!!!」

「レベル2のジャスティスマジシャン・輝のリウムに、レベル4のジャスティスマジシャン・天のアリスをチューニング 2 + 4 〃 6 聖なる正義が、刹那の鼓動を貫く意思になる、導け、光を！！」

チューニングリングが、アリスの中から現れ、リウムを包み込んだ。

そして、一気に光り出した。

「シンクロ召喚！！切り裂け、ジャスティスマジシャン・乱舞のセツカ！へJM・乱舞のセツカ・魔法使い族・ATK2400・地・

6・シンクロ、効果」

「レベル2のダークマジシャン・夜行のロードに、レベル8のダークチューナー、アーク・クエイサーをダークチューニング！ 2

- 8 〃 - 6 〃

う・・・ウソだろ、冥界の力を持ったダークシンクロを・・・

「復讐の闇よ、天空を切り裂く刃となりて、魔女の十字架の罪を背負え！！！」

アーク・クエイサーの中から星が現れ、夜行のロードの中にのめり込んだ。

そして、その体の中では次々と星が対消滅していき、最終的に全ての星が消え、夜行のロードの体が砕け、そこに黒い空間が現れた。

「ダークシンクロ！！恨みを晴らせ、ダーク・マジシャンウィザード・デスサイズ！」

エリア「面倒くさいから、厳選するのですわ」

遊画「やっぱ手抜きだああ！！！」

「レベル4のリチュア・チェインにレベル2のリチュア・オターをチューニング！！ 4 + 2 〃 6 〃

リチュア・オターの口が開き、その中から2つの星が吐き出された。そして、その2つの星はチューニングリングとなって、リチュア・チェインを囲んだ。

「全てを儀式に捧げし時、儀水鏡より新たなる邪心が生まれる！全てを捧げよ！」

囲まれたリチュア・チェインが星になり、チューニングリングと共に光り出した。

「シンクロ召喚！儀水鏡の僕、イビリチュア・オターカメラ！！」

レベル2のチューナーモンスター、ダークマジシャン・呪縛のアイに、レベル6となり、チューナーとなったダークチューナー、ダーク・マジシャンをユニゾンチューニング！！
2 + 6 = 8
「ユニゾンチューニングだと！？」

聞いたことのない単語だ。

「チューナー同士をチューニングした！？」

「・・・何か、胸騒ぎがする」

2体のモンスターが透明になったかと思えばその瞬間、一気に大量の星が現れた。

そしてその星は、輪を作りだし、チューニングリングを作り出した。

8つのチューニングリングは上に向かって一列に並んだ。

すると、並んだチューニングリングは輝きだし、1本の柱を作り出した。

「な・・・まさか、あの時に起きたアレも！！」

フルが戦っていた時に起きたあの現象も、全てこれだったのか。

「死者を操りし大いなる女神よ、生者を亡き者へと変え、拒絶の光を世界に注げ！！」

輝いている柱が、徐々に光を失い、その中から・・・1体の女神がいた。

「シンパシーシンクロ！！冥界の秘密をその身に宿せ！冥界光皇へルヘイム！！」

レベル6のジャスティスマジシャン・乱舞のセツカと、レベル4のシンクロチューナー、ジャスティスマジシャン・希望のイモーシエンをチューニング！！ 6 + 4 = 10」

「バカな！シンクロモンスター同士でシンクロ召喚を行うだと！」希望のイモーシエンの中から星が飛び立ち、それが前方へと飛んでいった。

すると、ルート上に4つのチューニングリングに囲まれた道が現れ、そこに到達した。

「心が奇跡を繋ぐ時、新たな正義が生まれる！導け、光をおおおおおおお！！！」

D・ホイール前方が摩擦により衝撃波が発生していた。

それでもトトは、減速せずに、そのまま走っていた。

「アクセルシンクロオオオオオ！！！」

それは、とある男から伝えられた、至難の技。

彼は今でも覚えている。

人は……限界を超えた時に、新たな境地に辿り着く事ができると。

それが、クリアマインド！！

プオワァーン

そんな音が聞こえたかと思えば、そこにトトの姿は無かった。

「き……消えた？」

すると後ろから、謎の衝撃波がヘルを襲った。

「クッ」

そこには、消えたハズのトトの姿と、ついさっきまではいなかったモンスターの姿が、あった。

「限界を突破せよ！レジェンド・ジャスティス・ウィザード！！！」

「レベル3のデプレシー・スター・マジシャンにレベル3のエーヌ・トークンと、レベル3となったエーヌ・スター・マジシャンをチュ

「ニンゲ！！ 3 + 3 + 3 = 9」
デプレシーと、エーヌ・トークンの体が透明となり、中から6つの星が姿を現した。

そして、エーヌの体からも星が3つ出現し、チューニングリングと
なつて現れた6つの星を覆った。

「戦火の轟音が響く、殺戮と破壊の連鎖に授かれし大いなる災いよ、
今こそ姿を見せる！！」

指をパツチンとさせると、それと同時に輝きだした。

「シンクロ召喚！！さあ、パーティの幕開けだ！スター・マジシャ
ン・相殺のクラッシュャー！！」

「レベル6のアドバンスド・ヒーロー サンダーイエローにレベル
1のタイガー・シンクロンをチューニング 6 + 1 = 7 強
きヒーローよ、悪を噛み砕く、力となれ！！ シンクロ召喚！ 叫
べ、アドバンスド・ヒーロー タイガレス・レンジャー！」

エリア「こんな感じですか」

遊画「待て！」

ウイン「・・・なに？」

遊画「なに？ じゃねーだろ！ 何でまだ出ていない加奈の台詞ま
で出てんだよ！ これじゃ、ただのネタバレじゃねーか！」

エリア「遊画。細かい男は嫌われるですわ」

ウイン「・・・こんな私は、光荣かな？」

遊画「細かくないうえにウイン、加奈のマネをするな！ アレは加
奈だからこそ許される口癖だ！」

エリア「へえ、光荣たる我が遊画の為に口癖にしているからです
の？」

遊画「エリア、お前は何を言いたいのかを一字一句違える事無くキ
ツチリと説明してもらおうか？」

エリア「一々面倒くさい事を言うなですわあ！」

遊画「逆ギレするな・・・グガッ!!」

ウィン「・・・また、気絶した」

エリア「フン、自業自得ですわ」

遊画「・・・それを自業自得と言うのがおかしいと自分で思う気は？」

ウィン&エリア「ない」

遊画「だろっな!」

ウィン「・・・次のコーナー」

遊画「俺の意見まるで無し!?!」

エリア「ゲストコーナー。Fate から、私たち以外のキャラを出そうというコーナーですわ」

(BGM変更)

遊画「となると、やっぱりゲストは・・・」

ウィン「・・・ヒータと、アウス」

遊画「ダルクうううううううう!! お前ら、絶対に男性の扱い下に思っているだろ!」

ヒータ「うっさいな。そんな言うなら、自分が下に思わせなきゃいいだけの話しやるうが」

アウス「コラコラヒータさん。言葉が悪いですよ」

遊画「ううっ、もはやあのメンバーの中で優しく接してくれるのがアウスだけになっていくという現実に、俺はどうすればいい?」

ヒータ「知るかボケ」

ウィン「・・・自分で考える」

エリア「貴方に優しくしてくれると思うこと自体が間違いですわ」

遊画「バウンドダメージ連発かよ! 戦闘ダメージよりも質悪いわ!」

アウス「それで、どんな事をやればいいの?」

遊画「アウス、そこはツツコミを入れるよ!」

エリア「普通に質問とかやればいいと思うのですわ」

(BGM変更)

ウィン「・・・それじゃ、最初の質問」

使い魔は出てこないのですか？

エリア「たまには、ギゴバイトちゃんやウインのプチリュウちゃんにも出てもらうのも良いかもしれないですね」

遊画の使う霊使いシリーズは、普通の霊使いと一緒になのですか？

ヒータ「普通の霊使いとはちゃうからな。オリジナルの霊使いには、追加で、また、このカードは（地、炎、水、風、闇、光）属性モンスターとの戦闘では破壊されないって効果も備わっているんや」

遊画は受けですか？ 攻めですか？

遊画「誰だ！ こんな質問した奴は！」

ウイン「・・・受け」

遊画「いや、男性相手では攻めにな・・・」

ウイン「・・・受け（ズドッ）」

遊画「いや、話を・・・（バタリ）」

あんな美少女達に囲まれて、嬉しくないのですか？

遊画「あのな・・・見た目は美少女かもしれないが、襲いかかった瞬間あつという間に殺されるぞ。しかも俺自身、あまり女性に興味ないし」

エリア「最後の言葉の撤回を！」

遊画「な・・・いきなり何を言い出す！」

R - 18 タグの小説を

遊画「作者が「R-18G」で良いならと言っているぞ」
ウイン「・・・グロ系なら、いつもやっている」
アウス「それに、まだ作者は17歳ですよ。あと半年早いです」
遊画「過ぎたら良いのかよ！」

リア充爆発しろ！

遊画「俺はリア充じゃねえよ！」

ウイン「・・・十分にリア充だと思う」

ヒータ&エリア「「同感」」

アウス「それは、私も否定できません」

エリア「・・・とまあ、こんな感じですよ」

遊画「全然関係ない質問ばかりだったかな」

ウイン「・・・まだまだ、たくさんあるけど」

ヒータ「それは次回に回そうや。もう時間ないし」

遊画「ぶつちやけるのが普通になってきたな、ヒータ」

ヒータ「ああ？ それはどういう意味で言ってるんや？」

遊画「スイマセンでした!!」

エリア「貴方には、プライドって物が無いのですわ？」

遊画「プライドなど、とうの昔に消え失せた」

ウイン「・・・それは、胸を張って言える事じゃない」

遊画「正論だが、コイツにツッコまれるのが無償に腹立たしいのは何故だ！」

ウイン「・・・イラストとくるぜ」(バキッ)

遊画「グボア！」

エリア「それでは、そろそろお時間になって来ました事ですし。この辺で終わりにさせてもらおうのですわ」

(BGM変更)

遊画「ふう、今回も酷い内容だったな」

ヒータ「ホンマ、毎回毎回こんな扱いやったら自分、いつか死ぬの
ちゃうか？」

遊画「否めないな」

エリア「・・・ちなみに遊画。この間の約束、覚えていますわ
よね？」

遊画「約束？ ああ、あの買い物に行くって約束・・・」
ゾクツ

遊画「・・・ア、アレ？ 何か後ろから冷たく恐ろしい視線が・・・」

ウィン「・・・それって、デート？」

ヒータ「ええ度胸やな。まさかウチらを置いてエリアと2人でデー
トしようとするとは・・・。油断も隙もあらへんなあ？」

アウス「良い買い物になればいいですね。この場から生きて帰られ
れば」

遊画「怖え！ まるで幼なじみといい雰囲気になっているところに
突然ビットが飛んでくる感じだ！ って、待て。本当に待って」

ウィン「・・・一度も、買い物に行こうと言っても行かなかった
のに・・・よりによってエリアとならば行くなんて。覚悟はでき
ている？」

遊画「い・・・いーやあああああああああ」

しばらくお待ち下さい(二回目)

エリア「さて、そんな訳で最後のお馴染み。必ず女性組に殴られる
遊画を終えたところで、今回はこれで終了」

遊画「お馴染みって、マンネリの間違いじゃねーのか!？」

アウス「次回も」

ヒータ「お楽しみにやで」

遊画「やっぱ俺は、はぶられっぱなじだあああああああ!!!」

(ED曲)

収録終了

エリア「さてと、行くのですわ」

遊画「着替えるのは早いな。まあ、女性の買い物って、そんな物なのか？」

ウィン「……おまたせ」

遊画「ウィン、お前まで来るのか」

エリア「……ちよつと、残念な気はするのですわ」

ウィン「……エリア、抜け駆けはダメ」

エリア「うっ、わ……分かっているのですわ」

遊画「……ってアレ？ ヒータとアウスは来ないのか？」

ウィン「……あの2人は、片方が面倒だから来ないって。そして片方が、おじやま虫は来ない方がいいでしょ……だって」

エリア「……ま、まあそこは感謝ですわね」

遊画「何の話を？」

ウィン&エリア「さて、行こう」「」

遊画「話を切り替えやがって……ま、早く行って楽しんだ方がいいからな。行こうぜ……買い物に」

ウィン&エリア「……(ピクッ)」「」

遊画「……あ、あの？ お二人さん？」

エリア「遊画？ 今日と言う今日は許さないですわよ？ こんな、

恋する乙女の心を最後の最後でぶち壊すなんて」

遊画「え……エリアさん？」

ウィン「……今は特別に何かをする訳じゃないけど、後で覚えておきなさい」

遊画「ハ……ハイ」

何やら、とんでもない地雷を踏んだような気がする。

全く、コイツ等の何が地雷なのかがよく分からなくなってきた。

「……これも、天罰と言つべきなのか？」

それとも……。

「……どうしたの？ そんな暗い顔をして」

「い……いや、何でもない」

「……まあ、いいか。」

今は今、未来は未来。

未来に何が起ころうが、今を楽しめばそれでいい。

例え未来に起きる事が、絶望だったとしても、人には、知った未来を変える力がある。それは、どんな生き物だってそうだ。

これが天罰の、まだほんの一部だったとしても。

俺は、耐えてみせるさ。

コイツ等の為に。

終わり

遊 戯 王 F a t e ラジオ小説その7（後書き）

あとがき

どうにか、日曜日中に終わらせる事ができた。

あっはははははははははは。どうしてこんなに笑っているかって？
決まっているじゃないか。

明日から書き直し地獄に突入するからに決まってるんだろ！！

あーも、ちゃーがつか。どうせ、途轍もない書き直し要求して、提出期限は明日になんだろ？

がっばい恐ろしかぁ。勘弁してさ。

俺は天才じゃねーんだよ。だけんがな、膨大すぎる量を請求されても困んだよ！

そいにさ……って、気が付けば素に戻っている。

いや、取り乱してスイマセン。

……さて、次回は3週間以内に仕上げられれば仕上げます。

まあ、もう少しかかる可能性はあるし、何より小説の内容が頭から消えている状態なので。

これはマジでヤバイ。数ヶ月に一度の、頭が回らない日だ。

そんな訳で、今日はここまでとします。

次回も、宜しく〜。

7月3日 自宅にて

第42話「ヒーローVSシヨッカー」(前書き)

いやー、久々ですよ。ここまで脳裏に疲れが生じたのは！ ああ、
疲れた。

第42話「ヒーローVSショッカー」

前回までのあらすじを説明する。

仲間との絆を取り戻し、無事に精霊界から現実世界へと戻る事ができた。だが、ゆっくりしているヒマは残されていない。目の前に、新たな資格が現れやがった！ 俺も、まだ回復していない状態にある。そんな中、突如として現れた謎の少女、ヒーロー仮面！ 彼女の正体は？ そして、どうなる、このデュエル！

・・・まあ、俺の義妹である加奈であるのは間違いなさそうだがな。

「こんな私は、光栄かな？」

今現在、加奈のターン。フィールド上にはアドバンスド・ヒーロー・サンダー・イエローとチューナー・モンスターであるアドバンスド・ヒーロー・タイガレス・シンクロンが存在する。対して相手の場には、爆弾の総統が1体と、伏せカードが1枚。

どう見ても、加奈がこのターンシンクロを行う。と、そう思った瞬間に加奈が動く。

「レベル6のアドバンスド・ヒーロー・サンダー・イエローにレベル1のタイガレス・シンクロンをチューニング 6 + 1 = 7

強きヒーローよ、悪を噛み砕く、力となれ！！」

2体のモンスターが飛び上がった。そして、タイガレス・シンクロンは途中で透明となり、中から輪が形成される。その輪の中に、サンダー・イエローが入り込む。

「シンクロ召喚！ 叫べ、アドバンスド・ヒーロー・タイガレス・レンジャー！」

と、そこには元のモンスターの姿はなかった。

代わりに、虎の被り物をした、気高い男の姿がそこにはある。

「フオオオオツ、トウリヤア！　　A・HERO　タイガレス・レンジャー・戦士族・ATK2600・地・7・シンクロ/効果」
その虎男は、相手に向かって爪を突き立てている。

「タイガレス・レンジャーの効果発動！　このモンスターがシンクロ召喚に成功した時、相手フィールド上に存在する魔法、罠カード1枚とモンスター1体を破壊する！」

「なにっ！　両方を1枚ずつ破壊する効果だど！？」

そして、突き立てた爪を振り下ろし、相手モンスター、爆弾の総統の目の前まで走り出し、ズバツと切り上げた。真つ二つに切られ、爆弾の総統は消滅する。

続いて、相手の伏せカード1枚を、跳び蹴りで粉碎する。

「チツ！」

破壊されたカード、爆弾の総統の効果は戦闘で破壊された時、相手モンスターに装備され、次の自分のターンで破壊する。その後、デッキから総統と名の付くモンスターを手札に加える効果だった。だが、効果による破壊じゃどうする事もできない。おまけに……。シーザーは破壊されたカードを見送る。

折角の総統の指令が。このカードは、総統と名の付くカード効果によりカードが破壊された時に発動するカード。手札から総統と名の付くモンスター1体を特殊召喚できる。だが、その戦術は失われた。何者なんだ、あの小娘は！

「バトル！　アドバンスド・ヒーロー　タイガレス・レンジャーでプレイヤーにダイレクトアタック！　正義の一撃、ジャスティス・フィスト！」

巨大な爪を突き立て、シーザーに向かって突撃した。そのまま、突き立てられた爪に体を貫かれる。

「がはっ！！」　HP4000　1400

少しバランスを崩すも、すぐに体制を整える。そして、加奈を睨む。

「この……小娘の分際で！」

「私はカードを2枚伏せてターンエンド！」

ウインのあどけない表情に、俺は信じてもいいのかと不安を募らせるも、とりあえずは勝負が見えない今なので黙って見る事にした。

第42話「ヒーローVSシヨツカー」

「さて、俺のターン！」

Caesar・Spcc2・LP1400

Kana・Spcc2・LP4000

引いたカードを見た瞬間、シーザーは不気味な笑みを浮かべる。

「くははっ。小娘、お前に死の恐怖を味合わせてやる。俺は手札のレベル10のモンスター1体を墓地に送り、シヨツカー・レベル1を召喚！　　ハシヨツカー・レベル1・サイキツク族・ATK0・闇・1・効果」

加奈は疑問を抱く。なぜ、レベル1のモンスターを、わざわざ高レベルモンスターを墓地に送り召喚したのだ？アドバンス召喚でも狙っているのか？

だが、それで終わりではなかった。

「シヨツカー・レベル1が特殊召喚に成功した時、自分の墓地に存在する攻撃力0のモンスター1体を、特殊召喚する事ができる！」
「なにっ！」

「墓地より現れよ、ダークチューナー　悪夢のガーゴイル！　　ハ悪夢のガーゴイル・悪魔族・ATK0・闇・10・ダークチューナー」

何もない、ただの悪魔の形をした石像が現れる。だが、目が赤く光った。

「レベル1のシヨツカー・レベル1に、レベル10のダークチューナー　悪夢のガーゴイルをダークチューニング！　　1 - 10

「 - 9」

石像から、10個もの星が出てきた。出てきた星が、シヨツカーを囲み、中へと無理矢理入り込む。シヨツカーは頭を抱え藻掻き苦しんでいる。

可哀想。加奈は不意にそう思った。モンスターの苦しみにより現れるモンスター。そんなの、力じゃない！

「悪の悲鳴により開けられし門よ、苦痛の雄叫びによりその力を示せ！」

瞬間、シヨツカーの体が砕け、中からどす黒い星が現れ、円状になった。そして、そこから黒いエネルギーが発せられる。

「ダークシンクロ！ 正義を殺せ、ダーク・ガイル・シヨツカー！

！ ムダーク・ガイル・シヨツカー・サイキック族・ATK3200・闇・ -9・ダークシンクロ/効果」

するとそこに、それは現れた。

巨大な爪に、まるで血の涙を流しているかのような顔の仮面。そして、背中からは大きな翼が生えている。

「又オオオオオオオオ！！」

加奈はその姿に、恐怖を抱く。憎しみ、嫌悪、どこか自分が恐れている恐怖が込み上げる。

「っ……っ……っ……」

「言葉を失っているか。だったら二度としゃべれなくするぜ。ダーク・ガイル・シヨツカーで、アドバンスド・ヒーロー タイガレス・レンジャーを攻撃！ ダーク・ネイル！」

ベキボキベキ！ 指を鳴らしたダーク・ガイル・シヨツカーが、タイガレス・レンジャーに向かって飛翔する。タイガレス・レンジャーも、それに応戦しようと爪を突き立てるもすでに時遅し。

爪が、タイガレス・レンジャーに食い込み、それを引き裂く。タイガレス・レンジャーは、光となって消え失せた。

「クッ！ でもその瞬間、畏カード、ヒーロー・リナーシアを発動！ 戦闘によって自分フィールド上に存在するヒーローと名の付くモンスターが破壊された場合、そのモンスターを墓地から特殊召喚

し、その後攻撃を行ったモンスターの攻撃力を、次の自分のターンの終了時まで、特殊召喚したモンスターの攻撃力分ダウンさせる！

「ヒーロー・リナーシア・畏・効果、自分フィールド上に存在する「HERO」と名の付くモンスターが戦闘によって破壊された場合に発動する事ができる。破壊されたモンスターを墓地から特殊召喚し、戦闘を行った相手モンスターの攻撃力を、特殊召喚したモンスターの攻撃力分ダウンさせる。また、この効果で特殊召喚したモンスターはこのターン戦闘では破壊されない」墓地より蘇れ！ タイガレス・レンジャー！ 「ATK2600」そして、その攻撃力分ダウンさせる！」

加奈は、やったかと言うような顔をした。

だが、相手はクツフと笑っていた。

「残念だったな、お前は貫通ダメージを受けて貰うのを忘れていないか？」

ダーク・ガイル・ショッカーから超音波が発生した。加奈は耳がツんざく感触に陥る。

「ぐあああああ！！」 「LP4000 3400」

少し体制を崩したが、すぐに立て直す。

「だ・・・だが、これでお前のモンスターは、次のターン破壊される。ヒーローの一撃で！」

「あつはははは、戯言を。残念ながらこのモンスターがフィールド上に存在する限り、ダウンする攻撃力はアップする効果となる」

「な・・・何だつて！」

加奈の表情に驚愕が見えた。ここまで自分を追い詰める戦術がこれまでにあったか。そりゃ、たまには負ける寸前まで追い詰められた事はたまにはあった。でも、ここまで恐怖に陥れられたのは初めてかもしれない。何故なら・・・。

加奈はシーザーを見る。

彼が、本当に正義が嫌いだからだ。彼の表情に、憎しみの心が感じ取れるからだ。

だが……。

「っふ。面白い！」

シーザーの眉がピクリと動く。

「何が面白いだ！ この状況で楽しむバカがどこにいる！」

「ここにいる！」

加奈の表情が、いつの間にか笑みに変わっていた。

「闇のデュエルと聞いた時には、怖い物を思い浮かべたが、そうじゃない！ モンスターの痛みが自分にも伝わる。これは、モンスタ―との絆を深めるチャンスだ！」

高笑いする加奈。それをただ啞然と、傍観者は見つめていた。

「バカか、アイツは」

俺は額に手を当て呆れていた。

まさか、そんな形で闇を克服するバカがいたとはな……。義兄としてだが呆れてくる。それは、周りも同じだろ。沙耶なんか目をパチクリ開いたまま固まっているぞ。

「まさか……。加奈ちゃんがマゾヒストだったなんて……」

端から見れば、そう見えるだろうな。

言葉を考える、我が義妹よ。

しかしだ、加奈は決してふざけて言っている訳ではないのは俺がよく知っている。加奈は、常に絆を求めているのだ。それが何のためかは分からない。だが、アイツは本物の正義を目指している。モデルでありながらも、どこか昔の夢を追い続けている。それは、加奈が俺にはない何かを持っているからだ。

夢を諦めない精神。その原理は、どこから来ているのか？ 顰めっ面をしながら、俺は悩み続けていた。

バカかと思っただのは、相手もだった。

「バカが！ モンスターと同じ痛みを味わえるだと？ 笑わせる」
シーザーの言葉に、加奈が反発する。

「バカじゃない！ 私は・・・いや、私たちヒーローはいつも繋がっているんだ！ 例えどんな困難にぶつかっても、その繋がりは決して途切れる事はない！ だから、モンスターの痛みを分かち合える事を、光栄に思うんだ！」

「ほざけ！ だったらモンスター共々消してやる！ ダーク・ガイル・シヨツカーの効果により、攻撃力を2600ポイントアップさせる！ へ ATK3200 5800へ更に、このモンスターはこのターンの終了時まで、攻撃力を1000ポイントダウンさせる事により、もう1度だけ攻撃ができる。まあ、下げたとしても攻撃力は4800。一気に勝負を付けたい所だが、焦る心配もない。くたばれ、小娘！ 攻撃力を1000ポイントダウンさせ、再び攻撃だ！ ダーク・ネイル！！」

再びダーク・ガイル・シヨツカーの爪が、タイガレス・レンジャーへと突き立てられる。振り上げられ、狙いを定めた瞬間に、振り下るされた。

だが、間一髪でタイガレス・レンジャーの爪にさえぎられる。

「なに！？」

「ヒーロー・リナーシアの効果により、このターン特殊召喚されたモンスターはこのターン戦闘では破壊されない」

「クツ・・・だが、戦闘ダメージを食らえ！」

もう片方の爪を、加奈に振り下ろした。ギリギリの所でよけはしたが、衝撃が加奈を襲った。

「きやああああああ！！」へ LP3400 1200へ

ギリギリのバランスを保つものの、闇の道の上の為か、道から外れかけ落ちかける。

それに気づいたのか、加奈は慌てて中央に車体を傾けた。もう少し反応が遅かったら、今頃地面へ向けて真っ逆様だっただろう。

「けっはははは！ そのまま落ちていりゃ、苦しまずに済んだものを」

シーザーは嘲笑う。加奈は齒軋りて悔しがった。

「クツ……確かに負けるかもしれない。この人は、今まで戦った相手の誰よりも強い」

しかし！ と加奈はスピードを上げる。

「だけど、負けられない！ 例えこの身が減びようと、ヒーローは必ず勝つ！ それを証明させる為、そして、大切な物を、者を守る為に、私は……戦う！」

決意に満ちた加奈の表情に、シーザーは気分を悪くした。

「……気に入らねえ、その目。諦める気が真つさら無いその決意も、お前の全てが気に入らねえんだよ！ 俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ！ そして、攻撃力を元に戻すへ ATK4800 5800」

加奈の表情に、再び笑みが戻る。

「気に入らないのなら、それを光栄に思うよ。悪に気に入られるよりはまだマシなのだからな！ 私ターン！！」

C a e s a r ・ S p c 3 ・ L P 1 4 0 0

K a n a ・ S p c 3 ・ L P 1 2 0 0

引いたカードを確認し、口元を緩める。

「正義はまだ健在だ！ まだ諦める心を見せない限り、私は戦える！ 手札からスピードスペル・エンジェル・バトンを発動！ 自分のスピードカウンターが2つ以上ある場合に発動する事ができる！ デッキからカードを2枚ドローし、手札1枚を墓地に送る！ へ S p ・ エンジェル・バトン・魔法・効果、自分のスピードカウンターが2つ以上存在する場合に発動する事ができる。デッキからカードを2枚ドローする。その後、自分の手札からカードを1枚選択して、墓地に送る」私は2枚ドロー。そして1枚を墓地に送る！」

「ただの断末魔の足掻きが！ そんな事をしてどうなる。どうせこのターンは終了するしかないだろ！ 俺のフィールド上には、攻撃力5800のダーク・ガイル・シヨツカーがいるんだぞ！ コイツを戦闘で破壊する事など……」

「確かに、戦闘では破壊する事はできない」
ゆつくりと、加奈は呟く。

「……何が言いたい？」

「だったら、効果で破壊するのも手だよな？」

その言葉に、シーザーは固まる。

「……まさか、コイツを破壊するんじゃないだろうな？ 言っておくが、コイツを効果で破壊した瞬間、お前は更なる悪夢を見るハメとなる」

「脅しか？ もっと脅しは脅迫じみた言葉の方がいいと思うよ。今のお前からは、何も感じ取れない。所謂お前ははったりが出来ていないからな。行くよ！ 手札からスピードスペル・ドライブ・インパクトを発動！ 自分のスピードカウンターが2つ以上ある場合、相手フィールド上に攻撃力3000以上のモンスターが存在する場合に発動する事ができる。そのモンスターを破壊する！ ｵｳｳｵｳｵｳ - ドライブ・インパクト・魔法・効果、自分のスピードカウンターが2つ以上あり、相手フィールド上に攻撃力3000以上のモンスターが存在する場合に発動する事ができる。そのモンスターを破壊する」

「バ……バカな……！」

突然、加奈のD・ホイール側から閃光が放たれた。そして気づいた時にはすでにダーク・ガイル・シヨツカーは体の中心に穴を開けていた。

『グ……グガガガガガガ！』

その直後、爆発が起こる。巻き込まれまいとシーザーは速度を落とすも直撃は免れたが、爆発には巻き込まれる。

「チッ……！」

「見たか、これがヒーローの力だ！ バトル、タイガレス・レンジャーでプレイヤーへダイレクトアタック！ 正義の一撃、ジャステイス・フィスト！！」

高々と舞い上がった後、その爪を振り下ろした。

「クツ、やらせはせん！ 手札から使い捨てシヨツカー・ストツプマンの効果発動！ 相手の直接攻撃宣言時、このカードを手札から特殊召喚する事によりそのバトルを終了させる！ 現れよ、ストツプマン！ へ使い捨てシヨツカー・ストツプマン・サイキツク族・ATKO・闇・1・チューナー」

高々に「STOP」と書かれた看板を持ち上げて、攻撃を止めているシヨツカーが突然現れた。タイガレス・レンジャーは悩みはしたが、結局攻撃を止めた。

「フン、まだ本物のボスが現れていないからね。ここで終わる訳にはいかないって訳か」

「その通りだ。まあ、本物のボスが現れた瞬間、お前は消えるがな」鼻を鳴らす加奈と、誇らしげに言うシーザー。どっちも弱気などを見せていない。

加奈の場合は、やせ我慢なのかもしれないのだが、それでも今は恐怖を見せなかった。いや、見せていないと言った方が正しいのかもしれない。

よく見れば、加奈の体が微かに震えている。しかも、それは加奈自身は気づいていない。カードを伏せようとカードを取った瞬間に、やっと気が付いたぐらいだ。

（な・・・震えている。この私が・・・）

その思考を振り払う仕草をし、加奈はカードをデュエルディスクに差し込んだ。

「わ・・・私はカードを1枚伏せてターンエンド！」

「・・・つく」

瞬間、シーザーの顔に歪んだ笑みが浮かんだ。

「終わったな。キサマはすでにクモの巣にはまった蝶になった！」

いきなり何を言い出すのかと一同は思った。だが、その狂った表情を見る成り、遊画は顔をしかめる。

「この状況で、何でアイツはあんなにも余裕扱っている。それに、アイツのフィールド上にはチューナーモンスターが1体だけ……。チューナーモンスター！」

ここですよやく、何故あんなに余裕なのかが分かった。

そう、シンパシーシンクロだ。チューナー同士をシンクロさせる特殊なシンクロである。

自分を操っていたヤツが使ったシンクロでもあり、同時にいずれ剣を交える相手を使うとも思われるモンスターである。

相手が使うモンスターは不明だ。だからこそ、不安要素しかないこの状況は正に最悪と言っても過言ではない。

「……遊画。やっぱりアイツは、シンパシーシンクロを使うつもりね」

「それしか考えられないですわ！ よりによって、あんな危険なモンスターを召喚しようだなんて、加奈ちゃんは大丈夫なのがちょっと不安になったのですわ」

遊画は、しんみりとその様子を窺うしかなかった。無事でいてくれ。そう願うばかりである。

「……ちよつと！？ 何か私だけハブられているんだけど！？
ねえ、シンパシーシンクロって何！？」

背後から沙耶が絶叫していたが、遊画はあえて聞かなかった事にした。

「俺は、このターンのエンドフェイズ時にダーク・ガイル・シヨツカーの効果を発動！ このモンスターがカード効果により破壊されたターンの終了時、自分フィールド上にチューナーであるダーク・シヨツカー・トークン1体を特殊召喚する！ ただし、このモンスターはチューナー以外のモンスターとのシンクロには使用できない

！　「ダーク・シヨツカー・トークン・サイキック族・DEF0・闇・7・チューナー」

（チューナーモンスターを、それもチューナー同士しかシンクロ出来ないようなモンスターを！　何を企んでいる、アイツは）
加奈は心底、そう思うしかなかった。

しかし、その思いは呆気なく破壊される。

「けっははははははは！！　これで全ての舞台が整った！　見せてやる。同調をな！　俺のターン！！」

Caesar・Sp4・LP1400

Kana・Sp4・LP1200

「俺は、レベル1の使い捨てシヨツカー・ストップマンと、レベル7のダーク・シヨツカー・トークンをユニゾン！　チューニング！！」

バツと、シーザーが手を挙げた。瞬間、2体のモンスターが透明化し、中から輪が出てきた。その輪は、まるで塔のように空に向かって並んだ。そして、並んだチューニングリングから光が発生し、空に伸びる塔がそこに映し出された。

それはまるで、幻想であり、美しくもあれば、禍々しくもある。見とれる人もいれば、災いが起こったと般若心経を唱える人もいた。

そんな中、シーザーは台詞を発する。

「炎海の狭間、燃える魂を喰らい神をも燃やす。抗う正義を炭と化せ！！」

そして、光の塔の中から、それは現れる。

「シンパシーシンクロ！！　地獄の業火、冥界炎皇スルト！！」
塔の間から手が現れた。炎に包まれたそれは、片手に剣を持っている。

徐々に姿が見えるにつれ、皆は息を呑む。そして、加奈は分かった。アレは、巨人だと。巨大な体格に、周りには炎を纏っている。目が

光り、持っていた剣を振りかざす。

『フオオオオオオツ！ ソルアアアア！ 冥界炎皇
スルト・炎族・ATK2000・炎・8・シンパシーシンクロノ
効果』

誰もが見入った。あんな神秘で、だけどどこか恐ろしさを放つモン
スターを。

「けはははははは！ 真の悪を見るがいい。スルトの効果発動
！ 1ターンに1度、手札1枚を墓地に捨てる事により、相手ファイ
ールド上に存在するモンスターを破壊し、その攻撃力の半分をこの
モンスターに加える事ができる！」

「なにっ！！」

加奈は愕然とする。そんなあまりにも酷い効果など聞いた事がない
のだから。

「手札のサイコ・シヨツカーを捨てて効果発動！ 喰らえ！ ヘル・
アブソード！！」

持っていた剣を、タイガレス・レンジャーに突き刺す。苦しみ、悶
え、ついには溶けだした。

「タイガレス・レンジャー！！」

その様子を見るにも耐えない状況だった為か、加奈が叫ぶ。

「脆い物だな。ヒーローってのはよ！」

「クツ……」

シーザーの瞳は、もはや通常目ではなかった。瞳孔が開き、
口も歯をむき出して決してアレを見て正常とは思えない。

「いつの時代も、悪だけが負けて、悪だけが滅ぼされ、悪だけが消
滅する。だが、俺はそんな気が入らねえんだよ！ ヒーローが
現れ、悪を倒す？ ほざけ！ 悪とは常に、進化する物。そして正
義は、悪に負ける運命にあるんだよ！ 綺麗事だけで全て済ませ
た時があつたかあ？ 人の心に悪が無かつた時などあつたかあ？

正義など、綺麗事をほざくヤツが言うような生ぬるい台詞なんだよ
！ 正義も、捉え方を変えれば結局は悪と同じだ！ 正義を唱え、

戦争を起こし、正義を唱え、弱者を踏みにじる！ 正義を唱え、金をせびれば、正義を唱え、人を殺す。そのどこが正義だ！ 全て悪と同じだ！ だから俺は正義が嫌いなんだ！ 正義こそが悪、悪こそが全てなんだよ！ それを、キサマは望むのか！」

「っ……私は、私は……」

言葉を失う。そこまで言われて、言い返す人はいないであろう。全てが、正論なのだから。

「ホラ見ろ！ キサマは結局、正義に縋り、悪から逃げてきたんだ！ キサマが思い浮かべる正義など、雑魚の分際にしかならねえんだよ！ だから俺は決めたんだ。正義を捨て、悪の道に進むことを！ さあ、これで示してやる！ 悪が正義に勝つ瞬間をなあ！！」

効果により、破壊したモンスターの攻撃力の半分、吸収する！」

剣の刃が光り出した。そして、まわりついていた炎が威力を増す。

「グオオオオオオオオ！！」
「ATK2000 3300」

構えを見せると、シーザーは嘲笑う。

「けっはははははははは！！ 終わりだ！ キサマは冥界の王の贄となる！ さっさとくたヴァれえ！ ヴォルケイノ・ソード！！」

構えたスルトは、加奈に向かって、一撃を放つ。それで加奈はハッと目を覚ます。

「と……畏発動！ 攻撃の無力化！ その攻撃を無効にする！

「攻撃の無力化・カウンター畏・効果、相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。相手モンスター1体の攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了させる」

これで次のターンは……と考えた。だが、それを相手は許さなかった。

「バレバレなんだよ！ カウンター畏発動！ 魔宮の賄賂！ 相手の魔法、畏カードの効果が無効にし破壊する！ 魔宮の賄賂・カウンター畏・効果、相手の魔法、畏カードの効果が無効にし破壊する。相手はデッキからカードを1枚ドローする」

「っ！！！」

終わった……。加奈は心からそう思った。目の前からは、炎を纏った剣士が自分を刺そうと突進し、自分は自分で、さっきの言葉に戸惑っていた。

考えてみれば、今まで戦ってきた相手が知りすぎた人だったのかもいけない。いつも自分が勝って、でもたまには相手が勝って。その連鎖で加奈は、負ける事への悔しさ、負ける事への抵抗、負ける事への、否定感を失っていた。

加奈は、今まで戦ったデュエリストの顔を思い浮かべる。いつも笑顔で接してくれて、負けを認め、勝ちを喜んでいたあの面子を、脳裏に過ぎらせた。

「あーちゃん、レン、静子、とおる。私、勝てなかった。相手があるにも、強すぎた」

悔やみに悔やむ加奈。ふとその中で、ある人物が脳裏に過ぎる。

それは、絶対に無理だと思っていたデュエルに、勝利した人であった。その人と一緒にデュエルを行った時、やっぱり無理だと思われるデュエルだ。絶体絶命のピンチに陥ってしまう。

それでもなお、彼は諦めなかった。例えライフが1になろうとも、戦い続ける意思を見せた彼に、加奈は激しく見入った。

彼は完全に諦めていた加奈に対して、こんな言葉を残した。

『ヒーローは無敵ではない。でも、それを操る意思こそが、大切なんだ。例えばどんな巨大な壁があろうとも、それを乗り切る意思と精神、そして……。仲間との絆が必要になる。目の前にいるあの連中を倒したい。それなら、正義としてではなく、自分自身の意思として奴らをぶっ倒す。つまりは……。そうだな。自分の信じる正義を貫け。うーん、これとも違うかな。まあ、細かい事はいいや。まずは、目の前にいるアイツ等を倒してから、語るとするか』
正義を愛し、悪を絶つ。その言葉通りに、敵をなぎ倒すその姿に、加奈は見とれてしまった。カッコイイ、こんなヒーローがいるのだと。

そして最後に、彼は言った。

「諦める？ それは自分に対して言っているのか？ 俺ははなつから諦める気はねーぜ。最後の瞬間まで、負けるか勝つかの狭間にいるんだ。こんなワクワクする事に、諦めてられるかっつーの。カードがドロローさえできれば、必ず勝機はある。だから、諦めるな」
ハツと、加奈は思い出す。

（そうだ。私は・・・私は、諦める精神を捨てたのだった。平凡な時のせいで忘れていたけど、でも、あの人のおかげで、私は諦める事を忘れ、逆転の一手を掴んできたんだ！ 私は、あんな悪を愛する人に負けていいのか！ そうじゃないだろ！ 正義は、悪を絶つだけじゃない。悪から、救う事だつて出来るんだ！ だからこそ私は、勝つ！）

加奈は、静かに目を閉じる。

「・・・魔宮の賄賂の効果により、私はデッキからカードを1枚、ドロローする」

迫り来る刃。それに太刀打ちできるカードがあるか。分からない。いや、1枚だけある。このデッキに眠る、ピンチをチャンスに変えるカードが。

「私は絶対に諦めない！ カードがドロローできる限り、ライフが残っている限り、私は・・・自分の信じた正義を貫き通す！！」

「最後まで戯れ言を！ 良いだろ。そんなに死にたけりゃ死ね！！」
加奈はデッキに指を置く。まるで神秘で、かつ優雅なその仕草に、見ていた遊画達も見入る。

そして、加奈の目が開くと同時に、カードを引く。

「デッキからカードを1枚、ドロロー！！」

そして次の瞬間には、その空間に剣が振りかざされた。
轟音が響き、辺りに砂埃が舞う。

「「加奈ちゃん！！」」

「・・・加奈！！」

「負けるな、加奈あああああ！！」

仲間の叫びが、辺りに木霊する。と、徐々に砂埃が上がってきた。

最初に光景を見たシーザーは、愕然と目を開く。

「なに！？ バカな……」

そこには、若干マスクにヒビが割れ、それでもなお、D・ホイールで爽快に走っている加奈の姿が、眼中に入る。

「どういう事だ！？ 例え攻撃力を半分にする効果を発動したにしても負けるハズだが……」

加奈は、それを聞いてニヤリと笑みを浮かべる。

「手札からアドバンスド・ヒーロー ボンドガードナーの効果を発動したのだ。このモンスターは手札から墓地へ送り効果を発動する。自分の墓地に存在するヒーローと名の付くモンスターを選択して、そのモンスターの攻撃力、直接攻撃してきたモンスターの攻撃力をそのバトルフェイズ中にのみダウンさせる！」

「バカな……」

「私が選択したのは、さつき破壊されたタイガレス・レンジャー。攻撃力は2600。無論私へのダメージは、700。よって、今現在の残りライフは、わずか500ヘルプ500ㄥちなみに、このカードを引き当てたのは、お前の魔宮の賄賂によって引いたカードだよ！」

ギリギリと、シーザーは齒軋りを起こす。

「この……強運が！ だが、それがどうした」
さつきまでの口調と、顔つきに戻る。

「俺のフィールド上には、攻撃力3300のモンスター。対してお前のフィールド上にはモンスターは存在しない。この状況を、逆転出来るとでもいうのか？ 無理だな！ ハッキリ言って、無理だ！」
ケハハハと、嘲笑う。しかし、加奈はそんなシーザーにも目を向けていなかった。

「……昔、ある偉人は言った」

「……あ？」

「信じれば、突き進む道があると。私は、今の状況がそうだと思う」

「チツ、何を言うのかと思えば」

「だからこそ言ったんだ！ 私は、道がある限り突き進める力があると！ そして道を作るのは私だけじゃない！ かけがえのない、大切な仲間がいてこそ、道は出来上がるんだ！ 自分一人だけで作れる道もあるかもしれない！ でも、それだけじゃ物足りない！ 助け合える仲間がいてこそ、真の道が出来上がる物なんだよ！ もしも綺麗事だと笑うのなら、笑ってもいい！ でも、これだけは言わせて貰う！ 私は、好きで正義を貫いているんだ！ お前が言う正義が薄汚い物だとしても、私は、綺麗な正義を貫き通す！」

「……やっぱりキサマは気に入らねえ！ 綺麗事ばかり並べるその心が、光が我慢ならねえんだよお！ 何故だ、何故キサマは……そこまで正義を信じれる！」

「私にはあるからだ！ 真の正義たる者、悪に捕らわれた心を救う心が！ 確かにお前の言う通り、正義にも悪の心があるかもしれない。でも、私はそれも許さない！ 正義は、綺麗でなければならぬからだ！」

「五月蠅い！！ 証明も出来ないクセに、言葉ばかり並べるな！！」「ウソではない！ そこまで言うのなら証明してやる！ このドロ―で、私はお前の悪に勝つ！ その力を、見せてやる！！ 私……タアーン！！」

加奈の想いが、カードに響く。その時を、恐らく遊画は望んだのかもしれない。彼女の過去を知る遊画にとって、加奈の正義は歪んだ物ではない。それは、彼が十分に知っている事だった。

「……勝つてくれ、加奈！」

遊画の想いが、届いた。

続く

次回予告

想いが想いに届く時、奇跡が起きる。それは、いつの時だってそう
だ。人は、信じれば叶う夢がある。

そして終わりが告げられた時、新たなる資格が遊画を襲う！ 過去
に捕らわれ、友を憎んだその敵に、遊画は何を伝え、そして何を思
うのか？

次回、遊 戯 W F a t e 第43話「終わりと始まり、愛と哀の
悲劇」

「燃える闘士に正義を貫く。それが、私の答えだ！！」

次回のキーカード

マグマ・バニング・ドラゴン・ドラゴン族・ATK2500・炎・

7・シンクロ/効果

第42話「ヒーローVSショッカー」（後書き）

あとがき

久々の投稿だあ。疲れたと言えば疲れたし、へたばったかと言えば、そうである。最近課題に追われ、絶賛反省中です。いや、マジで勘弁して下さい。そんな訳で、初めての方もいるかと思いますが、久しぶりです。そして初めまして、Ragoと申します。こんなくだらない事ばかりが書かれたあとがきに最後まで付き合って下さい。最近の話をします。いや、どうも俺には微妙な運と言いますか？あまりにも下らない強運が付いています。この間禁止、制限の開闢見た後、とりあえずと思ってカード買いに行ったら………当たったんですね、それが。

ただし、大抵良いカードが当たった後、すぐに不幸が訪れる体質でして、ウソがバレて怒られたり、今日なんてダンディ当たった帰りにはーさんの野グソ（食事中の方は申し訳ございません）に出会ったりと。思い出したくもない。鬱だ。

そんな感じで、最近は何調子なのか不調子なのかよく分からない状況になっております。まあ、それが俺ってか僕なんですけどね。ちなみに、一人称は俺、僕、私、わたくし、ワシと、真面目な時とふざけの時に使い分けます。後の半分は大半普通でも使っています。が……ハイ、自分が変態だと自覚する今日この頃です。

そんな訳で次回、凄まじく投稿が送れる。と言うよりも、恐らく10月に入る頃だと思えます。何にせ、ガチで書いている小説を出したいのもあるし、ガンダムとこの小説の本編もあるからです。

そんな事で、今日はここまで。長々と待つ事をここにお詫びを申し上げます。とは言っても、楽しみに待っている人がいるかどうかは怪しいのですが。

まあ、細かい事は気にせずに。次回も、フォトンチェンジ！！

8月25日 自宅にて

感想、誤字、脱字などの指摘、お待ちしています。返答は、多分想像を絶するフリーダムになると思うので御了承を（性格的な意味で）

・・・あゝ、やっと書けた

第43話「終わりと始まり、愛と哀の悲劇」(前書き)

肩が痛い。そして疲れた。以上。

第43話「終わり始まり、愛と哀の悲劇」

デュエルの光景を、トトは遊画の中で拝見していた。

彼女、加奈は諦めず、自分の正義を貫き通すという意思がある。

それは、彼女にとって偽りのない言葉であろう。どんなに正義が汚い存在であろうとも、彼女にとって正義こそが心の支えであろう。

「だが、俺はどうだ」

トトの目が細まった。まるでそれは、過去の失態を悔やむように。

彼は自分の手を広げ、その手のひらを確認する。

「……俺は確かに遊画を救った。だが、それは今の遊画だ。過去に犯した罪から、逃げることはできない。だからこそ、ノルンから言われたのであろう」

貴方は存在するハズのない人間だと。

当たり前だ。少なくとも彼は異世界の人間だ。そんな人間が、あの時間帯にエジプトにいるハズがない。

彼は、自分の行いに悔いを残し、そして広げた手に力が入る。

「魔王。あなたは一体、どこまでを見越し、どこまでを知っていたんだ」

呟きが声となり、しかしそれは遊画には聞こえなかった。

過ちが、彼の人生を狂わし、そして大切な人を、危うく殺しそうになった。

だが、その大切な人もまた、大きな過ちの犠牲となったのだ。

大切な人は、自分の目の前で殺された。

それでもその人は、トトを許してくれた。

人々から「魔王」と呼ばれ恐れられ、しかし実際には心優しき少年。

「……トト。何をそんなに思いとどまっている？」

と、そこに1人の少女が姿を現す。

黒く長い髪に、漆黒の瞳をした、名をヘルと言う。

怪訝な表情を見せるトトを心配し、彼の側に寄ってくる。

「ああ。俺は、己の正義に疑いを持ってているんだ」

「……？ 言っている意味がわからん」

ジッと、トトを見つめるヘル。しかし、トトはそれを無視するかのようにならばを向いた。

そして、その口から気持ちを漏らした。

「……俺の正義など、とつくの昔に死んだ」

その意味を理解しようなど、ヘルはしなかった。

なにか彼の中にある黒く渦巻いた何かを、感じたからである。

第43話「終わりと始まり、愛と哀の悲劇」

加奈は手札を確認する。

手札は4枚。右から、リサイクル・ロボ。エアード・グリーン。S
p-ジ・エンド・オブ・ストーム。そして、アドバンスド・シグナルである。

これなら！ と、加奈は思い、カードを1枚手に取る。

「私は手札から、リサイクル・ロボを攻撃表示で召喚！ ハリサイ
クル・ロボ・機械族・ATK0・光・4・効果」

ドン！ とでも効果音が出そうな感じに突然現れる。

ただ変哲のない、ただのハニワみたいなモンスターに、シーザーは
笑う。

「バカが！ そんなダサイモンスターで何をやろうというんだ？」

「モンスターは、かっこよさだけが全てではない。見せてやろう！

これが、私の足掻きだ！ リサイクル・ロボの効果発動！ この
モンスターが召喚に成功した時、自分の墓地に存在するアドバンス
ド・ヒーローと名のつくチューナーモンスター1体を攻撃表示で特

殊召喚することができる！ 蘇れ、タイガレス・シンクロン！ ㄥ

A・HERO タイガレス・シンクロン・DEF500ㄥ

「だが、それでもたかがレベルは5。このモンスターを倒せるモンスターなどありはしない！」

シーザーがあざ笑う中、加奈はそれに対して、笑っていた。

「……っふ」

「な！ 何がそんなにおかしい!?」

シーザーの表情から、急に笑みが失われた。

加奈の笑みから、さまざまな表情を受け取ったからだ。

信じる心、相手との戦いを楽しむ心、正義を信じる精神、悪を絶対に倒せる自信、誰かを救いたいという気持ち、繋がりで全てを力にする心……

(な……なんなんだよ一体!！)

彼女から溢れるプラスの思考に、シーザーの心が揺らぐ。

気が付けば、一筋の汗が頬をつたわり滴る。そんなバカな、俺が焦っているとも言うのか！ 認めねえ、認めねえぞ！

そう思うも、表情に焦りは消えない。それどころか、直に加奈を見つめることすらできなくなっている。

「……正義は、犠牲が必要になる」

突然、加奈が語り出す。

「正義に、犠牲は付き物だ。だが、私は……自分自身を犠牲にする覚悟がある！ 例えそれがどんな不可能でも言われようが、誰かを救うためなら、ヒーロー仮面は絶対に諦めない！ それで自分が犠牲になろうが、私は平然と己自信を差し出す自信がある！ 正義を信じる心があるからこそ、全てを受け入れる心だって持っている！」

「だ……黙れ！ だったらお前は悪に染まったヤツでも、見捨てずにいるとも言うのか！」

「そうだ！ 私は、誰も見捨てる気はない！ それが例え、悪に染まりまくったヤツであろうとも、悪から救えると信じているからこ

そ、私は全てを受け入れる精神がある！ お前であろうと、」
加奈は、D・ホイールに別画面を表示させ、遊画の姿を見る。

「公栄遊画であろうとも！ 遊画は1度、闇に堕ちた。だが、それでも信じていた！ その闇から這い上がると！ その結果、這い上がってきたよ。だからこそ私は、悪を成敗するだけが正義じゃないとわかったんだ！」

「や……やめる。これ以上、俺から悪を消すな」

「安心しろ、私はその闇を吹き払ってやる。正義の名のもとにな！」

「やめる！ キサマの光りが、何も邪念のないその目、嫌いだ！ 嫌いだ！」

まるで逃げるように、シーザーが走り出す。

それを追いかけるように、加奈はペダルを踏む。そして、クラッチをまわすと、シーザーに少しでも追いつこうと必死になる。

遊画は、その様子を見て、呟く。

「……お前は、怖かったんだな。自分の悪が崩されるのが。だが、それも最後だ。何かを得るために悪に走るのも1つの手かもしれない。でも、それで本当によかったのか？ 自分の悪を貫くために、何かが必要だったのか？」

はき捨てるように言つと、ウインがそれに反応した。

「……悪を貫くために、更なる悪を求めたってことね。でも……」

「ええ、彼は求める悪を間違えた。どんな悪でも、筋がなければ悪とは言えないのですわ。ですから、加奈ちゃんの正義が怖かったのでしょうかね」

エリアの呟きに、画面の奥から『私はヒーロー仮面だ！』と聞こえた。

「どんな正義でも、受け取り方を変えれば悪になる。でも、加奈ちゃんの正義は悪があまりにも似合わなすぎる。純粹で、自分のための正義じゃなく、誰かのための正義を持っている加奈ちゃんにとって、悪は最も憎むべき存在でしょうね。それでも加奈ちゃんは、正

義のために悪を受け入れようとしている。この性格は、誰に似たんでしょうね」

沙耶は遊画の方を見るめる。

「俺のせいじゃないぞ。アイツといえる時間は、少なかつたからな」それをジト目で返した。

すると、進展があり、加奈がシーザーの隣まで追いついた。

「正義の想いよ、ここに届け！ 手札に存在するアドバンスド・ヒーロー エアード・グリーンは、自分フィールド上にアドバンスド・ヒーローと名の付くモンスターが存在する場合、特殊召喚することができる！」

手に取り、それを突きつけると、ディスクプレートに置く。そしてそれに反応したプレートが、七色に輝く。

「来い！ アドバンスド・ヒーロー エアード・グリーン！ へA・HERO エアード・グリーン・戦士族・ATK1800・風・4・効果」

風をまといし戦士が、両手に短剣を持ち相手に突きつける。

「いつだって私は、誰かを助けるために正義を信じてきた！ だからこそ、私はお前を、助けるんだあ！」

グツと、その拳に力を入れる。その時である。

加奈の手の甲に、何かの紋章が浮かび上がった。

それは、騎士のような剣と盾が交差するような、恐らく意味は矛盾であろう。

絶対に壊れない剣と盾。それはあり得ないのだ。なぜなら、どんなに硬い盾でも壊せる剣。そしてどんな最強の剣でも壊れない盾。それぞれが最強であるが故に、お互いが交わったらどうなるか。恐らくそれを示しているのである。

加奈はそれを知ってか、見とれてしまっている。

「こ……これは？ そうか！」

何かに気が付いたような声を上げ、更に拳を握り締める。

「矛盾の果てにある、正義の印。例えばどんなに正義が悪であろうと

も、正義を貫く矛盾。それこそが、私の答えだ！ 矛盾であるからこそ、その矛盾した正義を貫ける！ それが、私の答えだ！ レベル4のエアード・グリーンに、レベル2のリサイクル・ロボと、レベル1のタイガレス・シンクロンをチューニング！ 4 + 2

+ 1 = 7

3体のモンスターが飛び上がり、タイガレス・シンクロンが途中で大空に舞い上がった。

しばらくして、1つのリングが落ちてくる。

エアード・グリーンとリサイクル・ロボを一緒にするかのように、そのリングは途中でゆっくりと降りてきて、2体を囲んだ。

「強き炎のドラゴンよ、灼熱の正義で悪を燃やし、汚れた魂を浄化する力となれ！」

次の瞬間、まばゆい閃光が辺りを照らす。

「シンクロ召喚！ 導け、マグマ・バニング・ドラゴン、マグマ・バニング・ドラゴン・ドラゴン族・ATK2500・炎・7・シンクロ/効果」

最初、大きな蛇を思い浮かべるようなモンスターが現れる。

しかし、その蛇の背中から炎が噴射されると、その炎が翼と変化し、全身を炎に包まれる。

瞑っていた瞼が開かれ、紅の瞳が相手を映した。

『グオオオオオオオオオ！』

その口から、雄叫びが発せられ、辺りに木霊した。

「……は、ははははははは！ 大口叩いておいて、結局攻撃力が届いていねーじゃねーか！ こんな雑魚で、どうやってコイツを倒すとも言っただ！」

今までの表情がウソのように、シーザーはあざ笑っていた。

しかし、加奈は焦る様子など見せない。なぜなら……

「確かに攻撃力は今のままじゃ勝てない。だが、正義には必殺技がある！ いつも正義は、それで逆転してきた！ マグマ・バニング・ドラゴンの効果発動！ このモンスターがシンクロ召喚に成功した

時、相手フィールド上に存在する全てのモンスターの攻撃力を、このターンのエンドフェイズ時までモンスターの攻撃力を上げる効果を無効にし、上がっている攻撃力を元に戻す。その後、戻した数値分だけ相手にダメージを与える！」

「なに！？」

「元に戻せ！ リバーズ・ファイヤー！」

マグマ・バニングの翼が羽ばたく。すると、炎を纏っていたスルトが、みるみるうちに消火され、その本体を表す。

ただ、何の変哲も無い、巨人だ。

『グオオオオオオオ！ 　ATK3300　2000』

すると、消火されたハズの炎が一箇所に集まっている。

集まった炎は、巨大な火の玉となり、シーザーの方へと落とされた。

「ぐああああああああ！！」 　LP1400　100』

若干バランスを崩すも、3回転程度ですぐに体制を立て直す。

「クソッ！」

苦難の表情を浮かべる。それに対し、加奈は静かに述べる。

「ちなみにこの効果を発動した場合、表側表示で存在する魔法、罫ゾーンに存在するカードは全て破壊される！　だが、お前の場に、表側どころか裏側のカードすら存在しない。つまりこの攻撃が通れば、私の勝ちだ！」

加奈は、その小さな、だがしかしシーザーからすれば大きく見える手を、振り上げる。

「お前の悪はすでに風前の灯火だ！　だが、お前を見捨てる真似は絶対にしない。この一撃は、お前を更生させる一撃だ！　それは悪からの更生ではない、間違った悪からの更生だ！　バトル、マグマ・バニング・ドラゴンで、冥界炎皇スルトを攻撃！　正義の一撃、フオルス・バルミリオン！」

両手から、一筋の光が放たれる。

それは、炎でできた波動である。その波動は、途中で一緒になり、強大な力となってスルトに襲い掛かった。

スルトは迎撃しようと剣を構えるも、力を失った剣など、もはや飾りにしかならず、刃が砕け散り、剣の先が宙を舞う。その直後に、襲い掛かった脅威が今度は、スルトの体を糸も簡単に貫いた。

『グオオオオオオオオオオオ！！』

短い悲鳴をあげ、その場で崩れ去るスルト。

その破片が、シーザーへと降り注いでいた。

「なにっ！」

恐らく彼の乗っているD・ホイールごと潰そうという魂胆であろう。上を向けば、破片が無数落ちてくる。

そんな中で……

「？まれ！」

加奈は必死になって、シーザーに向けて手を差し伸べていた。

「早く……お前のD・ホイールではすぐに潰される！ だから・

……早く！」

一生懸命、自分のためにと手を伸ばすその仕草。シーザーの中にある何かが、千切れるような感触がした。

「そうか、俺は間違った悪を進んでいたんだな。まったく、情けないぜ。これじゃ、正義を否定できねーじゃねーかよ。」

そんな俺を救おうとは、バカなヤツだ。

シーザーは手を伸ばし、その手を振り払った。

「……え？」

加奈は一瞬、時が固まるのを感じる。

上から破片が降り注ぐ光景が見え、慌ててD・ホイールを傾け、その場を立ち去る。

「シーザー！」

加奈の背後で、シーザーは通信機能をオンにし、その何かから解き放たれたような表情を浮かべながら、言った。

『バー力。負けた身の俺が救われる意義なんてねーよ。もつとも、正義を愛するヤローから救われるのが、最も虫唾が走るからな』

「……オイ、まさかお前！ 死ぬ気か！」

コクンと、首を縦に振る。

「バカ野郎！ お前が死ぬ意味なんて無いはずだ！ それなのに何故……何故なんだ！」

そんな加奈の、悲しみに満ち溢れた表情を見て、シーザーは言う。

「………。俺は、ずっと正義が嫌いだ。これから生きていても、それは変わらないだろう。だからこそ、悪である俺はここで立ち去らなければならない。そうさ、それが悪である俺の、筋だ！」

ガン！ と、シーザーの近くに破片が落ちてくる。

無数に降り注ぐ破片の間からシーザーの、その口が、ありがと。と呟くような動きをする。

しかし、その直後にはその場所に全ての破片が落ち、闇の道を崩壊させる。

後ろから崩れ始め、全速力で地上に向けて走る加奈。

「クツ……。馬鹿者が……。」

仮面の奥から、涙が零れるのが感じとれる。

しかし、今は自分の命が優先だ。

真後ろから死が襲い掛かっている。恐怖で固くなった脳を強制的に柔らかくし、思考を無理矢理通常通りに動かす。

画面の奥から『加奈！』と叫ぶ声が聞こえてくる。

待っている人がいる。だから、ここで死ぬわけにはいかない！

加奈が拳に力を入れ、更に加速する。

あと1歩。すぐ近くに遊画たちがいる。

加奈の思考が緩んだ。その瞬間、である。

D・ホイールが傾く。

え？ どうして？ なんて……。

見れば、地面が割れている。

間に合わなかったのだ。もうすぐ地上だと言うのに、その直前で崩壊に追いつかれてしまった。

……ゴメン。

加奈がそう呟いた。

案の定、D・ホイールは落下し、運転手である加奈は放り出された。ガガガガ！ と音を立て、加奈のD・ホイールはスピンし、そして止まった。

素材自体が頑丈であるためか、傷一つついていない。

しかし、加奈はそうはいかない。

生身の人間だ。しかも、頭から落下している。

運が良くて首の骨を折る重傷。運が悪ければ、首の骨を折って、なおかつ打ち所が悪いか、折る場所が悪く、そのまま、死。

受身も取ることができず、その小さな体がただ地面に叩きつけられるのを待つばかりとなっていた。

「お・・・おにい、ちゃん」

その目を、ゆっくりと閉じる。

しかし、何か優しい感触が、加奈の中に走る。

まるで、お母さんに抱かれているかのような、落ち着く気持ちが頭に伝わる。

今まで恐怖に包まれていた思考が、今では落ち着きを取り戻していた。

何故だろう？ どうして、ここまで落ち着いているの？

気になって目を開ける。

最初に見えた光景は、自分の兄だった。

どこか苦悶に満ちた表情をしている。だが、加奈の姿を見るなり、その表情が和らいだ。

「大丈夫か、加奈？」

遊画は、そう聞いてくる。

ここで、今の状況がわかった。

落ちる直前、遊画が加奈を受け止めたのだ。

しかし、意外とスピードもあり、受け止めるのは大変苦痛になるであろう。しかしこの男は、そんなことも構いなしに受け止めたのだ。

さっきまでシーザーからバカと言われていた加奈だったが、彼女は遊画の方がよっぽどバカだと思う。

「……フ、フン！ 私は加奈ではない！ 私は謎のヒーロー、ヒーロー仮面だ！ それだけは勘違いするな！」

弱々しくも、どこか安堵した気持ちが入められている。

それは、兄である遊画は感じ取った。

「……そうかい。それなら加奈」

「だから！ 私は！！」

犬歯を出し、怒る加奈。

そんな義妹の姿を、優しい目で見る遊画。

「お前が無事でよかった。お前は俺にとって、大切に、特別な人だからな」

そんな遊画の姿に、加奈はピクリと眉を動かすと、顔を赤くしてそっぽを向く。

「ズ……ズルイ。何か無性に心を抉られる気分になる」

遊画の表情に「？」という疑問符がつけられる。加奈がその姿を見ようとするが、やはり直接見ることができない。

目が合うと、やはり目を逸らす。

「ど……どうしたんだ加奈？ お前、やっぱり怪我でも」

「……怪我以前の問題だと思う」

「そうですね。遊画自身が、乙女の心に怪我を負わせているようなものですね？」

ゾクリと、何か氷河期以上の寒気を感じた。

ワインとエリアが、手に杖を持った状態で待機しているのだ。

冷や汗で顔が濡れる。どこかから滴り落ちた汗が、加奈の顔にポタリと水滴となって落ちてきた。

「……公栄遊画、私は悪くないぞ。少なくとも、今の段階で、私の胸を触ったまま固まっている遊画の方が悪いのだから」
ハッと、遊画は自分の手元を確認する。

確かに、加奈の小さな脹らみに、手を当てていたのだ。

道理で手に何か柔らかい感触がしているな。などと考えるも、すぐに手をどかす。

どこか半眼で見られているようで、とても恥ずかしい。しかし、今の修羅をどうにもすることはできない。

ガン！ と、コンクリートでできているハズの壁を、杖で思いっきり叩く音がした。

その壁が一部破損し、破片が辺りに飛び散った。

加奈は自力で立ち上がると、スタスタと歩き始め、ウィンたちの後ろにいた沙耶の後ろに隠れるようにしてこっちを伺う。

.....

無言で遊画は、そこから立ち上がる。

ズキッ！

「いつ！」

低い呻き声を上げ、右手を押さえる。

どこか打ち所が悪かったらしく、右手が尋常でないほどに痛みが走る。

受け止めた際に、衝撃に耐え切れなかったのであろう。

しかし、と遊画はそれを押し殺す。

ここでそんな状況をバラせば、確実に俺は戦力から抜かれる羽目になる。それだけは絶対にイヤだ！

ゆっくりと右手をどけると、痛みを我慢する。

「.....遊画？ まさか！」

ウィンが状況を察している。

急いで遊画の元に駆け寄ると、遊画右手を小突付きする。

少しの衝撃でも、まるでトンカチに叩かれたかのような痛みが走る。

「っ！！！」

痛みで、表情が崩れる。

「まさか、さっきので右手を！」

エリアもそれを知り、俺に駆け寄る。

「大丈夫ですよ！？」

すぐさま袖を巻くりあげ、右手の状況を確認する。
酷く、腫れ上がっている。

すさまじい内出血が起きている。他にも打撲辺りがあってもおかしくはない。

「……遊画」

「イヤだ！」

すぐに否定する。

「子供のように言わないの！ 体がこんな状況で、まともに戦えるわけがないでしょ！」

エリアの怒鳴り声が聞こえるが、遊画はそれを無視する。

しかし、それでも言い続けるので、俺は反論の言葉を口にすることにした。

「分かっている！ 分かっているが、これは引けない戦いなんだよ！ 例え腕一本持って行かれたりしても、残った腕で戦わなければならぬ！ そんな戦いなんだ！」

「あまりにも無茶な説明だと思うのは気のせいよね？」

沙耶が呆れたような声を出す。

だからといって、気にするわけでもなくただスルーする。

「……じゃあ何？ 貴方は自分が犠牲になっても戦うというの？」

ウインの目つきが怖いものになっている。

しかし、ここで引くわけにはいかない！

「ああ！ 俺は戦い続ける！ 自分が犠牲になろうとも、守りたい者のために、俺は……戦わなければならぬんだよ！」

「面白いことを言う。公栄遊画」

「っ!」

どこからか声が聞こえてきた。

見渡すも、どこにも姿が見当たらない。

と、その時である。

ギイイイイイイ! と、どこからか音が聞こえてきた。

何事かと、その音の先である、空を見上げる。

アクロバティックに、D・ホイールごと落下してくる物体が目に入る。

「……え?」

しばらく思考停止に陥るが、すぐさまここが危険だと判断し、ウィンとエリアを、痛む右手をガマンして一緒に抱き、走り出す。

俺がいた場所に、それが落下し、砂埃が舞い上がる。

「何だ一体!」

後ろを振り向こうとした時、

「……遊画。手を見て」

「手を?」

ウィンが突然そんなことを言い出し、感触さえ消えうせた右手を見る。

一応動かせはするが、それでもこれはないと思いたかった。

ウィンの、裕福で柔らかそうな胸に、服の襟部分から、手を突っ込んでいたのである。

流石の俺でも、かなり動揺する。

「な……ま……っ!」

すぐに手を引き上げる。

ウィンも、恥ずかしそうに胸を隠す。

やめてくれえ……。マジで恥ずかしいから。こっちまで。

「……遊画。本当に、大胆」

「誤解を招く発言はやめてもらおうかウィン! これは不可抗力で、

おまけに右手に感触が全く無い状況だぞ!？」

弁解するも、もう1人の存在を思い出すが否や、頭を杖で思いっきり叩かれる。

「がはっ!」

まるで背後から襲われ、殺された被害者役の気持ちを理解しつつ、その場に倒れこむ。

「……フン!」

エリアは何かご立腹になり、俺と目を合わせようとしない。何という仲間割れ。

これじゃ、マズイな。

などと思うが、砂埃が治まってきたので一時的に放棄する。そこにいたのは、

「久しぶりだな。公栄遊画!」

俺は、苦虫を大量にすり潰した粉を飲むような表情になる。すぐさま、表情を整える。

「……ああ、久しぶりだな。相馬さん」

海佐の兄である、炎宇津相馬だ。

1年前に死んだ彼がなぜここに。

考える暇もなく、相馬は、俺に告げる。

「デュエルだ! その顔を二度と見なくてもいいように完膚なきまでにたたき止めてやる!」

その言葉に偽りなど無い。

それはわかりきっている。だからこそ、俺は彼とのデュエルを待っていた。

挑発に対し、俺はその口で、ハッキリと返した。

「ああ! 俺はお前とのデュエルを待っていた! デュエルだ相馬

! 俺とお前、どちらかが死ぬデスデュエル。受けて起とうじゃねーか!」

しかし直後、ウィンとエリアが同時に俺を押さえつけた。

「な……なにをする!」

「……ダメ！ まだ回復していないその体で、デュエルをしたら！」
「そうですね！ それに右手を怪我したばかりで……できるわけないじゃないの！」
「暴れるも、あちらの方が力は圧倒的に強い。」
「どうしたものか。」

俺は追加で、苦虫を大量に煮込んだスープを飲むような表情を、浮かべるのであった。
続く

次回予告

相馬との対決。それは、過去からずっと逃げてきた俺の罰なのかもしれない。そうでなくても、こうなる運命になっていた。それは断言できる。

だからこそ、コイツとは決着をつけたいんだ！ どんなに逸らしたい過去があっても、どんなに後ろめたい気持ちがあっても、逃げたらその分の罰がある！ 俺は決めたんだけ。もう逃げはしないと。全力で、倒すのみだ！

次回、遊戯 王 Fate 第44話「過去と今」

「……私が、遊戯の右手となる」

「やめろお！ マジで危うい絵図にしなければならないから！」

次回のキーカード

めいかいやあつ

冥界閻皇アーリマン・悪魔族・ATK3000・闇・8・シンパ

シーシククロノ効果

第43話「終わりと始まり、愛と哀の悲劇」(後書き)

あとがき

体がむず痒い！ これも・・・快感ってことか！ (なにがだよ！)

危ない発言と共に参ります、Ragooです。

いや、マジで体がむず痒い。平気で変態発言できそうな雰囲気だ。そんな中で、あとがきとさせていただきます。

一応、本編とこつちとの違いを書きたいと思います。

・フルと加奈は、こつちではドラゴンを使うが、あつちでは使われない。

・あつちは海佐が最初から生きている。

・あちらではとある人を除いて、霊使いとは今の段階では会っていない。

・あつちはトトの過去に、エジプトは関連していない。

・・・・など、あまりやりすぎるとネタバレも含みますのでこの辺りで。

はてさて、この時期でも雨が降ってきますね。

この間なんか、ちよっと部室側に用があった、雨の中で歩いていたら、練習中の女子テニス部の前を通過した途端に、ズルツと滑ってしまいました。

いや、その時に「キャー!!」っという声が聞こえた時には、「何の、これしき」と、意地を張って心を折れさせませんでした。

その後、部室側に求めていた用がなかったために、トボトボと歩いていたらさっきの練習現場を通過し、「アホやる」聞こえたので一言。

「全くその通りだよ!」

それでも心が折れない俺って一体。

まあ、うちの学校は男子1に対して女子が3、4ですので慣れといえば慣れですし、仕方ないといえば仕方ありません。

。。。。。ネタ切れだ。

はてさて次回、遊画はリア充で、主人公だな。と思わせるようなことが起きます。

愛が無いのに、それでも徐々に愛を知っていく。

うーん。やはり主人公はそうでなくっちゃな！

それでは次回まで、私のターンは終了です！

まあ、早くて11月から12月中旬ぐらいです。

10月16日 自宅にて

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0335o/>

遊 戯 王Fate

2011年11月15日23時57分発行